

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

上 野 城 跡

川内市百次町上野

2004年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上野城跡全景と川内市街地を臨む



遺構全景(真上から)

序 文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、西鹿児島駅緊急整備事業に伴う調査として平成5年に開始しましたが、諸般の事情で中断し、平成8年度から再開しました。

建設計画内の遺跡は鹿児島市から出水市まで21か所があり、関係機関との協議の結果、事前の記録保存調査を実施し、平成13年5月に全ての発掘調査が終了しました。

本報告書は21か所の遺跡のうち川内市に所在する上野城跡の発掘調査結果の記録です。

上野城跡は、別名「百次城」と呼ばれる中世の城ですが、調査の結果、旧石器・縄文・古墳・古代・中世・近世の各時代が複合された遺跡であることが判明しました。中でも中世の遺跡は、12～13世紀の掘立柱建物跡32棟、溝7条等が発見されたほか、大量の白磁等の遺物も出土し、ここが中世期の拠点であったことが分かりました。

そして、当センターはここに「上野城跡」として旧石器時代から近世までの調査結果をまとめました。この報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

発刊にあたり、鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局をはじめ、ご協力をいただいた川内市の関係部局、関係機関、そして、調査に携わった方々に対し、厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

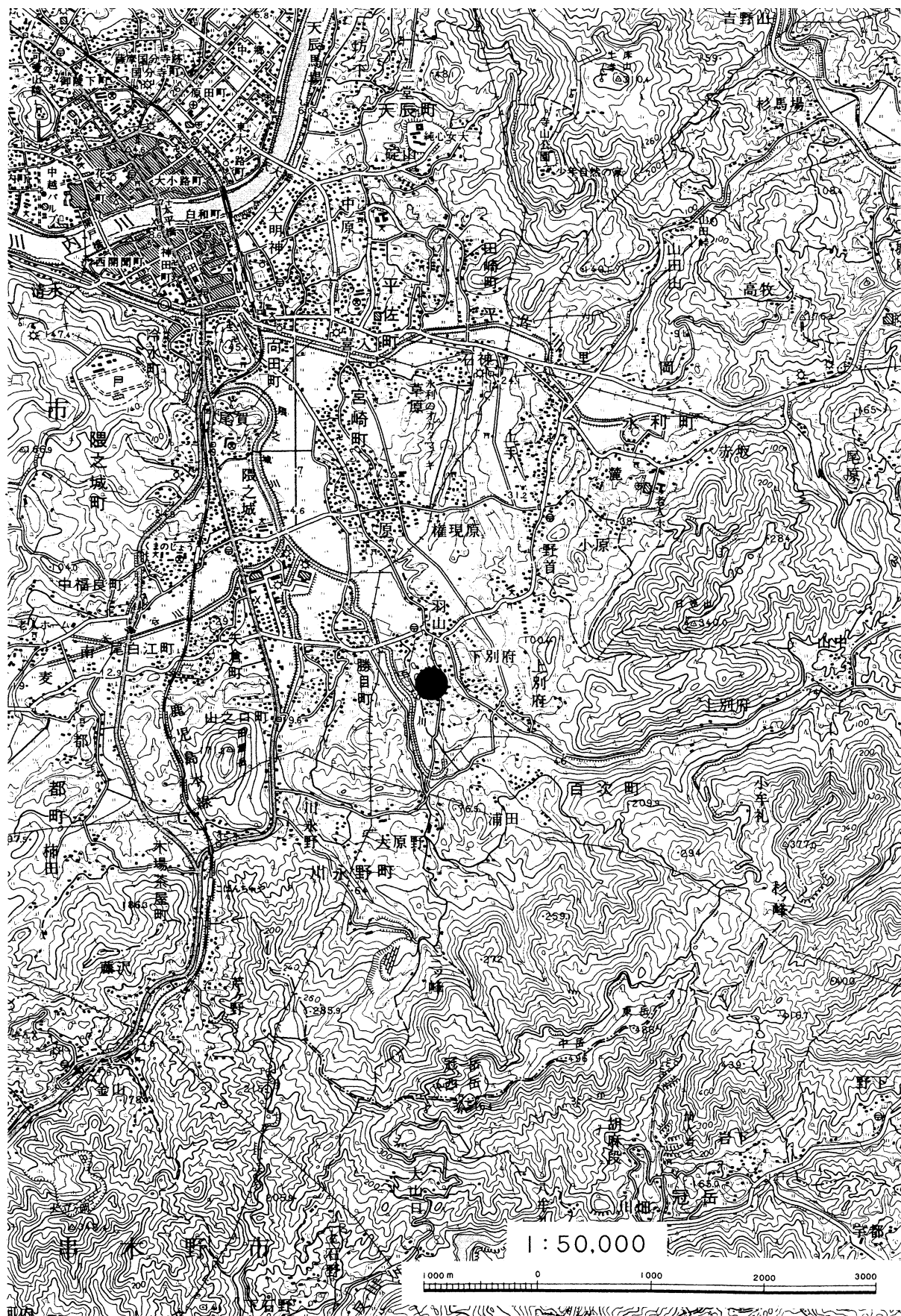
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 木 原 俊 孝

報 告 書 抄 録

ふりがな	うえのじょうあと							
書 名	上野城跡							
副 書 名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	IX							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6 8							
編著者名	彌榮久志							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4661 鹿児島県国分市上之段 1175 番地 1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2 0 0 4 年 3 月 3 1 日							
ふりがな	ふりがな			北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / "	° / "		m ²	
うえのじょうあと 上野城跡	かごしまけん 鹿児島県 せんだいし 川内市 ももつぎちょう 百次町 うえの 上野			31° 46′ 45″	130° 19′ 50″	H11. 12. 1 ～ H12. 3. 24 H12. 5. 1 ～ H13. 3. 29	19, 400	九州新 幹線鹿 児島ル ート
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
上野城跡	集落 散布地	旧石器時代 縄文時代 古墳時代 古代 中世 近世		落とし穴 掘立柱建物跡 方形竪穴状遺構 土壇墓 土坑 溝 古道		剥片尖頭器 ナイフ形石器 押型文土器 石坂式土器 阿高式土器 黒川式土器 石鏃・石匙 磨製石斧 石皿・磨石 土師器 白磁・青磁 中世須恵器・瓦器 中国陶器 短剣・鉄鏃・釘・鈴 その他鉄製品 青銅製鈴・その他青 銅製品		

例 言

- 1 本報告書は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本報告書に掲載した遺跡は、上野城跡の記録である。
- 3 本遺跡は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局の委託を受けて調査したものである。
- 4 本報告書は、平成15年度の報告書作成として実施したものである。
- 5 遺物番号は通して付してある。
- 6 挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 7 挿図の縮尺は、各図ごとに示している。
- 8 本遺跡に記載した高さは、海拔絶対高である。
- 9 本遺跡の執筆及び編集は彌榮が行った。
- 10 自然科学分析調査は、(株)古環境研究所に依頼した。
- 11 出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する計画である。



上野城跡の位置図

本 文 目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1	ア 掘立柱建物跡	45
第1節 調査に至るまでの調査	1	① 掘立柱建物跡 1	45
第2節 調査の組織	1	② 掘立柱建物跡 2	47
第3節 調査の経過	2	③ 掘立柱建物跡 3	48
1 平成 11 年度の調査	2	④ 掘立柱建物跡 4	49
2 平成 12 年度の調査	3	⑤ 掘立柱建物跡 5	50
3 整理作業	5	⑥ 掘立柱建物跡 6	52
4 発掘調査全体の経過と成果	6	⑦ 掘立柱建物跡 7	53
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9	⑧ 掘立柱建物跡 8	54
第1節 遺跡の位置及び立地	9	⑨ 掘立柱建物跡 9	55
第2節 周辺遺跡	9	⑩ 掘立柱建物跡 10	56
第Ⅲ章 調査の概要	13	⑪ 掘立柱建物跡 11	58
第1節 調査の基本計画	13	⑫ 掘立柱建物跡 12	59
第2節 遺跡の層序	14	⑬ 掘立柱建物跡 13	60
第3節 遺構と遺物	19	⑭ 掘立柱建物跡 14	61
1 旧石器時代	19	⑮ 掘立柱建物跡 15	63
(1) 経過及び遺構と遺物の出土状況	19	⑯ 掘立柱建物跡 16	64
(2) 出土遺物	20	⑰ 掘立柱建物跡 17	66
2 縄文時代	23	⑱ 掘立柱建物跡 18	67
(1) 遺構	23	⑲ 掘立柱建物跡 19	67
(2) 出土遺物	23	⑳ 掘立柱建物跡 20	69
3 古墳時代	30	㉑ 掘立柱建物跡 21	70
(1) 遺構	30	㉒ 掘立柱建物跡 22	71
(2) 出土遺物	30	㉓ 掘立柱建物跡 23	73
ア 甕形土器	30	㉔ 掘立柱建物跡 24	74
イ 壺形土器	35	㉕ 掘立柱建物跡 25	75
ウ 高坏・手づくね製品	35	㉖ 掘立柱建物跡 26	77
4 古代	36	㉗ 掘立柱建物跡 27	78
(1) 遺構	36	㉘ 掘立柱建物跡 28	79
(2) 遺物	36	㉙ 掘立柱建物跡 29	80
ア 甕形土器	36	㉚ 掘立柱建物跡 30	81
イ 坏	36	㉛ 掘立柱建物跡 31	82
ウ 埴	38	㉜ 掘立柱建物跡 32	84
エ 須恵器	38	イ 方形竪穴遺構	85
5 中世	40	① 方形竪穴遺構 1	85
(1) 遺構	40	② 方形竪穴遺構 2	87

③ 方形竪穴遺構 3	87	① 碗	138
④ 方形竪穴遺構 4	89	② 皿	139
⑤ 方形竪穴遺構 5	93	③ 小碗・蓋・二次加工品	141
ウ 土坑	93	エ 陶器	141
① 土坑 I	93	① 貿易陶器	141
② 土坑Ⅱ A類	101	② 常滑	143
③ 土坑Ⅱ B類	102	オ 中世須恵器	143
④ 土坑Ⅱ C類	102	カ 瓦器質土器	145
エ 焼土	108	キ 土師器	148
オ 畠跡	112	① 土師器埴	148
カ 溝	113	② 黒色土器A埴	148
キ 柱穴遺構	121	③ 坏	153
(2) 遺物	125	④ 小皿	156
ア 白磁	125	⑤ 黒色土器B	156
① 白磁 (1)	125	⑥ 土師特殊品	159
② 白磁 (2)	125	ク 石鍋	160
③ 白磁 (3)	125	ケ 滑石製品	162
④ 白磁 (4)	125	コ 砥石	162
⑤ 白磁 (5)	129	サ 石製品	164
⑥ 白磁 (6)	129	シ 金属製品	164
⑦ 白磁 (7)	130	6 近世	168
⑧ 白磁 (8)	130	(1) 遺構	168
⑨ 白磁 (9)	131	(2) 遺物	169
⑩ 墨書磁器	131	ア 磁器	169
イ 青磁	131	イ 陶器	169
① 青磁 (1)	131	第Ⅳ章 科学分析等の結果	200
② 青磁 (2)	131	第1節 川内市上野城跡出土のウマ遺体	200
③ 青磁 (3)	134	第2節 上野城跡出土種実の同定	204
④ 青磁 (4)	134	第3節 上野城跡における自然科学分析	208
⑤ 青磁 (5)	135	1 放射性炭素年代測定	208
⑥ 青磁 (6)	135	2 植物珪酸体分析	209
⑦ 青磁 (7)	136	3 花粉分析	217
⑧ 青磁 (8)	136	4 種実同定	222
⑨ 青磁 (9)	136	5 リン・カルシウム分析	223
⑩ 青磁 (10)	137	第Ⅴ章 まとめ	225
⑪ 青磁 (11)	137		
ウ 染付	138		

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置及び周辺遺跡	12	第 33 図	掘立柱建物跡 3	49
第 2 図	上野城跡の地形と調査範囲	13	第 34 図	掘立柱建物跡 4	50
第 3 図	上野城跡の基本的層序	14	第 35 図	掘立柱建物跡 5	51
第 4 図	上野城跡の南北断面 1 (D—2～5 区, C—8～9 区)	15	第 36 図	掘立柱建物跡 6 と出土遺物	52
第 5 図	上野城跡の南北断面 2 (C—10～13 区)	16	第 37 図	掘立柱建物跡 7	54
第 6 図	上野城跡の東西断面 (C—F-8 区, B-3・4 区, B—C-5 区)	17	第 38 図	掘立柱建物跡 8 と出土遺物	55
第 7 図	上野城跡の山部断面図 (G—16～18 区, F—G-17・18 区, 第 6 トレンチ)	18	第 39 図	掘立柱建物跡 9	56
第 8 図	旧石器時代の出土分布	19	第 40 図	掘立柱建物跡 10 と出土遺物	57
第 9 図	E・F—3 区の出土状況	19	第 41 図	掘立柱建物跡 11 と出土遺物	58
第 10 図	旧石器時代の土坑	20	第 42 図	掘立柱建物跡 12	59
第 11 図	旧石器時代の出土遺物 (1)	21	第 43 図	掘立柱建物跡 13 と出土遺物	61
第 12 図	旧石器時代の出土遺物 (2)	22	第 44 図	掘立柱建物跡 14	62
第 13 図	縄文時代の土坑 (落とし穴)	23	第 45 図	掘立柱建物跡 15	63
第 14 図	縄文時代の出土遺物 (1) 土器	25	第 46 図	掘立柱建物跡 16	64
第 15 図	縄文時代の出土遺物 (2) 石器 1	26	第 47 図	掘立柱建物跡 16 の出土遺物	65
第 16 図	縄文時代の出土遺物 (3) 石器 2	27	第 48 図	掘立柱建物跡 17 と出土遺物	66
第 17 図	縄文時代の出土遺物 (4) 石器 3	27	第 49 図	掘立柱建物跡 18 と出土遺物	67
第 18 図	縄文時代の出土遺物 (5) 石器 4	28	第 50 図	掘立柱建物跡 19 と出土遺物	68
第 19 図	縄文時代の出土遺物 (6) 石器 5	29	第 51 図	掘立柱建物跡 20 と出土遺物	69
第 20 図	古墳時代・古代の土坑	31	第 52 図	掘立柱建物跡 21 と出土遺物	71
第 21 図	古墳時代の出土遺物 (1) 甕 1	32	第 53 図	掘立柱建物跡 22 と出土遺物	72
第 22 図	古墳時代の出土遺物 (2) 甕 2	33	第 54 図	掘立柱建物跡 23	73
第 23 図	古墳時代の出土遺物 (3) 壺 1	34	第 55 図	掘立柱建物跡 24 と出土遺物	75
第 24 図	古墳時代の出土遺物 (4) 壺 2	35	第 56 図	掘立柱建物跡 25 と出土遺物	76
第 25 図	古墳時代の出土遺物 (5) 高坏・手づくね	36	第 57 図	掘立柱建物跡 26	77
第 26 図	古代の出土遺物 (1) 甕	37	第 58 図	掘立柱建物跡 26 の出土遺物	78
第 27 図	古代の出土遺物 (2) 坏・埴	38	第 59 図	掘立柱建物跡 27	79
第 28 図	古代の出土遺物 (3) 須恵器	39	第 60 図	掘立柱建物跡 28	80
第 29 図	中世遺構全体配置	41	第 61 図	掘立柱建物跡 29	81
第 30 図	掘立柱建物跡 1 と出土遺物 (1)	46	第 62 図	掘立柱建物跡 30 と出土遺物	82
第 31 図	掘立柱建物跡 1 の出土遺物 (2)	47	第 63 図	掘立柱建物跡 31 と出土遺物	83
第 32 図	掘立柱建物跡 2	48	第 64 図	掘立柱建物跡 32	84
			第 65 図	方形竪穴遺構 1 と出土遺物 (1)	86
			第 66 図	方形竪穴遺構 1 の出土遺物 (2)	87
			第 67 図	方形竪穴遺構 2 と出土遺物	88
			第 68 図	方形竪穴遺構 3 と出土遺物	89

第 69 図	方形竪穴遺構 4	90	第 106 図	白磁 (3)	128
第 70 図	方形竪穴遺構 4 の出土遺物	91	第 107 図	白磁 (4)	129
第 71 図	方形竪穴遺構 5 と出土遺物 (1)	92	第 108 図	白磁 (5)	129
第 72 図	方形竪穴遺構 5 の出土遺物 (2)	93	第 109 図	白磁 (6)	129
第 73 図	土坑配置	94	第 110 図	白磁 (7)	130
第 74 図	I 区 I 類の土坑 (1)	96	第 111 図	白磁 (8)	130
第 75 図	I 区 I 類の土坑 (2)	97	第 112 図	白磁 (9)	131
第 76 図	II 区 I 類の土坑	98	第 113 図	墨書磁器	131
第 77 図	III 区 I 類の土坑	99	第 114 図	青磁 (1)	132
第 78 図	IV 区 I 類の土坑	100	第 115 図	青磁 (2)	133
第 79 図	土坑 II 類 A	103	第 116 図	青磁 (3)	134
第 80 図	土坑 II 類 B・C	104	第 117 図	青磁 (4)	134
第 81 図	土坑 II 類 C	105	第 118 図	青磁 (5)	135
第 82 図	土坑 I・II 類の出土遺物 (1)	106	第 119 図	青磁 (6)	135
第 83 図	土坑 I・II 類の出土遺物 (2)	107	第 120 図	青磁 (7)	136
第 84 図	焼土 (1)	109	第 121 図	青磁 (8)	136
第 85 図	焼土 (2)	110	第 122 図	青磁 (9)	136
第 86 図	焼土の出土遺物	111	第 123 図	青磁 (10)	137
第 87 図	畠跡 I の全体図	112	第 124 図	青磁 (11)	138
第 88 図	畠跡の出土遺物	113	第 125 図	染付碗	139
第 89 図	畠跡 I-2 (第 2 畝間)	114	第 126 図	染付皿	140
第 90 図	畠跡 I-2 (第 1 畝間)	115	第 127 図	染付碗・蓋・メソコ	140
第 91 図	畠跡 II	116	第 128 図	貿易陶器	142
第 92 図	溝 1	117	第 129 図	常滑	143
第 93 図	溝 2・3	118	第 130 図	中世須恵器 (1)	144
第 94 図	溝 4・5	119	第 131 図	中世須恵器 (2)	145
第 95 図	溝 1～6 の出土遺物	120	第 132 図	瓦器質土器 (1)	146
第 96 図	同一遺構柱穴内の出土遺物	121	第 133 図	瓦器質土器 (2)	147
第 97 図	柱穴内出土遺物 (1) 磁器	122	第 134 図	瓦器質土器 (3)	148
第 98 図	柱穴内出土遺物 (2) 陶器	122	第 135 図	土師器碗	149
第 99 図	柱穴内出土遺物 (3) 土師器碗	123	第 136 図	黒色土器 A 碗 (1)	150
第 100 図	柱穴内出土遺物 (4) 土師器坏小皿	124	第 137 図	黒色土器 A 碗 (2)	151
第 101 図	柱穴内出土遺物 (5) 中世須恵器瓦古銭	124	第 138 図	黒色土器 A 碗 (3)	152
第 102 図	白磁 (1)	125	第 139 図	土師器坏 (1)	153
第 103 図	白磁 (2) - 1	126	第 140 図	土師器坏 (2)	154
第 104 図	白磁 (2) - 2	127	第 141 図	土師器坏 (3)	155
第 105 図	白磁 (2) - 3	128	第 142 図	土師器坏 (4)	156

第 143 図	土師器小皿（1）	157	第 151 図	鉄製品（1）	166
第 144 図	土師器小皿（2）	158	第 152 図	鉄製品（2）	167
第 145 図	黒色土器B坏・小皿	159	第 153 図	鉄製品(3)と銅・鉛製品	168
第 146 図	土師特殊品	160	第 154 図	近世白磁	169
第 147 図	石鍋	161	第 155 図	近世陶器	170
第 148 図	滑石製品	162	第 156 図	中世遺構第A期想定配置	231
第 149 図	砥石	163	第 157 図	中世遺構第B期想定配置	232
第 150 図	石製品	165	第 158 図	中世遺構第C期想定配置	233

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧	10	第 28 表	掘立柱建物跡 26 の計測	78
第 2 表	古墳時代・古代の土坑	30	第 29 表	掘立柱建物跡 27 の計測	78
第 3 表	掘立柱建物跡 1 の計測	45	第 30 表	掘立柱建物跡 28 の計測	79
第 4 表	掘立柱建物跡 2 の計測	48	第 31 表	掘立柱建物跡 29 の計測	81
第 5 表	掘立柱建物跡 3 の計測	49	第 32 表	掘立柱建物跡 30 の計測	82
第 6 表	掘立柱建物跡 4 の計測	50	第 33 表	掘立柱建物跡 31 の計測	85
第 7 表	掘立柱建物跡 5 の計測	51	第 34 表	掘立柱建物跡 32 の計測	85
第 8 表	掘立柱建物跡 6 の計測	53	第 35 表	土坑Ⅰ類の計測	95
第 9 表	掘立柱建物跡 7 の計測	53	第 36 表	土坑Ⅰ類の計測	97
第 10 表	掘立柱建物跡 8 の計測	54	第 37 表	土坑Ⅰ類の計測	99
第 11 表	掘立柱建物跡 9 の計測	56	第 38 表	土坑Ⅰ類の計測	100
第 12 表	掘立柱建物跡 10 の計測	57	第 39 表	土坑Ⅰ類の計測	101
第 13 表	掘立柱建物跡 11 の計測	59	第 40 表	焼土計測等一覧	108
第 14 表	掘立柱建物跡 12 の計測	60	第 41 表	石器一覧	171
第 15 表	掘立柱建物跡 13 の計測	60	第 42 表	縄文時代出土遺物一覧	172
第 16 表	掘立柱建物跡 14 の計測	62	第 43 表	古墳・古代出土遺物一覧	173
第 17 表	掘立柱建物跡 15 の計測	63	第 44 表	中世・近世出土遺物一覧	176
第 18 表	掘立柱建物跡 16 の計測	65	第 45 表	金属器出土一覧	199
第 19 表	掘立柱建物跡 17 の計測	66			
第 20 表	掘立柱建物跡 18 の計測	67			
第 21 表	掘立柱建物跡 19 の計測	68			
第 22 表	掘立柱建物跡 20 の計測	70			
第 23 表	掘立柱建物跡 21 の計測	70			
第 24 表	掘立柱建物跡 22 の計測	73			
第 25 表	掘立柱建物跡 23 の計測	74			
第 26 表	掘立柱建物跡 24 の計測	74			
第 27 表	掘立柱建物跡 25 の計測	76			

図 版 目 次

巻頭図版 1 上野城跡全景と川内市街地を臨む

巻頭図版 2 遺構全景(真上から)

図版 1	地層断面	237	図版 20	縄文時代の出土遺物(土器)	256
図版 2	地層断面・旧石器時代の出土状況	238	図版 21	縄文時代の出土遺物(石器 1)	257
図版 3	縄文時代の落とし穴	239	図版 22	縄文時代の出土遺物(石器 2)	258
図版 4	山部調査状況・山部出土状況	240	図版 23	古墳時代の出土遺物	259
図版 5	縄文土器出土状況・山部調査	241	図版 24	古代の出土遺物	260
図版 6	南北部の遺構	242	図版 25	古代の須恵器・中世陶器	261
図版 7	掘立柱建物跡 1・26・27	243	図版 26	白磁・土師器合子	262
図版 8	建物跡 12・13・14 方形竪穴遺構	244	図版 27	白磁(1)	263
図版 9	方形竪穴遺構 1・2	245	図版 28	白磁(2)	264
図版 10	方形竪穴遺構 3・4	246	図版 29	青磁(1)	265
図版 11	方形竪穴遺構 5 土坑Ⅱ	247	図版 30	青磁(2)	266
図版 12	土坑Ⅱ－7・6	248	図版 31	染付	267
図版 13	土坑Ⅱ－8・17	249	図版 32	貿易陶器	268
図版 14	土坑Ⅰ・Ⅱ	250	図版 33	中世須恵器	269
図版 15	溝・古道	251	図版 34	瓦器質土器	270
図版 16	畠跡Ⅰ・Ⅱ	252	図版 35	土師器碗・皿	271
図版 17	柱穴・土器出土状況	253	図版 36	軽石製品・石製品	272
図版 18	遺物出土状況	254	図版 37	石鍋・滑石製品	273
図版 19	旧石器時代の出土遺物	255	図版 38	金属製品	274

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの調査

日本鉄道公団九州新幹線建設局は九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、平成4年6月16日鹿児島県教育委員会文化課（当時、平成8年4月以降文化財課）に照会した。平成4年12月、建設用地内の分布調査が実施され計21か所の遺跡を確認した。

日本鉄道建設公団九州建設局と文化財課との協議の結果、平成5年度に鹿児島市の武遺跡、平成8年度に出水市の鳥越平遺跡をはじめ川内市の大原野遺跡、平成9年度に川内市の前畑遺跡、平成10年度に出水市の茶屋ノ元遺跡をはじめ東市来町の東下原遺跡など12遺跡の確認・全面調査を実施した。

上野城跡は平成11年度に川内市楠元遺跡や城下遺跡の全面調査とともに確認・全面調査を平成11年12月1日から実施することになった。

第2節 調査の組織

事業主体者 独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画調整 鹿児島県教育庁文化財課

平成11年度の発掘調査体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永和人
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神次郎
	〃	主任文化財主事	彌榮久志
調査担当	〃	文化財主事	前田 誠
	〃	文化財調査員	川口雅之
事務担当	〃	総務係長	有村 貢
	〃	主査	今村孝一郎
	〃	主事	溜池佳子

平成12年度の発掘調査体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上明文
調査企画	〃	次長兼総務課長	黒木友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東晃一
	〃	課長補佐	立神次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志

	〃	主任文化財主事	長野眞一
調査担当	〃	文化財主事	前野潤一郎
	〃	文化財研究員	川口雅之
	〃	〃	切通雅子
	〃	文化財調査員	徳田有希乃
事務担当	〃	総務係長	有村 貢
	〃	主査	今村孝一郎
	〃	主事	溜池佳子
調査指導	鹿児島国際短期大学	学長	三木 靖

平成 15 年度の整理体制

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原俊孝
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中文雄
	〃	調査課長	新東晃一
	〃	課長補佐	立神次郎
調査企画及び担当	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮久志
整理担当	〃	文化財調査員	相美伊久雄
事務担当	〃	総務係長	平野浩二
	〃	主査	脇田清幸
	〃	主査	池 珠美
報告書作成検討委員会	〃		所長他 10 名
企画担当者	〃		中村和美・八木澤一郎

第 3 節 調査の経過

1 平成 11 年度の調査（第 1 次）

上野城跡の調査は平成 10 年度楠元遺跡調査の中で水の汲み上げ時間を利用してトレンチを 2 本入れ確認調査を実施したのが最初であった。この調査は楠元遺跡の一環として実施したが短時間のため、確認調査は全体の把握ができず次年度に引き継いだ。そして、平成 11 年 12 月 1 日から対象面積 19,400 m²に対し、平坦畑地部に 4 本、山林山部に 3 本トレンチを設定して本格的な確認調査を実施した。その結果、台地部は旧石器時代から中世までの包含層を確認した。山部は岩山で、遺跡の立地が良くなく、第 6 トレンチの岩石の間に土器片や剥片が出土した。

これらのことを踏まえ、日本鉄道公団九州新幹線建設局と協議し、平成 11 年度の全面調査は台地部の B～F—7～16 区約 3,000 m²を実施した。

なお、平成 10 年度の組織と日誌抄は楠元遺跡・城下遺跡を参照のこと。

日誌抄

平成 11 年 9 月 9 日から 10 月 14 日は楠元・城下遺跡の調査と同時並行での確認調査を実施した。実施した日は、9/9, 9/17, 9/20, 9/27・28, 10/1・4～8・12～14 で計 13 日であ

った。調査は第1～4トレンチを設定しての確認で、ⅠからⅦ層のシラスまで掘り下げる。その結果、中世、旧石器時代の包含層を確認する。

平成11年12月6日～22日

本月から全面調査に入る。C～F－9・10区Ⅰa b層掘り下げ。C～E－11～14区のⅡ・Ⅲa層上面地形コンタ図作成。C・D－12～14区の土坑、ピットの半裁。

平成12年1月5日～28日

C～F－7～10区Ⅰb・Ⅱ・Ⅲ層上面掘り下げ後遺物取り上げ。同区溝2及び道跡検出掘り下げ。C－13、D－10区土坑完掘写真撮影後実測。Ⅰb層C・D－11区Ⅲ層上面まで掘り下げ。D－9区Ⅱ層内に畠跡検出。

2月1日～25日

C～F－7・8区Ⅱ層掘り下げ。同区Ⅱ層上面コンタ図作成。C－12区東西ベルト断面図作成。C－12・13区溝1平面図作成。C－9・10区畠跡の精査後写真撮影及び実測。C－12区石組み焼土跡の調査。山部にトレンチ設定。

3月

山部の3トレンチ掘り下げ。C・D－10・11区ピット土坑の平面断面図作成。溝2・3・4の掘り下げ後遺物取り上げ、実測。C・D－9区Ⅲa層まで掘り下げ。掘立柱建物跡1の柱穴掘り下げ後写真撮影及び実測。東壁と中央ベルトの土層図作成。B～F－10・16区終了。

2 平成12年度の調査（第2次）

平成11年度はB～F－10～16区について遺構の調査が終了していたので、平成12年度は残りの部分16,400 m²を調査した。

平坦畑地部は、中世の遺構が主体をしめる包含層の調査を行い、その層の若干下部にある縄文包含層までを調査し、さらに下層にある旧石器時代の包含層まで調査した。

山部は、F・G－16～19区の調査を対象とした。さらに周囲に5本のトレンチを入れて、拡がりの確認を実施した。その結果、遺物の拡がりは確認されなかった。

日誌抄

平成12年5月1・8日～26日

道具搬入、環境整備、重機で調査区北側の掘り下げ。B～F－3～5区のⅠb層掘り下げ。10mグリッドの基準杭打ち。SK37半裁後写真撮影後掘り下げ、実測。B～D－2～7区Ⅰa b c層掘り下げ、遺物取り上げ。B・C－3～8区にⅠb層掘り下げ、遺物取り上げ。B～E－6・7区の地形コンタ図作成。石列Ⅰ実測。D～F－2～5区のⅠb層掘り下げ、遺物取り上げ。掘立柱建物跡検出作業。B～D－2～7区地形コンタ図作成。D～F－4・5区Ⅰb層掘り下げ。

6月5日～23日

E～G－2～7区のⅠc・Ⅱ層掘り下げ。同区Ⅲ層上面まで掘り下げて遺構検出作業、同区Ⅰc・Ⅱ層遺物取り上げ。E・F－3～7区の遺構検出作業。B～D－3～7区のⅠc層掘り下げ。同区地層図作成。B～F－2～6区の清掃・掘り下げ・遺物取り上げ。E・F－5・6区地層断面図作成、ベルト崩し。E・F－3・4区ピット平板実測。E・F－2～6区の清掃後掘立柱建物跡検出

状況。同区写真撮影。同区土層断面図作成。山部に傾斜確認トレンチ5本設定。D・E-2・3区の遺構検出後配置図作成。E-3区の焼土跡掘り下げ、写真撮影、実測。D～F-3・4区のピット及び土坑掘り下げ。E・F-3～5区のピット及び土坑掘り下げ。E・F-7・8区のⅢa層上面遺構図配置図作成。山部先行トレンチ掘り下げ。掘立柱建物跡4・6半裁実測。

7月3日～28日

掘立柱建物跡4・6・7半裁実測。E・F-3～7区の土坑群、半裁、実測、写真撮影。山部確認トレンチの掘り下げ。E・F-6・7区のピット及び土坑掘り下げ。E・F-2区の下層トレンチ掘り下げ開始。山部拡張区の表土剥ぎ。E・F-7・8区のピット及び土坑掘り下げ、実測。E・F-2・3区の下層トレンチ掘り下げ。山部拡張区の表土剥ぎ。F-8・9区Ⅲ層以下全面調査、シラス上面に剥片先頭器出土。E・F-3・4区畝畝検出。E・F-3区の下層トレンチ掘り下げ。山部拡張区の表土剥ぎ。E・F-3・4区畝畝検出後実測。E・F-6・7区畝畝検出。

8月1日～28日

掘立柱建物跡7・8・9・10・11ピット実測、掘り下げ。E・F-7・8区、E-4・5・7区Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ。同区掘り下げ終了後写真撮影、土層断面図作成。E・F-3～5区Ⅷ・Ⅸ層掘り下げ。E-5・6区、D・E-5・6区の重機によるⅣ・Ⅴ層掘り下げ。D・E-4・5区ピット、土坑実測、掘り下げ。D・E-2～4区のⅨ層掘り下げ。D・E-2・3区土坑写真撮影後実測。E・F-3～8区調査終了。山部表土剥ぎ後、コンタ図作成。

9月1日～29日

今月から本格的に山部の調査に入る。6トレンチの掘り下げ、北側面の断面図作成。F・G-17～19区のⅡ層掘り下げ、出土状況の写真撮影後平板実測。G・H-16・17区掘り下げ、出土状況の写真撮影後平板実測。F・G-16・17区、G-17・18・19区のベルト土層断面図作成。

10月3日～27日

G・H-16・18区掘り下げ、出土状況の写真撮影後平板実測、遺物取り上げ。4日で山部終了。E-11区の下層確認トレンチ設定後Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。C・D-3～7区のⅢ層検出後、遺構平板実測。D・E-11区下層確認トレンチ掘り下げ。C～E-5・6区ベルト土層断面図作成後ベルト崩し、精査遺構検出。B-5・4区ミニトレンチ掘り下げ。方形竪穴遺構①②検出状況写真撮影後掘り下げ。

D-4・5区焼土精査後写真撮影。C・D-5～7区遺構の平板実測。B～D-6区の遺構検出状況後写真撮影、掘り下げ。D-6区ベルト土層断面実測、ベルト崩し。

11月1日～28日

掘立柱建物跡12～19のピット検出写真撮影、実測、掘り下げ。方形竪穴遺構②の掘り下げ、写真撮影、実測。B-2～6区東側拡張区のⅡ層まで掘り下げ。

12月1日～22日

掘立柱建物跡22・23・25～27のピット検出写真撮影、実測、掘り下げ。B-2～6区東側拡張区の掘り下げ。C-9区焼土①②の掘り下げ写真撮影後実測。D-8区の畝跡掘り下げ、断面実測。C・D-7・8区及びD・E-8～10区境ベルト土層断面実測後掘り下げ。B～E-9区のピット掘り下げ。C・D-7・8区の溝跡掘り下げ。B～E-6区の溝跡掘り下げ。B・E-8区以降の

空中写真撮影。C・D－9区以降の下層確認トレンチ掘り下げ。

平成13年1月5日～29日

掘立柱建物跡21・24・28のピット検出写真撮影，実測，掘り下げ。方形竪穴遺構①②③④⑤検出状況写真撮影後掘り下げ。C・D－9区以降の下層確認トレンチ掘り下げ。D－7区ピット・土坑掘り下げ。

2月1日～27日

C・D－9区以降のV層掘り下げ。方形竪穴遺構②③④⑤の写真撮影及び実測，ベルト崩し。C・D－7・8区ピット掘り下げ，実測。同区下層確認トレンチ掘り下げ。土坑74・76・77掘り下げ実測。空中写真撮影。8区トレンチ(東西)掘り下げ。B－2～5区Ⅲ層検出硬化面実測。

3月1日～19日

C－3区のV層掘り下げ。C・D－3・4・7・8区のV～Ⅶ層掘り下げ。B－4～6区，B・C－4区土層断面図作成。C～E－5～7区のV～Ⅶ層掘り下げ。C・D－5～8区の掘り下げ後写真撮影と土層断面図作成。B・C－5・6区の傾斜部トレンチ掘り下げ。C～E－8区下層確認トレンチ土層断面図作成。今月で発掘調査終了。

3 整理作業

整理作業は，新幹線建設工事が優先したため発掘調査が22遺跡全て終了した平成13年度から開始した。

計画は，日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と協議した結果，全遺跡を計画的に3年間で整理し，随時報告書を刊行することとした。なお，最終年度は，上野城跡，大原野遺跡，上ノ平遺跡を刊行し，大坪遺跡，京田遺跡，大島遺跡は整理を終了させ平成16年度当初に刊行することとした。

上野城跡の整理作業は作業員8名で下記の通り実施した。

作業員名 笑喜ミチ子，竹ノ内礼子，坂元真由美，谷村志乃恵，山元順子，井出康代，堂籠久代，
郷田千秋

4月 土器洗い，注記，接合

5月 接合，遺物選別・分類，遺構図作成

6月 遺物選別・分類，遺物実測，遺構図作成

7月 遺物実測，遺構図作成

8月 遺物実測

9月 遺物実測，トレース，原稿執筆

10月 トレース，レイアウト，原稿執筆

11月 レイアウト，拓本，復元，原稿執筆

12月 写真撮影，写真レイアウト，原稿執筆

1月 入札，収納整理

2月 校正，収納整理

3月 校正，受け取り

4 発掘調査全体の経過と成果

九州新幹線鹿児島ルートが発掘調査は、西鹿児島駅整備事業に伴う武遺跡の調査を平成5年5月12日より開始し、平成13年5月30日に川内市の京田遺跡を調査して全てを終了した。

平成5年度後の発掘調査は、北陸新幹線の一部である長野行新幹線建設が優先され九州新幹線鹿児島ルートが発掘調査は2年間中断となった。再開したのは、平成8年8月の鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡であった。しかも、その調査は短期間であった。

平成9年度は11月から大原野遺跡の調査を開始し、前畑遺跡の一部全面調査を実施した。平成11年度からは、調査体制を充実し、2年2か月間で対象遺跡全21ヵ所の内、14ヵ所の発掘調査を終了した。なお、その成果は次の表で示した通りである。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物	備考
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2～3 H11.3.2～4 計5日	240m ²	彌榮久志 前田 誠	縄文早・前期	塞ノ神式、轟式 磨製石斧、黒曜石	
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計1日	55m ²	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。	
3	鑑・安原	出水市安原町	H11.2.17・18 H11.2.24・25 H11.3.9 計5日	60m ²	彌榮久志 前田 誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器、黒曜石 土師器	
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5～3.9 H11.5.6～ 12.3.31 H12.5.1～ 13.3.27 計420日	27,247m ²	彌榮久志 前田 誠 濱崎一富 東 和幸 高岡和也 上床 真 森田裕之	縄文晩期 平安・鎌倉 時代	縄文晩期埋設土器38基、 平安期竈付竪穴住居跡1 基、掘立柱建物跡9棟、 焼土遺構3基、溝状遺構 30条、波板状遺構27条、 上加世田式、入佐式、黒 川式、土師器、須恵器、 玉縁白磁、滑石製石鍋、 刻書土器、鉄製品、石 鏃、磨製石斧、打製土掘 り具、石匙、石皿、磨 石、凹石、玉類(勾玉6、 管玉25、丸玉5、平玉3、 垂飾品1、剥片46、未製 品30)、異形石器。	
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2 計2日間	48m ²	彌榮久志 前田 誠 東 和幸	時代不明	包含層確認されず。	
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計1日間	12,5m ²	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。	
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計3日間	108m ²	彌榮久志 前田 誠	縄文早期	土器、黒曜石	
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1～ H10.3.31 H10.5.6～ H12.12.24 H11.12.13～ H12.2.24 計195日	11,800m ²	長野眞一 上床 真 彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀夫	旧石器時代 縄文早・前 ・後期、中 近世	土坑(陥し穴含)25基、集 石4基、堅穴状遺構1 基、五輪塔、大型掘立建 物跡7棟。 ナイフ形石器、細石刃 核、吉田・石坂・轟式、 石鏃、石斧、石皿、磨 石、敲石。 土師器、青磁、白磁、染 付、薩摩焼。	

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物 備考
9	計志加里	川内市中郷町	H11. 7. 1～8. 27 H12. 5. 23～ H13. 3. 26 計 2 1 8 日	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀夫 樋渡将太郎	縄文早・後 ・晩期, 弥 生時代, 古 墳時代, 平 安時代, 中 世。	竪穴住居 1 軒, 掘立柱建 物跡 5 棟, 土壇墓 3 基, 円形周溝状遺構 1 基, 土 坑 5 基, 中世掘立柱建物 跡 2 棟, 古道, 溝状遺 構。早期押型文土器, 後 期の土器, 磨製石鏃, 打 製石斧, 錐, ピエスエス キュウ, スクレイパー, 磨石, 石皿, 石匙, 石 鏃, 砥石, 土師器, 須恵 器, 瓦, 青磁, 白磁, 滑 石製品, 刀子, 青銅製 品, 紡錘車。
10	京田 (薩摩国分 寺下)	川内市中郷町	H11. 6. 1～20 H12. 5. 8～6. 6 H12. 9. 4～ H13. 3. 24 H13. 4. 9～5. 31 計 1 9 1 日	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀夫 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期, 平安時代, 中・近世	弥生期水田跡, 土留め状 遺構, 杭列, ウケ跡, ド ングリピット, 古代水田 跡。 弥生土器, 三叉鍬, 二又 鍬, 大足, 一本梯子, 横 架材, 網杵, 土師器, 須 恵器, 瓦, 曲物。
11	原田・大島	川内市東大小 路町	H10. 11. 26 H11. 5. 6～ H12. 3. 24 H12. 5. 7～ H13. 3. 19 計 2 7 5 日	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀夫 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡 4 軒, 土坑 1 基 古墳期竪穴住居跡 1 軒 平安期竪穴住居跡 3 1 軒 (竈付 2 軒), 掘立柱物 跡 2 棟, 土壇墓 1 中世竪穴建物跡 1 軒, 掘 立柱建物跡 1 棟, 畠跡。 弥生期甕・壺, 石包丁, 磨製石鏃。 古墳期成川式, 須恵器, 大刀, 剣, 鉄鏃。 平安期土師器, 須恵器 瓦, 越州窯青磁, 緑釉陶 器, 転用硯, 帯金具石製 丸軀, 玉類, 土錘, 金 環, 青銅製鈴, 鉄製品。
12	鍛冶屋馬場 春田	川内市平佐町	H10. 11. 25 H11. 9. 1～9. 27 H12. 5. 9～6. 15 H12. 9. 1～12. 27 計 1 0 3 日	2,850㎡	彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀夫 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉 6 基, 土坑 2 基, 竪穴住居跡 1 軒, 掘 立柱建物跡 4 棟, 炉跡 7 基, 畠跡。 越州窯系青磁, 陶器壺, 土師器, 鉄滓, 鉄製品 (鎌, 鋤先, 紡錘車, 鉄 鏃) 中世青磁, 古銭 近世薩摩焼, 平佐焼, 伊 万里焼, 土師器, 羽口, 鉄滓。
13	楠元 城下	川内市百次町	H10. 9. 17～30 H10. 11. 4～24 H11. 9. 2～12. 6 H11. 5. 6～11. 8 計 2 0 9 日	1,800㎡	彌榮久志 前田 誠 川口雅之	縄文後期 弥生～古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡 2 軒, 炉跡 2 基, 土坑 1 2 基, 溝 7 条 (杭列を伴 う溝 1 条)。 縄文期押形文・市来式・ 西平式・北久根山式。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物 備考
							弥生～古墳期土器、木製平鍬、又鍬、横鍬、鍬の柄、掘り棒、丸木弓、容器（木製品）、櫛状木製品。
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1～3.24 H12.5.1～ H13.3.29 計316日	19,400m ²	前田 誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡32棟、土壇墓4基、方形竪穴建物跡5軒、溝7条、古道1条、畠跡、剥片先頭器、ナイフ形石器、押形文、石坂式、阿高式、土師器、石皿、敲石、凹石、石鍬、土師器、須恵器、白磁、青磁、短刀、古銭、滑石製石鍋、中世陶器、鉄鍬。
15	大原野	川内市百次町 浦田	H8.10.1～29 H9.11.1～ H10.3.31 計171日	2,815m ²	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生 誠 上床 真	旧石器 縄文早・前期	ナイフ形石器、細石器、吉田式、石坂式、条痕土器、轟式、石鍬、石皿、磨石、敲石、石斧。
16	東下原	日置郡東市来 町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計20日	248m ²	彌榮久志 前田 誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑 細石刃核 成川式、土師器。
17	上ノ平	日置郡伊集院 町下神殿4区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14～ H13.3.29 計92日	2,328m ²	彌榮久志 前田 誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒、集石4基、中世溝1条、細石刃核、指宿式、磨製石斧、石鍬。
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院 町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1～ H12.3.24 H12.5.1～11.13 計184日	15,900m ²	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創・ 早・中期 古墳、中世	集石（早期3基、中期3基） 中世溝、農具埋納土坑、掘立柱建物跡12棟、縄文早期土器、船元式、成川式、土師器、陶磁器（中国南部）、滑石製石鍋。
19	梅落	日置郡伊集院 町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19～7.14 計24日	340m ²	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石、塞之神式、スクレーパー。
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残
21	武ABCD	鹿児島市	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6～ H6.2.21 H6.3.9～30 H11.5.24～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計175日	9,104m ²	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文前・中 期、弥生中 期、近世	古墳竪穴住居跡23基、大型土坑11基、土坑37、溝4条、近世溝9条、轟式、深浦式、春日式、船元式、山之口式、成川式、陶器・磁器、瓦、木製品、金属製品、寿国寺跡のはん池（門前池）跡。
22	前市野原	串木野市	H10.12.15 計1日	22m ²	彌榮久志 前田 誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び立地

上野城跡は鹿児島県川内市百次町上野に所在している。

上野城跡が所在する川内市は鹿児島県の北西部に位置し、九州でも大河川の範疇に入る川内川が市内を東西に流れている。川内川は源が熊本県の白髪山に発し、宮崎県えびの市、鹿児島県大口市を經由して川内市の中央部を横切り、東シナ海へ注いでいる。その川内川は、奔流とそれに注ぐ隈之城川等の支流の河川によって川内平野や川内盆地と呼ばれる沖積平野を形成している。川内盆地の南側は標高 516mの冠岳がそびえ立ち隣接市の串木野市に繋がっている。上野城跡の南側には新幹線建設関係で平成 8・9 年度に調査した大原野遺跡が、その冠岳の麓で北斜面に立地している。北側には、平成 10・11 年度に発掘調査した楠元遺跡・城下遺跡が低地に立地している。

上野城跡のある丘陵は、川内盆地の中の南部にある隈之城地区の低地から山地に上がる冠岳の裾部から水田を挟み北へ 3km離れた標高約 40～50mの独立丘にあたる。周りは水田を形成し、西側が永利地区の台地に接している。水田を形成する河川は、川内川の支流隈之城川に流入する百次川が東側に、山崎川が西側に北へ流れている。上野城跡が所在する独立丘は、同市永利地区の凝結凝灰岩台地の西端にあたり、上述の百次川が浸食して分離した台地である。なお、浸食された所は一部シラス台地となっている。シラス台地は独立丘の東側にあり平坦部を形成し、溶結凝灰岩は西側にあたり、一段高い山部を形成している。

第2節 周辺遺跡

川内川から南部に所在する遺跡群の発掘調査は、隈之城バイパス建設関係、新幹線建設関係、現在行われている南九州自動車道建設関係がある。

隈之城バイパス関係は昭和 55～59 年度に発掘調査され、上ノ原遺跡、西ノ平遺跡、成岡遺跡がこれにあたる。この中で特に西ノ平遺跡では中世の大型建物跡が発見され、鹿児島におけるこの地域の先進性が認められた。また、細石器時代の石器をはじめ、縄文時代晩期の完形土器が土坑内から出土している。

新幹線建設関係では川内川南側の鍛冶屋馬場遺跡をはじめ、楠元遺跡、城下遺跡、上野城跡が平成 10 年度から 12 年度にかけて発掘調査が実施された。この中で特に楠元遺跡では、弥生終末から古墳初頭における大量の木製品が発見され、南九州ではじめて本格的な低地の遺跡の存在を確認した。さらに、縄文時代後期の包含層もあり当時の海岸線を考える上で良い遺跡である。また、上野城跡では、旧石器時代の遺物をはじめ、12 世紀頃の掘立柱建物跡群とそれに伴う白磁が多く出土し、西ノ平遺跡同様鹿児島におけるこの地域の先進性が裏付けられている。

南九州自動車道建設関係では、現在調査中である霜月田遺跡は掘立柱建物跡が発見され、中世の遺跡の拡がりが見られる。

これらのほか、川内純心女子高等学校の台地縁辺部に縄文時代の貝塚がある尾賀台遺跡があり、隈之城川を中心とした水田地帯の北側は海水が入り込んでいた入江と考えられる。それを裏付ける船着き場の意味と考えられる「津」の付く赤澤津もある。また、そこは遺跡に登録されている。

今回の調査対象になった上野城跡は、百次城とも言われている中世の城である。地形は、前に述べた河川や低地で囲まれた独立丘を利用し、生活はシラス台地の平坦部を利用している。平坦部には、3つの郭を形成し、その間は空堀を設けた防備をしている。この郭から北側を眺めると隈之城川一帯の水田が一望に見えて、本地が統治しやすい所であったことが裏付けられる。また、台地の下段には上野氏三代の墓があり、拠点としての証となっている。

以上のように、現在の隈之城川の両岸地帯は旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世と長期にわたり生活の拠点が多かったことがわかる。このことはこの地域が弥生時代後期から中世にかけて鹿児島県でも先進的な地域であったことがわかる。

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	原口	田原町原口・外園	台地	縄文～江戸	土器・須恵器・染付	
2	大明原	田崎町大明原	台地	縄文～江戸	土器・染付・石鏃	
3	喜入原	平佐町喜入	台地	縄文～江戸	土器・須恵器・染付	
4	平佐城	平佐町藤崎ほか	丘陵	鎌倉～戦国		空堀跡
5	田中原	陽成町田中原	河岸段丘	鎌倉～室町	土器・青磁・白磁	
6	石神城	永利町石神	丘陵	不詳		堀切跡
7	石神原A	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器・須恵器・青磁	
8	石神原B	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器・須恵器・青磁	
9	若宮北	永利町西永崎ほか	台地	縄文～室町	土器・須恵器・青磁・石鏃	
10	若宮南	永利町若宮前ほか	台地	縄文～室町	土器・須恵器・青磁・石鏃	
11	宮崎北原	宮崎町出居原ほか	台地	古墳～室町	土器・須恵器・陶器	
12	瀬戸口	宮崎町瀬戸口	台地下	縄文～平安	土器・土師器・石鏃	
13	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器・土師器	
14	赤沢津	宮崎町赤沢津	微高地	縄文～平安	並木式土器・須恵器・石斧	
15	日暮丘	向田町鉢本ほか	丘陵	古墳～江戸	土器・須恵器・染付	
16	尾賀台	隈之城町尾賀原外	丘陵	縄文～室町	土器・須恵器・染付・石鏃	一部貝塚
17	榕城	隈之城町尾賀	丘陵	不詳		堀切跡
18	池尻	隈之城町池尻	丘陵	古墳	須恵器	
19	西ノ口	隈之城町西ノ口	台地	古墳		
20	湯之谷	隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
21	上ノ原	中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器・須恵器・青磁・染付	S55 発掘
22	西ノ平	中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土師器・青磁・細石刃核	S55～59 発
23	成岡	中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	須恵器・青磁・細石刃	S55～59 発
24	金剛院跡	中福良町石原		鎌倉	層塔・宝塔	
25	立石A	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器・土師器・青磁	
26	立石B	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器・石鏃・黒曜石	

27	集	中福良町集	丘陵	縄文～室町	土器・陶器・黒曜石	
28	上中原	永利町上中原	台地	古墳～室町	土器・土師器	
29	権現原	永利町権現原	台地	古墳～室町	土器・青磁・染付	
30	鎮守原	宮崎町鎮守原	台地	古墳～室町	土器・青磁・須恵器	
31	宮崎南原	宮崎町大堀	台地	古墳～室町	土器・青磁・須恵器	
32	三本松	宮崎町三本松	台地	古墳～室町	土器・土師器・陶器	
33	百次原	百次町六反ほか	台地	古墳～室町	土器・内黒土師器	
34	別府原	百次町別府原	台地	古墳～室町	須恵器・青磁・染付	
35	楠元	百次町楠元	平野	縄文～近世	土器・木製品・石鏃	H10～11
36	城下	百次町城下	台地下	縄文～近世	土器・須恵器・陶器	H10～11
37	上野	百次町上野	台地	旧石器～江戸	尖頭器・土器・白磁	H10～11
38	上野氏三代墓	百次町 2383 番地	台地下	鎌倉	宝塔・五輪塔	
39	大畠	百次町大畠	台地端	古墳～江戸	土器・青磁・染付	H3 発掘
40	小城	勝目町小城	平地	不詳		消滅
41	柵城	勝目町柵	丘陵	不詳		東ノ丸字
42	勝目原	勝目町柵・集ほか	台地	古墳～江戸	須恵器・青磁・染付	
43	二福城	隈之城町城	丘陵	鎌倉～戦国		曲輪跡
44	矢倉城	矢倉町矢倉城	平地	不詳		消滅
45	山口原	山之口町山口原	台地	古墳～江戸	土器・青磁・染付	
46	四反畑	尾白江町四反畑	微高地	平安～江戸	土師器・青磁・染付	
47	瀬戸山	木場茶屋町瀬戸山	丘陵	古墳～江戸	土器・須恵器・青磁	
48	都城	都町都原	台地	不詳		空堀跡
49	都原	都町都原	台地	平安～室町	土師器・青磁・染付	
50	総徳城	都町麦・屋敷田ほか	丘陵	不詳		堀切跡
51	霜月田	都町霜月田	台地	古墳～室町	土器・青磁・染付	H14・15



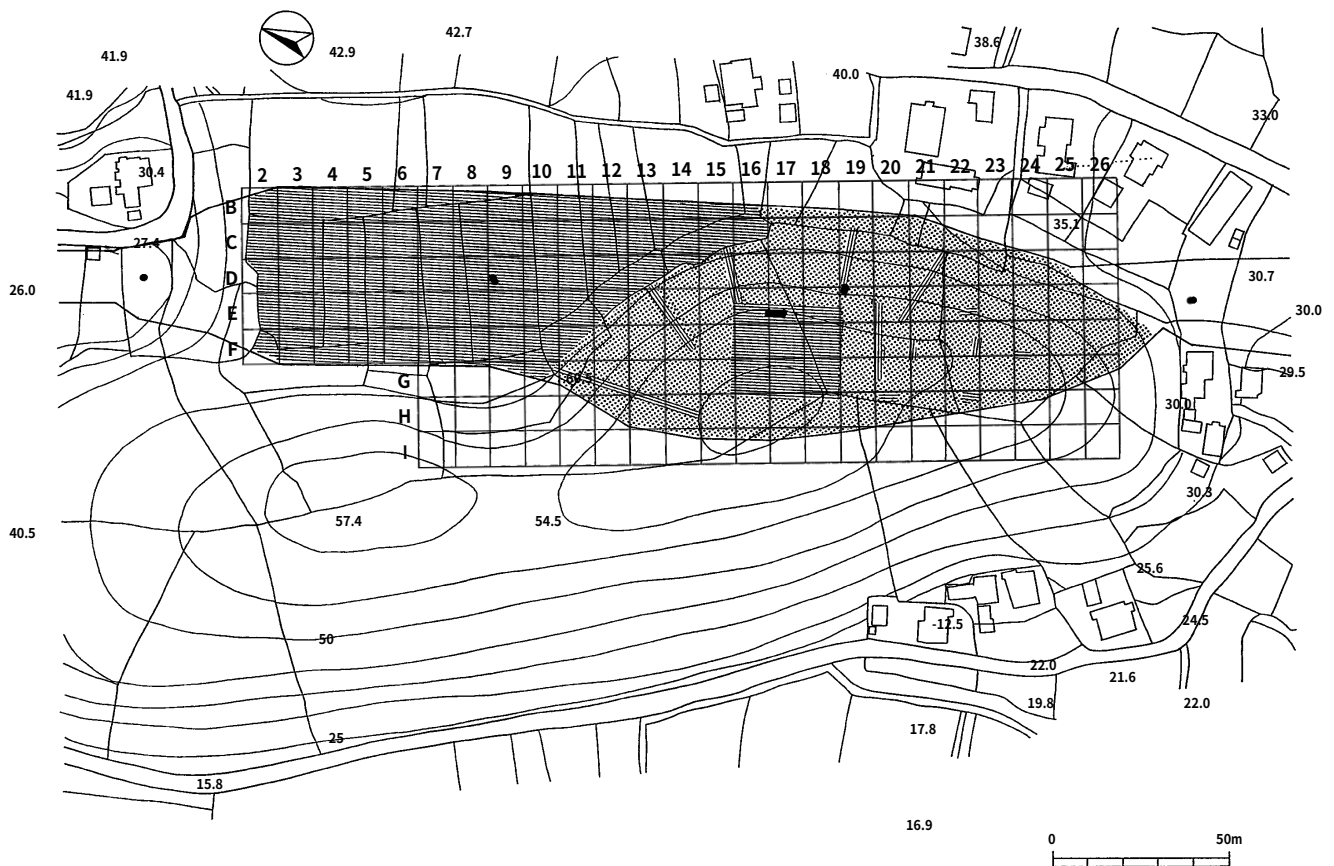
第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡

第三章 調査の概要

第1節 調査の基本計画

本遺跡は、現在、地形が畑地となっている平坦地と雑木林になっている山部に大きく分けられているため両方に網がかけられるように新幹線建設の新八代起点からの41.6km杭を起点として、平坦部の東端がA列に、北端が第1列に入るように10mグリッドを設定して発掘調査を実施した。

本遺跡の調査方法は、中世城のため、平坦部を生活拠点の館跡、山部を有事の時の山城と想定して進めた。平坦部における調査は、建物跡遺構等の精密な検出、山部における段々に造られた帯曲輪類似のものと頂上部における建物遺構等の検出に力を注ぐ方法をとった。よって、調査の進め方としては、山部の帯曲輪調査時の土落とし場として、7～16区の地域を最初に調査した。



第2図 上野城跡の地形と調査範囲

第2節 遺跡の層序

調査の結果、畑地の平坦部と岩山の山部に分けて下記の層序が設定された。

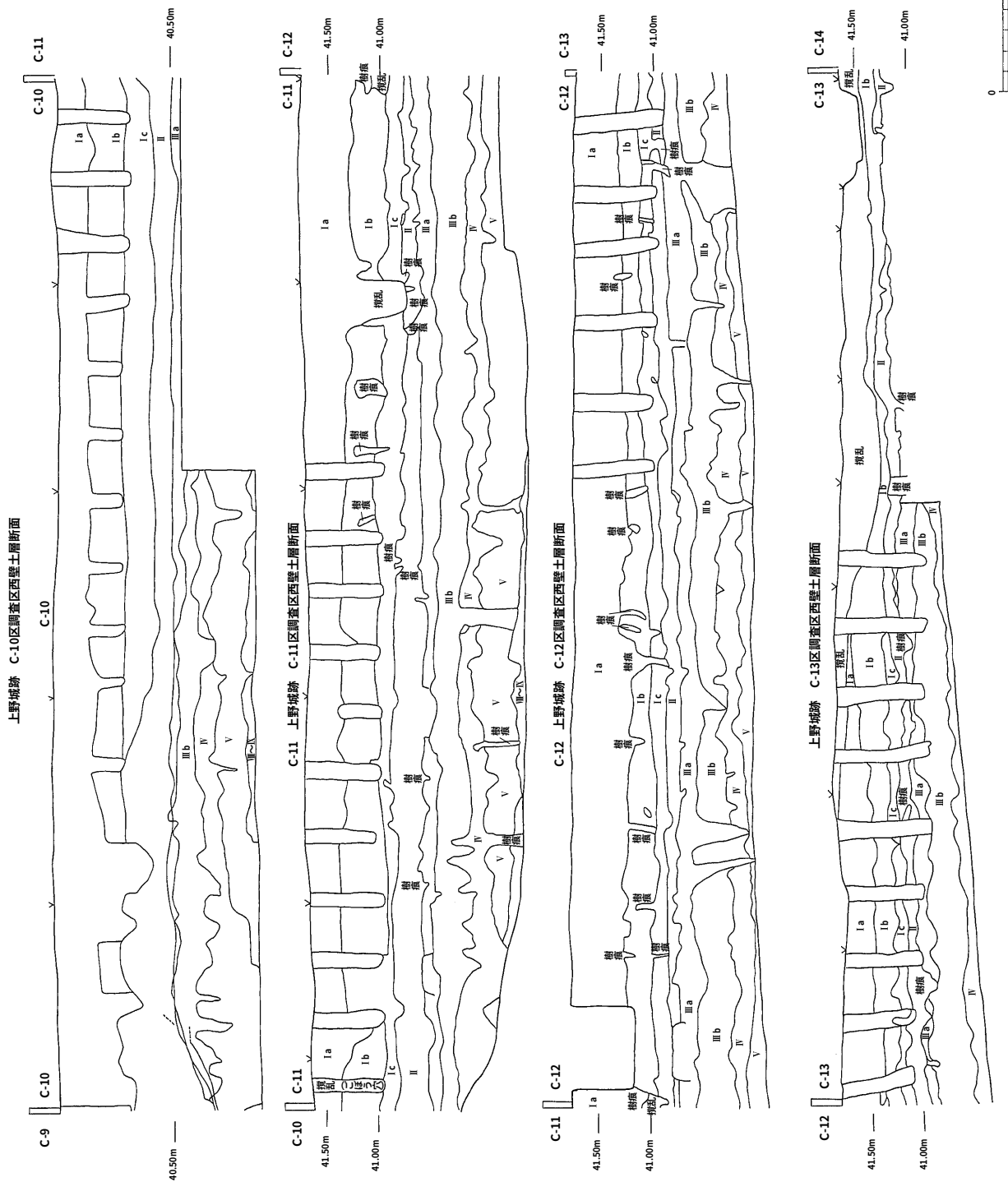
平坦部

平坦部			
I a	I a	表土	(現耕作土)
I b	I b	暗褐色砂質土層	(13 世紀～15 世紀頃)
I c	I c	黒褐色砂質土層	(10 世紀～13 世紀頃)
II	II	黒色砂質土層	(10 世紀～13 世紀頃)
III a	III a	淡黄褐色砂質土層	(古墳時代～縄文時代中期)
III b	III b	黄褐色砂質土層	
IV	IV	にぶい黄褐色砂質土層	
V	V	黒褐色土層	
VI	VI	暗褐色粘質土層	
VII	VII	褐色粘質土層	(旧石器時代)
VIII	VIII	シラス二次堆積層	(旧石器時代)
IX	IX	シラス層	

山部

山部				
	I	I	表土	(開墾土)
		II	暗褐色土	(縄文時代～旧石器時代)
	II	III	下部に溶結凝灰岩礫を含む褐色土	(")
	III		III層直下は溶結凝灰岩の岩盤	(加久藤溶結凝灰岩?)

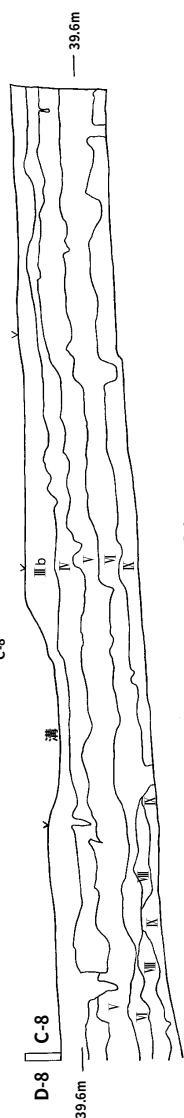
第3図 上野城跡の基本的層序



第5図 上野城跡の南北断面2 (C-10~13区)

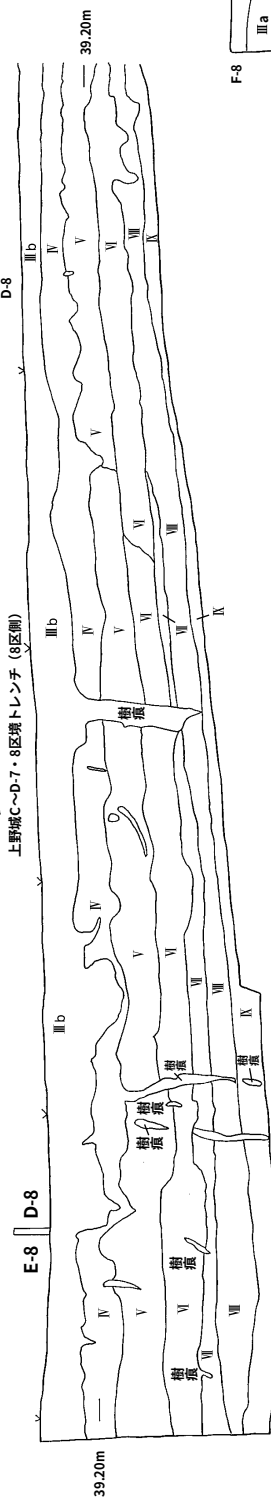
上野城跡C～D・7・8区境トレンチ (8区側)

C-8



上野城C～D・7・8区境トレンチ (8区側)

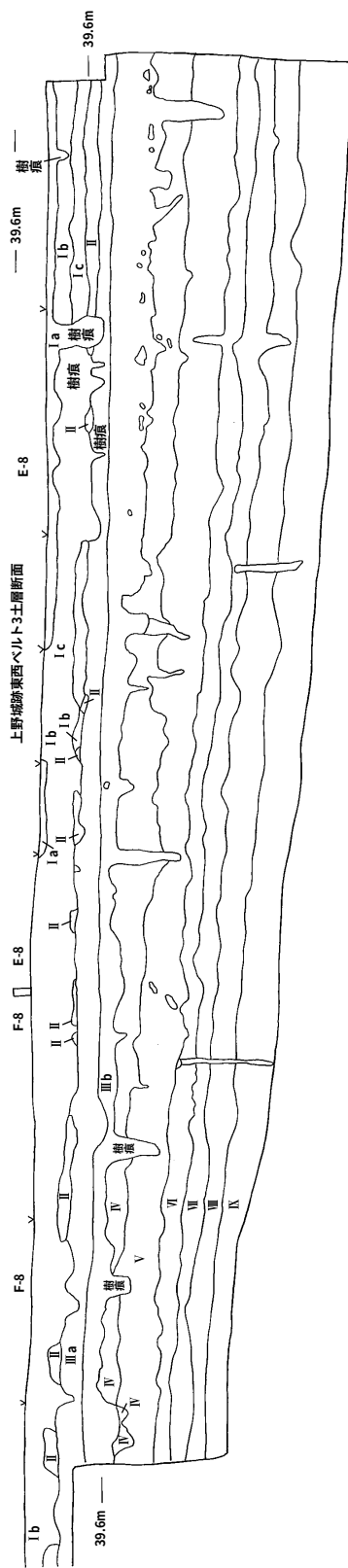
D-8



F-8

上野城跡東西ベルト3土層断面

E-8

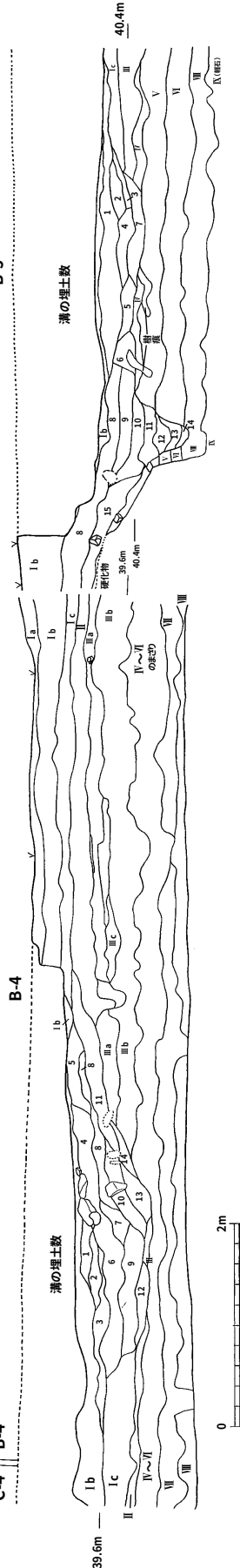


C-4 B-4 上野城跡B-3・4区ベルト南壁

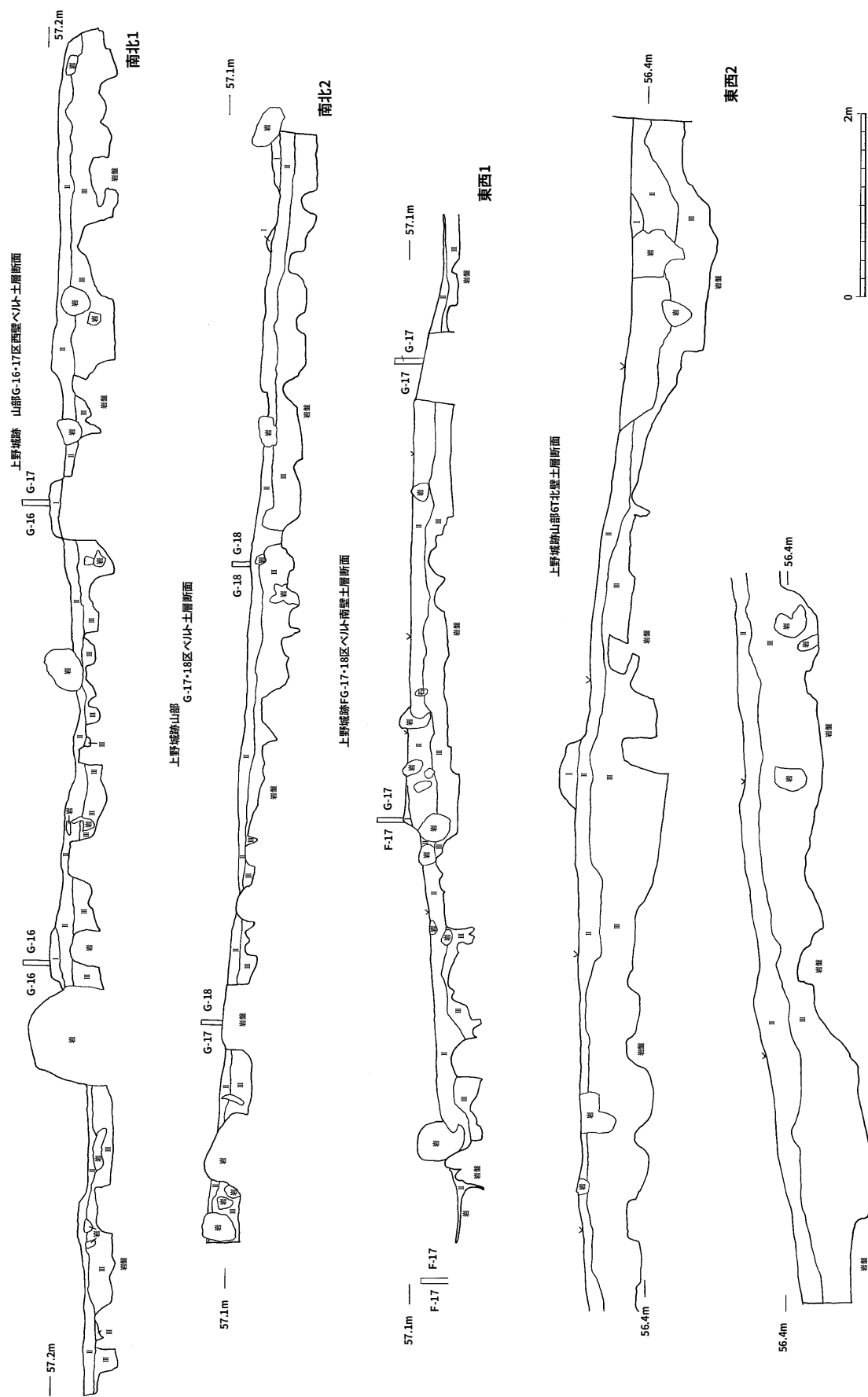
上野城跡 B～C-5区 ベルト (ミニトレ)

B-5

B-4



第6図 上野城跡の東西断面 (C～F-8区、B-3・4区、B～C-5区)



第7図 上野城跡の山部断面 (G-16~18区、F~G-17・18区、第6トレンチ)

第3節 遺構と遺物

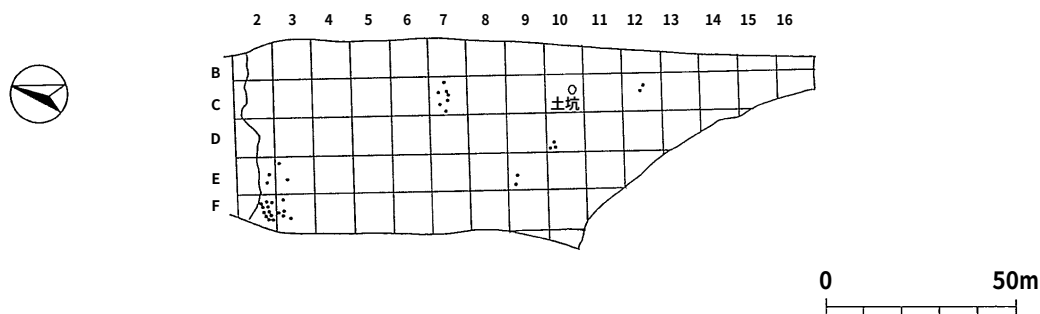
1 旧石器時代

(1) 経過及び遺構と遺物の出土状況

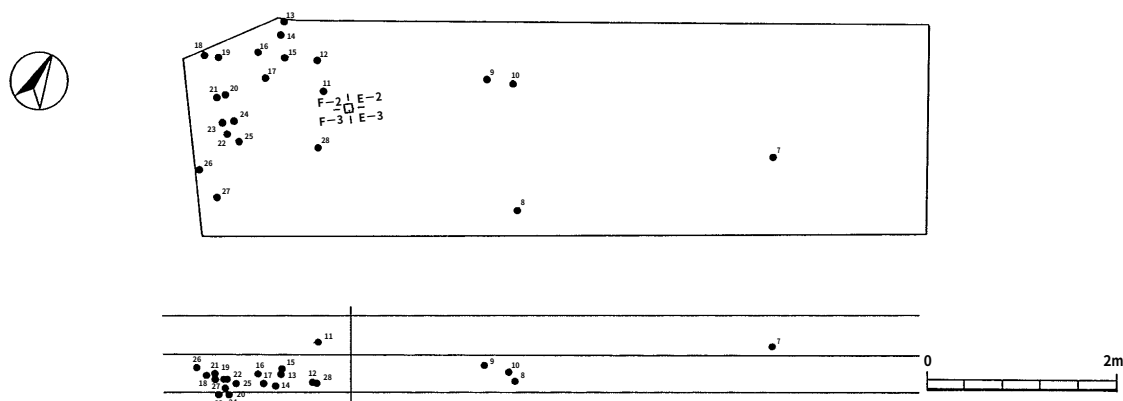
旧石器時代の遺物は確認調査でE-6区のVIからVII層にかけて黒曜石と玉髓の剥片が出土し、旧石器時代の本格的な遺跡と想定して調査を実施した。その結果、トレンチ周辺に遺物が散布した状態で出土し、そこは本格的な遺跡にはならなかった。

次に、III層調査終了後下層確認のトレンチを入れ調査した結果、E・F-3・4区のVIII層にナイフ形石器1点、剥片先頭器1点のほかフレーク・チップが20点、E-9区のVIII層にフレーク3点、C-12、D-10区のVIII層にフレーク・チップが5点、C-7区のVIII層にフレーク・チップが7点出土している。第9図はE・F-3・4区の出土状況図である。

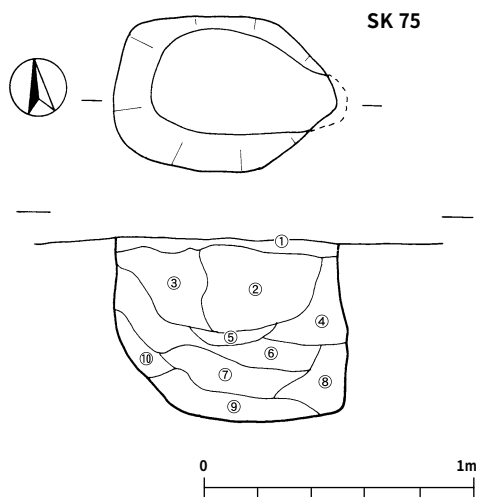
また、下層確認トレンチ調査でC-10区に土坑(第10図)がVIII層に検出した。形は長軸70cm、短軸58cmの略五角形で片方が床面より鋭角に、片方が丸味をもって立ち上がっている。埋土は基本的にレンズ状堆積を保ち次のように観察された。最下層の⑨は褐色土でぬれシラスを多く含み、⑥⑦⑧はにぶい黄褐色土層であった。これらの層は⑥がVIII層に大きい軽石や白色粒子を少量含み、⑦は⑥に大きな軽石は含まず、⑧は⑦より明るい。⑤は褐色土層でVIII層主体の層である。④はにぶい褐色土で3mm大の黄色軽石を多量に含んでいる。③は暗褐色土層で黄色軽石と白色粒子を含んだ砂質層である。②は黒褐色土で白色粒子を少量含んでいる。①は暗褐色土で非常に小さい白色粒子とシラスの黄色軽石を含んでいる。なお、拡張の結果、周囲には検出しなかった。



第8図 旧石器時代の出土分布



第9図 E・F-3区の出土状況



第10図 旧石器時代の土坑

(2) 出土遺物 (第11・12図1～18)

旧石器時代の遺物は、前述で示したように3か所に出土した。1～5・8・9までがE・F-3区のⅧ層に出土した一群のものである。1は剥片尖頭器であるが、背面調整と基部調整がおこなわれ、主要剥離面と組み合わせて刃部を作っている。丁寧な背面調整は先端部と基部にみられ、先端部は欠損している。なお、石材は頁岩である。2はナイフ形石器である。形は彫刻刀型で背面調整が全体にみられ刃部は主要剥離面と組み合わせている。刃部は横位に近い斜位であり先端部は欠損している。石材は玉髄である。3は主要剥離面が縦長であるフレイクで、下縁に若干のブランディングがみられる。原石の自然面が多くみられるもので石材は黒曜石である。4は

一次剥片を加工したもので縁を刃部に利用したスクレイパーと思われる。石材は黒曜石である。5は両面加工されたものでグレイバーの要素をもつ石器である。石材は黒曜石である。8は自然面が残ったフレイクで、上半分が欠損している。剥離面は少なく主要剥離面がみられる。下縁には使用によったと思われる剥離痕がみられる。石材は黒曜石である。9は自然面を残した剥片で、斜方に剥がれたものである。この剥片を剥ぐ段階の前に2面の剥離面がみられる。使用痕は確認できない。石材は黒曜石である。

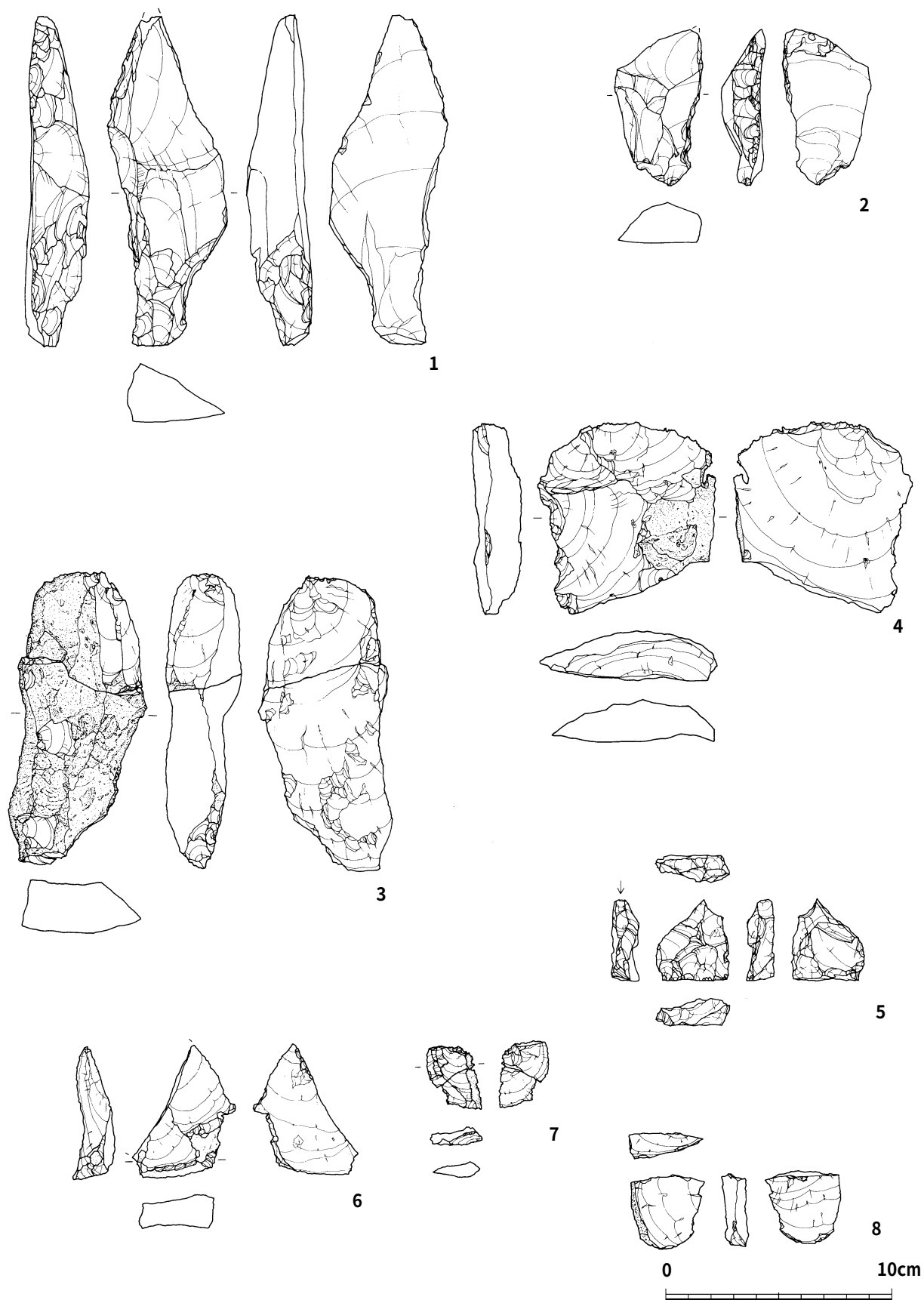
6・7・10はC-12, D-10区のⅧ層に出土した一群のものである。6は自然面が残ったフレイクである。主要剥離面の上位に使用による剥離痕がみられる。石材は黒曜石である。7は小さめの自然面が残るフレイクである。二つに割れた状態である。石材は黒曜石である。10は厚みもち先端を剥離調整したドリルと思われる。石材は黒曜石である。

以上が旧石器時代の包含層から出土した遺物である。

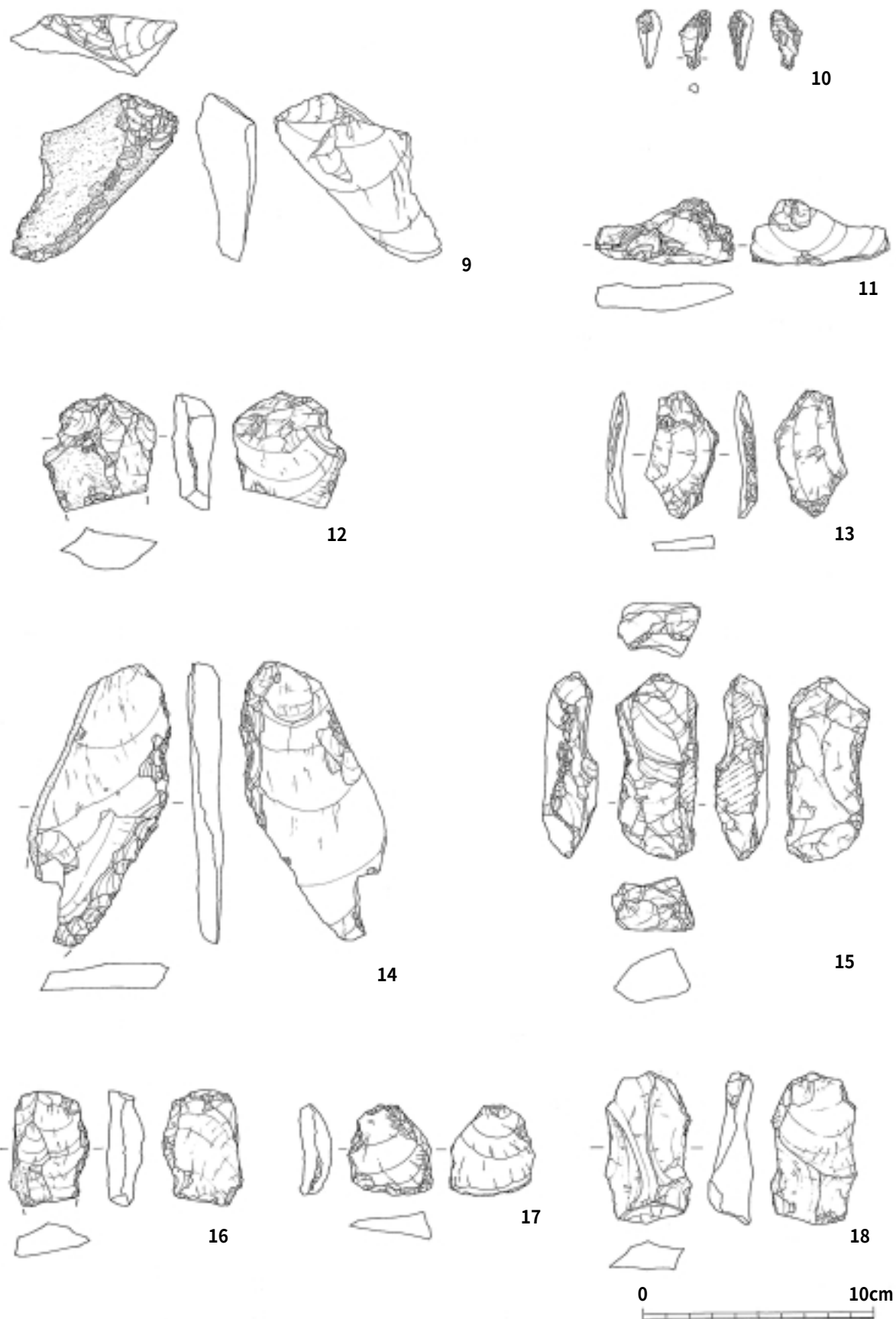
なお、C-7区から出土した遺物は小フレイクやチップのため搭載しなかった。

11～18は表面採集、I・II層の出土遺物である。形態や調整痕で旧石器時代の層から遺物がなんらかの作用で上がってきたと考えられる。

11は横剥ぎのフレイクである。断面が三角形を示しているが背面調整はみられない。石材は黒曜石である。12は剥離面に自然面が残る縦長剥片で、半分欠損したスクレイパーである。刃部は両縁と思われる。石材は玉髄である。13は横剥ぎのフレイクを背面調整した石器である。用途はスクレイパー的であるが形としてはナイフ形石器である。石材は黒曜石である。14は縦長剥片を利用したスクレイパーである。刃部は片方の縁をブランディングして作っている。石材は頁岩である。15は厚い剥片の両縁を加工したものである。用途はスクレイパー的なものが考えられる。石材は玉髄である。16は厚手自然面が残る剥片を加工したもので、スクレイパー的用途が考えられる。石材は玉髄である。17は薄手の第一次剥片を利用したスクレイパーと思われる。石材は玉髄である。18は使用痕のある剥片である。石材は玉髄である。



第11図 旧石器時代の出土遺物 (1)



第12図 旧石器時代の出土遺物 (2)

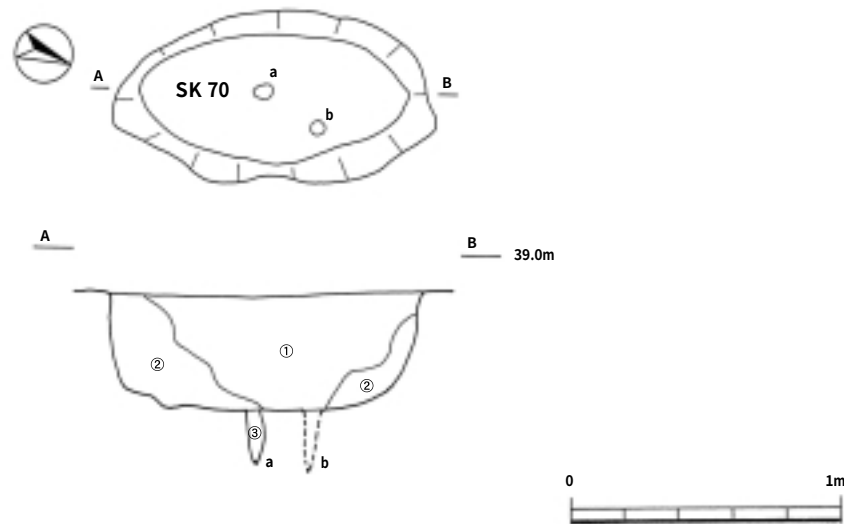
2 縄文時代

(1) 遺構

遺構はE-4区のV層上面に楕円形の土坑が検出した。規模は長径1m15cm短径65cm深さ48cmで、半裁した結果、径5cm深さ20cmの円錐形をした逆茂木用と考えられる細穴が2穴確認された。よって、この遺構は落とし穴の遺構と考えられる。

遺構内の埋土②は埋まる最初の埋土はにぶい褐色シルトが流れ込んだ状態で、その後、埋土①の明褐色シルト層が埋まってきている。明褐色シルト層はアカホヤ火山灰に比定されるもので、軽石も含まれている。逆茂木穴③は褐色シルト層でしまりがよい。

現在の深さは浅いが、アカホヤ層堆積後の生活面と考ええると、まだ深さがあると考えられる。床面は平坦に作られ凹凸が少なく、壁の立ち上がりも床面に対して直に立ち上がり、全体に丁寧につくられた土坑である。遺物の出土はなかった。



第13図 縄文時代の土坑（落とし穴）

(2) 出土遺物

土器（第14図19～39）

19～28は早期の土器である。19は円筒形の土器で器面に貝殻条痕を横位に施し、口縁部には貝殻刺突がみられる。内面はへら搔き調整である。20は外反する口縁部で断面が鋭角を呈する。外面の文様は短い貝殻条痕を鋸歯状に施している。21・22は円筒土器の底部近くの部分である。外面はへら搔き上げを縦位に施している。23は平底の底部である。外面の文様は短い貝殻条痕を組み合わせしている。24～27は外開きする厚手で胴部の器面に山形押型文を横位・斜位に施している。

29～35は中期の土器である。29は口唇部の平坦面に刻みを施した薄手の直行する口縁部である。30～33は直行する器形で太い凹線文の文様を施している薄手の土器である。内面はへら搔き撫でで横位・斜位に施している。文様は30・31にみられるように直線のみ部分や32・33にみられるように直線を基本に組み合わせた三角形がある。34は凹線文を渦巻き状に施し、口縁部は蒲鉾状の突起がみられ、口唇部に竹管文の刺突がみられる。35は薄手の土器で突帯の上下に刺突を横位に施して

いる。胎土は 29～33・35 は滑石が少々混ざり、焼成は硬質である。34 の胎土は滑石がなく焼成も柔い。

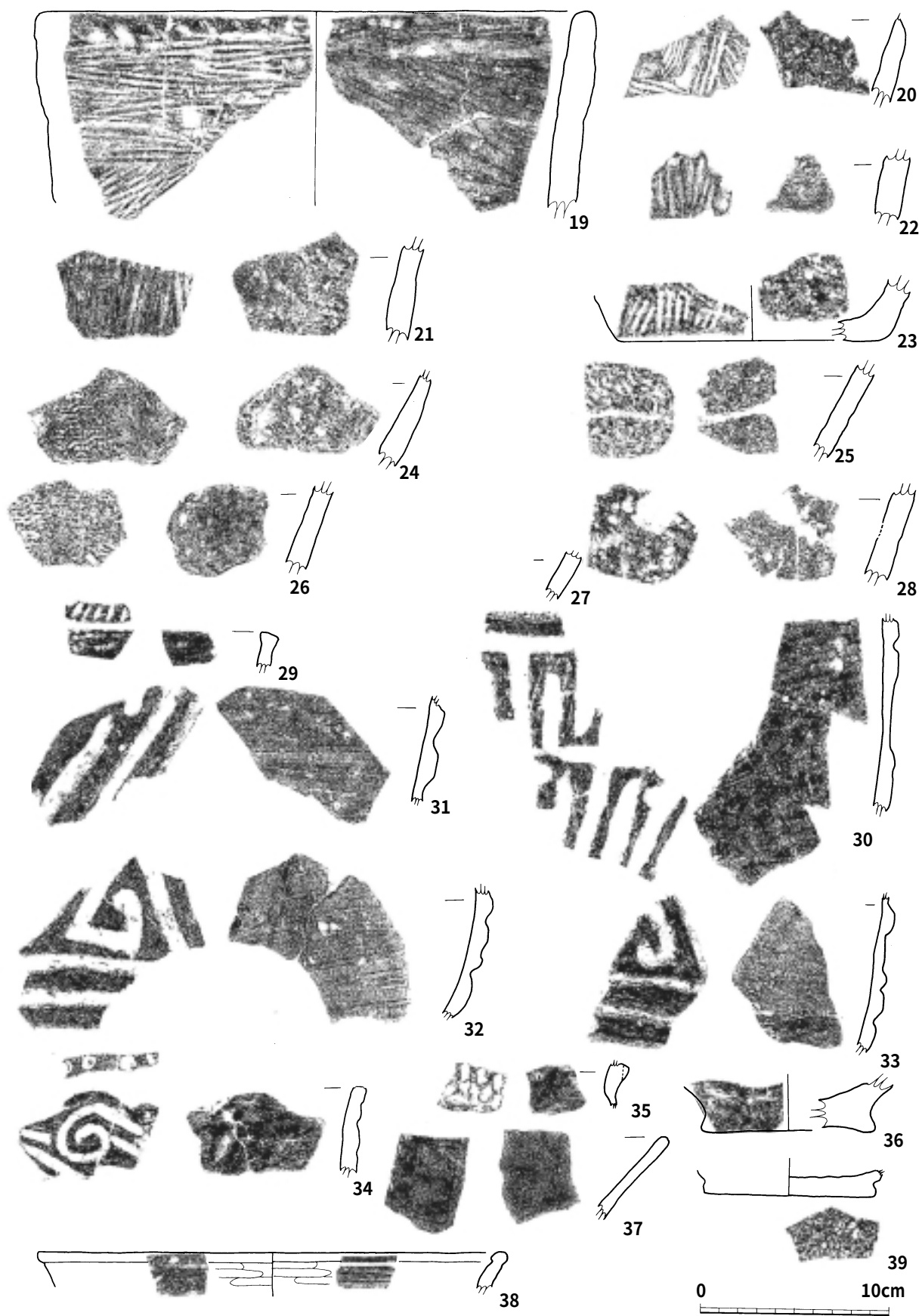
36～39 は晩期の土器である。36 は深鉢の底部である。器形は平底で張り出しがみられるものである。37 は浅鉢で、直線的に外開する口縁部の黒色研磨土器である。38 は浅鉢で、口縁部の内外面に段差がみられる玉縁を呈するものである。器面は黒色研磨が施されている。39 は浅鉢の底部である。内面は少し剥落しているが黒色研磨土器である。

石器（第 15～19 図 40～76）

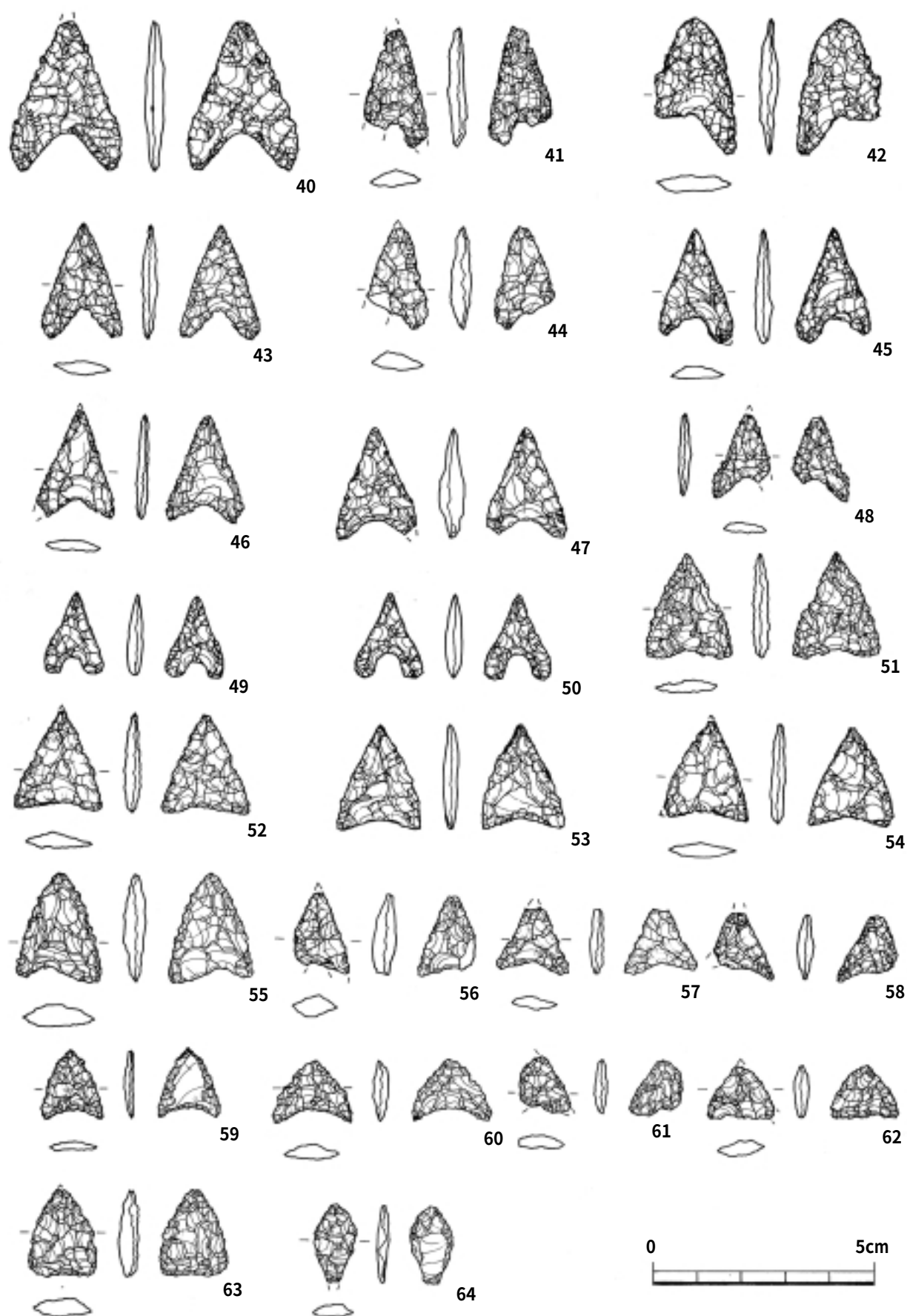
40～64 は石鏃である。40 は溝 2 から出土し、大型の 2 等辺三角形で抉りが深いタイプである。石材は黒曜石である。41 は畠内から出土し、抉りの深い長目の二等辺三角形タイプである。石材は黒曜石である。42 は V 層から出土し、深い抉りを持つもので幅広タイプである。石材は黒曜石である。43 は溝 3 から出土し、抉りの深い長めの二等辺三角形タイプである。石材は黒曜石である。44 は柱穴から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。45 は 4 T III 層から出土し、抉りの深い前タイプと同じである。石材は黒曜石である。46 は D-10 区 III 層から出土し、前タイプと同じである。石材は頁岩である。47 は方形竪穴 1 から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。48 は D-5 区 III 層から出土し、抉りの深い二段脚タイプである。石材は黒曜石である。50 は G-17 区 III 層から出土し、抉りの深い二段脚タイプである。石材は玉髄である。51 は D-8 区 II 層から出土し、抉りの浅い正三角形タイプである。石材は黒曜石である。52 は F-4 区 III a 層から出土したもので、抉りの浅い正三角形タイプである。石材は頁岩である。53 は F-18 区 II 層から出土し、前タイプと同じである。石材は頁岩である。54 は溝 3-I 層から出土し、前タイプと同じである。石材は玉髄である。55 は E-6 区 I 層に出土し、丸みを持つ抉りの浅いタイプである。石材は頁岩である。56 は C-11 区 V 層から出土し、前タイプと同じである。石材は玉髄である。57 は F-7 区 I a 層から出土し、前タイプと同じである。石材は頁岩である。58 は G-16 区 II 層から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。59 は C-9 区 II 層から出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。60 は 5 T-II b 層から出土し、抉りの浅い幅広三角形タイプである。石材は頁岩である。61 は E-7 区 I b 層から出土し、抉りの浅い幅広三角形タイプである。石材は黒曜石である。62 は E-4 区 V 層に出土し、前タイプと同じである。石材は黒曜石である。63 は D-3 区 I b 層から出土し、抉りの浅い丸みを持つタイプである。石材は黒曜石である。64 は E-8 区 I b 層から出土し、木の葉状を呈する。石材は黒曜石である。

65～67 はスクレイパーの類である。65 は C-7 区 I b 層から出土した横形の両面剥離調整をした石匙と思われる。石材は頁岩である。66 は E-8 区 V 層から出土したもので親指状に調整したものである。石材は黒曜石である。67 は F-9 区 VII 層に出土したもので、縦長剥片に片歯調整をしたものである。石材は頁岩である。これらは旧石器時代の可能性もある。

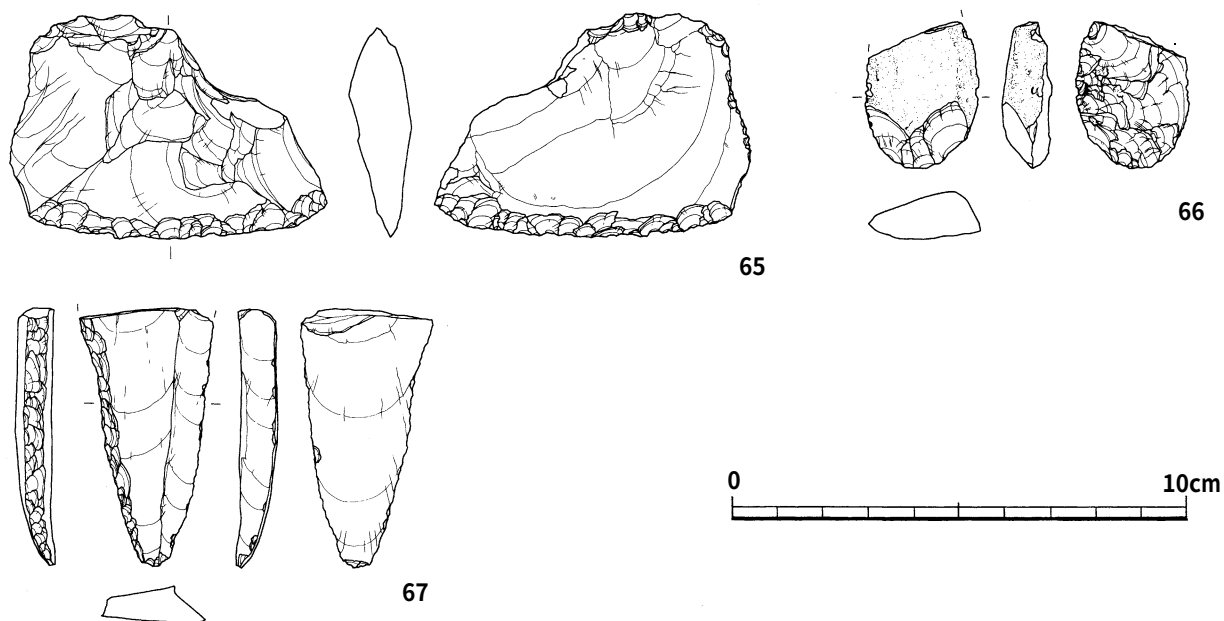
68～71 は石斧類である。68 は D-6 区 II 層に出土したもので、全面を両面から磨いた磨製石斧である。石材は金雲母が混入したホルンフェルス(花崗岩質)である。69 は山部の表採で、磨製石斧の刃部である。石材は頁岩である。70 は山部 6 T から出土したもので、自然面を利用した打製石斧である。石材は頁岩である。71 は B-6 区 II 層に出土したもので、自然面を利用した打製石斧である。石材は安山岩である。



第14図 縄文時代の出土遺物(1) 土器



第15図 縄文時代の出土遺物(2) 石器1



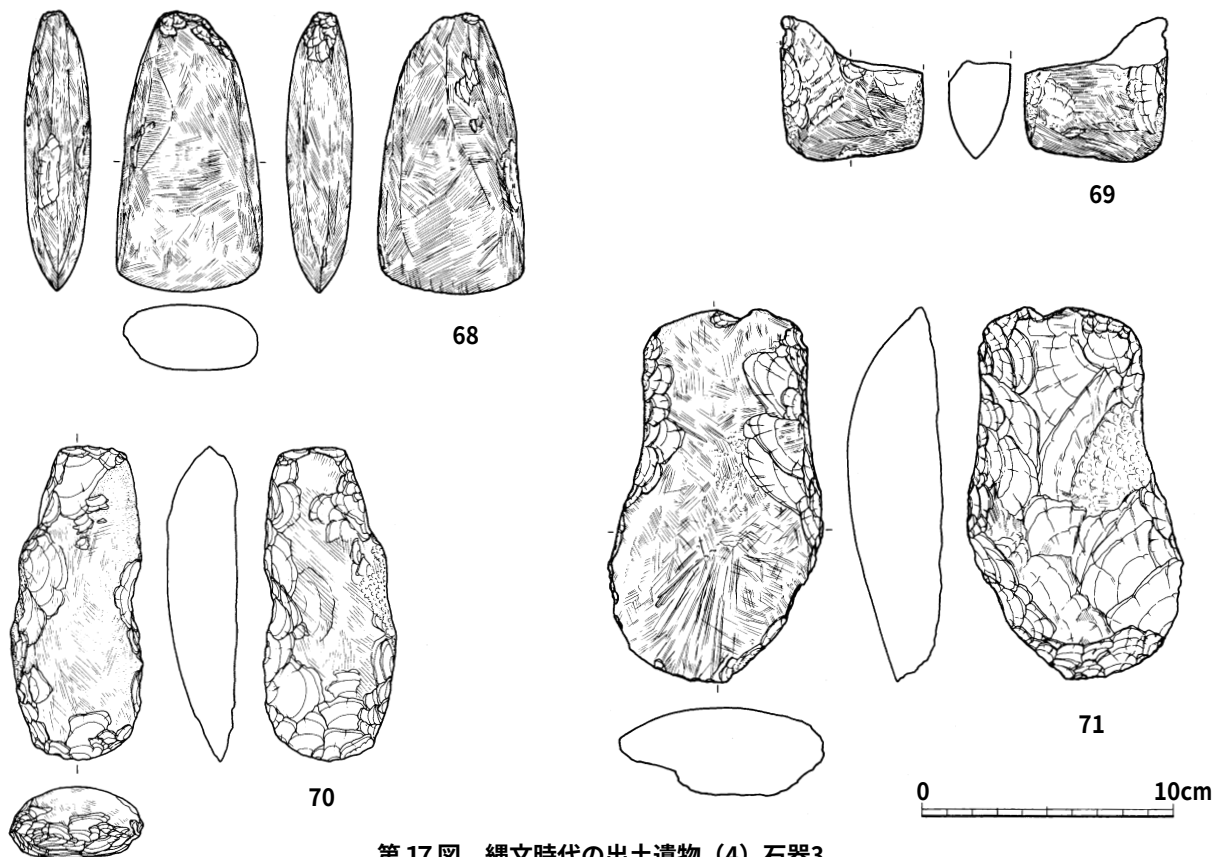
第16図 縄文時代の出土遺物 (3) 石器2

72～75は磨石・凹石・敲石である。

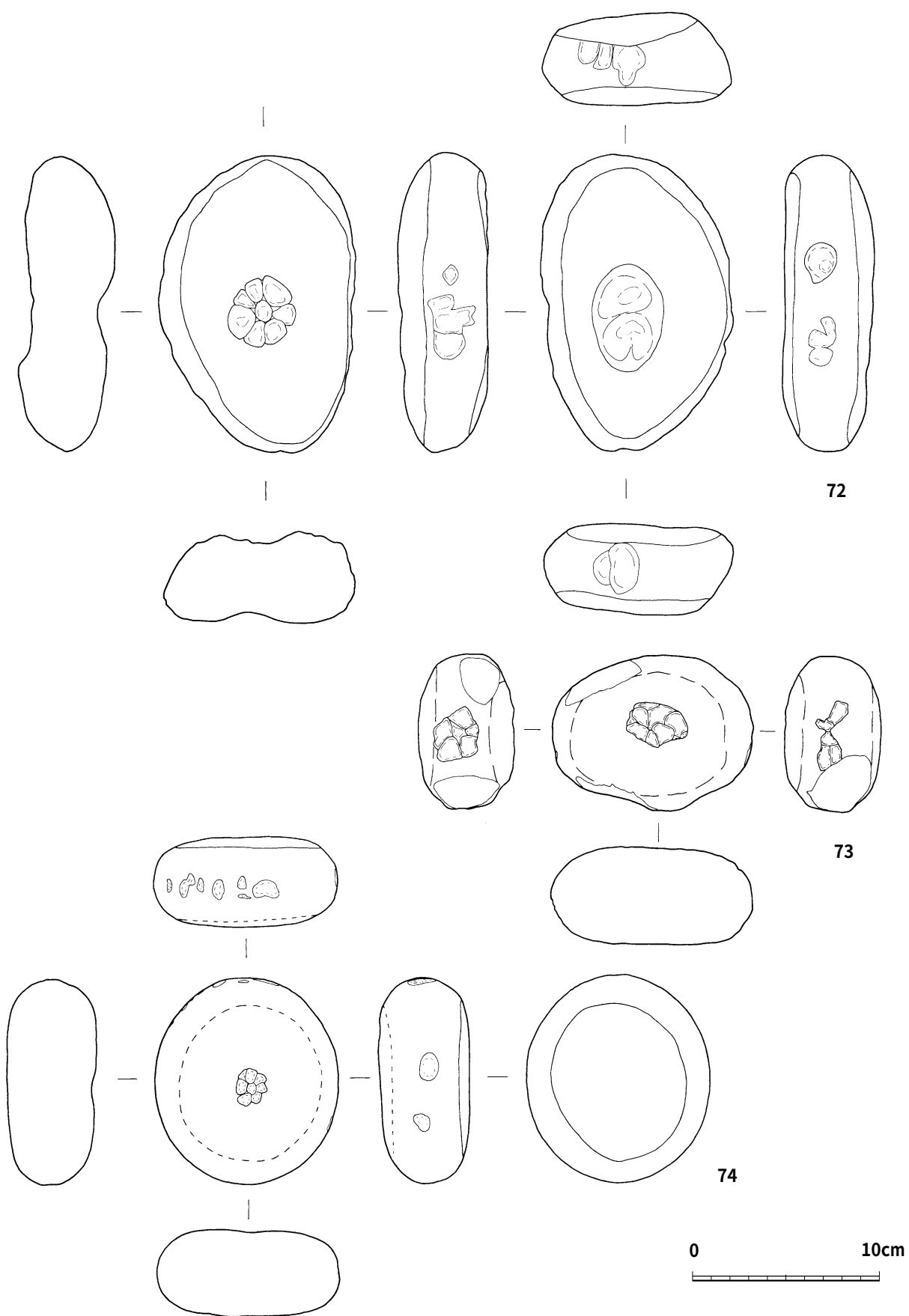
72～74は凹石と敲石使用である。石材は72・73が安山岩 74が砂岩である。石材の粒子は72が粗く他は細かい。

76～78は片面を使用された石皿である。石材は76が安山岩, 77・78が頁岩である。

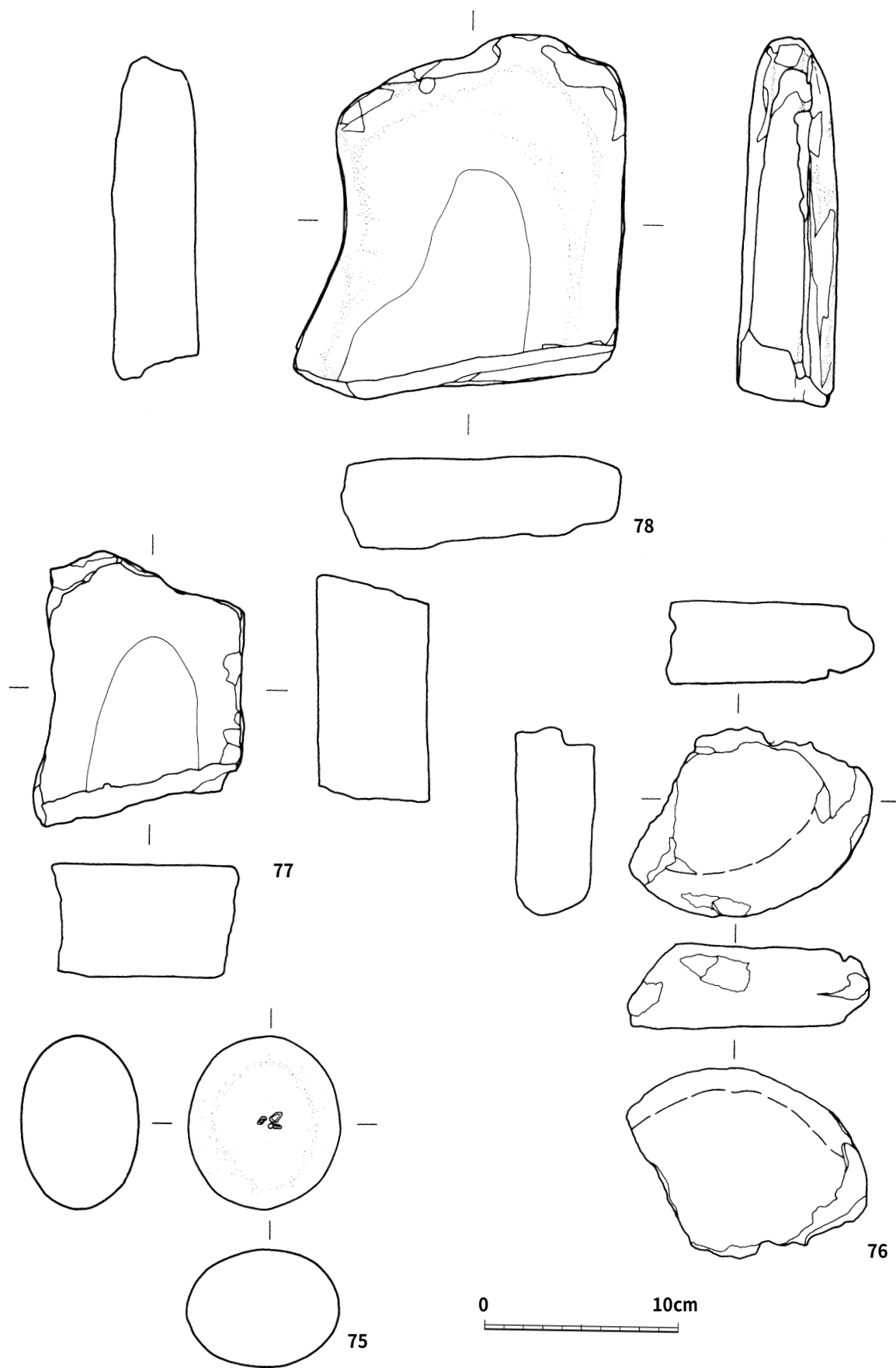
76は火を受けたようにボロボロと割れる 他は半欠である



第17図 縄文時代の出土遺物 (4) 石器3



第18図 縄文時代の出土遺物(5) 石器4



第19図 縄文時代の出土遺物(6) 石器5

3 古墳時代

(1) 遺構 (第20図 古墳時代・古代土坑1～25)

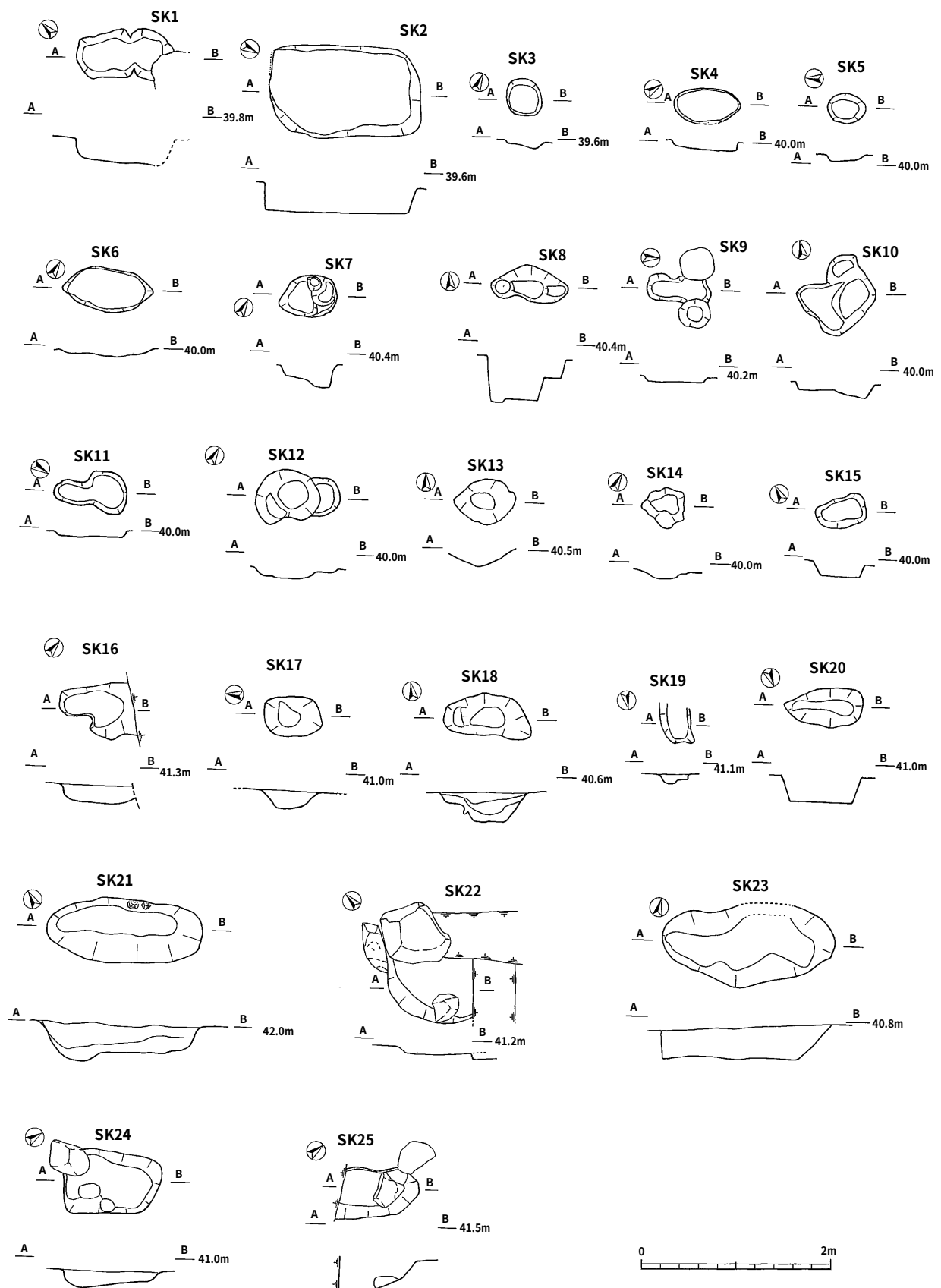
この時代の遺構と次の古代の遺構は検出状況の判断では中世の遺物が混入しているものの埋土と違いⅢ層上面の埋土がみられるものである。形状は円形、楕円形、方形のほか変則形のものが25基検出されている。これらの土坑は規則性やまとまりが見あたらない。

第2表 古墳時代・古代の土坑

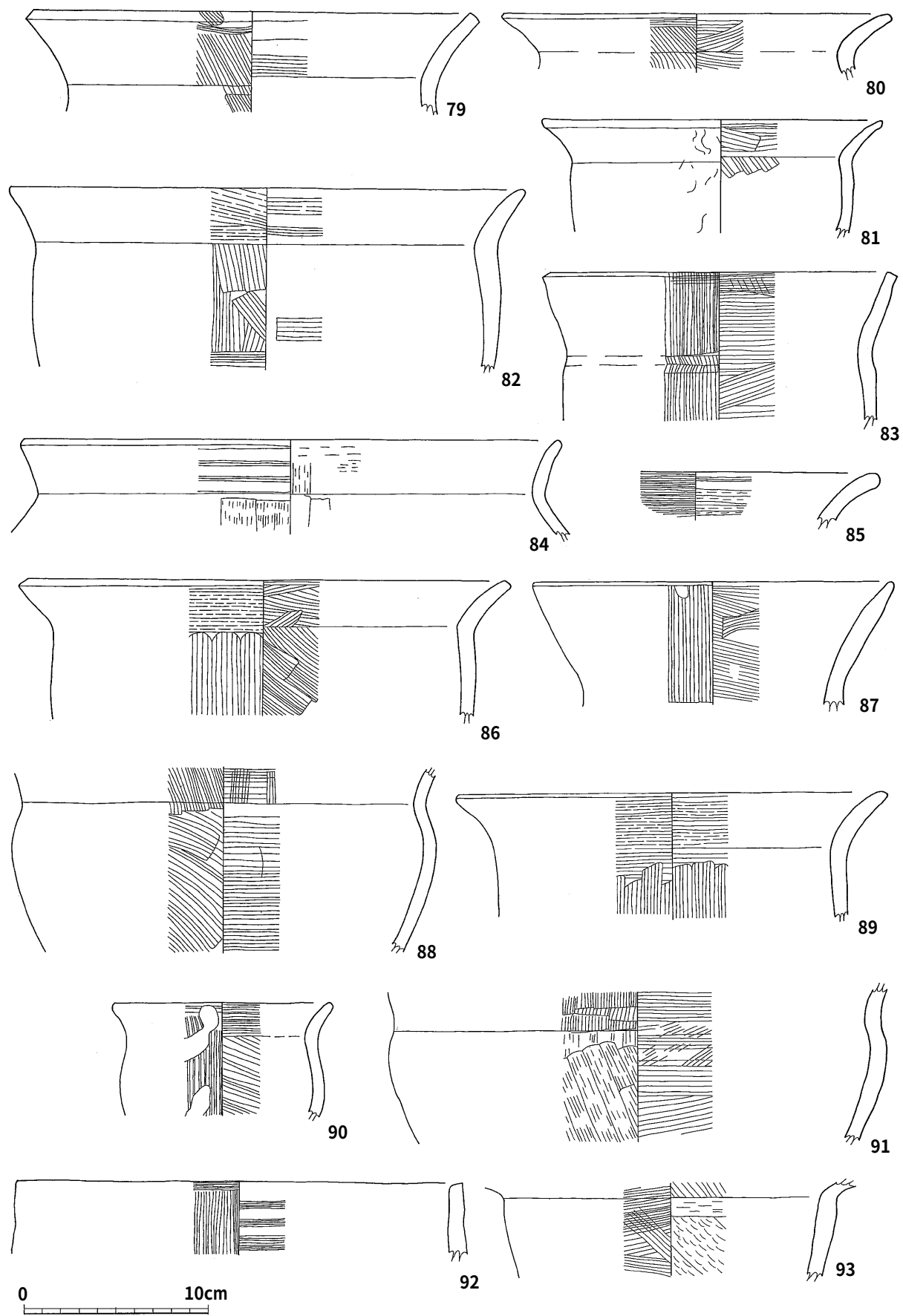
No.	検出区	検出番号	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	深 さ (cm)	形態	規模・特徴
1	D-2	P453/455	108	50	20	長方形	小が2連結
2	D-2	Sk51	158	98	30	長方形	大
3	E-4	P132	40	35	8	長方形	小
4	E-7	P298	70	60	10	楕円形	小
5	E-8	P477	40	30	10	円形	小
6	E-7	P306	95	45	8	楕円形	小
7	C-6	P852	60	45	35	円形	小
8	C-5	P660～662	80	35	50	変則楕円形	小が3連結
9	C-6	P353	65	30	6	長方形	小が2連結
10	D-7	P1576	88	80	15	変則方形	中が3連結
11	D-6	P1561/1562	75	40	7	円形	小が2連結
12	D-6	P1152/1153	88	60	10	円形	小が3連結
13	E-9	P510	65	50	15	円形	小で尖り底
14	E-8	P449	43	43	7	変則円形	小
15	C-9	P968	55	30	12	長方形	小
16	C-14	Sk16	78 α	55	20	変則長方形	小
17	D-11	Sk32	60	40	16	変則長方形	小
18	C-11	Sk21	90	40	30	変則長方形	小
19	D-13	P10	40 α	30	8	長方形	小
20	D-12	Sk30	75	30	25	変則楕円形	小
21	D-11	Sk22	168	67	40	楕円形	大, 底に窪み有
22	C-14	Sk15	88 α	70 α	8	円形	溝で切られる
23	D-12	Sk36	180	85	40	楕円形	大
24	D-19	Sk17	105	67	18	長方形	中, 石有り
25	C-13	Sk2	70 α	50	30	楕円形	小, 石有り

(2) 出土遺物 (第21～25図 79～144)

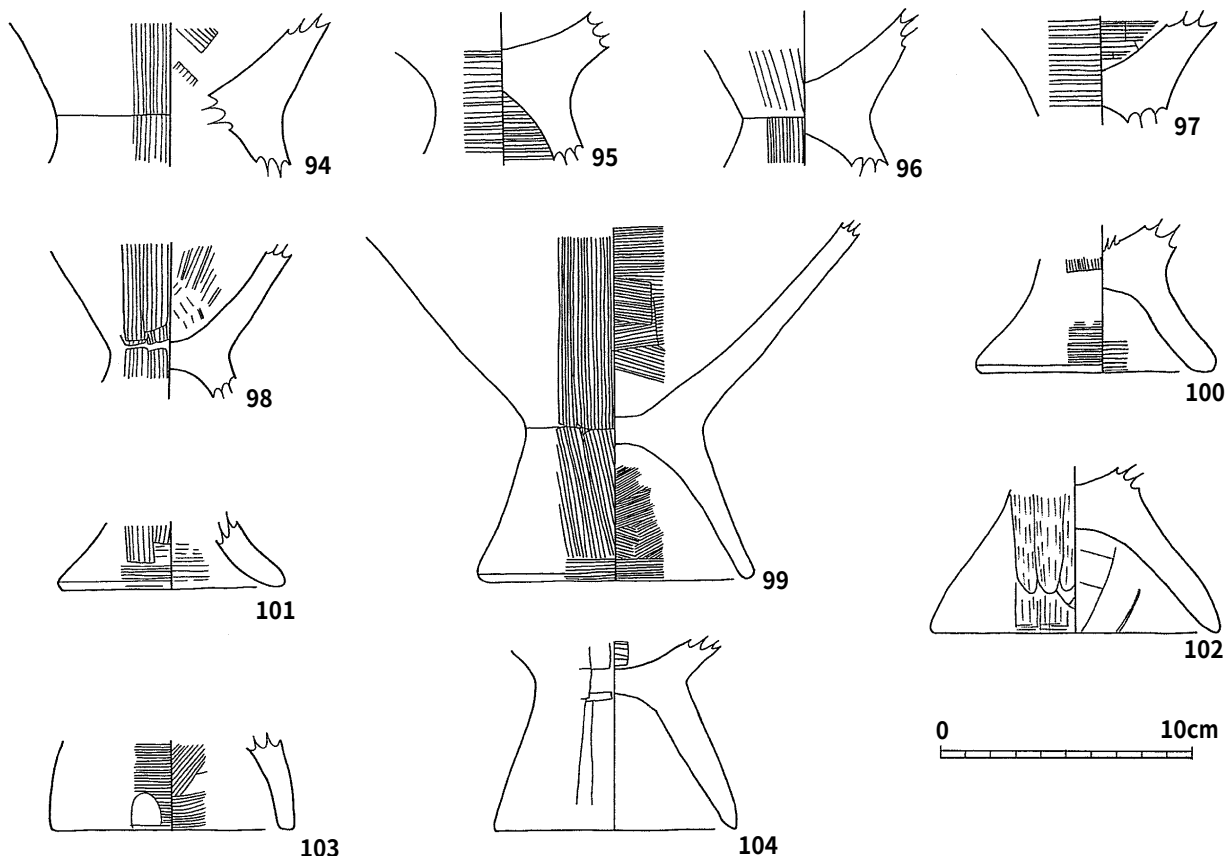
ア 甕形土器 (第21・22図 79～104)



第20図 古墳時代・古代の土坑

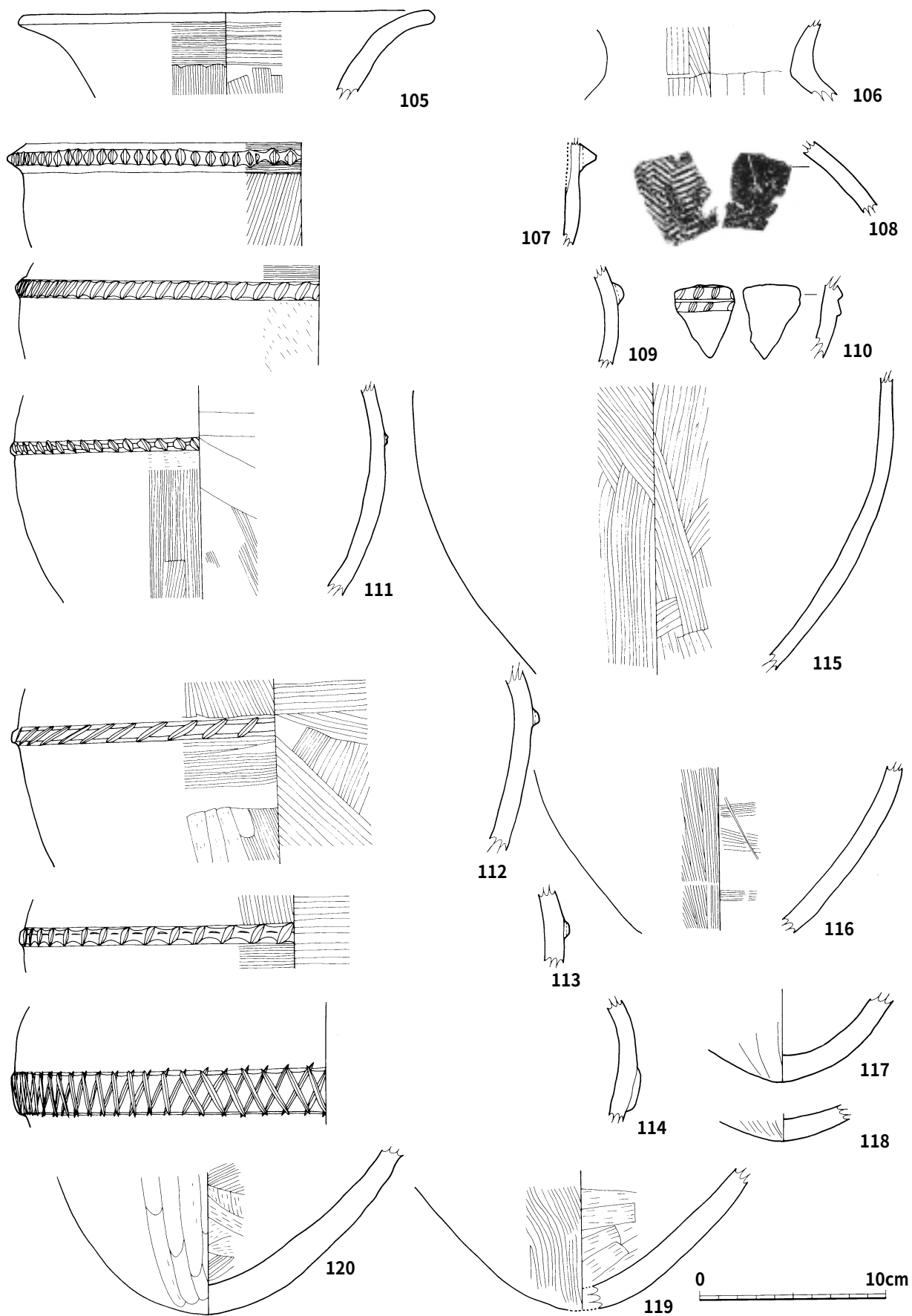


第 21 図 古墳時代の出土遺物 (1) 甕 1

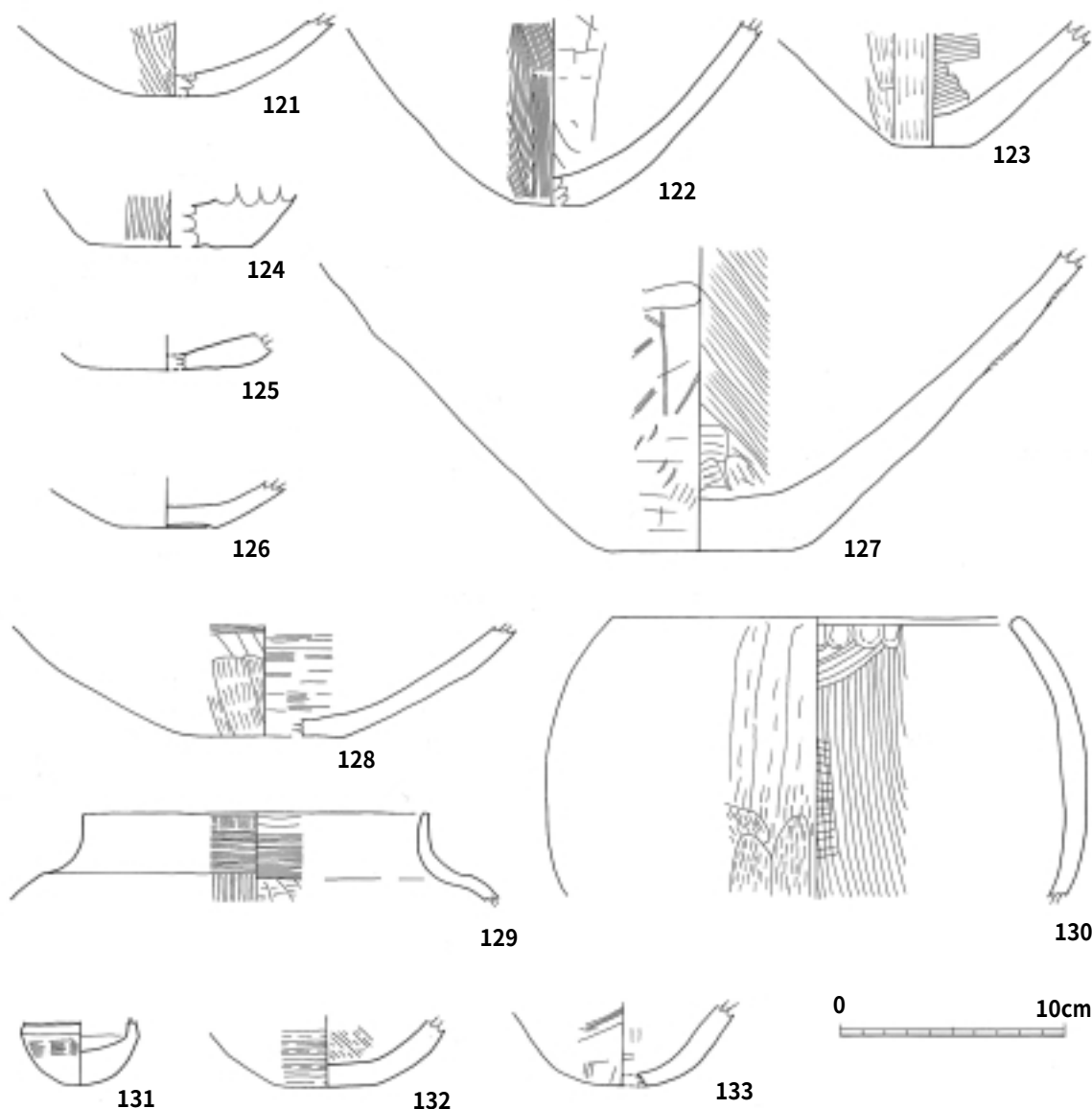


第22図 古墳時代の出土遺物(2) 甕2

79 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。80 は頸部で「く」の字状に大きく外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。81 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。内器面は刷毛目調整を短く斜位に施している。外面は手撫で気味である。82 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部をもち胴部は若干張る器形である。器面は刷毛目調整を斜位に施している。83 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と横位に施している。84 は頸部で「く」の字状に大きく外反する口縁部で、肩部は大きく張る器形である。器面は刷毛目調整を横位と縦位に施している。85 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を横位に施している。86 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部で、胴部は若干張る器形である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。87 は頸部で「く」の字状に外反する長めの口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。なお、頸部の折れ線部は明瞭でない。88 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部からやや膨らみを持つ胴部である。器面は刷毛目調整を斜位と横位に施している。なお、口唇部は欠損している。89 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位に施している。なお、頸部の折れ線は明瞭でない。90 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部である。器面は刷毛目調整を縦位と斜位に施している。なお、頸部の折れ線は明瞭でない。91 は頸部で「く」の字状に外反する口縁部からやや張る胴部である。器面は刷毛目調整を斜位と横位に施している。92 は直行する口縁部で、縦位と横位に刷毛目調整を施している。93 は頸部で折れ、直行する胴部である。器面は刷毛目と搔き撫で調整である。



第 23 図 古墳時代の出土遺物 (3) 壺1



第24図 古墳時代の出土遺物(4) 壺2

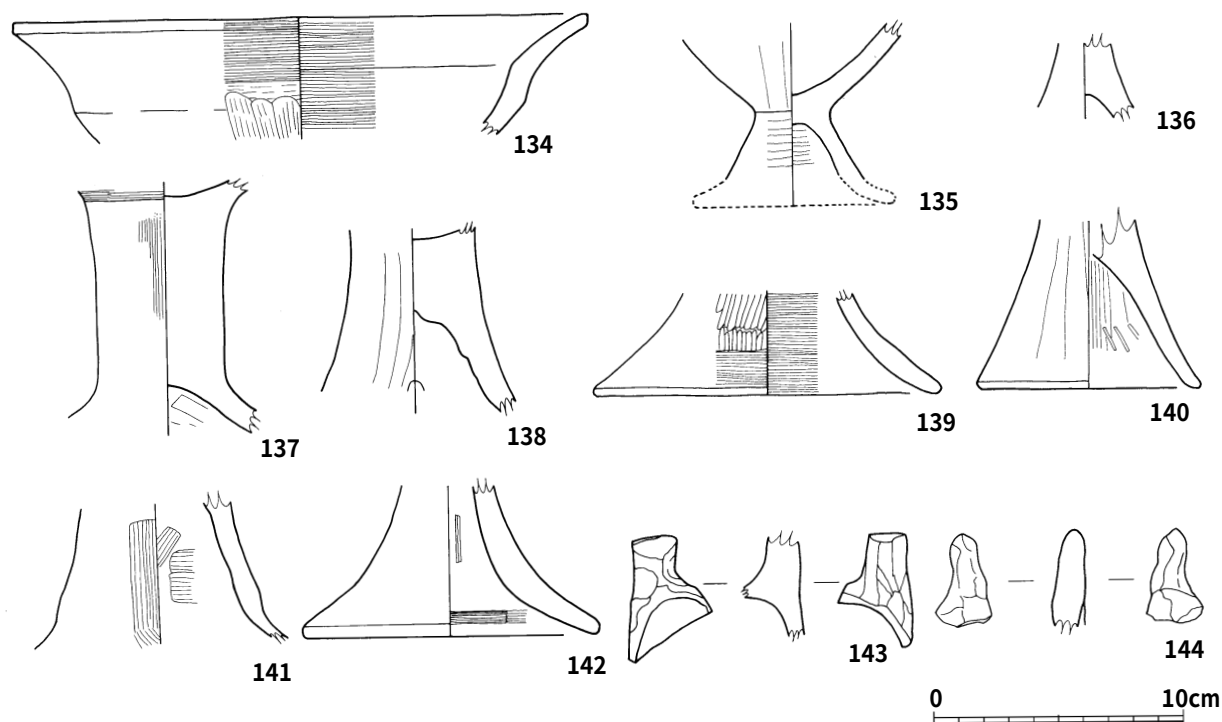
94～104 は脚部をもつ底部である。100・101 は外反し, 99・102・104 は直行し, 103 は内反する。器面は刷毛目調整である。

イ 壺形土器 (第23・24図 105～133)

105 は外反する口縁部で, 器面は刷毛目調整である。106 は直行する頸部で, 器面は刷毛目調整である。108 は鋸歯状の文様をもつ胴部である。傾きと文様からみれば長頸壺の可能性が高い。107・109～114 は肩部ないし胴部にある突帯部である。突帯の刻みは篋で縦位・斜位・格子状に施している。115・116 は胴部から底部で, 刷毛目調整がみられる。117～128 は底部である。117～120 は尖り気味の丸底で, 121・122 は平底気味の丸底, 123～128 は平底である。なお, 器面調整は刷毛目である。129 は口縁部が直行する肩部の張る薄手のものである。器面調整は刷毛目である。130 は無頸壺とおもわれる。器面調整は刷毛目と篋削りと指つかみ調整である。131～133 は埴の類である。

ウ 高坏・手づくね製品 (第25図 134～144)

134 は段を持ちながら外反する坏部である。器面調整は刷毛目である。135 は脚の低いもので



第 25 図 古墳時代の出土遺物 (5) 高坏・手づくね

坏の開きが狭く深い器形をしている。136 は小型のものである。137 は脚に筒部をもつもので、脚は大きく外開きする。138 は短い筒部をもつものである。139 は大きく開いた脚部である。器面調整は外面が研磨で内面が刷毛目である。140 は狭く開いた脚部である。141 は広幅の脚部である。142 は大きく開いた脚部で、内面に刷毛目がみられる。143・144 は匙の手づくねの一部である。

4 古代

(1) 遺構

遺構は第 20 図の古墳時代と区別ができなかった。

(2) 遺物 (第 26～28 図 145～196)

ア 甕形土器 (第 26 図 145～161)

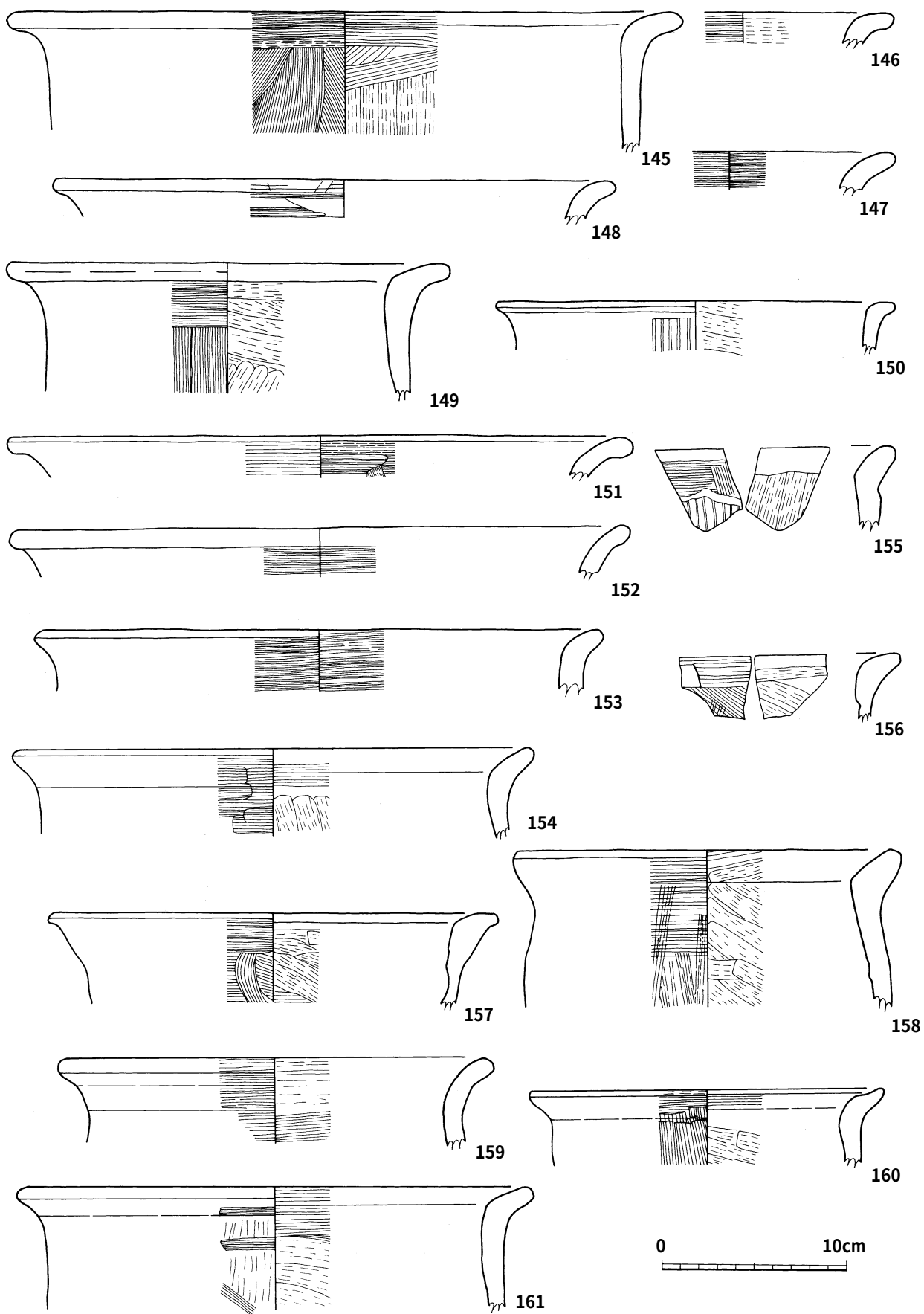
器形は口縁部が「L」字状になるものと、「く」字状になるものと、「C」字状になるものとに分けられる。器面調整は外面が刷毛目で、内面は篋削りである。

「L」字状のものは 145・146・149・150・153・156・157・160 である。「く」字状のものは 154・155・158・161 である。「C」字状のものは、147・148・151・152・159 である。

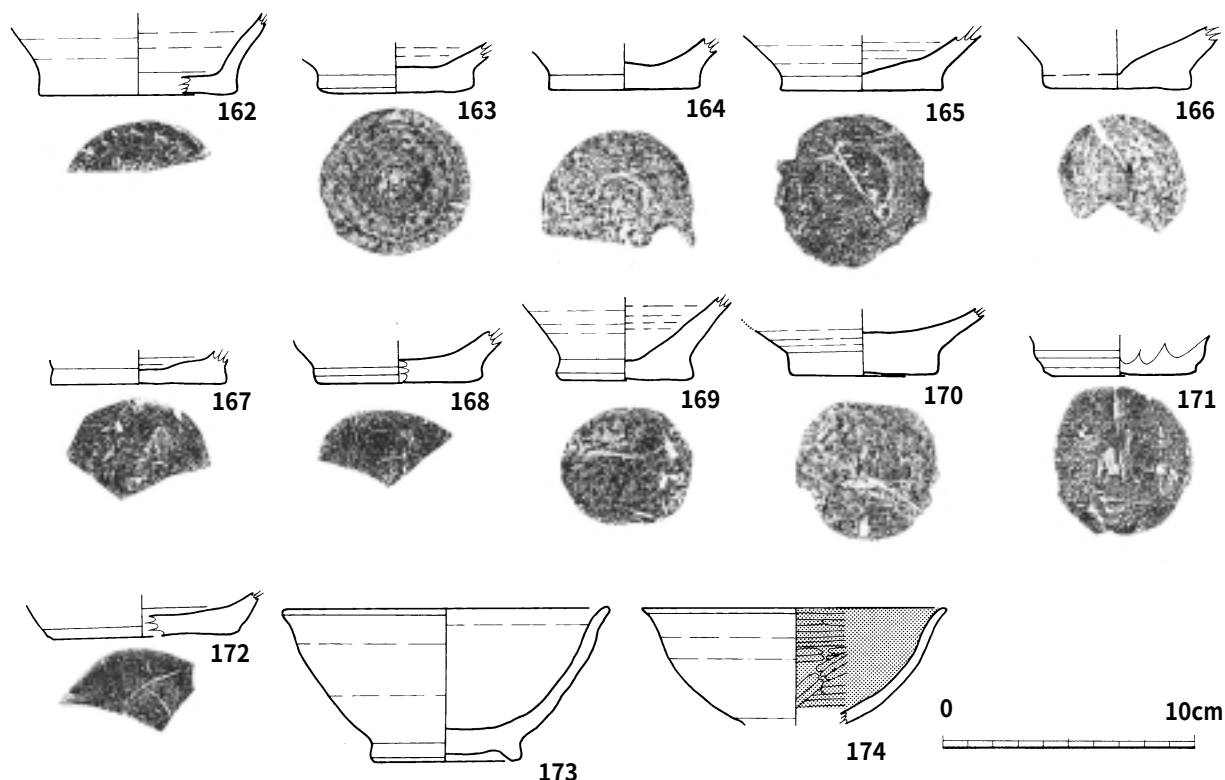
器面の外面調整は口縁部が横位で頸部は縦位が多い。

イ 坏 (第 27 図 162～172)

162 は薄手の底部で外反する器形である。底部の切り離しは篋である。163 は厚手の底部で外反する器形である。底部の切り離しは篋である。164 は厚手の底部で外反する器形である。見込みの中央部は盛り上がりが見られる。底部の切り離しは篋である。165・166 は厚手の底部で外反する器形である。見込みの中央部は薄くなっている。底部の切り離しは篋である。167・168 はやや厚手の底部で、底部の切り離しは篋である。169・170 は厚手の底部で、底部の切り離しは篋である。



第26図 古代の出土遺物(1) 甕



第 27 図 古代の出土遺物 (2) 坏・埴

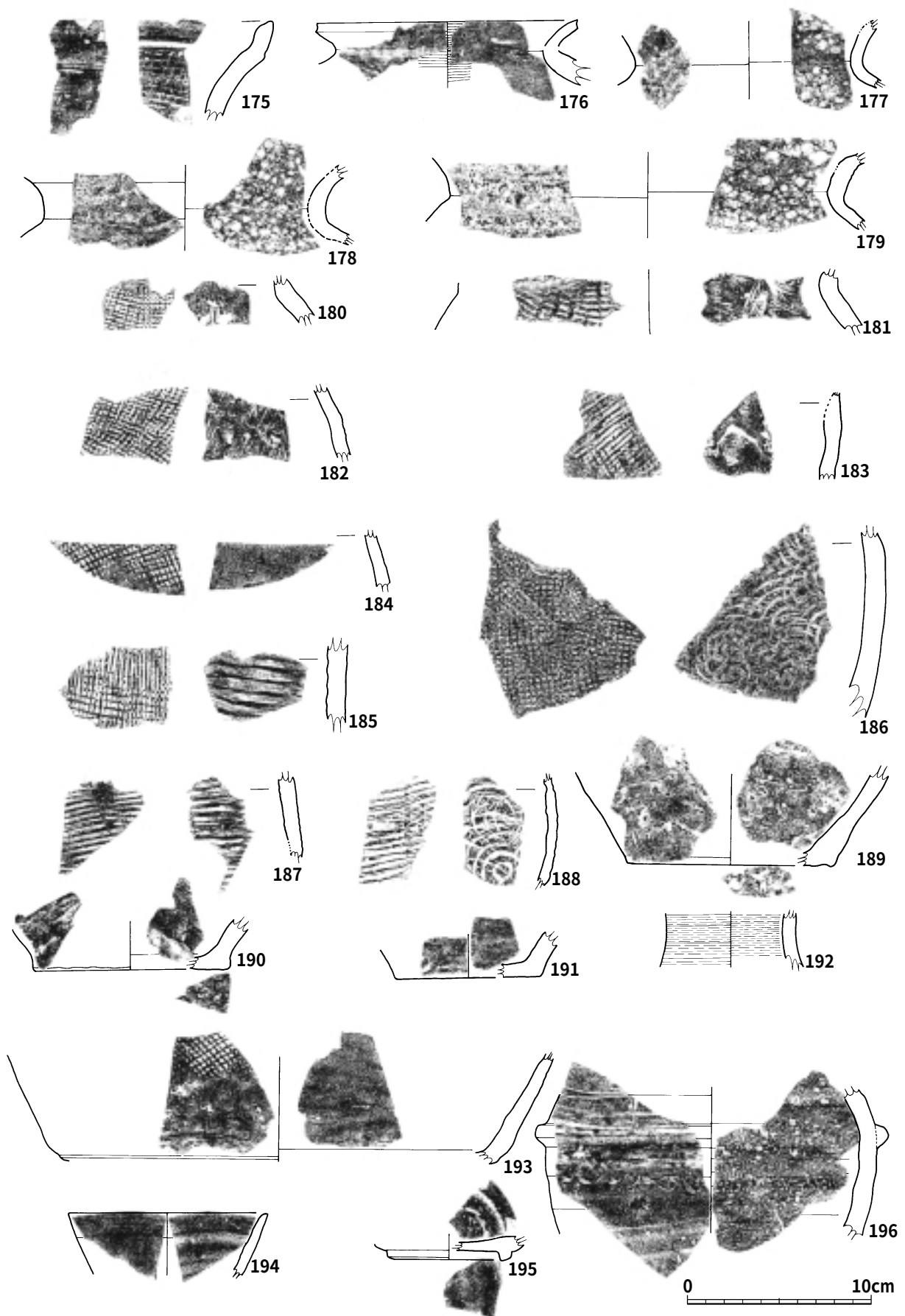
171・172 は底部の外縁が斜めに削られている。底部の切り離しは簞である。

ウ 碗 (第 27 図 173・174)

173 は口縁部が外反し、体部は丸みをもちながら湾曲している。底部の高台は低く若干外開き気味で幅が広い。174 は口縁部が外反し、体部は湾曲している。これは内黒土師器で黒色土器 A である。

エ 須恵器 (第 28 図 175～196)

175 は外反する甕の口縁部である。176・177・178・179 は「く」の字に外反する甕の短い口縁部である。180・181 は甕の頸部である。182～188 は甕の胴部で敲き目がみられる。189～191 は壺の底部である。192 は壺の頸部でロクロ調整痕がみられる。193 は盤の可能性がある。194 は直行する坏である。195 は埴の底部で低い幅広い高台が若干外開き気味にみられる。196 は肩部から胴部にかけての部位である。肩部に突帯がみられる。器形は蔵骨器に類似している。192 の頸部や 190 の底部は同一個体の可能性もある。



第28図 古代の出土遺物(3) 須恵器

5 中世

(1) 遺構

中世遺構は平坦部であるB～F－2～16区のⅢ層上面に検出した。

調査区は標高57mの山地より西側に広がる平坦地形で標高約40mである。調査の結果、山手側が一段低くなっており、北側が高く南側に向かってなだらかに低くなっている。また、B－2～6区より東側が約50cm一段高く直線状に造成されている。

遺構は全面に検出し、ピット・土坑・方形竪穴遺構・溝・畠跡・焼土等が1400以上にも及ぶ数であった。第29図はその全体図である。北側の崖より約10mから掘立柱建物跡がみられる。この北側の崖はシラス台地の端で崖下は湿地や水田となっているため崩壊がくり返していた可能性が高く、当時はまだ崖との距離があったと考えられる。

遺構は第29図で示したように、掘立柱建物跡32棟、方形竪穴遺構5基、溝7本、土壇墓と思われる土坑4基、炉跡と思われる土坑5基、廃棄用と思われる土坑145基、焼土20基、古道1条と多数のピットが確認された。

遺構の配置としては、C・D－5・6区に方形竪穴遺構がまとまり、それらを取り囲むようにC～F－4区、F－4～9区、B～D－7・8区と半円状にみられる。溝は溝4と溝5そして大溝である溝3がほぼ東西に掘られている。また、大溝である溝2が溝3の上から掘り返された形で東西と南北にL字状に掘られ、大溝である溝1が山裾に沿って南北に掘られている。そして、溝6がB－3・4区の段下にみられる。畠跡はC・D－9・10区に東西と南北に畝が検出されている。焼土はまばらに20か所確認されている。土壇墓と思われる群も焼土同様まばらに検出され、まとまりが無い。貯蔵穴と思われる土坑はD～F－3～6区とD・F－7・8区、B～D－2～7区、B～F－8・9区、B～D－11～14区の地区別位しか分けられない。古道は、B－3～6区の一段高い所にみられる。

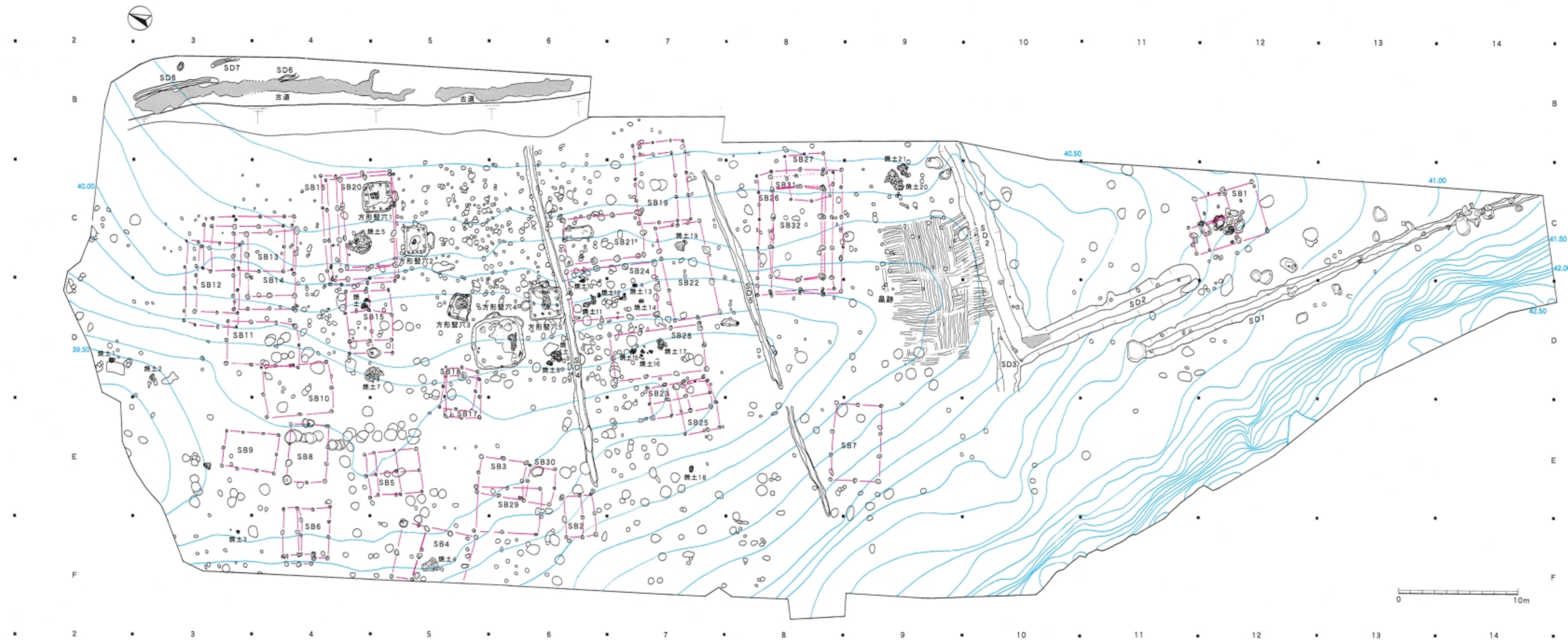
これらの遺構は切り合い状態で検出されている所がある。この切り合いで3時期に確認できる地区の遺構はC・D－3・4区の掘立柱建物跡12・13・14である。掘立柱建物跡14は梁2間と桁3間の上屋を東西方向に建て、北側と西側に半間の下屋を造っている。掘立柱建物跡13は梁2間と桁3間を南北方向に建て、東側と南・北側に下屋を造っている。掘立柱建物跡12は梁2間と桁3間を東西に建て北側と西側に下屋を造っている。掘立柱建物跡14と異なる点は下屋の角部の柱が半尺内側に建てていることである。

次にC・D－8区の掘立柱建物跡26と掘立柱建物跡31と掘立柱建物跡32の切り合いである。ここも、梁2間桁3間を東西に建てた柱穴が3重に検出されている3間の柱列があり3時期に確認できる。これらの掘立柱建物跡の下屋は掘立柱建物跡31が西側と南側に、掘立柱建物跡32が東側と南側に、掘立柱建物跡26が東西南北の四面に造られ、東側の角部の柱が半尺内側に建てている。

また、E・F－5・6区にある掘立柱建物跡3、掘立柱建物跡29、掘立柱建物跡30が3重に検出されている。

他、2時期重なっている掘立柱建物跡はC－4区にある掘立柱建物跡16と掘立柱建物跡20、D・E－7区の掘立柱建物跡23と掘立柱建物跡25である。

掘立柱建物跡の特徴は、上屋下屋があるものが掘立柱建物跡12・13・14・16・20・19・26・31・



第29図 中世遺構全体配置

32 で、総柱が掘立柱建物跡 15・5・23 で、下屋がない梁 2 間桁 3 間のものが掘立柱建物跡 11・9・8・24・28・21・22・7 で、梁桁 2 間のものが掘立柱建物跡 10・18・17・3・29・25・27 で、2 間の小規模で上屋と下屋がある掘立柱建物跡 6・4・2 である。

方形竪穴遺構は 5 基検出している。これらは自体の重なりは無いが、方形竪穴遺構 1 が掘立柱建物跡 16・20 と、方形竪穴遺構 5 が溝 4 と重なり合っている。

溝は大溝 3 本が 9～14 区に小溝 4 本が 6 区、8 区に 2 本、B－3～4 区に 2 本、計 7 本が検出されている。溝自体の重なりは、溝 2 と溝 3 である。溝 2 を再び掘り上げている。他の遺構との重なり合いは、溝 2 と畠跡、溝 4 と方形竪穴遺構 5、溝 5 と掘立柱建物跡 26 がある。

土坑は大きく分けて、焼土を伴う炉跡と、磁器や鉄器を伴う土壇墓と、食物残渣用に用いた廃棄用土坑の 3 類に分けられる。前 2 つの類はまばらにみられ、後の類は重なりや列に作られた所があるが、これらの作られた詳細は不明である。よって、ここでは説明を省き、傾向は土坑の項目で説明をするが、他の遺構との重なりとしては、掘立柱建物跡 1 と炉跡とみられる土坑Ⅱ類、掘立柱建物跡 11 と土坑Ⅰ類、掘立柱建物跡 8 と土坑Ⅰ類がみられる。

焼土は 20 基確認されている。他の遺構との重なり関係は、焼土 5 が掘立柱建物跡 16・20、焼土 6 が掘立柱建物跡 15、焼土 4 が掘立柱建物跡 4、焼土 10～14 が掘立柱建物跡 24、焼土 15～17 が掘立柱建物跡 28 となっている。

畠跡は C・D－9・10 区に南北の畝跡の後に東西の畝が検出されている。この遺構は溝 2 よりも上に検出されている。

古道は B－3～6 区の一段高い所に犬走りの部分として検出されている。

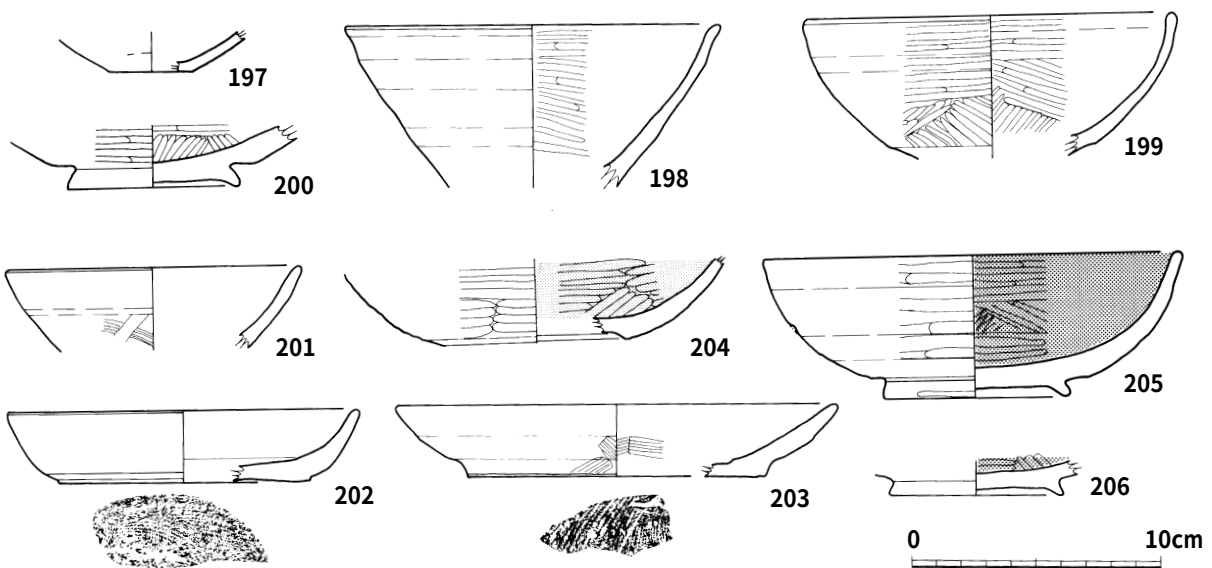
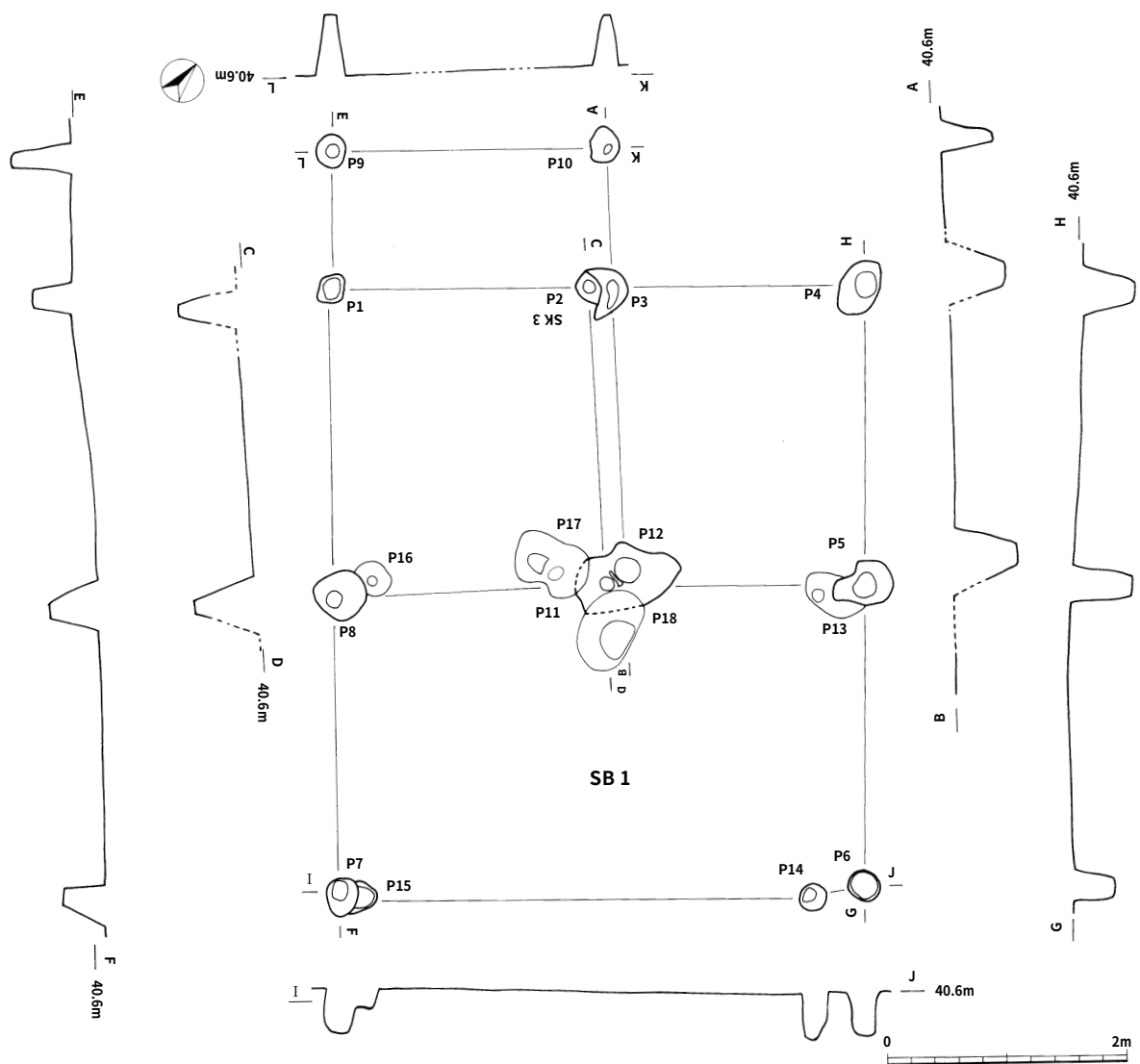
ア 掘立柱建物跡

① 掘立柱建物跡 1（SB 1）

掘立柱建物跡 1 は本調査区の南部 C－12 区に検出した梁・桁行 2 間の基本構造の建物跡である。南北の桁行には間柱跡があるが、梁間の南梁間は間柱跡が無く間口が広い。また、北側の梁間には半間の造りだしと考えられる柱穴がみられる。中央に炉跡と考えられる焼石列と土坑があり火を使う作業小屋が考えられる。なお、南側半分の柱穴 P 14・P 15 は建てかえたと考えられる 2 柱穴である。

第 3 表 掘立柱建物跡 1 の計測

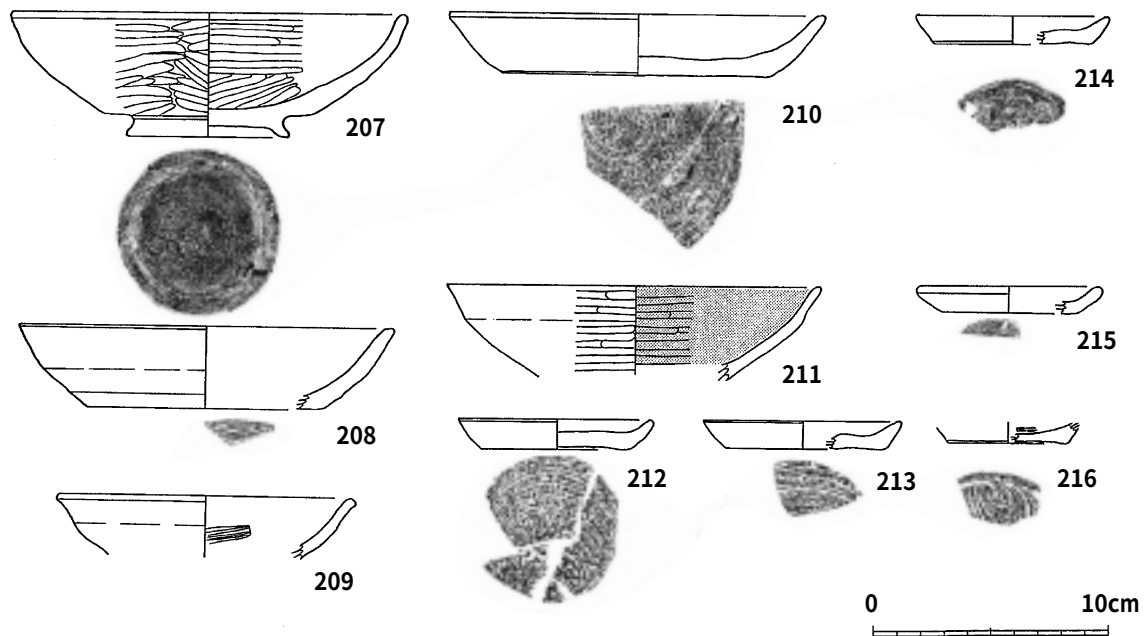
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 1	上屋 2 間	上屋 1 間	4.45 m	2.30 m	5.03 m	1.15 m	C-11・12	P 1. 23 × 22 × 32
	下屋 1 間	下屋 1 間	m	m	m	m	方位 W43°	2. 29 × 22 × 48
								3. 41 × 22 × 50
								4. 43 × 34 × 44
								5. 50 × 37 × 50
								6. 27 × 26 × 35
								7. 32 × 24 × 35
								8. 44 × 40 × 41
								9. 29 × 24 × 50
								10. 30 × 24 × 43
								11. 84 × 55 × 53
								12. 84 × 55 × 53



第30図 掘立柱建物跡1と出土遺物(1)

出土遺物（第30・31図 197～216）

197は白磁の皿である。198は土師器碗の体部・口縁部である。器形は深めのもので直線状に立ち上がっている。器面調整は見込みが横位の研磨で、外面は水挽き痕がみられる。199は半球状をした土師器碗で、内外面研磨が施されている。口縁部は横位で見込み中央は縦と横の研磨を組み合わせている。200は外側に広がった高台の低い土師器碗の底部である。見込み中央は縦と横の研磨を組み合わせている。201は土師器碗の体部・口縁部である。202は土師器の坏である。底部は糸切り離しであり、体部・口縁部は直に立ち上がっている。203は土師器の坏である。体部・口縁部は外反して立ち上がっている。204は内側が黒色で両面とも研磨を施し、いわゆる黒色土器Aである。205は内赤の土師器で半球状の器形で外に広がる低い高台をもつ碗である。見込み中央の研磨は縦と横の組み合わせで、口縁部は横位の研磨である。206は黒色土器Aの碗底部である。204と同類である。207は土師器碗である。器形は半球状で、低く広がる高台をもつ。両面研磨が強く、口縁部は横位、見込み中央部は縦と横の組み合わせで施している。208は坏である。平底から丸味をもって立ち上がる体部・口縁部をもつ。底部は糸切り離しである。209は体部・口縁部が外反する坏である。210は平底から丸味をもって立ち上がる体部・口縁部をもつ。211は黒色土器Aの碗である。器形は口縁部で直になるものである。両面とも横位の研磨がみられる。212は少し上げ底に底部から丸味をもって体部・口縁部へ立ち上がる皿である。213は平底に底部から直に体部・口縁部へ立ち上がる皿である。214・216は少し上げ底に底部から丸味をもって体部・口縁部へ立ち上がる皿である。底面は糸切り離しである。215は平底に底部から直に体部・口縁部へ立ち上がる皿である。口唇部は厚みがあり全体的に丸味がある。



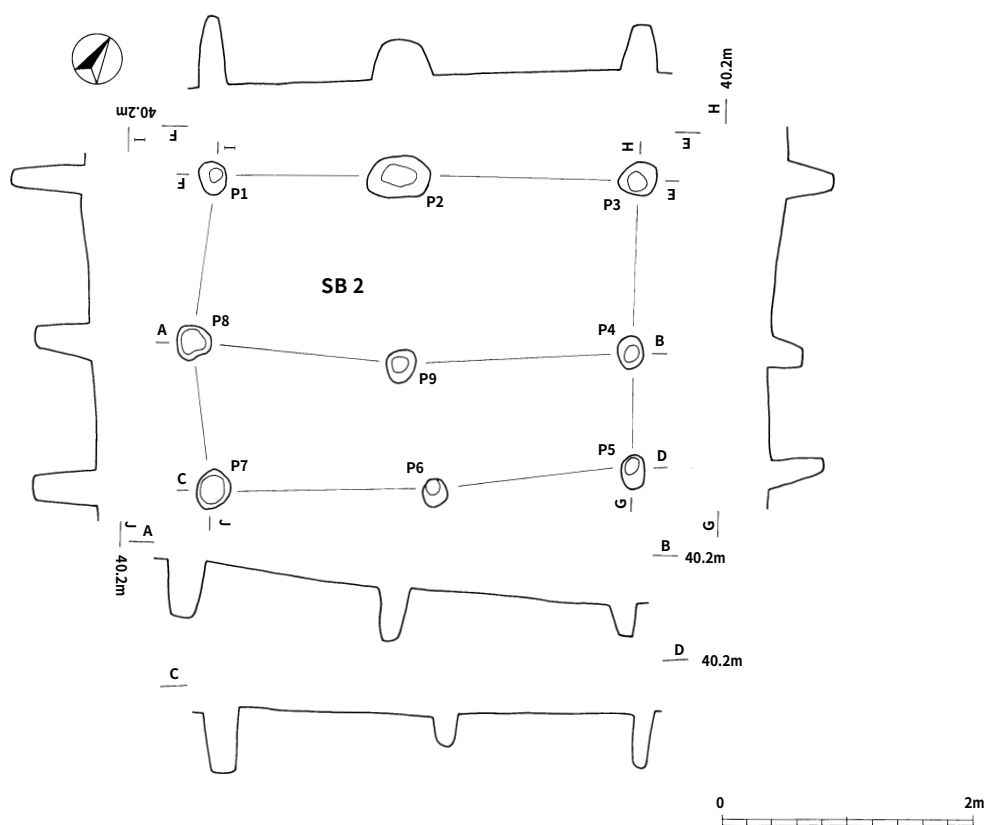
第31図 掘立柱建物跡1の出土遺物（2）

② 掘立柱建物跡2（SB2）

掘立柱建物跡2はE・F－6区に検出した。この建物跡は東西に長い梁2間、桁行2間で、間柱穴がみられ北側の部分が広い。また、南側の桁行よりも北側の桁行が長く、台形様変則的な建物跡であると考えられる。

第4表 掘立柱建物跡2の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 2	上屋 2 間	上屋 2 間	2. 50 m	m	3. 35 m	m	E・F-6	
			m	m	m	m	方位 E 56°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 8	1. 35 m	P	m	P 1 ～ 2	1. 45 m	P	m	
3 ～ 4	1. 36			2 ～ 3	1. 90			
4 ～ 5	0. 90			5 ～ 6	1. 57			
7 ～ 8	1. 20			6 ～ 7	1. 75			
				4 ～ 9	1. 85			
		8 ～ 9	1. 65					

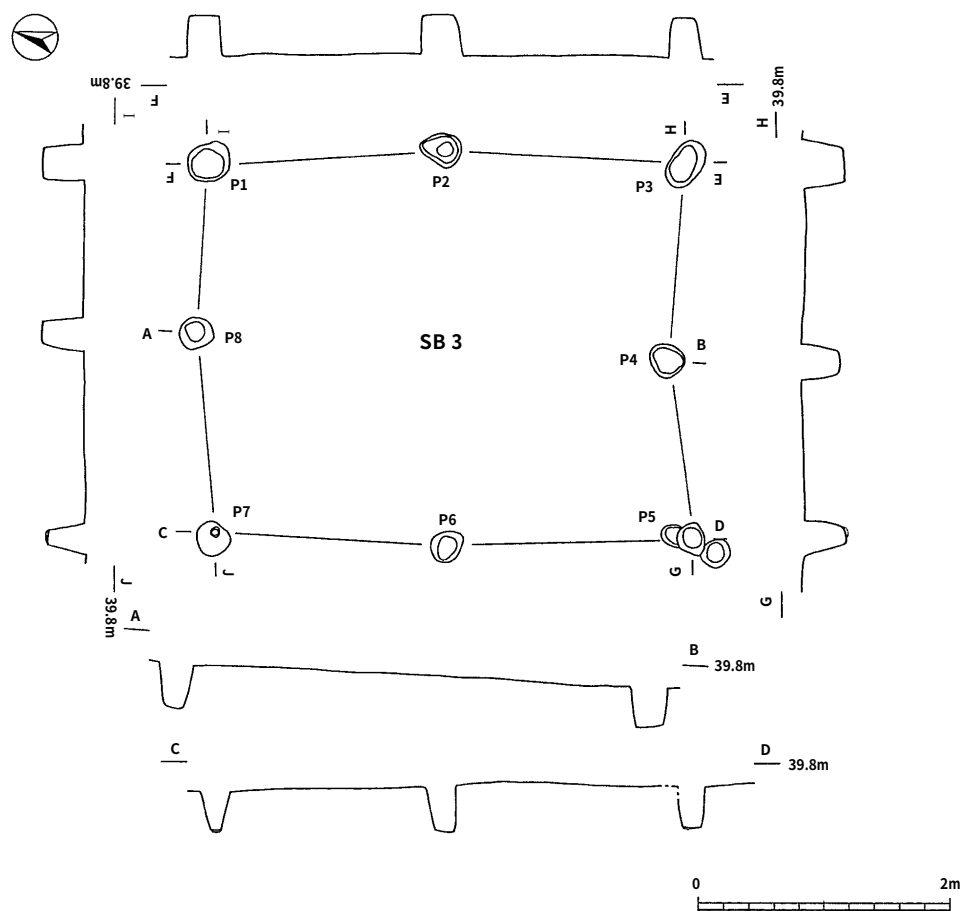


第32図 掘立柱建物跡2

③ 掘立柱建物跡3 (SB 3)

掘立柱建物跡3はE-5・6区に検出された。検出状況は掘立柱建物跡29と東西に重なっているが、掘立柱建物跡30とは少しずれた形で南北に接して柱穴が掘られている。周囲には土坑が検出していない。

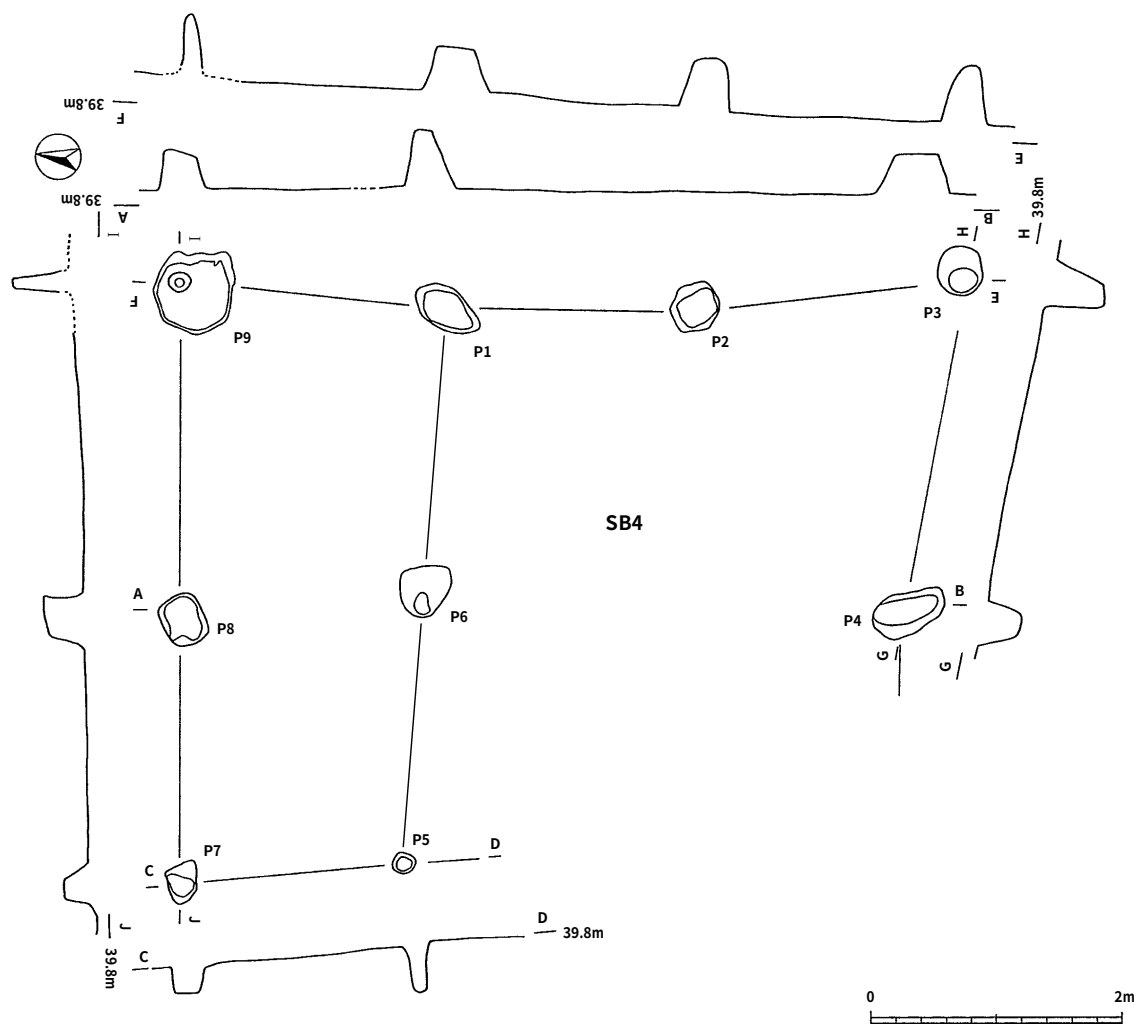
本遺構は梁間2間、桁行2間であるが南北の桁行が長い建物跡である。この建物跡は建物跡としては小規模にあたる。



第5表 掘立柱建物跡3の計測

④ 掘立柱建物跡4 (SB4)

この掘立柱建物跡4と重なっている遺構は土坑、焼土4がある。2つとも建物跡以前のものであると考えられる。



第34図 掘立柱建物跡4

第6表 掘立柱建物跡4の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm） P 1. 58 × 35 × 37 2. 45 × 38 × 42 3. 29 × 20 × 47 4. 61 × 35 × 32 5. 19 × 16 × 39 6. 47 × 31 × 47 7. 37 × 22 × 20 8. 43 × 32 × 22 9. 74 × 61 × 46
SB 4	上屋 2 間	上屋 2 間	4.10 m	2.12 m	4.37 m	4.77 m	F-5	
	下屋半間	下屋 2 間	m	m	m	m	方位 W12°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 2	2.00 m	P 1 ～ 9	2.10 m	P 1 ～ 6	2.35 m	P 7 ～ 8	2.10 m	
2 ～ 3	2.14	5 ～ 7	1.77	5 ～ 6	2.06	8 ～ 9	2.67	
				3 ～ 4	2.62			

⑤ 掘立柱建物跡5 (SB5)

本遺構はE-5区に検出した総柱建物跡である。建物跡は梁間2間桁行2間半のもので半間は北側に設けてある。

この建物跡の東側には土坑列が重なり合って、北側には列になって検出している。この土坑は本建物との並びが沿っているので関係があると思われる。また、南東側の土坑群の一部は建物の範囲に重なり別時期と考えられる。

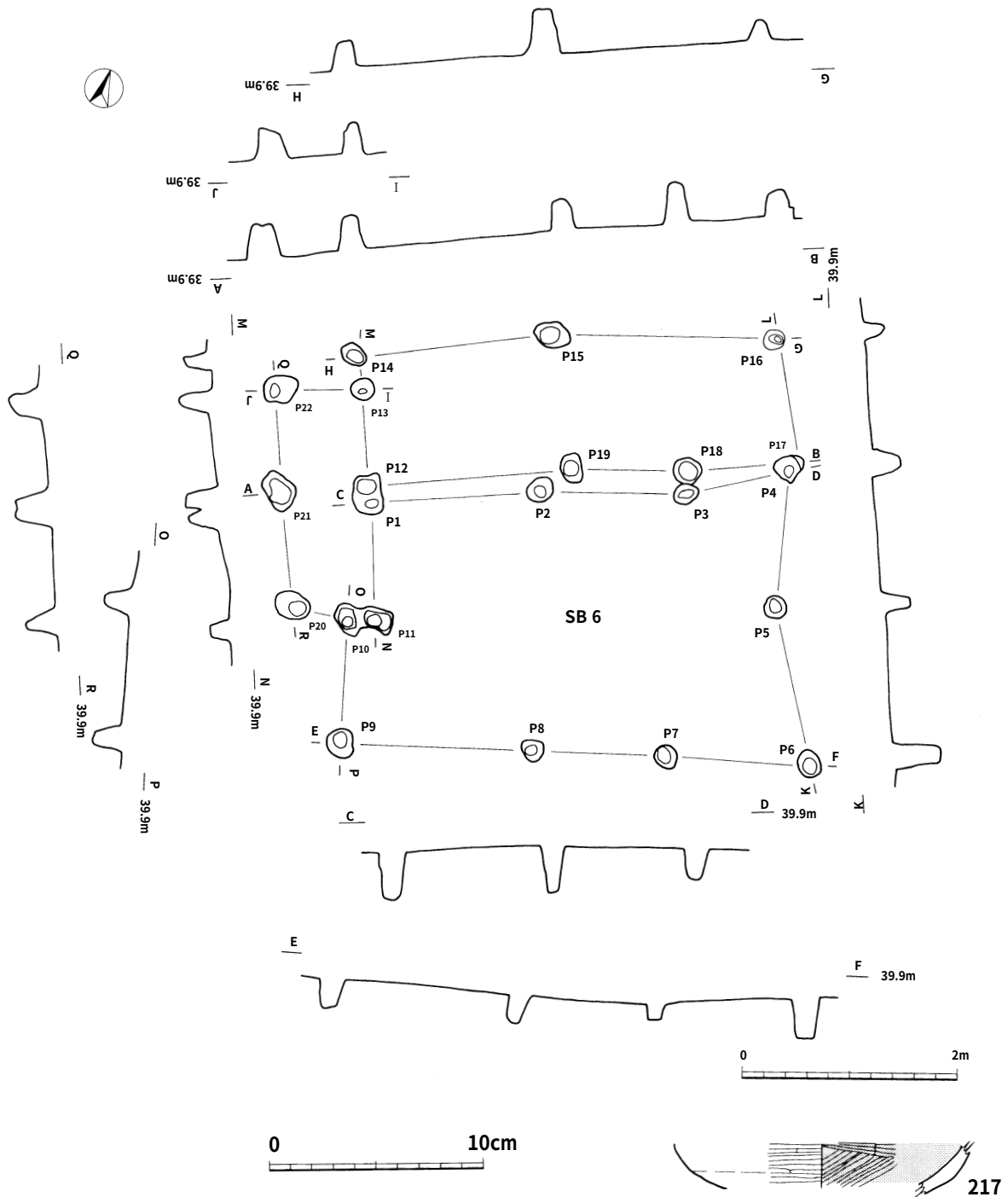


建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 5	上屋 2 間	上屋 2 間半	3.57 m	m	4.32 m	m	E-4・5	P 1. 27 × 25 × 38
			m	m	m	m	方位 W27°	2. 24 × 22 × 31
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 22 × 19 × 41
P 1～10	1.76 m	P	m	P 1～2	0.80 m	P	m	4. 32 × 28 × 43
9～10	1.87			2～3	1.68			5. 23 × 20 × 43
2～11	1.88			3～4	1.85			6. 29 × 21 × 34
8～11	1.68			6～7	1.82			7. 28 × 20 × 31
3～12	1.77			7～8	1.85			8. 26 × 20 × 45
7～12	1.92			8～9	0.75			9. 30 × 24 × 34
4～5	1.88			10～11	0.80			10. 27 × 26 × 48
5～6	1.78			11～12	1.78			11. 23 × 21 × 25
				5～12	1.86			12. 22 × 21 × 25

⑥ 掘立柱建物跡6 (SB6)

本遺構はF-4区に検出した。梁2間、桁行3間を基本に北に半間と2間の下屋、西に四半間と2間の狭い下屋を組んでいる建物跡である。東南角の柱穴は少しはみ出し鋭角になり、広さが違う2つ下屋が付き変則建物跡と考えられる。この類と同型は掘立柱建物跡4と掘立柱建物跡2が考えられる。なお、この建物跡は、単独で他の遺構との切り合いが無い。

出土遺物は第36図の217で黒色土器A塊である。



第36図 掘立柱建物跡6と出土遺物

第8表 掘立柱建物跡6の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 6	上屋2間	上屋3間	2.75 m	2.05 m	4.47 m	3.90 m	E・F-4	
	下屋1間	下屋2間半	m	m	m	m	方位 E66°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～11	1.05 m	P 12～13	0.90 m	P 1～2	1.55 m	P 14～15	1.82 m	
9～10	1.12	13～14	0.33	2～3	1.35	15～16	2.10	
4～5	1.25	16～17	1.22	3～4	1.00	17～18	1.03	
5～6	1.54	20～21	1.10	6～7	1.34	18～19	1.05	
		21～22	0.95	7～8	1.25	12～19	1.90	
				8～9	1.78	13～22	0.82	
						10～20	0.46	

⑦ 掘立柱建物跡7 (SB 7)

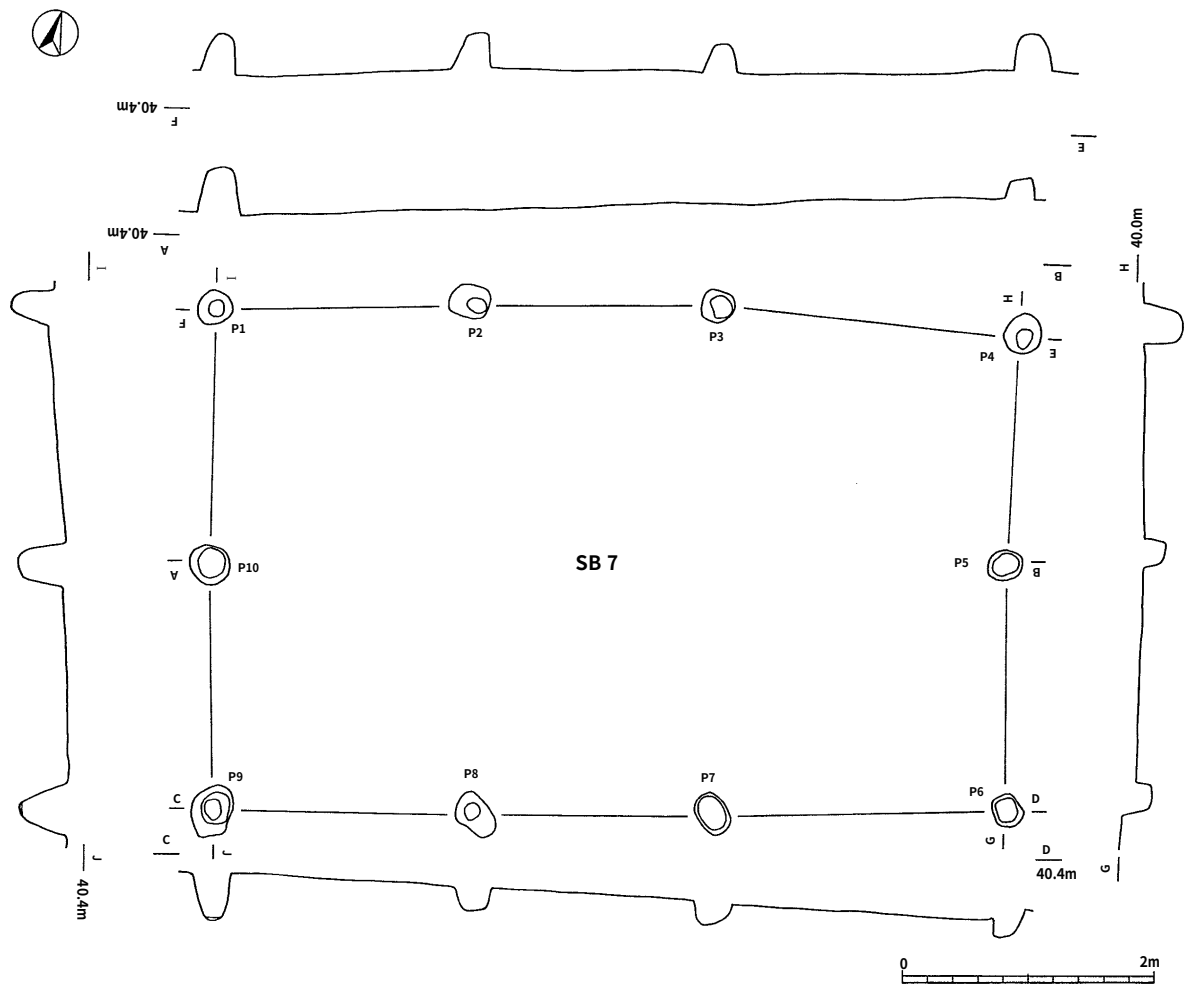
この遺構は建物跡全体でみると南部に位置する。検出はE-8・9区で、この建物跡の位置としては建物群内の西側の南部にあたる。

この建物跡は桁行を東西に、梁2間、桁行3間で造られている。この建物の特徴は東北角のP 4柱穴が少し内側に掘られている部分がある。

この遺構の重なりは、土坑だけで周りの建物跡との関係はない。

第9表 掘立柱建物跡7の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 28 × 26 × 32 2. 34 × 22 × 28 3. 27 × 21 × 23 4. 33 × 22 × 30 5. 30 × 24 × 18 6. 27 × 24 × 21 7. 34 × 24 × 18 8. 38 × 22 × 19 9. 45 × 31 × 39 10. 33 × 31 × 38
SB 7	上屋 2 間	上屋 3 間	3.95 m	m	6.40 m	m	E-8・9	
			m	m	m	m	方位 E 74°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～10	2.00 m	P	m	P 1～2	2.05 m	P	m	
9～10	1.96			2～3	1.95			
4～5	1.75			3～4	2.40			
5～6	1.97			6～7	2.33			
				7～8	1.90			
				8～9	2.05			



第 37 図 掘立柱建物跡7

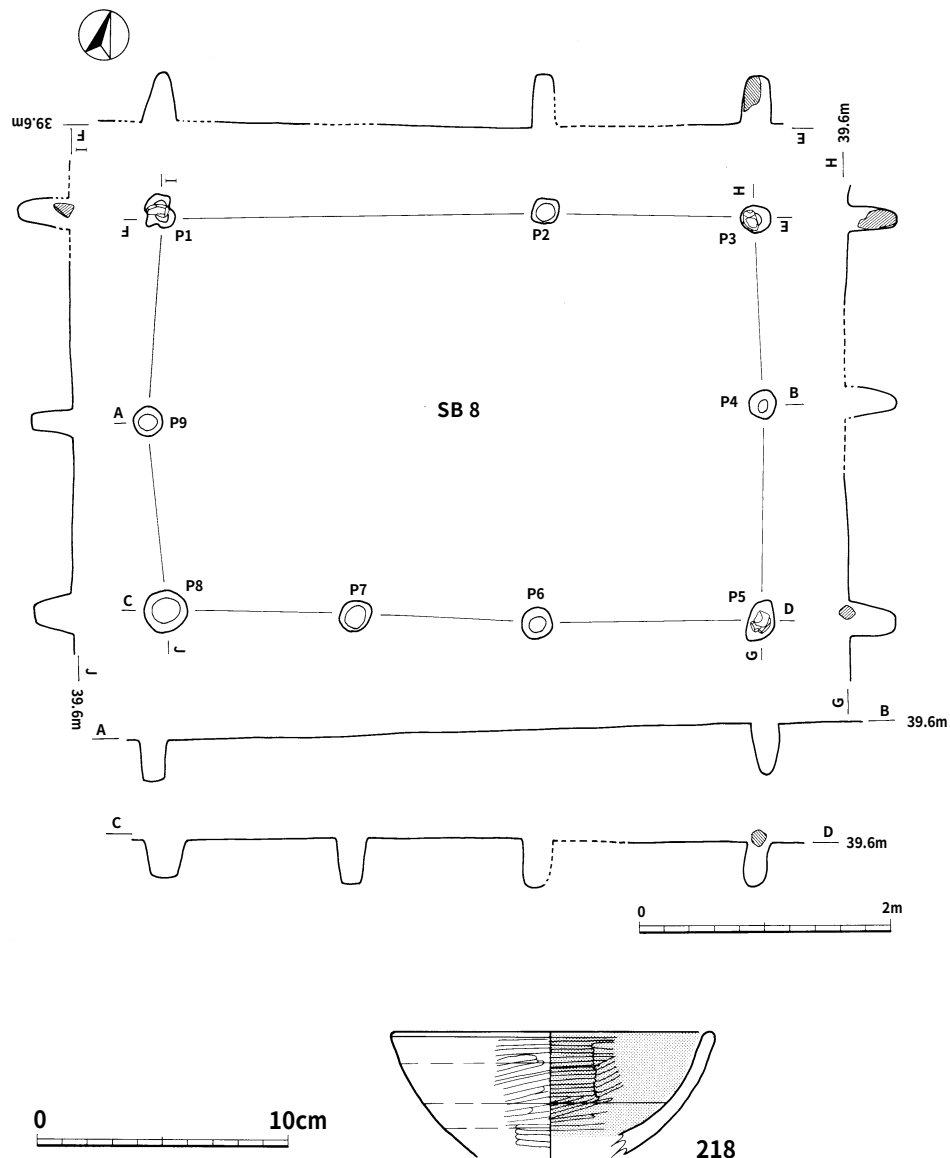
⑧ 掘立柱建物跡8（SB 8）

本遺構は調査区では北部にあたるE－4区に桁行が東西で検出した。建物跡は梁2間、桁行3間の規模でやや小型に属する。

他の遺構との重なりは、柱穴と土坑の外、列になっている土坑がある。また、重なりではないが、掘立柱建物跡9・10とは近接の位置にある。

第 10 表 掘立柱建物跡8の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 8	上屋 2 間	上屋 3 間	3. 20 m	m	4. 70 m	m	E-4	
			m	m	m	m	方位 E 72°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 9	1. 68 m	P	m	P 1 ～ 2	3. 05 m	P	m	
8 ～ 9	1. 52			2 ～ 3	1. 63			
3 ～ 4	1. 47			5 ～ 6	1. 77			
4 ～ 5	1. 70			6 ～ 7	1. 45			
				7 ～ 8	1. 50			



第 38 図 掘立柱建物跡8と出土遺物

出土遺物（第 38 図 218）

218 は P 4 から出土している。器形は半球状の埴で内側に黒色を施し、内外面は横位に研磨されているが、水挽き痕は残っている。

⑨ 掘立柱建物跡 9（SB 9）

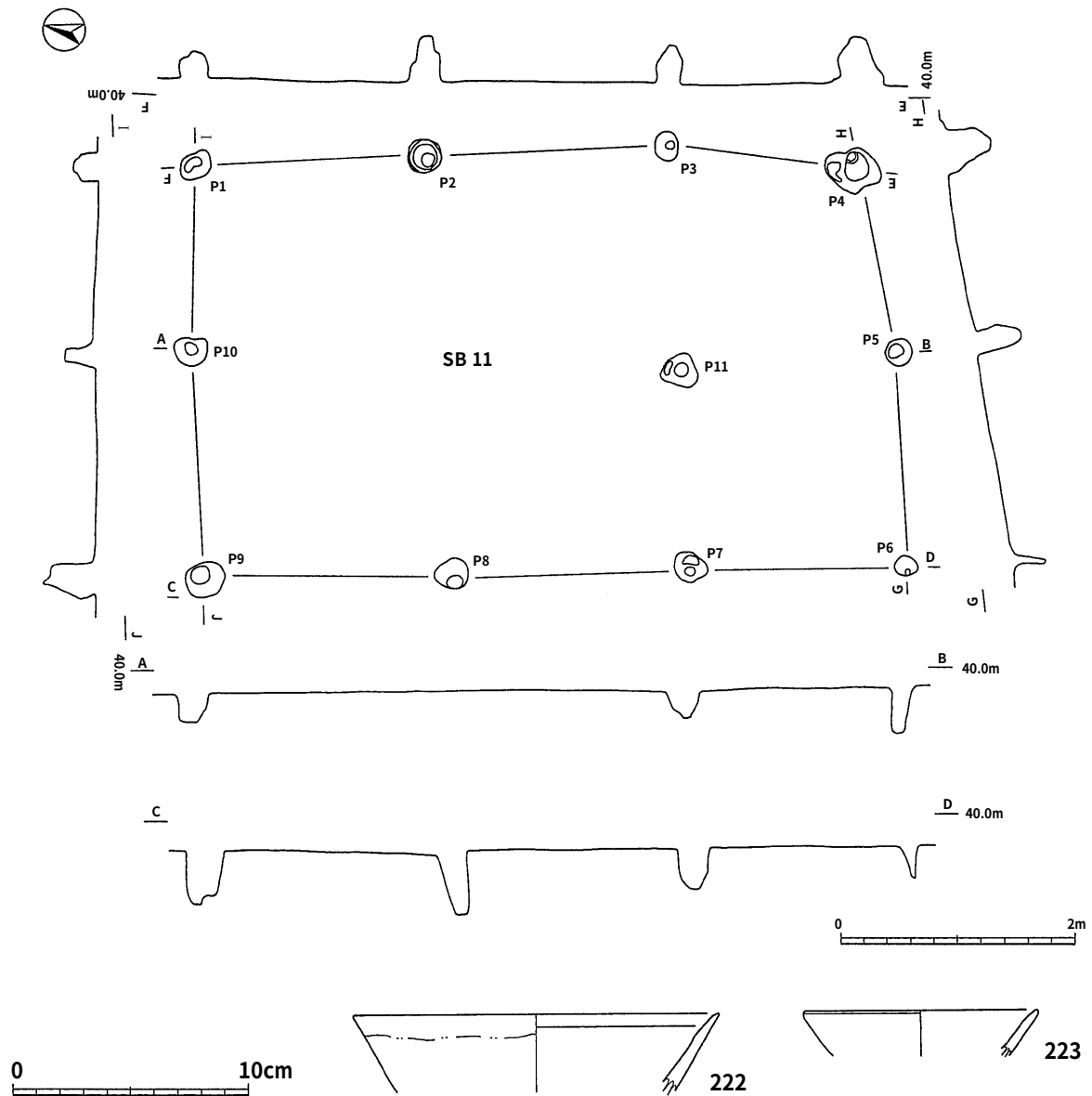
本遺構は、調査区の北部にあたる E - 3・4 に検出した。建物跡自体は桁行が南北にあり、梁 2 間、桁行 3 間のもので、規模的には小型に属する。構造的には桁行の中間間が一間取っているが、南北の桁行間は狭く建てている。さらに北面の梁は南面よりも狭く棟柱は外側にはみ出していない。これは近接している掘立柱建物跡 8・10・11 にみられる棟柱のはみ出しと異なるため、近接しているがこれらと使用目的が異なると考えられる。

他の遺構との重なりはないが、北西部と西部に土坑列がみられ、何らかの関係遺構と思われる。

⑪ 掘立柱建物跡 11 (SB11)

本遺構はD-3・4区に桁行が南北で検出した。位置的には調査区の北部にあたる。建物跡は梁2間、桁行3間で、南西角の柱穴が若干内側に入っている。

他の遺構との重なりは、掘立柱建物跡 10・12 と南西側並びに北東側で切り合っている。また、土坑列が2列重なっている。



第 41 図 掘立柱建物跡11と出土遺物

出土遺物 (第 41 図 222・223)

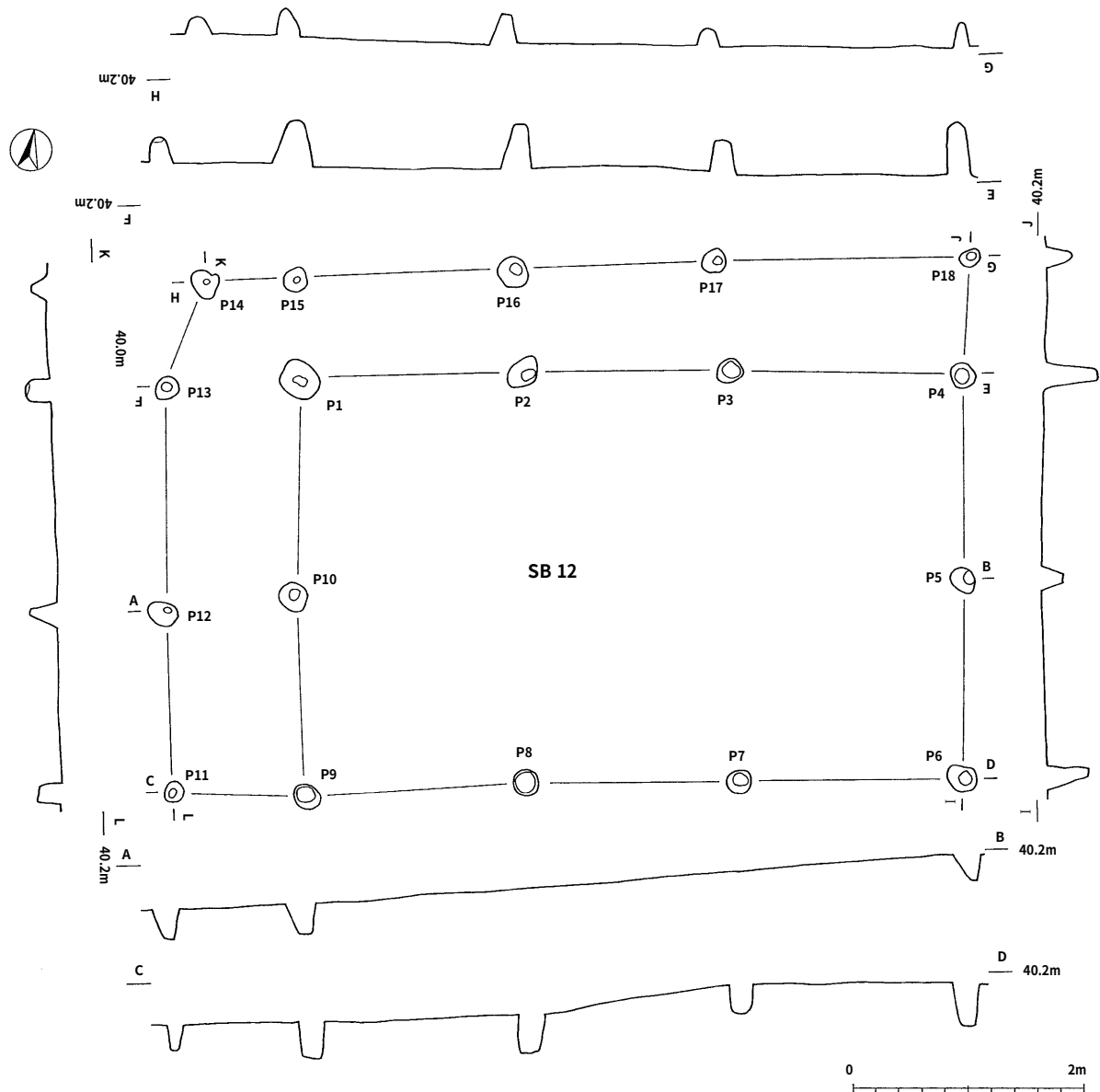
222 はP1 に出土している。これは体部・口縁部が直線状に立ち上がる器形をもつ青磁碗である。器面は、口縁部内側に稜がかすかにみられ、外面に釉垂れがみられる。223 はP3 に出土している。これは土師器の坏の体部～口縁部である。

第13表 掘立柱建物跡11の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm） P 1. 31 × 22 × 22 2. 31 × 28 × 40 3. 25 × 19 × 33 4. 49 × 32 × 41 5. 24 × 22 × 38 6. 21 × 17 × 29 7. 28 × 25 × 35 8. 29 × 26 × 54 9. 35 × 29 × 46 10. 29 × 23 × 26
SB 11	上屋 2 間	上屋 3 間	3. 50 m	m	5. 62 m	m	D-3・4	
			m	m	m	m	方位 W13°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～10	1. 56 m	P	m	P 1 ～ 2	2. 00 m	P	m	
9 ～10	1. 95			2 ～ 3	2. 05			
4 ～ 5	1. 58			3 ～ 4	1. 63			
5 ～ 6	1. 85			6 ～ 7	1. 85			
				7 ～ 8	2. 00			
				8 ～ 9	2. 15			

⑫ 掘立柱建物跡 12 (SB12)

C・D-3区に検出した。調査区では最も北側の建物である。桁行が東西で上屋と下屋からなつて



第42図 掘立柱建物跡12

いる。建物は上屋の梁が2間、桁行が3間で、北側と西側に「L」字状の半間の下屋をもち、下屋の北西角が内側に入り込んでいる。遺構の切り合いは、掘立柱建物跡11・13・14が重なっている。

第14表 掘立柱建物跡12の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 35 × 30 × 39 2. 32 × 22 × 39 3. 24 × 19 × 28 4. 22 × 22 × 46 5. 25 × 21 × 19 6. 28 × 21 × 35 7. 22 × 20 × 26 8. 22 × 22 × 33 9. 25 × 22 × 32 10. 25 × 25 × 27 11. 18 × 16 × 22 12. 26 × 21 × 25 13. 23 × 19 × 23 14. 24 × 21 × 15 15. 21 × 19 × 24 16. 28 × 26 × 27 17. 22 × 19 × 15 18. 18 × 15 × 22
SB 12	上屋 2 間	上屋 3 間	3.55 m	4.40 m	5.73 m	6.45 m	C・D-3	
	下屋 2 間半	下屋 3 間半	m	m	m	m	方位 E 76°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 10	1.85 m	P 11 ～ 12	1.57 m	P 1 ～ 2	1.96 m	P 14 ～ 15	0.77 m	
9 ～ 10	1.73	12 ～ 13	1.92	2 ～ 3	1.75	15 ～ 16	1.90	
4 ～ 5	1.75	13 ～ 14	0.98	3 ～ 4	2.00	16 ～ 17	1.75	
5 ～ 6	1.73	4 ～ 18	1.02	6 ～ 7	1.95	17 ～ 18	2.20	
				7 ～ 8	1.85	9 ～ 11	1.15	
				8 ～ 9	1.90			

⑬ 掘立柱建物跡13 (SB13)

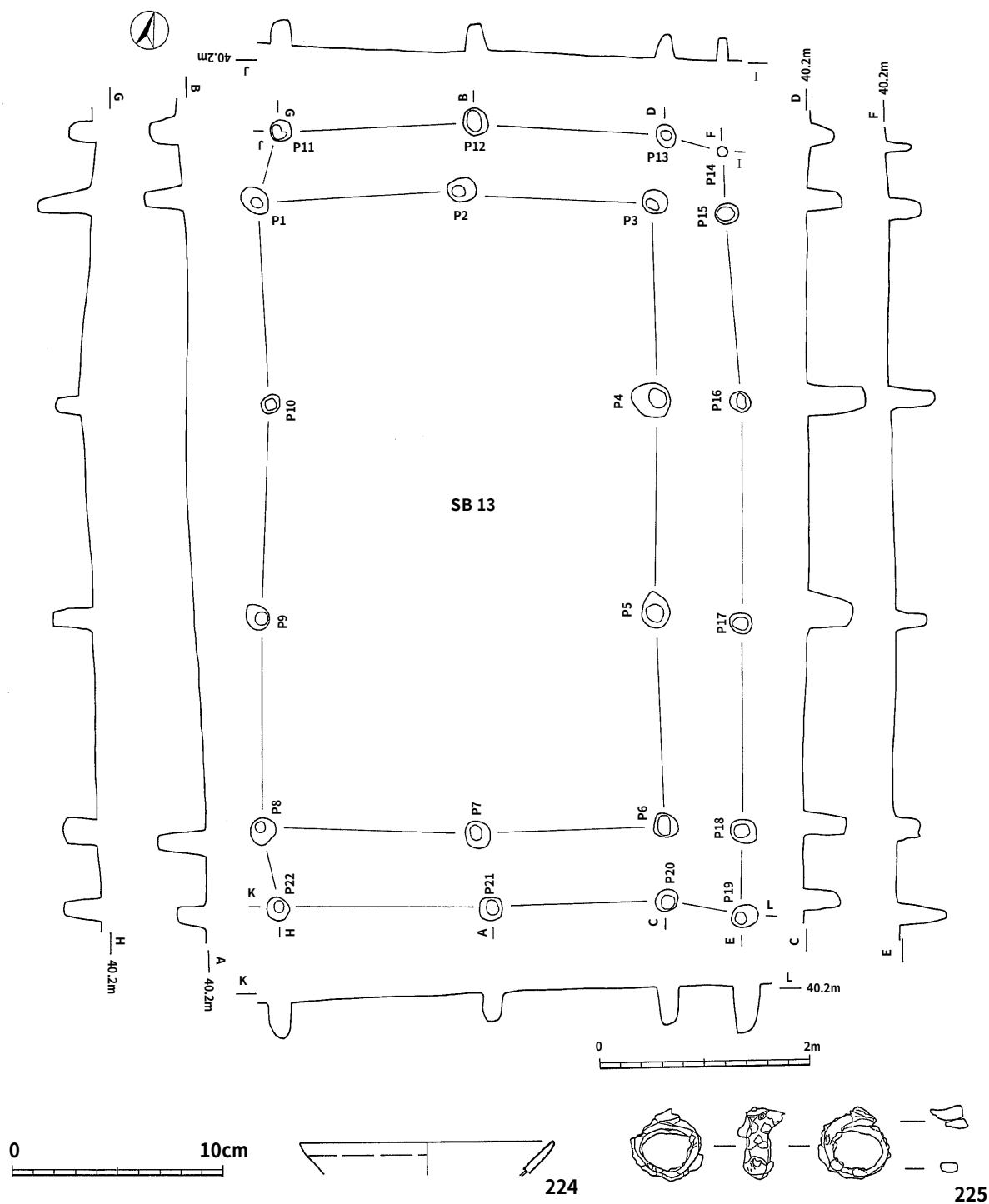
本遺構はC-3・4区に検出した。桁行が南北方向で上屋と下屋がある建物である。上屋は梁2間、桁行3間で南北と西側に半間の下屋を「コ」の字にもつ特徴がある。また、北西角の下屋の柱穴は若干内側に入り込んでいる。遺構の切り合いは、掘立柱建物跡12・14が重なっている。

出土遺物 (第43図 224・225)

224はP21から出土している。口縁部が直線に外向する青磁碗である。225はP5から出土した鉄製品である。用途は道具の柄部を絞めた金具の可能性はある。

第15表 掘立柱建物跡13の計測

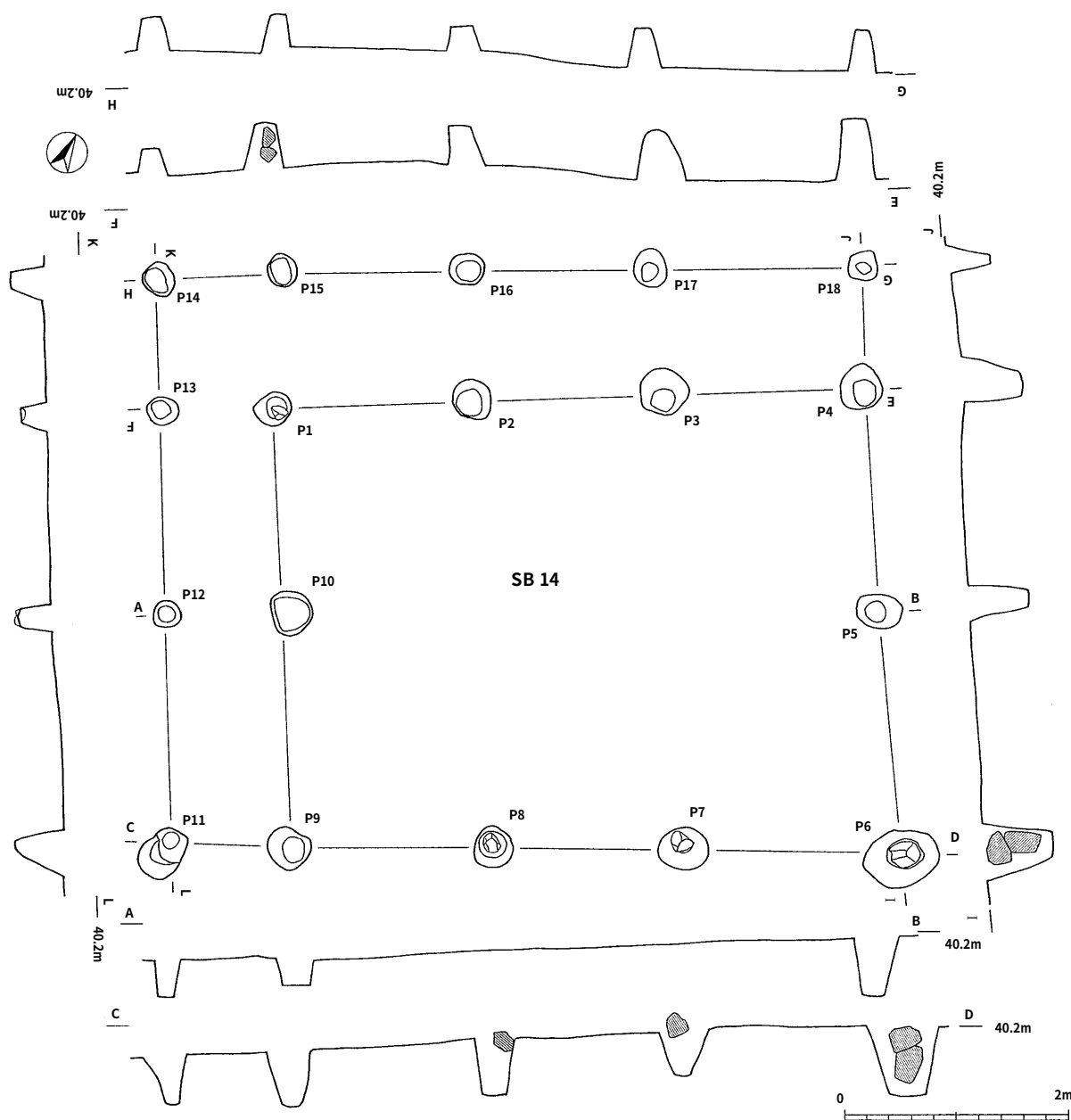
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 30 × 22 × 52 2. 28 × 22 × 36 3. 25 × 22 × 33 4. 38 × 33 × 54 5. 34 × 27 × 42 6. 26 × 22 × 40 7. 27 × 24 × 45 8. 27 × 24 × 33 9. 27 × 22 × 37 10. 20 × 17 × 22 11. 21 × 20 × 24 12. 27 × 24 × 25 13. 23 × 17 × 24 14. 11 × 9 × 22 15. 23 × 19 × 31 16. 21 × 19 × 45 17. 21 × 20 × 30 18. 28 × 22 × 24 19. 27 × 20 × 45 20. 24 × 21 × 34 21. 25 × 21 × 27 22. 24 × 21 × 36
SB 13	上屋 2 間	上屋 3 間	3.73 m	4.20 m	5.90 m	7.30 m	C-3・4	
	下屋 2 間半	下屋 4 間	m	m	m	m	方位 W16°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 2	1.92 m	P 11～12	1.85 m	P 3 ～ 4	1.85 m	P 1 ～11	0.70 m	
2 ～ 3	1.84	12～13	1.80	4 ～ 5	2.05	14～15	0.60	
6 ～ 7	1.78	13～14	0.55	5 ～ 6	2.03	15～16	1.78	
7 ～ 8	2.04	19～20	0.70	8 ～ 9	2.00	16～17	2.12	
		20～21	1.65	9 ～10	2.05	17～18	1.98	
		21～22	2.00	1 ～10	1.93	18～19	0.85	
						8 ～22	0.77	



第 43 図 掘立柱建物跡13と出土遺物

⑭ 掘立柱建物跡 14 (SB14)

この遺構はC・D-3・4区に検出した。桁行が東西の方向にある上屋と下屋をもつ建物である。上屋は梁2間、桁行3間で、北側と西側に半間の下屋が「L」字に付いている。他の遺構の重なりは、掘立柱建物跡 12・13 がある。



第 44 図 掘立柱建物跡14

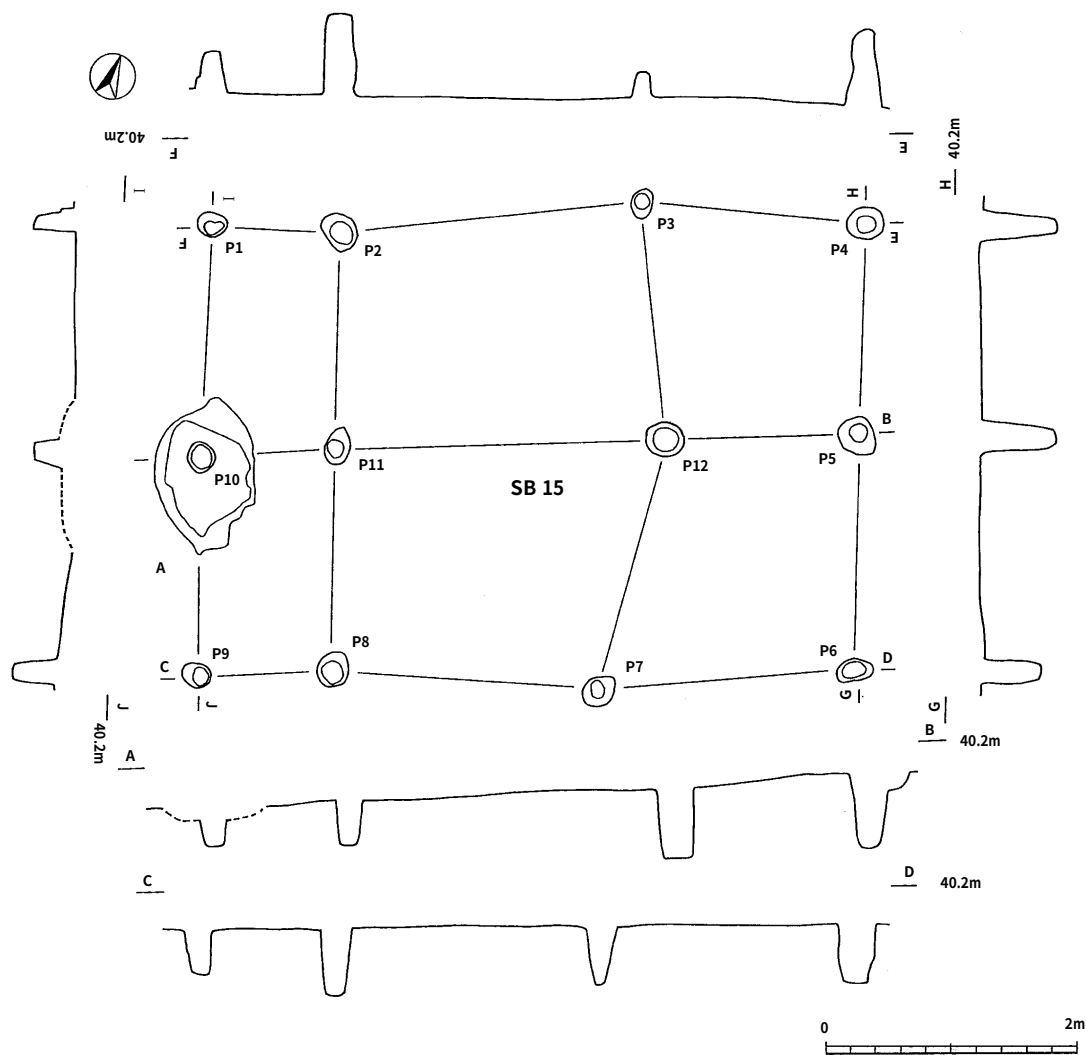
第 16 表 掘立柱建物跡14の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 34 × 28 × 41 2. 39 × 33 × 35 3. 42 × 41 × 45 4. 41 × 38 × 54 5. 42 × 30 × 53 6. 70 × 50 × 62 7. 45 × 38 × 41 8. 37 × 35 × 52 9. 40 × 33 × 50 10. 40 × 36 × 24 11. 50 × 35 × 44 12. 25 × 23 × 31 13. 28 × 25 × 24 14. 31 × 29 × 28 15. 31 × 26 × 32 16. 32 × 28 × 22 17. 35 × 30 × 35 18. 27 × 25 × 37
SB 14	上屋 2 間	上屋 3 間	3.92 m	4.97 m	6.28 m	6.30 m	C・D-3・4	
	下屋 2 間半	下屋 3 間半	m	m	m	m	方位 E 67°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～10	1.85 m	P 11～12	2.00 m	P 1 ～ 2	1.75 m	P 9 ～11	1.07 m	
9 ～10	2.10	12～13	1.83	2 ～ 3	1.70	14～15	1.12	
4 ～ 5	1.96	13～14	1.15	3 ～ 4	1.78	15～16	1.65	
5 ～ 6	2.15	4 ～18	1.07	6 ～ 7	1.95	16～17	1.60	
				7 ～ 8	1.70	17～18	1.90	
				8 ～ 9	1.80			

⑮ 掘立柱建物跡 15 (SB15)

本遺構はD-4・5区に検出した。建物跡は桁行が東西方向にあり、梁間2間、桁行間2間半の総柱である。中央部は1間を田の字状に組み、西側は半間間である。

他の遺構との重なりは土坑Ⅰ類と焼土6である。なお、周囲にも同じ遺構がみられる。



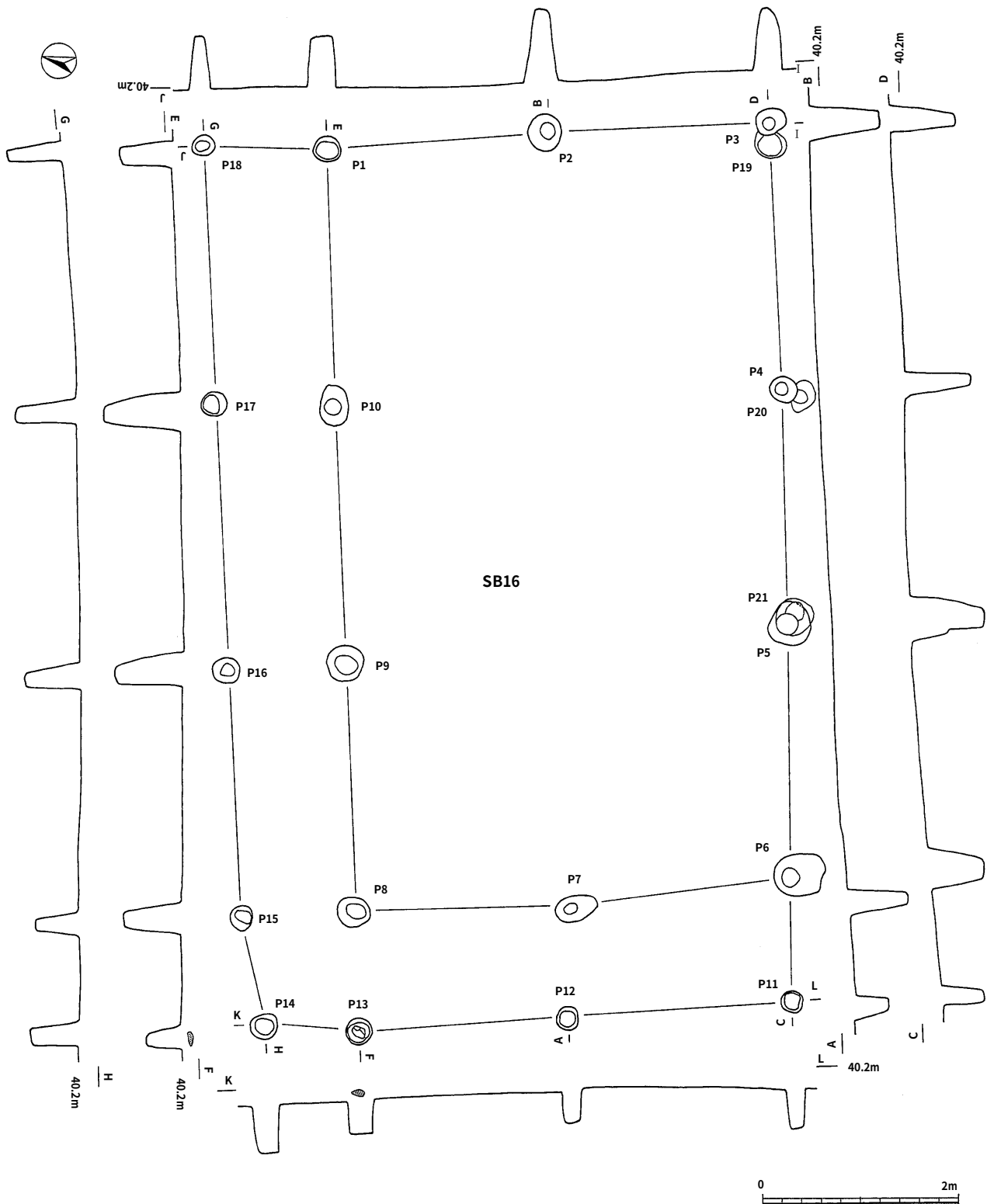
第 45 図 掘立柱建物跡15

第 17 表 掘立柱建物跡15の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 24 × 19 × 31 2. 32 × 25 × 65 3. 23 × 17 × 20 4. 30 × 25 × 61 5. 33 × 29 × 59 6. 30 × 18 × 46 7. 30 × 24 × 46 8. 30 × 26 × 54 9. 24 × 20 × 45 10. 25 × 21 × 32 11. 31 × 20 × 36 12. 32 × 28 × 56
SB 15	上屋 2 間	上屋 3 間	3.55 m	m	5.21 m	m	D-4・5	
			m	m	m	m	方位 E 69°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～10	1.80 m	P	m	P 1～2	1.05 m	P	m	
9～10	1.74			2～3	2.40			
2～11	1.70			3～4	1.80			
8～11	1.75			6～7	2.03			
3～12	1.83			7～8	2.13			
7～12	2.05			8～9	1.05			
4～5	1.65			5～12	1.53			
5～6	1.85			11～12	2.62			
				10～11	1.06			

⑩ 掘立柱建物跡 16 (SB16)

本遺構はC-4・5区に検出した。建物跡は桁行が東西方向にあり、梁間2間、桁行3間の上屋に北側と西側に半間の下屋を付けている。遺構の重なりは、掘立柱建物跡 20 と方形竪穴遺構 1 と焼土 5 がみられる。柱穴の範囲を比較すると掘立柱建物跡 20 とは建て替えの建物と考えられる。

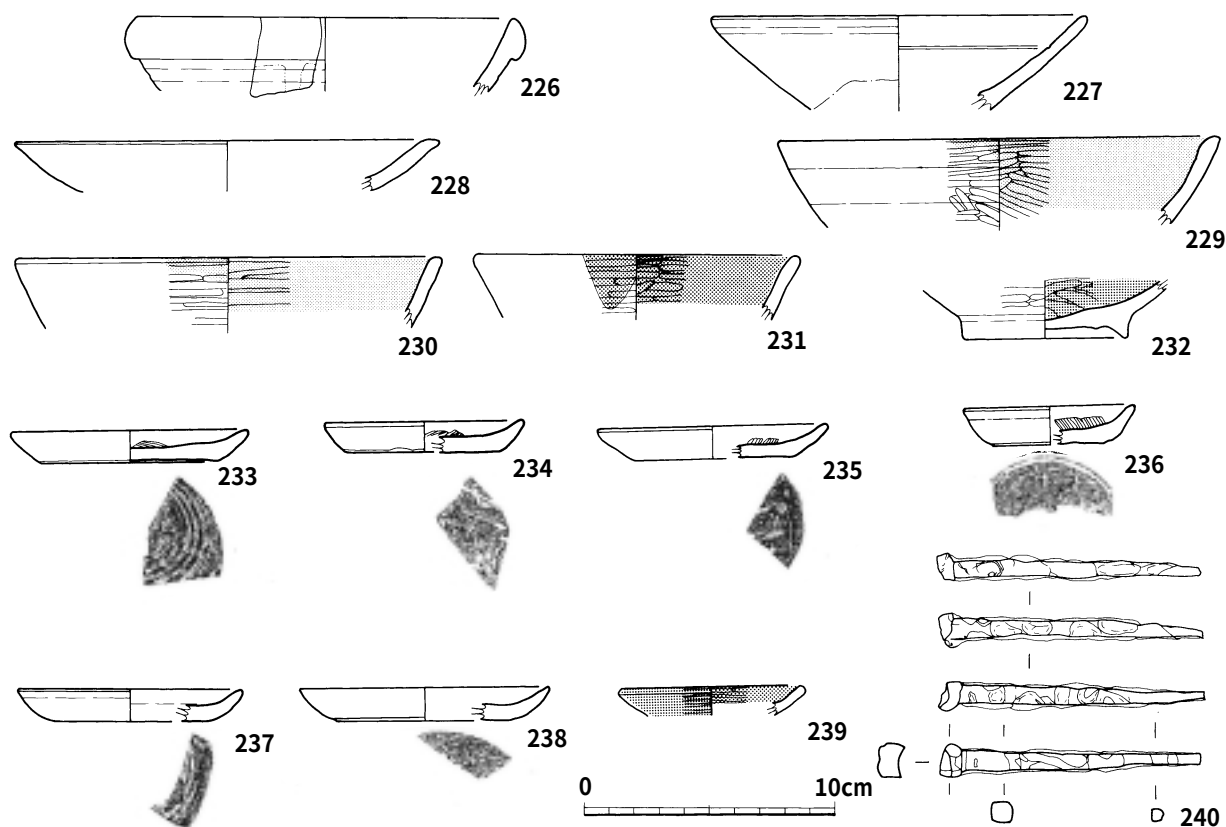


第 46 図 掘立柱建物跡16

方形竪穴遺構は建物跡の東南部にあり、降り口の段等から考えると時期差があると思われる。焼土5も同じと考えて良いが、掘立柱建物跡のどちらかが建ててない時期の遺構と思われる。

第18表 掘立柱建物跡16の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 16	上屋2間	上屋3間	4.50 m	5.38 m	7.70 m	8.95 m	C・D-4・5	P 1. 28 × 26 × 54 2. 38 × 35 × 74 3. 32 × 27 × 66 4. 29 × 25 × 68 5. 45 × 40 × 75 6. 54 × 43 × 56 7. 44 × 26 × 61 8. 34 × 32 × 58 9. 39 × 36 × 70 10. 42 × 29 × 78 11. 23 × 23 × 43 12. 24 × 21 × 33 13. 27 × 27 × 34 14. 27 × 25 × 48 15. 25 × 23 × 44 16. 28 × 26 × 57 17. 27 × 25 × 63 18. 24 × 20 × 55
	下屋2間半	下屋3間半	m	m	m	m	方位 E 79°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～2	2.25 m	P 1～18	1.25 m	P 1～10	2.65 m	P 6～11	1.25 m	
2～3	2.25	11～12	2.29	9～10	2.65	14～15	1.15	
6～7	2.25	12～13	2.15	8～9	2.50	15～16	2.53	
7～8	2.20	13～14	0.95	5～6	2.60	16～17	2.70	
				4～5	2.40	17～18	2.65	
				3～4	2.72			



第47図 掘立柱建物跡16の出土遺物

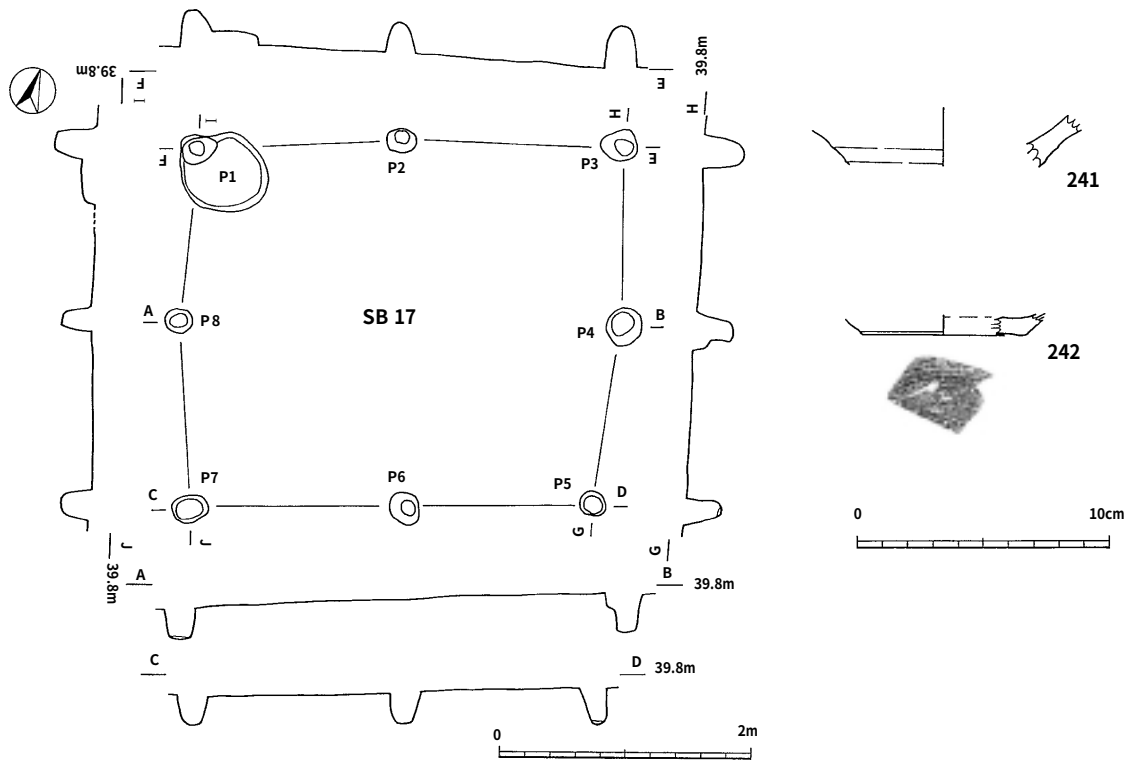
出土遺物（第47図 226～240）

226 はP 5 出土で、白磁Ⅳ類にあたる玉縁口縁部をもつ碗である。227 はP 9 出土で、口縁部が直に開く白磁の碗である。228 はP 16 に出土した土師器の坏である。229 はP 14 に出土した黒色土器Aの碗である。230 はP 17 に出土した黒色土器Aの碗である。231 はP 9 から出土した黒色土器Aの碗である。232 はP 5 から出土した黒色土器Aの碗の底部である。233・234 はP 9 出土、235 が

P 8 出土, 236 が P 1 出土, 238 は P 7 から出土した土師器の小皿である。これらの底は糸切り離しである。239 は P 9 から出土した黒色土器 B の小皿である。底面は糸切り離しである。240 は P 6 に出土した輝製品の鉄釘である。

⑰ 掘立柱建物跡 17 (SB 17)

本遺構は D・E-5 区に検出した。この建物跡は桁行が東西と考えられる方向で、梁 2 間、桁行 2 間である。特徴は東梁間の棟柱が若干出ている。また、掘立柱建物跡 18 と重なっている。



第 48 図 掘立柱建物跡 17 と出土遺物

出土遺物 (第 48 図 241・242)

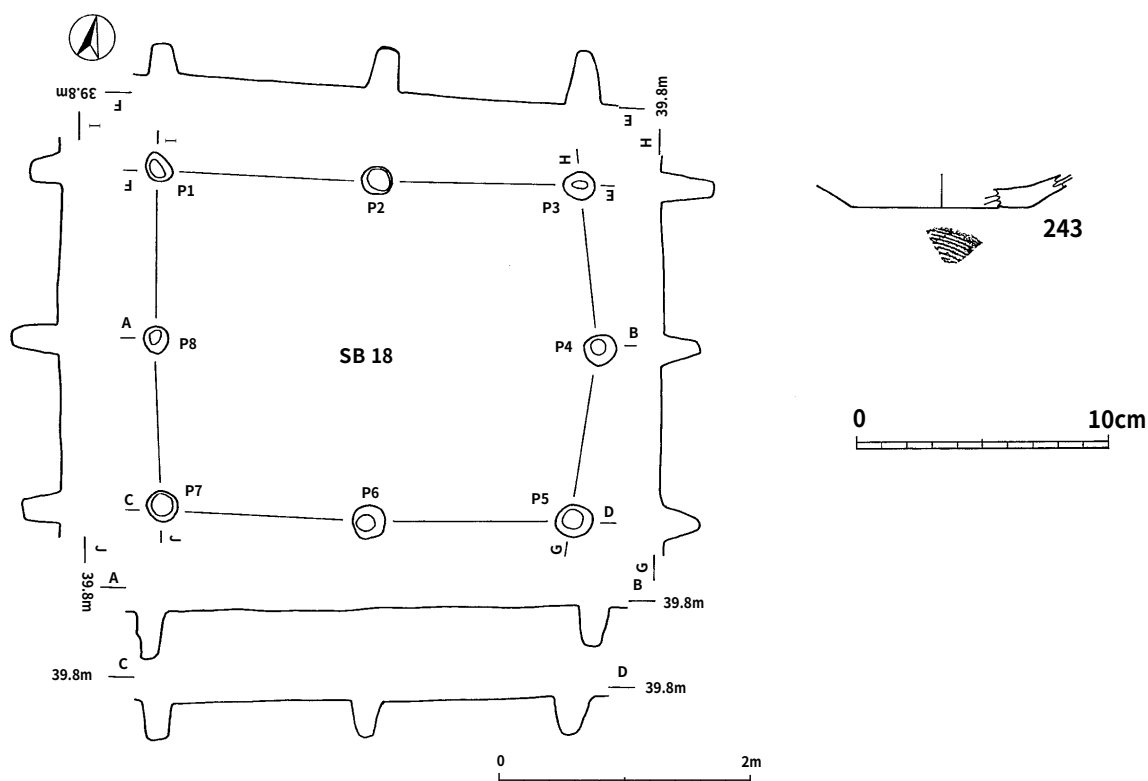
241 は P 7 から出土した土師器の坏である。242 は P 7 から出土した土師器の小皿である。底面は糸切り離しである。

第 19 表 掘立柱建物跡 17 の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 17	上屋 2 間	上屋 2 間	2.82 m	m	3.40 m	m	D・E-5	P 1. 18 × 20 × 30
			m	m	m	m	方位 E 69°	2. 24 × 19 × 25
								3. 35 × 25 × 33
								4. 31 × 28 × 30
								5. 20 × 20 × 27
								6. 25 × 24 × 25
								7. 30 × 23 × 23
								8. 23 × 20 × 23
上屋梁間柱間	下屋梁間柱間	上屋桁行柱間	下屋桁行柱間					
P 1 ~ 8	1.38 m	P	m	P 1 ~ 2	1.64 m	P	m	
3 ~ 4	1.42			2 ~ 3	1.79			
4 ~ 5	1.45			5 ~ 6	1.48			
7 ~ 8	1.48			6 ~ 7	1.75			

⑮ 掘立柱建物跡 18 (S B 18)

本遺構はD・E-5区に検出した。この建物跡は桁行が東西と考えられる方向で、梁2間、桁行2間である。特徴は東梁間の棟柱が若干出ている。また、掘立柱建物跡17と重なっている。



第49図 掘立柱建物跡18と出土遺物

出土遺物 (第 49 図 243)

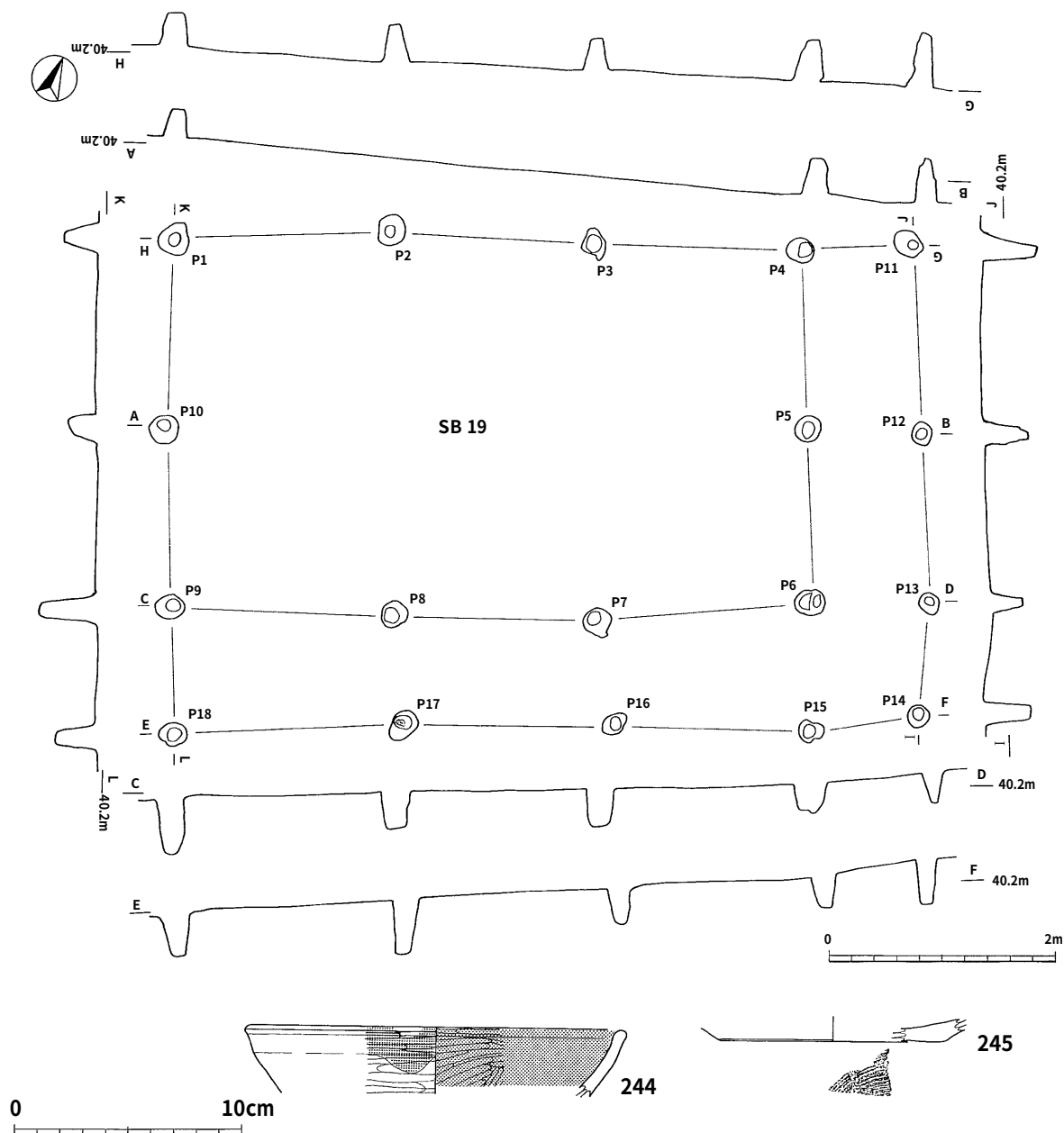
243はP 8に出土している。これは土師器の坏の底部である。

第20表 掘立柱建物跡18の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 18	上屋 2 間	上屋 2 間	2.63 m	m	3.35 m	m	D・E-5	
			m	m	m	m	方位 E 80°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 8	1.35 m	P	m	P 1 ～ 2	1.75 m	P	m	
3 ～ 4	1.30			2 ～ 3	1.61			
4 ～ 5	1.47			5 ～ 6	1.63			
7 ～ 8	1.33			6 ～ 7	1.65			

⑪ 掘立柱建物跡 19 (S B19)

本遺構はB・C-7区に検出した。建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなる。上屋は梁2間、桁行3間で、下屋は半間間で南側と東側に付いている。他との重なりは、掘立柱建物跡21があり、掘立柱建物跡22とは接している。出土遺物は244がP4に出土している。これは黒色土器Aの碗である。245もP4に出土している。糸切り離しの坏底部である。

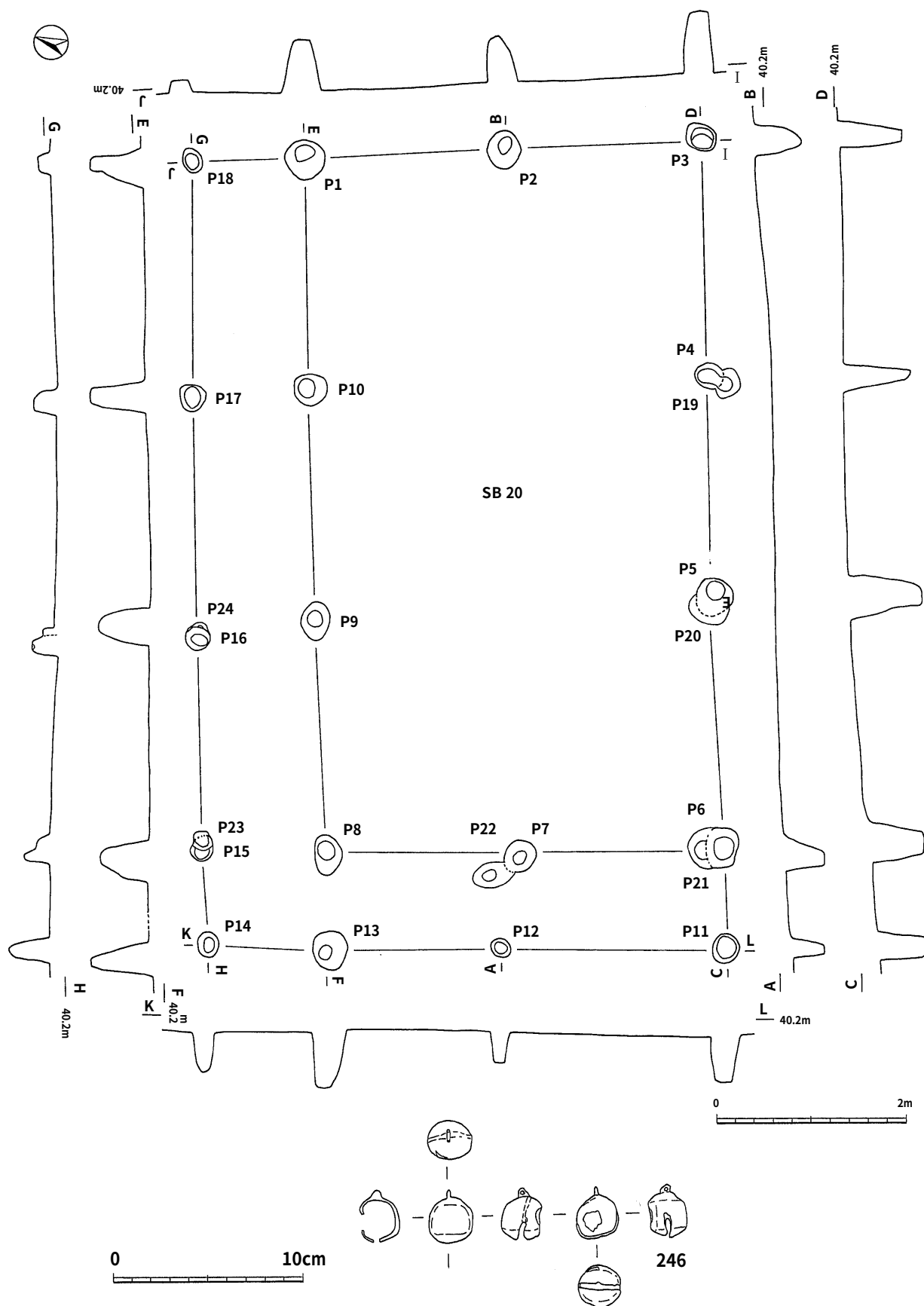


第 50 図 掘立柱建物跡19と出土遺物

第 21 表 掘立柱建物跡19の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 19	上屋 2 間	上屋 3 間	3. 20 m	4. 13 m	5. 55 m	6. 50 m	B・C-7	
	下屋 2 間半	下屋 3 間半	m	m	m	m	方位 E 68°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～10	1. 62 m	P 9 ～18	1. 13 m	P 1 ～2	1. 90 m	P 4 ～11	0. 95 m	
9 ～10	1. 58	11～12	1. 65	2 ～3	1. 80	14～15	0. 98	
4 ～5	1. 56	12～13	1. 48	3 ～4	1. 85	15～16	1. 70	
5 ～6	1. 53	13～14	1. 00	6 ～7	1. 85	16～17	1. 86	
				7 ～8	1. 80	17～18	2. 02	
				8 ～9	1. 95			

②⑩ 掘立柱建物跡 20 (S B 20)



第 51 図 掘立柱建物跡20と出土遺物

本遺構はC-4・5区に検出した。建物跡の桁行は東西方向で、上屋と下屋からなる。下屋は梁2間、桁行3間で、下屋が北側と西側に付いている。そして、掘立柱建物跡16と重なり合って検出している。掘立柱建物跡16との違いは掘立柱建物跡16の北西角が内側に柱穴を掘っているが、本遺構はそれがない。他の切り合いは掘立柱建物跡16と同じである。

出土遺物はP8に246の青銅製鈴が出土している。

第22表 掘立柱建物跡20の計測

建物		梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区		柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 20		上屋 2 間	上屋 3 間	4. 20 m	5. 40 m	7. 50 m	8. 50 m	C・D-4・5		
		下屋 3 間半	下屋 2 間半	m	m	m	m	方位 E 66°		
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間				
P 1 ～ 2	2. 13 m	P 1 ～18	1. 17 m	P 3 ～ 4	2. 45 m	P 6 ～11	1. 05 m			
2 ～ 3	2. 08	11～12	2. 35	4 ～ 5	2. 50	14～15	0. 97			
6 ～ 7	2. 50	12～13	1. 85	5 ～ 6	2. 25	15～16	2. 25			
7 ～ 8	2. 04	13～14	1. 25	8 ～ 9	2. 70	16～17	2. 55			
				9 ～10	2. 45	17～18	2. 50			
				1 ～10	2. 47					

② 掘立柱建物跡21 (SB21)

本遺構はC-6・7区に検出している。建物跡の桁行は南北方向で、梁2間、桁行3間である。南梁面の棟柱跡が少し外側に掘られている。建物跡としては大型に属する。

他の遺構との重なりは、掘立柱建物跡19と土坑Ⅱ-8と用途不明の土坑がみられる。また、掘立

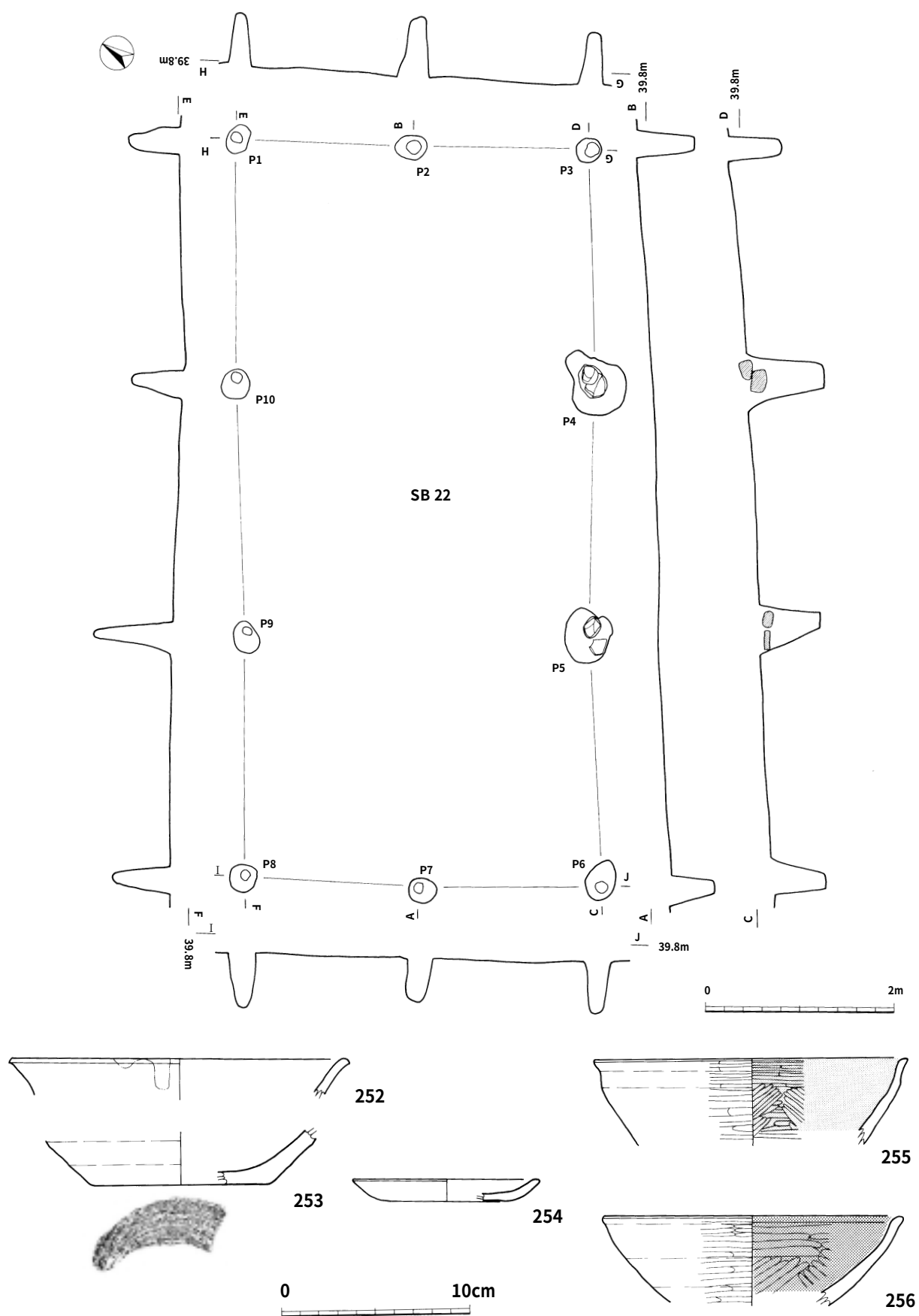
第23表 掘立柱建物跡21の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 49 × 40 × 35 2. 39 × 35 × 50 3. 43 × 36 × 58 4. 45 × 33 × 46 5. 55 × 38 × 57 6. 40 × 31 × 51 7. 55 × 50 × 62 8. 64 × 48 × 60 9. 80 × 64 × 60 10. 40 × 18 × 42
SB 21	上屋 2 間	上屋 3 間	3.65 m	m	6.10 m	m	C-6・7	
			m	m	m	m	方位 W25°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 10	1.80 m	P	m	P 1 ～ 2	2.10 m	P	m	
4 ～ 5	1.70			2 ～ 3	1.97			
5 ～ 6	1.83			3 ～ 4	2.05			
9 ～ 10	1.82			6 ～ 7	2.15			
				7 ～ 8	2.05			
		8 ～ 9	2.10					

柱建物跡24とは隣接し平行している。

出土遺物 (第52図 247～251)

247はP9から出土している。口縁部が少し外反する半球状の黒色土器Aの埴である。248はP6から出土した半球状の黒色土器Aの埴である。249はP7から出土した黒色土器Aの埴である。これら247～249は両面に丁寧な研磨がされている。250はP7から出土した土師器の坏である。251は、P2から出土したものである。器形は平底で体部から口縁部は直に立ち上がっている。



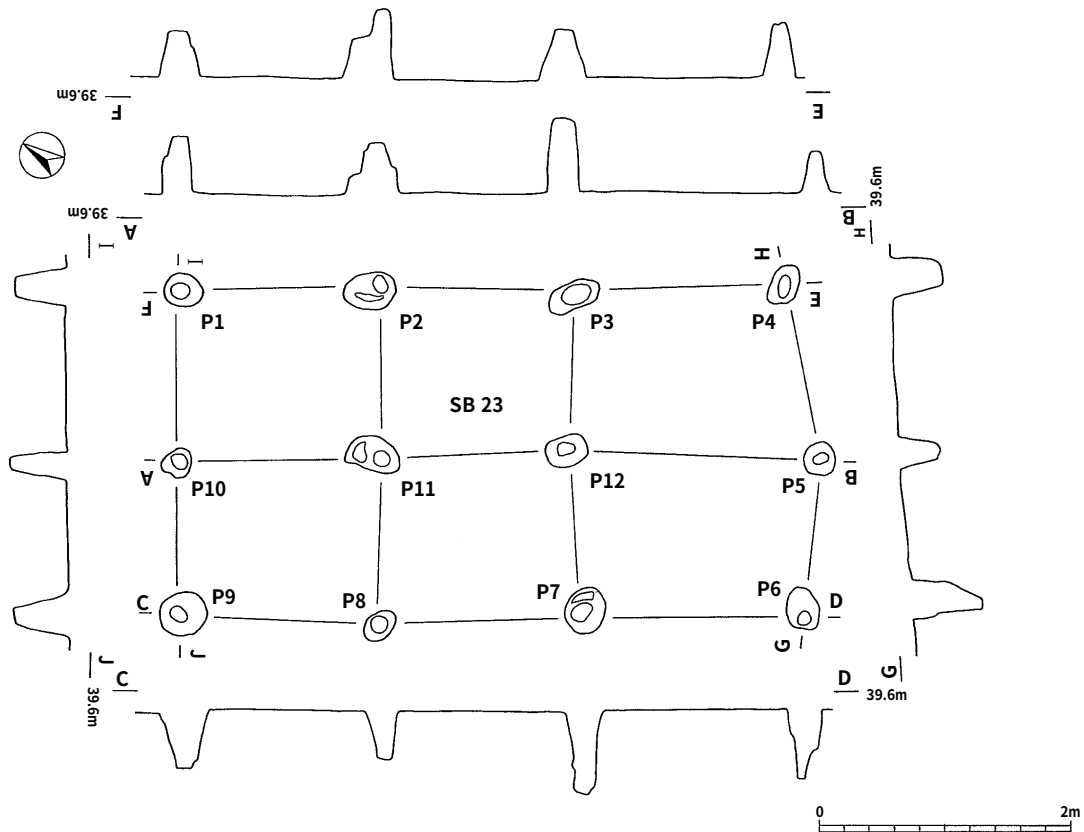
第 53 図 掘立柱建物跡22と出土遺物

第 24 表 掘立柱建物跡22の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm） P 1. 32 × 23 × 55 2. 35 × 27 × 65 3. 30 × 28 × 57 4. 78 × 56 × 83 5. 59 × 51 × 67 6. 45 × 30 × 56 7. 30 × 27 × 48 8. 31 × 30 × 58 9. 36 × 27 × 85 10. 35 × 30 × 56
SB 22	上屋 2 間	上屋 3 間	3.75 m	m	7.85 m	m	C・D-7	
			m	m	m	m	方位 E 55°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 2	1.87 m	P	m	P 3 ～ 4	2.50 m	P	m	
2 ～ 3	1.90			4 ～ 5	2.75			
6 ～ 7	1.90			5 ～ 6	2.70			
7 ～ 8	1.86			8 ～ 9	2.55			
				9 ～ 10	2.70			
				1 ～ 10	2.60			

㊸ 掘立柱建物跡 23 (SB23)

D・E-7 区に検出している。建物跡は桁行が南北方向で、梁 2 間、桁行 3 間の総柱である。この建物跡は、梁間の 1 間が狭く、南面の棟柱の位置が若干外側にはみ出している。さらに、桁行においては南側の 1 間が広く掘られている。よって、南側の部屋は広く取っていたと考えられる。



第 54 図 掘立柱建物跡23

他の遺構との重なり合いは、掘立柱建物跡 25 が直角にみられる。また、用途不明の土坑とも重なっている。

第25表 掘立柱建物跡23の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm） P 1. 32 × 28 × 38 2. 43 × 30 × 57 3. 43 × 22 × 40 4. 32 × 24 × 45 5. 27 × 26 × 33 6. 34 × 24 × 56 7. 37 × 34 × 67 8. 30 × 21 × 40 9. 38 × 35 × 47 10. 25 × 23 × 47 11. 43 × 29 × 42 12. 33 × 25 × 60
SB 23	上屋 2 間	上屋 2 間	2.25 m	m	4.80 m	m	D・E-7	
			m	m	m	m	方位 W34°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1～10	1.35 m	P	m	P 1～2	1.54 m	P	m	
10～9	1.17			2～3	1.56			
4～5	1.40			3～4	1.55			
5～6	1.27			6～7	1.77			
2～11	1.36			7～8	1.55			
8～11	1.31			8～9	1.60			
3～12	1.22			10～12	1.60			
7～12	1.29			11～12	1.46			
				5～12	2.01			

㊤ 掘立柱建物跡 24 (SB24)

本遺構はC・D-6・7区に検出している。建物跡は、桁行が南北方向にみられ、広い1間を使用した梁間2間、桁行3間である。よって、大型の建物に属する。

他の遺構との重なりは、焼土11・12・13のほか、土坑がみられる。また、溝4とは切り合いがみ

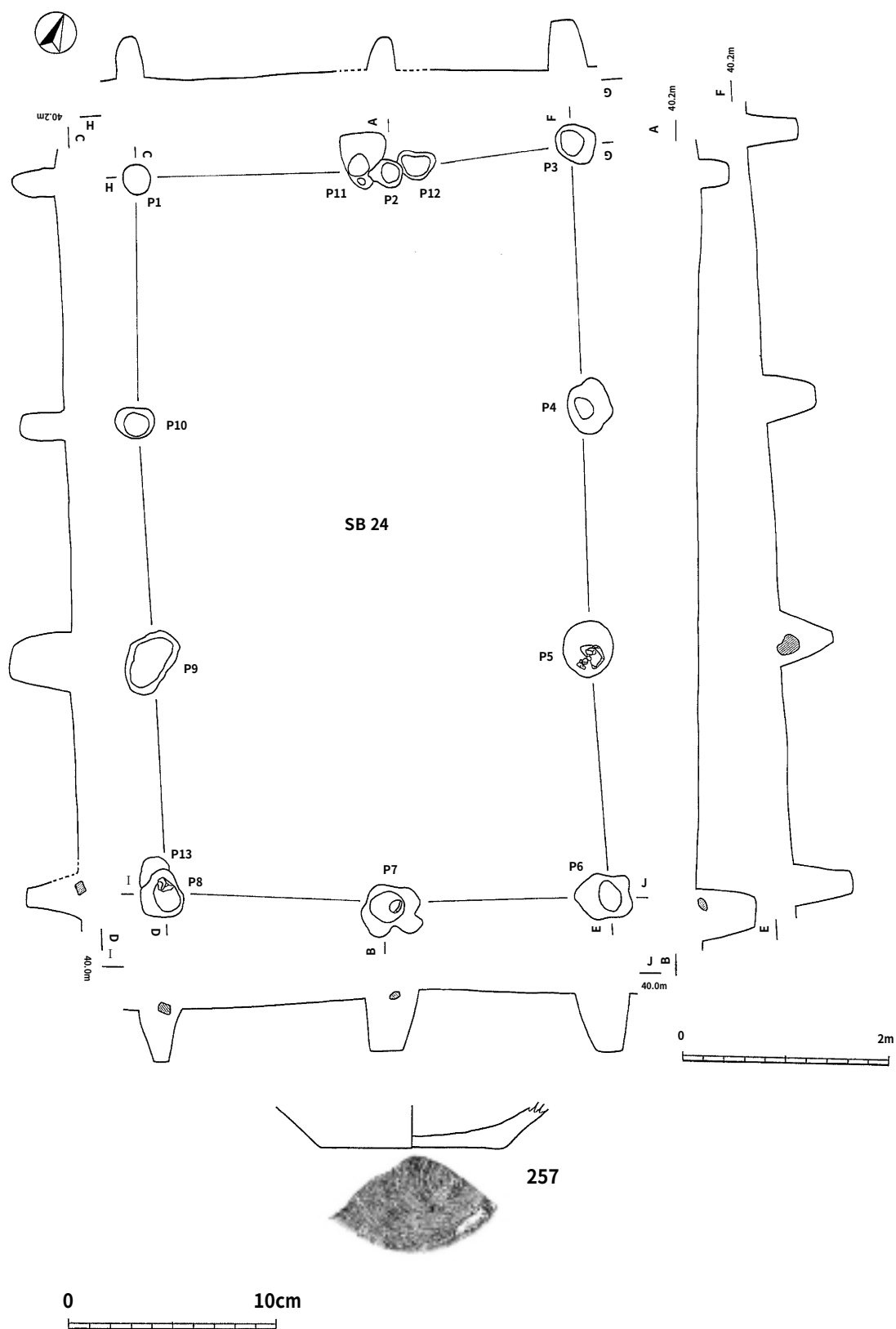
第26表 掘立柱建物跡24の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm）
SB 24	上屋 2 間	上屋 3 間	4.30 m	m	7.30 m	m	C・D-6・7	P 1. 30 × 28 × 42
			m	m	m	m	方位 W26°	2. 33 × 29 × 33
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3. 42 × 40 × 48
P 1 ～ 2	2.45 m	P	m	P 1 ～ 10	2.40 m	P	m	4. 50 × 43 × 50
2 ～ 3	1.80			10 ～ 9	2.30			5. 55 × 49 × 53
6 ～ 7	2.15			9 ～ 8	2.30			6. 40 × 53 × 58
7 ～ 8	2.15			6 ～ 5	2.42			7. 53 × 48 × 55
				5 ～ 4	2.32			8. 56 × 42 × 52
				4 ～ 3	2.58			9. 57 × 46 × 60
								10. 38 × 30 × 45

られ、時期差が認められる。さらに、方形竪穴遺構5、掘立柱建物跡21・22とは近接関係にあると考えられる。これらの遺構とは同時共存の可能性はない。

出土遺物 (第55図 257)

257 はP9から出土したやや大形の坏である。平底で体部・口縁部は外向する。底面は糸切り離しである。

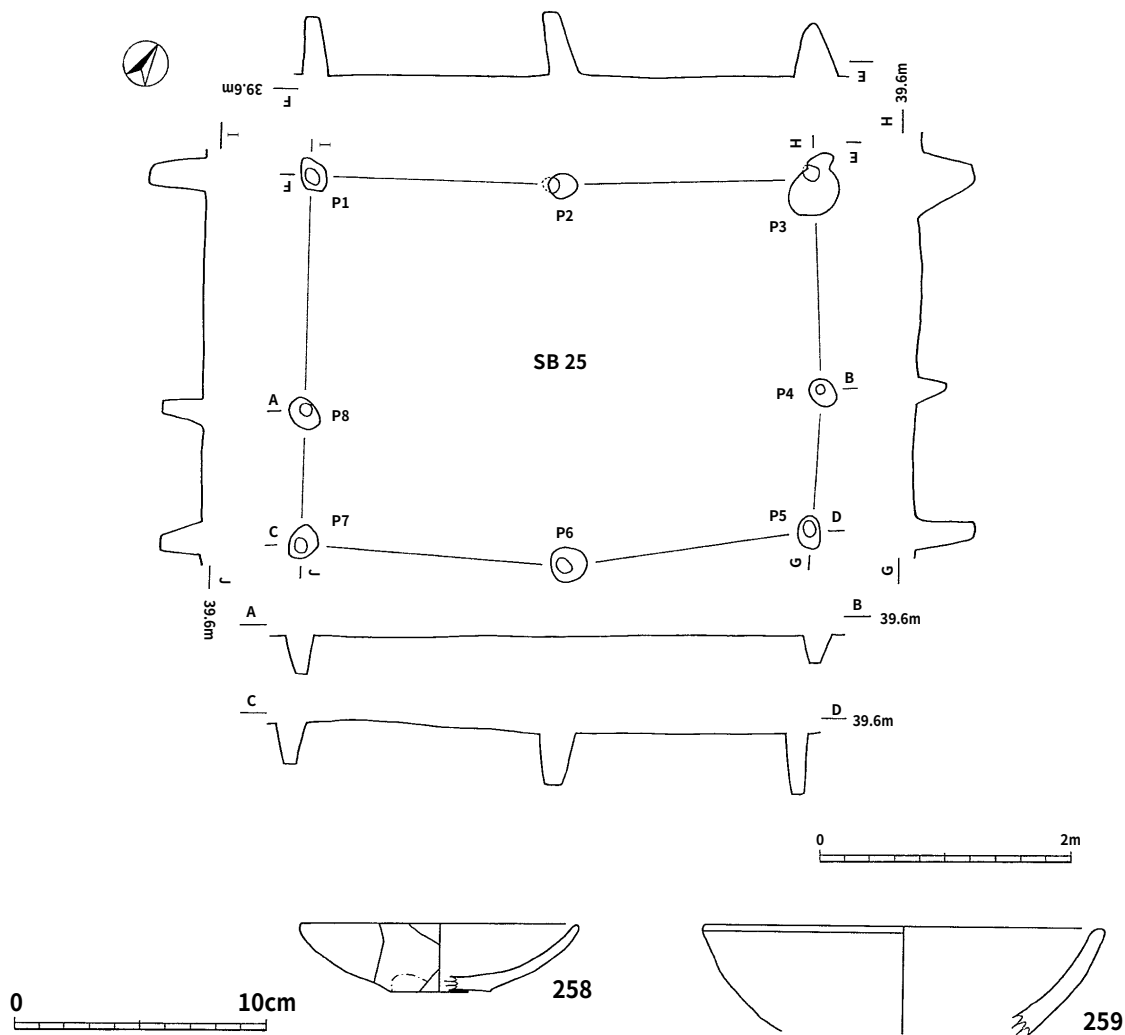


第 55 図 掘立柱建物跡24と出土遺物

㊦ 掘立柱建物跡 25 (S B25)

D・Eー7区に検出した。建物跡の桁行は東西方向で、梁2間(1間半)、桁行2間である。

他の遺構との重なりは、掘立柱建物跡 23 が直角にみられるほか、土坑がある。



第 56 図 掘立柱建物跡25と出土遺物

出土遺物(第 56 図 258・259)

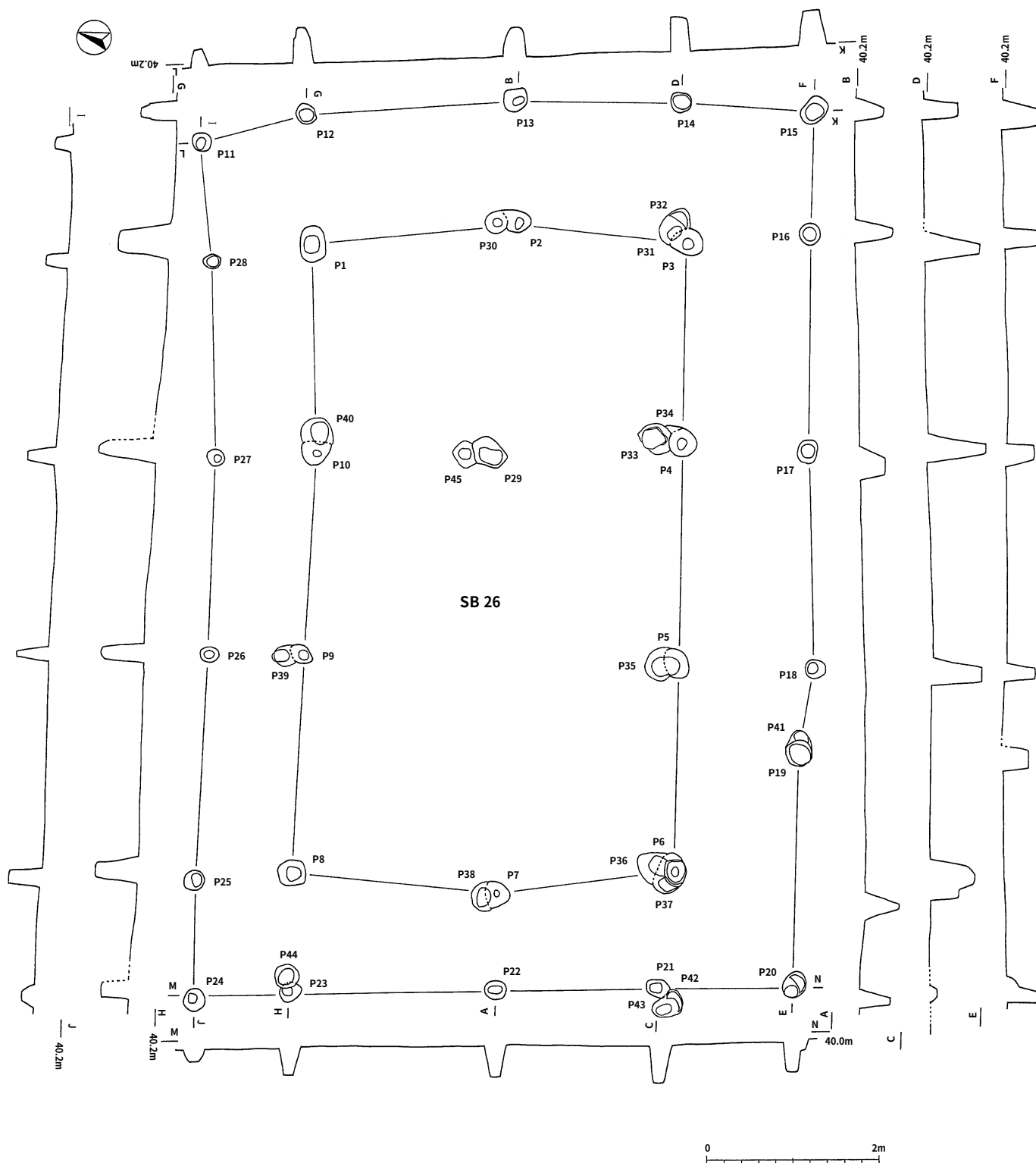
白磁皿の 258 と土師器坑の 259 が出土している。

第 27 表 掘立柱建物跡25の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 25	上屋 2 間	上屋 2 間	2.95 m	m	4.00 m	m	D・E-7	P 1. 32 × 21 × 46
			m	m	m	m	方位 E 58°	2. 24 × 20 × 50
								3. 53 × 33 × 48
								4. 25 × 20 × 24
								5. 28 × 18 × 48
								6. 30 × 28 × 42
								7. 30 × 23 × 34
								8. 28 × 21 × 34
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 3 ~ 4	1.70 m	P	m	P 1 ~ 2	1.92 m	P	m	
4 ~ 5	1.10			2 ~ 3	2.00			
7 ~ 8	1.10			5 ~ 6	2.00			
8 ~ 1	1.85			6 ~ 7	2.10			

②6 掘立柱建物跡 26 (S B26)

本遺構はC－8区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなり上屋は梁2間、桁行3間で、下屋は半間を廻らしている。下屋の北東角の柱穴は少し狭めている位置にある。

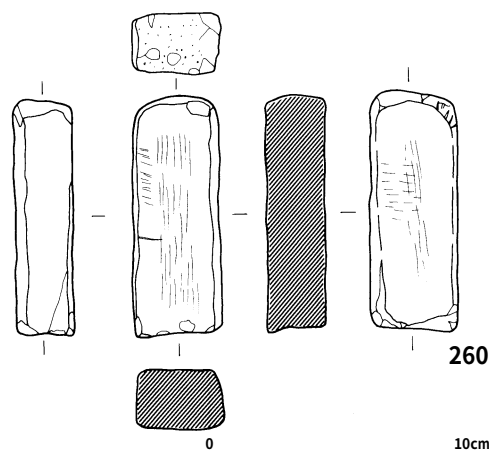


第 57 図 掘立柱建物跡26

この建物跡は、掘立柱建物跡 31・32 と重なり
検出している。それは、下屋の桁行南面の柱穴が
3重に検出している。このことは3回同じ所に建
てなおしたことを物語っている。また、掘立柱建
物跡 27 も重なり、土坑も周囲にみられる。

出土遺物(第 58 図 260)

260 は P 5 に砥石が出土している。
石材は砂岩質である。2面の中央部を使用してい
る。また、頂部は敲石に使用されている。



第 58 図 掘立柱建物跡26の出土遺物

第 28 表 掘立柱建物跡26の計測

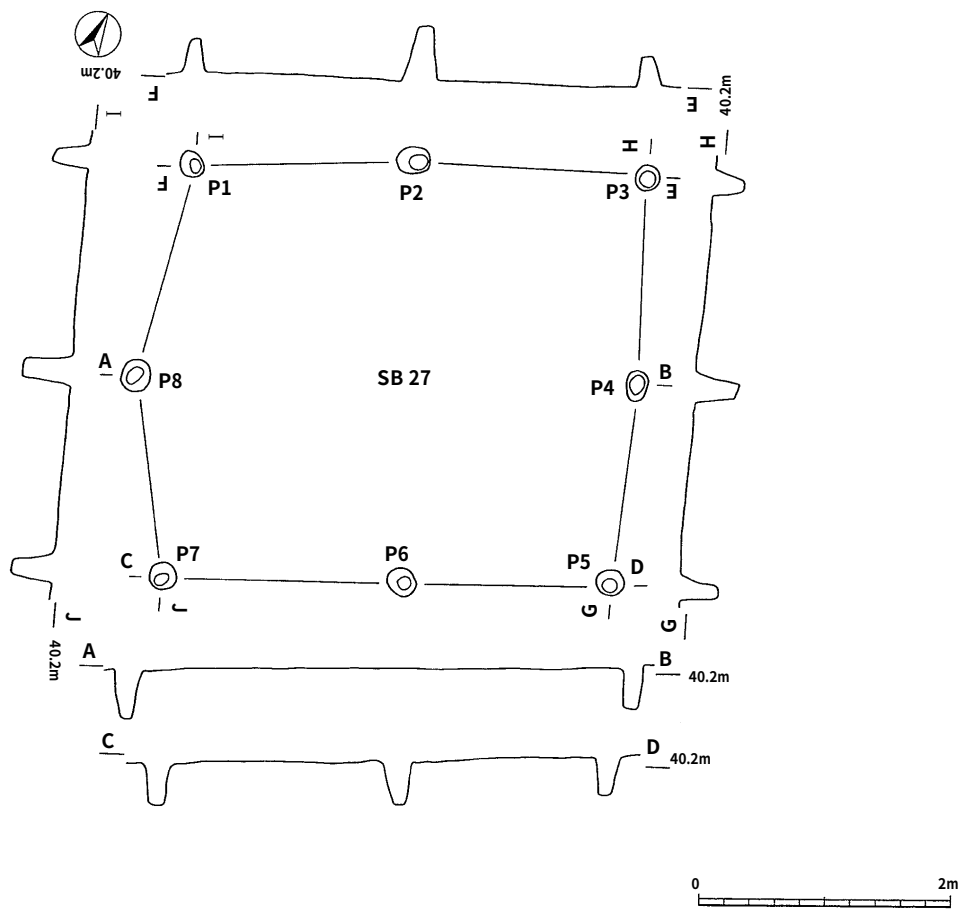
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 26	上屋 2 間	上屋 3 間	4. 37 m	7. 15 m	7. 30 m	10. 24 m	C・D-8	
	下屋 4 間	下屋 5 間	m	m	m	m	方位 E 72°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 2	2. 40 m	P 11～12	1. 27 m	P 3 ～ 4	2. 33 m	P 15～16	1. 45 m	
2 ～ 3	2. 00	12～13	2. 45	4 ～ 5	2. 60	16～17	2. 50	
6 ～ 7	2. 07	13～14	1. 90	5 ～ 6	2. 40	17～18	2. 53	
7 ～ 8	2. 37	14～15	1. 53	8 ～ 9	2. 55	18～19	1. 00	
		20～21	1. 60	9 ～10	2. 35	19～20	2. 78	
		21～22	1. 87	10～ 1	2. 45	24～25	1. 37	
		22～23	2. 45			25～26	2. 65	
		23～24	1. 12			26～27	2. 29	
						27～28	2. 30	
						28～11	1. 40	

② 掘立柱建物跡 27 (SB27)

本遺構はC-8区に検出した。東西の桁行で梁間2間、桁行2間の建物跡である。

第 29 表 掘立柱建物跡27の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 22 × 18 × 30 2. 27 × 12 × 45 3. 22 × 20 × 27 4. 26 × 18 × 36 5. 23 × 21 × 32 6. 25 × 21 × 35 7. 23 × 21 × 42 8. 27 × 23 × 40
SB 27	上屋 2 間	上屋 2 間	3.23 m	m	3.60 m	m	B・C-8	
			m	m	m	m	方位 E 63°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 3 ～ 4	1.65 m	P	m	P 1 ～ 2	1.68 m	P	m	
4 ～ 5	1.55			2 ～ 3	1.82			
7 ～ 8	1.62			5 ～ 6	1.63			
8 ～ 1	1.74			6 ～ 7	1.92			



第 59 図 掘立柱建物跡27

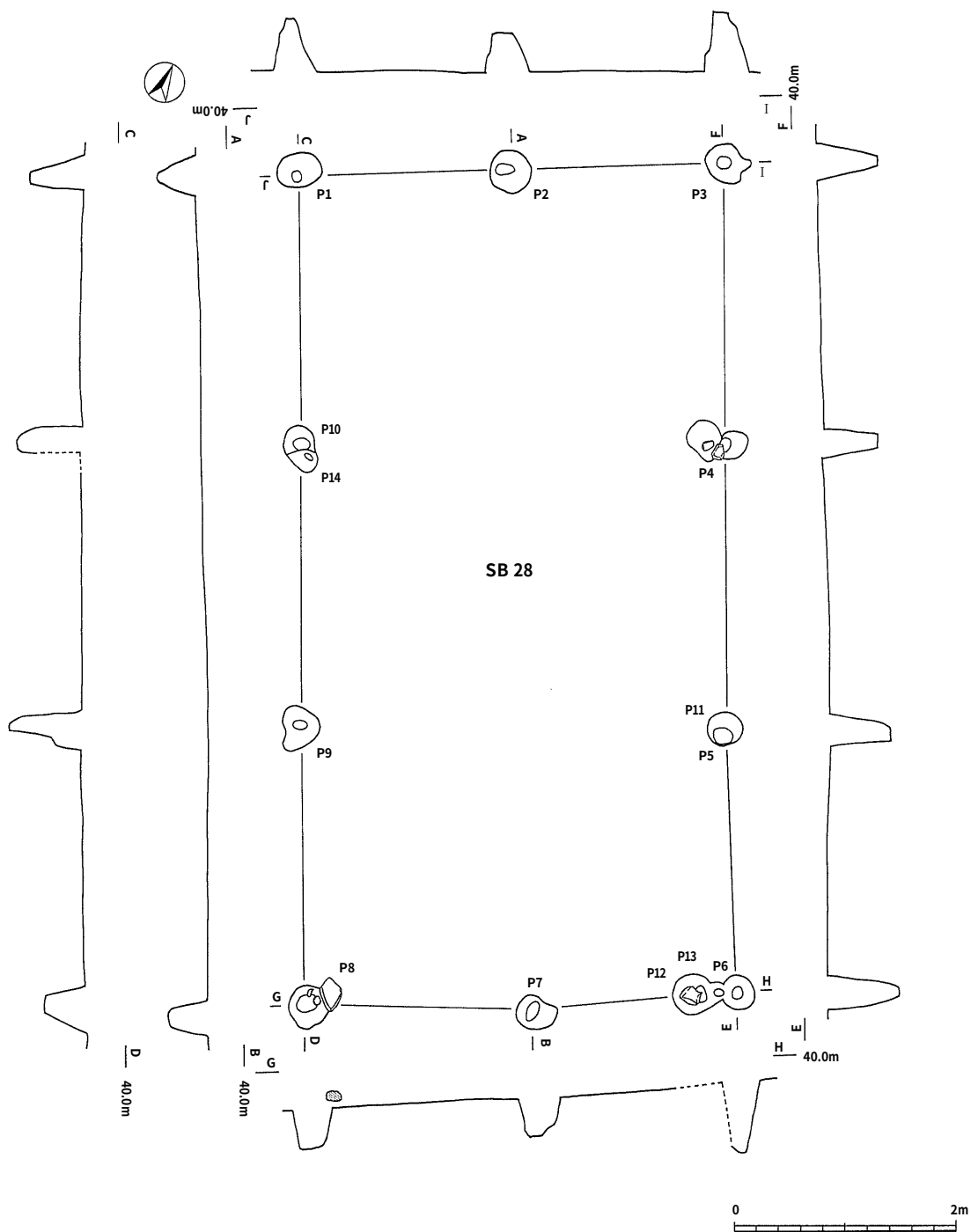
②⑧ 掘立柱建物跡 28 (S B28)

本遺構はD-7区に検出した。建物跡の桁行は南北で、梁間2間、桁行3間である。この建物の1間は広いため、大型の建物跡の類に属する。

本建物跡に重なっている遺構は焼土15・16・17と土坑がある。また、近接している建物は掘立柱建物跡22・23がある。

第 30 表 掘立柱建物跡28の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm） P 1. 40 × 30 × 47 2. 40 × 35 × 37 3. 42 × 32 × 45 4. 30 × 24 × 49 5. 32 × 27 × 56 6. 32 × 28 × 66 7. 37 × 30 × 37 8. 40 × 35 × 40 9. 42 × 34 × 68 10. 30 × 25 × 60
SB 28	上屋 2 間	上屋 3 間	3. 85 m	m	7. 45 m	m	D-7	
			m	m	m	m	方位 W27°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 2	1. 87 m	P	m	P 1 ～10	2. 42 m	P	m	
2 ～ 3	1. 95			9 ～10	2. 53			
6 ～ 7	1. 85			8 ～ 9	2. 50			
7 ～ 8	2. 04			3 ～ 4	2. 52			
				4 ～ 5	2. 62			
				5 ～ 6	2. 32			

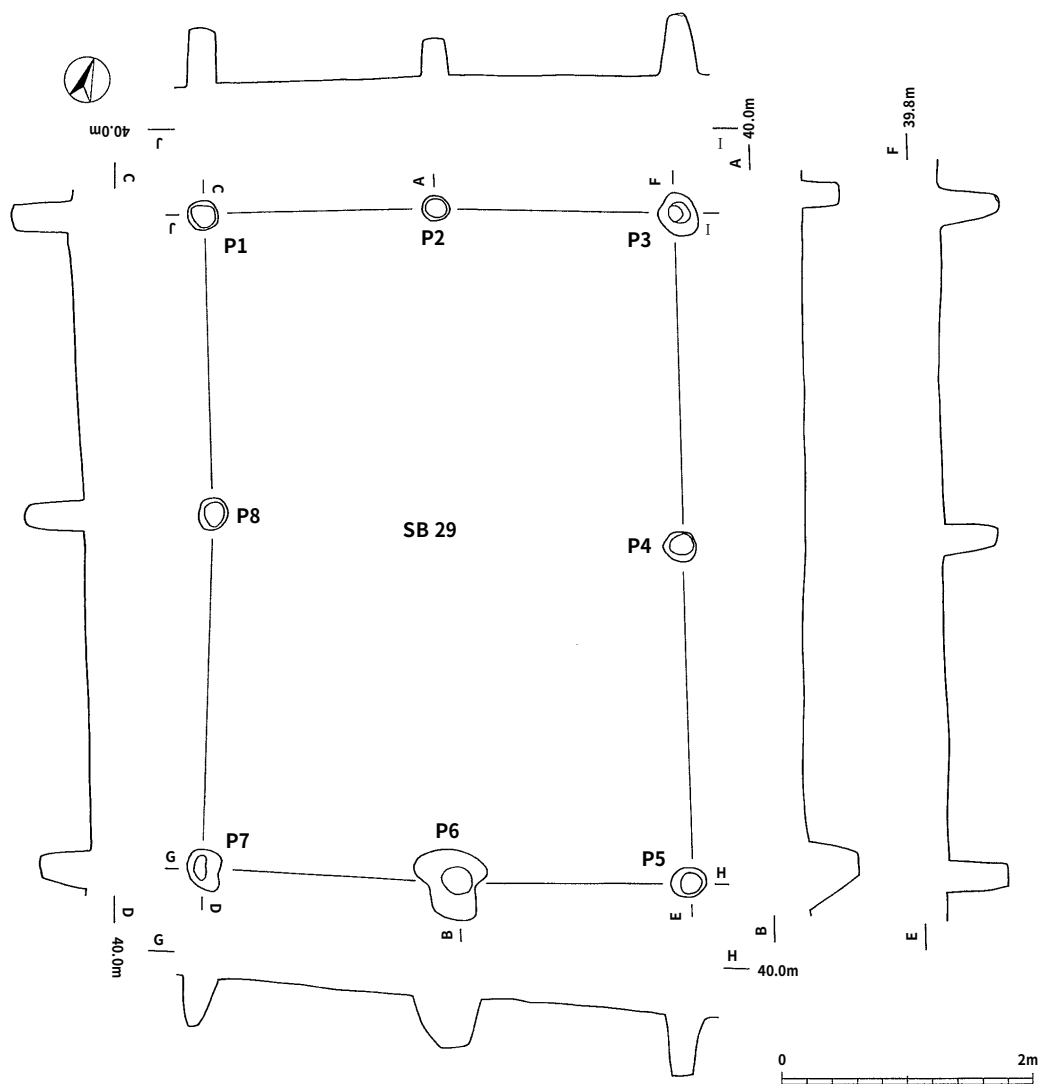


第 60 図 掘立柱建物跡28

②⑨ 掘立柱建物跡 29 (S B29)

本遺構はE・F－5・6区に検出した。建物跡の桁行は南北方向で、梁間2間、桁行3間である。その梁南面の棟柱跡は南側に出ている。なお、この建物跡は1間が広い大型の建物に属する。

この建物跡と重なる遺構は、掘立柱建物跡3・30である。なお、周囲には土坑が東西にみられる。



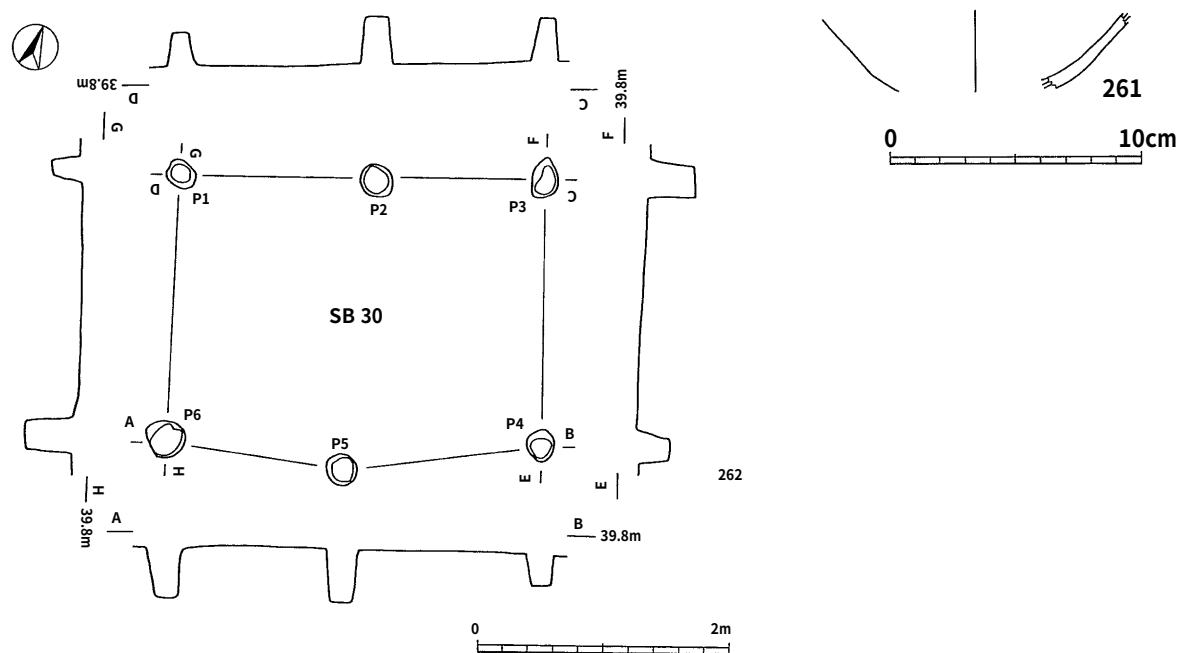
第 61 図 掘立柱建物跡29

第 31 表 掘立柱建物跡29の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm)
SB 29	上屋 2 間	上屋 2 間	3.75 m	m	5.32 m	m	E・F-5・6	P 1. 27 × 24 × 47
			m	m	m	m	方位 W20°	2. 23 × 20 × 31
								3. 37 × 30 × 50
								4. 28 × 24 × 44
								5. 30 × 22 × 50
								6. 61 × 50 × 42
								7. 35 × 25 × 40
								8. 28 × 23 × 48
	上屋梁間柱間	下屋梁間柱間		上屋桁行柱間	下屋桁行柱間			
P 1 ~ 2	1.85 m	P	m	P 3 ~ 4	2.63 m	P	m	
2 ~ 3	1.90			4 ~ 5	2.68			
5 ~ 6	1.85			7 ~ 8	2.80			
6 ~ 7	2.05			8 ~ 1	2.38			

③〇 掘立柱建物跡 30 (S B30)

本遺構はE－6区に検出した。桁行方向は東西で、梁1間、桁行2間である。重なりの遺構は掘立柱建物跡3・29である。



第 62 図 掘立柱建物跡30と出土遺物

第 32 表 掘立柱建物跡30の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm） P 1. 26 × 20 × 28 2. 28 × 22 × 39 3. 33 × 20 × 35 4. 26 × 22 × 25 5. 26 × 24 × 43 6. 33 × 30 × 40
SB 30	上屋 1 間	上屋 2 間	2.12 m	m	2.90 m	m	E-6	
			m	m	m	m	方位 E 70°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 6	2.15 m	P	m	P 1 ～ 2	1.56 m	P	m	
3 ～ 4	2.12			2 ～ 3	1.45			
				4 ～ 5	1.58			
				5 ～ 6	1.40			

出土遺物 (第 62 図 261)

261 は白磁の碗の体部である。口縁部や底部がないため分類は不明である。

③ 掘立柱建物跡 31 (SB31)

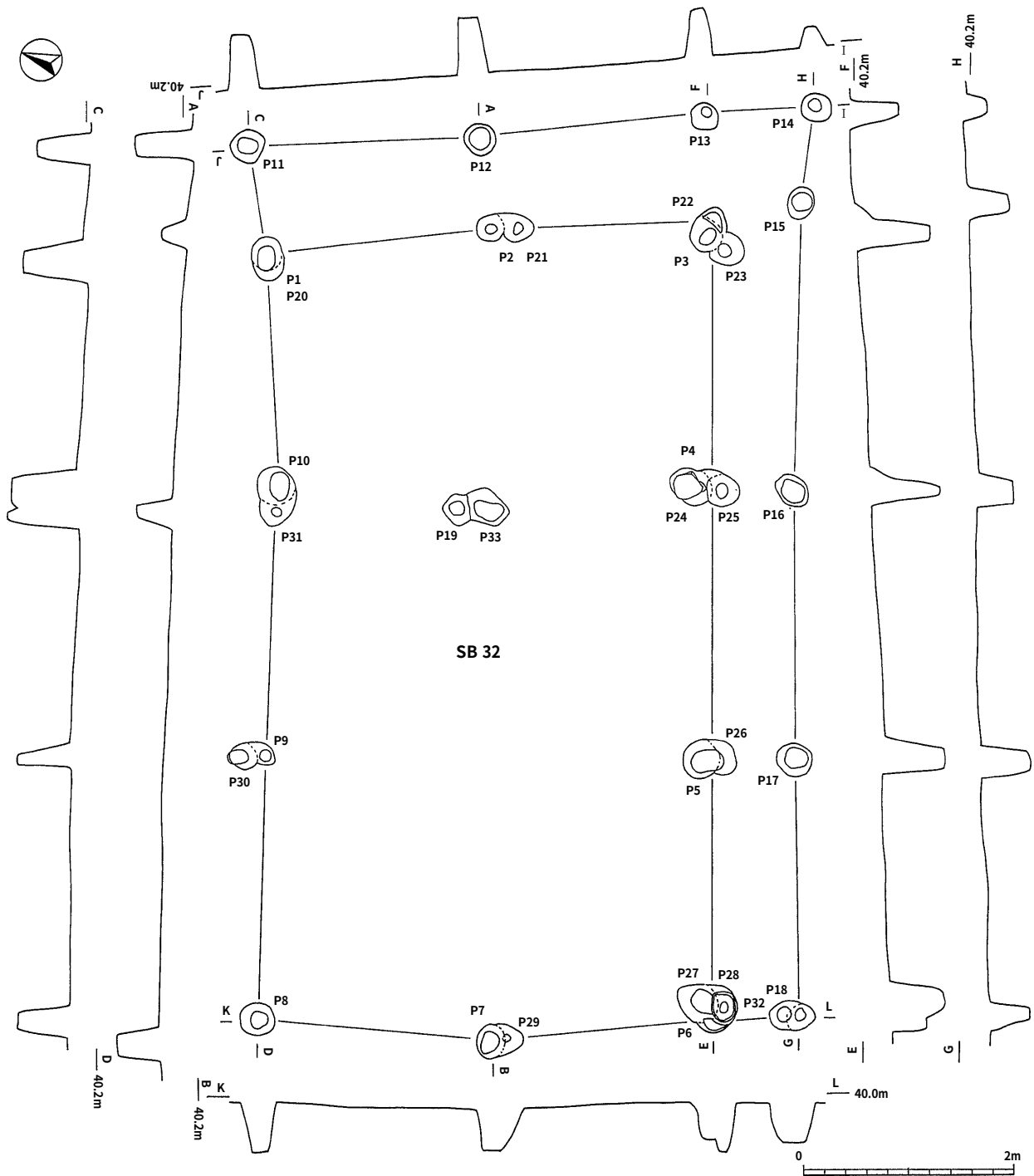
本遺構はC-8区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなる。上屋は梁2間、桁行3間で、下屋は西面と南面に半間で付く柱穴がみられる。他の遺構の重なりは、掘立柱建物跡26・32がある。この遺構の3重は上屋の南桁行の柱穴が3重に検出していることから考えられる。また、掘立柱建物跡27も変則的に重なっている。なお、周囲は近接して土坑やピットがみられるが量は少ない。

出土遺物 (第 63 図 262)

262 はP15 から出土している土師器の坏である。底部から体部・口縁部への立ち上がりは丸味があり、底部の中央は上がっている。底面は糸切り離しである。

③ 掘立柱建物跡 32 (S B32)

本遺構はC－8区に検出した。この建物跡の桁行方向は東西で、上屋と下屋からなる。上屋は梁2間、桁行3間で、下屋は東面と南面に半間で付く柱穴がみられる。他の遺構の重なりは、掘立柱建物跡 26・31 がある。この遺構の3重は上屋の南桁行の柱穴が3重に検出していることから考えられる。また、掘立柱建物跡 27 も変則的に重なっている。なお、周囲は近接して土坑やピットがみられるが量は少ない。



第 64 図 掘立柱建物跡32

第33表 掘立柱建物跡31の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ（cm） P 1. 33 × 30 × 60 2. 28 × 30 × 46 3. 35 × 32 × 70 4. 41 × 33 × 68 5. 39 × 37 × 60 6. 40 × 37 × 50 7. 33 × 28 × 43 8. 34 × 30 × 52 9. — × 23 × 53 10. — × 39 × 62 11. 34 × 26 × 39 12. 35 × 28 × 25 13. 34 × 32 × 50 14. — × 29 × 40 15. 26 × 25 × 29 16. 29 × 25 × 43 17. 35 × 29 × 37 18. 30 × 27 × 35
SB 31	上屋 2 間	上屋 3 間	4.20 m	5.30 m	7.28 m	8.70 m	C・D-8	
	下屋 2 間半	下屋 3 間半	m	m	m	m	方位 E 72°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 2	2.15 m	P 3 ～ 11	0.98 m	P 3 ～ 4	2.37 m	P 11 ～ 12	2.75 m	
2 ～ 3	2.09	15 ～ 16	1.00	4 ～ 5	2.65	12 ～ 13	2.55	
6 ～ 7	2.12	16 ～ 17	1.83	5 ～ 6	2.30	13 ～ 14	2.45	
7 ～ 8	2.20	17 ～ 18	2.53	1 ～ 10	2.15	14 ～ 15	0.93	
				10 ～ 9	2.56	8 ～ 18	1.18	
				9 ～ 8	2.51			

第34表 掘立柱建物跡32の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区	柱穴の長径×短径×深さ (cm) P 1. 34 × 30 × 63 2. 27 × 25 × 25 3. 36 × 32 × 70 4. 32 × — × 67 5. — × 39 × 59 6. 47 × — × 53 7. 34 × 26 × 40 8. 35 × 31 × 50 9. 23 × 20 × 52 10. 38 × 35 × 64 11. 35 × 30 × 56 12. 33 × 30 × 56 13. 28 × 25 × 47 14. 32 × 28 × 22 15. 32 × 25 × 40 16. 36 × 28 × 34 17. 37 × 33 × 47 18. 28 × 22 × 28
SB 32	上屋 2 間	上屋 3 間	4.25 m	5.40 m	7.70 m	8.70 m	C・D-8	
	下屋 2 間半	下屋 3 間半	m	m	m	m	方位 E 70°	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		
P 1 ～ 2	2.15 m	P 11～12	2.23 m	P 1 ～10	2.23 m	P 14～15	0.93 m	
2 ～ 3	2.08	12～13	2.18	10～ 9	2.60	15～16	2.80	
8 ～ 7	2.23	13～14	1.05	9 ～ 8	2.55	16～17	2.53	
7 ～ 6	2.15	6 ～18	0.90	3 ～ 4	2.45	17～18	2.48	
				4 ～ 5	2.60	1 ～11	1.09	
				5 ～ 6	2.50			

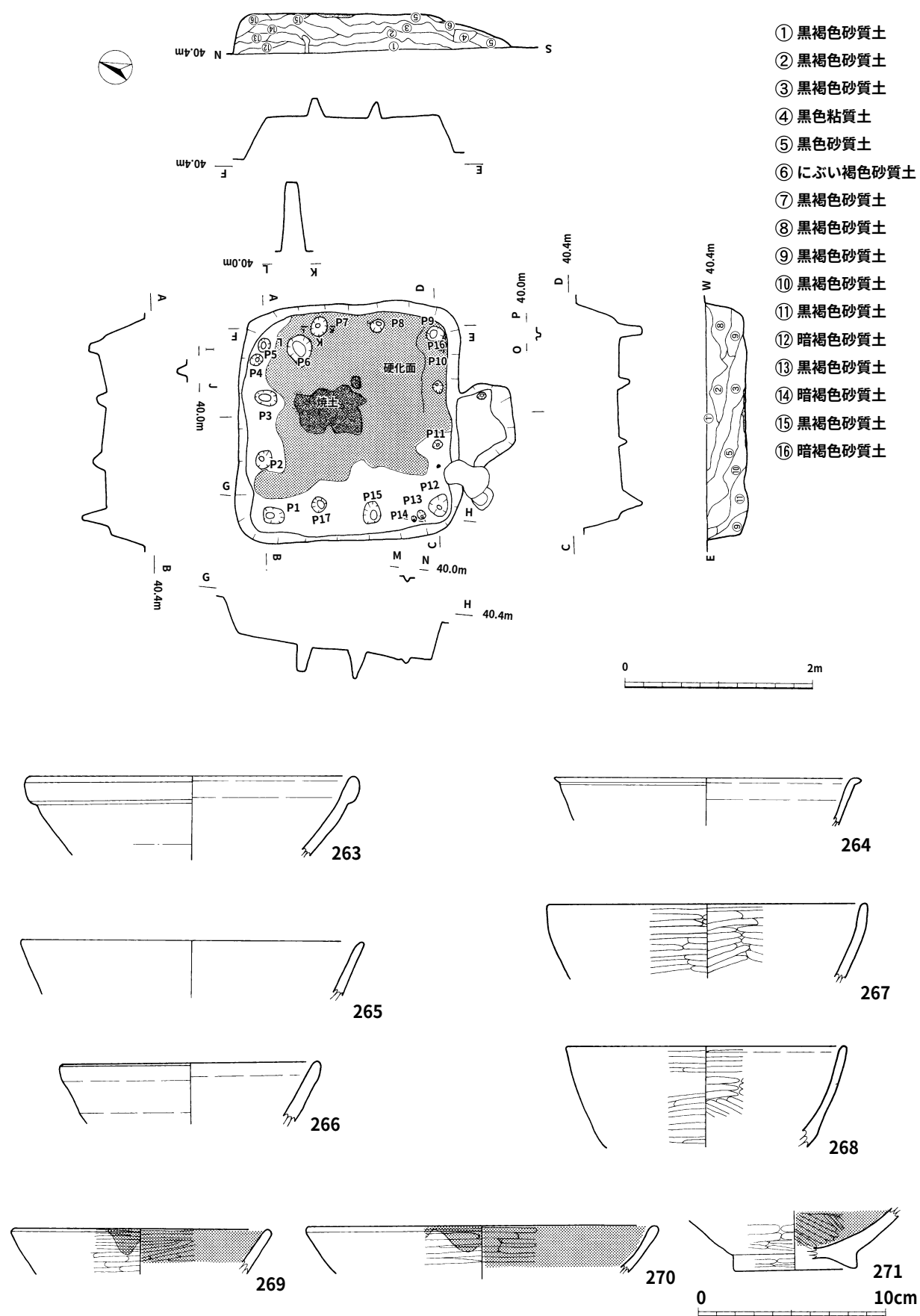
イ 方形竪穴遺構

① 方形竪穴遺構 1

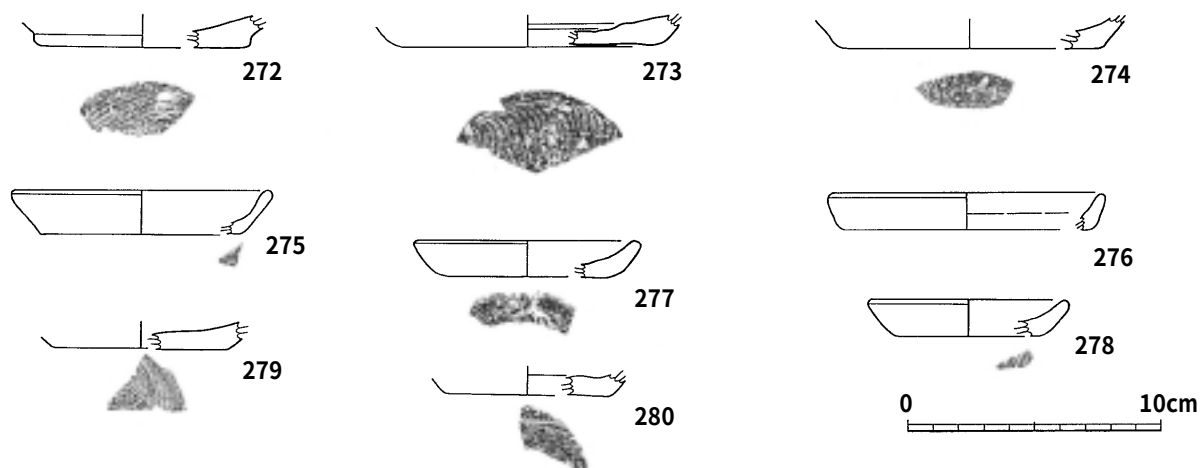
本遺構はC-4区に検出した。規模は東西2 m50 cm、南北2 m40 cm、深さ40 cmの竪穴遺構である。南側には1段の段差があり、入り口の可能性が高い。竪穴内には17か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は20 cm前後のものと、8 cm前後のものとある。後者はP10・11で深さは10 cmと浅く梯子設置のピットの可能性もある。他は20 cm前後である。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたとと思われる硬化面があり、その上に炭化物が4 cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにすれば床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭を置いたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は西側からの堆積が観察できる。各層とも色調・土質に大差はなく、同形のブロック（アカ



第65図 方形竪穴遺構1と出土遺物(1)



第 66 図 方形竪穴遺構1の出土遺物 (2)

ホヤ・V層・シラス) が混入することから、人為的に西側から埋めたと考えられる。

出土遺物は、白磁の玉縁(263)、端反り(264)、青磁(265)、土師器の埴(267・268)、坏(266・272～274)、黒色土器Aの埴(269～271)、小皿(275～280)等が出土している。

② 方形竪穴遺構 2

本遺構はC－5区に検出した。規模は東西2m50cm、南北2m、深さ70cmの竪穴遺構である。竪穴内には14か所の柱穴が東西壁と南壁に沿って廻っている。柱穴の径は20cm前後のものと、10cm前後のものとある。この内P5・6は支え柱跡であるが、P12・13は梯子設置のピットと想定される。深さは20cm前後と10cm前後がある。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたとと思われる硬化面があり、その上に炭化物が3cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてIc層を主体にアカホヤブロック、黒褐色(V層)ブロック、シラスブロックがまだらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

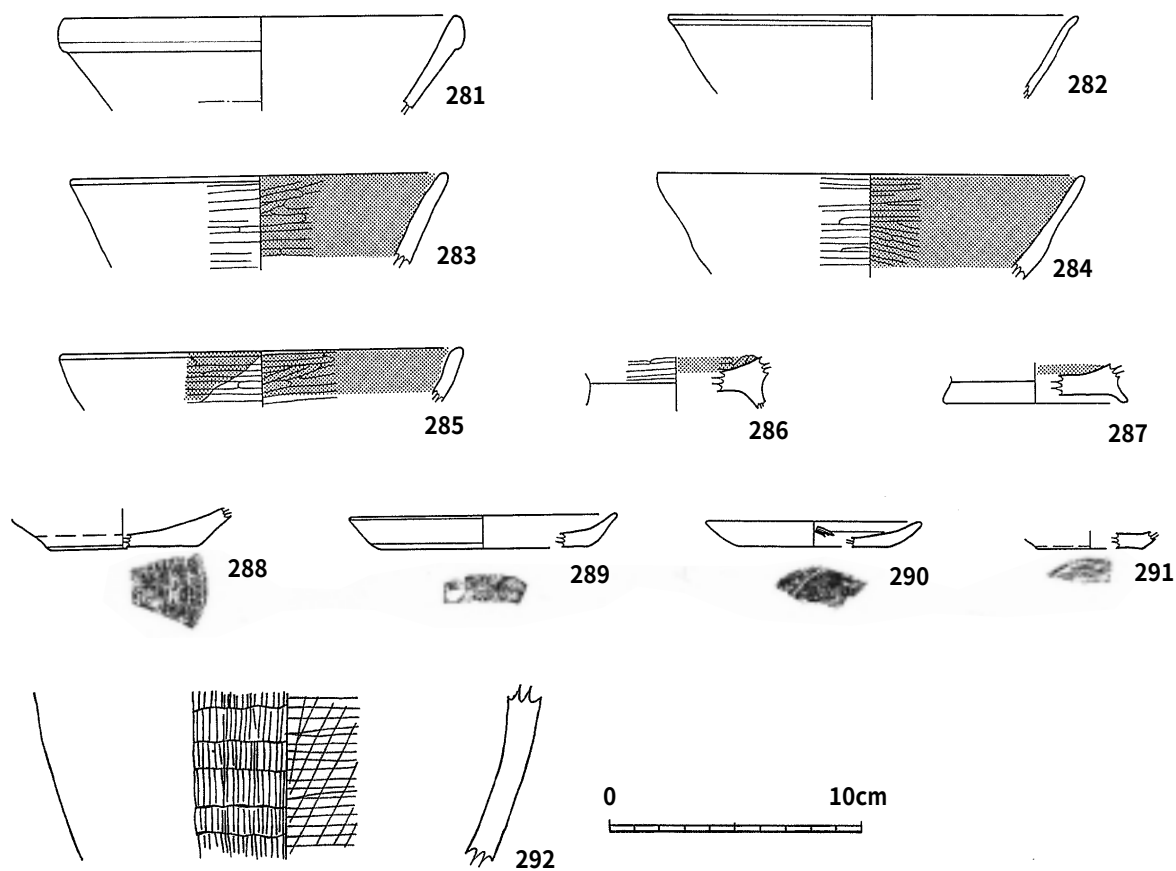
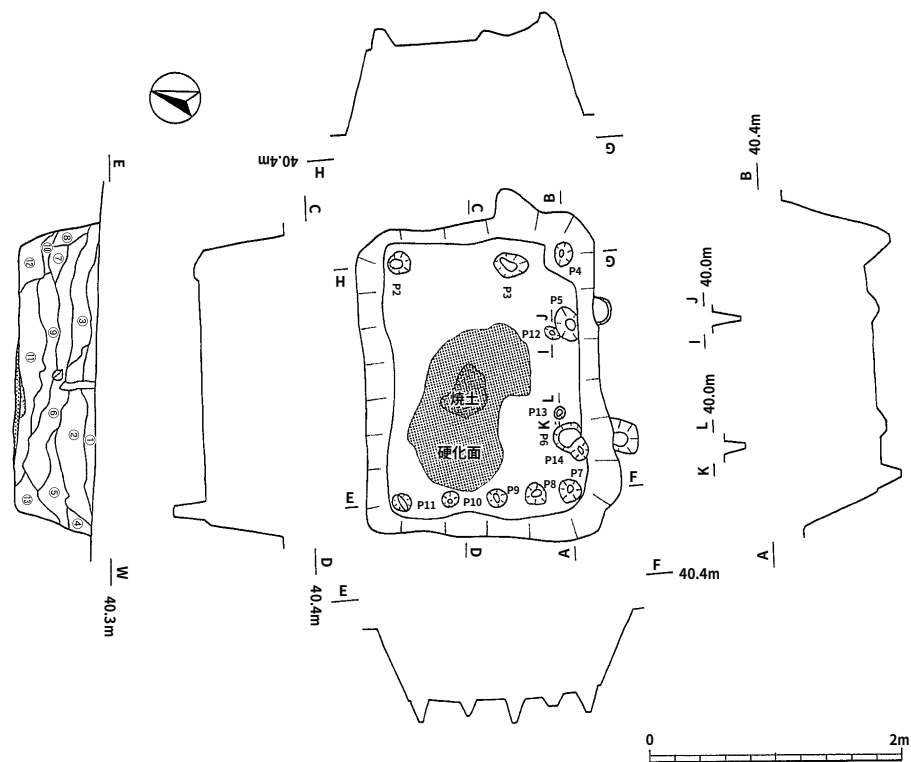
出土遺物は、白磁の玉縁(281)、端反り(282)、黒色土器Aの埴(283～287)、土師器の坏(288)、小皿(289～291)、滑石製石鍋(292)等が出土している。

③ 方形竪穴遺構 3

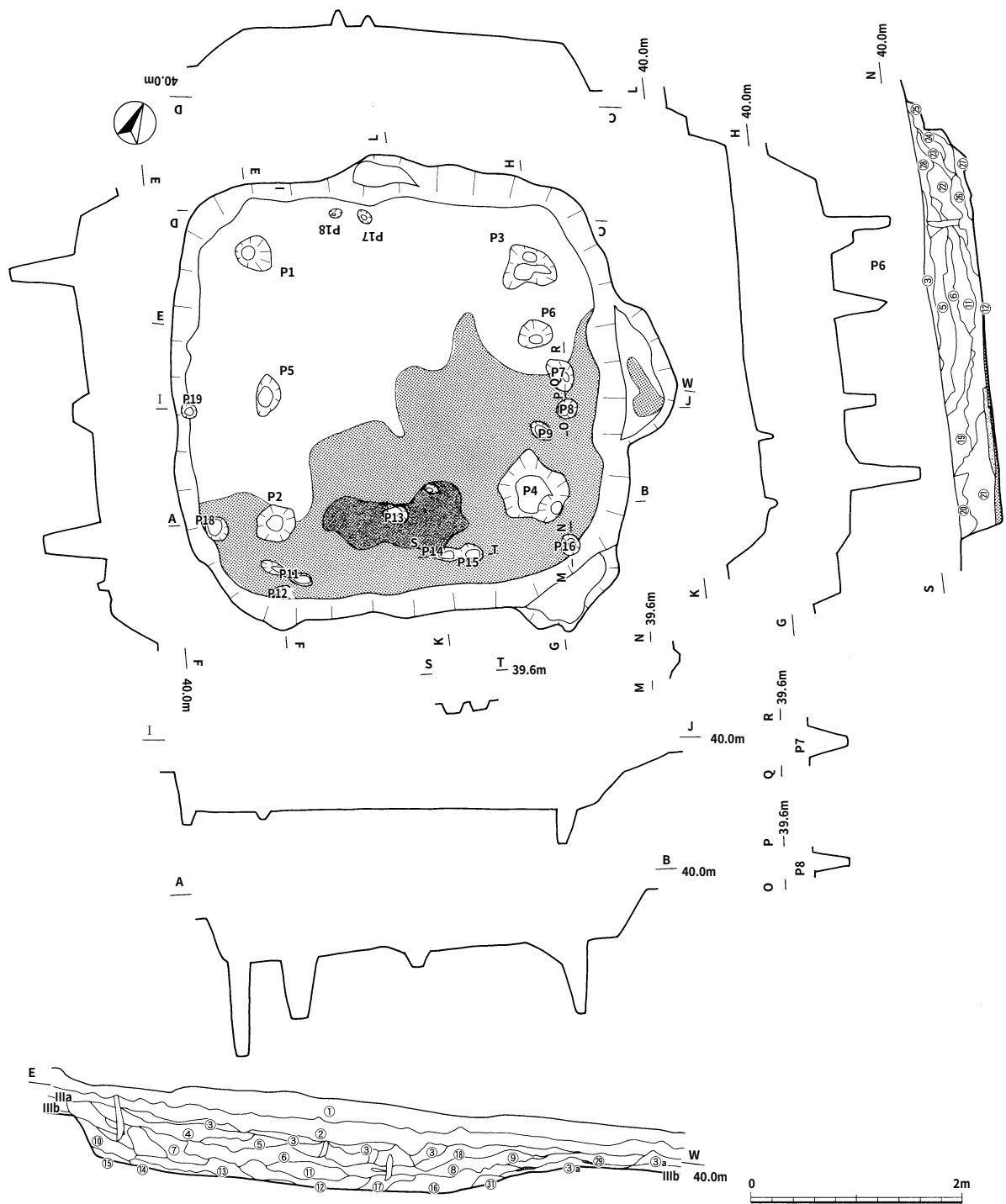
本遺構はC－5区に検出した。規模は東西2m10cm、南北1m70cm、深さ45cmの竪穴遺構である。竪穴内には11か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は20cm前後のものと、10cm前後のものとあり、深さは30cm前後で深い。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたとと思われる硬化面があり、その上に炭化物が3cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭を置いたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

- ① 暗褐色砂質土
- ② 黒褐色砂質土
- ③ 黒褐色砂質土
- ④ 黒褐色
- ⑤ 暗褐色砂質土
- ⑥ 黒褐色砂質土
- ⑦ 暗褐色砂質土
- ⑧ 暗褐色砂質土
- ⑨ 暗褐色砂質土
- ⑩ 暗褐色砂質土
- ⑪ 暗褐色砂質土
- ⑫ 黒褐色
- ⑬ 黒褐色
- ⑭ 硬化面

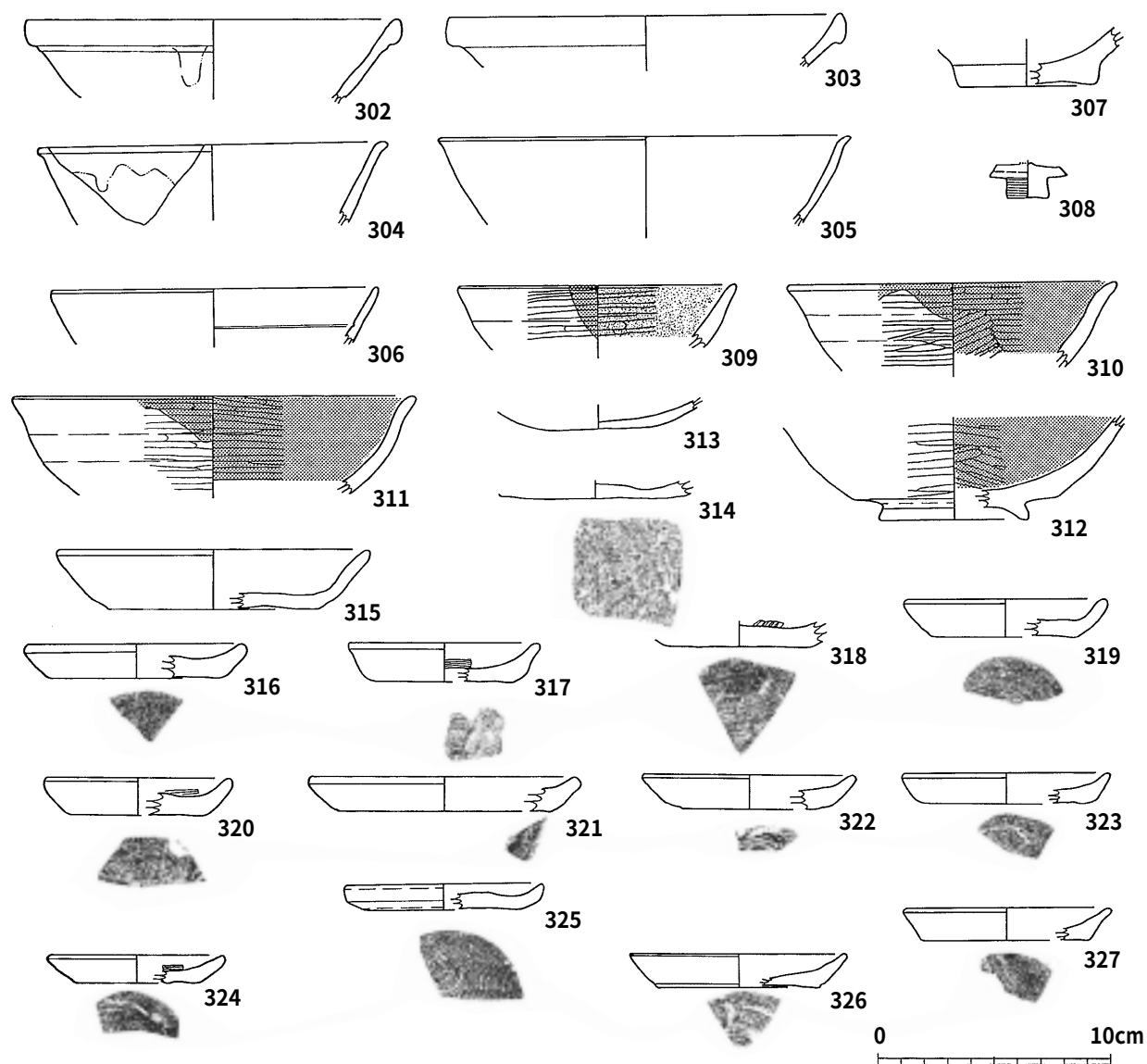


第 67 図 方形竪穴遺構2と出土遺物



- | | | | | | |
|-----------|--------|-----------|--------|--------|--------|
| ① にふい黄褐色土 | ⑦ 暗褐色土 | ⑬ 暗褐色土 | ⑰ 暗褐色土 | ⑲ 暗褐色土 | ⑳ 暗褐色土 |
| ② 暗褐色土 | ⑧ 暗褐色土 | ⑭ 褐色土 | ⑱ 暗褐色土 | ㉑ 暗褐色土 | ㉒ 暗褐色土 |
| ③ 暗褐色土 | ⑨ 暗褐色土 | ⑮ 暗褐色土 | ㉓ 暗褐色土 | ㉔ 暗褐色土 | ㉕ 暗褐色土 |
| ④ 暗褐色土 | ⑩ 暗褐色土 | ⑯ 暗褐色土 | ㉖ 暗褐色土 | ㉗ 暗褐色土 | ㉘ 暗褐色土 |
| ⑤ 暗褐色土 | ⑪ 暗褐色土 | ⑰ にふい黄褐色土 | ㉙ 暗褐色土 | ㉚ 暗褐色土 | ㉛ 暗褐色土 |
| ⑥ 暗褐色土 | ⑫ 褐色土 | ⑱ 暗褐色土 | ㉜ 暗褐色土 | ㉝ 暗褐色土 | ㉞ 暗褐色土 |
| | | | ㉟ 暗褐色土 | ㊱ 暗褐色土 | ㊲ 暗褐色土 |

第 69 図 方形竪穴遺構4

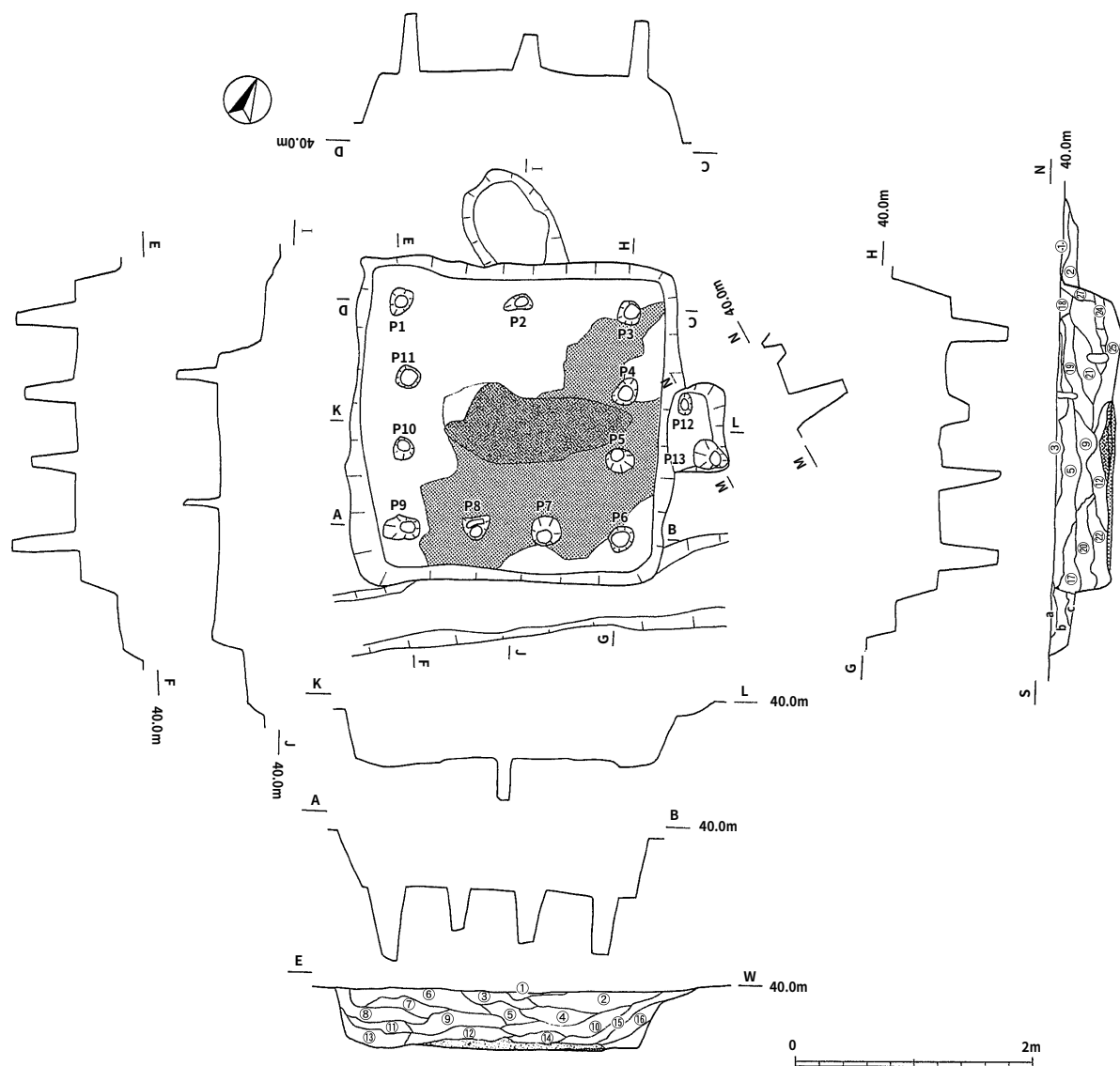


第 70 図 方形竪穴遺構4の出土遺物

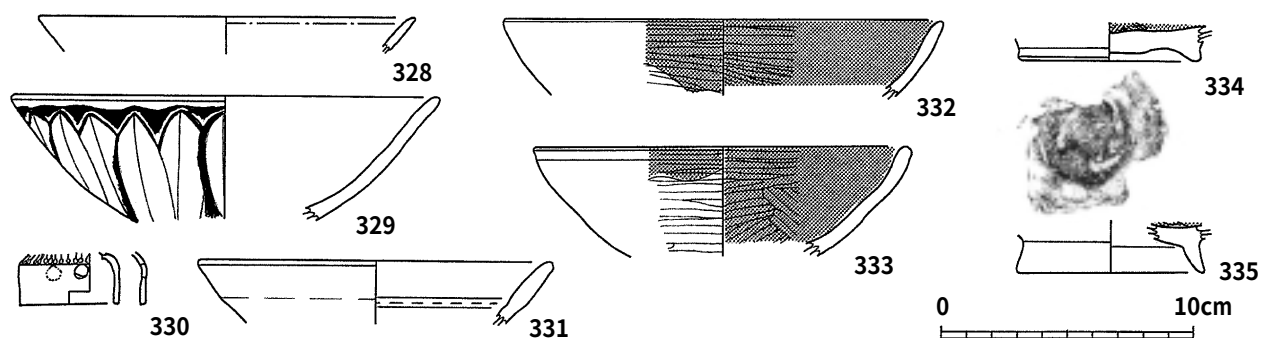
る。深さは前者が 40 cm 前後と後者が 10 cm 前後である。この梯子施設跡と思われる西側と北側に一段の段差施設があり、硬化面がみられる。

遺構の南側床面には何度かの使用により形成されたとされる硬化面があり、その上に炭化物が 5 cm ほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じて I c 層を主体にアカホヤブロック、黒褐色（V 層）ブロック、シラスブロックがま



- | | | | | | | | | | | | |
|--------|-----------|-----------|-----------|--------|--------|-----------|--------|--------|-----------|-----------|-----------|
| ① 暗褐色土 | ⑥ にぶい黄褐色土 | ⑪ 暗褐色土 | ⑬ 暗褐色土 | ⑮ 暗褐色土 | ⑲ 暗褐色土 | ⑳ にぶい黄褐色土 | ㉑ 暗褐色土 | ㉒ 暗褐色土 | ㉓ にぶい黄褐色土 | ㉔ にぶい黄褐色土 | ㉕ にぶい黄褐色土 |
| ② 暗褐色土 | ⑦ 暗褐色土 | ⑫ 暗褐色土 | ⑭ にぶい黄褐色土 | ⑯ 暗褐色土 | ㉖ 暗褐色土 | ㉗ 暗褐色土 | | | | | |
| ③ 暗褐色土 | ⑧ 暗褐色土 | ⑬ 暗褐色土 | | | | | | | | | |
| ④ 褐色土 | ⑨ にぶい黄褐色土 | ⑭ にぶい黄褐色土 | | | | | | | | | |
| ⑤ 暗褐色土 | ⑩ 暗褐色土 | ⑮ 暗褐色土 | | | | | | | | | |



第71図 方形竪穴遺構5と出土遺物(1)

だらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、白磁の玉縁(302・303)、端反り(304・305)、その底部(307)と蓋(308)、青磁(306)、赤色土器の埴(309)、黒色土器Aの埴(310～312)、土師器の坏(315)、小皿(313・314・316～327)等が出土している。

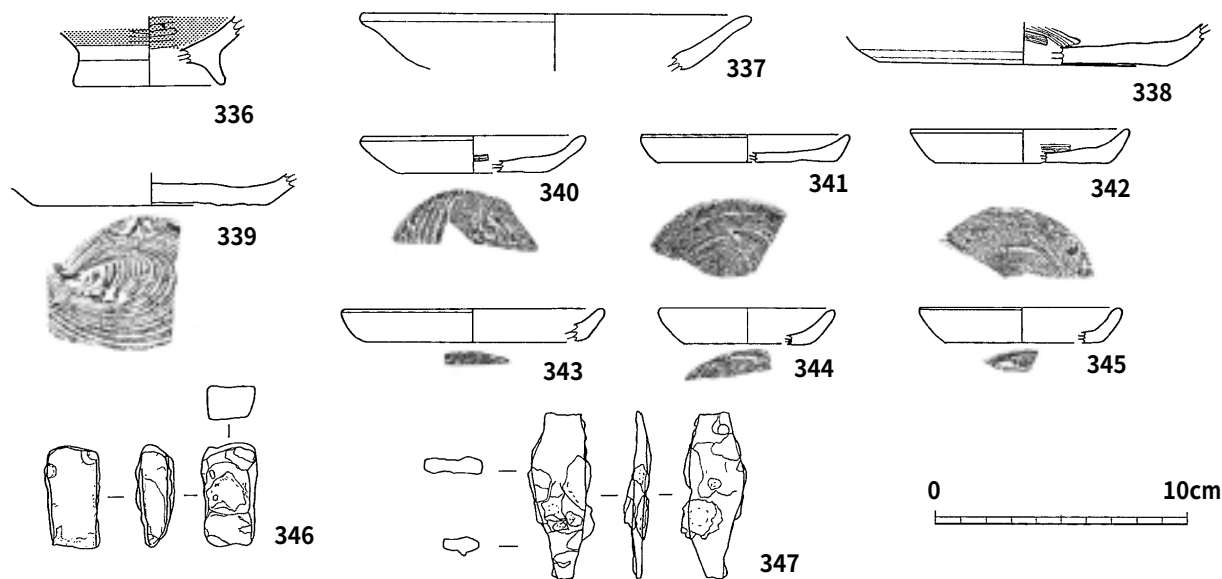
⑤ 方形竪穴遺構5

本遺構はD-6区に検出した。規模は東西2 m70 cm、南北2 m70 cm、深さ50 cmの竪穴遺構である。竪穴内には14か所の柱穴が壁に沿って廻っている。柱穴の径は20 cm前後で深さは深いもので50 cm、浅いもので30 cmである。また、東側に深さ15 cmで70 cm方形の段差がある。この中にはP12の浅い柱穴と深い柱穴P13がある。P12・13は深さで他の遺構と比較すると梯子設置のピットと想定されない。

遺構の中央には何度かの使用により形成されたとと思われる硬化面があり、その上に炭化物が11 cmほど集積している。しかし、炉として何度も焚いたにしては床が赤化しておらず焼土もわずかに分布する程度であるため、炭をおいたかもしくは弱火で燃やすといった作業を行った可能性が指摘できる。

埋土は総じてI c層を主体にアカホヤブロック、黒褐色(V層)ブロック、シラスブロックがまだらに混ざっている。よって人為的に埋められた可能性が高い。

出土遺物は、白磁の口剥げ(328)、鎬蓮弁青磁(329)、青白磁の合子(330)、黒色土器Aの埴(332～336)、土師器の坏(331・337～339)、小皿(340～345)、鉄製品(346・347)等が出土している。347は鉄鏃と思われる。



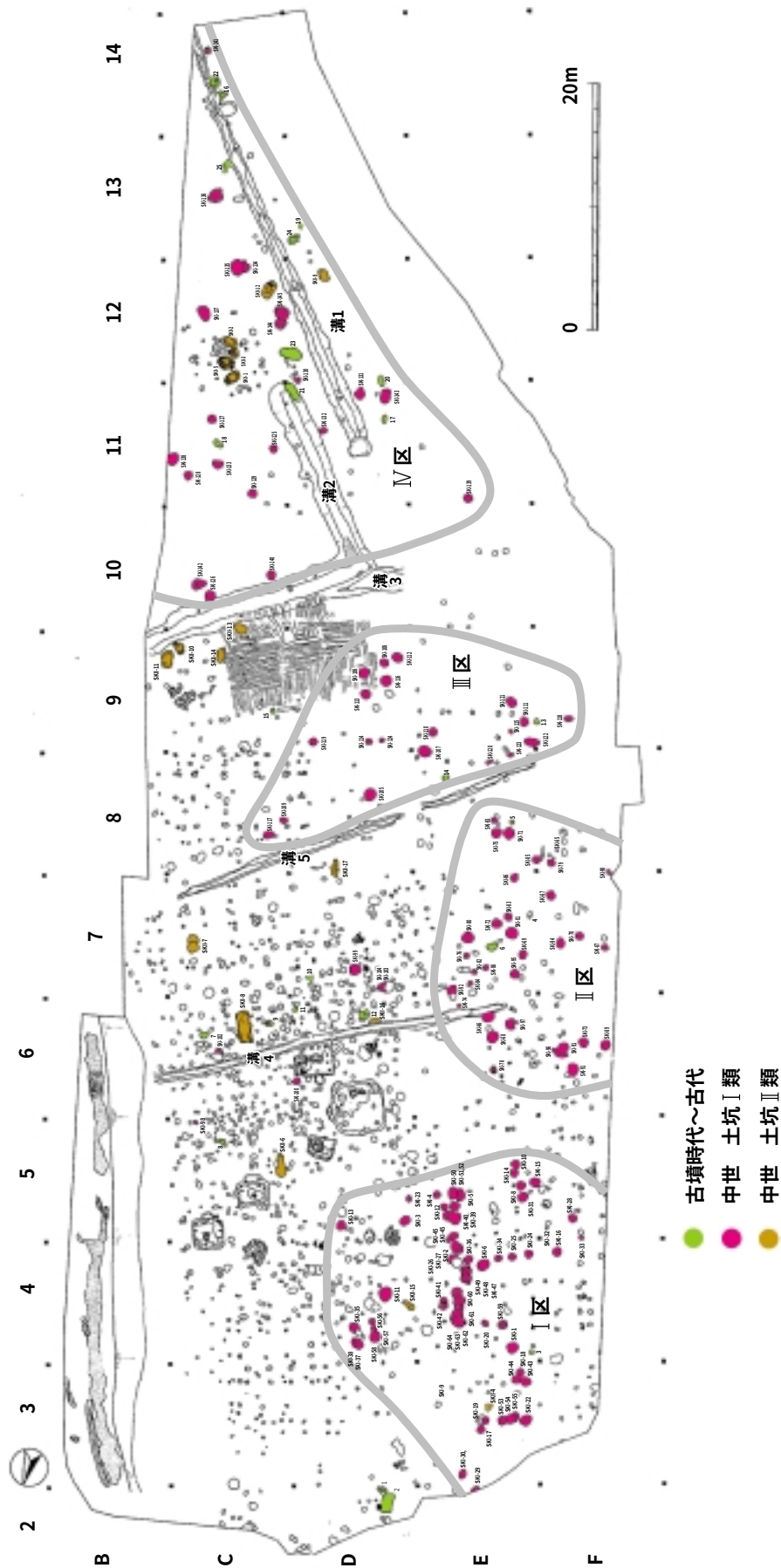
第72図 方形竪穴遺構5の出土遺物(2)

ウ 土坑

Ⅲ層上面の土坑と考えられるものは、古墳時代・古代の土坑が25基、中世Ⅰ類が145基、中世Ⅱ類が17基検出している。第73図はそれを示すもので、緑色の土坑が古墳・古代で、朱色が中世土坑Ⅰ類、茶色が中世土坑Ⅱ類とした。

① 土坑Ⅰ

中世土坑Ⅰ類は145基検出している。この土坑はドングリや穀物の種子類が埋土に混入していたものとそれに形態が類するものである。形態は、円形・楕円形・方形とがみられる。



第73図 土坑配置

この土坑の分布は第 73 図に示した通りで、山部の裾側に集中してみられる。そして、この 145 基はある程度まとまりがみられる。それを 4 つの区に分けた。

I 区は北部に集中し、D～F－5 区の建物跡と関係して列にみられるのが特徴である。掘立柱建物跡との関係は掘立柱建物跡に記載している。

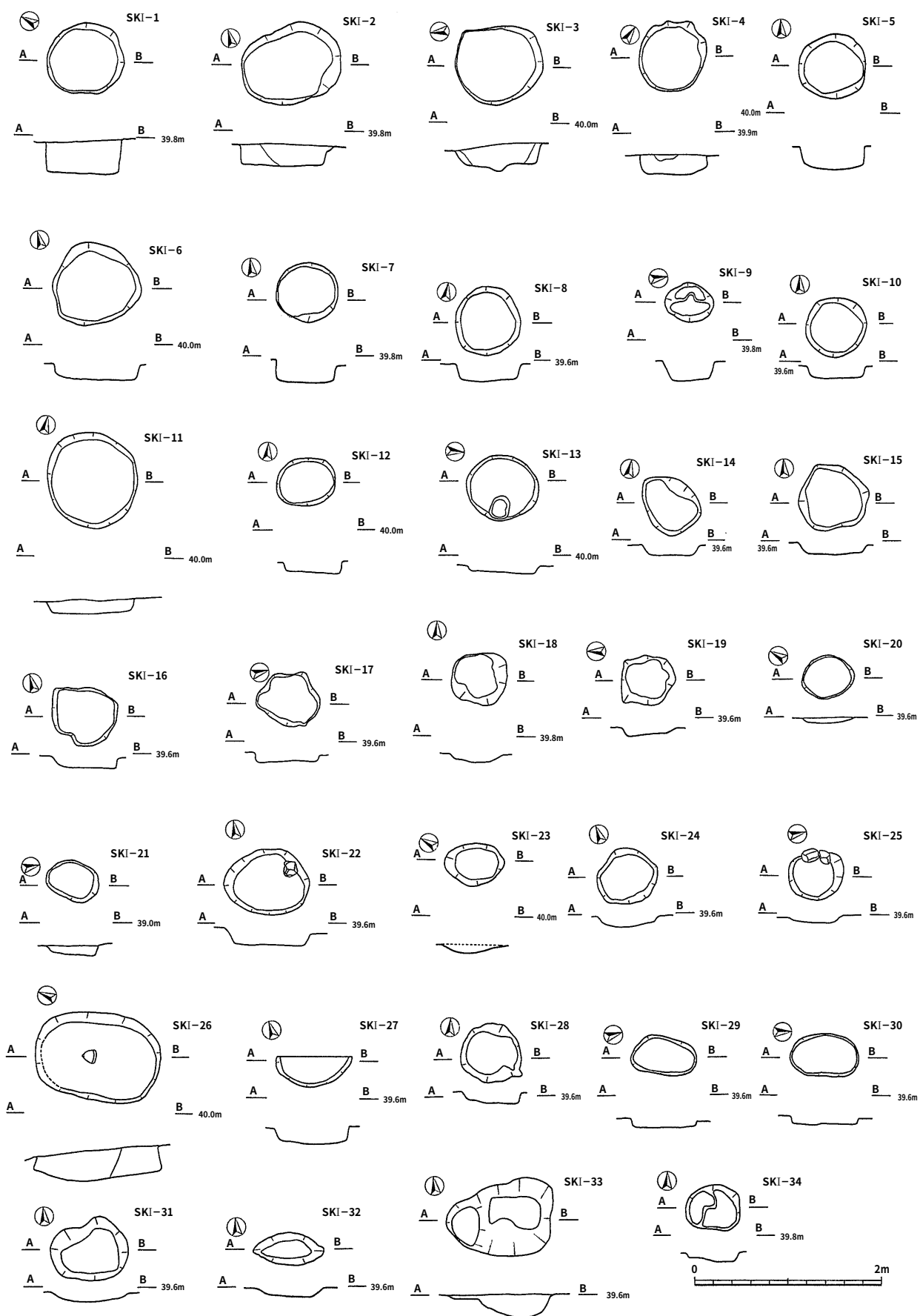
II 区は D～F－6～8 区にまとまっているものである。この地域の土坑は列を組む等の規則性はない。この地域には掘立柱建物跡がなく、溝 4 の先端地域になる。なお B～D－6・7 に散在するものはこの区に入れた。

III 区は C～F－8・9 区で溝 5 の南側に位置する。遺構との重なりと掘立柱建物跡 7 と畠跡である。

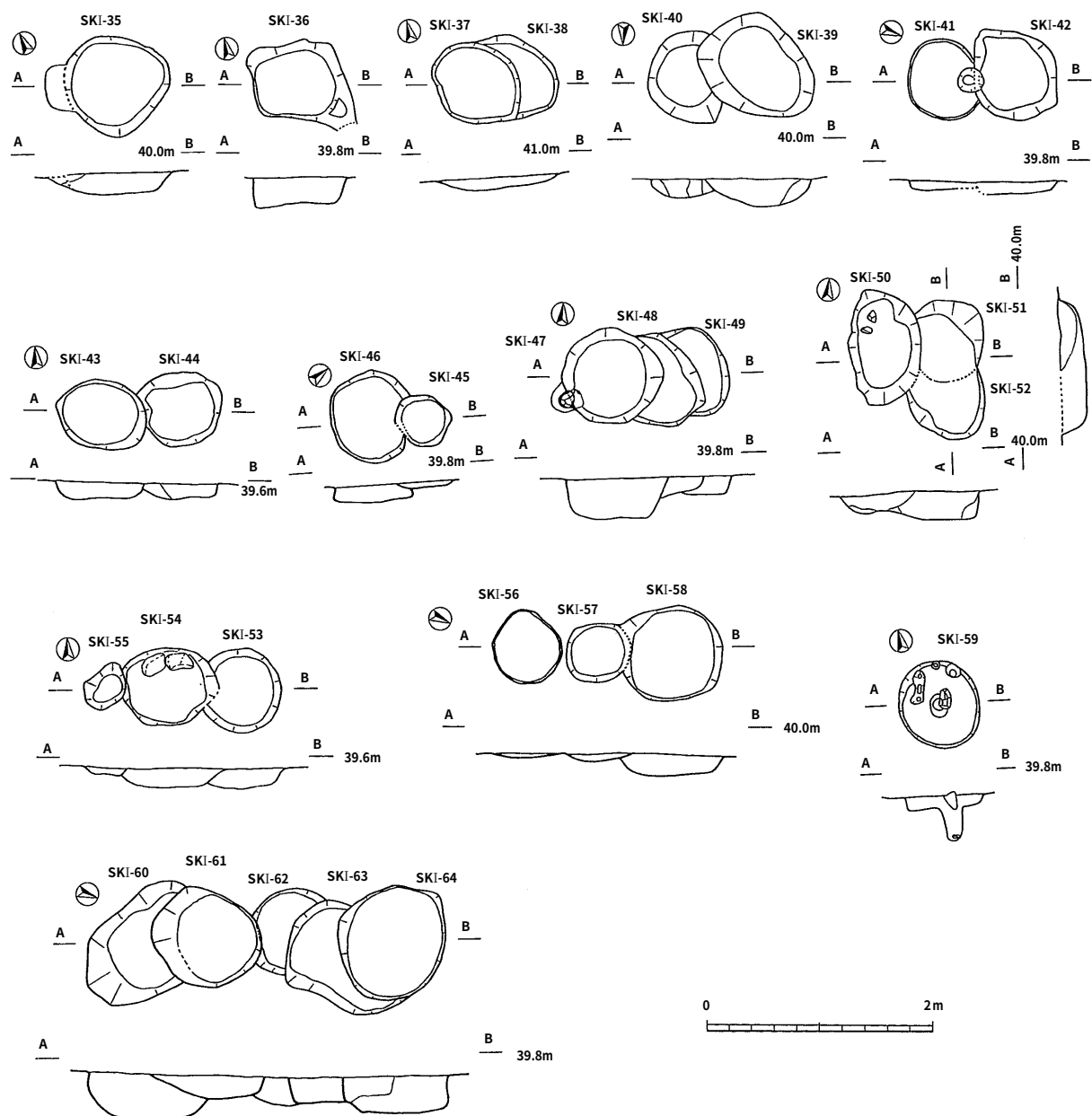
IV 区は C～E－10～14 区にあたる。この地域は溝 1・2 の東西に分布する。列を組むような規則性はない。

第 35 表 土坑 I 類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
1	I	83	75	35	円形	24	I	65	60	9	円形
2	I	105	87	24	円形	25	I	58	48	6	円形
3	I	94	84	29	円形	26	I	134	95	22	円形
4	I	75	72	21	円形	27	I	81	33	17	円形
5	I	72	69	25	円形	28	I	65	63	13	円形
6	I	96	89	18	円形	29	I	70	42	10	楕円形
7	I	66	64	21	円形	30	I	74	45	9	楕円形
8	I	74	70	16	円形	31	I	84	69	9	円形
9	I	52	42	20	円形	32	I	76	36	14	楕円形
10	I	65	64	13	円形	33	I	112	83	25	楕円形
11	I	103	96	16	円形	34	I	58	48	12	円形
12	I	63	52	15	円形	35	I	94	89	18	円形
13	I	77	71	10	円形	36	I	85	74	26	方形
14	I	64	60	16	円形	37	I	74	71	11	円形
15	I	73	70	12	円形	38	I	71	34 α	8	円形
16	I	69	63	12	方形	39	I	95	90	24	円形
17	I	69	56	11	円形	40	I	81	53 α	16	円形
18	I	59	54	9	円形	41	I	72	58 α	7	円形
19	I	58	54	11	円形	42	I	80	72	10	円形
20	I	56	48	6	円形	43	I	78	60	16	円形
21	I	55	43	10	円形	44	I	66 α	65	14	円形
22	I	92	70	18	円形	45	I	51	45	5	円形
23	I	64	47	9	円形	46	I	56 α	83	15	円形



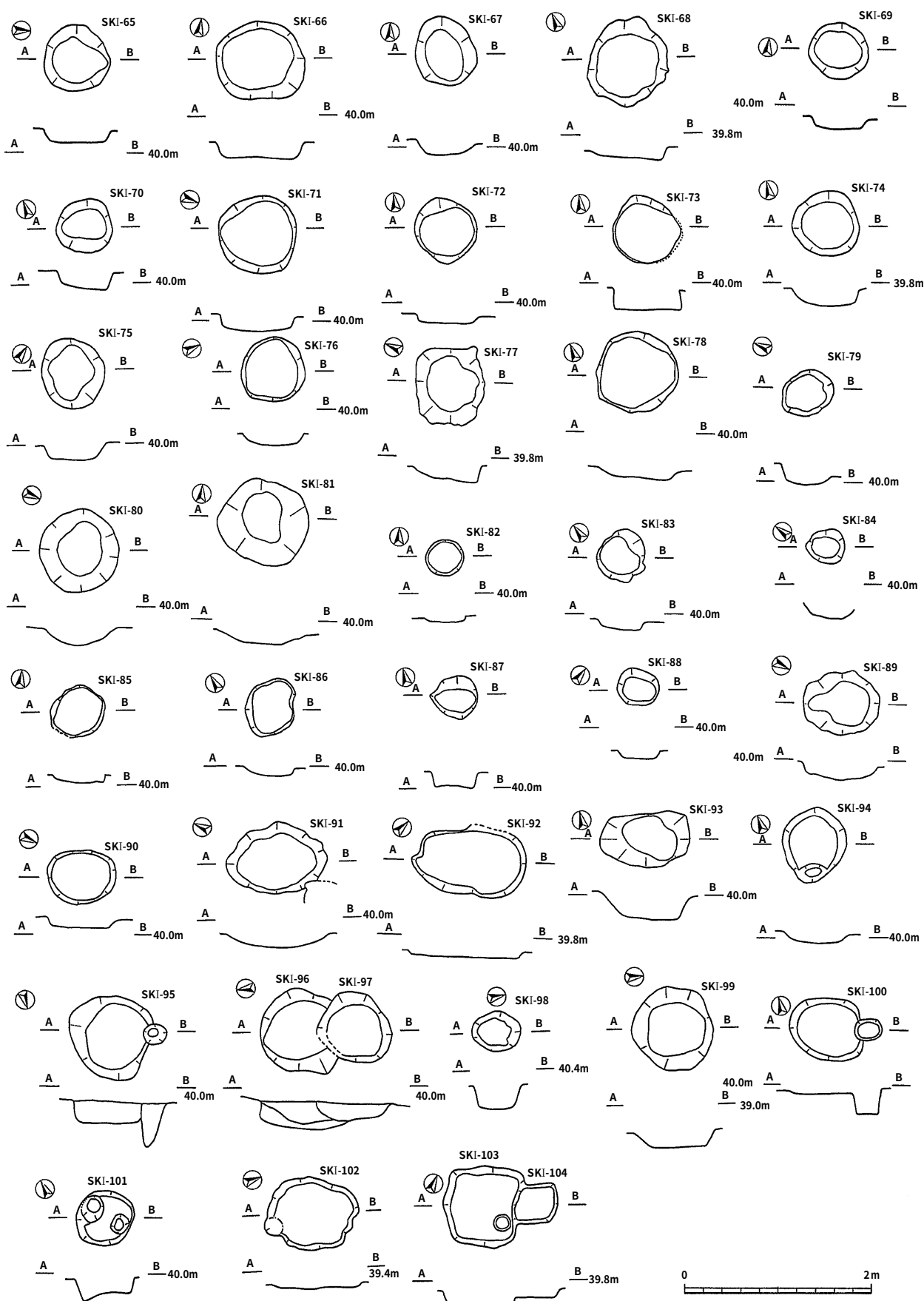
第74図 I区I類の土坑(1)



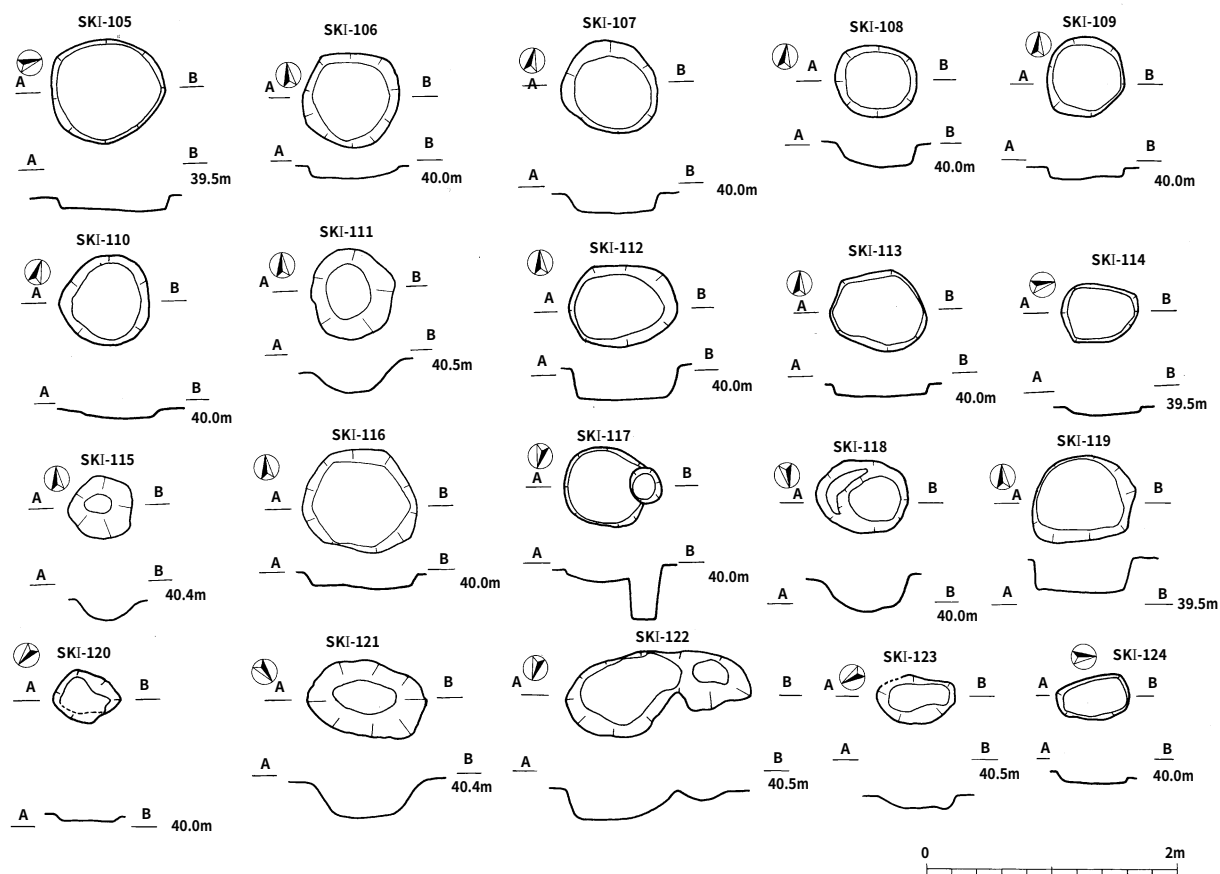
第 75 図 I 区 I 類の土坑 (2)

第 36 表 土坑 I 類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
47	I	90	84	35	円形	53	I	75	54 α	17	円形
48	I	81	31 α	19	円形	54	I	82	69	18	円形
49	I	78	27 α	16	円形	55	I	37	37	6	円形
50	I	102	64	16	楕円形	56	I	66	62	4	円形
51	I	72	55 α	25	円形	57	I	58	52	6	円形
52	I	67	52 α	25	円形	58	I	84	81	20	円形



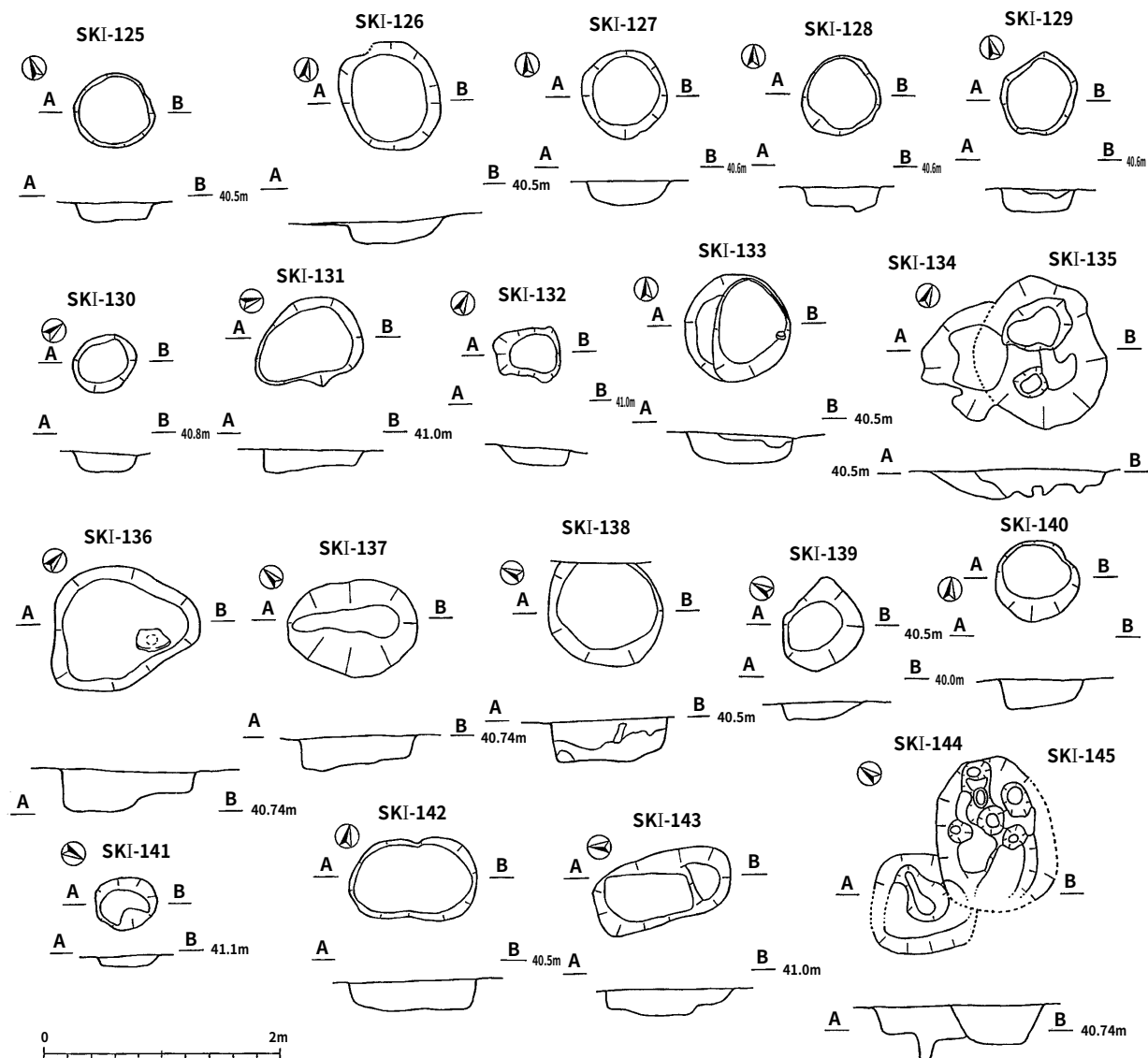
第 76 図 II 区 I 類の土坑



第 77 図 Ⅲ 区 I 類の土坑

第 37 表 土坑 I 類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
59	I	77	71	40	円形	74	II	72	70	18	円形
60	I	95	95	32	円形	75	II	75	68	17	円形
61	I	92	43 α	22	円形	76	II	69	68	13	円形
62	I	74	24 α	22	円形	77	II	82	74	19	方形
63	I	88	86	20	円形	78	II	89	86	11	円形
64	I	96	57 α	39	円形	79	II	55	50	16	円形
65	II	71	71	15	円形	80	II	88	85	20	円形
66	II	95	83	19	円形	81	II	98	91	12	円形
67	II	74	66	14	円形	82	II	44	41	5	円形
68	II	94	82	15	円形	83	II	57	51	10	円形
69	II	64	61	11	円形	84	II	47	42	13	円形
70	II	60	59	18	円形	85	II	57	55	8	円形
71	II	84	83	17	円形	86	II	59	52	10	円形
72	II	70	67	9	円形	87	II	51	47	18	円形
73	II	73	73	23	円形	88	II	45	40	10	円形



第78図 M区Ⅰ類の土坑

第38表 土坑Ⅰ類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
89	Ⅱ	82	68	17	円形	99	Ⅱ	90	87	18	円形
90	Ⅱ	73	57	11	円形	100	Ⅱ	80	67	5	円形
91	Ⅱ	108	77	15	楕円形	101	Ⅱ	62	59	25	円形
92	Ⅱ	123	75	6	楕円形	102	Ⅱ	98	80	5	円形
93	Ⅱ	97	58	26	楕円形	103	Ⅱ	87	84 α	19	方形
94	Ⅱ	80	69	12	円形	104	Ⅱ	45 α	43	8	方形
95	Ⅱ	90	90	24	円形	105	Ⅲ	90	84	13	円形
96	Ⅱ	89	60 α	30	円形	106	Ⅲ	77	75	11	円形
97	Ⅱ	80	75	19	円形	107	Ⅲ	76	73	16	円形
98	Ⅱ	53	44	25	円形	108	Ⅲ	64	57	20	円形

第39表 土坑Ⅰ類の計測 (cm)

番号	区	長径	短径	深さ	形態	番号	区	長径	短径	深さ	形態
109	Ⅲ	64	63	10	円形	128	Ⅳ	68	67	21	円形
110	Ⅲ	71	71	8	円形	129	Ⅳ	70	63	20	円形
111	Ⅲ	72	66	20	円形	130	Ⅳ	54	49	16	円形
112	Ⅲ	87	65	26	円形	131	Ⅳ	85	76	20	円形
113	Ⅲ	75	65	9	円形	132	Ⅳ	54	46	15	円形
114	Ⅲ	62	48	7	円形	133	Ⅳ	91	89	25	円形
115	Ⅲ	50	50	16	円形	134	Ⅳ	96	44 α	25	円形
116	Ⅲ	92	82	13	円形	135	Ⅳ	126	108	24	円形
117	Ⅲ	62	53 α	12	円形	136	Ⅳ	123	105	25	円形
118	Ⅲ	73	58	28	円形	137	Ⅳ	110	82	29	円形
119	Ⅲ	79	67	27	円形	138	Ⅳ	98	87	36	円形
120	Ⅲ	53	42	5	円形	139	Ⅳ	76	69	14	円形
121	Ⅲ	95	61	30	楕円形	140	Ⅳ	71	69	25	円形
122	Ⅲ	147	66	23	楕円形	141	Ⅳ	52	45	10	円形
123	Ⅲ	62	40	11	楕円形	142	Ⅳ	107	70	25	円形
124	Ⅲ	59	36	7	楕円形	143	Ⅳ	110	62	22	円形
125	Ⅳ	64	58	15	円形	144	Ⅳ	85	63 α	46	円形
126	Ⅳ	92	84	19	円形	145	Ⅳ	130	100	33	円形
127	Ⅳ	75	73	20	円形						

中世土坑Ⅱ類は平坦地の東側に 17 基検出している。この中で集中地域はC－9区、C・D－12区である。また、建物遺構との重なりは、掘立柱建物跡1・21に土坑Ⅱ1・2・3・5・8が、畠跡に土坑Ⅱ13がみられる。

この土坑はA・B・Cに分別できる。Aは土坑Ⅱの1～5で焼土及び灰と焼け石があるもの、Bは土坑Ⅱの6～9で副葬品があるもの、Cは土坑Ⅱの10～17で土坑の中に深い柱穴が1か所あるものである。

② 土坑ⅡA類（土坑Ⅱ類A）

土坑Ⅱ－1はC・D－12区に検出している。形態は長軸135cm、短軸85cm、深さ33cmの長方形で、両端に深さ20cmのピットがある。埋土は黒褐色層が2層に分かれ、なお、上部には焼土や礫がみられる。

土坑Ⅱ－2はC・D－12区に検出している。形態は長軸60cm、短軸40cm、深さ21cmの楕円形で、両端が深くなっている。埋土は黒褐色層が2層になり、上部に礫がみられる。遺物は380～382で土師器の坏が出土している。

土坑Ⅱ－3はC・D－12区に検出している。形態は長軸85cm、短軸75cm、深さ18cmの円形で、

両端に深さ 20 cm のピットがある。埋土は黒褐色層の中に一部焼土がみられる。

土坑Ⅱ－4 は E－3 区に検出している。形態は長軸 125 cm、短軸 80 cm、深さ 38 cm のだるま形で、北側は深さ 13 cm の段がある。埋土は黒褐色層が 3 層に分かれ、上部には焼土がみられる。なお、埋土上部の南には礫がみられる。約 50 cm と 25 cm の礫がある。

土坑Ⅱ－5 は C・D－12 区に検出している。形態は長軸 95 cm、短軸 83 cm、深さ 25 cm の長方形である。埋土は茶褐色層がブロック状に分かれ、焼土と灰が多くみられる。なお、東南部には 10～40 cm の焼けた円弧状の礫列がみられ、この中には土師器等の遺物も含まれている。この 2 つの遺構は炉跡と焼土・灰原の関係と考えられる。出土遺物は 383～386 で、土師器の坏と土師器の小皿である。

③ 土坑Ⅱ B 類（土坑Ⅱ類 B）

土坑Ⅱ－6 は C－5 区に検出している。形態は長軸 165 cm、短軸 80 cm、深さ 20 cm のだるま形で、南の円形が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、南側の一段上がった円形部の床面に白磁が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。

土坑Ⅱ－7 は C－7 区に検出している。形態は長軸 135 cm、短軸 86 cm、深さ 20 cm の楕円形で、北の円部が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、北側の円形部の床面に白磁が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。

土坑Ⅱ－8 は C－6 区に検出している。形態は長軸 250 cm、短軸 100 cm、深さ 30 cm の長方形で、南の円形が大きい土坑である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、北側の中央部の床面に白磁・土師器等が完全な形で出土している。床面であるため副葬関係に近いと思われる。出土遺物は 348～364 である。348 は白磁の玉縁、349 は白磁の端反りである。350・351 が土師器の坏で、352～363 が土師器小皿である。この中で 363 は黒色土器 B である。364 は鉄製品で鍬の柄部と思われる。

土坑Ⅱ－9 は D－12 区に検出している。形態は長軸 105 cm、短軸 65 cm、深さ 14 cm の略長方形である。この土坑の方位軸は北東と南西である。遺物は、中央部南側の床面に礫と古銭が出土した。これらは床面で検出したため副葬関係に近いと思われる。出土遺物は 387～394 で古銭である。古銭は、394 が 2 枚であるため全部で 9 枚である。古銭の字は洪武通寶、永楽通寶等が読みとれる。

④ 土坑Ⅱ C 類（土坑Ⅱ類 C）

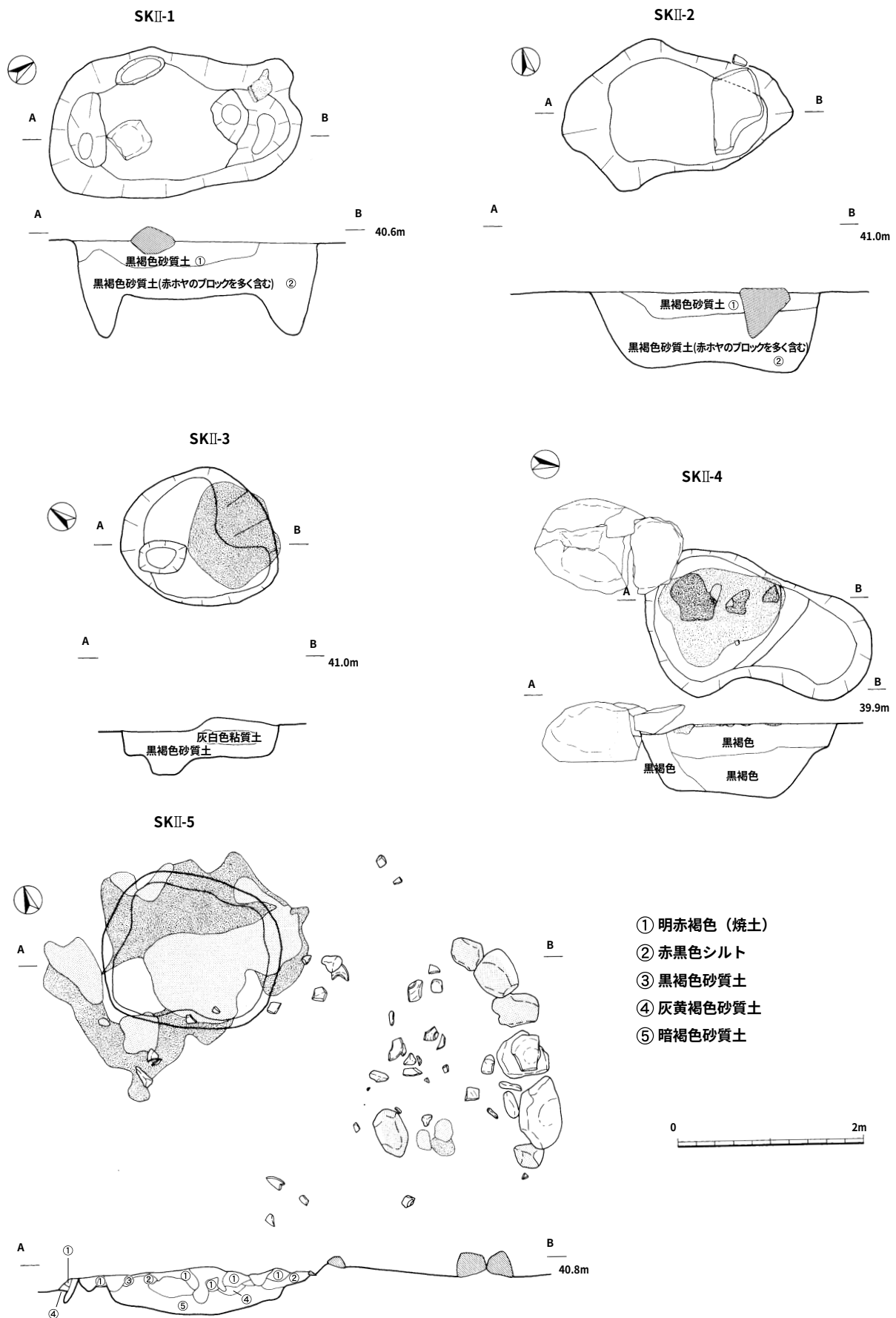
この類は C－9 区の畠東側に 10・11・13・14 がまとまっている状態が特徴である。12 は C－12 区、15 が D－4 区、16 が D－6 区、17 が D－8 区に一基ずつ散発的に検出している。

土坑Ⅱ－10 の形態は長軸 110 cm、短軸 70 cm、深さ 30 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は北東と南西である。この土坑の南側には径 15 cm 深さ 45 cm のピットがある。出土遺物は白磁の碗が土坑上面に出土しているが、上面であるためこの遺構とは関係が薄いと思われる。

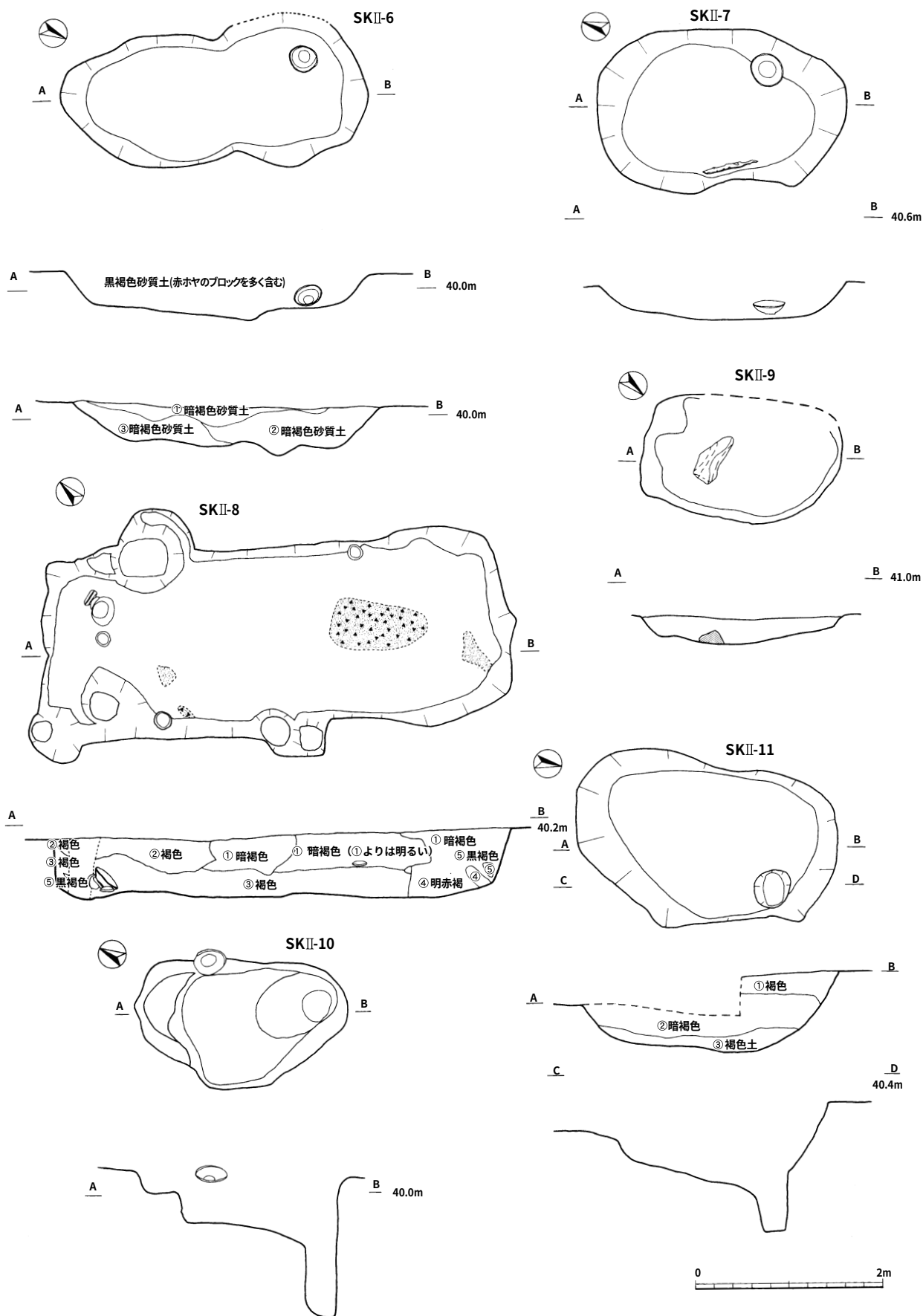
土坑Ⅱ－11 の形態は長軸 140 cm、短軸 90 cm、深さ 40 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 18 cm 深さ 30 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ－12 の形態は長軸 150 cm、短軸 90 cm、深さ 55 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 30 cm 深さ 45 cm のピットがある。遺物の出土はない。

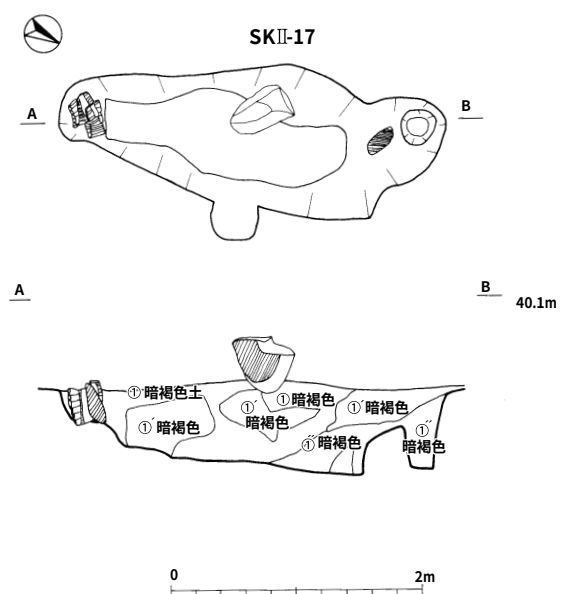
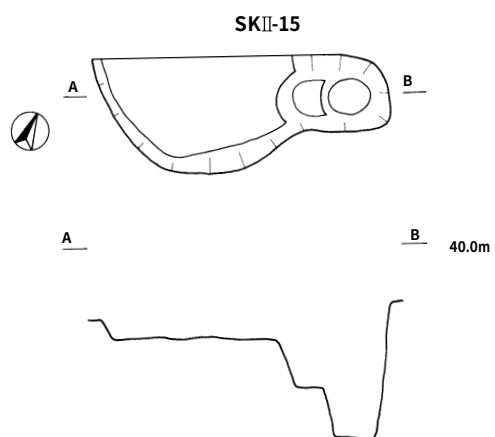
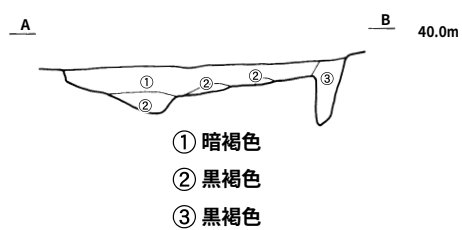
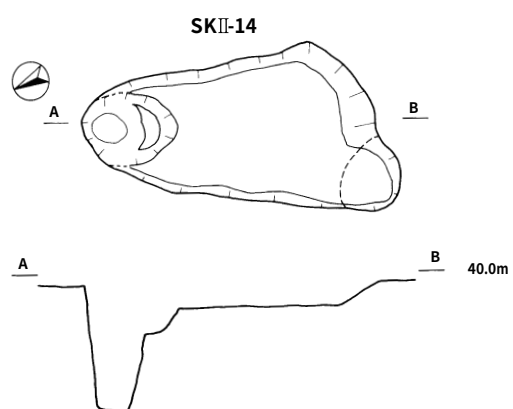
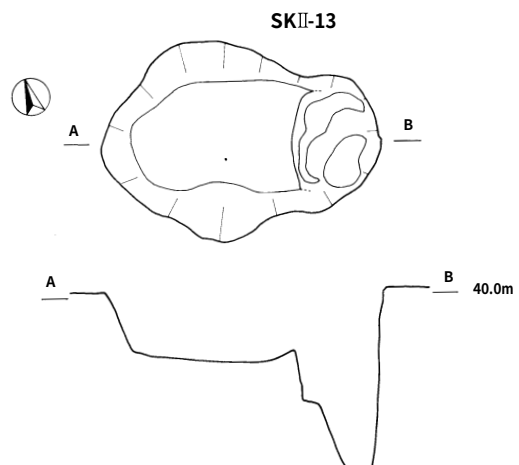
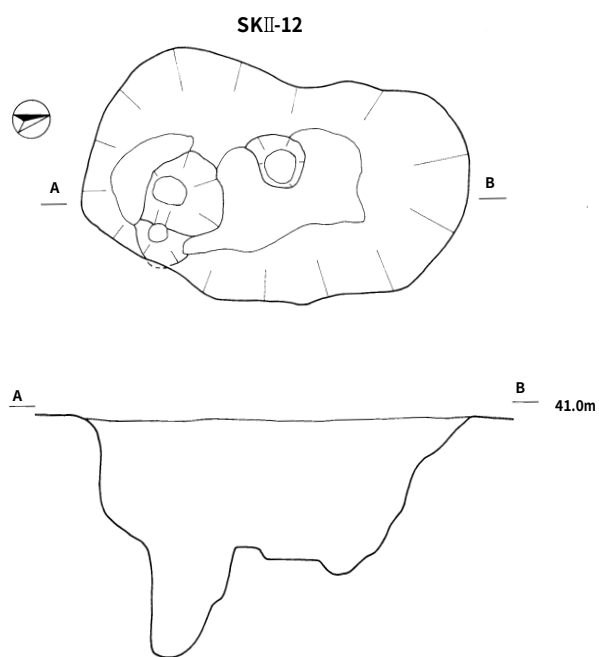
土坑Ⅱ－13 の形態は長軸 110 cm、短軸 80 cm、深さ 30 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は



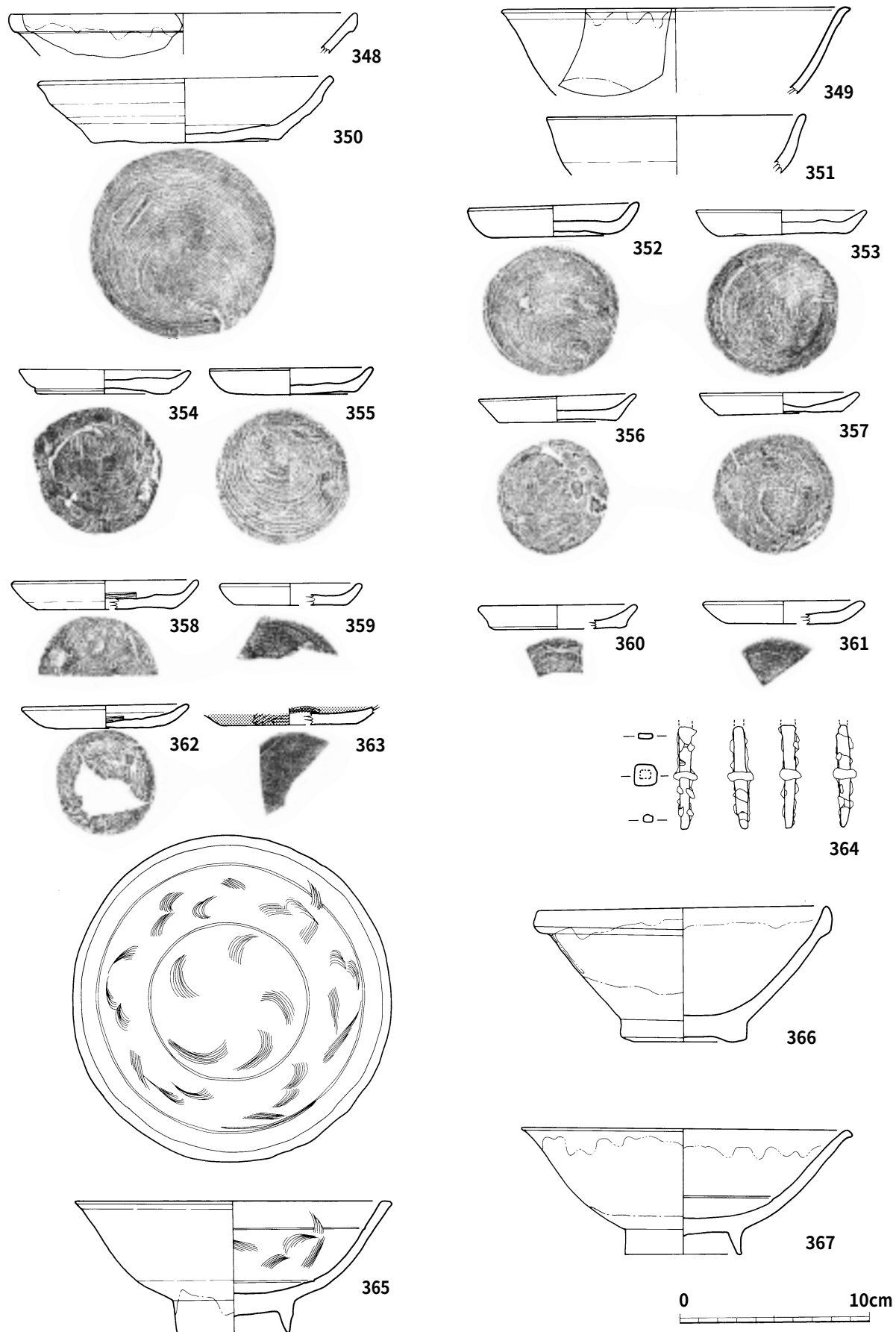
第79図 土坑Ⅱ類A



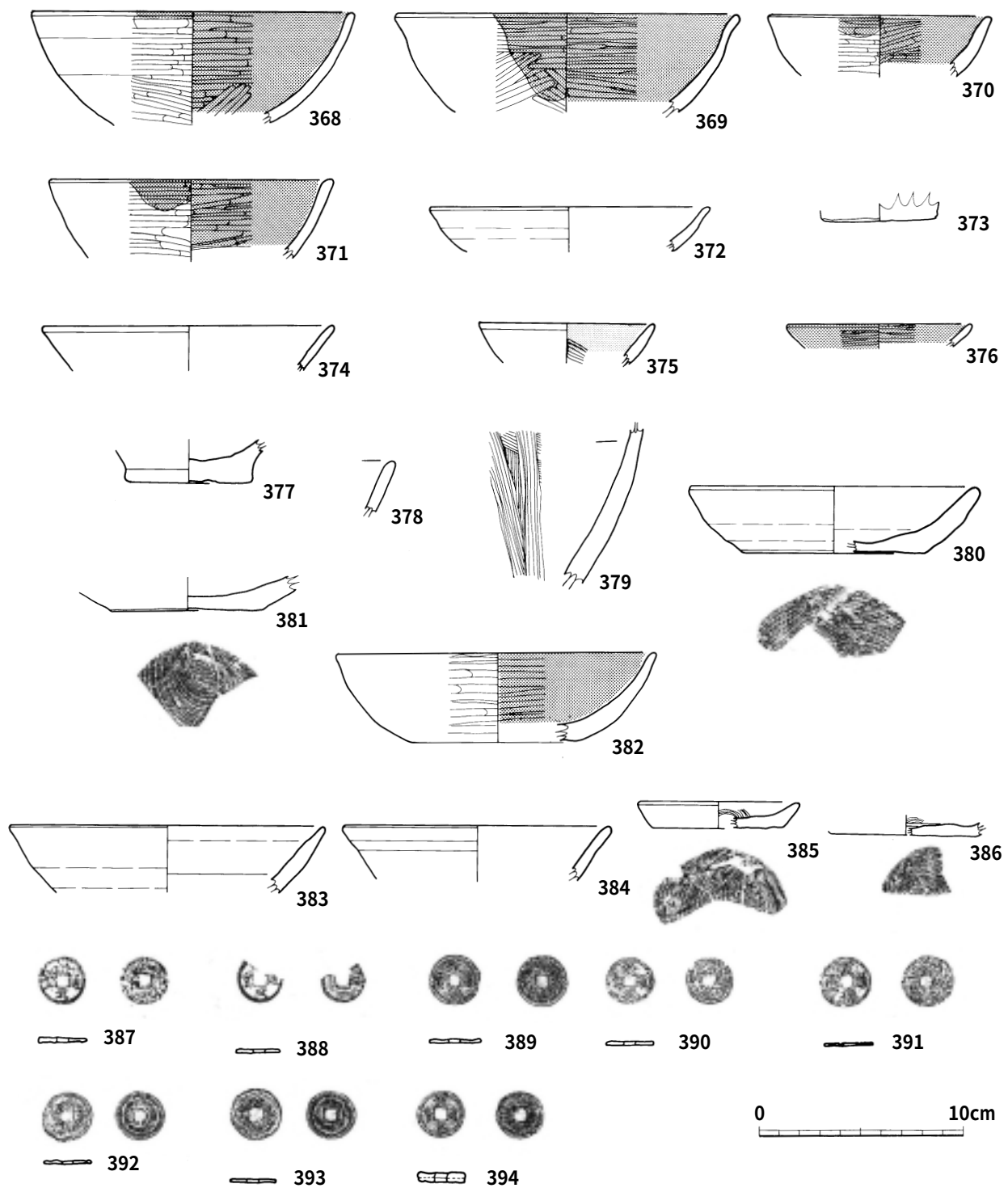
第 80 図 土坑Ⅱ類B (6~9)、C (10~11)



第81図 土坑Ⅱ類C



第 82 図 土坑Ⅰ・Ⅱ類の出土遺物 (1)



第 83 図 土坑Ⅰ・Ⅱ類の出土遺物(2)

東西である。この土坑の東側には径 32 cm 深さ 50 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ-14 の形態は長軸 120 cm, 短軸 65 cm, 深さ 20 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径 20 cm 深さ 45 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ-15 の形態は長軸 115 cm, 短軸 60 cm, 深さ 20 cm の楕円形である。この土坑の方位軸は東西である。この土坑の東側には径 10 cm 深さ 20 cm のピットがある。遺物の出土はない。

土坑Ⅱ－16の形態は長軸115 cm、短軸50 cm、深さ15 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の東側には径40 cm深さ40 cmのピットがある。遺物の出土はない。

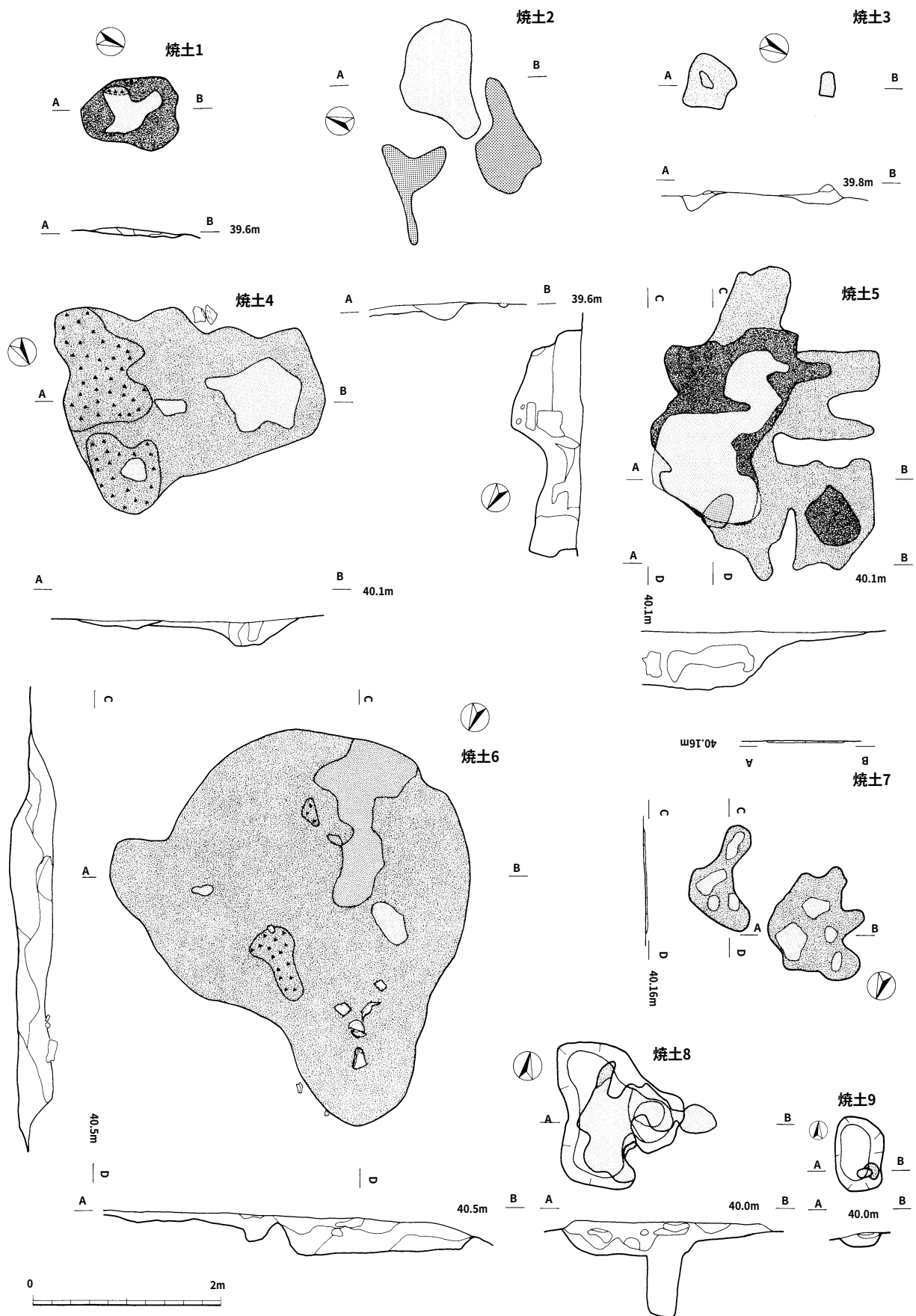
土坑Ⅱ－17の形態は長軸155 cm、短軸60 cm、深さ35 cmの楕円形である。この土坑の方位軸は南北である。この土坑の北側には径15 cm深さ18 cmのピットがある。遺物は南側に馬の歯が出土している。

エ 焼土（第29図全体配置図内に位置は示す）

焼土は21か所を確認できた。この内、掘立柱建物跡との重なりが認められるものは、焼土4が掘立柱建物跡4、焼土5が掘立柱建物跡16・20、焼土6が掘立柱建物跡15、焼土11・12・13・14が掘立柱建物跡24、焼土15・16・17が掘立柱建物跡17、焼土19が掘立柱建物跡22である。建物跡と近接するものは焼土3・7・9で、離れているものは焼土1・2・20・21である。調査時は建物と関係がみられるのではないかと目の目で実施したが、遺構との関係においてばらつきがあり、確証は得られなかった。なお、報告書作成時でも遺跡の中の分類はできなかった。

第40表 焼土計測等一覧 (cm)

No.	検出区	長軸	短軸	厚深	灰混入	炭混入	その他
1	D－2	44	37	3	有	有	
2	D－3	120	80	9	有	無	3か所有り
3	F－3	80	30	8	有	無	2か所有り
4	F－5	140	110	12	有	有	
5	C－4	170	110	30	有	無	土坑有り
6	D－4	200	190	22	有	有	土師器出土
7	D－4・5	90	70	2	有	無	
8	D－6	80	70	16	有	無	ピットと重なる。
9	D－6	40	20	70	有	無	
10	D－6	120	80	10	有	無	
11	D－6	40	30	3	有	無	
12	D－6	40	24	4	有	無	
13	D－7	37	28	4	有	無	
14	D－7	40	30	7	有	無	
15	D－7	60	45	2	有	無	
16	D－7	95	82	6	有	無	
17	D－7	100	90	5	有	無	9か所に分散
18	E－7	60	30	4	有	無	
19	C－7	100	80	2	有	無	
20	C－9	170	150	10	有	有	土坑有り
21	C－9	100	90	12	有	無	



第84图 烧土 (1)

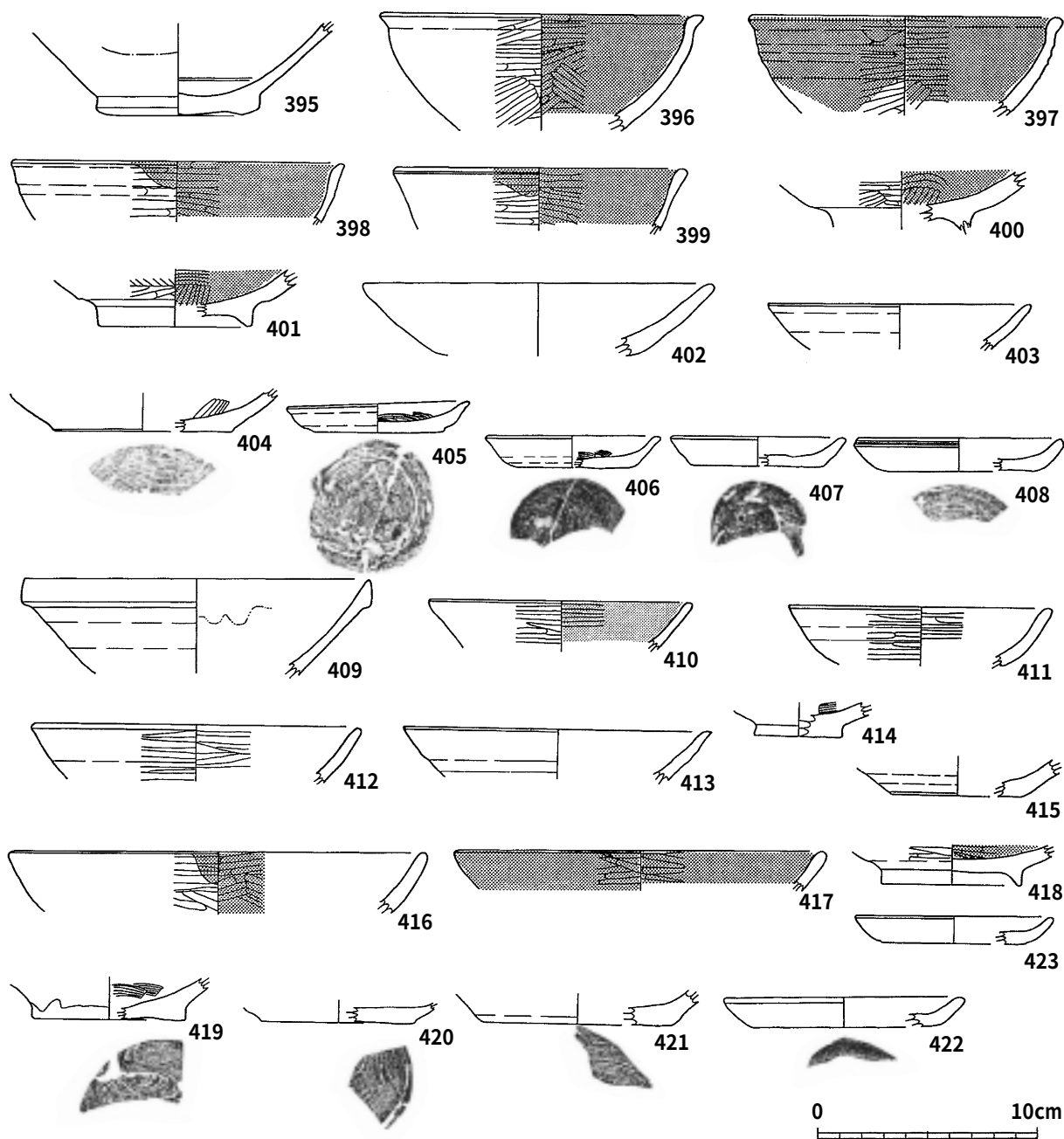
出土遺物 (395～422)

焼土で遺物を出土したのは焼土4，焼土5，焼土8，焼土17であった。

焼土4は404の土師器坏が出土している。

焼土5は395～403，405～408である。395は白磁V類の底部で，396～401は黒色土器A類の埴にあたる。402・403は土師器の坏にあたる。405～408は土師器小皿にあたる。

焼土8は410・411・413～415である。410は黒色土器A類の埴にあたる。411・413～415は土師器の坏である。焼土17は409・412・416～423である。409は白磁V類にあたる。412・419～421は土師器の坏である。416・418は黒色土器A類の埴，417は黒色土器B類の埴である。422・423は土師器の小皿である。



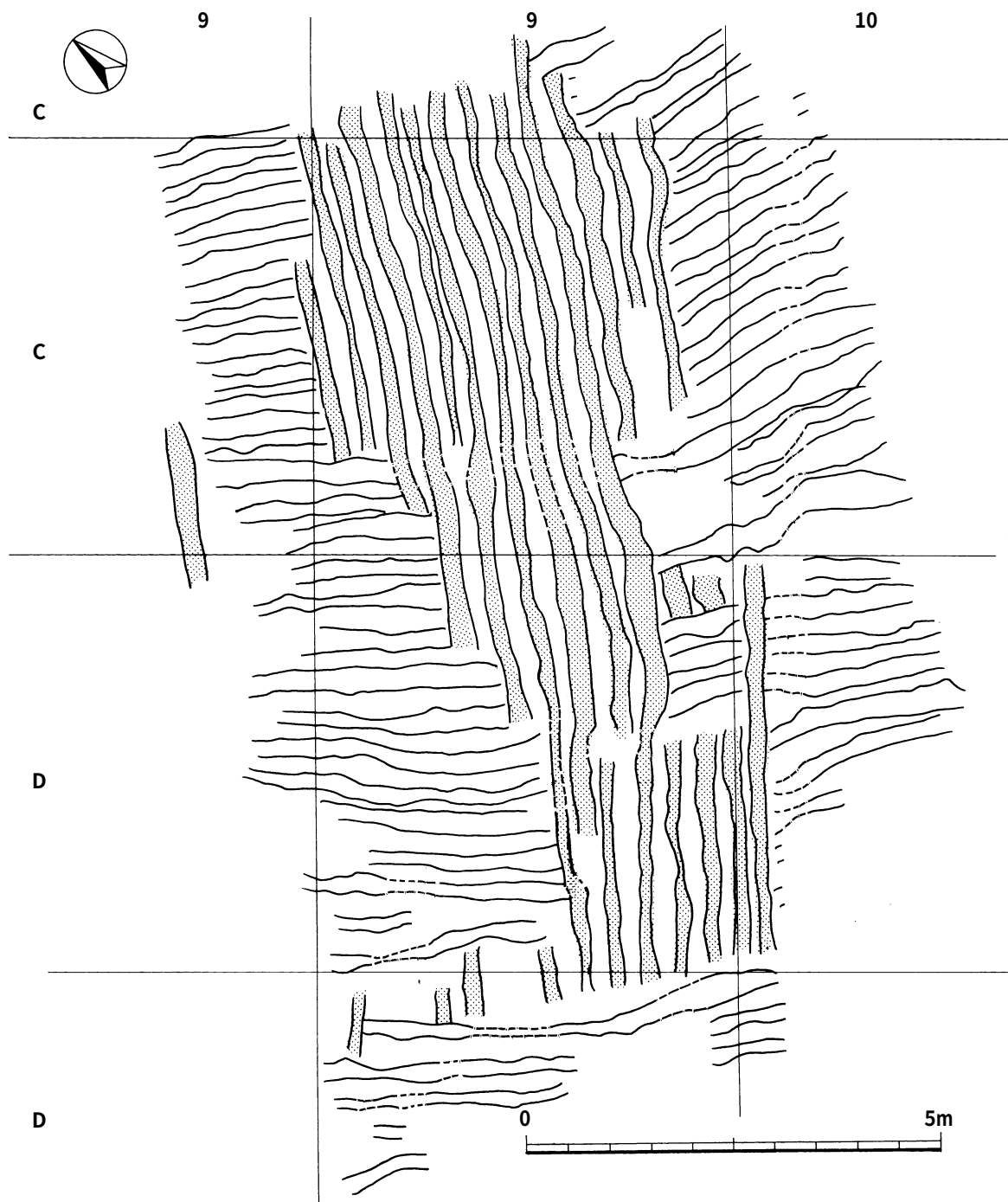
第 86 図 焼土の出土遺物

オ 畝跡

畝跡は大きく2面に検出した。第1面は中世遺構と同面でC・D-9・10区に検出し、第2面はその面を少々掘り下げた面である。第1面は第87図が全体で、東西12m、南北8mである。第89・90図は第1畝と第2畝を分けた図である。

第1畝間は東西方向に走り、東西11m、南北4mである。畝間は10～30cmで平均20cmである。畝の長さは東部が4mと中央部が3mと西部が2m80cmである。畝間の深さは5～10cmである。

第2畝間は南北に走り、東西12m、南北8mである。畝間は10～30cmで平均20cmである。この畝間は第1畝の下から検出し、畝の途切れが少ないのが特徴である。

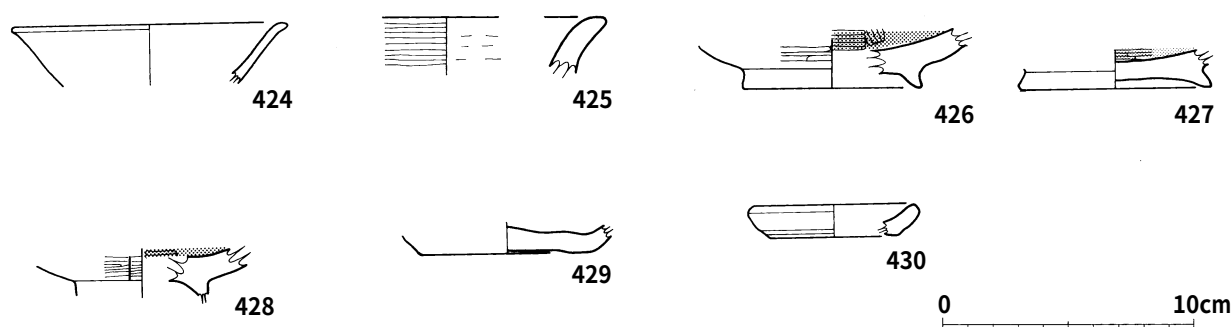


第87図 畝跡Ⅰの全体図

畠Ⅰの第2畝間は溝2・3の上から検出した。第29図ではその重なりを示している。よって、畠Ⅰは溝2・3が埋まってからの時期と考えられる。

畠跡Ⅰの出土遺物（第88図424～430）

424は畝間から検出したもので、白磁の端反りである。425は、古代土師器の甕、旧生活面から掘り上がったと思われる。426は土師器の埴である。427・428は黒色土器Aの埴である。429は土師器の坏である。430は土師器の小皿である。



第88図 畠跡の出土遺物

畠跡Ⅱ（第91図）

畠ⅡはE・F－3区からD－10区にかけて中世面より少し下に検出した。畝間は東西方向に3区が9m、4区が5m、5区が7m、6区が7m、7区が9m、8区が12m、9区が15m、10区が4mである。これをみると9区付近が長く4区付近が短い。畝間の幅は10～50cmで平均20cmである。

この畝間は出土遺物で特定できず、時期が確定しない。ただ、溝4・5、土坑Ⅱ類17等が畝間を切っているため、中世遺構より少し古いことが言える。

カ 溝

溝は第29図の全体図で示しているように、全域にかけて7本が検出している。溝1はD－11区より、C－14区にかけて直線的である。溝2はC・D－9・10・11区にあり、L字形に掘られている。溝3はB～D－9～10区に溝2と重なっている。溝4はC～E－6区に直線状に検出した。溝5はC～E－7・8区に直線状に検出した。溝6・7はB－3・4区に途切れ状態で検出した。

これらの他の遺構との新旧関係は、溝3の跡に溝2が掘り返された状態で検出し、溝4は方形堅穴5より古い状態で検出し、溝5は掘立柱建物跡26との同時期が比定できる状態で検出している。

溝1は長さ35m最大幅190cm、最大底幅60cm、最大深さ80cmである（第92図）。北端は大石から始まり、南は細くなっている。この溝は山裾と平行に造られ、掘立柱建物跡1とも平行である。

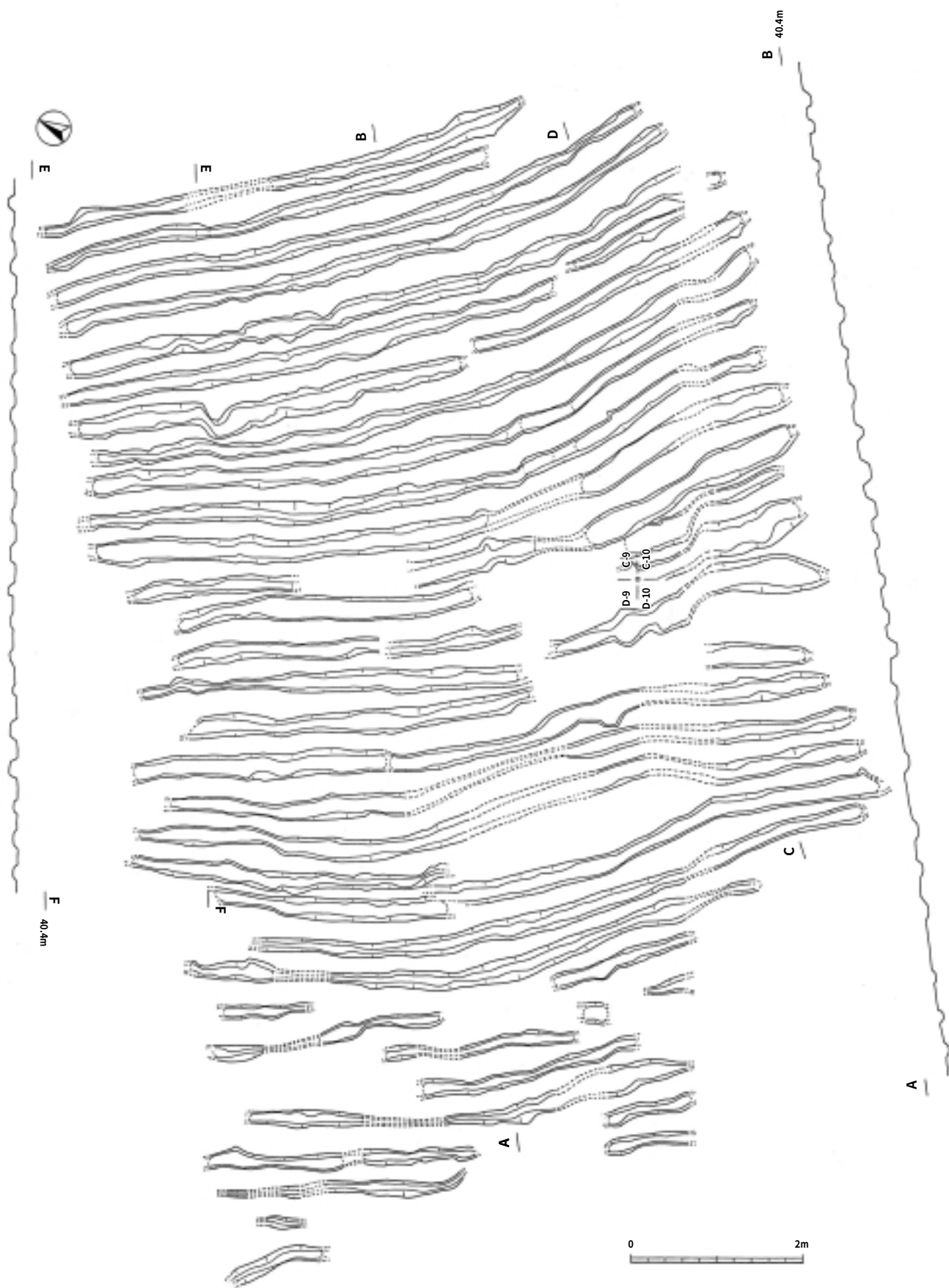
溝2は南北15m、東西17.5m、最大幅2m40cm、最大底幅120cm、最大深さ80cmである。形態は、山部の裾に平行に走り、平坦部が広がった所で、直角に折れている。

溝3は溝2の折れた溝とかさなり、幅は広がっている。溝2がある所は溝3の計測でしかできないが、重なっていないD－10区は溝3そのものである。長さは21mの内5mが確認できる。最大幅は190cmで、最大深さは30cmである。溝2との違いは深さである。

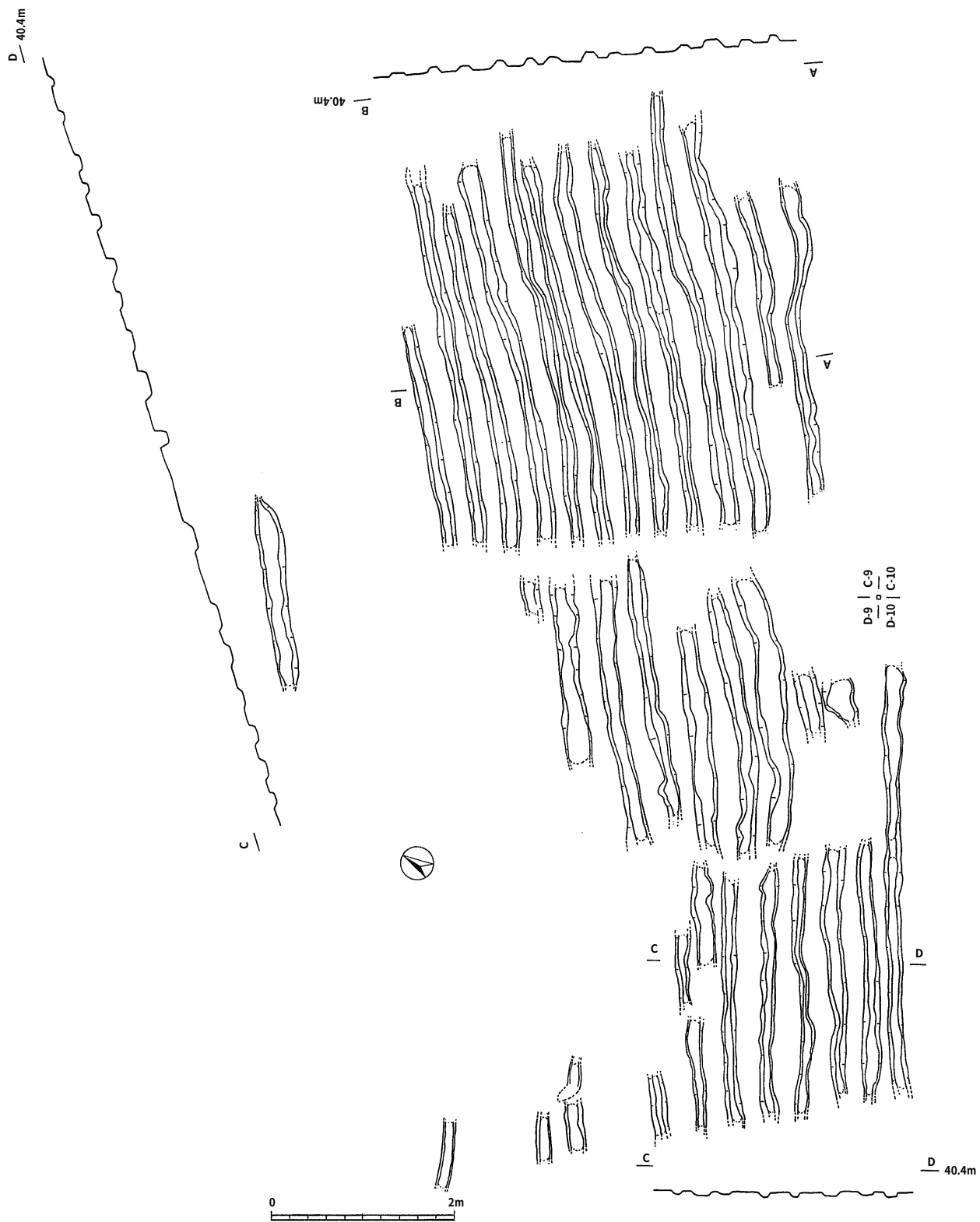
溝4は浅い溝で、長さは29m、最大幅80cm、深さ15cmである。部分的に硬化面はみられる。

溝5は浅い溝で、長さは31m、最大幅80cm、深さ15cmである。部分的に硬化面はみられる。

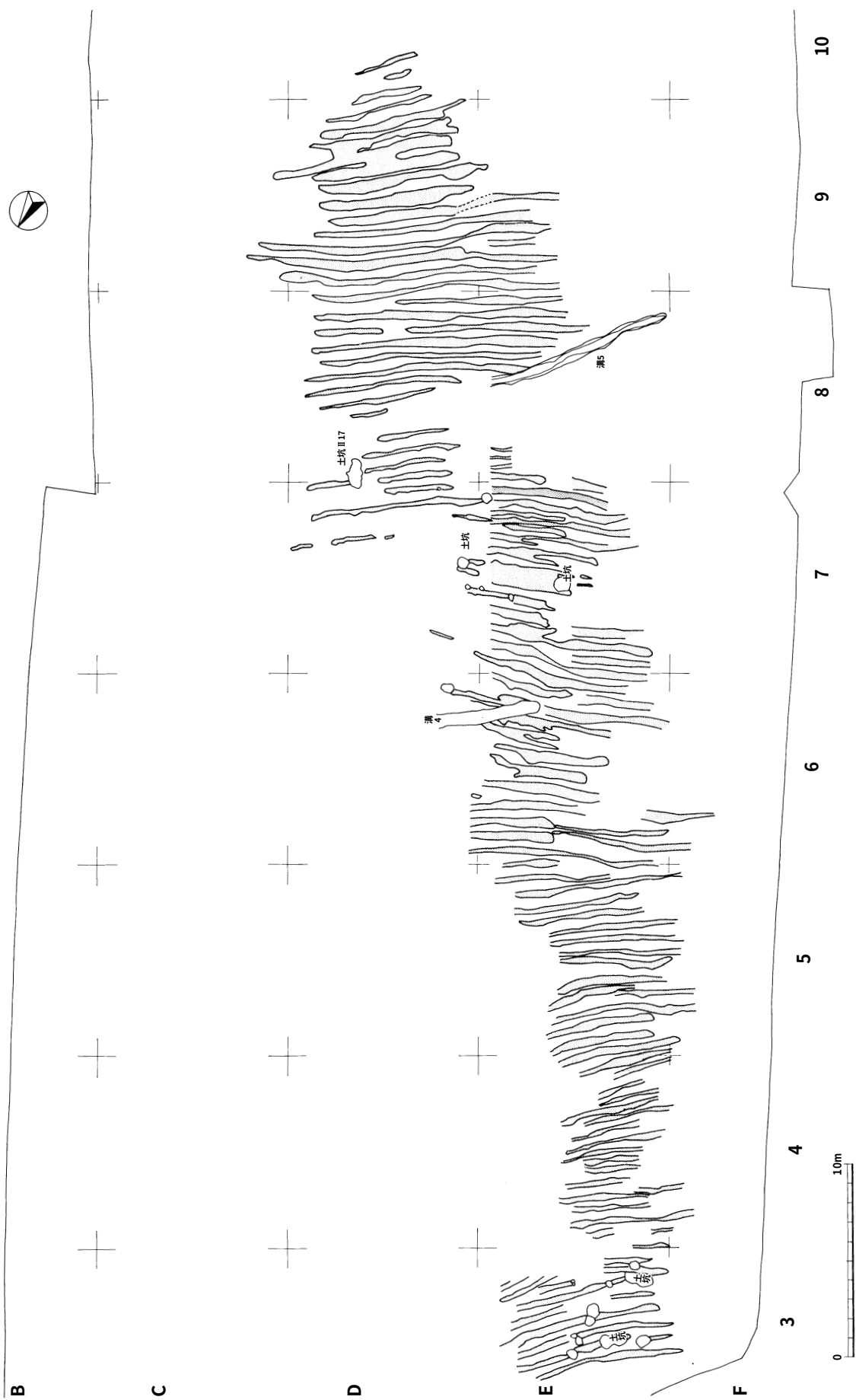
溝6は浅い溝で、長さ6m、幅60cm、深さ15cmである。溝7は長さ2mで溝6と同じである。

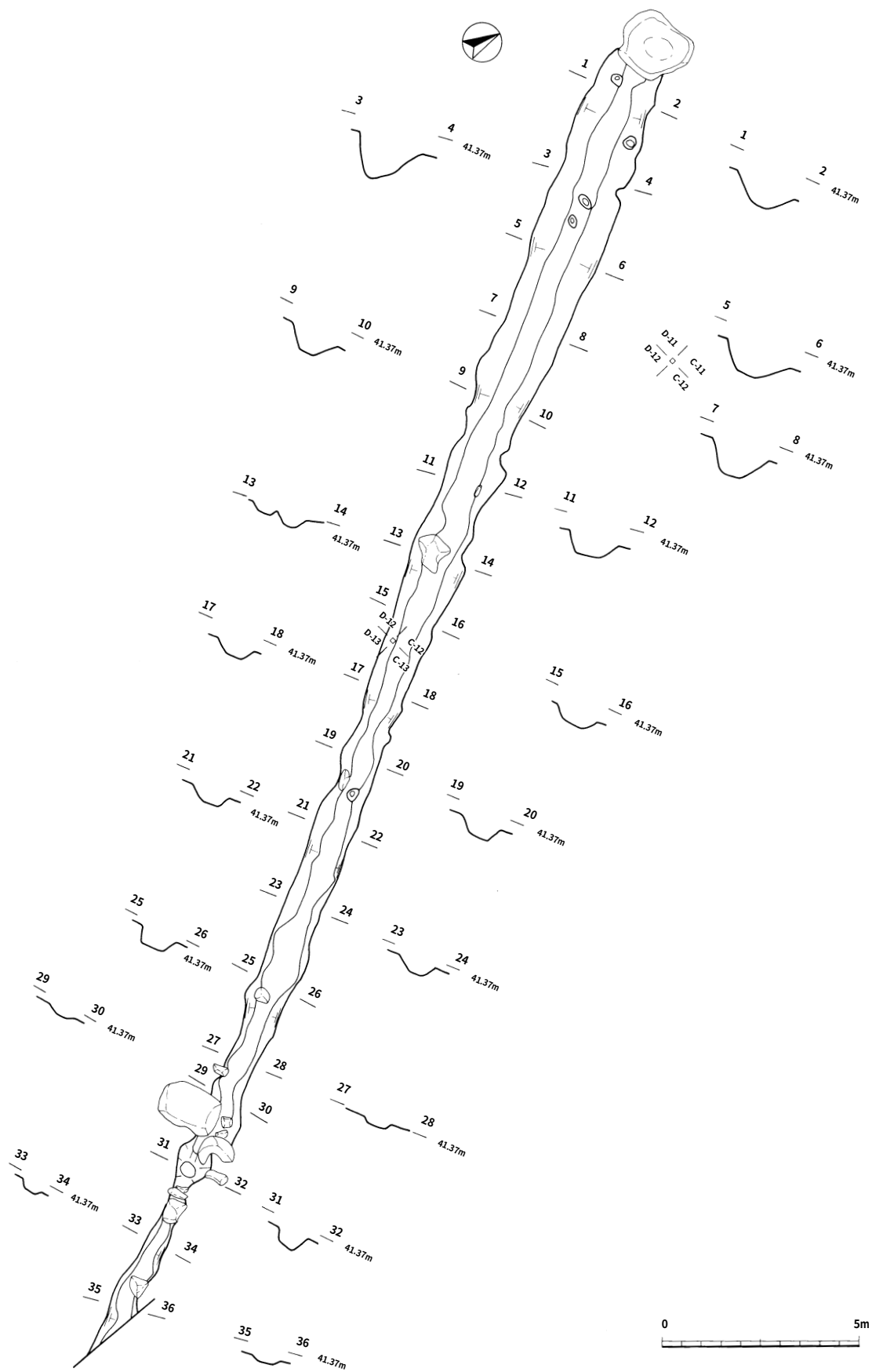


第89図 畠跡Ⅰ-1 (第2畝間)

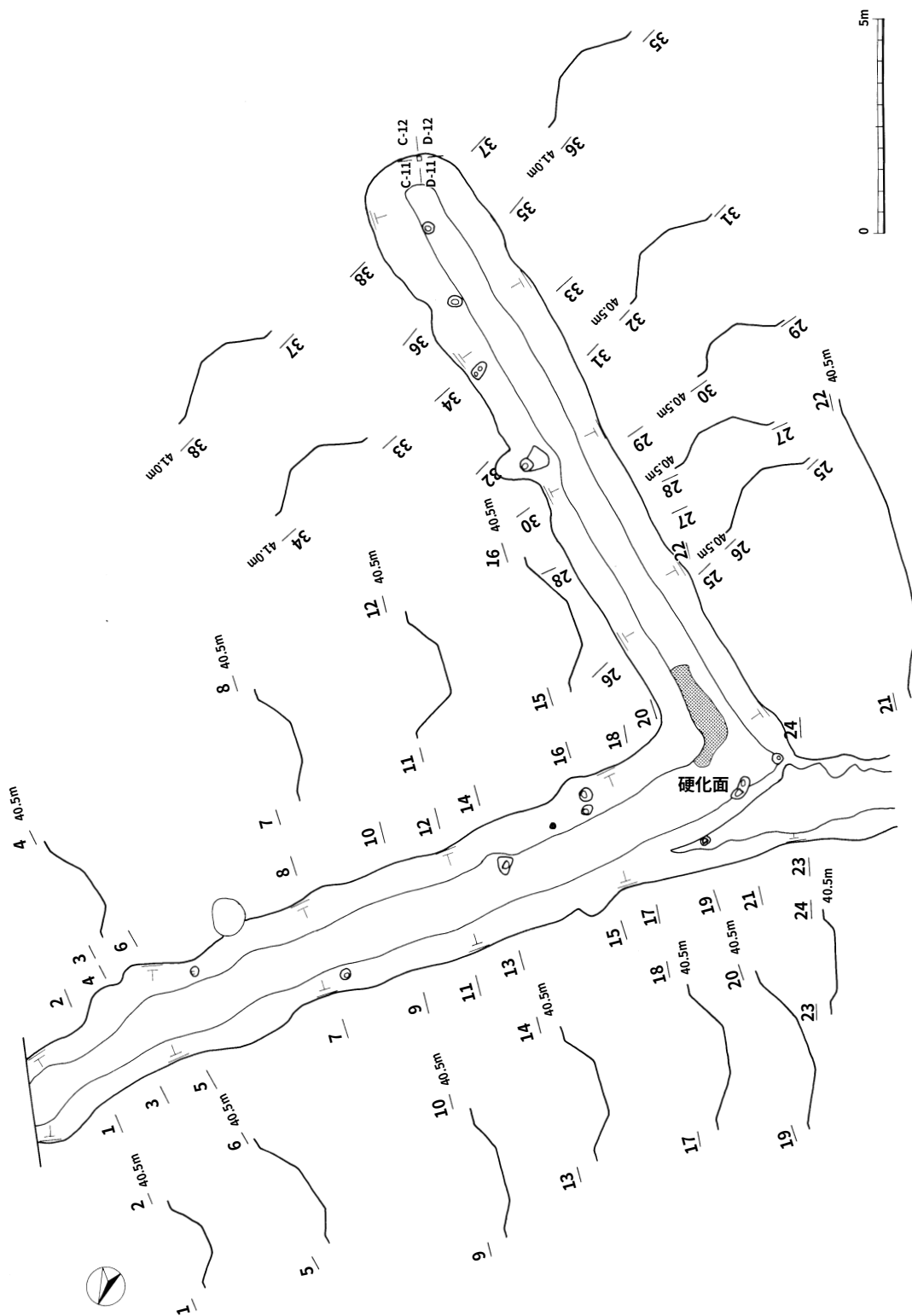


第90図 畠跡Ⅰ-2(第1畝間)

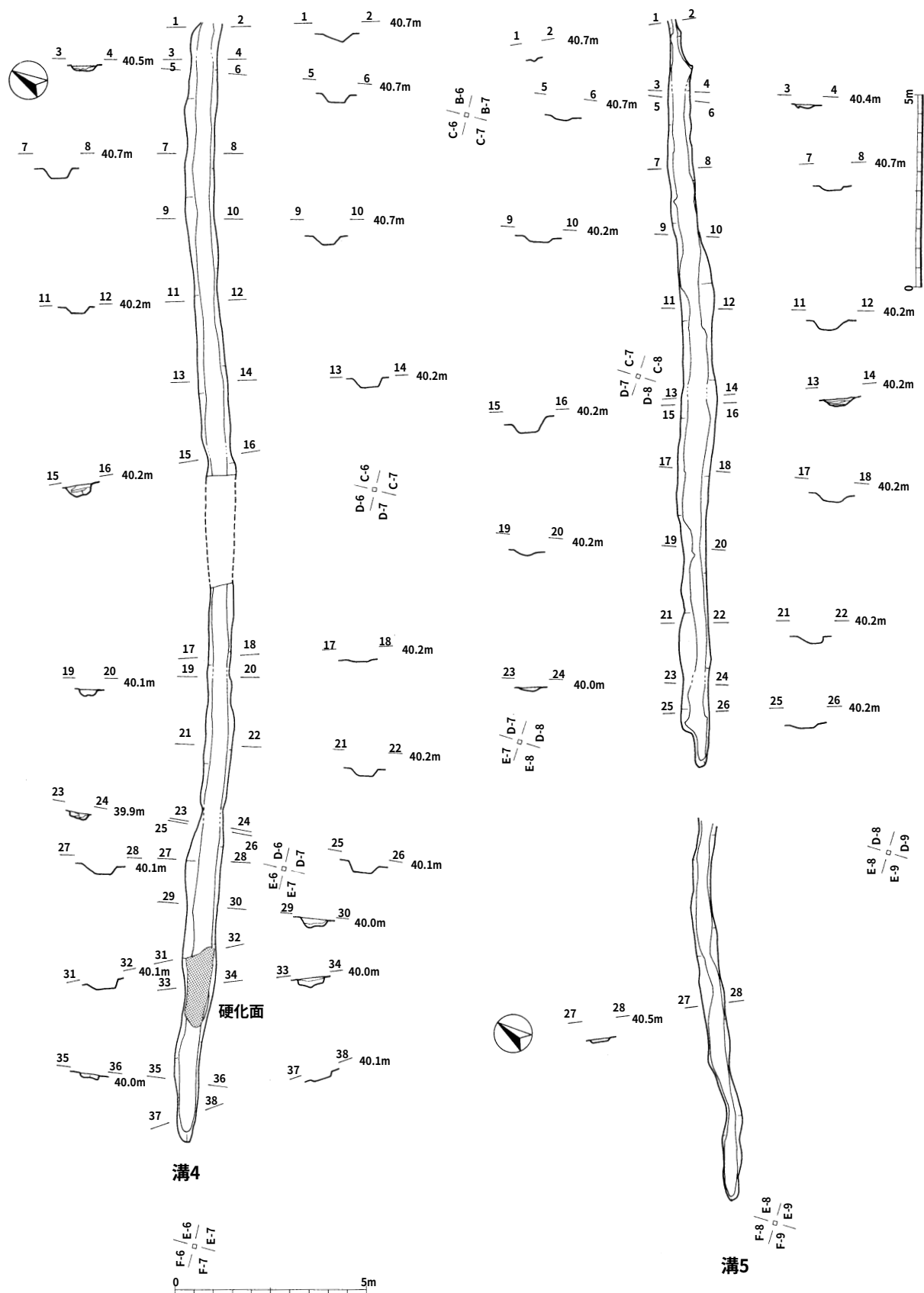




第92図 溝1



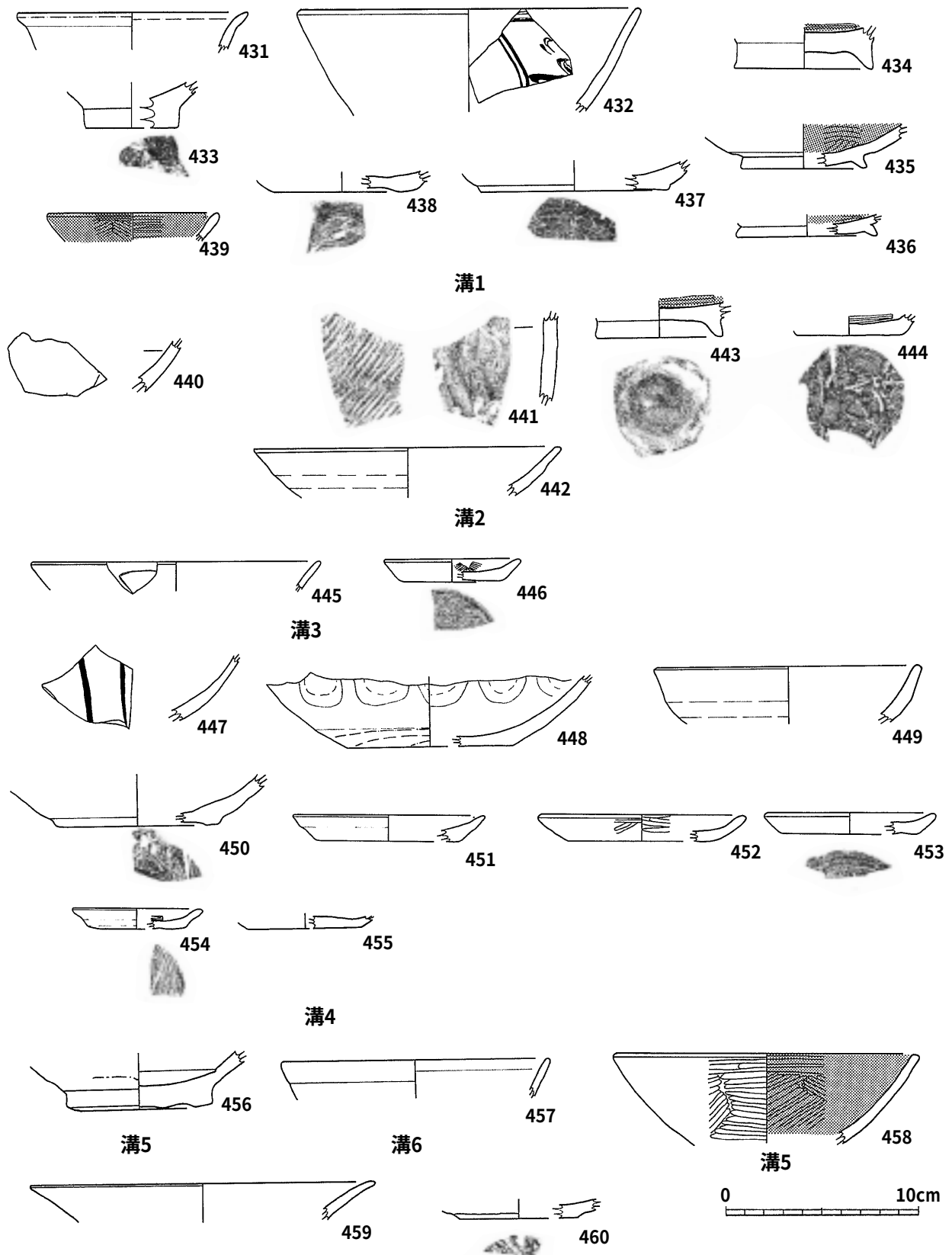
第93図 溝2・3



第94図 溝4・5

溝1～6の出土遺物（第95図 431～460）

溝1は431～439である。431は白磁の端反りの碗である。432は青磁Iの碗である。



第95図 溝1～6の出土遺物

433・437・438は土師器の埴、坏、小皿である。434～436は黒色土器Aの埴で439は同Bの小皿である。

溝2は440～444である。440は青磁碗で鎬蓮弁文がある。441は中世須恵器である。442は土師器の坏で、443は黒色土器Aの埴、444は土師器の小皿である。

溝3は445の白磁碗、446の土師器小皿が出土している。

溝4は447～455が出土している。447は鎬蓮弁文の青磁碗で、448は中国陶器の壺底部である。449～451・453～455は土師器で、449・450は坏ほか小皿である。452は黒色土器Bの小皿である。

溝5は456の白磁碗の底部、黒色土器Aの埴が出土している。

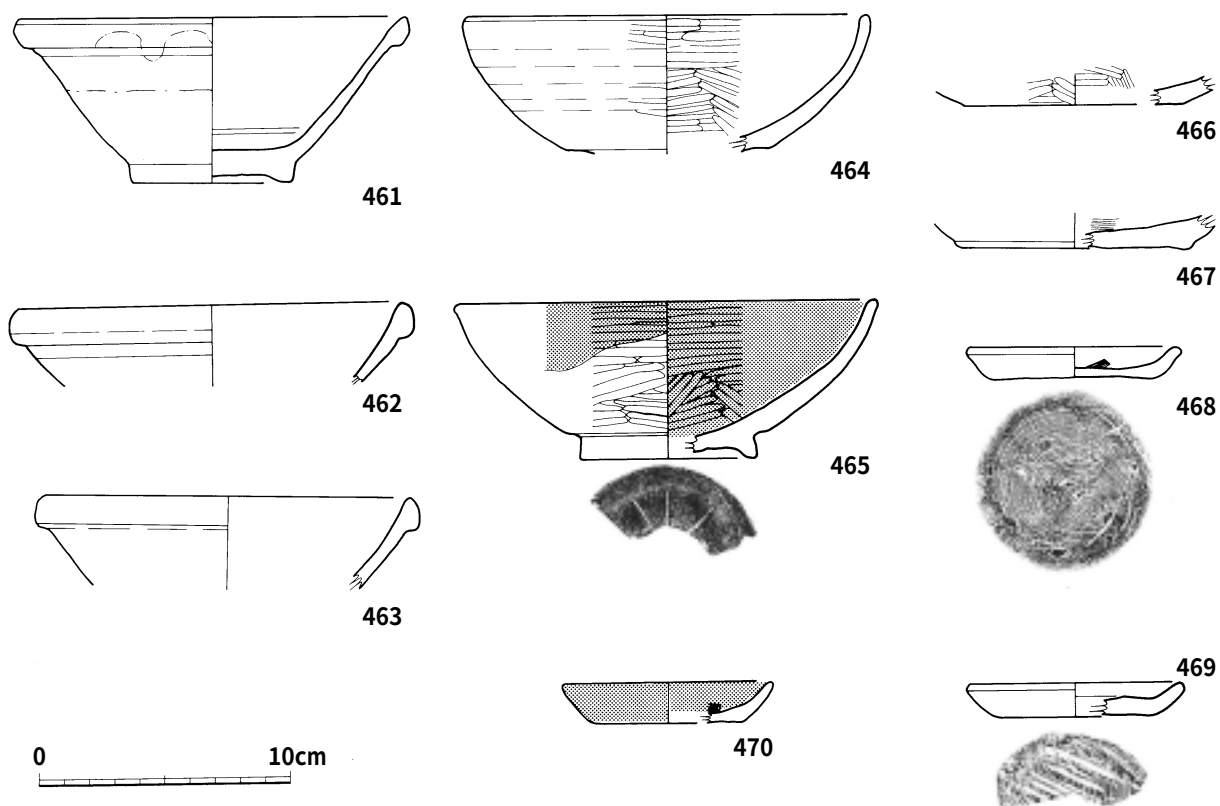
溝6は457の青磁とほか土師器が出土している。

キ 柱穴遺構（第96～101図 461～525）

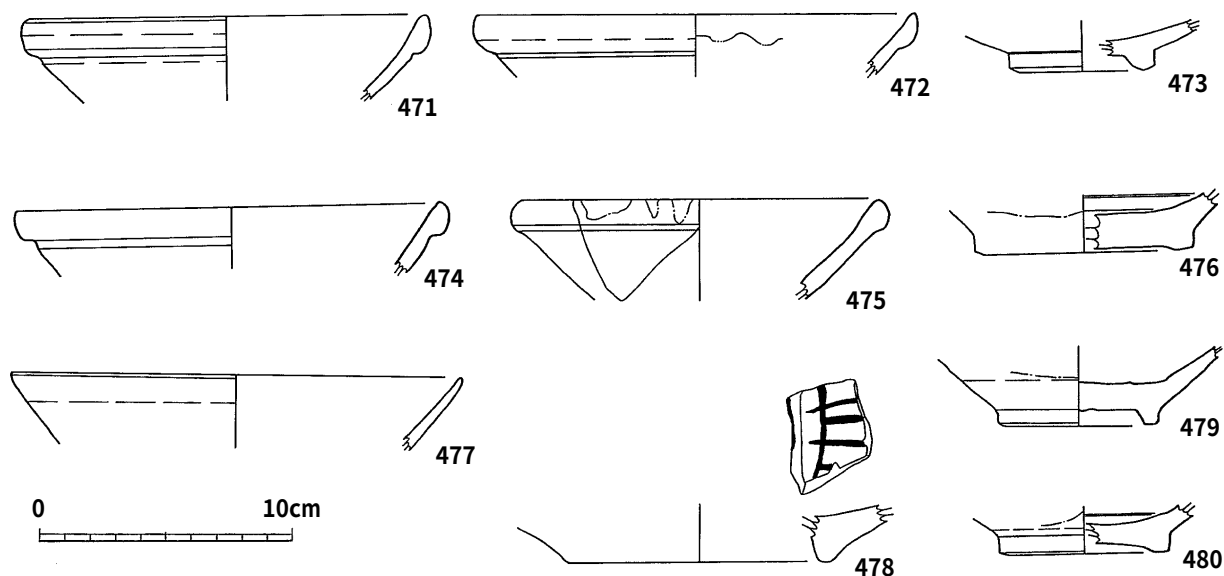
この柱穴遺構は、掘立柱建物跡1内で建物に組み込めなかったものである。位置は第29図の全体図で参照のこと。

同一柱穴遺構から出土したものは、461～463が白磁Ⅳ類、464が土師器埴、465が黒色土器A、466・467が土師器坏、468・469が土師器小皿、470が黒色土器Bの小皿である。

これらの遺物は同一遺構ととらえられたために掲載した。磁器と土師器のセット関係ととらえたい。



第96図 同一遺構柱穴内の出土遺物

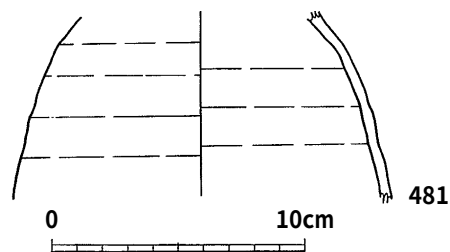


第 97 図 柱穴内の出土遺物 (1) 磁器

471 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が若干彎曲している。472 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。内面に垂釉がみられる。473 は白磁Ⅳ類の底部である。474 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。475 は白磁Ⅳ類で玉縁口縁の幅が太い。器形は体部が直線状である。476 は白磁Ⅳ類の底部で、低い高台である。477 は青磁の碗である。478 は青磁の盤の底部である。479 は高台のある白磁Ⅶ類の底部である。480 は低い高台の底部である。

陶器 (481)

陶器は中国陶器が出土している。第 98 図の 481 である。薄手の陶器で褐釉がかかったものである。形態は四耳壺の胴部と思われる。



第 98 図 柱穴内の出土遺物 (2) 陶器

土師器 (482～521)

土師器は埴 (482～499) と坏 (500～508) と小皿 (509～521) が出土している。

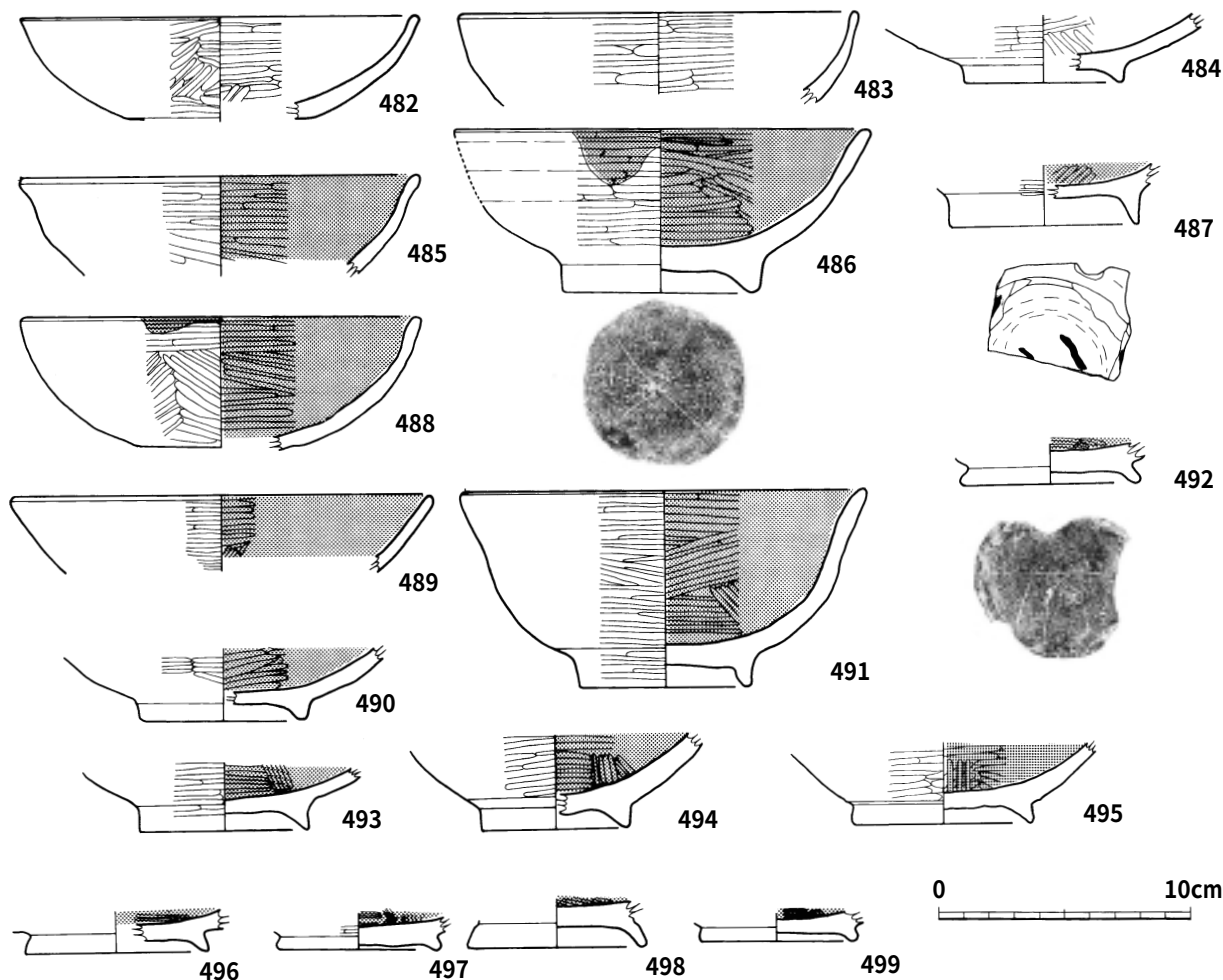
埴は482～484 が土師器で、485～499 が黒色土器Aである。本来内側だけ黒色を施すものであるが、486・488 は外面の一部にもみられる。

この中で、高台の低いものは484・492・495・496・497・499 である。高台の高いものは486・487・490・491・493・494・495・498 である。

口縁部は内湾するものが482・483・488 で、直線状は489, 外反が485・486・491 である。

これらは、全面に丁寧な研磨痕があり、水漏れ防止が良くおこなわれている。特に見込みの中央部は縦位と横位にみられる。

特徴のある土師器は、487 に墨書がみられる。また、486 の底部外面に×と一を重ねた線刻がみられる。492 には一と三の組み合わせの線刻がみられる。



第 99 図 柱穴内の出土遺物 (3) 土師器の碗

坏は 500・501 が口縁から底部までであるもので、底部からの立ち上がりは斜位に直線状である。502 はやや厚みがあり、内湾ぎみである。503～508 は底部である。503・504・505 は底部が角張っているものである。506 は底部の角が丸味をもっているものである。507 は充実高台ぎみにつくっている。508 も充実高台ぎみにつくっているが上げ底である。

製作は糸切り離しである。

小皿は 509・510・511 が深めの皿で、512～519 浅めの皿である。小皿の立ち上がりは 509・510・511・519 が上に、512～518 が斜めにみられる。この中で、512～516 の底面は上げ底ぎみになっている。また、520 は底部である。

製作は糸切り離しである。

521 は黒色土器 A の皿である。内外面は研磨がみられ、口縁部が外反している。全体的に薄手に作られている。

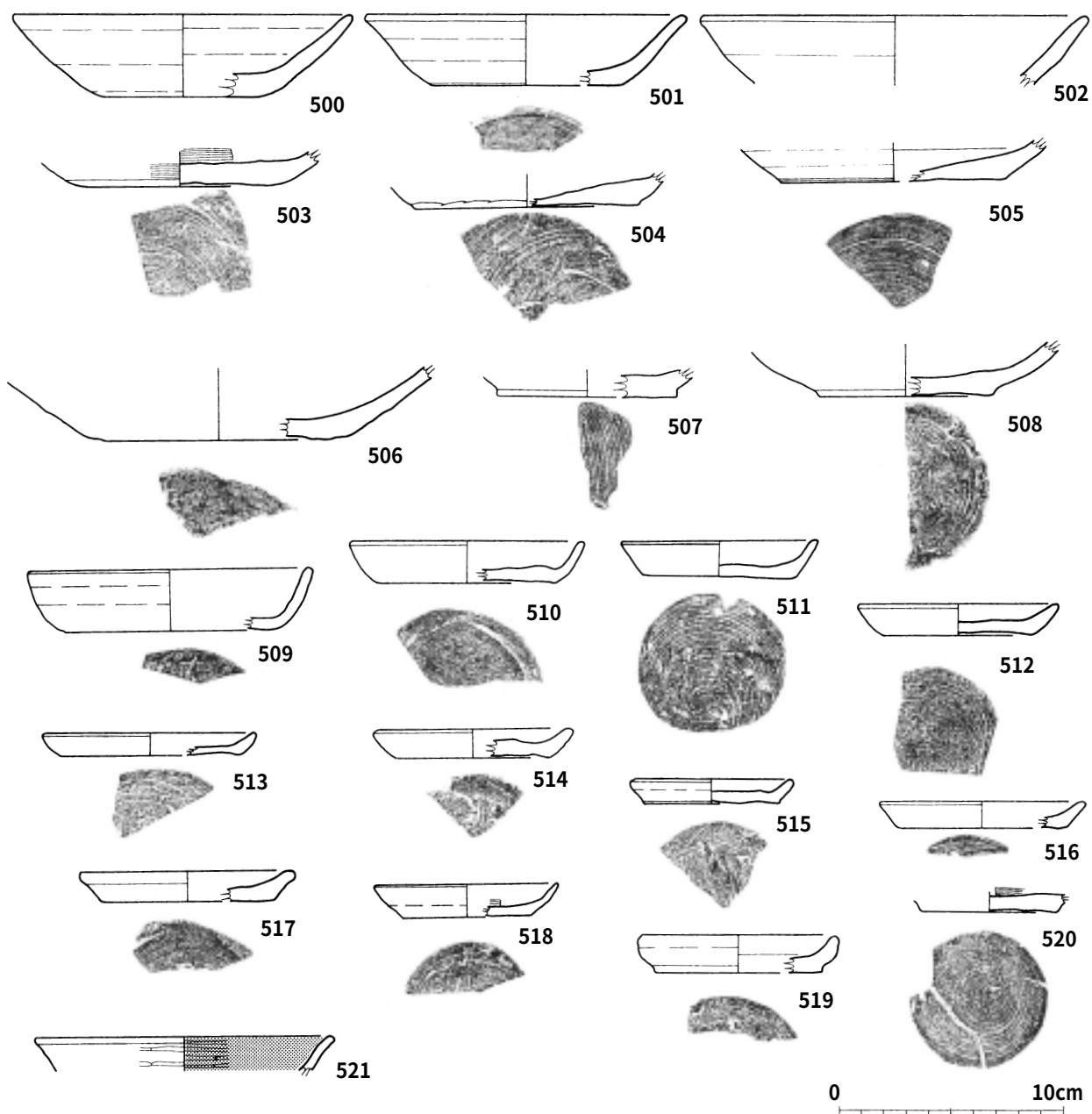
522 は捏鉢である。中世須恵器で東播磨系と思われる。

523 は小刀の柄部である。

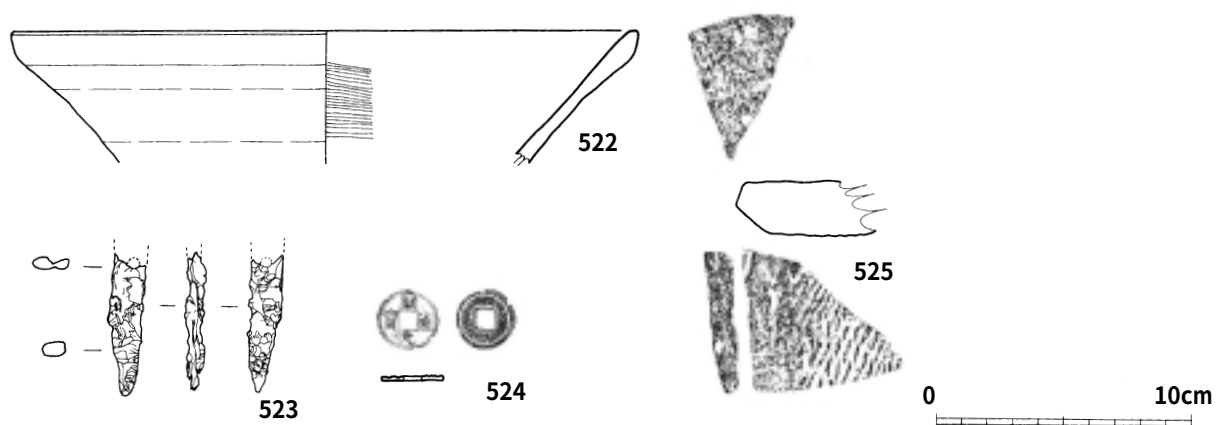
524 は古銭で開元通寶である。

525 は布目瓦である。平瓦と思われる。

以上が柱穴内出土遺物で、包含層出土と区別した。



第100図 柱穴内の出土遺物 (4) 土師器の坏・小皿



第101図 柱穴内の出土遺物 (5) 中世須恵器・瓦・鉄器・古銭

(2) 遺物

ア 白磁

① 白磁(1) (第102図 526～528)

この類は、幅が狭い玉縁口縁をもつ白磁Ⅲ類である。

526 は幅の狭い玉縁をもつ白磁の碗である。器形は内湾するものである。527 は幅の狭い玉縁をもつ白磁の皿である。器形は外反するものである。528 は幅の広い玉縁をもつ白磁の皿である。器形は内湾するものである。

② 白磁(2) (第103～105図 529～589)

この類は、幅が広い玉縁口縁をもつ白磁Ⅳ類である。また、それとセットになる皿である。碗は529～586で、皿は587～589である。碗は口縁部から体部にかけてのものが529～572で、底部が573～586である。

この玉縁口縁は厚みのないものが529・530・532・536・539・553・565・572で、他は厚手の玉縁を口縁外面に廻らしている。

器形は直行の外反で、口縁内側の口唇部近くが内湾するのが多い。

口径は、最も狭径が530で13.8cm、広径が557で22cm、大方は15～18cmである。器高は6.5～7.5cmが想定される。

施釉は、内面が全面施釉で外面が口縁から体部にかけて行われている。この中で534・540等にみられるように釉を厚手にかけたため垂れている垂釉があるものもある。

底部は削り込みが浅く高台が低い。そして、畳付けは外側を多く削り断面が斜めになっている。

器面調整は見込みが全面施釉で、外面は体部に施釉があるが底面にはない。

これらで見込みに沈線ないし段がみられるものは529・573・574・577・578・582・583・584・585・586である。

587は小皿である。底部は平底で体部は直線状に口縁部まで外反している。口唇部は外側に斜傾している。588は外反する口縁体部である。589は若干上げ底の底部で、体部は外反する器形である。見込みに線がみられる。

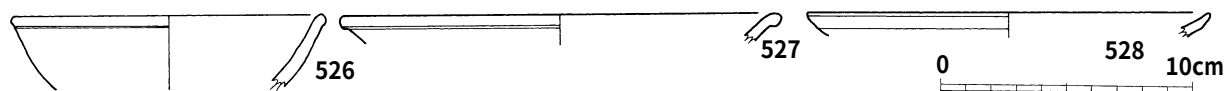
③ 白磁(3) (第106図 590～602)

この類は、口縁部が外側に反る端反りで白磁Ⅴ類にあたる。

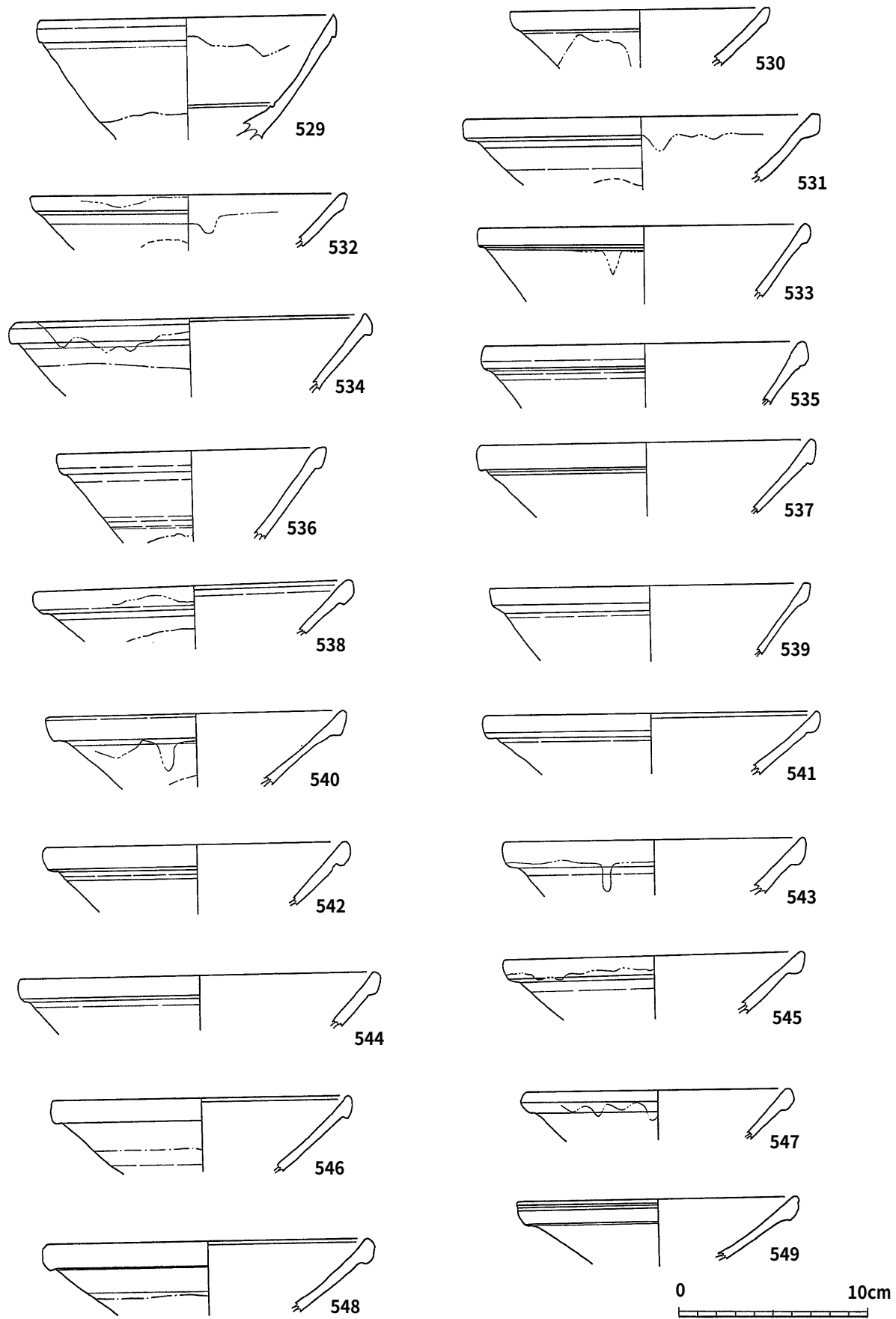
590は見込みに櫛書文がみられるものである。器形は丸味をもつ体部から口縁部にかけて外反している。591～595は無紋である。596は見込みに櫛書文がある底部である。597～599は底部で高台が高く、畳付けは尖っている。施釉は見込みが全面施釉で段があり、外面は体部までの施釉である。

600～602は皿である。600・601は底部から直接外反するタイプであるが602は見込みに段がある。また、線書の文様もみられる。

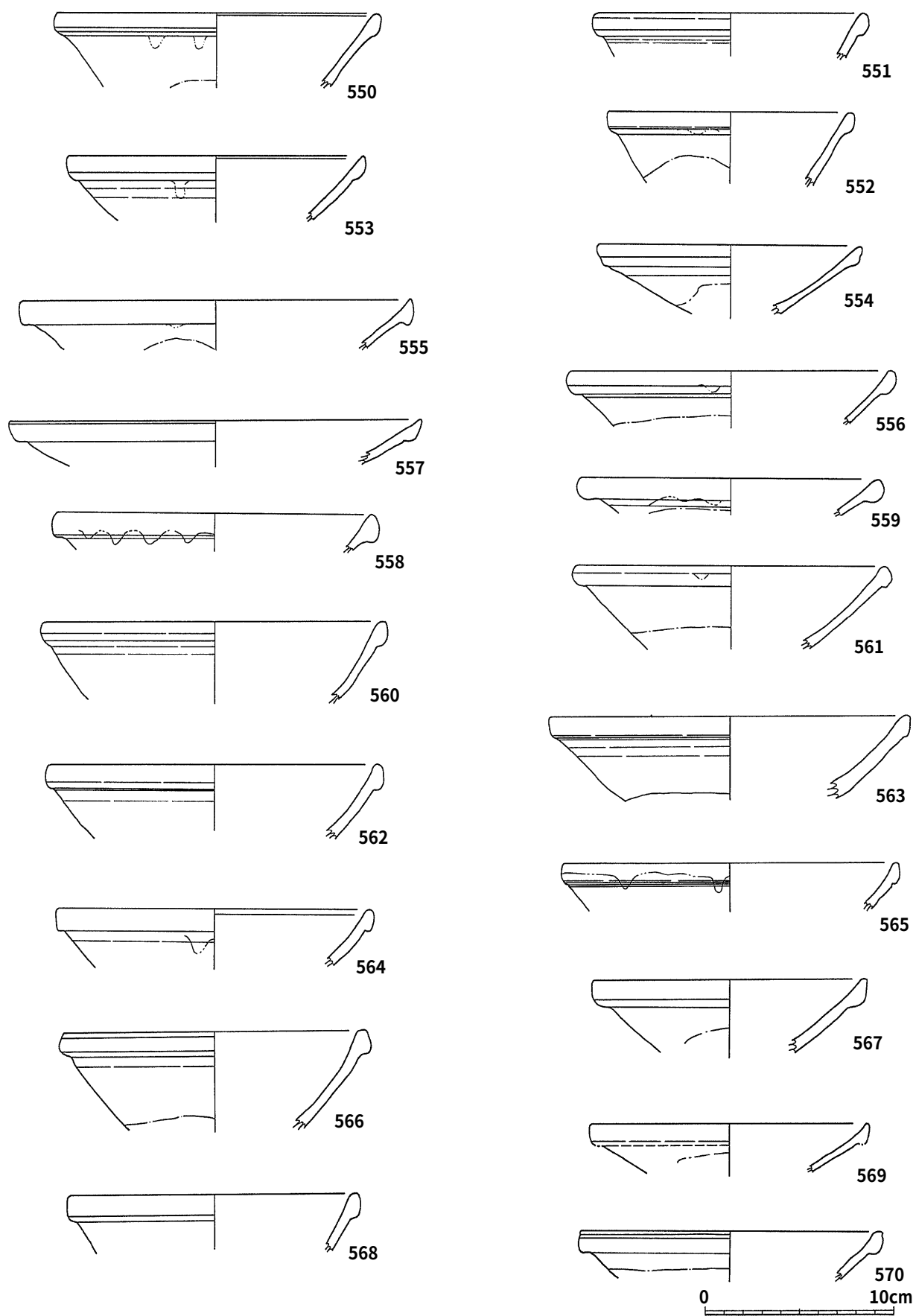
④ 白磁(4) (第107図 603～606)



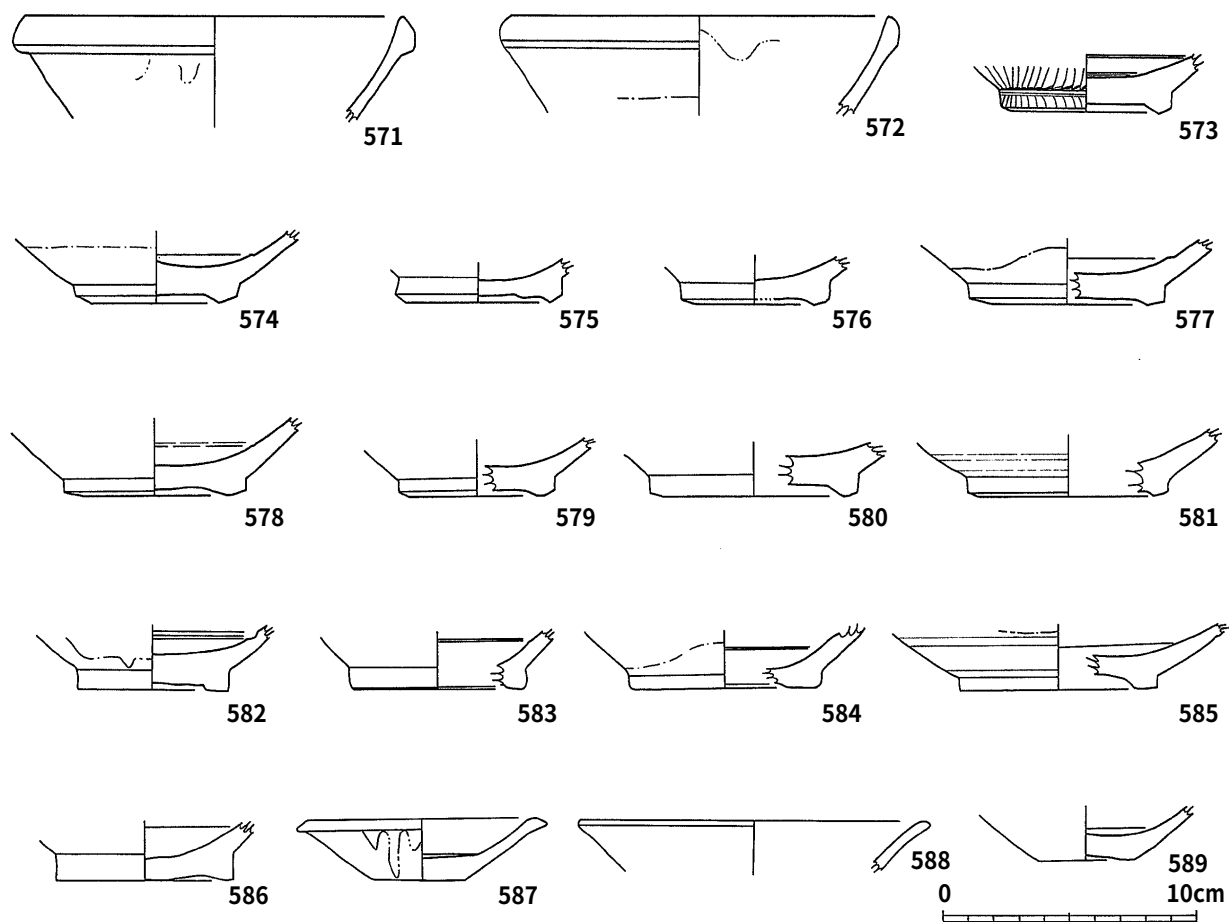
第102図 白磁(1)



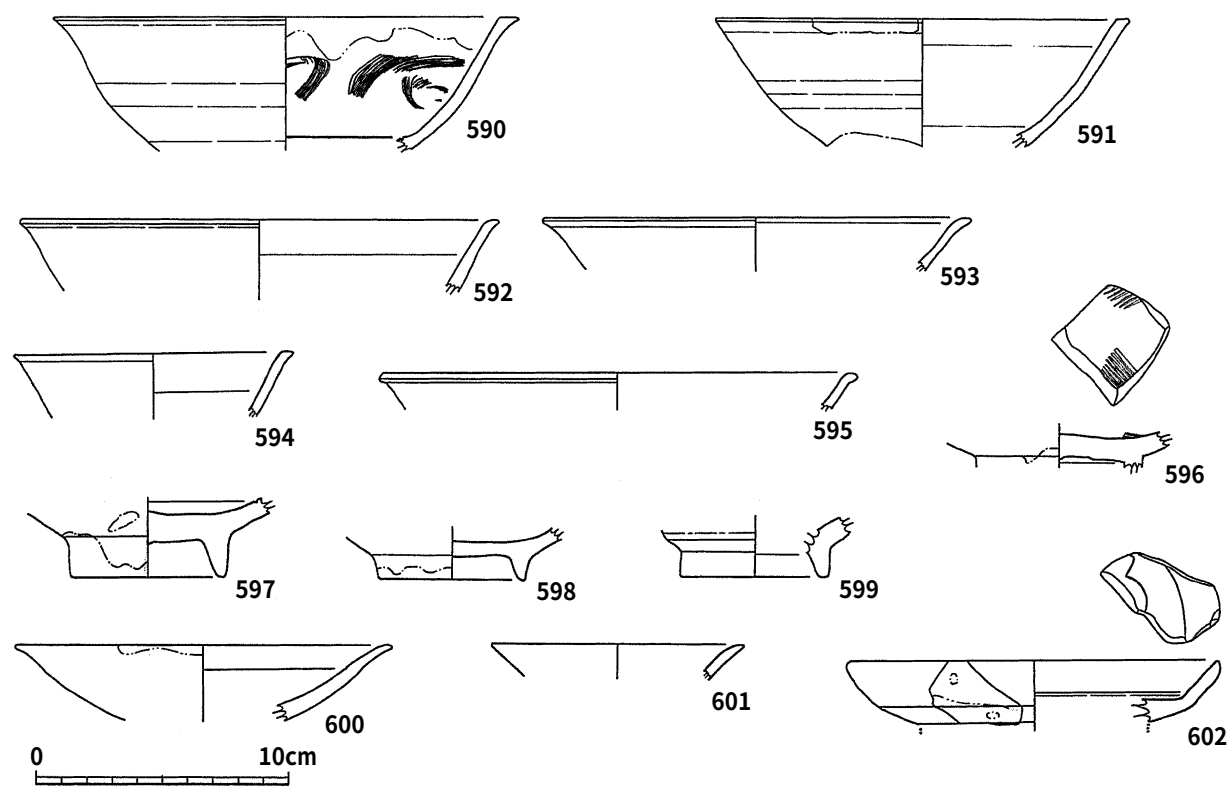
第103图 白磁 (2) -1



第104图 白磁 (2)-2



第105图 白磁 (2)-3



第106图 白磁 (3)

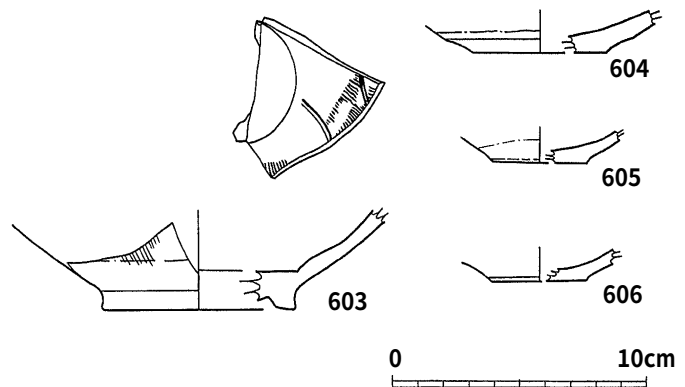
この類は白磁Ⅶ類に比定する。603は
高台の低い碗である。見込みに櫛書文が
みられる。604～606は小皿である。

⑤ 白磁(5) (第108図 607～620)

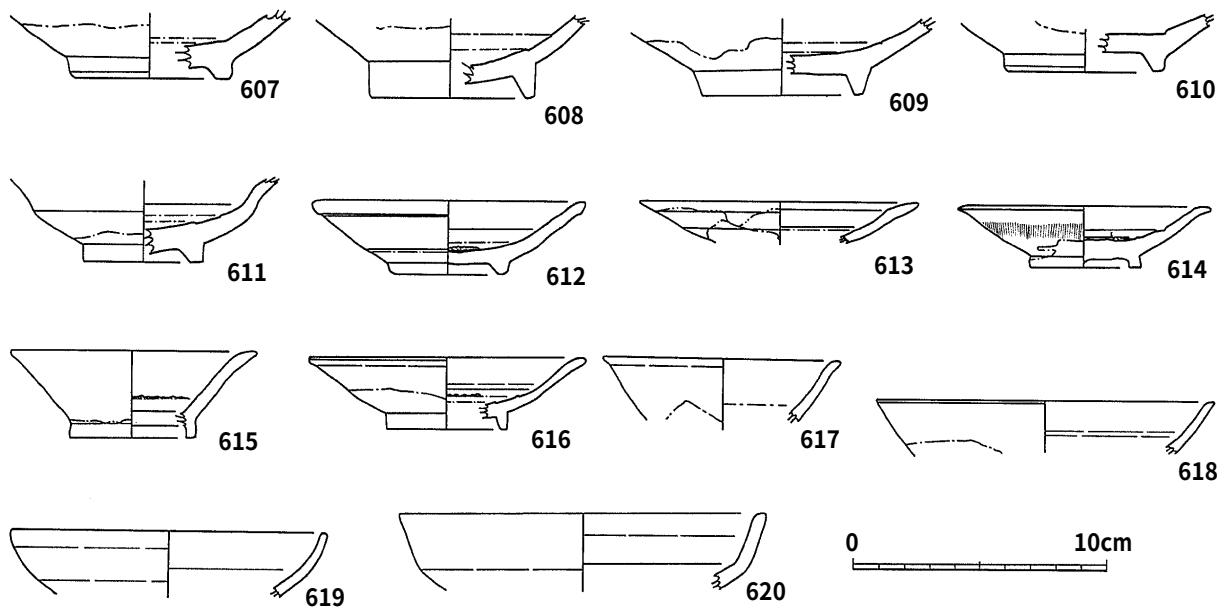
この類は見込みに釉剥が蛇の目状にあ
る白磁Ⅷ類に比定する。この中で 607～
611は高台が少し高い碗である。612～
620は皿である。

⑥ 白磁(6) (第109図 621～639)

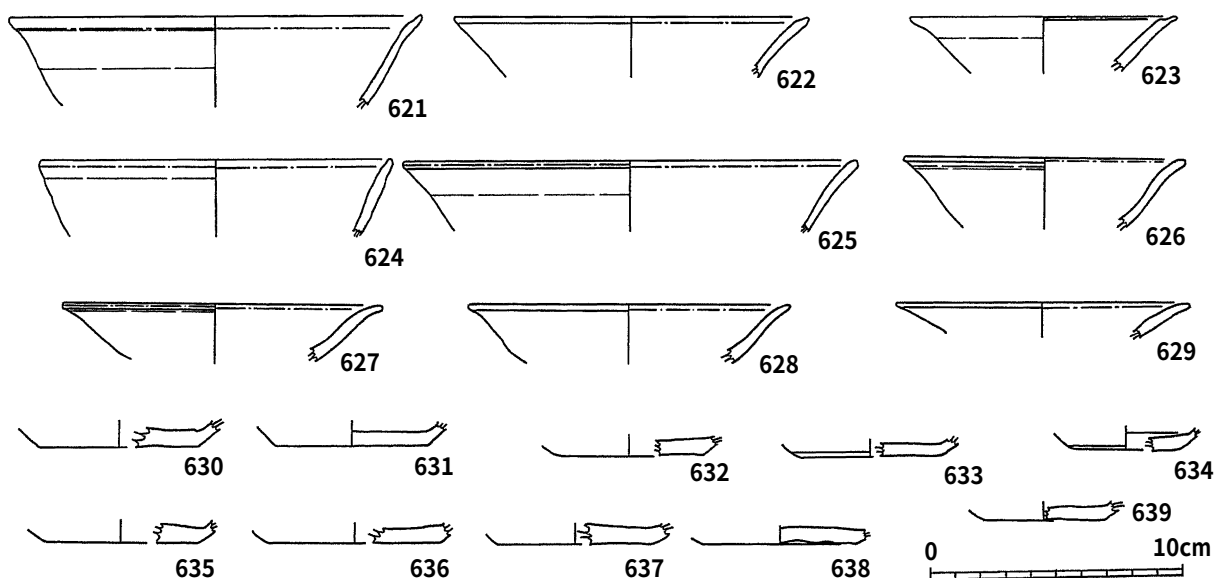
この類は口縁部の釉を掻いている口剥に比定する。



第107図 白磁(4)



第108図 白磁(5)



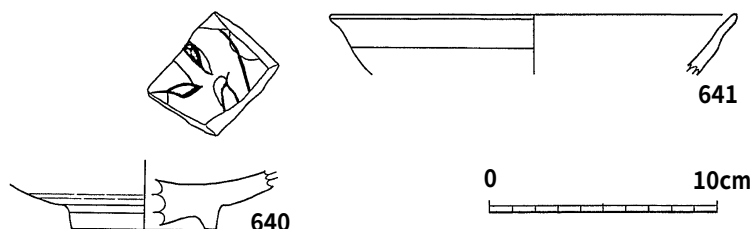
第109図 白磁(6)

621～629 は口縁部から体部である。口縁部は大きく外反する。この中で、623 は口縁部の釉を掻いた時に削り痕で段になっている。630～639 は底部である。底部は平底の薄手で、釉は表裏とも全面施釉である。

これらは皿である。

⑦ 白磁 (7) (第 110 図 640・641)

この類は白磁B・C類にあたる。



第 110 図 白磁 (7)

640 は白磁B類である。これは厚い碗の底部である。高台はそれほど高くなく畳付は平坦である。見込みには草花文がみられる。

641 はC類の碗である。口縁部は直線状に外反し、体部で少し「S」字状に曲がっている。口縁部は薄い。施釉は全面である。

⑧ 白磁 (8) (第 111 図 642～649)

この類は、白磁D類に比定する。

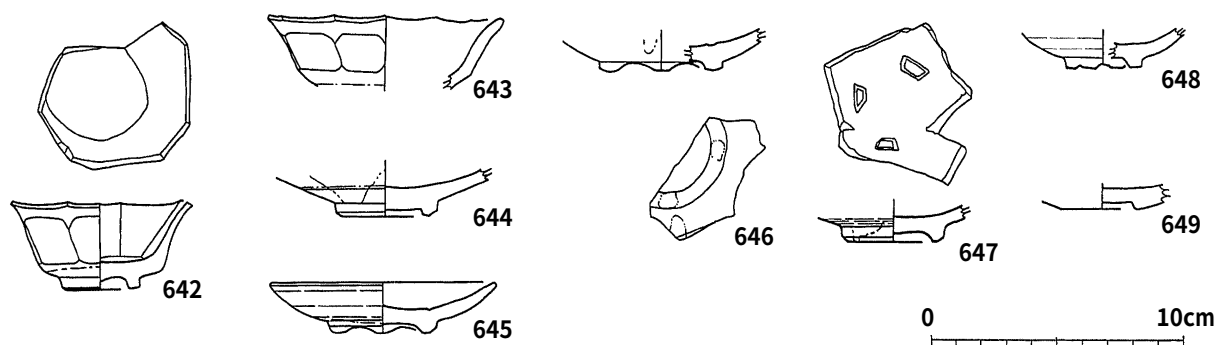
642 は八角の小碗である。口唇部は平坦面を作り山形に波状している。体部から口縁部は外反し、8面の四角面を作っている。底部は横に張り高台を設けている。見込みは円形に近く稜がみえている。施釉は底部の外表面以外に施されている。643 は642の少し大形版である。644 はこれらのタイプの底部である。畳付は外側が上がっている。

645 は高台を削り4本の脚を作っている底部を持つ小皿である。施釉は底以外に施されている。見込みには線がみられる。646 は同じ底のタイプで、脚端に砂目跡がみられる。

647 は見込みに砂目跡がみられる小皿である。見込みには施釉があるが、底外面にはない。

648 は高台に4か所切り込みを入れた小碗の底部である。見込みには施釉があるが、底外面にはない。

649 は凹んだ底部で碁笥底と言われるタイプである。器形は丸味のある小皿である。施釉は底以外に施されている。

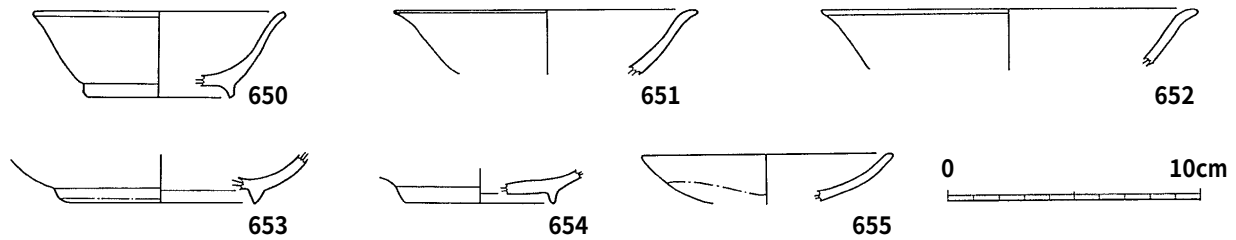


第 111 図 白磁 (8)

⑨ 白磁（9）（第 112 図 650～655）

この類は白磁E類である。

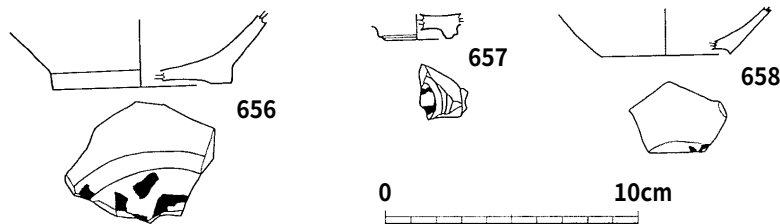
650 は高台の畳付が尖り、体部は口縁部にかけて外反している。底径は広めである。651 は体部から口縁部にかけて外反している。652 も体部は口縁部にかけて外反している。653 は高台の畳付が尖り、体部が張っている。654 も高台の畳付が尖り、体部が張っている。655 は丸味をもった器形の小皿である。施釉は見込みが全面で、外面が体部までである。



第 112 図 白磁（9）

⑩ 墨書磁器（第 113 図 656～658）

656 は白磁IV類の底部の外面に書かれたもので、内容は不明である。657 は小皿か小碗の底部の外面に書かれたもので、内容は不明である。658 は碁笥底様の底部の外面に書かれたもので、内容は不明である。



第 113 図 墨書磁器

イ 青磁

① 青磁（1）（第 114 図 659～684）

この類は龍泉Ⅰに比定している。器形は張る底部から口縁部に立ち上がり体部は直線状で外向し、底部は低い高台をもつ碗である。ここでは659～673の見込み有文と674～684の無文の二種類ある。

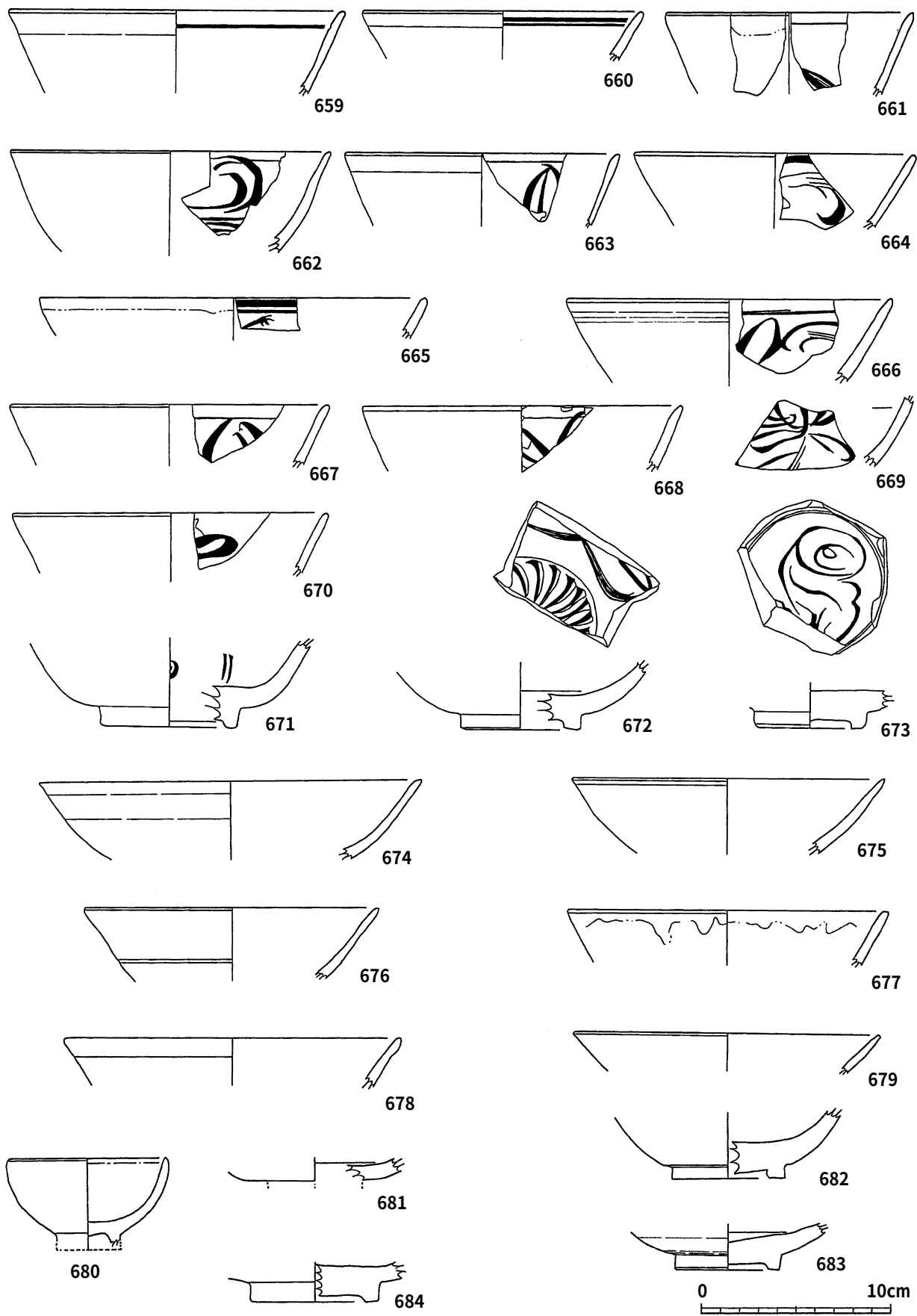
659・660 は口縁部に横位の沈線、661～673 は沈線と草花文を見込みに施している。施釉は見込みが全面施釉で、底部が露胎である。

674～684 は無文で、施釉は見込みが全面施釉で、底部が露胎である。なお、この中の680は小碗である。

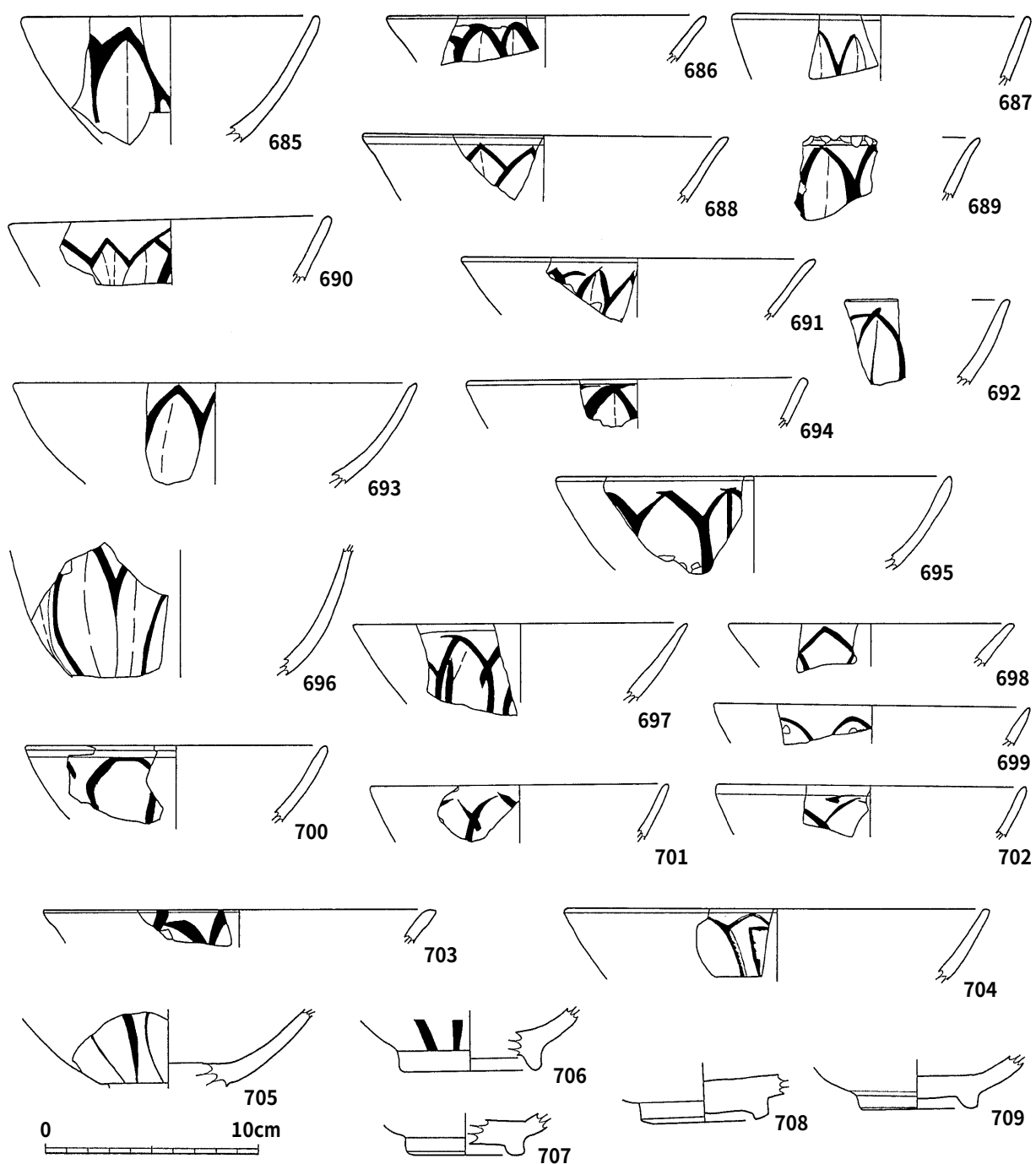
② 青磁（2）（第 115 図 685～709）

この類は龍泉Ⅱに比定している。器形は張らない底部から彎曲状に立ち上がり、口縁部は内湾ないし、直線状にあがる碗である。そして、高台は低い。

施釉は見込みが全面で、底部の高台内が露胎である。文様は体部から口縁部に稜がはっきりしている広い鎬蓮弁文がみられるものと幅広の蓮弁文を構成するが、稜がはっきりしないものがある。その鎬蓮弁文は崩れているのが多い。



第114図 青磁 (1)



第115図 青磁(2)

稜のある施文は685・686・693の鎬蓮弁文が頂点でしっかり重なっているが、691・692・694・695・697は片方が上に乗るようにはみ出して描いている。

稜のない施文は698～704であるが、全体として鎬蓮弁文は雑に描かれており、700・703・704の様に大きく崩れているのが特徴である。

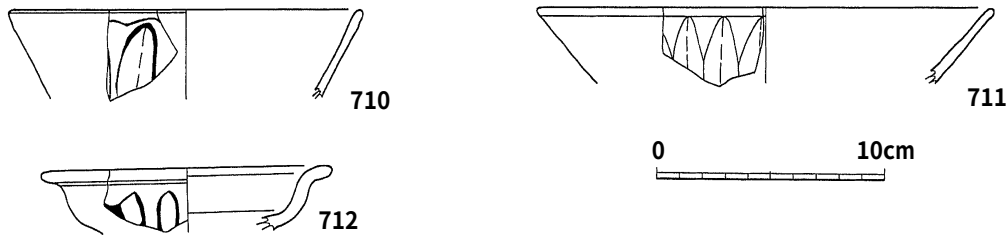
なお、696は口縁部がないが整った鎬蓮弁文である。また、705・706は底部近くの鎬蓮弁文でしっかり高台の基部まで描かれている。

高台の畳付は外側が切られ、内側で接している。

③ 青磁（3）（第116図 710・711・712）

この類は龍泉Ⅲに比定する。

710 は器形としては体部から口縁部まで直線状に外向している碗である。外面の鎬蓮弁文はやや細く、口縁部に二重の鎬蓮弁文を施し、若干稜がみられる。711 は器形としては体部から口縁部まで直線状に大きく外向している碗である。外面の鎬蓮弁文はやや細く、若干稜がみられる。712 は口縁部で大きく曲がり開いた皿である。外面は鎬蓮弁文が雑に描かれている。この鎬蓮弁文は龍泉Ⅱに類似しているため前の類でも差し支えない。



第116図 青磁（3）

④ 青磁（4）（第117図 713～723）

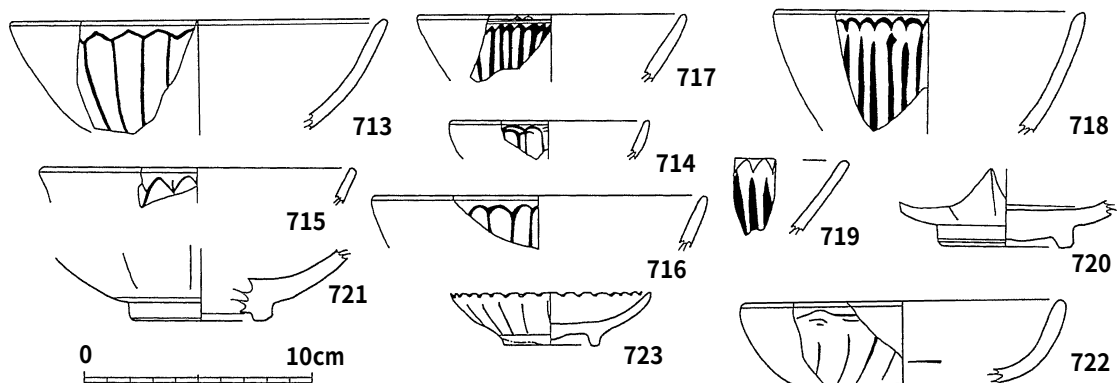
この類は龍泉Bに比定している。器形は体部から口縁部にかけて若干内湾し、全体的に開く碗と皿がある。底部は幅広く低い高台をもっている。文様は鎬蓮弁文が簡略化されたものを体部外面に施している。

碗は713～721である。この碗は文様が大きく713～716、717～719、720・721の3種にわけられる。713～716は蓮弁文上部が口縁部で鋸歯状になり、蓮弁が簡略化され縦線は直線に変化している。この中では、713・716等の鎬蓮弁文が広い。

717～719は全体的に鎬蓮弁文の幅が狭く、蓮弁上部と縦線が離れて別々に施されている。その縦線は太くみられる。

720・721は底部近くである体部に細い線で鎬蓮弁文の縦線を施している。これらは、このように蓮弁の縦線を簡略化により細い線で表している。

722は体部で丸味を持つ皿で723は稜花皿の類である。2つとも鎬蓮弁文を縦線で表すタイプである。722は蓮弁上部の文様と斜位の縦線で組み合わせている。



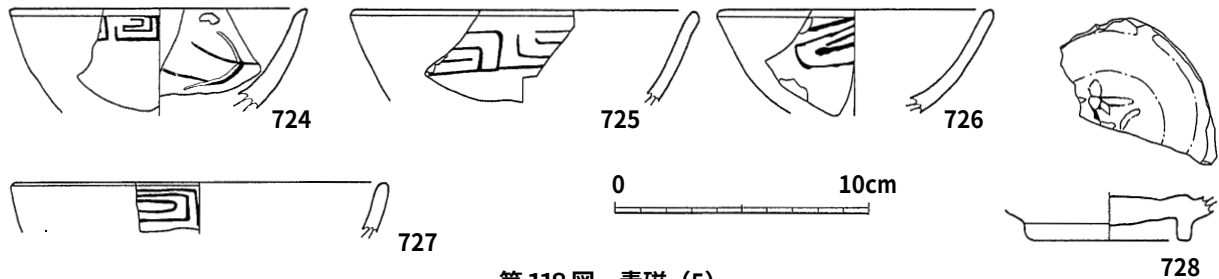
第117図 青磁（4）

また、722は皿の口縁部を稜花状に作ったことは、鎬蓮弁文の上部を口唇部に表し、縦筋が蓮弁の縦線を意味していることも考えられる。

⑤ 青磁（５）（第 118 図 724～728）

この類は龍泉Cに比定している。器形は体部が若干内湾している碗である。底部の高台はやや高めである。文様は外面口縁部に方形を重ねた雷文を廻らし、見込みには草花のスタンプがみられる。

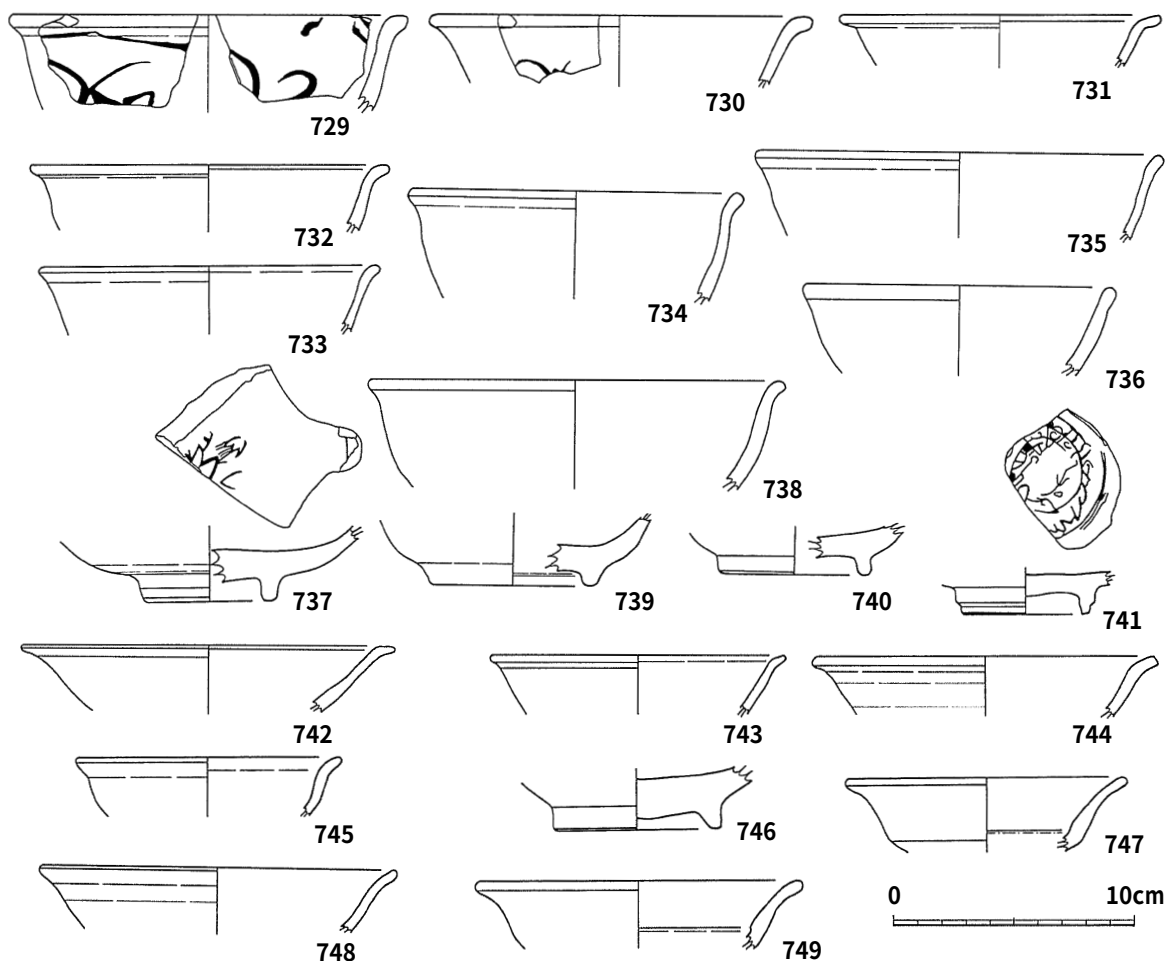
724・727 の雷文はしっかりした長方形で、725・726 の雷文は崩れている。また、728 の見込みは草花文のスタンプの周囲を丸く釉掻きして露胎がのぞいている蛇の目見込みになっている。



第 118 図 青磁（５）

⑥ 青磁（６）（第 119 図 729～749）

この類は龍泉Dに比定している。器形は体部が直状に立ち上がり、厚みのある口縁部を外側に曲げ広げたものが基本で碗と皿がある。碗は 729～741，皿が 742～749 である。文様は草花文を内外面に施す 729 と外面だけに施す 730 がある。その他見込みに草花文のスタンプがあるものが 737・741 である。また、無文もみられる。



第 119 図 青磁（６）

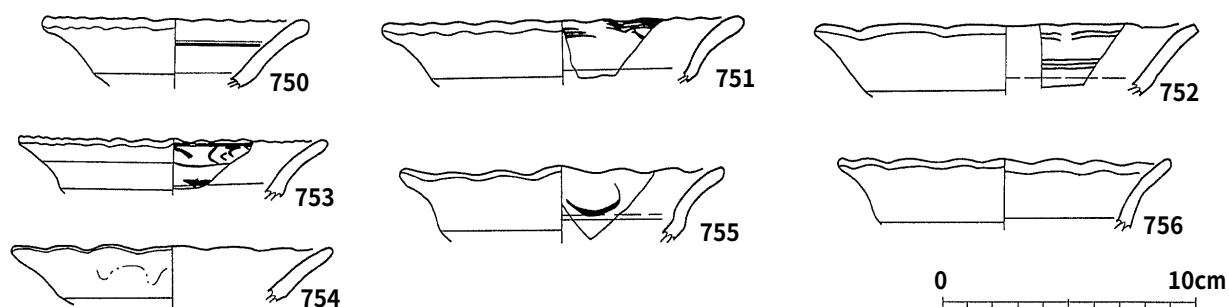
碗の底部は厚みがあり，体部で張り，高台が高い。また，714 は高台の外表面を削り，畳付を細くしている。

皿は口縁部が「く」字状に折れて外反する 742～745 と，若干折れて外反する 747～749 がある。また，746 は厚みのある底部で盤の可能性はある。

⑦ 青磁（7）（第 120 図 750～756）

ここにまとめた稜花皿は各類のものである。750 は外反する見込みに横位の直線，751・752 は波状線，753・755 は草花文を施している。なお，754・756 は無文である。

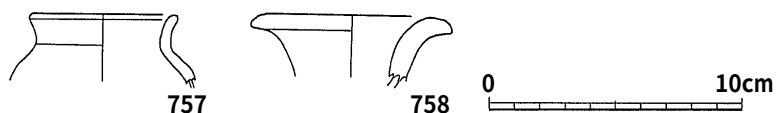
器形は，口唇部が波状で，体部で「く」の字じょうに折れるものである。



第 120 図 青磁（7）

⑧ 青磁（8）（第 121 図 757・758）

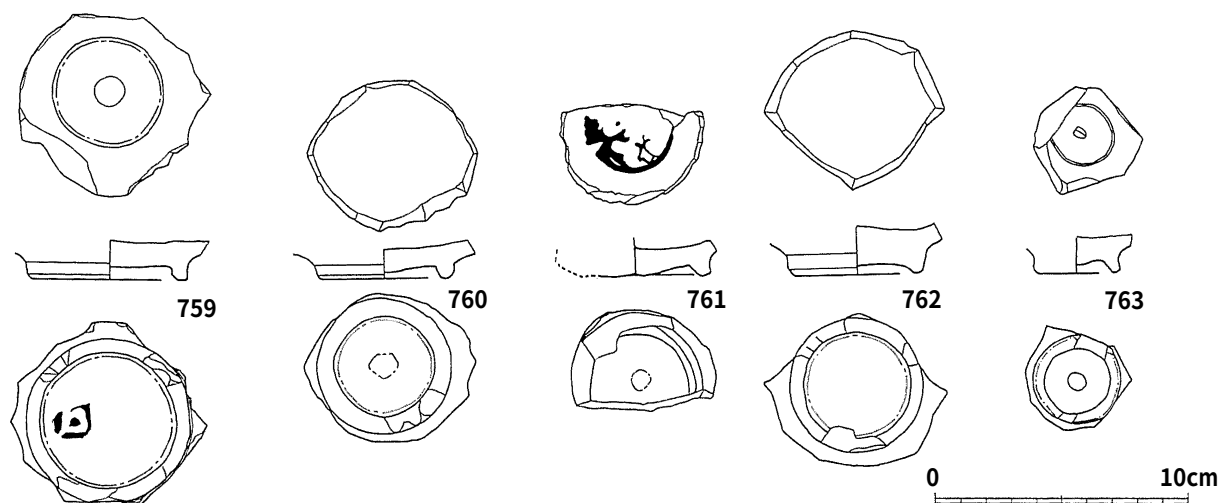
この類は壺である。757 は小壺で頸部から口縁部までの長さが短い。頸部の径は広めで，胴部が丸く張る肩部である。758 は口縁部が長く大きく外反するもので，頸部の径が狭いものである。



第 121 図 青磁（8）

⑨ 青磁（9）（第 122 図）

ここは底部の高台や体部を打ち欠いた二次製品「メンコ」である



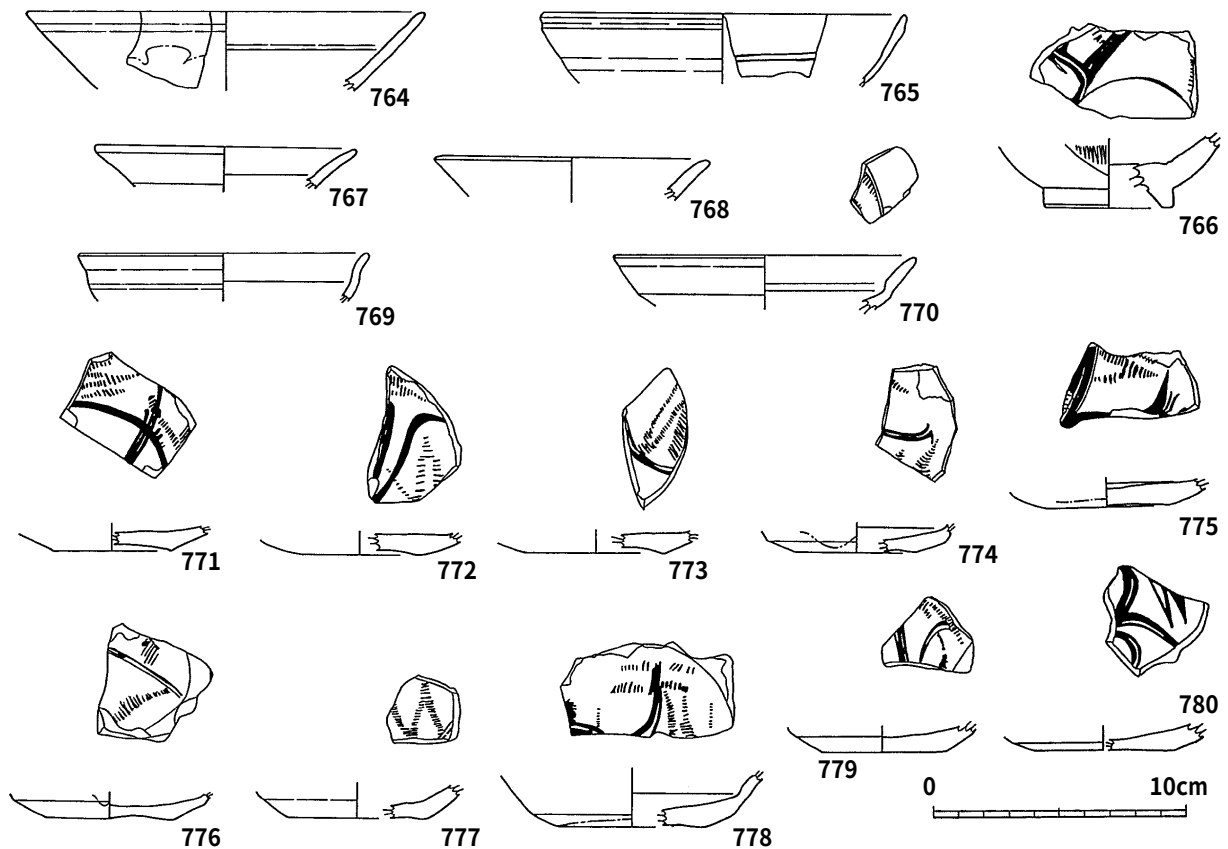
第 122 図 青磁（9）

⑩ 青磁 (10) (第 123 図 764～780)

この類は同安窯系の青磁である。器形は碗と皿がある。

764 は体部から口縁部にかけて直線状に外向する碗である。施釉は見込みが全面で、外面は体部までである。色調は同安窯系独特の暗黄茶褐色である。765 は口縁部で若干厚みがあり、器形は少し内湾する碗である。文様は見込みに2条の線がみられる。766 はやや高い高台と丸味をもつ体部が付く厚手の底部である。見込みには草花文と猫描文がある。外面体部にも猫描文がみられる。767・768 は外反する口縁部で、器形は皿である。文様はない。769 は胴部が張り、頸部で締まり口縁部は外反する皿である。釉色が同安窯系の暗黄茶褐色である。770 は769 と器形は類似しているが内側は段がみられる皿である。見込みには猫描文がみられる。

771～780 は皿の底部である。この中で、778 が体部までである。底部の作りは上げ底で畳付けは体部の削りのため稜になっている771～778 と平底の779・780 がある。見込みの文様は猫描文と曲線を組み合わせた草花文である。なお、780 には猫描文はみられない草花文である。

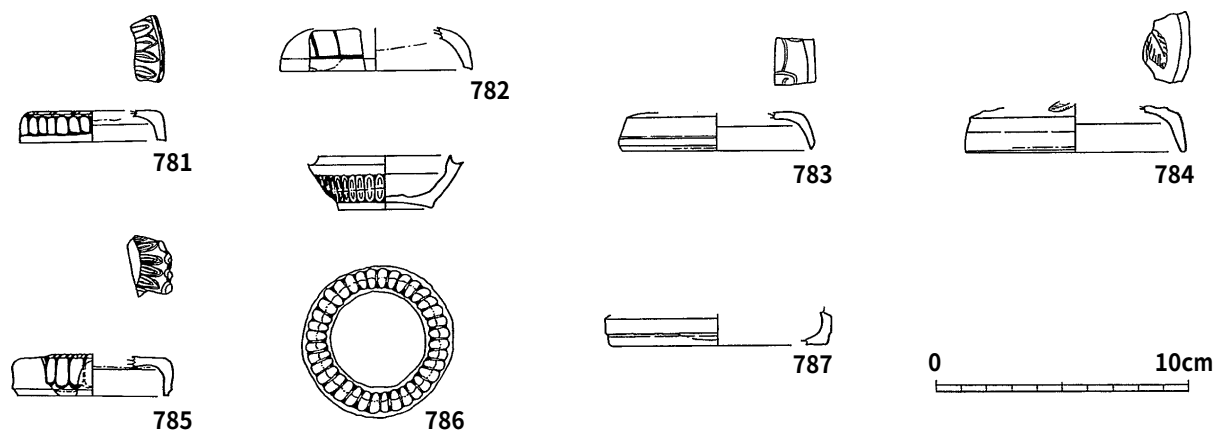


第 123 図 青磁 (10)

⑪ 青磁 (11) (第 124 図 781～787)

この類は青白磁の合子である。

781 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は二重の稜を幅広の蓮弁状に廻らし、横面は隅丸円を廻らしている。施釉は上面だけで内面はない。782 は合子の蓋で丸味のある器形である。上面は蓮弁が線状に簡略化されたものを施している。施釉は上面だけで内面はない。783 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は稜を草花文状に施し、横面は無文である。施釉は上面だけで内



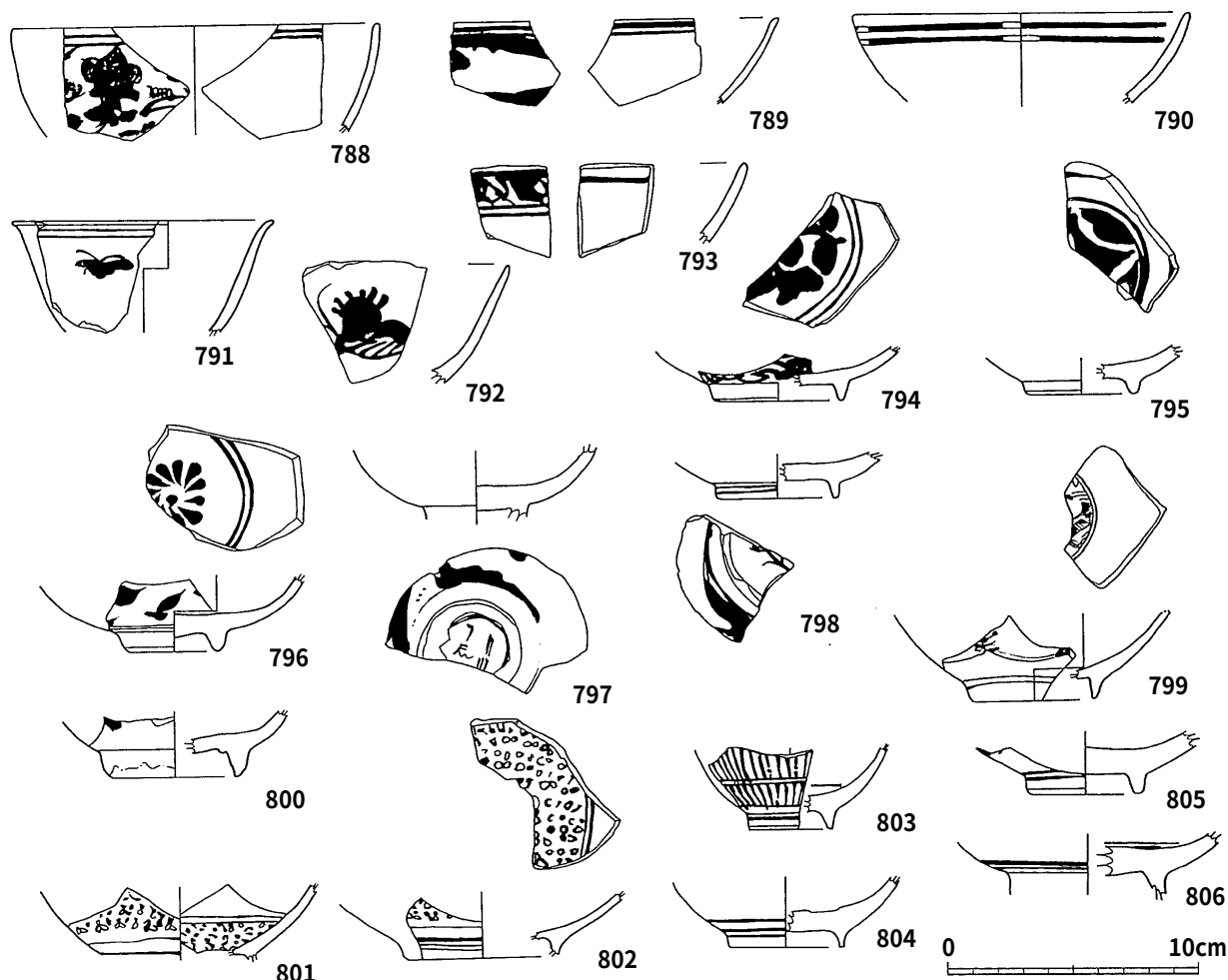
第 124 図 青磁 (11)

面はない。784 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は草葉文を施しているが横面は無文である。施釉は上面だけで内面はない。785 は合子の蓋で角張っている器形である。上面は二重の稜を幅広の蓮弁状に廻らし、横面は隅丸円を廻らしている。施釉は上面だけで内面はない。786 は合子の受け身である。受け口は窪んだ段になり合わせるように作られている。底部は上げ底になり、釉は施されていない。横面は隅丸円を廻らし施釉されている。なお、見込みは施釉されていない。787 は合子の受け身である。受け口は狭い段に作られている。施釉は横面の途中までで他は露胎である。

ウ 染付

① 碗 (第 125 図 788～806)

788 は口縁部が直行するものである。内面は横位の 2 本線を口縁部に廻らせ、外面には横位の 2 本線と牡丹を描いている。789 は口縁部が直行するものである。内面は横位の 2 本線を口縁部に廻らせ、外面には横位の 2 本線と岩・雲を描いている。790 は口縁部が直行するものである。内・外面は横位の 2 本線を口縁部に廻らせている。791 は口縁部が外反するものである。内面は無文で、外面には横位の 2 本線と蝶を描いている。792 は口縁部が直行するものである。内面は無文で、外面には池と岩苔を描いている。793 は口縁部が直行するものである。内面は横位の 1 本線を口縁部に廻らせ、外面には横位の 2 本線と唐草を描いている。794 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り、高い。見込みの文様は牡丹で外面は不詳不明である。795 は底部から体部である。高台はやや低く、畳付けは広い。見込みの文様は不詳不明である。796 は底部から丸味のある体部である。高台は畳付けが尖り、高い。見込みの文様は菊で外面は葉文である。797 は底部から体部である。高台は欠損している。外面は池の岩で、裏銘は「大明年製」である。798 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り、高い。見込みの文様はなく、外面は池と草である。799 は底部から張りのない体部である。高台は畳付けが尖り、高い。見込みの文様は葉文で外面は梅花である。800 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り、高い。外面文様は不詳不明である。801 は底部から体部である。見込み・外面文様は唐草崩文と考えられる。802 は底部から体部である。高台は畳付けが欠損しているが尖っている。見込み・外面文様は唐草崩文と思われる。803 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り、高い。見込みの文様は横線で外面は暦文である。804 は底部から体部である。高台は畳付けが尖り、高い。外面の文様は 2 本の横線である。805 は底部から体部である。高台

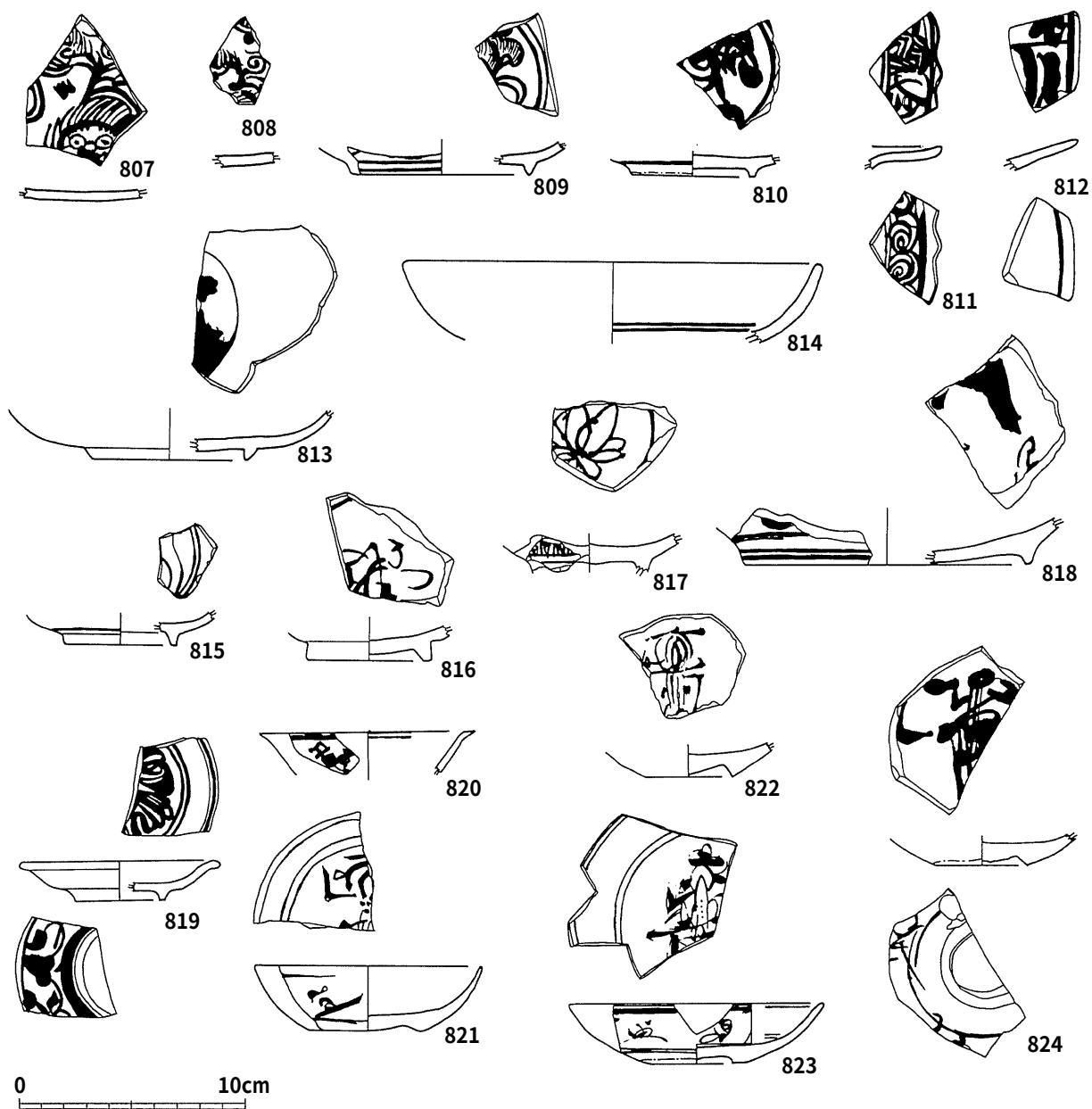


第125図 染付碗

畳付けが尖り、高い。外面の文様は2本の横線である。806 は底部から体部である。高台は畳付けが欠損している。外面の文様は2本の横線である。

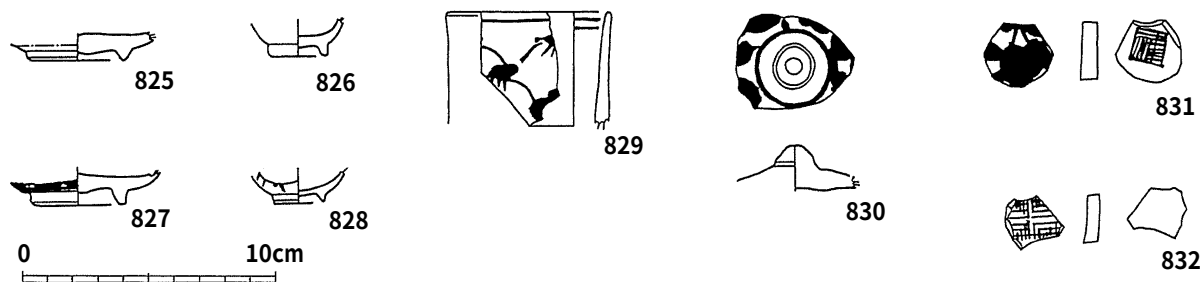
② 皿 (第126図 807～824)

807 は皿の見込み中央部で文様は獅子文の頭部である。808 は皿の見込み中央部で文様は獅子文の足部である。809 は皿の見込み周縁部で文様は獅子文の後部と2本の線である。器形は低い高台で、畳付けが尖っている。810 は器形が低い高台の底部で、畳付けが尖っている。見込みの文様は草文である。811 は稜花皿である。器形は頸部で大きく曲線状に外反するものである。口縁部の文様は唐草文である。812 は稜花皿である。器形は頸部で大きく直線状に外反するタイプである。口縁部の文様は花文である。813 は器形が低い高台の底部で、畳付けが尖っている。見込みの文様は草花文である。814 は器形が体部で丸く立ち上がるもので、見込みに2本の横線がみられる。815 は器形が低い高台の底部で、畳付けが平である。見込みの文様は草文と2本の線である。816 は器形が低い高台の底部で、畳付けが平である。見込みの文様は寿文と1本の線である。817 は器形が低い高台の底部である。見込みの文様は菊花文で、体部外面は草文である。818 は高台の低い盤の底部である。見込みの文様は風景画の一部と思われる。外面は3本の横線である。819 は口縁部が大きく外反し、低い高台の底部をもち、畳付けが平である。見込みの文様は菊文と3本の線である。820 は口縁部が端反りになる皿である。外面の文様は横線と梅花である。なお、見込みに横線がみら



第126図 染付皿

れる。821・822・823・824は基筭底をもつ皿である。見込みの文様は横線3本と寿文である。



第127図 染付小碗・蓋・メンコ

外面体部は821が草文、823が横線3本と草花文、824が唐草文である。これらの器形は丸味のある体部である。

③ 染付小碗・蓋・二次加工品 (第127図 825～832)

小碗は825から829である。この中で底部が825～828で、体部が829である。825・828は畳付けが尖り、826・827は平である。文様は827・828にあるが詳細不明である。829は体部が円筒状に立ち上がる器形のものである。文様は残雪と竹である。なお、口縁部内面に2本の横線、外面に1本の横線がある。

830は蓋である。摘部は円錐に尖る。文様は葉文を廻らしている。

831・832は御弾状に二次加工したものである。831は底部の中央部で、見込みの草花文と裏銘の福がみられる。832は体部で二重四角を描いた文がみられる。

エ 陶器

① 貿易陶器 (第128図 833～862)

この類は中国陶器である。全体で4種に分けられた。

第1種は833～836の緑釉陶器である。833は壺の口縁部で釉の色調は青黒色である。釉は両面にかけている。834は壺の肩部で、外面にかけた釉の色調は濃緑色である。沈線もみられる。835は壺の肩部で、外面にかけた釉の色調は緑色である。沈線もみられる。836は「T」字形の口縁部で、外面にかけた釉の色調は青緑色である。器形は小鉢である。

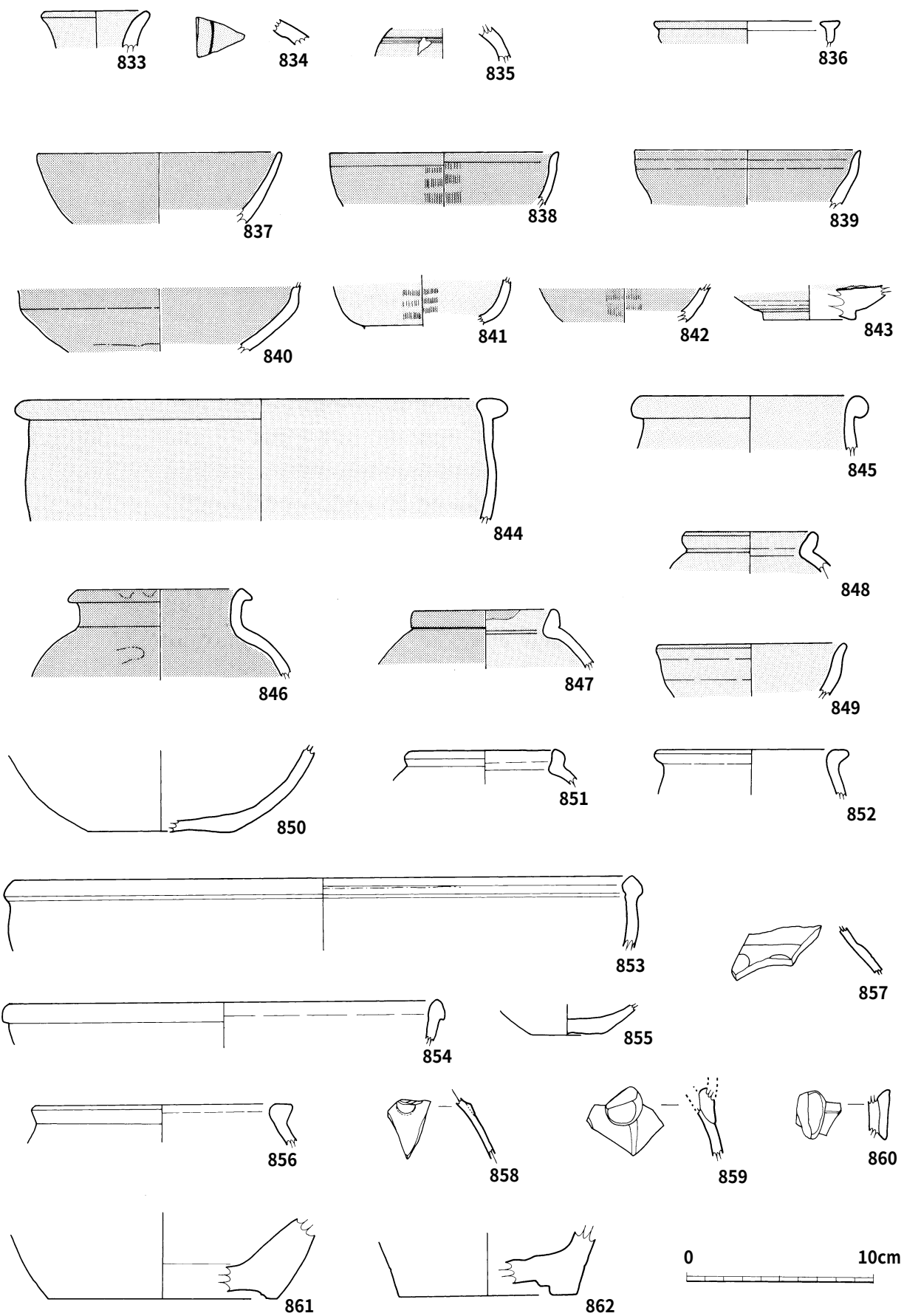
第2種は837～843の天目碗である。837は口縁部が内湾するもので黒茶褐色の釉が両面にかかっている。838は口縁部が直行するもので黒茶褐色の釉が両面にかかっている。天目特有の黄茶色の縦筋がみられる。839は口縁部が体部で直行するもので、黒茶褐色の釉が両面にかかっている。840は口縁部が体部で直行するもので、黒茶褐色の釉が両面にかかっている。841は底部から体部にかけての立ち上がりが丸味をもつ碗である。842は底部から体部にかけての立ち上がりが直線をもつ碗である。843は低い高台をもつ底部で、畳付けは平である。見込み、外面とも黒茶褐色の釉がかかっている。

第3種は844～849で、茶褐色をした褐釉のかかった陶器である。

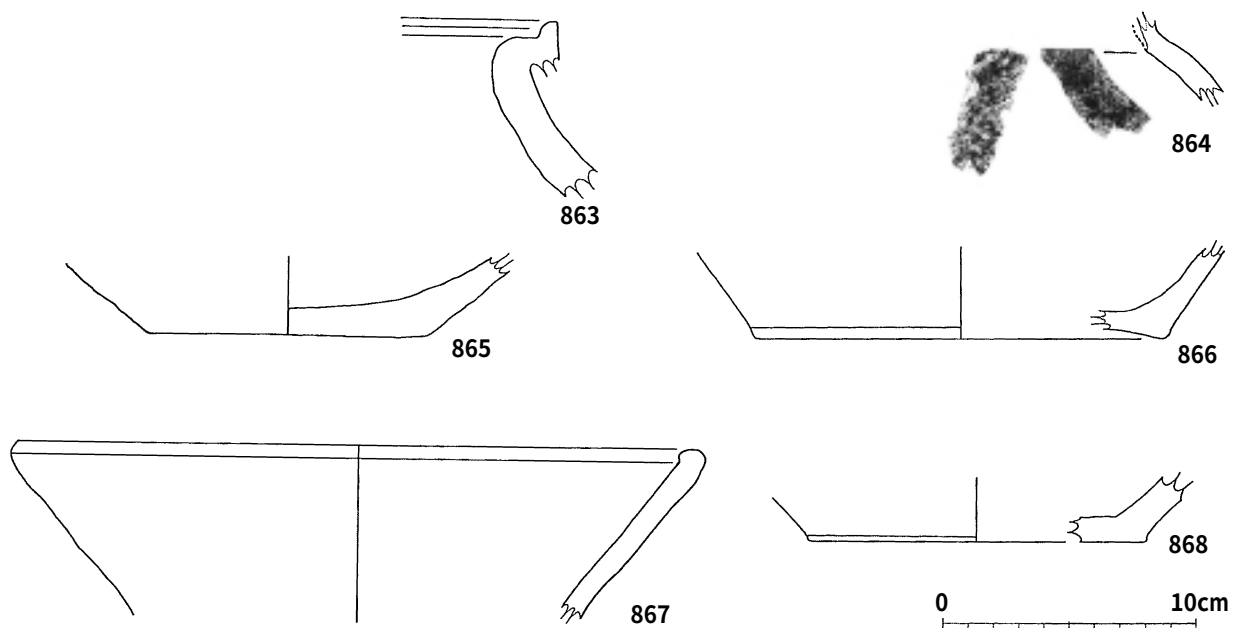
844は口縁部が玉縁に作られ、体部が直行する器形の大鉢である。釉は両面に褐釉がかけてある。845は口縁部が玉縁に作られ、頸部が直行する器形の壺である。釉は両面に褐釉がかけてある。846は口縁部が断面三角に作られ、頸部が直行する器形の壺である。肩部は球状になっている。釉は両面に褐釉がかけてある。847は口唇部が尖状に作られ、頸部が直行する器形の壺である。肩部は撫で肩の丸味をもつ。釉は両面に褐釉がかけてある。848は口唇部が平に作られ、頸部が外向する器形の壺である。肩部は球状を呈する。釉は両面に褐釉がかけてある。849は碗である。口縁部は2段の曲線である。釉は両面にみられる。

第4種は850～862の灰釉のかかったものである。850は鉢で直行する体部と平底をもつ底部である。851は口縁部の立ち上がりが短く直行する壺の器形である。852は平坦口唇部を持つ内向する壺の口縁部である。853は玉縁状の口縁部を持ち、直行する体部を持つ大鉢である。854は玉縁状の口縁部を持ち、外向する体部を持つ鉢である。855は坏の底部である。

856～861は四耳壺の部位である。856は平坦口唇部をもつ内向する口縁部である。857～860は



第128図 貿易陶器



第129図 常滑

四耳壺の取っ手部である。橋状取っ手の付け根で円盤状を呈する。861 は低い高台の底部で立ち上がりは丸味をもつ。862 は高い高台の底部で直行の立ち上がりをもつ。

② 常滑 (第129図 863～868)

863 は甕の口縁部である。断面は鐙状の形態で「L」字状に曲がっている。器形は肩部に向かって広がっている。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。864 は壺の肩部と思われる。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。865 は甕の底部で平底である。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。866 は甕の底部で上げ底である。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。867 は捏鉢である。体部は大きく外向し、口縁部は丸味を持ちながら立っている。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。868 は擂鉢の底部で平底である。内面に櫛歯状沈線がみられる。色調は灰茶褐色で灰釉がみられる。

オ 中世須恵器 (第130・131図 869～905)

この類は、樺万丈系と東播磨系と下り山系が出土している。

樺万丈系は 869～888 である。これらは全体的に焼成がやや悪く、器面に剥がれた部分がみられる。色調は灰茶色である。器種は甕と捏鉢と摺鉢がみられる。

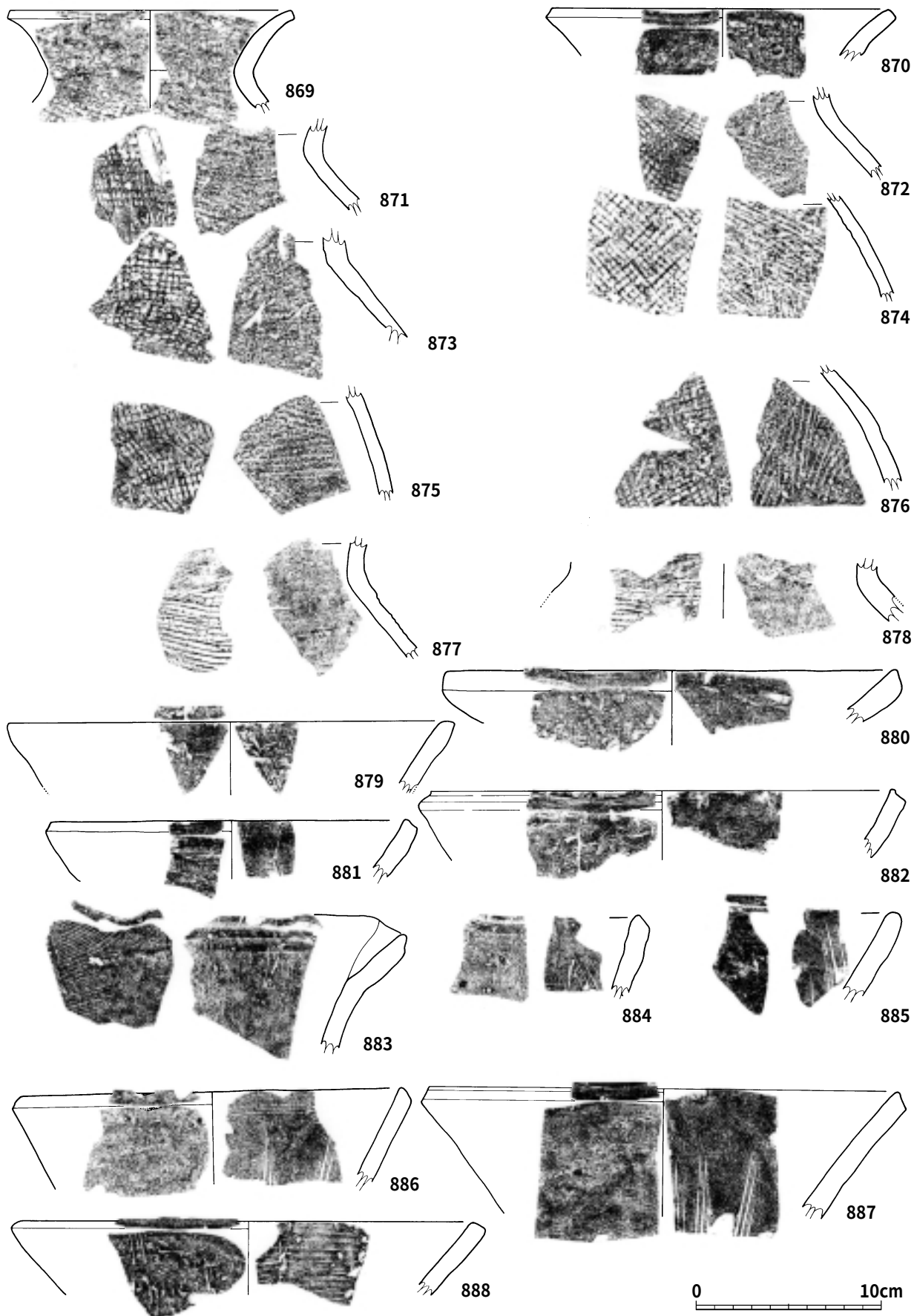
869～878 が叩き目のある甕である。869・870 は大きく開く口縁部である。871～873・877・878 は締まる頸部である。この中の後の2つは焼成が良い。874～876 は胴部である。

879～883 が捏鉢である。器形は体部が大きく外向し、883 でみられるように注ぎ口がある。口唇部は平坦が 883 で他は尖りの断面である。

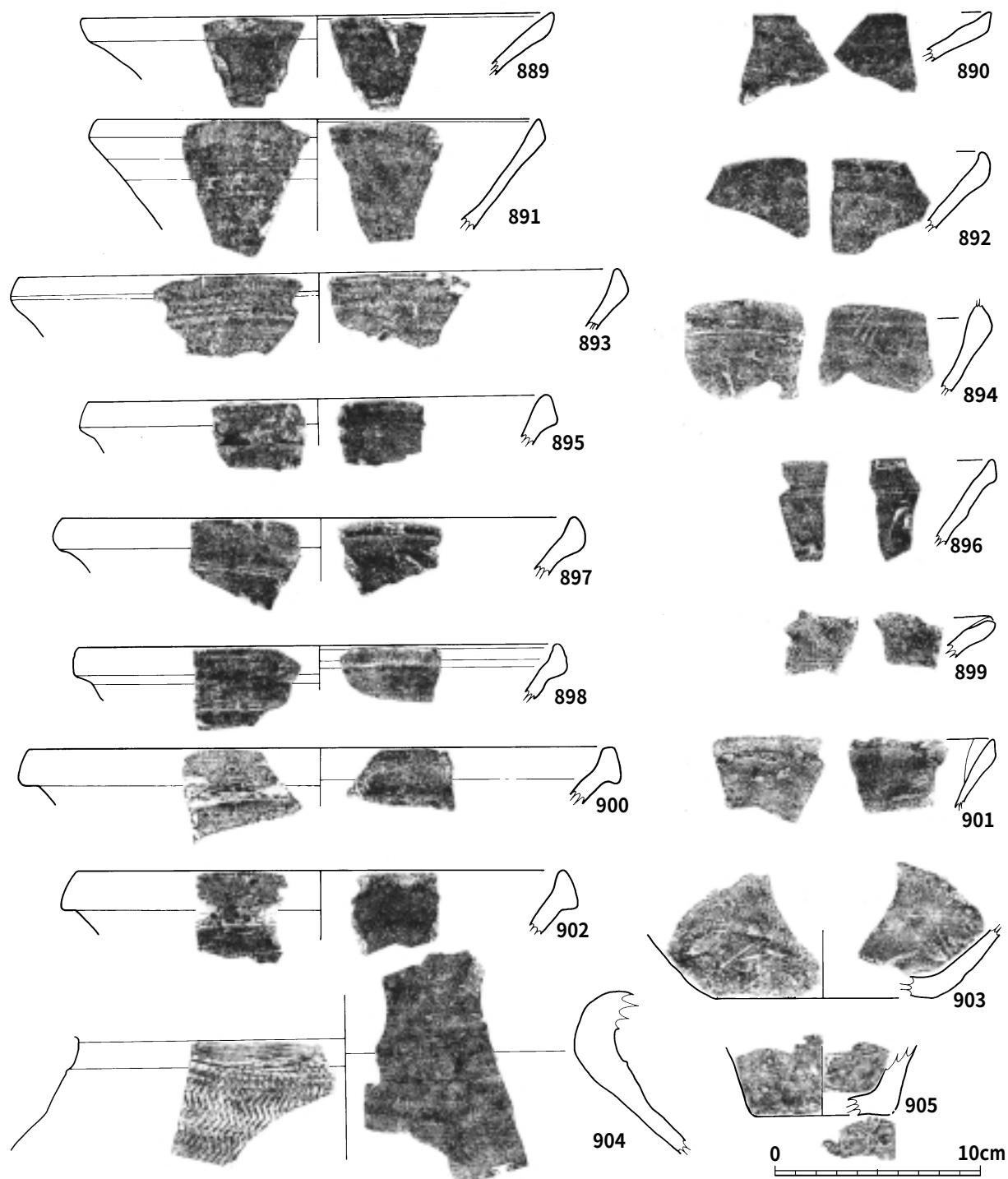
884 から 888 が擂鉢である。器形は体部が大きく外向し、内面に櫛歯状沈線がみられる。

889～903 は東播磨系の捏鉢である。全体的に色調は青灰色で灰釉がみられる。器形は大きく外向し、口縁部は薄手で断面が三角形になるもの (889・894 等) と垂れ下がるもの (900) が出土している。899・901 は注ぎ口である。903 は平底の底部である。

904・905 は下り山系と思われる。青灰色が強く、焼成が良い。904 は甕の口・頸部である。器形は頸部が締まり口縁部は大きく開く。外面に叩きがみられる。905 は壺の底部で、平底である。



第130図 中世須恵器 (1)

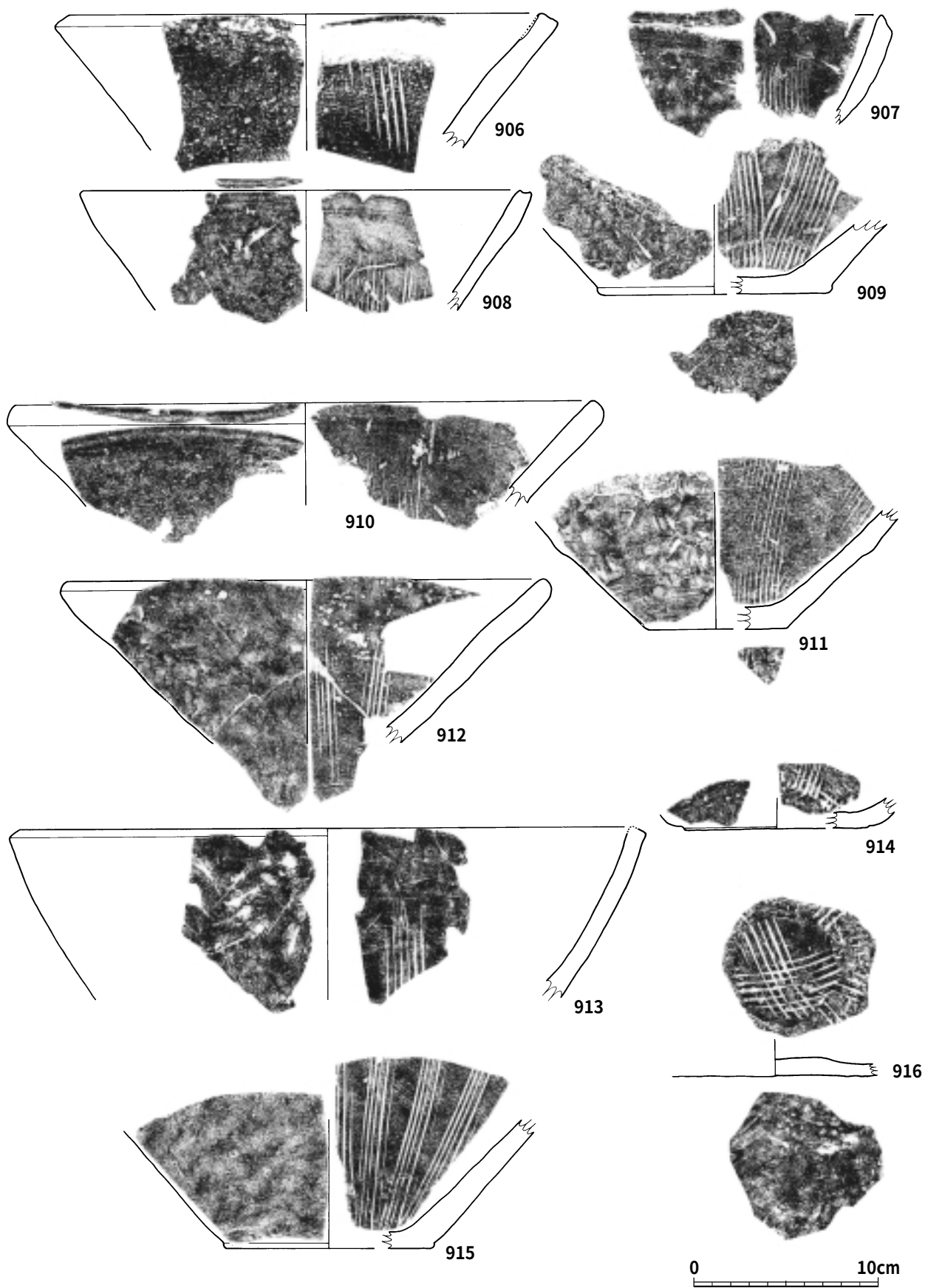


第131図 中世須恵器(2)

カ 瓦器質土器 (第132・133・134図 906～931)

この類は瓦器質の土器で、播鉢・捏鉢・火舎・羽釜・碗が出土している。

播鉢は906～919である。器形は外向した胴部である。口縁部は中世須恵器と類似しているが厚みのある口縁部はない。906・907・913 は口唇部を斜めに切り口縁部は角張っている。櫛歯状沈線は間隔をあけて施している。908 は口唇部を平坦に切り口縁部は角張っている。櫛歯状沈線は間隔を詰めて施している。910・912・917・918 は口唇部を斜めに切り口縁部は丸まっている。櫛

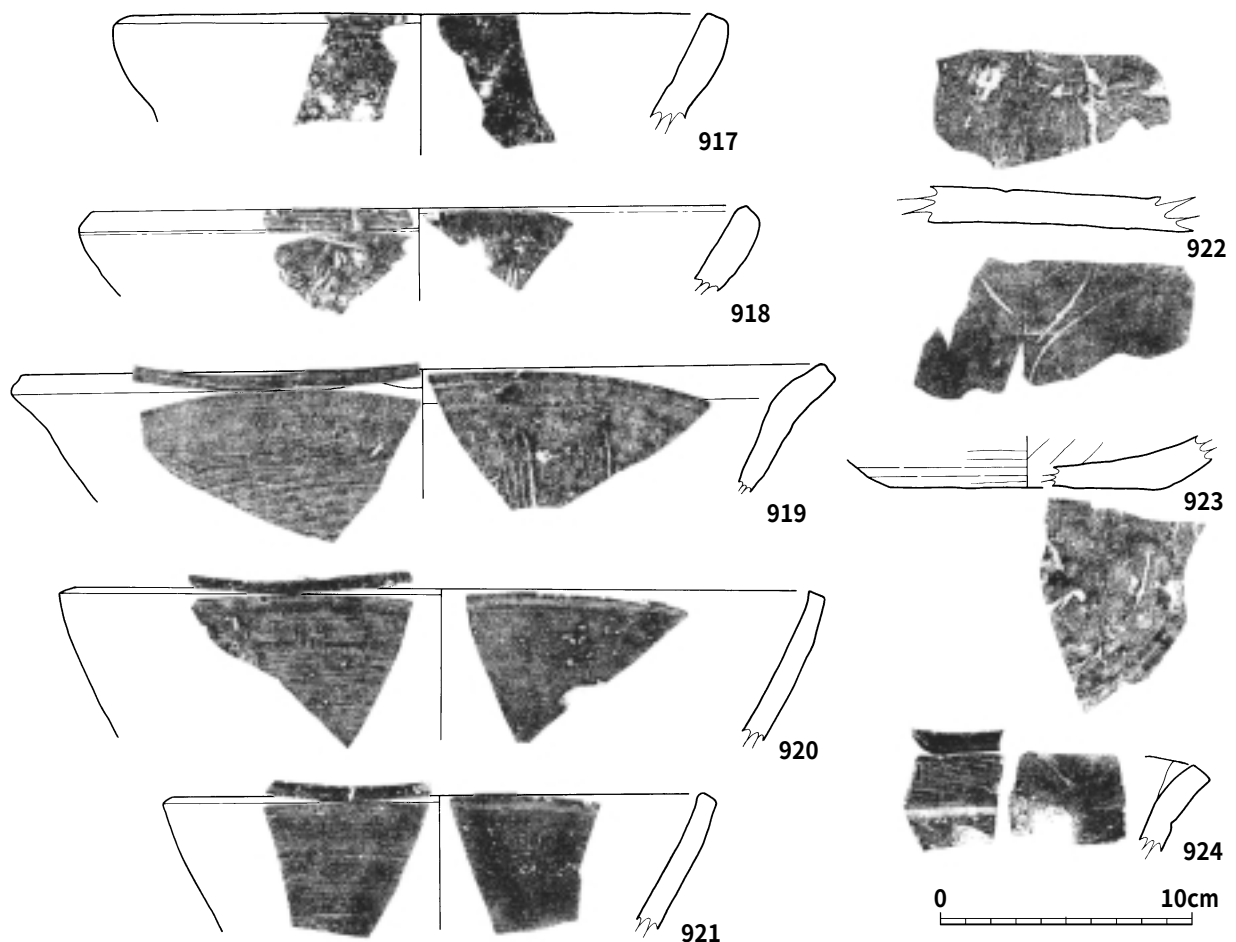


第132図 瓦器質土器 (1)

齒状沈線は間隔をあけて施している。909・911・914・915・916 は平底であるが 914 だけが角が丸味をもち他は角張っている。916 は底部の見込みで、櫛齒状沈線を十字に施している。これらの櫛齒状沈線は 5 本 (912・915), 7 本 (906・914・916), 10 本 (907・909・911) がある。なお, 919 は他のものと器形が異なり, 口縁部で外反する。胎土は灰茶褐色で焼成もやや硬く中世須恵器に類しているが, ここでは瓦器質が強いのでこの類に入れている。

捏鉢は 920～924 である。920・921 は口唇部を斜めに切り, 口縁部は角張っている。胴部の立ち上がりは若干丸味をもち外向している。調整は内面を横位に丁寧なヘラナデである。922・923 は底部で平底である。底部の外面はヘラ切り離しの跡が残っている。内面調整は良い。924 は片口の注口である。内面調整は良い。

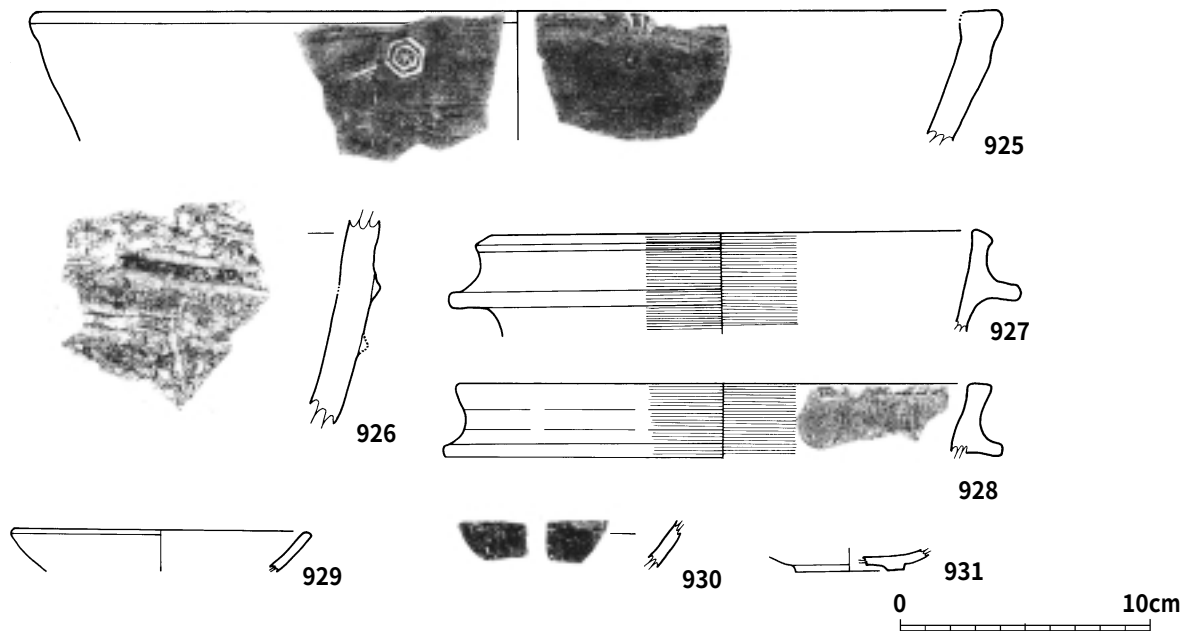
火舎は 925・926 である。925 は平坦な広い口唇部を作りやや外向する口縁部をもつ瓦器質土器である。色調は明茶褐色である。器面は丁寧なヨコナデで、外面の上部には 2 重 6 角形の中に米印の刻印を施している。焼成は良い。926 は器形が若干外開きで、円筒状である。外面には 2 本の突帯を施している。器面は火使用跡のため剥げて凹凸がある。焼成は良くない。色調は二次使用のため黒色斑点がみられる。よって、ここでは火舎の中に入れた。



第 133 図 瓦器質土器 (2)

927・928 は瓦器質土器の羽釜である。927 は口唇部が外側に切られ、口縁部が直線でやや外向する器形である。外面には水平に近い鰐が巻く。器面調整はロクロ調整痕が横位にみられる。928 は口唇部が水平に切られ、口縁部が直線で外向する器形である。外面には下がり気味の鰐が巻く。器面調整はロクロ調整痕が横位にみられる。

929～931 は瓦器質土器の碗である。929 は体部から口縁部の立ち上がりは直線で大きく開く器形である。器の厚さは薄手で、色調は青灰色である。なお、器面調整はロクロ調整痕が残らない。930 は体部である。口唇部は欠損しているが 929 と同じ器形と調整である。931 は瓦器質土器の底部である。低い高台をもち畳付けは平坦に作っている。体部の立ち上がりは外に張り、丸味がある。器の厚さは薄手で、色調は青灰色である。なお、見込みはロクロ調整痕が残らないが丁寧な仕上げである。



第 134 図 瓦器質土器 (3)

キ 土師器

① 土師器碗 (第 135 図 932～962)

この類は内赤が 932・933・936・959・961・962 で他は無色の土師器碗である。932～936 は半球状の碗で、体部から口縁部である。934～936 が口縁部で外反する。

937～962 は底部である。937～951 は高台が長く高い。952・954～956・958～962 は高台が短く低い。

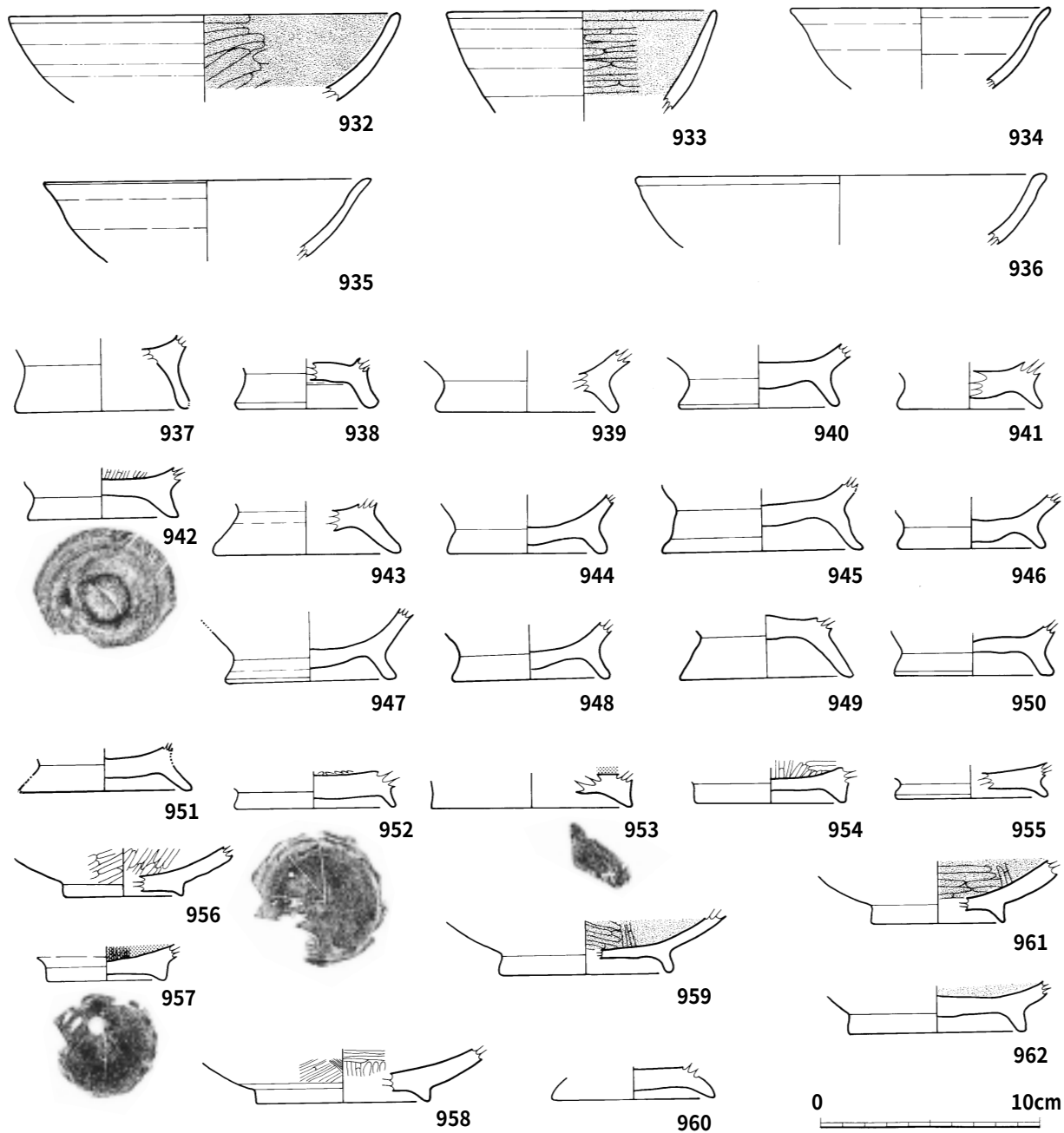
内面の研磨調整があるのは 932・933・942・952・953・954・956・967・959・961 である。この研磨調整は 952 が広めのヘラで、他は細めのヘラである。調整方法は見込みの中央を縦位と横位に組み合わせて、体部は横位に施している。

底部の裏には二次線刻があるものもある。942 は中央部「一」があり、952 は直角の中に 30° 位に斜線を入れている。957 は葉脈状に線がみられる。

② 黒色土器 A 碗 (第 135～138 図 953・957・963～1068)

この類は内側を黒色研磨している碗で、内黒土師とも言われる。963～990 は口縁・体部である。

これらの器形は 969 でみるように基本的に半球状である。この中で、直線的なものは 963・964 で、口縁部が外反するのは 982・984・985～987 である。また、浅手は 989・990 である。



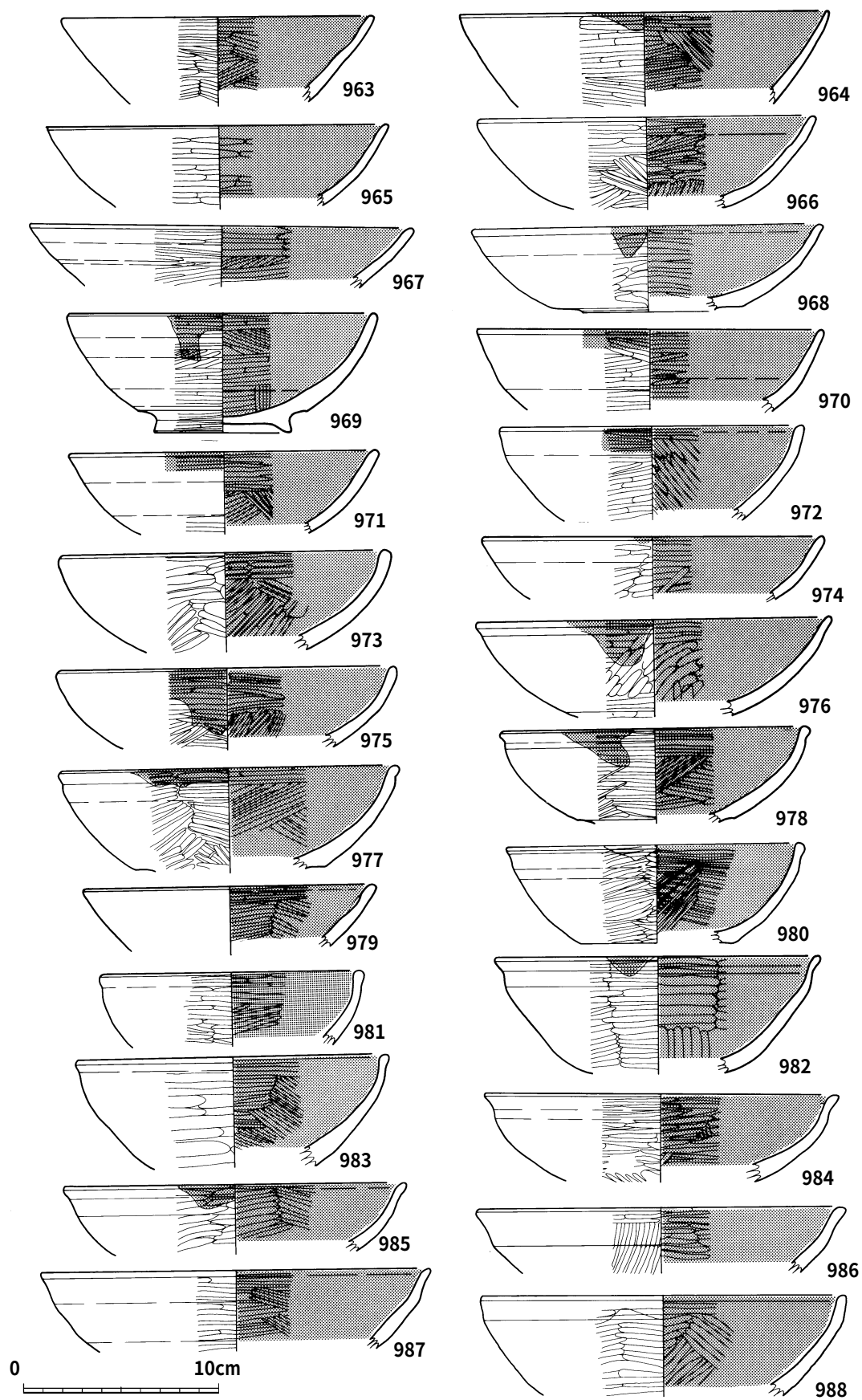
第 135 図 土師器塊

口径は 16 cm 位が多く、大きなものは 20 cm を越える 967・987 がある。黒色は内側が主であるが 968・975・976・985・989 でみるように外面にも及んでいるものもある。

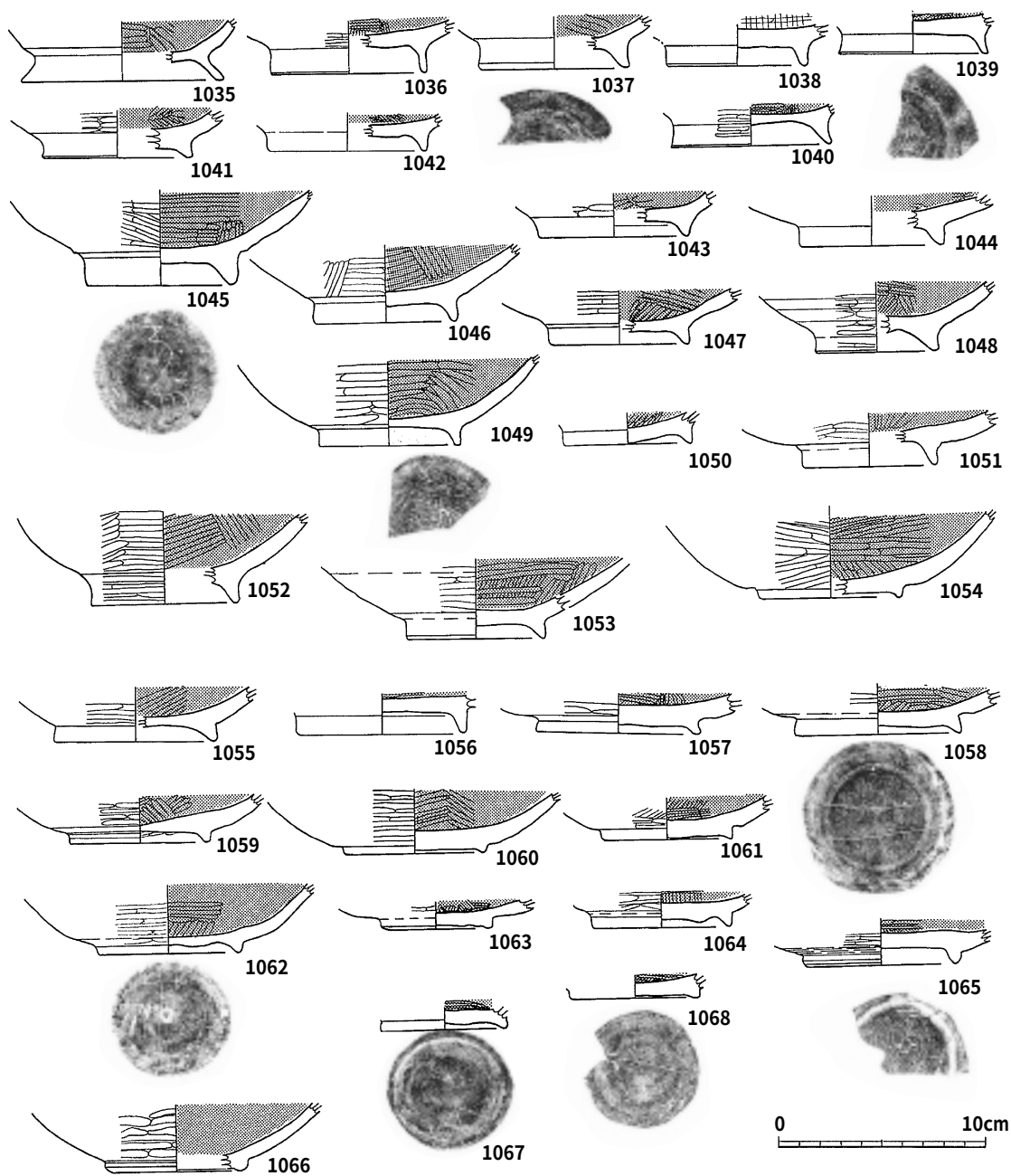
器面調整は内外面丁寧な研磨が施されている。研磨の方法は、見込みが縦横の研磨で体部外面が斜位で、口縁部は横位である。これは、水漏れ防止のために施したと思われる。

991～1068 は体部・底部である。器形は半球状の中央部に高台は付いている状態である。高台は低くて立っているもの (991～996)、低くて開いているもの (997～1026)、高いもの (1027～1053)、高台が極端に細く尖り低いもの (1054～1068) がある。

研磨調整は、見込み中央が縦位と横位を組み合わせ、退部内面は横位で丁寧に研磨している。これは、水漏れ防止に施したと思われる。



第136図 黒色土器A埴 (1)



第138図 黒色土器A 埴 (3)

底部裏面に二次線刻があるものが多数あり，次のようにみられる。

第40表 二次線刻土器

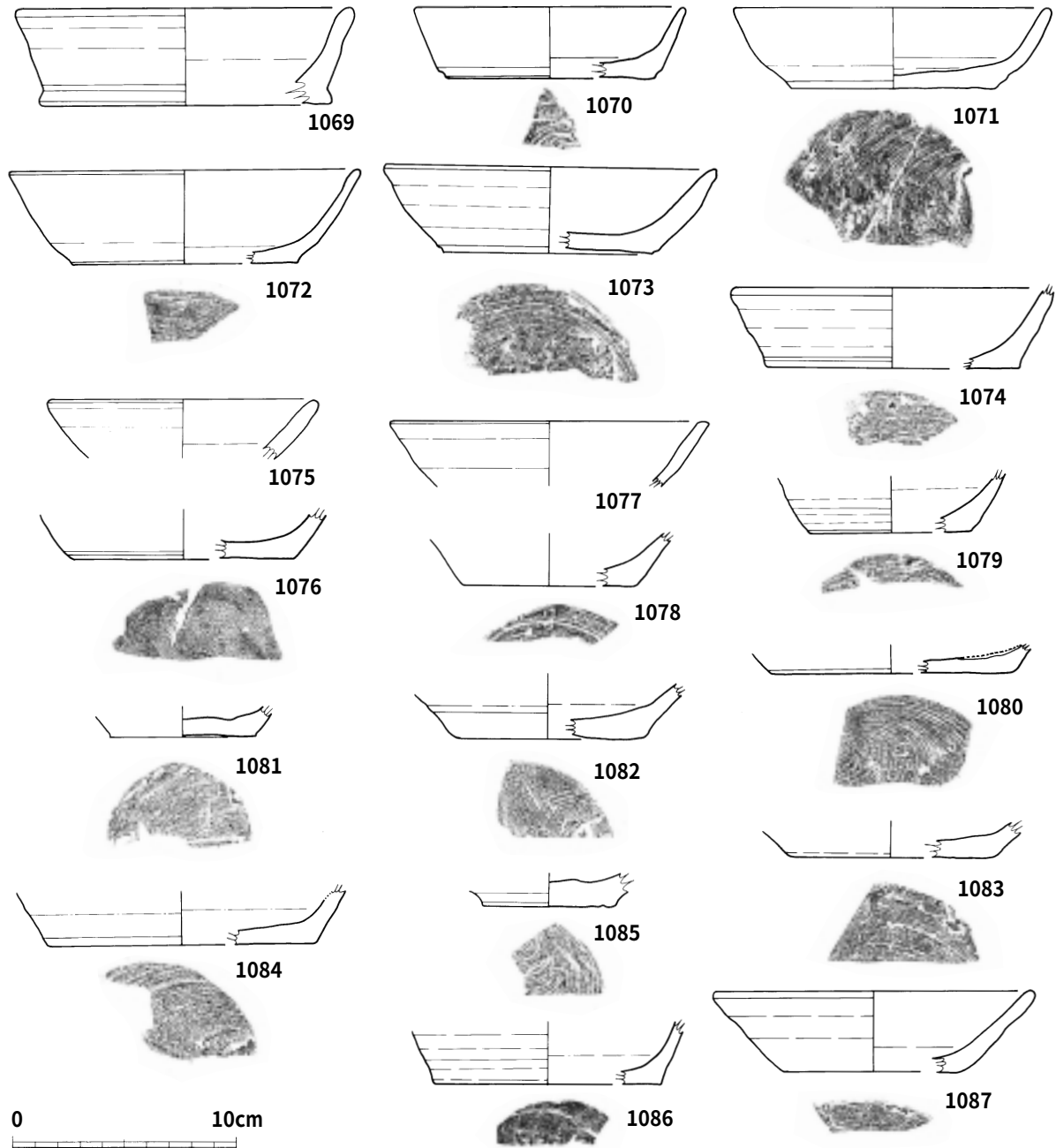
No.	二次線刻	No.	二次線刻	No.	二次線刻
991	「く」の字線と縦線の組み合わせ	1017	三角形の一角に斜線	1039	曲線と直線の組み合わせ
992	×に二の組み合わせ	1021	十か	1045	「わか」に読める線
993	×に斜線の組み合わせ	1022	三角形の一角に斜線	1049	2本の曲線
1001	○に一の組み合わせ	1023	1本の直線	1058	斜線と横線
1007	二と一の組み合わせ	1024	三角形の一角に斜線	1062	縦位と横位の網目
1008	二と一の組み合わせ	1025	1本の直線と縦線の組み合わせ	1065	三角形の一角
1009	十	1026	1本の直線	1067	直角に斜線
1010	二と一の組み合わせ	1037	文字らしき曲線	1068	×に一の組み合わせ

③ 坏 (第 139～142 図 1069～1137)

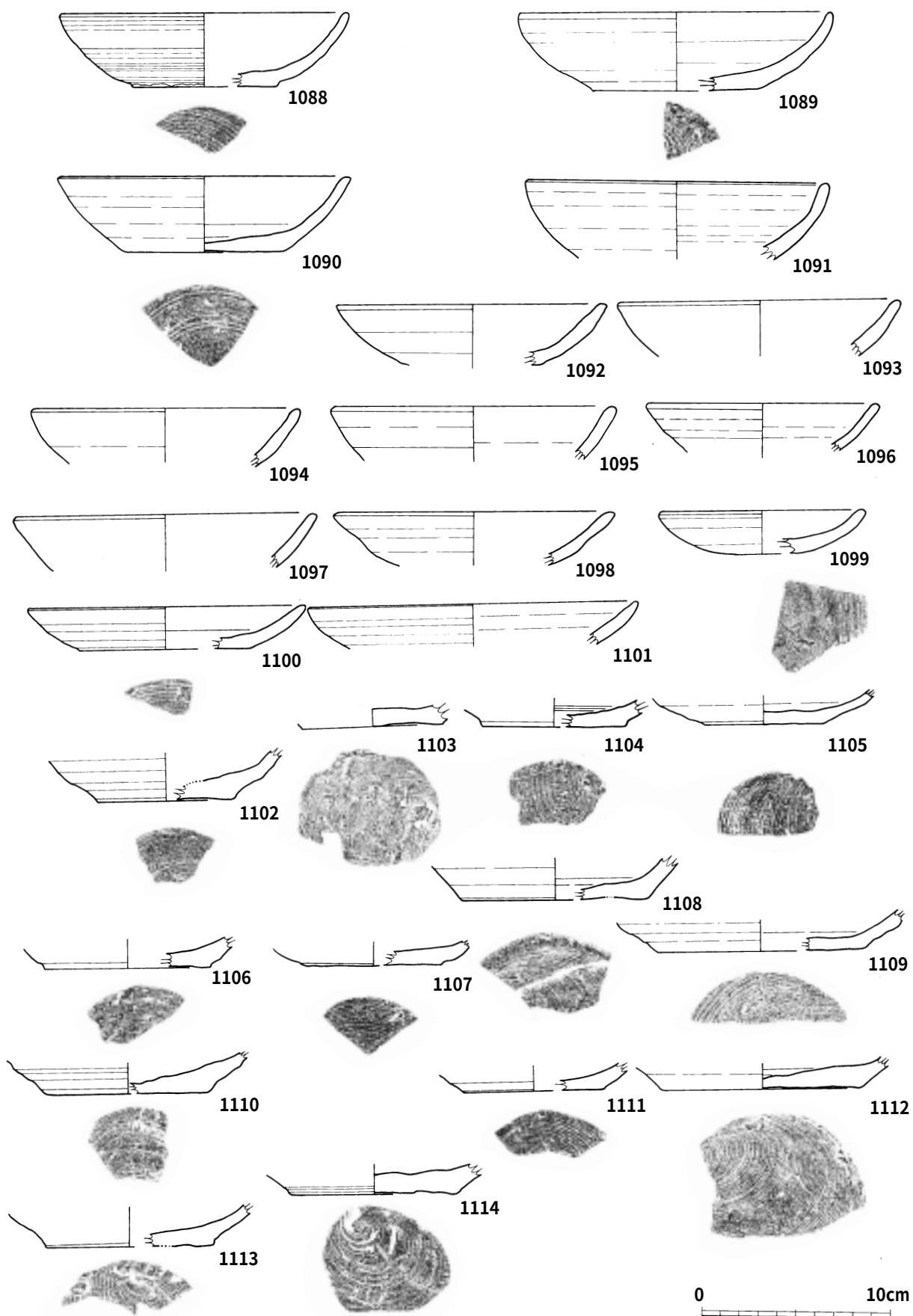
坏は大きく 3 つに分けられる。それは 1069～1087 と 1088～1114 と 1115～1137 である。

1069～1087 は体部・口縁部が直線的で底部が厚いグループである。底部は平底で糸切り離しの跡が残っている。このグループで特徴的は 1069・1072・1074・1084 でみられるように底部の端がはみ出し、底部から直ぐか短い間隔で立ち上がる器形である。器面は水挽きがみられる。

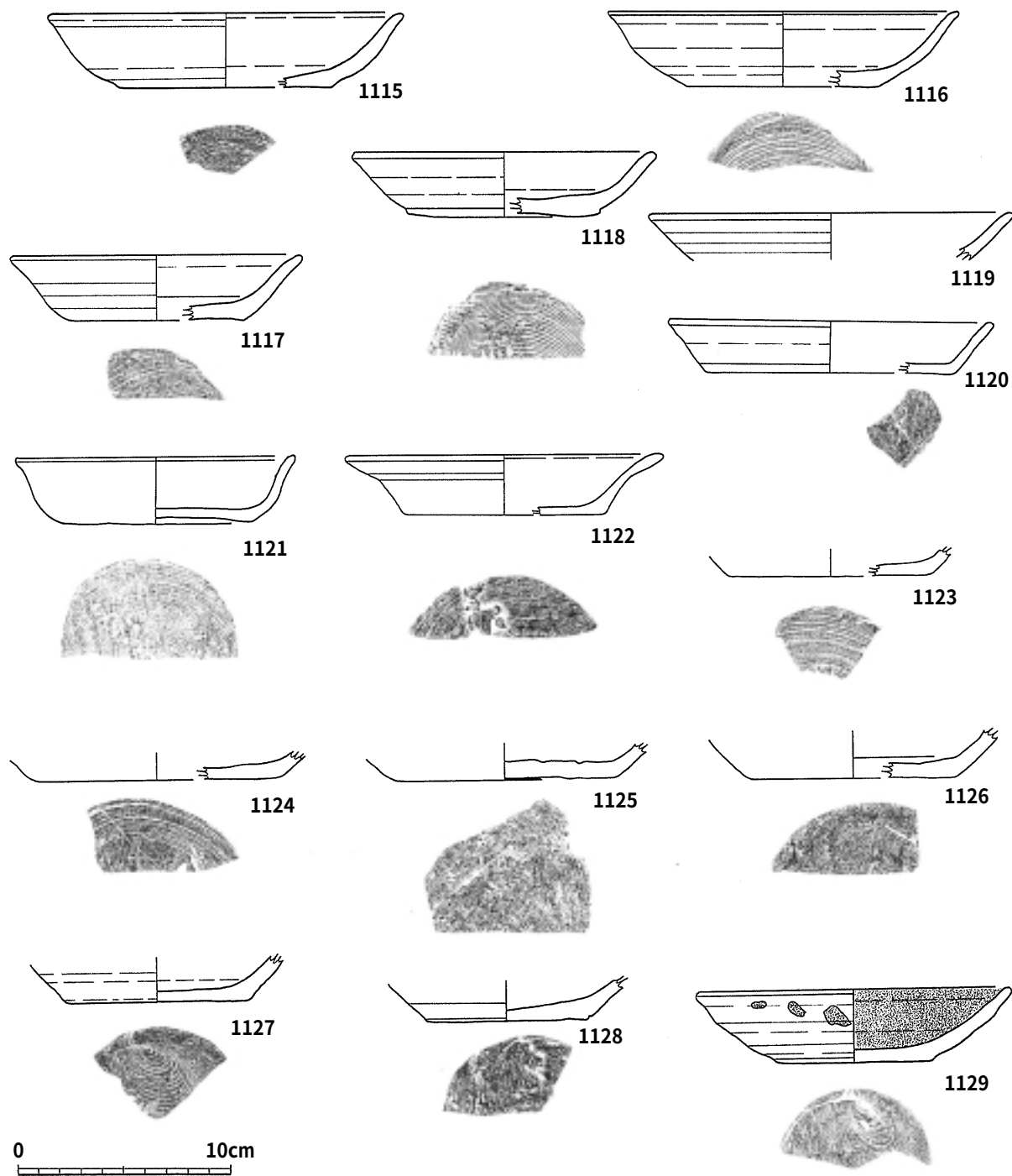
1088～1114 は前のグループの底部と類似し、厚手の底部である。体部・口縁部は半球状になり、底部からの立ち上がりは丸味をもつ器形である。底部の切り離し方法は糸切り離しである。器面は



第 139 図 土師器坏 (1)



第140図 土師器坏 (2)

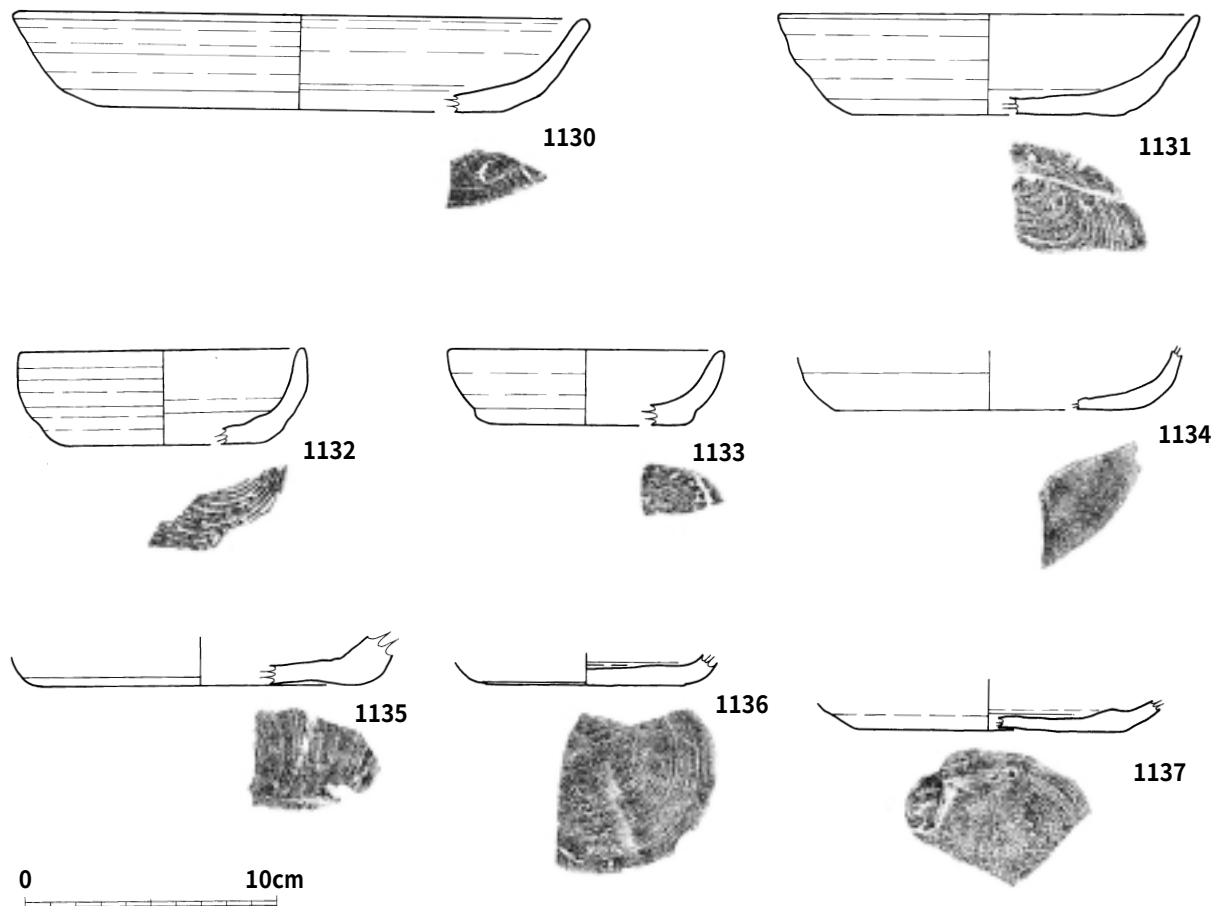


第141図 土師器坏 (3)

水挽きがみられる。

1115～1137 は底部に厚みがないグループである。体部・口縁部は球状になるもの (1115・1116・1129) と外反するもの (1117～1122) がみられる。この中の1122 でみられるように大きく外反するものがある。これらは糸切り離しで、器面には水挽きがみられる。

1129 は朱塗りの坏である。朱は見込みには全て塗られているが、外面にも所々あり全面の可能性はある。そのため特殊なものと考えられる。



第142図 土師器坏 (4)

④ 小皿 (第143～144図 1138～1218)

この類は1138～1218である。

土師器小皿

このグループは1138～1179と1180～1218に分けられる。

1138～1179は底部が厚いもの(1153～1170等)と体部・口縁部の立ち上がりが直に立つもの(1138～1145・1148等)である。この中で口縁部が寝ているものは底部の厚いものの中にいれている。口径は8～9 cmで高さは2～1.5 cmである。底部の切り離しは糸切り離しで、体部・口縁部は水挽きがみられる。

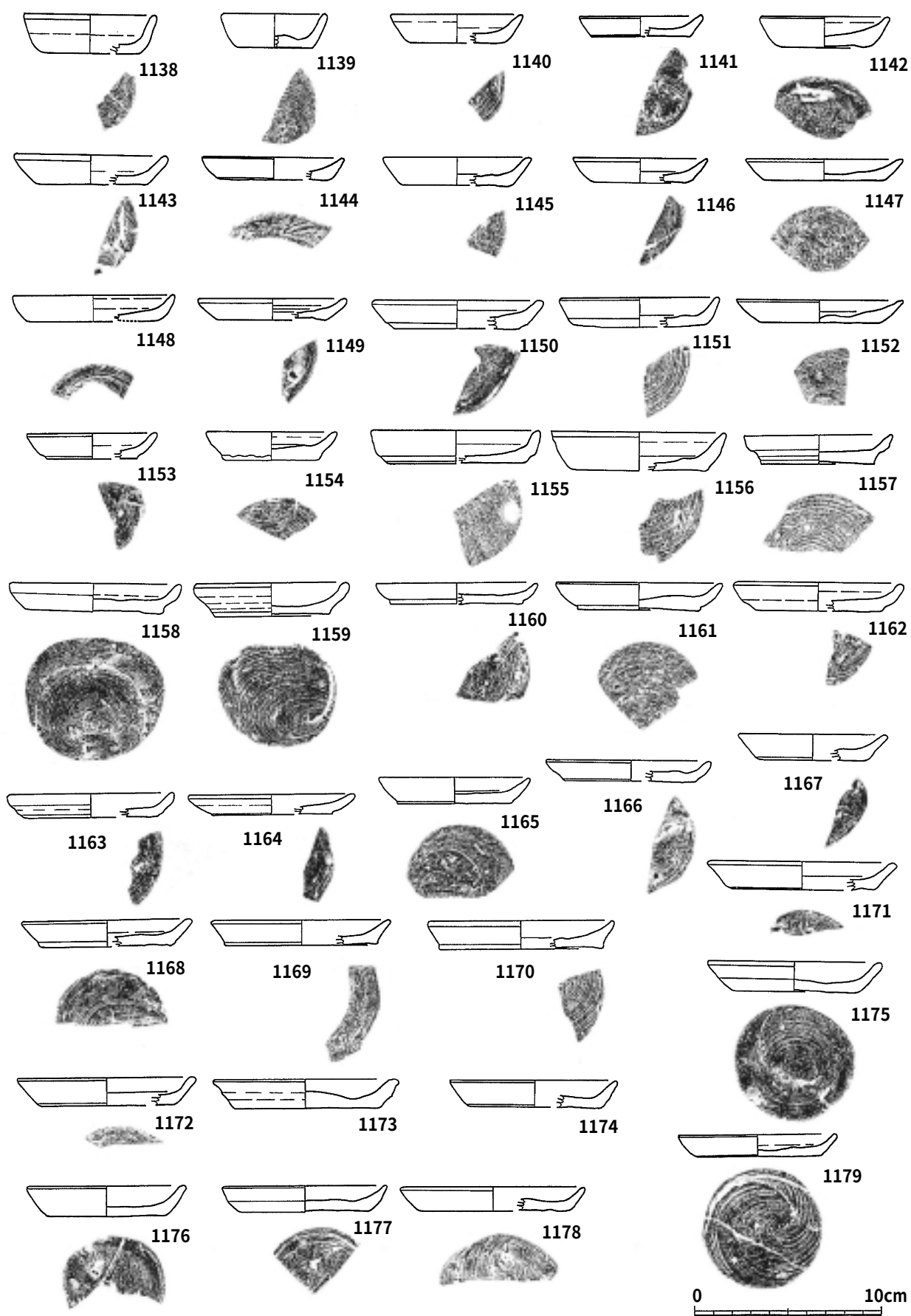
1180～1218は底部が薄く、体部・口縁部への立ち上がりは丸味を持って立ち上がる器形である。基本的に体部・口縁部は寝ている。口径は8～9 cmで高さは2～1.5 cmのものが多いが11 cmのものもあり全体的に大きい。底部の切り離しは糸切り離しで、体部・口縁部は水挽きがみられる。

⑤ 黒色土器B (第145図 1219～1239)

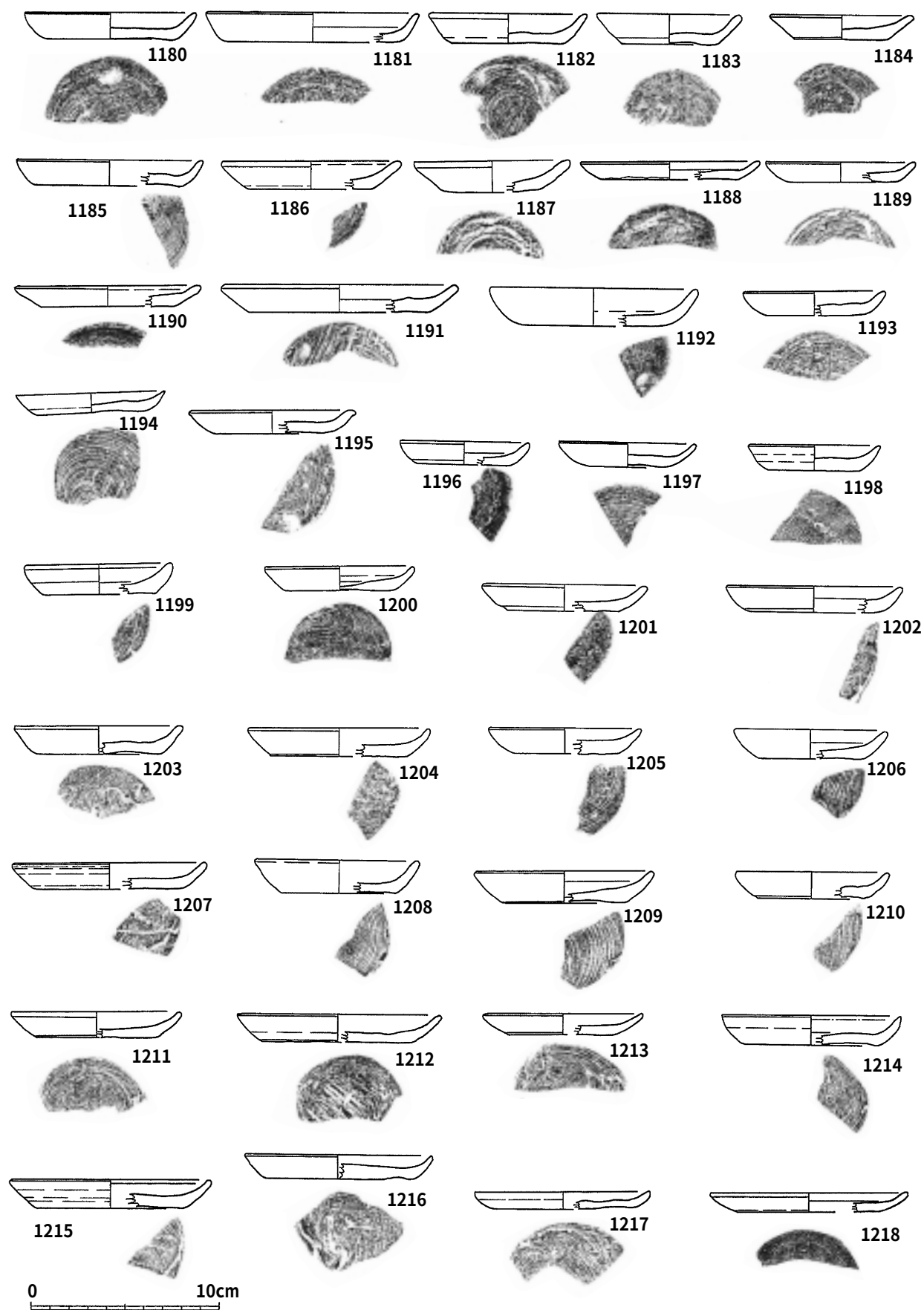
1219～1239の黒色土師器Bは両面黒色である。

1219～1221は口径17～19 cmの坏である。両面とも黒色研磨がされている。1222～1227は口径9～10 cmの小皿である。1225・1226は底部から直に立ち上がるタイプである。底部の切り離しは糸切り離しであるが上から研磨している。両面とも黒色研磨がされている。

1228は底部が厚手の土器である。両面とも黒色研磨がされている。

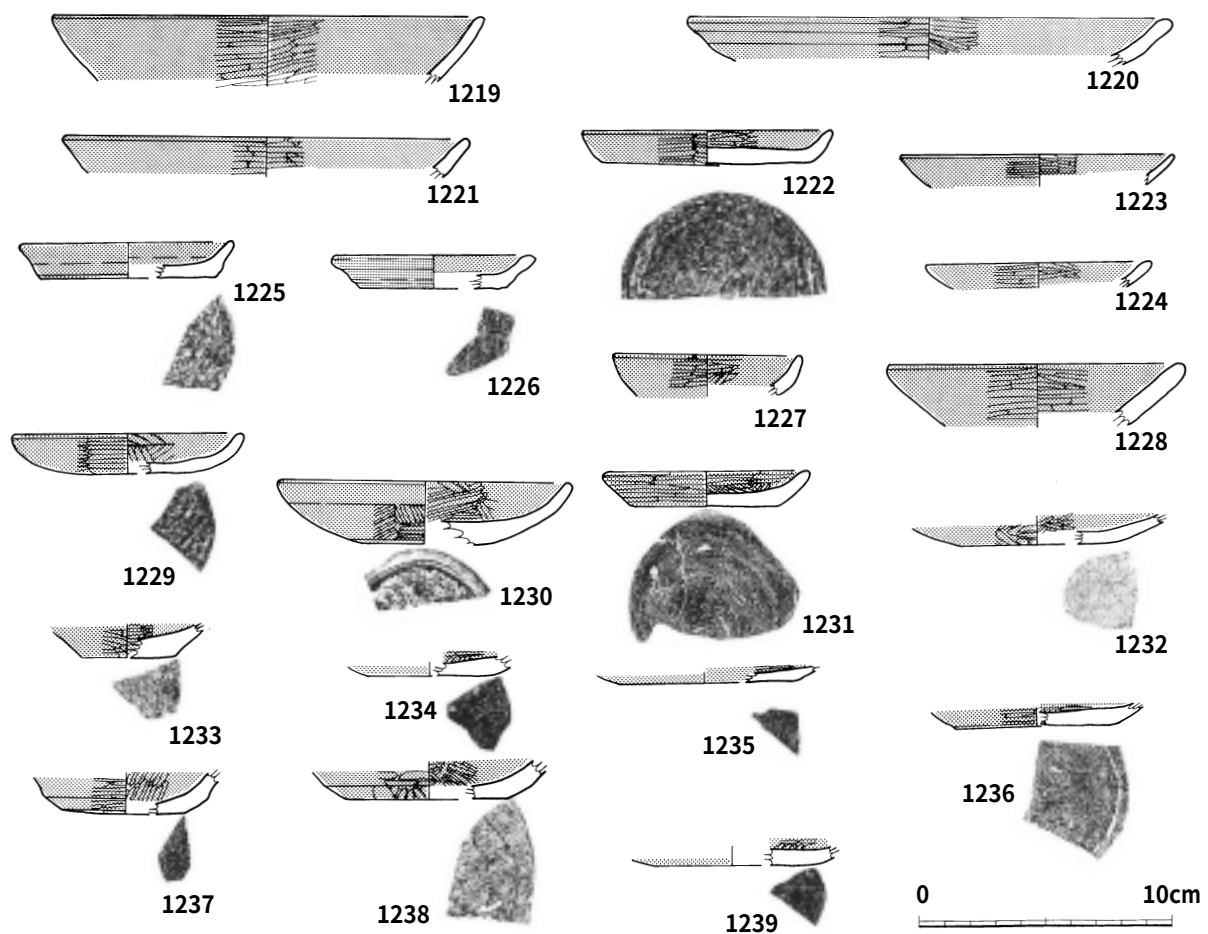


第143図 土師器小皿 (1)



第144図 土師器 小皿 (2)

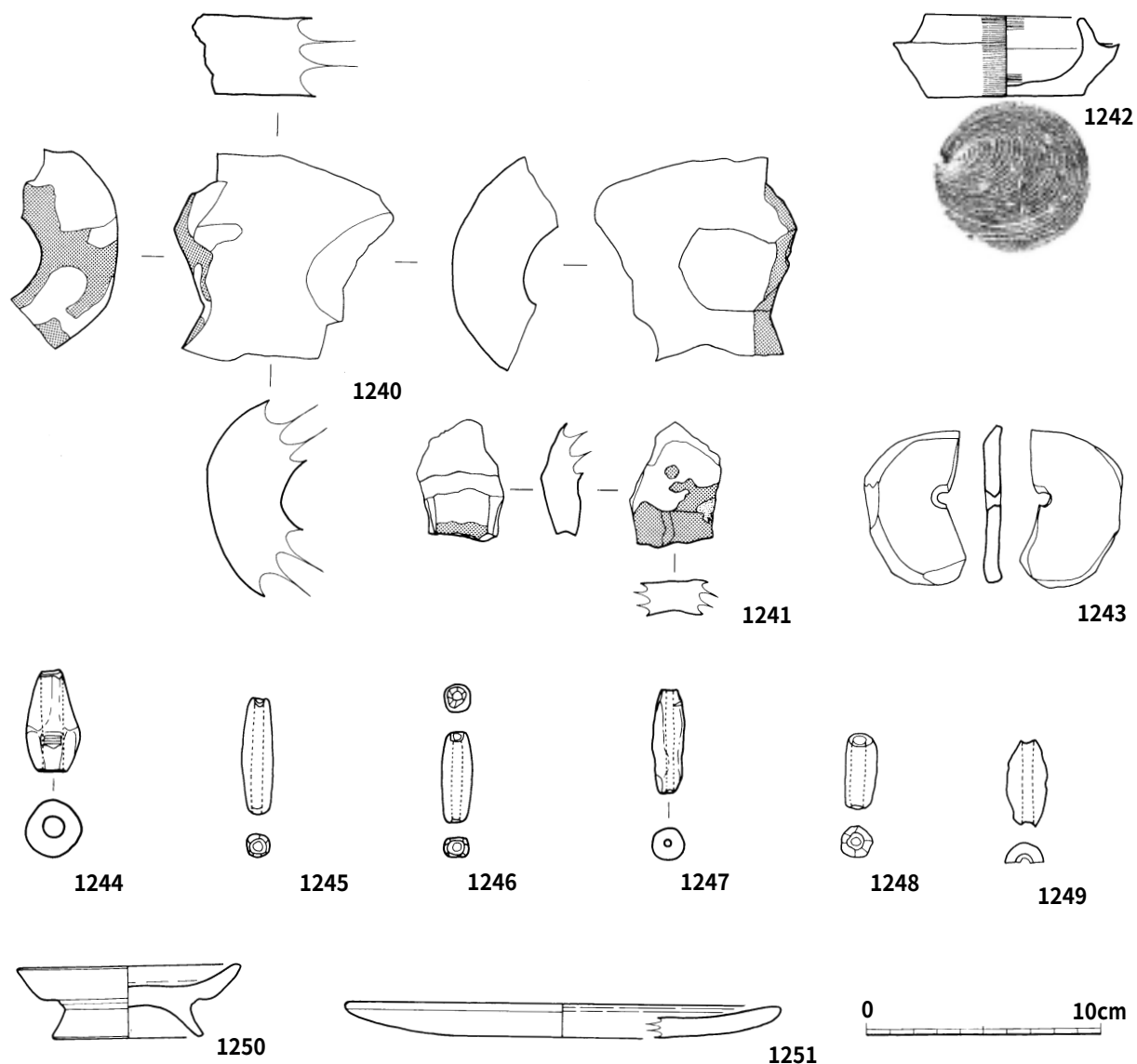
1229・1230 は丸底に近い底部をもつ小皿である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1231 は小皿であるが丸味をもって立ち上がる器形である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1232 は丸味を持って立ち上がる器形である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1233 は厚く狭い底部である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1234～1236 は薄い底部である。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1237・1238 は底部の角を切っている。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。1239 は立ち上がりが丸味をもっている。底部の切り離しは糸切り離しである。両面とも黒色研磨をしている。



第 145 図 黒色土器B・坏・小皿

⑥ 土師特殊品 (第 146 図 1240～1251)

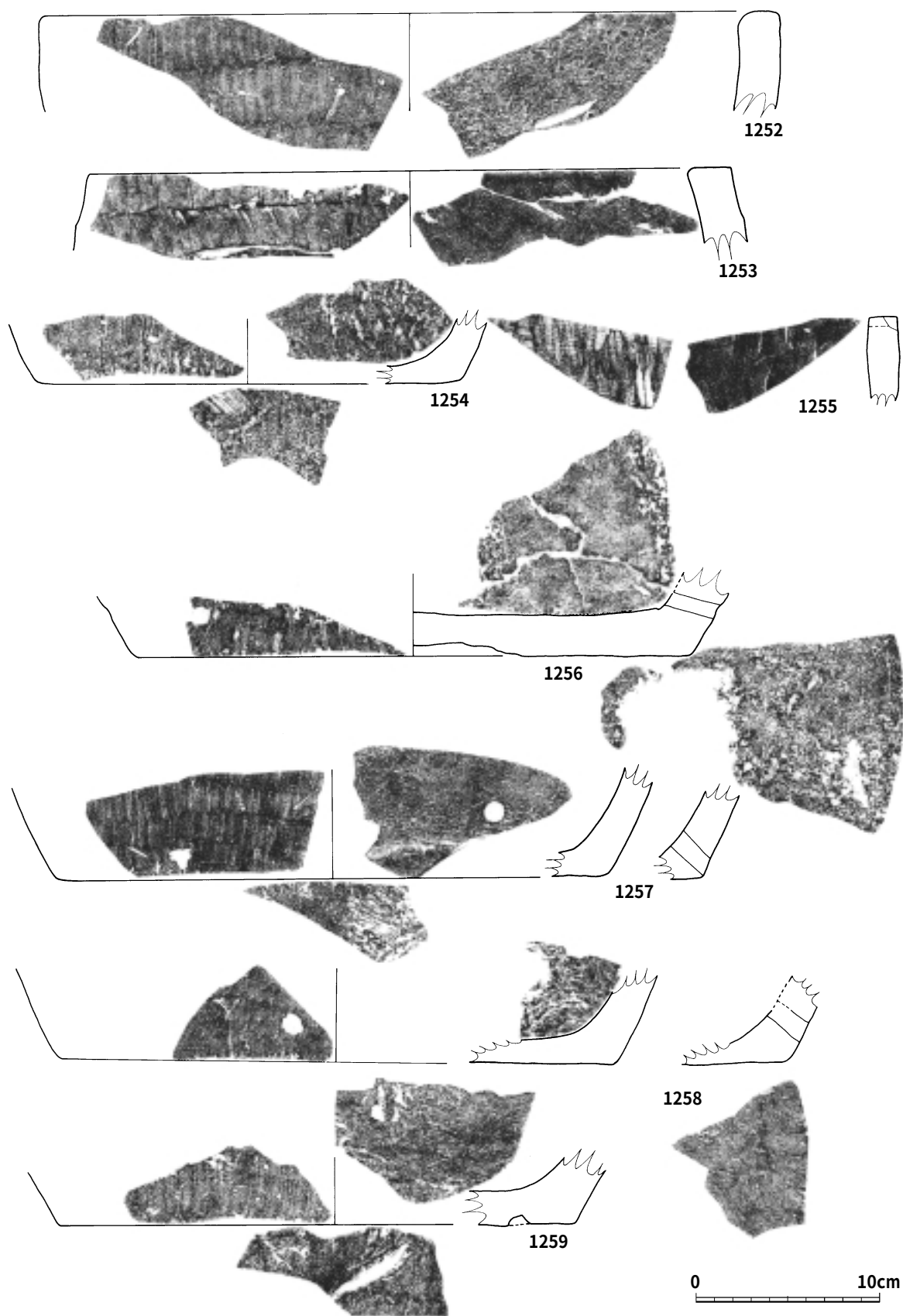
1240・1241 は円筒状のふいごの羽口である。炉との付け口は鉄分が溶けた状態で付着している。
 1242 は合子の土師製品である。合子の受け身の方で底部は糸切り離しである。青白磁の合子のまねをして製作したと考えられる。
 1243 は土師器の底部を再利用した紡錘車と思われる。穴は少しずれてあけている。
 1244～1249 土錘である。
 1250 は高坏状のものである。高台付き皿とも言えよう。
 1251 は底部が丸い皿である。糸切り底ではなく特殊品と考えられる。



第 146 図 土師特殊品

ク 石鍋 (第 147 図 1252~1259)

1252 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや厚みのあるもので、口縁部の形は直行である。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1253 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや厚みのあるもので、口縁部の形は内湾ぎみである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1254 は滑石製石鍋の底部である。断面は薄手で、胴部への立ち上がりは外反である。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1255 は滑石製石鍋の口縁部である。断面はやや薄手で、口縁部の形は直行である。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。1256 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので、胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また、円孔が施され、鍋的要素が薄れる感がある。1257 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや薄手である。

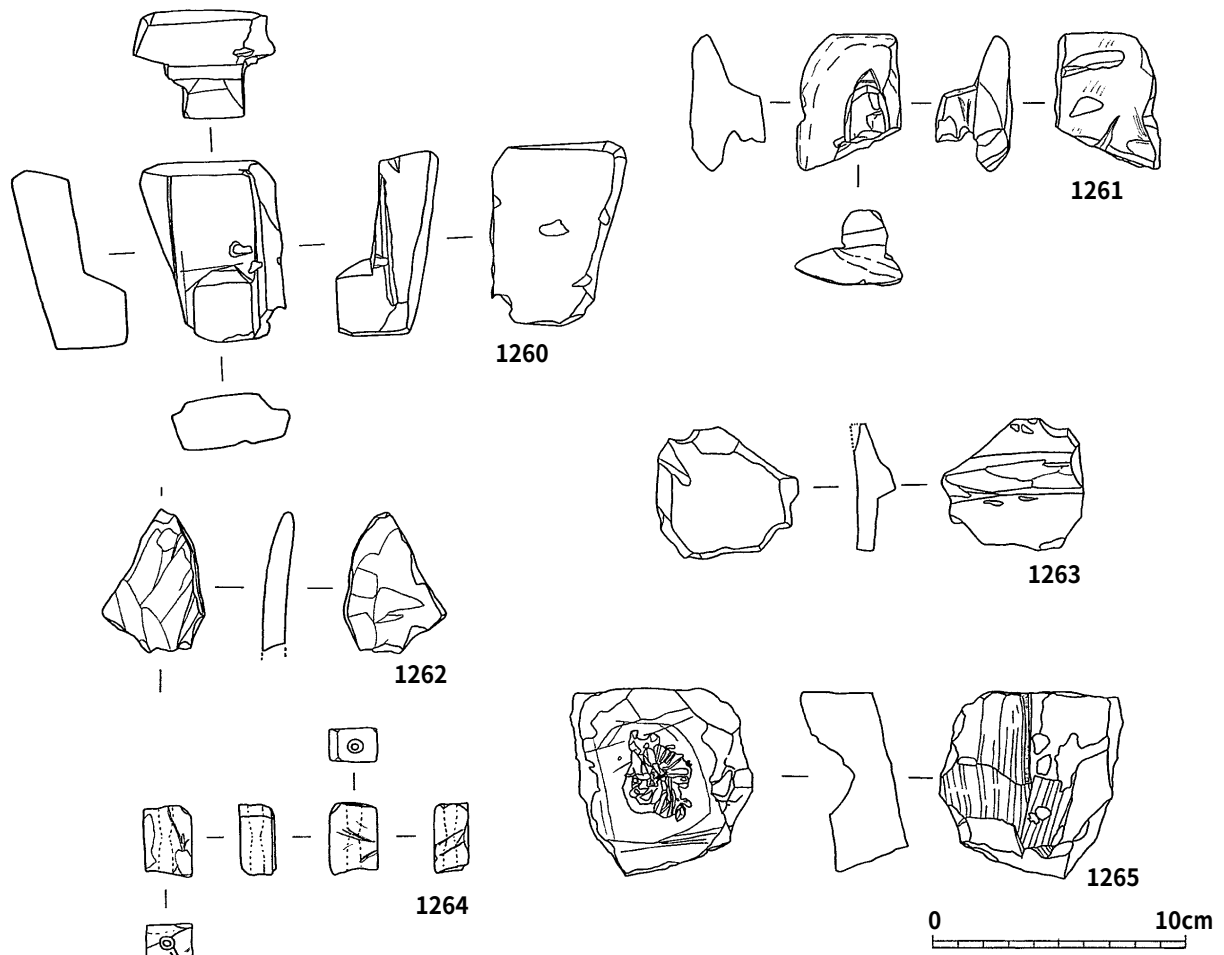


第 147 図 石鍋

胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また、円孔もある。1258 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので、胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。また、円孔が施され、鍋的要素が薄れる感がある。1259 は滑石製石鍋の底部である。断面はやや厚みのあるもので、胴部への立ち上がりは外張りである。外面は縦位に短く削りながら横位に廻らした調整面を段々に構成している。底面は削り跡を研磨している。

ケ 滑石製品 (第 148 図 1260～1265)

1260 は方形に面をとり方形の突起を作っている製品である。これは目的不明である。1261 は丸味のある面と細穴がある紐状突起を作っている。用途ははっきりしないが、滑石製鏡模造品も考えられる。1262 は薄手の製品で、丸味をもつもので用途不明である。1263 は石鍋の一部をメンコにしたものと考えられる。1264 は角柱に円孔がみられるものである。目的不明の製品である。1265 は石鍋をメンコ状に割り、中央を抉っているものである。用途不明。



第 148 図 滑石製品

コ 砥石 (第 149 図 1266～1276)

砥石の石材は軟質白色頁岩と硬質頁岩の 2 種類である。

1266 は、軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。主に片面が使用され、上位の使用残部



第149圖 砥石

盛り上がりが見られる。裏面は若干丸味をおびている。1267 は硬質頁岩の石材である。砥石に使用した主な面は1面で、大半が剥がれており一部研面が残っている。側面の研面は若干残っている。1268 は軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。4面が使用され中央部が細くなっている。1269 は硬質頁岩の石材である。砥石に使用した主な面は1面で、摂理部で大半が剥がれており、使用面は一部研ぎ面が残っている。1270 は小形の扁平な硬質頁岩で中央部に凹面の研ぎ跡が見られる。1272 は硬質頁岩を使用し、形はで扁平で小形である。使用面は中央部である。1271 は軟質白色頁岩で4面を使用している。中央部は細くなり、折れている。そして、これは焼けたため砂粒が落ちてくる。1273 は硬質頁岩で扁平である。使用面は2面であるが、使用された痕跡は少ない。1274 は軟質白色頁岩で天草砥石と言われる石材である。小形で折れ4面が使用され中央部が細くなっている。なお、半分に欠損している。1275 は軟質白色頁岩で主に片面が使用されている。裏面は深い溝があり、若干丸味をおびている。なお、半分に欠損している。1276 は主に片面が使用されている。形は三角形で、裏面は凸凹があり使用されていない。

サ 石製品 (第 150 図 1277～1283)

1277 は扁平状の滑石製品である。形は短冊状で加工は四角を丸くしたものである。使用目的は不明である。1278 は扁平状の滑石製品である。形は台形で加工は四角を丸くしたものである。片面は段差のある面を作り、片面は三角断面の縦筋を中央に入れている。使用目的は不明である。

1279 は石を縦剥ぎにしたものである。剥いだ面は4面みられ、自然面も残っている。断面は蒲鉾形である。使用目的は不明である。

1280 は石球である。表面は潰した状態になっている。1281 は小形の石球である。これは自然面だけである。1282 は軽石加工品である。丸い軽石を片方から何回も削り込んだものである。使用目的は不明である。1283 は軽石製品である。形は亀の甲羅状に作っている。各面はすり切り調整で丁寧に作っている。

シ 金属製品 (第 151～153 図 1284～1345)

1284～1299 は全て角釘である。頭部を曲げているものは 1284・1286・1291・1292・1294・1299 があり、他は見あたらない。前者は完全に近く、後者は頭部が欠損していると思われる。

1300 は半円球の傘に釘が組み込まれた傘釘と思われる。1301 は傘釘の傘部と思われる。

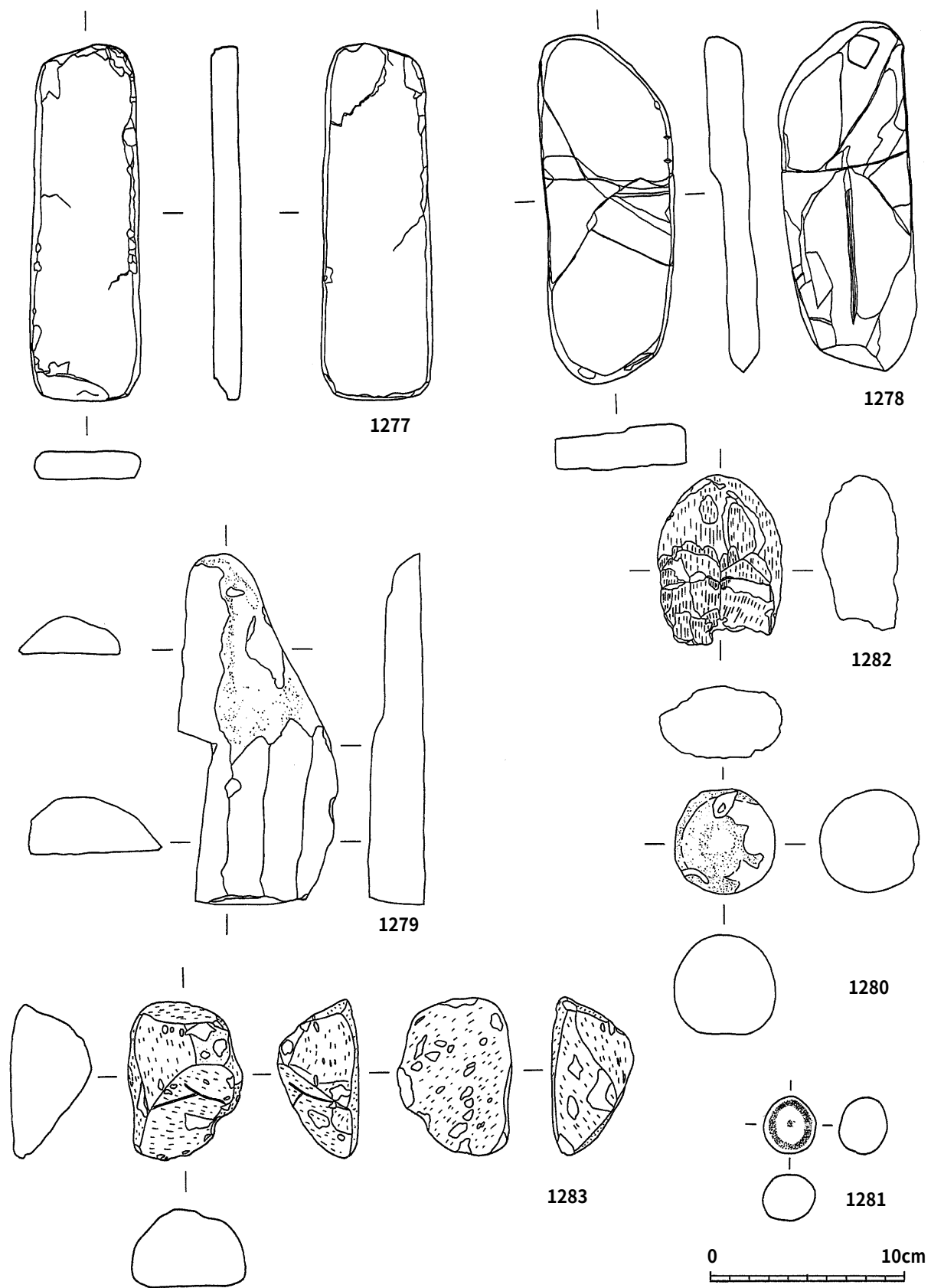
1302～1307 は板状にした板金の製品である。1303・1306 は板鉄を「コ」の字にした曲物状にし、1304 は板鉄が2枚重なり、1305 は「D」字状に折り曲げ、1307 は「9」字状に曲げている。これらは、道具等の柄に差し込んだ部分を絞める金具と考えられる。

1308 は板金を加工したもので、用途不明である。

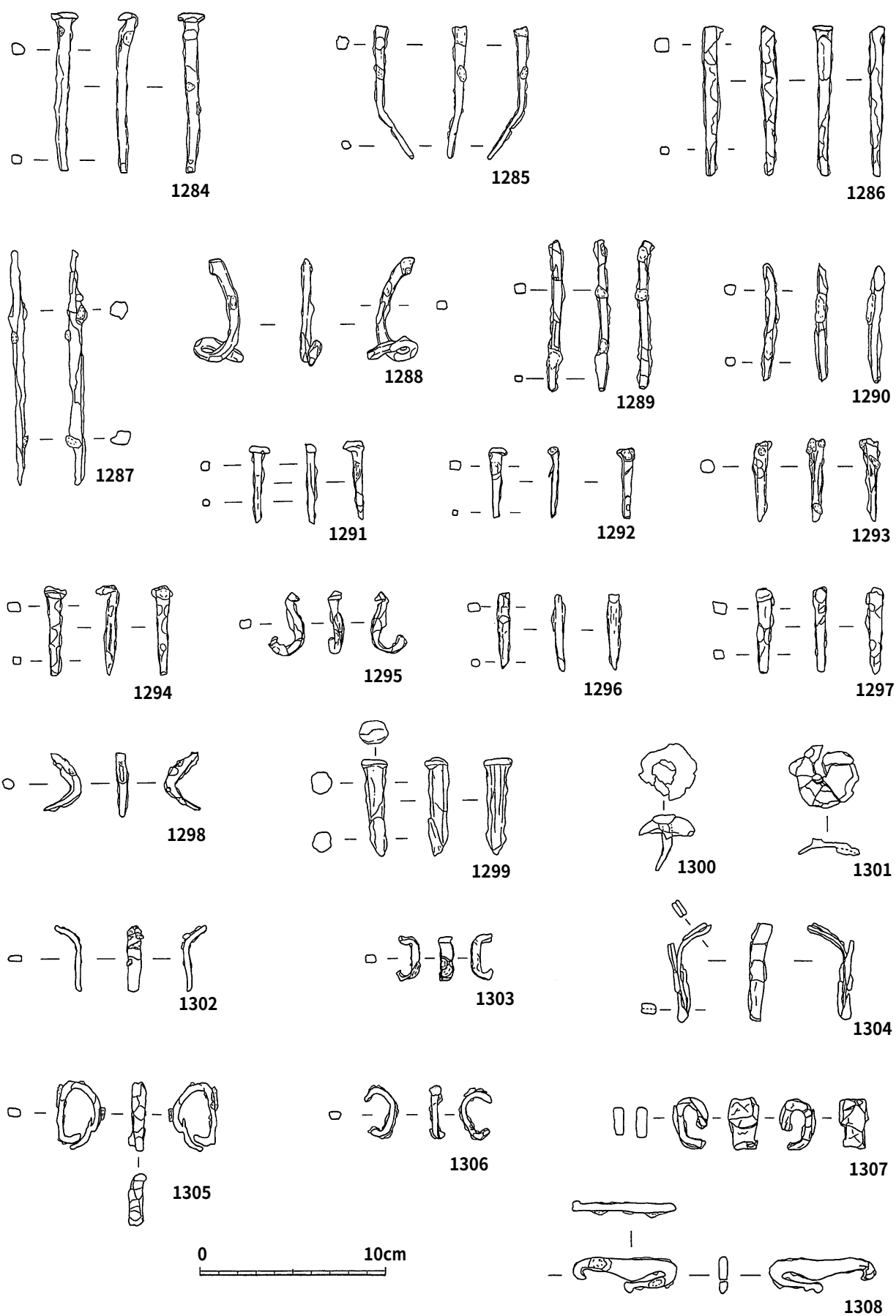
1309～1311 は刀子である。1309・1311 は刀子の刃部で、1310 は柄の差し込み部である。

1312～1318 は幅広板金製品の類である。1312・1313・1317 は厚手で三角形と長方形をなしている。用途としては楔が考えられる。1314・1316・1318 は用途不明。1315 は穴が見られるが用途不明である。

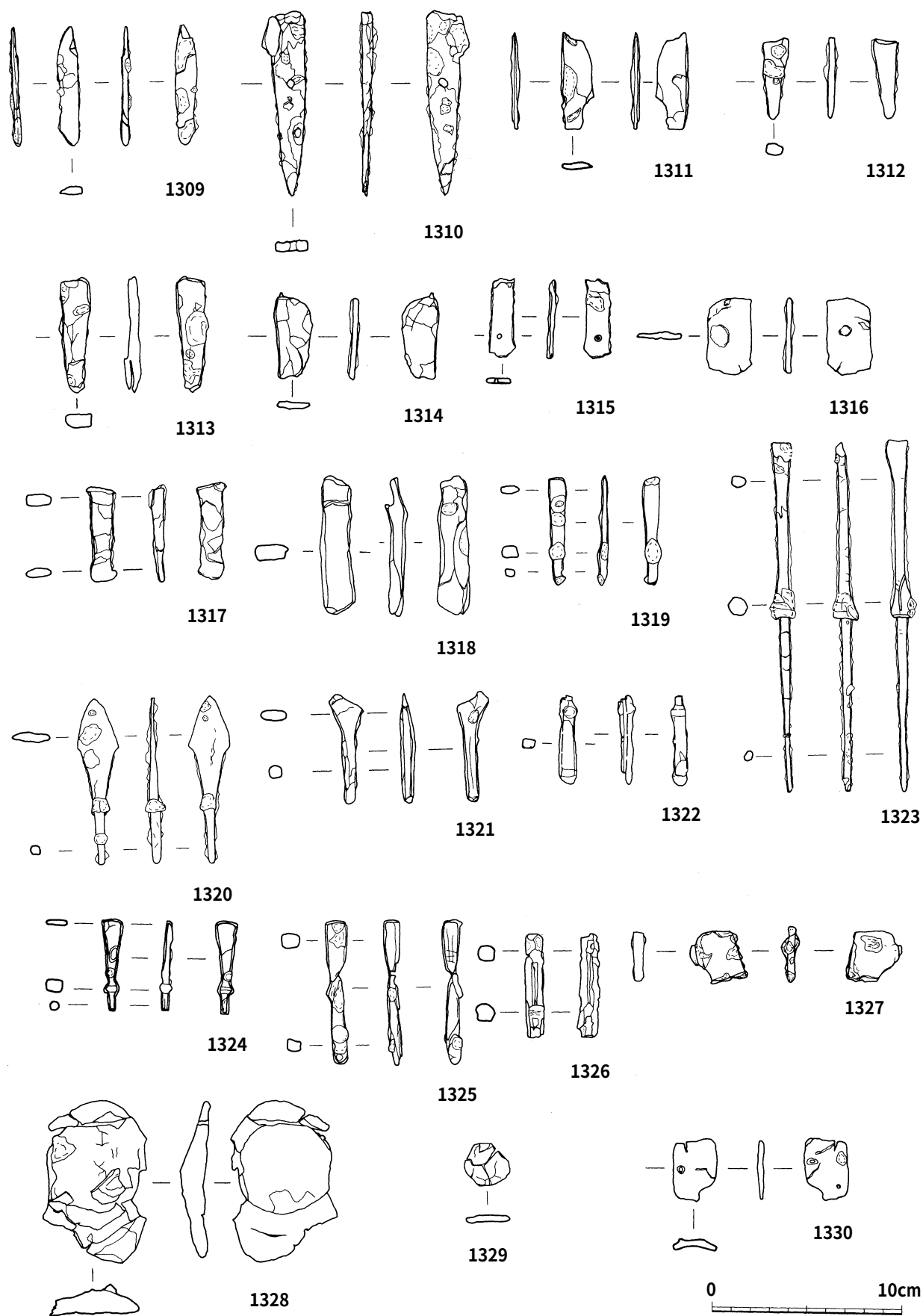
1319～1326 は鉄鍬の類である。1320・1322 は幅広鉄鍬である。これは鍬の刃部が菱形をなしているものである。1319・1323・1324 は鍬の刃部が逆台形をなしているものである。この中では 1323



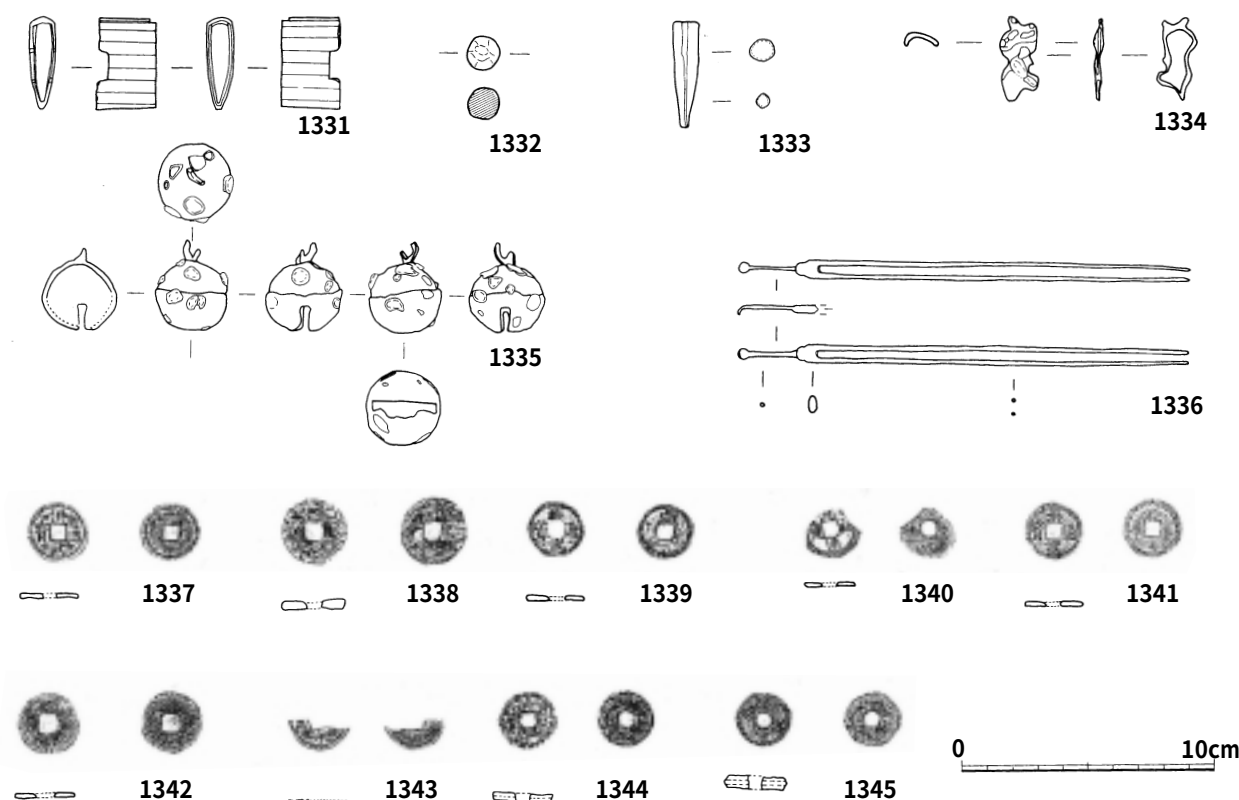
第150図 石製品



第151図 鉄製品 (1)



第152図 鉄製品 (2)



第153図 鉄製品(3)と銅・鉛製品

が完形品である。これは逆台形の幅広辺が先端部になり、長めの刃部である。柄部は長く差し込み端は尖っている。中間は装着部が表に出るところで、植物表皮で巻いた部分である。1319・1324はその小型である。なお、1322・1326はこのタイプの一部と考えられる。

1327は鉄板状の製品で形不明である。1329・1330は丸味のある鉄板で使用不明の製品である。

1331は青銅製品である。形は三角柱に中は空洞である。外面は狭い面切りがあり、内面は細工がない。用途は刀の鑢止め金具と考えられる。1332は鉛製の鉄砲玉である。1333は青銅製のキセルの吸口である。1334は青銅製の飾り金具と考えられる。1335は、鉄製の鈴である。製法は上半分と下半分の半球を接合して、穴の開いた吊り部を接合している。1336は青銅製品で、簪である。耳搔き部が付いている。

1337～1345は古銭である。この中には表層出土もあり中世・近世がみられる。1337・1339・1341が洪武通寶である。1339は元祐通寶である。1343は近世の寛永通寶の可能性はある。1334は2枚、1335は3枚重なって剥がれない状態である。なお、1338・1344は鉄銭で他は青銅銭である。

6 近世

(1) 遺構

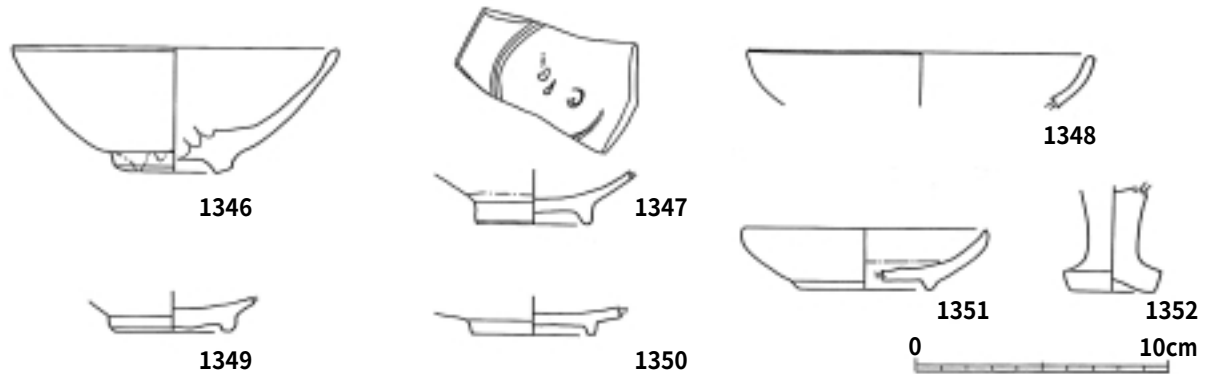
遺構は確実に確認されなかったが建物跡の柱穴が数多く検出しているので、これらの中にあると考えられる。また、掘立柱建物跡26・31・32が3重にあるので、掘立柱建物跡27はその後建てられた可能性が大きい。この建物は2間×2間で西側の梁間柱が外側に張り出している。

他の土坑は性格不明である。

(2) 遺物 (第 154・155 図 1346～1376)

ア 磁器 (第 154 図 1346～1352)

1346 は白磁の碗である。中世にない器形や白色であるため近世とした。1347 も白磁の碗である。見込みに線がみられる。1348～1351 は皿である。1348 は口縁部で彎曲している。1349・1350 は高台である。1351 は口縁部が内湾し、見込みに少し稜がみえるものである。高台は低い。



第 154 図 近世白磁

1352 は上げ底で筒部が絞られた白磁である。底面には釉薬が施されていないロクロの水挽き痕がみられる。用途不明である。

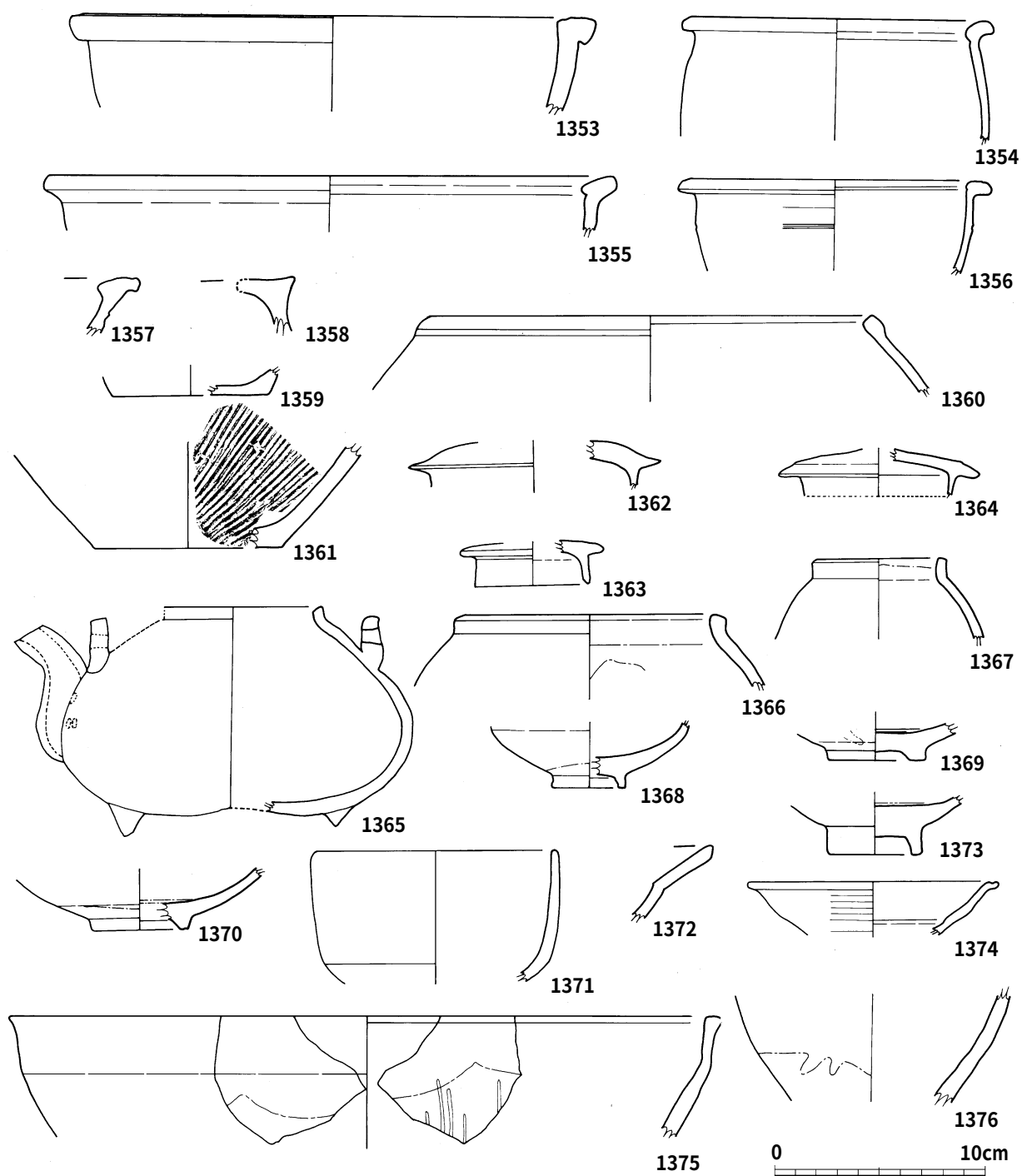
イ 陶器 (第 155 図 1353～1376)

1353～1368・1372 はさつま焼の類である。

1353 は「L」字口縁部をもついわゆる半胴甕である。釉は鉄釉の薄いものである。器面はロクロの水挽き痕が残る。1354 は小形の甕である。口縁部は厚く「く」の字に折れ、内面に段がみられる。1355 は半胴甕である。口縁部は厚く「く」の字に折れ、内面に舌状の段がみられる。1356 は小形の甕である。口縁部は厚く「L」の字に折れ、内面に段がみられる。1357 は播鉢の口縁部である。口縁部は広い平坦面があり、内面は舌状になっている。1358 は半胴甕の口縁部である。内側に広い舌状の口唇部をもつ。1359 は甕の底部である。1360 は口縁部が内向した甕である。口縁部は厚みがある。1361 は播鉢である。底部は平底で胴部は外側に立ち上がる。内面は櫛歯状筋をほどこしている。1362 は茶家の蓋である。これは厚みのある大形のものである。薄い褐釉がかかっている。1363 は茶家の蓋である。これは薄手で小形のものである。厚い鉄釉がかかっている。1364 は茶家の蓋である。これは薄い中形のものである。薄い褐釉がかかっている。1365 は茶家である。脚は 3 本あり若干上げ底で、丸味をもった胴部である。胴から注ぎ口へは円孔が 3 つ作られている。口縁部直に立っている。釉は薄い褐釉である。1366 は茶家の大形の口縁部である。1367 は小型の茶家の口縁部である。これらは苗代川焼の範疇に入る。

1368・1371・1373 は碗である。3 つともそば釉である。系統としては白薩摩の類に入る。

1369～1376 は他の産地である。1369 は白色釉を使った志野焼に類している。1370・1371 は京焼の碗である。1372・1374 は大皿と小皿である。産地は不明である。1375 は播鉢である。産地は不明である。1376 は琉球焼の壺である。



第 155 図 近世陶器

第41表 石器一覧

番号	遺物番号	出土区	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
1	8	E-3	VIII	剥片尖頭器	9.7	2.9	1.7	48.46	頁岩
2	14	F-4	VIII	ナイフ形石器	4.7	2.6	1.1	10.95	玉髄(灰)
3	17	F-3	VIII	フレイク	8.6	3.6	2.2	70.11	黒曜石
4	13	F-3	VIII	スクレイパー	5.5	5.2	1.4	39.16	黒曜石
5	10	E-3	VIII	グレイバー	2.4	2.1	0.8	3.72	黒曜石
6	798	C-12	VIII	フレイク	3.9	2.4	1.0	9.50	黒曜石
7	800	D-10	VIII	フレイク	1.9	1.4	0.4	1.22	黒曜石
8	27	F-3	VIII	フレイク	2.1	2.2	0.7	3.24	黒曜石
9	18	F-3	VIII	フレイク	4.8	3.8	1.7	22.36	黒曜石
10	802	D-10		ドリル	1.7	0.9	0.7	0.55	黒曜石
11		E-7	I b	フレイク	2.0	4.0	0.7	7.01	黒曜石
12			表	スクレイパー	3.4	3.1	1.2	12.32	玉髄(灰)
13		E-8	I c	ナイフ形石器	3.7	1.8	0.5	3.05	黒曜石
14			表	スクレイパー	8.2	3.8	0.9	28.34	頁岩
15		C-8	II	スクレイパー	5.4	2.3	1.6	22.25	玉髄(灰)
16		E-3	I b	スクレイパー	3.3	2.2	1.0	7.20	玉髄(白)
17		D-5	I b	スクレイパー	2.6	2.4	0.8	5.71	玉髄(赤)
18		E-10	I b	UF	4.4	2.4	1.3	11.30	玉髄(灰)
40		溝2		石鏃	3.3	2.5	0.4	2.12	黒曜石
41	28	C-D-9		石鏃	2.6	1.4	0.4	1.01	黒曜石
42		E-9	V	石鏃	3.0	1.8	0.4	1.69	黒曜石
43		D-10溝3	I	石鏃	2.6	1.8	0.3	0.86	黒曜石
44				石鏃	2.3	1.4	0.5	0.93	黒曜石
45	4	4T	III b	石鏃	2.6	1.6	0.4	0.98	黒曜石
46		D-10	III	石鏃	2.4	1.7	0.3	0.67	頁岩
47		C-4・5方形竪穴1		石鏃	2.6	1.8	0.6	1.38	黒曜石
48		D-5	III	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.38	黒曜石
49	32	F-16	II	石鏃	1.8	1.3	0.3	0.46	頁岩
50	117	G-17	III	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.59	玉髄(灰)
51		D-8	II	石鏃	2.3	1.9	0.3	1.26	黒曜石
52		F-4	III a	石鏃	2.2	2.0	0.4	1.04	頁岩
53	258	F-18	II	石鏃	2.3	1.3	0.3	1.14	頁岩
54		溝3	I	石鏃	2.2	2.0	0.3	1.01	玉髄(白)
55		E-6		石鏃	2.4	1.9	0.5	1.99	頁岩
56	796	C-11	V	石鏃	1.8	1.2	0.5	0.89	玉髄(白)
57		F-7	I a	石鏃	1.5	1.6	0.3	0.44	頁岩
58	372	G-16	II	石鏃	1.5	1.4	0.4	0.45	黒曜石
59		C-9	II	石鏃	1.5	1.4	0.2	0.31	黒曜石
60		5T	II b	石鏃	1.4	1.8	0.4	0.56	頁岩
61		E-7	I b	石鏃	1.2	1.1	0.3	0.38	黒曜石
62		F-4	V	石鏃	1.1	1.5	0.3	0.42	黒曜石
63		D-3	I b	石鏃	1.9	1.5	0.4	1.34	黒曜石
64		E-8	I b	石鏃	1.7	0.9	0.3	0.38	黒曜石
65		C-7	I b	スクレイパー	4.9	7.0	1.4	37.29	頁岩
66		E-8	V	スクレイパー	3.2	2.5	1.1	8.77	黒曜石
67	29	F-9	VII	スクレイパー	5.7	2.9	0.9	13.43	頁岩
68	719	D-6	II	磨製石斧	11.1	5.8	2.6	282.18	ホルンフェルス(花崗岩質)
69		山部6T	表	磨製石斧	5.8	5.7	2.5	82.71	頁岩
70	280	山部6T		打製石斧	12.6	5.2	2.8	247.84	頁岩
71		B-6	II	打製石斧	14.8	8.5	3.8	550	安山岩
72		D-7		凹石、敲石	15.9	10.5	4.8	1090	安山岩
73		C-7焼土		凹石、敲石	10.9	8.3	5.2	725	安山岩
74	818	B-4	III a	凹石、敲石	10.1	8.9	4.9	872	砂岩
75				磨石	9.0	8.0	6.1	617	安山岩
76				石皿	12.3	9.8	4.3	716	安山岩
77		C-7		石皿	13.8	10.3	5.8	1450	頁岩
78		D-6	II	石皿	18.0	16.3	5.0	2059	頁岩
260		C-8掘立柱26		砥石	9.5	3.5	2.5	161.49	砂岩
1266		D-5	I a	天草砥石	11.5	7.4	4.4	422	軟質白色頁岩
1267	746	C-7	II	砥石	8.5	2.2	1.9	76.69	頁岩
1268	749	C-7	II	天草砥石	9.9	6.4	5.8	590	軟質白色頁岩
1269				砥石	7.1	3.5	1.3	54.70	頁岩
1270		F-5	II	砥石	6.4	3.3	0.7	28.40	頁岩
1271		D-7	II	天草砥石	10.7	5.6	5.4	325	軟質白色頁岩
1272		B-4	I	砥石	4.9	2.1	0.8	9.73	頁岩
1273		E-5	II	砥石	4.9	3.2	0.6	14.95	頁岩
1274		E-4	I b	天草砥石	5.2	4.0	1.9	57.78	軟質白色頁岩
1275		C-10溝3	I	天草砥石	7.7	5.6	4.0	220	軟質白色頁岩
1276		C-4・5		天草砥石	11.7	6.7	5.7	340	軟質白色頁岩
1277	769	C-7	II	滑石製品	18.5	5.7	1.4	317	滑石
1278		F-5		滑石製品	18.3	6.6	2.0	430	滑石
1279		B-10	II	石製品	18.2	7.5	2.9	489	頁岩
1280		C-6		石球	5.3	5.2	5.2	148	安山岩
1281		C-4・5方形竪穴1		石球	3.0	2.7	2.4	29.25	安山岩
1282		D-7		軽石	8.5	6.4	3.9	49.72	軽石
1283		C-6	II	軽石	8.4	5.9	4.2	47.77	軽石

第42表 縄文時代出土遺物一覧

番号	遺物 番号	時期	器種	器部	出土区	層	色調		調整痕		胎土					焼成	文様等
							外面	内面	外面	内面	色調	石英	長石	角閃	雲母		
19		早期	深鉢	口縁部	D10		灰黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻条痕	へら掻き	黒褐色	○	○	○		良	貝殻刺突文
20		早期	深鉢	胴部	山部6T	表	明黄褐色	明黄褐色	貝殻条痕		明黄褐色	○	○	○		良	
21	629	早期	深鉢	胴部	G17	Ⅱ	明赤褐色	明褐色	へら掻き上げ		明褐色	○	○	○		普	
22	264	早期	深鉢	胴部	山部6T		橙色	にぶい褐色	へら掻き上げ		にぶい褐色	○	○	○		良	
23	217	早期	深鉢	底部	G18	Ⅱ	黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻条痕		にぶい黄褐色	○	○	○		普	
24	222	早期	深鉢	胴部	G18	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色			黒褐色	○	○	○		粗	山形押型文
25	55	早期	深鉢	胴部	F17	Ⅲ	明赤褐色	にぶい黄褐色			黒褐色	○	○	○		粗	山形押型文
26		早期	深鉢	胴部	山部6T	表	明赤褐色	にぶい黄褐色			にぶい褐色	○	○	○		粗	山形押型文
27	13	早期	深鉢	胴部	山部6T		にぶい黄褐色	明黄褐色			黄褐色	○	○	○		粗	山形押型文
28	248	早期	深鉢	胴部	G18	Ⅲ	明赤褐色	にぶい褐色	貝殻条痕		にぶい褐色	○	○	○		粗	
29		中期	深鉢	口縁部	E6	Ⅱ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色			褐灰色	○	○	○		良	口唇部に刻み
30	794	中期	深鉢	胴部	C8	Ⅲ	褐色	にぶい黄褐色		へら掻き、ナデ	にぶい黄褐色	○	○	○		良	凹線文
31	794	中期	深鉢	胴部	C8	Ⅲ	にぶい褐色	にぶい黄褐色		へら掻き、ナデ	にぶい黄褐色	○	○	○		良	凹線文
32	794	中期	深鉢	胴部	C8		褐色	にぶい褐色		へら掻き、ナデ	にぶい褐色	○	○	○		良	凹線文
33	994	中期	深鉢	胴部	C8	Ⅲ	にぶい褐色	にぶい黄褐色		へら掻き、ナデ	にぶい黄褐色	○	○	○		良	凹線文
34		中期	深鉢	口縁部	F7	Ic	褐色	にぶい黄褐色			にぶい黄褐色	○	○	○		良	凹線文、竹管刺突(口唇部)
35		中期	深鉢	胴部	B5	Ⅱ	灰黄褐色	にぶい黄褐色			にぶい黄褐色	○	○	○		良	突帯、貝殻刺突文
36		晩期	深鉢	底部	D7	Ⅱ	褐色	にぶい黄褐色			黒褐色	○	○	○		良	
37	838	晩期	浅鉢	口縁部	B4	Ⅳ	暗灰黄色	暗灰黄色	研磨	研磨	暗灰黄色	○	○	○		良	
38		晩期	浅鉢	口縁部	D5方形竪穴4		暗灰黄色	暗灰黄色	研磨	研磨	黒褐色	○	○	○		良	玉縁
39	218	晩期	浅鉢	底部	G18	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	○	○	○		粗	

第43表 古墳・古代出土遺物一覧

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内外面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
79	成川式土器	甕	口縁部	口径 25.0	B-4	Ⅲa	黄灰色	灰黄色	ナナメ目	ヨコナテ		角閃石、赤色粒	
80	成川式土器	甕	口縁部	口径 21.2	B-3		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナナメ目	ナメ目	にぶい黄橙色	石英、長石、黒曜石	
81	成川式土器	甕	口縁部	口径 18.4	B-3	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄色	手ナデ	ナメ目	暗灰黄色	石英、長石、赤色粒	
82	成川式土器	甕	口縁部	口径 28.0			にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい黄褐色	石英、雲母、赤色粒	
83	成川式土器	甕	口縁部	口径 19.0	D-9	Ⅲ	褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ヨコナテ	にぶい褐色	石英、角閃石、長石	
84	成川式土器	甕	口縁部	口径 29.4	C-12	Ⅲa	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	工具ナデ		石英、角閃石、赤色粒	
85	成川式土器	甕	口縁部		F-5	Ⅱ	褐色	浅黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	浅黄褐色	石英、長石、赤色粒	
86	成川式土器	甕	口縁部	口径 26.8	B-3	Ⅲa	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	褐色	石英、角閃石、長石	
87	成川式土器	甕	口縁部	口径 19.4	B-3	Ⅱ～Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい黄褐色	角閃石、長石	
88	成川式土器	甕	頸部	口径 22.0	E-3	Ⅲa	明黄褐色	にぶい黄色	ナナメ目、ナデ	ナメ目	灰黄色	石英、長石、赤色粒、砂粒	
89	成川式土器	甕	口縁部	口径 23.4	B-3	Ⅱ～Ⅲ	明黄褐色	褐色	ナナメ目	ナメ目	褐色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
90	成川式土器	甕	口縁部	口径 12.0	B-3	Ⅲa	褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ヨコナメ目	にぶい黄褐色	石英、角閃石、長石	
91	成川式土器	甕	頸部	口径 26.4	B-3		明赤褐色	にぶい黄褐色	ナメ目、ヘラナシ	ヨコナメ目	にぶい黄褐色	石英、角閃石	
92	成川式土器	甕	口縁部	口径 24.2	E-3	Ⅲa	灰黄褐色	黒色	ナメ目	ヨコナテ	にぶい褐色	長石、雲母	
93	成川式土器	甕	頸部	口径 18.0	F-5	Ⅱ	褐色	明黄褐色	ナメ目	ナメ目	明黄褐色	石英、雲母	
94	成川式土器	甕	底部		B-3	Ⅲa	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナデ	にぶい黄褐色	石英、赤色粒	
95	成川式土器	甕	底部		D-8	Ⅱ	褐色	黒褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐色	石英、長石、赤色粒、小礫	
96	成川式土器	甕	底部		D-3	I c	にぶい褐色	褐色	ナメ目	ナデ	明赤褐色	角閃石、長石、雲母	
97	成川式土器	甕	底部		D-3	Ⅱ	褐色	黒色	ヨコナメ目	ナメ目	黄褐色	石英、長石、雲母、赤色粒	
98	成川式土器	甕	底部		D-6	Ⅱ	褐色	黒褐色	ナメ目	ナメ目	浅黄褐色	石英、角閃石、赤色粒	
99	成川式土器	甕	底部	口径 11.0	B-4	Ⅲa	浅黄褐色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい黄褐色	石英、角閃石、長石、砂粒	
100	成川式土器	甕	底部	口径 9.0	B-3	Ⅲa	褐色	褐色	ナメ目	ヨコナメ目	褐色	石英、角閃石、赤色粒	
101	成川式土器	甕	底部	口径 9.0	B-5	Ⅲa	明黄褐色	褐色	ナメ目	ヨコナテ	褐色	角閃石、赤色粒	
102	成川式土器	甕	底部	口径 11.6			明黄褐色	にぶい黄褐色	ヘラナシ	ナデ	にぶい黄褐色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
103	成川式土器	甕	底部	口径 9.5	D-6	Ⅱ	淡褐色	褐色	ナメ目	ヘラナシ	浅黄褐色	石英、長石、赤色粒	
104	成川式土器	甕	底部	口径 9.6	F-4	Ⅲ	にぶい黄褐色	明黄褐色	ナメ目	ナメ目	暗灰黄色	石英、角閃石、長石	
105	成川式土器	壺	口縁部	口径 22.6	B-3	Ⅲ	明赤褐色	にぶい褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい褐色	石英、長石、砂粒	
106	成川式土器	壺	頸部	口径 11.4	B-3	Ⅱ～Ⅲ	褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	工具ナデ	にぶい黄褐色	石英、雲母	
107	成川式土器	壺	胴部	口径 30.0	C-6	Ⅲ	褐色	褐色	ナメ目		にぶい黄褐色	石英、雲母、赤色粒	刻み目突帯
108	成川式土器	壺	肩部		C-10	Ⅱ	黄褐色	明黄褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい黄褐色	長石、雲母	鋸歯状
109	成川式土器	壺	胴部	口径 32.0	D-11	Ⅱ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	石英、長石、赤色粒	刻み目突帯
110	成川式土器	壺	胴部		E-5	Ⅱ	灰黄褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	明黄褐色	石英、角閃石、赤色粒	刻み目突帯
111	成川式土器	壺	胴部	口径 20.0	B-3		浅黄褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	灰褐色	石英、角閃石	刻み目突帯
112	成川式土器	壺	胴部	口径 27.0	B-4	Ⅲa	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナメ目	ナメ目	褐色	石英、長石、雲母	刻み目突帯
113	成川式土器	壺	胴部	口径 28.8	D-5	Ⅱ	にぶい黄褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	浅黄褐色	石英、角閃石、長石	刻み目突帯
114	成川式土器	壺	胴部	口径 33.8	C-13	Ⅲa	黒褐色	灰黄褐色	ナメ目	ナメ目	灰黄褐色	石英、角閃石	刻み目突帯
115	成川式土器	壺	胴部		B-4	Ⅲa	褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	灰黄褐色	石英、角閃石、長石	幅広刻み目突帯
116	成川式土器	壺	胴部		B-3		浅黄褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	灰褐色	石英、角閃石	
117	成川式土器	壺	底部		C-12	Ⅲa	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	淡褐色	石英、角閃石、長石	
118	成川式土器	壺	底部		E-3	Ⅲa	明赤褐色	にぶい褐色	ナメ目	ナメ目	明赤褐色	石英、角閃石、赤色粒	
119	成川式土器	壺	底部		E-4	Ⅱ	明赤褐色	にぶい褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい黄褐色	石英、角閃石、赤色粒	
120	成川式土器	壺	底部		B-3	Ⅱ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	灰黄褐色	石英、角閃石、長石、赤色粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
121	成川式土器	壺	底部		B-5	II	浅黄褐色	にぶい橙褐色	ナデ、ハケ目	ナデ	にぶい橙褐色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
122	成川式土器	壺	底部	底径 3.0	B-3	IIIa	褐灰色	浅黄橙褐色	ハケ目	ハラスリ	灰褐色	石英、角閃石、長石	
123	成川式土器	壺	底部	底径 3.4	C-12	III	黄灰色	橙褐色	ハラスリ	ハケ目	橙褐色	石英、赤色粒	
124	成川式土器	壺	底部	底径 7.0		II	橙褐色	橙褐色	ハラスリ、ハケ目	ハラスリ	暗灰黄色	石英、角閃石	
125	成川式土器	壺	底部	底径 9.4	C-11	II	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	工具ナデ	ヨコナデ	褐灰色	長石、雲母	
126	成川式土器	壺	底部	底径 4.0	溝3	II	橙褐色	灰褐色	研磨	研磨	灰褐色	石英、角閃石、長石	
127	成川式土器	壺	胴～底部	底径 8.0	C-6	Ic	橙褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ目	褐灰色	石英、雲母、赤色粒	
128	成川式土器	壺	底部	底径 7.0	F-5	IIIa	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ハラスリ	ハケ目	にぶい黄橙褐色	石英、角閃石、長石、赤色粒	
129	成川式土器	壺	口縁部	口径 15.4			橙褐色	橙褐色	ハケ目	ナデ	浅黄橙褐色	石英、角閃石、長石	
130	成川式土器	壺	口縁～胴部	口径 18.0	F-5	IIIa	にぶい黄褐色	にぶい黄橙褐色	ハラスリ	ハケ目、指つかみ	灰黄褐色	石英、角閃石、長石	
131	成川式土器	埴	底部	底径 5.4	E-3	IIIa	褐灰色	にぶい黄橙褐色	ナデ	ナデ	にぶい黄橙褐色	石英、角閃石	
132	成川式土器	埴	底部	底径 4.0	C-6	III	にぶい橙褐色	橙褐色	ナデ	ナデ	にぶい橙褐色	石英、角閃石、赤色粒	
133	成川式土器	埴	底部		C-6	III	にぶい橙褐色	浅黄橙褐色	ナデ	ハラスリ	にぶい橙褐色	石英、角閃石、長石	
134	成川式土器	高坏	口縁部	口径 23.0	D-7	II	にぶい黄橙褐色	暗褐色	ハケ目、ハラスリ	ハケ目	にぶい黄褐色	石英、長石	
135	成川式土器	高坏	坏部		B-4	II	にぶい黄橙褐色	明灰黄色	ハケ目	ヨコナデ	褐灰色	角閃石、雲母	
136	成川式土器	高坏	脚部		B-4	II	橙褐色	橙褐色	ナデ	ナデ	橙褐色	石英、長石、赤色粒	
137	成川式土器	高坏	筒部		D-3	IIIa	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	ハラスリ	工具痕	灰白色	角閃石、長石、赤色粒	
138	成川式土器	高坏	筒部		D-7	II	橙褐色	橙褐色	ハラスリ	指ナデ	褐灰色	角閃石、長石、赤色粒	
139	成川式土器	高坏	脚部	脚径 14.0	B-4	IIIa	橙褐色	橙褐色	ハケ目、研磨	ハケ目	明黄褐色	石英、角閃石、長石、雲母	
140	成川式土器	高坏	脚部	脚径 9.0	C-12	II	橙褐色	にぶい黄橙褐色	ナデ	ナデ	橙褐色	石英、雲母、赤色粒	
141	成川式土器	高坏	脚部		C-6		にぶい黄褐色	橙褐色	ハケ目	ハケ目	橙褐色	細粒	
142	成川式土器	高坏	脚部	脚径 12.0	E-6		明黄褐色	橙褐色	ナデ	ハケ目	にぶい黄色	細粒	
143	成川式土器	手づね匙	取っ手		D-5	Ic	黄橙褐色	橙褐色	手ナデ、ハラスリ	ハラスリ	淡橙褐色	石英、角閃石、長石	
144	成川式土器	手づね匙	取っ手		B-6	II	にぶい黄橙褐色	にぶい黄橙褐色	手ナデ、ハラスリ	ハラスリ	灰リ-フ色	細粒	
145	土師器	甕	口縁部	口径 36.6	D-11	II	にぶい褐色	にぶい橙褐色	ハケ目	ハラスリ	にぶい橙褐色	石英、角閃石、赤粒石	
146	土師器	甕	口縁部		D-11	II	にぶい黄橙褐色	にぶい黄橙褐色	ハケ目	ハラスリ	黒色	石英、角閃石、砂粒	
147	土師器	甕	口縁部		B-4	II	にぶい橙褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙褐色	石英、角閃石	
148	土師器	甕	口縁部	口径 29.6	F-8	IVa	橙褐色	にぶい黄橙褐色	ハケ目	ナデ	にぶい橙褐色	石英、角閃石、長石	
149	土師器	甕	口縁部	口径 24.0	D-11	II	暗赤褐色	橙褐色	ハケ目	ハラスリ	暗赤褐色	石英、角閃石	
150	土師器	甕	口縁部	口径 19.6	B-4	II	明赤褐色	にぶい黄橙褐色	ハケ目	ハラスリ	黒色	石英、角閃石	
151	土師器	甕	口縁部	口径 33.8	B-5	II	にぶい褐色	にぶい橙褐色	ハケ目	ハケ目	にぶい黄橙褐色	石英、角閃石、雲母	
152	土師器	甕	口縁部	口径 33.6	B-5	II	褐色	にぶい黄橙褐色	ハケ目	ハケ目	灰褐色	石英、角閃石、長石	
153	土師器	甕	口縁部	口径 30.8	C-12	II	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	ヨコハケ目	ヨコハケ目	褐灰色	石英、角閃石	
154	土師器	甕	口縁～頸部	口径 28.2	D-11	I	褐色	にぶい橙褐色	ハケ目	ハケ目、ハラスリ	褐灰色		
155	土師器	甕	口縁部			II	黒褐色	赤褐色	ハケ目	ハラスリ	明褐色	石英、角閃石、砂粒	
156	土師器	甕	口縁部		C-12	II	灰黄褐色	暗灰褐色	ハケ目	ハラスリ	灰黄褐色	石英、角閃石	
157	土師器	甕	口縁部	口径 24.4	C-12	II	にぶい黄橙褐色	にぶい黄橙褐色	ハケ目	ハラスリ	灰黄褐色	石英、角閃石、赤色粒	
158	土師器	甕	口縁～胴部	口径 23.0	D-3	II	褐灰色	にぶい黄橙褐色	ヨコハケ目	ハラスリ	にぶい黄橙褐色	石英、長石	
159	土師器	甕	口縁～頸部	口径 24.0	E-4	Ib	にぶい橙褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	にぶい黄褐色		
160	土師器	甕	口縁～頸部	口径 19.2	F-7	Ia	にぶい赤褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	暗赤褐色		
161	土師器	甕	口縁～頸部	口径 28.0	D-11	I	明褐色	にぶい橙褐色	ハラスリ	ハラスリ	にぶい黄褐色		
162	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	B-5	II	黄橙褐色	黄橙褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄橙褐色	細砂	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
163	土師器	甕	底部	底径 6.2	C-12	II	にぶい黄橙色	灰黄褐色	水挽き、へら切り、へら削り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	文様・その他
164	土師器	甕	底部	底径 6.0	B-5	II	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、へら切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	充実高台
165	土師器	甕	体～底部	底径 6.4	B-3	Ic	淡黄色	淡黄色	へらナデ	水挽き	浅黄色	細粒	充実高台
166	土師器	甕	底部	底径 5.2	E-6	II	淡黄色	淡黄色	水挽き、へら切り	水挽き	淡黄色	細粒	充実高台
167	土師器	甕	底部	底径 7.0	B-5	II	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	へら仕上げ	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	充実高台
168	土師器	甕	底部	底径 6.6	D-11	Ib	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	充実高台
169	土師器	甕	体～底部	底径 5.2	B-3	II	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き、へら切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	充実高台
170	土師器	甕	底部	底径 6.0	B-4	III	灰黄色	浅黄色	へら切り	水挽き	浅黄色	細粒	充実高台
171	土師器	甕	底部	底径 6.0	D-12	IIIa	浅黄褐色	淡黄色	へらナデ	水挽き	淡黄色	細粒	充実高台
172	土師器	甕	底部	底径 7.5	F-7	Ib	浅黄色	浅黄色	水挽き、へら切り	水挽き	灰黄色	細粒	
173	土師器	埴	口縁～高台	口径 13.0	C-12		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
174	黒色土器A	埴	口縁～体部	口径 12.2	C-12		明黄褐色	黒色	研磨	水挽き	明黄褐色	細粒	
175	須恵器	埴鉢	口縁～胴部		E-8	Ib	暗グレー色	灰グレー色	へらナデ	ナデ	灰グレー色		
176	須恵器	壺	口縁～肩部	口径 14.2	D-10	Ia	暗褐色	暗灰黄色	水挽き	水挽き	浅黄色	細粒	
177	須恵器	甕	頸部	頸径 12.4	E-6	Ic	グレー褐色	暗グレー褐色	灰釉、水挽き		浅黄色	荒粒	
178	須恵器	甕	頸部	頸径 15.4	B-4	II	灰色	灰色	灰釉、へらナデ		灰色	荒粒	
179	須恵器	甕	頸部	頸径 21.4	C-4	Ic	グレー黄色	灰色	灰釉		灰グレー色	荒粒	
180	須恵器	甕	頸～肩部		D-5	Ic	灰色	灰色	格子目ナデ	へらナデ	灰色	細粒	
181	須恵器	甕	頸～肩部	頸径 20.5	D-10	Ib	黄灰色	にぶい黄色	調整、格子目ナデ	ナデ	にぶい黄色		
182	須恵器	甕	胴部		D-9	II	黄灰色	黄灰色	格子目ナデ	ナデ	黄灰色	細粒	
183	須恵器	甕	胴部		C-11	II	灰色	灰色	格子目ナデ	へらナデ	にぶい褐色	細粒	
184	須恵器	甕	胴部		D-3	Ic	灰色	灰色	格子目ナデ	へらナデ	灰色	細粒	
185	須恵器	甕	胴部		D-7	Ic	にぶい黄褐色	灰グレー色	格子目ナデ	ナデ	灰黄色	細粒	
186	須恵器	甕	胴部		B-4	IIIa	にぶい褐色	灰グレー色	格子目ナデ	同心円文ナデ	灰色		
187	須恵器	甕	胴部		C-6	Ic	グレー褐色	黄灰色	ナデ	ナデ	灰グレー色	細粒	
188	須恵器	甕	胴部		C-10	II	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナデ	青海波ナデ	にぶい黄褐色	細粒	
189	須恵器	壺	底部	底径 11.2	C-2	Ib	暗グレー褐色	灰釉	灰釉		灰黄色	細粒	
190	須恵器	壺	底部	底径 10.6	E-6	Ic	灰色	灰色	ハナデ	へらナデ	灰色	荒粒	
191	須恵器	壺	底部	底径 8.0	C-11	Ic	灰色	灰色	ハナデ、へらナデ	水挽き	灰色	細粒	
192	須恵器	壺	頸部	頸径 7.0	D-10	Ib	灰色	灰色	水挽き	水挽き	灰白色		
193	須恵器	盤	底部	底径 25.0	D-10	Ib	灰色	灰色	格子目ナデ	へらナデ	灰色		
194	須恵器	甕	口縁～体部	口径 11.0	B-3	II	黄灰色	灰黄色	水挽き	水挽き	灰黄色		
195	須恵器	埴	底部	底径 6.8	C-10	II	灰グレー色	灰グレー色	水挽き	水挽き	灰色	荒粒	
196	須恵器	壺	胴部		B-5	II	灰色	灰黄色	水挽き	ハナデ	灰黄色	荒粒	突帯

第44表 中世・近世出土遺物一覧

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
197	白磁	皿	体～底部	底径	掘立柱1	II	灰白色	灰白色	施釉・露胎	施釉	灰白色	細粒	
198	土師器	碗	口縁～体部	口径	掘立柱1		灰リブ褐色	にぶい黄橙色	水挽き・ナデ	研磨	にぶい黄橙色	細粒	
199	土師器	碗	口縁～体部	口径	掘立柱1		黄褐色	暗褐色	研磨	研磨	浅黄色	細粒	
200	土師器	碗	体部～高台	底径	掘立柱1		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き・研磨	水挽き・研磨	にぶい黄色	細粒	
201	土師器	碗	口縁～体部	口径	掘立柱1		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・ハケ目	水挽き	にぶい褐色	細粒	
202	土師器	坏	口縁～底部	口径	掘立柱1		黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	黄褐色	細粒	
203	土師器	坏	口縁～底部	口径	掘立柱1		褐色	にぶい黄褐色	水挽き・ハケ目・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
204	黒色土器A	碗	体～底部	底径	掘立柱1		褐色	黒色	研磨	研磨	褐色	細粒	
205	赤色土器	碗	口縁～高台	口径	掘立柱1		にぶい黄褐色	明黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
206	黒色土器A	碗	底部	底径	掘立柱1		褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
207	土師器	碗	口縁～高台	口径	掘立柱1		黄褐色	明黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
208	土師器	坏	口縁～底部	口径	掘立柱1		明黄褐色	明黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	明黄褐色	細粒	
209	土師器	坏	口縁～体部	口径	掘立柱1		にぶい褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き・ハケ目	にぶい褐色	細粒	
210	土師器	坏	口縁～底部	口径	掘立柱1		明黄褐色	明黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ハケ目	明黄褐色	細粒	
211	黒色土器A	坏	口縁～体部	口径	掘立柱1		にぶい黄褐色	灰リブ黒色	研磨	研磨	明黄褐色	細粒	
212	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱1		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
213	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱1		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	灰黄色	細粒	
214	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱1		黄褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	明黄褐色	細粒	
215	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱1		褐色	明黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
216	土師器	小皿	底部	底径	掘立柱1		明黄褐色	明黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ハケ目	明黄褐色	細粒	
217	黒色土器A	碗	体部	口径	掘立柱6		明黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰色	細粒	
218	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	掘立柱8		暗褐色	黒色	研磨	研磨	灰色	細粒	
219	土師器	坏	口縁～体部	口径	掘立柱10		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい褐色	細粒	
220	土師器	坏	口縁～体部	口径	掘立柱10		黄褐色	明黄褐色	水挽き	ハケ目	黄褐色	細粒	
221	土師器	坏	底部	底径	掘立柱10		にぶい黄褐色	暗褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
222	青磁	碗	口縁～体部	口径	掘立柱11		灰リブ褐色	灰リブ褐色	施釉・垂釉	施釉	灰色	細粒	
223	土師器	坏	口縁～体部	口径	掘立柱11		淡黄色	淡黄色	水挽き	水挽き	淡黄色	細粒	
224	青磁	碗	口縁～体部	口径	掘立柱13		灰リブ褐色	灰リブ褐色	施釉	施釉	灰色	細粒	
226	白磁Ⅳ類	碗	口縁部	口径	掘立柱16		灰白色	灰白色	施釉・貫入	施釉・貫入	浅黄色	細粒	玉縁
227	白磁	碗	口縁～体部	口径	掘立柱16		灰色	灰色	施釉・釉剥げ	施釉・釉剥げ	灰白色		沈線(内)
228	土師器	坏	口縁～体部	口径	掘立柱16		褐色	明赤褐色	水挽き	水挽き	褐色		
229	黒色土器A	碗	口縁部	口径	掘立柱16		黄灰色	黒色	研磨	研磨	灰色	細粒	
230	黒色土器A	碗	口縁部	口径	掘立柱16		にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
231	黒色土器A	碗	口縁部	口径	掘立柱16		黒色	にぶい黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色		
232	黒色土器A	碗	体部～高台	底径	掘立柱16		にぶい黄褐色	黒色	研磨・糸切り	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
233	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱16		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ハケ目	浅黄褐色		
234	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱16		灰白色	灰黄色	水挽き・糸切り	水挽き・ハケ目	灰色		
235	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱16		褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ハケ目	褐色		
236	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱16		褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ハケ目	浅黄褐色		
237	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱16		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色		
238	土師器	小皿	口縁～底部	口径	掘立柱16		褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色		
239	黒色土器B	小皿	口縁～体部	口径	掘立柱16		黒褐色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色		
241	土師器	坏	体部		掘立柱17		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き	水挽き・ハケ目	にぶい褐色		
242	土師器	小皿	底部	底径	掘立柱17		褐色	褐色	水挽き	水挽き	褐色		
243	土師器	坏	体～底部	底径	掘立柱18		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色		
244	黒色土器A	碗	口縁部	口径	掘立柱19		黒色、灰黄色	黒色	研磨	研磨	黒色		
245	土師器	坏	底部	底径	掘立柱19		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色		
247	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径	掘立柱21		黒褐色	黒褐色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
248	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 18.0	掘立柱21		にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	褐色	細粒	
249	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.4	掘立柱21		にぶい黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄色		
250	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	掘立柱21		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	ハケ目	浅黄褐色		
251	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.4	掘立柱21		黄褐色	黄褐色	水挽き	水挽き	黄褐色	細粒	
252	白磁	碗	口縁部	口径 18.2	掘立柱22		灰リ-ブ色	灰リ-ブ色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		端反り
253	土師器	坏	体～底部	口径 10.0	掘立柱22		褐色	にぶい褐色	水挽き	水挽き	にぶい褐色	細粒	
254	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	掘立柱22		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄褐色	細粒	
255	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.6	掘立柱22		浅黄色	黒色	研磨、ハケ目	ハケ目	灰色	細粒	
256	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	掘立柱22		にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
257	土師器	坏	体～底部	口径 9.0	掘立柱24		褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
258	白磁	皿	口縁～底部	口径 11.0	掘立柱25		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
259	土師器	碗	口縁～体部	口径 16.0	掘立柱25		褐色	明黄褐色	水挽き	水挽き	褐色		
261	白磁	碗	体部		掘立柱30		灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
262	土師器	坏	口縁～底部	口径 13.0	掘立柱31		褐色	褐色	水挽き、ナデ	水挽き、ナデ	にぶい褐色		
263	白磁	碗	口縁～体部	口径 17.4	方形竪穴1		明リ-ブ色	明リ-ブ色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
264	白磁	碗	口縁～体部	口径 16.4	方形竪穴1		灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
265	青磁	碗	口縁部	口径 18.4	方形竪穴1		オリ-ブ黄色	オリ-ブ黄色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
266	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.0	方形竪穴1		にぶい黄色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	褐灰色		
267	土師器	碗	口縁～体部	口径 17.0	方形竪穴1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	研磨	研磨	浅黄褐色	細粒	
268	土師器	碗	口縁～体部	口径 15.0	方形竪穴1		にぶい黄褐色	黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
269	黒色土器A	碗	口縁部	口径 14.0	方形竪穴1		黒褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
270	黒色土器A	碗	口縁部	口径 18.8	方形竪穴1		灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	褐灰色		
271	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.6	方形竪穴1		にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	黄灰色		
272	土師器	坏	底部	底径 8.6	方形竪穴1		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
273	土師器	坏	底部	底径 10.0	方形竪穴1		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
274	土師器	坏	体～底部	底径 10.2	方形竪穴1		灰黄褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り、剥跡	水挽き	褐灰色		
275	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.4	方形竪穴1		灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
276	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.0	方形竪穴1		褐色	にぶい褐色	水挽き	水挽き			
277	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	方形竪穴1		褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
278	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	方形竪穴1		褐色	にぶい褐色	水挽き	水挽き	灰褐色		
279	土師器	小皿	底部	底径 6.8	方形竪穴1		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
280	土師器	小皿	底部	底径 6.6	方形竪穴1		褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	褐色		
281	白磁	碗	口縁～体部	口径 15.8	方形竪穴2		灰色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰色		玉縁
282	白磁	碗	口縁～体部	口径 16.2	方形竪穴2		灰色	灰色	施釉	施釉	灰色		端反り
283	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 15.0	方形竪穴2		浅黄褐色、黒色	黒色	研磨	研磨	黒色		
284	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.0	方形竪穴2		浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
285	黒色土器A	碗	口縁部	口径 16.0	方形竪穴2		浅黄褐色、黒色	黒色	研磨	研磨	黒色		
286	黒色土器A	碗	底部	底径 6.8	方形竪穴2		浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黒色		
287	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	方形竪穴2		浅黄色	黒色	水挽き、ハケ目	研磨	灰黄褐色	細粒	
288	土師器	坏	体～底部	口径 6.0	方形竪穴2		にぶい黄褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄褐色		
289	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.6	方形竪穴2		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい褐色		
290	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	方形竪穴2		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい褐色		
291	土師器	小皿	底部	底径 4.4	方形竪穴2		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	褐色		
292		石鍋	胴部		方形竪穴2		黒色	黒色	好ナマリ	研磨	褐灰色	滑石	
293	青白磁	合子	蓋	下部	方形竪穴3		灰白色	灰白色	施釉	施釉、露胎	明緑色		
294	黒色土器A	碗	底部	底径 6.2	方形竪穴3		にぶい黄褐色	黒色	水挽き、糸切り	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
295	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	方形竪穴3		にぶい黄褐色	黒色	水挽き、糸切り	研磨	黒褐色		
296	土師器	坏	口縁～底部	口径 12.6	方形竪穴3		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい褐色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
297	土師器	坏	口縁～体部	口徑	13.4	方形竪穴3	浅黄色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	胎土特徴	文様・その他
298	土師器	坏	口縁～体部	口徑	11.6	方形竪穴3	灰黄色	灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	細粒	
299	土師器	坏	底部	底徑	4.6	方形竪穴3	灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き	ハケ目	灰黄褐色	細粒	
300	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	6.8	方形竪穴3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄橙色	細粒	
301	黒色土器A	碗	口縁部	口徑	12.0	方形竪穴3	黒褐色	黒色	研磨	研磨	オリーフ褐色	細粒	
302	白磁	碗	口縁～体部	口徑	16.0	方形竪穴4	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	明オリーフ灰色		玉縁
303	白磁	碗	口縁～体部	口徑	17.2	方形竪穴4	灰オリーフ色	灰オリーフ色	施釉	施釉	灰色		玉縁
304	白磁	碗	口縁～体部	口徑	15.0	方形竪穴4	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色	端反り	
305	白磁	碗	口縁～体部	口徑	18.0	方形竪穴4	明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	淡黄色	端反り	
306	青磁	碗	口縁～体部	口徑	14.0	方形竪穴4	灰オリーフ色	灰オリーフ色	施釉	施釉	灰白色		
307	白磁	碗	体部～高台	底徑	6.0	方形竪穴4	灰黄色	灰黄色	露胎	施釉	灰黄色		
308	白磁	碗	蓋	径	3.4	方形竪穴4	灰白色	灰白色	施釉、露胎	露胎	灰白色		
309	赤色土器	碗	口縁部	口徑	12.0	方形竪穴4	橙色	赤色	研磨	研磨	浅黄橙色		
310	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	14.2	方形竪穴4	にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	黄灰色		
311	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	17.4	方形竪穴4	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	褐灰色		
312	黒色土器A	碗	体部～高台	底徑	6.4	方形竪穴4	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、ハケ目	研磨	にぶい黄褐色		
313	土師器	小皿	体部～底部	底徑	4.5	方形竪穴4	明赤褐色	明赤褐色	水挽き	水挽き	にぶい赤褐色		
314	土師器	小皿	底部			方形竪穴4	灰オリーフ色	浅黄色	ハケ目	水挽き	浅黄色		
315	土師器	坏	口縁～底部	口徑	13.4	方形竪穴4	橙色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
316	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	9.4	方形竪穴4	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
317	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.4	方形竪穴4	浅黄褐色	にぶい黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄色	細粒	
318	土師器	小皿	底部	底徑	6.0	方形竪穴4	にぶい黄褐色	橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄褐色	細粒	
319	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.8	方形竪穴4	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄褐色		
320	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.1	方形竪穴4	にぶい橙褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	浅黄褐色		
321	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	11.4	方形竪穴4	橙褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
322	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	9.2	方形竪穴4	にぶい橙褐色	にぶい黄色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄褐色		
323	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	9.0	方形竪穴4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
324	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	7.6	方形竪穴4	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	橙褐色		
325	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.4	方形竪穴4	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	橙褐色		
326	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	9.4	方形竪穴4	橙褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄色	細粒	
327	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	9.0	方形竪穴4	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	黄褐色		
328	白磁	碗	口縁部	口徑	16.0	方形竪穴5	オリーフ灰色	オリーフ灰色	施釉	施釉、露胎	灰色		口剥げ
329	青磁	碗	口縁～体部	口徑	17.0	方形竪穴5	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	施釉、貫入	施釉、貫入	にぶい黄色		鑄蓮弁文
330	青白磁	合子	蓋	径	4.0	方形竪穴5	明緑灰色	明緑灰色	施釉	露胎	灰白色		
331	土師器	坏	口縁～体部	口徑	14.0	方形竪穴5	にぶい褐色	明褐色	水挽き、ハケ目	水挽き、ハケ目	にぶい褐色		
332	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	17.6	方形竪穴5	黒色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黄褐色		
333	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	15.0	方形竪穴5	灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
334	黒色土器A	碗	底部	底徑	7.0	方形竪穴5	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	褐灰色		線刻
335	黒色土器A	碗	底部	底徑	7.4	方形竪穴5	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	褐灰色		
336	黒色土器A	碗	体部～高台	底徑	6.0	方形竪穴5	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄褐色		
337	土師器	坏	口縁～体部	口徑	15.6	方形竪穴5	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色		
338	土師器	坏	底部	底徑	11.4	方形竪穴5	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	黄褐色		
339	土師器	坏	底部	底徑	9.4	方形竪穴5	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄色		
340	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	9.0	方形竪穴5	明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	明黄褐色		
341	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.3	方形竪穴5	灰黄色	灰黄色	水挽き	水挽き	灰黄色		
342	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.8	方形竪穴5	にぶい黄色	にぶい黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄色		
343	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	10.6	方形竪穴5	橙褐色	橙褐色	水挽き、ハケ目、糸切り	水挽き	にぶい黄色		
344	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	7.0	方形竪穴5	浅黄色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄褐色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
345	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.0	方形罍穴5	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい橙褐色		
348	白磁	碗	口縁部	口徑	18.6	C-6	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
349	白磁	碗	口縁～体部	口徑	18.6	C-6	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		端反り
350	土師器	坏	完形	口徑	15.9	C-6	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハク目	橙褐色	細粒	
351	土師器	坏	口縁～体部	口徑	13.8	C-6	橙褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	橙褐色		
352	土師器	小皿	完形	口徑	9.2	C-6	橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	橙褐色	細粒	
353	土師器	小皿	完形	口徑	9.1	C-6	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	橙褐色	細粒	
354	土師器	小皿	完形	口徑	9.2	C-6	にぶい黄褐色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ハク目	浅黄色	細粒	
355	土師器	小皿	完形	口徑	8.8	C-6	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ヘラテ	橙褐色	細粒	
356	土師器	小皿	完形	口徑	7.2	C-6	浅黄色	浅黄色	水挽き、糸切り	水挽き、ハク目	にぶい黄褐色	細粒	
357	土師器	小皿	完形	口徑	8.5	C-6	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハク目	橙褐色	細粒	
358	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	10.0	C-6	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハク目	橙褐色		
359	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	7.6	C-6	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	橙褐色		
360	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.4	C-6	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明褐色		
361	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.6	C-6	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	橙褐色		
362	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	9.0	C-6	橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハク目	橙褐色		
363	黒色土器B	小皿	底部	底徑	7.0	C-6	黒色	黒色	水挽き、研磨、糸切り	水挽き、研磨	黒色		
365	白磁	碗	完形	口徑	17.0	C-5	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
366	白磁	碗	完形	口徑	16.0	C-9	灰白色、浅黄色	浅黄色	施釉、垂釉、露胎	施釉、垂釉	灰黄色		
367	白磁	碗	完形	口徑	17.2	C-7	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		
368	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	16.0	C-11	浅黄色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	浅黄色		
369	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	17.0	C-11	黒色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、ハク目、研磨	にぶい黄褐色		
370	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	11.0	C-11	にぶい褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	灰黄色		
371	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	14.0	C-11	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
372	土師器	坏	口縁～体部	口徑	13.8	C-11	橙褐色	橙褐色	水挽き	水挽き	橙褐色		
373	土師器	坏	底部	底徑	5.7	C-11	にぶい黄褐色		水挽き	水挽き	灰黄色		
374	青磁	碗	口縁～体部	口徑	14.4	E-4	灰リノフ色	灰リノフ色	施釉	施釉	灰色	細粒	
375	土師器	小皿	口縁～体部	口徑	8.6	E-4	明黄褐色	明黄褐色	水挽き	水挽き、ハク目	にぶい黄褐色		
376	黒色土器B	碗	口縁部	口徑	9.2	C-12	黒色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
377	土師器	坏	底部	底徑	6.4	D-5	灰黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、ヘラ切り	水挽き	にぶい黄褐色		
378	土師器	坏	口縁部				灰褐色	灰褐色	水挽き	水挽き	にぶい褐色		
379	成川式土器	壺	胴部				黒褐色	赤褐色	ヘラ切り	好コハク目	褐色		
380	土師器	坏	口縁～底部	口徑	14.4	C-12	橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き	橙褐色	細粒	
381	黒色土器B	坏	底部	底徑	7.6	C-12	黒褐色	黒褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
382	黒色土器A	坏	口縁～底部	口徑	18.6	C-12	淡黄色	黒色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
383	土師器	坏	口縁～体部	口徑	15.6	C-12	灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き	水挽き	橙褐色		
384	土師器	坏	口縁～体部	口徑	13.2	C-12	にぶい橙褐色	にぶい橙褐色	水挽き	水挽き	にぶい褐色		
385	土師器	小皿	口縁～底部	口徑	8.0	C-12	にぶい橙褐色	橙褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハク目	橙褐色		
386	土師器	小皿	底部	底徑	7.0	C-12	にぶい橙褐色	橙褐色	糸切り	水挽き、ハク目	にぶい黄褐色		
395	白磁V類	碗	体部～高台	底徑	7.5	C-4-5	淡黄色	淡黄色	施釉、貫入	施釉、貫入	淡黄色		
396	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	14.7	C-4-5	にぶい黄褐色	黒褐色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	灰褐色		
397	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	14.3	C-4-5	黒褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	灰黄褐色		
398	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	15.2	C-4-5	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
399	黒色土器A	碗	口縁～体部	口徑	13.4	C-4-5	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	黒褐色		
400	黒色土器A	碗	体部～高台	底徑	6.6	C-4-5	灰黄褐色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	にぶい褐色		
401	黒色土器A	碗	体部～高台	底徑	7.2	C-4-5	浅黄色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	暗灰黄色		
402	土師器	坏	口縁～体部	口徑	16.0	C-4-5	橙褐色	橙褐色	水挽き	水挽き	橙褐色		
403	土師器	坏	口縁～体部	口徑	12.0	C-4-5	灰黄色	灰黄色	水挽き	ハク目	灰黄色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
404	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	F-5	II	明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	明黄褐色		
405	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-4-5		にぶい橙色	橙色	水挽き、ハケ目、糸切り	水挽き、ハケ目	浅黄褐色		
406	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	C-4-5		橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		
407	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	C-4-5		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄褐色		
408	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-4-5		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
409	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-7		灰リ-7 灰色	灰リ-7 灰色	施釉	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
410	黒色土器A	碗	口縁部	口径 12.0	D-6		浅黄褐色	黒色	研磨	研磨	淡黄色		
411	土師器	坏	口縁～体部	口径 12.0	D-6		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色		
412	土師器	坏	口縁部	口径 15.0	D-7	II	にぶい橙色	にぶい黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色		
413	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.0	D-6		明黄褐色	明黄褐色	水挽き	水挽き	明黄褐色		
414	土師器	坏	底部	底径 4.0	D-6		明黄褐色	明黄褐色	水挽き、ハケ目、糸切り	水挽き、ハケ目	浅黄褐色		
415	土師器	坏	体～底部	底径 6.0	D-6		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
416	黒色土器A	碗	口縁部	口径 19.0	D-7	II	灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
417	黒色土器B	碗	口縁部	口径 17.0	D-7	II	黒色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		
418	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.4	D-7	II	灰黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰褐色		
419	土師器	坏	底部	底径 7.0	D-7	II	橙色	にぶい橙色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい橙色		
420	土師器	坏	底部	底径 7.0	D-7	II	黄褐色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色		
421	土師器	坏	底部	底径 8.6	D-7	II	にぶい褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
422	土師器	小皿	口縁～底部	口径 11.0	D-7	II	褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	褐色		
423	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-7	II	褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	褐色		
424	白磁	皿	口縁～体部	口径 11.0	D-8		灰色	灰色	施釉	施釉	灰白色		端反り
425	土師器	甕	口縁部		D-9	I b	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ目	ハケ目	にぶい黄褐色		
426	土師器	碗	体部～高台	底径 7.2	D-8		明赤褐色	明赤褐色	水挽き、研磨	研磨	にぶい褐色		
427	黒色土器A	碗	底部	底径 7.7	D-8		にぶい黄褐色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	にぶい黄褐色		
428	黒色土器A	碗	底部	底径 5.4	C-D-9		にぶい黄色	黒色	水挽き、研磨	水挽き、研磨	暗灰黄色		
429	土師器	坏	底部	底径 7.0	D-8		褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	明黄褐色		
430	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	D-8		褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
431	白磁	碗	口縁部	口径 12.0	C-13、溝1	I	明灰リ-7 灰色	明灰リ-7 灰色	施釉	施釉、露胎	灰白色		端反り、口剥げ
432	青磁Ⅰ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	D-12、溝1	II	緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色		花文
433	土師器	碗	体～底部	底径 5.0	C-13、溝1	I	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	黒褐色		充実高台
434	黒色土器A	碗	底部	底径 7.3	C-13、溝1	I	浅黄色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	灰黄色		
435	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.3	D-12、溝1	II	にぶい黄色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	灰黄色		
436	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	C-13、溝1	I	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	水挽き、研磨	にぶい黄褐色		
437	土師器	坏	体～底部	底径 10.0	C-13、溝1		浅黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄褐色		
438	土師器	小皿	底部	底径 7.2	D-12、溝1		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄褐色		
439	黒色土器B	小皿	口縁部	口径 9.0	C-13、溝1		黒色	黒色	研磨	研磨	褐色		
440	青磁	碗	体部		溝2		灰リ-7 色	灰リ-7 色	施釉	施釉	灰リ-7 色		鎗蓮弁文
441	須恵器	甕	胴部		溝2		灰色	黄褐色	ハケ目	ハケ目	灰色		
442	土師器	坏	口縁～体部	口径 16.0	溝2		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色		
443	黒色土器A	碗	底部	底径 6.6	D-11、溝2		にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色		
444	土師器	小皿	底部	底径 5.6	D-11、溝2	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	糸切り	水挽き、ハケ目	灰黄褐色		
445	白磁	碗	口縁～体部	口径 15.0	溝3	II	灰リ-7 灰色	灰リ-7 灰色	施釉	施釉	灰白色		
446	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.2	溝3	II	褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい黄褐色		
447	青磁	碗	体部		溝4		灰リ-7 色	灰リ-7 色	施釉	施釉	灰白色		鎗蓮弁文
448	中国陶器	壺	胴～底部	底径 8.6	溝4		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	鉄釉、露胎	施釉	褐色		
449	土師器	坏	口縁～体部	口径 14.0	溝4		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色		
450	土師器	坏	体～底部	底径 8.0	D-6、溝4	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色		
451	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	C-6、溝4		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
452	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 10.8	溝4		黒色	黒色	研磨、糸切り	研磨	黒色		
453	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6、溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水洗き、糸切り	水洗き	にぶい橙色		
454	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	D-6、溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水洗き、糸切り	水洗き、ハケ目	にぶい橙色		
455	土師器	小皿	底部	底径 6.0	溝4		にぶい橙色	にぶい橙色	水洗き、糸切り	水洗き	にぶい橙色		
456	白磁	碗	体部～高台	底径 7.6	C-D-7・8、溝5		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
457	青磁	碗	口縁～体部	口径 14.0	B-3、溝6	Ib	グレー灰色	グレー灰色	施釉	施釉	灰白色		
458	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-D-7・8、溝5		黒色	黒色	ハシカキ	ハシカキ	暗灰黄色		
459	土師器	皿	口縁部	口径 18.0	B-4、溝6	Ib	浅黄色	浅黄色	水洗き	水洗き	にぶい黄橙色		
460	土師器	坏	底部	底径 6.0	B-3・4、溝6		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水洗き、糸切り	水洗き	にぶい黄橙色		
461	白磁Ⅳ類	碗	口縁～高台	口径 15.2	C-12		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
462	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.8	C-12		灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
463	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-12		灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
464	土師器	碗	口縁～体部	口径 16.2	C-12		にぶい黄橙色	明黄褐色	水洗き、研磨	研磨	淡黄色		
465	黒色土器A	碗	口縁～高台	口径 16.8	C-12		黒褐色	黒色	研磨	研磨	黒褐色		線刻
466	土師器	坏	底部	底径 8.8	C-12		にぶい黄橙色	灰白色	研磨	研磨	灰白色		
467	土師器	坏	底部	底径 9.6	C-12		褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き、ハケ目	褐色		
468	土師器	小皿	口縁	口径 8.4	C-12		褐色	褐色	水洗き、糸切り	水洗き、ハケ目	褐色		
469	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	C-12		褐色	にぶい橙色	水洗き、糸切り	水洗き	にぶい橙色		
470	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-12		黒褐色	黒褐色	水洗き	水洗き	灰黄褐色		
471	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-6		灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉、貫入	浅黄色		玉縁
472	白磁Ⅳ類	碗	口縁部	口径 15.4	D-7		灰グレー色	灰グレー色	施釉	施釉、垂釉	灰グレー色		玉縁
473	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 5.8	C-12		灰白色	灰黄色	露胎	施釉	灰白色		
474	白磁Ⅳ類	碗	口縁部	口径 17.0	C-7		灰白色	灰白色	施釉	施釉	浅黄色		玉縁
475	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.2	F-5		灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
476	白磁Ⅳ類	碗	底部	底径 8.8	E-4		灰白色	淡黄色	水洗き、施釉	施釉、貫入	灰白色		
477	青磁	碗	口縁部	口径 18.0	C-4・5		灰グレー色	灰グレー色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
478	青磁	盤	底部	底径 10.4	D-4		灰グレー色	灰グレー色	施釉	施釉	灰色		
479	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.4	C-4		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉剥ぎ	灰白色		
480	白磁	碗	底部	底径 6.8	C-12		灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
481	中国陶器	四耳壺	胴部		C-8		黒褐色	暗褐色	水洗き、褐釉	水洗き、褐釉	灰黄褐色		
482	土師器	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-12		にぶい橙色	にぶい褐色	研磨	研磨	黄灰色		
483	土師器	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-12		褐色	にぶい黄橙色	水洗き、研磨	ナリ・研磨	褐色		
484	土師器	碗	体部～高台	底径 6.4	E-F-6		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	水洗き、研磨	研磨	にぶい黄橙色		
485	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-6		暗灰黄色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄色		
486	黒色土器A	碗	口縁～高台	口径 16.6	D-6・7		にぶい黄色	黒色	研磨	研磨	灰色		線刻
487	黒色土器A	碗	底部	底径 7.6	D-4		にぶい黄橙色	黒色	水洗き、研磨	研磨	浅黄褐色		墨書
488	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	E-7		灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄色		
489	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.0	C-3		にぶい黄橙色	黒色	研磨、ハシカキ	ハシカキ	灰色		
490	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.6	E-F-6		にぶい褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい褐色		
491	黒色土器A	碗	口縁～高台	口径 16.0	C-6		にぶい黄橙色	黒色	研磨	研磨	淡黄色		
492	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	C-6		にぶい黄褐色	黒色	水洗き	研磨	浅黄褐色		
493	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.8	C-8		にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色		線刻
494	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.0	D-7		明黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい橙色、黒色		
495	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.2	C-7		にぶい黄褐色	黒色	水洗き、研磨	研磨	褐色		
496	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	E-4		明黄褐色	黒色	水洗き	研磨	にぶい黄褐色		
497	黒色土器A	碗	底部	底径 6.6	F-5		浅黄褐色	黒色	水洗き、研磨	水洗き、研磨	にぶい黄褐色		
498	黒色土器A	碗	底部	底径 7.2	D-7		にぶい黄褐色	黒色	水洗き	研磨	にぶい黄褐色		
499	黒色土器A	碗	底部	底径 6.4	C-11		浅黄色	黒色	水洗き	研磨	灰色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
500	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.0	C-5		暗灰黄色	暗灰黄色	水挽き、ヘラ切り	水挽き、ハケ目	灰黄色	細粒	
501	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.4	D-7		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
502	土師器	坏	口縁～底部	口径 17.4	C-4		褐色	褐色、黒色	水挽き	水挽き、ハケ目	黄褐色	細粒	
503	土師器	坏	底部	底径 8.4	C-4		にぶい褐色	暗褐色	水挽き	水挽き、ハケ目	にぶい黄褐色	細粒	
504	土師器	坏	底部	底径 10.0	D-6		にぶい褐色	灰黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	褐色		
505	土師器	坏	底部	底径 10.0	C-4・5		にぶい黄色	にぶい黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄色	細粒	
506	土師器	坏	底部	底径 10.0	E-3		黄褐色	黄褐色	ヘラカキ	ヘラカキ	黄褐色	細粒	
507	土師器	坏	底部	底径 8.2	F-6		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	明褐色	細粒(赤色粘有り)	
508	土師器	坏	体～底部	底径 7.8	D-6・7		黄褐色	にぶい黄色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
509	土師器	小皿	口縁～底部	口径 12.8	E-3		浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色	細粒	
510	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.6	D-6		にぶい黄褐色	にぶい褐色	水挽き、ヘラデ	水挽き、ハケ目	にぶい黄褐色	細粒	
511	土師器	小皿	完形	口径 9.0	F-4		褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	褐色	細粒	
512	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-8		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色		
513	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-6		にぶい黄色	暗灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄色	細粒	
514	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-6		にぶい褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
515	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.5	C-6		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
516	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	C-12		褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	褐色		
517	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-5		褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
518	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-5		明黄褐色	明黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい褐色	細粒	
519	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	E-F-6		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
520	土師器	小皿	底部	底径 6.0	C-6		明黄褐色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き、ハケ目	にぶい褐色		
521	黒色土器A	皿	口縁部	口径 13.4	F-5		黒色	黒色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	
522	須恵器	埴鉢	口縁部	口径 24.6	C-5		灰白色	灰白色	水挽き	水挽き、ハケ目	灰白色		東播磨系
525		平瓦			F-6		にぶい褐色	褐色	縄目	布目	褐色		
526	白磁Ⅲ類	碗	口縁～体部	口径 12.4	D-10	I b	淡黄色	淡黄色	施釉(一部剥離)	施釉(一部剥離)	黄褐色		玉緑
527	白磁Ⅲ類	皿	口縁	口径 17.6	D-5	I b	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉緑
528	白磁Ⅲ類	皿	口縁部	口径 16.0	D-5	I b	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉緑
529	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.6	C-6	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉緑
530	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 13.8	F-5	II	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉緑
531	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.0	C-8	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉緑
532	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.4	B-5	II	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉、垂釉	灰白色		玉緑
533	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.6	D-7	II	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉緑
534	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.6	B-5	III	灰白色	灰白色	施釉、露胎、垂釉	施釉	灰白色		玉緑
535	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	D-10	II	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉緑
536	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.4	F-4	II	淡黄色	淡黄色	施釉、露胎	施釉	淡黄色		玉緑
537	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	C-11	II	灰白色	灰白色	口調整、施釉	施釉	灰白色		玉緑
538	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	E-4	II	灰黄色	灰黄色	厚施釉、露胎、垂釉	施釉	灰黄色		玉緑
539	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	C-6	II	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉緑
540	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-7	I c	灰白色	灰白色	施釉、露胎、垂釉	施釉	灰白色		玉緑
541	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	C-7	I c	灰色	灰色	施釉	施釉	灰色		玉緑
542	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-7	II	浅黄色	浅黄色	厚施釉	施釉	浅黄色		玉緑
543	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-7	II	淡黄色	淡黄色	施釉、垂釉	施釉、垂釉	淡黄色		玉緑
544	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.0	E-5	II	灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		玉緑
545	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	F-5	II	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉緑
546	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	F-4	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉緑
547	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.2	C-6	II	灰白色	灰白色	口調整、施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉緑
548	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.6	D-6	II	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰色		玉緑
549	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-8	II	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉緑

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
550	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.2	E-7	Ⅱ	灰色	灰色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰色		文様・その他
551	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.4	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
552	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 13.0	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
553	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	E-6	I c	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
554	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.0	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
555	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 20.8	D-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
556	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.2	E-7	I c	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
557	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 22.0	C-9	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
558	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.8	C-6	I c	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
559	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	C-5	I c	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
560	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.2	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
561	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.8	F-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
562	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.6			灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
563	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 19.4	C-11	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
564	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	E-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
565	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	F-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		玉縁
566	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.2	E-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
567	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 14.6	F-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉、露胎	灰白色		玉縁
568	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.8	C-6	I c	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		玉縁
569	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
570	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 16.2	B-3	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		玉縁
571	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	D-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
572	白磁Ⅳ類	碗	口縁～体部	口径 15.0	B-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、垂釉	灰白色		玉縁
573	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.8	D-11	I	灰白色	灰白色	露胎、ハタ目跡	施釉、見込みに段差有	灰白色		
574	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.8	E-4	I b	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、見込みに段差有	灰白色		
575	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.6	D-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、高台、露胎	施釉	灰白色		
576	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.0	D-8	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	施釉、高台、施釉	露胎	浅黄色		
577	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.8	E-4	I c	灰白色	灰白色	施釉、高台、施釉、露胎	施釉	灰白色		
578	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.2	E-4	Ⅱ	灰白～7色	灰白～7色	施釉、高台、施釉	施釉	灰白～7色		
579	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.2	D-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、高台、露胎	施釉	灰白色		
580	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 8.2	C-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、高台、露胎	施釉	灰白色		
581	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 8.0	D-6	Ⅱ	灰白色	明利～7色	施釉、高台、露胎	施釉	灰白色		
582	白磁Ⅳ類	碗	底部	底径 6.0	D-3	I c	灰白～7色	灰白～7色	施釉、露胎	施釉	灰白～7色		
583	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 6.8	C-5	I b	灰白色	灰白色	露胎	施釉、見込みに段差有	灰色		
584	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.6	D-11	I b	灰色	灰色	施釉、露胎	施釉、見込みに段差有	灰白色		
585	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.8	C-10	Ⅱ	灰白～7色	灰白～7色	施釉、高台、施釉、露胎	施釉	灰白～7色		
586	白磁Ⅳ類	碗	体部～高台	底径 7.0	C-7	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	施釉、高台、露胎	施釉	浅黄色		
587	白磁Ⅳ類	小皿	口縁～底部	口径 10.0	C-6	I c	浅黄色	浅黄色	施釉、垂釉、糸切り	施釉	浅黄色		
588	白磁Ⅳ類	皿	口縁～体部	口径 14.0			明利～7色	灰白～7色	口縁調整、施釉	施釉	灰白～7色		
589	白磁Ⅳ類	小皿	体部～底部	底径 3.8	B-5	I b	明利～7色	明利～7色	口縁調整、施釉、露胎	施釉	灰白色		
590	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 18.4	D-4	I c	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り、櫛書文
591	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 17.0	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	口縁調整、露胎	施釉	灰白色		端反り
592	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 19.0	D-5	I c	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
593	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 16.0	E-7	I a	灰白～7色	灰白～7色	施釉	施釉	灰色		端反り
594	白磁Ⅴ類	碗	口縁～体部	口径 11.6	E-7	I c	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
595	白磁Ⅴ類	碗	口縁部	口径 19.0	D-6	I a	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		端反り
596	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 6.6	D-4	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		端反り、櫛書文
597	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 6.2	B-3	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	施釉、露胎	施釉	浅黄色		端反り

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
598	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 5.8	C-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		文様・その他
599	白磁Ⅴ類	碗	底部	底径 6.0	B-4	Ⅱ	灰白色	灰色	口調整、露胎	施釉	灰色		端反り
600	白磁Ⅴ類	皿	口縁～体部	口径 15.0	B-5	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		端反り
601	白磁Ⅴ類	皿	口縁～体部	口径 7.0	F-7	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰色		端反り
602	白磁Ⅴ類	皿	口縁～体部	口径 14.8	D-7	Ⅱ	灰色	灰色	施釉、露胎	施釉、見込み口段差有	灰色		端反り、花文
603	白磁Ⅵ類	碗	体～底部	底径 7.8	B-3	Ⅱ	灰色	灰白色	施釉	施釉	灰色		端反り、花文
604	白磁Ⅵ類	小皿	底部	底径 5.4	D-2	Ic	灰色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰色		端反り、花文
605	白磁Ⅵ類	小皿	底部	底径 3.8	E-7	Ic	黄灰色	灰色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
606	白磁Ⅵ類	小皿	底部	底径 3.8	D-3	Ic	浅黄色	灰色	露胎	施釉	灰色		
607	白磁Ⅵ類	碗	体部～高台	底径 6.6	C-4	Ib	灰白色	浅黄色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰黄色		
608	白磁Ⅵ類	碗	体部～高台	底径 6.6	F-4	Ib	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
609	白磁Ⅵ類	碗	体部～高台	底径 6.6			灰白色	灰白色	口調整、施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
610	白磁Ⅵ類	碗	体部～高台	底径 6.4	D-2	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
611	白磁Ⅵ類	碗	体～底部	底径 4.8		表	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰色		蛇目剥釉
612	白磁Ⅵ類	皿	口縁～高台	口径 10.8	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		重ね焼跡有り
613	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 11.0	C-4	Ic	灰白色	灰白色	施釉、垂釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
614	白磁Ⅵ類	皿	口縁～高台	口径 10.0	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
615	白磁Ⅵ類	皿	口縁～高台	口径 9.8	B-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
616	白磁Ⅵ類	皿	口縁～高台	口径 10.8	C-4	Ⅲ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
617	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 9.5	D-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、釉掻き見込み	灰白色		
618	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 13.4	D-6	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰色		
619	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 12.6	F-5	Ⅱ	浅黄色	浅黄色	施釉	施釉	灰色		
620	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 14.6	B-10	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰色		
621	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 16.4	D-11	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
622	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 14.0	F-4	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰色		口剥げ
623	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 10.6	C-11	Ⅱ	灰白色	灰白色	口調整、施釉	施釉	灰白色		口剥げ
624	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 14.0	B-3	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉、露胎	灰白色		口剥げ
625	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 18.0	C-12	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		口剥げ
626	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 11.2	C-5	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
627	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 12.2	F-7	Ia	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
628	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 12.8	C-7	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		口剥げ
629	白磁Ⅵ類	皿	口縁～体部	口径 11.0	D-5	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰色		口剥げ
630	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 6.4	C-9	Ib	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
631	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 6.0	B-5	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
632	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 5.8	E-7	Ib	灰色	灰色	施釉	施釉	灰色		
633	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 5.6	D-8	Ⅱ	灰白色	灰白色	施釉	施釉	淡黄色		
634	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 4.2	D-10	I	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
635	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 6.0	3T	表	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
636	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 6.6	C-10	Ⅱ	灰白色	灰白色	厚施釉、釉掻き有り	施釉	灰白色		
637	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 6.2	E-5	Ib	灰白色	浅黄色	施釉	施釉	淡黄色		
638	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 6.0	C-11	Ⅱ	灰白色	灰白色	厚施釉	施釉	灰色		
639	白磁Ⅵ類	皿	底部	底径 4.6	D-5	Ib	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
640	白磁Ⅵ類	碗	体部～高台	口径 6.4	D-7	Ib	灰白色	灰白色	口調整、露胎	施釉	灰色		草花文
641	白磁Ⅵ類	碗	口縁～体部	口径 18.0	C-5	Ic	灰色	灰色	施釉	施釉	淡黄色		
642	白磁Ⅵ類	八角小碗	口縁～高台	口径 7.4	C-9	Ic	黄白色	黄白色	施釉、露胎	施釉	黄白色		
643	白磁Ⅵ類	八角小碗	口縁～体部	口径 9.3			灰白色	灰白色	施釉	施釉	淡黄色		
644	白磁Ⅵ類	八角小碗	体部～高台	底径 4.0	D-2	Ⅱ	灰白色	灰白色	口調整、施釉、露胎	施釉、目跡	淡黄色		
645	白磁Ⅵ類	小皿	口縁～高台	口径 9.0	D-7	.0 Ib	灰白色	灰白色	施釉、貫入、露胎	施釉、目跡	淡黄色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
646	白磁D類	小皿	底部	底径 5.0	E-4	Ib	灰白色	淡黄色	施釉、露胎	施釉、目跡	淡黄色		
647	白磁D類	小皿	底部	底径 4.0	F-5	Ib	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	淡黄色		
648	白磁D類	小皿	底部	底径 3.0	C-5	Ib	灰白色	灰白色	施釉、貫入	施釉	灰白色		
649	白磁D類	小皿	底部	底径 3.0	C-6	Ib	灰白色	灰白色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色		基旬底
650	白磁E類	皿	口縁～高台	口径 10.0	D-3	Ia	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
651	白磁E類	皿	口縁～高台	口径 12.0	F-4	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
652	白磁E類	皿	口縁～高台	口径 15.0	C-3	Ib	灰白色	灰白色	施釉、調整、施釉	施釉	灰白色		
653	白磁E類	皿	口縁～高台	口径 7.4	C-2	Ib	灰白色	灰白色	施釉、砂目(高台)	施釉	灰白色		
654	白磁E類	皿	口縁～高台	口径 6.0	C-3	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
655	白磁E類	小皿	口縁～高台	口径 10.0	D-7	Ib	灰白色	灰白色	施釉、露胎	施釉	灰白色		
656	白磁IV類	碗	口縁～高台	口径 7.2	E-8	II	淡黄色	淡黄色	露胎、蛇目高台	施釉	灰黄色		白墨書
657	白磁D類	小碗	底部	底径 3.2	D-8	Ib	淡黄色	灰白色	露胎	施釉、貫入	淡黄色		白墨書
658	白磁IV類	皿	口縁～高台	口径 5.2	D-7	II	淡黄色	淡黄色	施釉、露胎	施釉	淡黄色		白墨書、抹りの産部
659	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.8	D-6	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		沈線
660	青磁龍泉I類	碗	口縁部	口径 15.0	F-5	Ib	灰色	灰色	施釉	施釉	灰色		沈線
661	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 13.2	D-7	Ia	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰白色		草花文
662	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.0	F-4	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		草花文
663	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 14.6	E-7	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉	灰黄色		草花文
664	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 15.0			灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰白色		草花文
665	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 20.6	B-5	Ic	灰色	灰色	施釉、垂釉	施釉	灰白色		草花文
666	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.2	B-3	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰色		草花文
667	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.0	F-5	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰白色		草花文
668	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.0	D-4	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰白色		草花文
669	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.0	B-3	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰色		草花文
670	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.0	F-7	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉	灰白色		草花文
671	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 7.2	F-5	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰白色		草花文
672	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 6.4	D-7	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉	灰色		草花文
673	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 6.0	B-3	Ib～c	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、露胎	施釉	灰色		草花文
674	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 20.4	E-4	Ic	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰白～灰色		草花文
675	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 16.6	C-7	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		
676	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 15.6	C-7	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰色		沈線
677	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.0	C-7	II	灰白～灰色	灰白～灰色	厚施釉、貫入	厚施釉、貫入	灰色		
678	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 18.0	E-7	Ia	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰白～灰色		
679	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.2	C-4	Ic	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰色		
680	青磁龍泉I類	小碗	口縁～高台	口径 8.6	E-7	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉、口剥げ	灰白～灰色		
681	青磁龍泉I類	碗	口縁部	口径 15.0	D-7	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰色		
682	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 6.0	溝3	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色		
683	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 5.6	B-3	II	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰黄色		
684	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 6.8			灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰色		
685	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 14.0	E-4	Ic	緑灰色	緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎗蓮弁文
686	青磁龍泉I類	碗	口縁部	口径 15.0	E-3	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		鎗蓮弁文
687	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 14.0	D-6	Ic	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		鎗蓮弁文
688	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 17.2	E-9	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰黄色		鎗蓮弁文
689	青磁龍泉I類	碗	口縁部	口径 15.2	C-11	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎗蓮弁文
690	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 16.6	D-5	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰黄色		鎗蓮弁文
691	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 16.6	D-5	Ib	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		鎗蓮弁文
692	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 19.2	D-6	Ic	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰色		鎗蓮弁文
693	青磁龍泉I類	碗	口縁～高台	口径 19.2	D-6	Ic	灰白～灰色	灰白～灰色	施釉	施釉	灰色		鎗蓮弁文

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
694	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁部	口径 16.0			明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	文様・その他
695	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 18.6	D-5	Ib	オリーブ黄色	オリーブ黄色	施釉	施釉	灰白色	細粒	縞連弁文
696	青磁龍泉Ⅱ類	碗	体部				緑灰色	緑灰色	施釉	施釉	灰白色		縞連弁文
697	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 15.5	E-4	Ic	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰色		縞連弁文
698	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 13.4	D-7	II	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰色		縞連弁文
699	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.8	E-5	Ib	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰色		縞連弁文
700	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.2	F-5	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰色		縞連弁文
701	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 14.0	D-8	Ib	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰色		縞連弁文
702	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁部	口径 14.6	C-7	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	縞連弁文
703	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁	口径 18.4	B-8	II	緑灰色	緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		縞連弁文
704	青磁龍泉Ⅱ類	碗	口縁～体部	口径 20.0	D-7		灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰オリーブ色		縞連弁文
705	青磁龍泉Ⅱ類	碗	体部～底部		C-8	II	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰色		縞連弁文
706	青磁龍泉Ⅰ類	碗	体部～高台	底径 6.8	C-3	Ib	灰オリーブ色	オリーブ灰色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	縞連弁文
707	青磁龍泉Ⅱ類	碗	底部	底径 5.4	D-10	Ib	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、露胎	施釉	灰白色	細粒	縞連弁文
708	青磁龍泉Ⅱ類	碗	底部	底径 6.0	B-8	Ib	暗オリーブ色	暗オリーブ色	施釉	施釉	灰白色	細粒	
709	青磁龍泉Ⅱ類	碗	体部～高台	底径 5.4	C-5	Ia	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	縞連弁文
710	青磁龍泉Ⅲ類	碗	口縁～体部	口径 15.6	E-5	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	縞連弁文
711	青磁龍泉Ⅲ類	碗	口縁～体部	口径 20.0	F-8	Ia	黄褐色	黄褐色	施釉、貫入	施釉、貫入	にぶい黄褐色		縞連弁文
712	青磁龍泉Ⅲ類	皿	口縁～体部	口径 12.8	D-5	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		縞連弁文
713	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部	口径 16.6	B-3	Ic	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉、貫入	施釉、貫入、垂釉	灰白色		縞連弁文
714	青磁龍泉B類	小碗	口縁部	口径 8.8	D-9	Ib	明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	縞連弁文
715	青磁龍泉B類	碗	口縁部	口径 14.0	E-5	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	縞連弁文
716	青磁龍泉B類	碗	口縁部	口径 14.8	C-3	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	縞連弁文
717	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部	口径 12.0	D-5	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	縞連弁文
718	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部	口径 13.8	C-5	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	縞連弁文
719	青磁龍泉B類	碗	口縁～体部	口径 8.7	C-7	II	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		縞連弁文
720	青磁龍泉B類	碗	体部～高台	底径 6.0	B-4	II	灰黄色	灰黄色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰褐色		縞連弁文
721	青磁龍泉B類	碗	体部～高台	底径 6.4	E-7	Ib	黄褐色	黄褐色	施釉、貫入	施釉、貫入	にぶい黄褐色	細粒	縞連弁文
722	青磁龍泉B類	皿	口縁～体部	口径 14.4	D-4	Ib	明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	縞連弁文
723	青磁龍泉C類	棗花皿	口縁～高台	口径 8.8	B-3	Ib	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	縞連弁文
724	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 9.4	C-6	Ib	明緑灰色	明緑灰色	施釉	施釉	灰白色		雷文(外)、草花文(内)
725	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 13.8	D-9	Ia	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	雷文
726	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 11.0	溝2	I	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	雷文
727	青磁龍泉C類	碗	口縁～体部	口径 14.8	C-6	Ic	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	雷文
728	青磁龍泉C類	碗	底部	底径 6.6	D-7	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入、露胎	にぶい赤褐色	細粒	草花文
729	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 16.6	C-4	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	草花文
730	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 16.0	B-2	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文
731	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 13.4	E-4	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉	施釉	白灰色		
732	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 15.0	C-4	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		
733	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 14.2	D-9	Ib	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
734	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 14.0	D-8	Ic	灰オリーブ色	灰オリーブ色	施釉	施釉	灰色		
735	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 17.0	B-4	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	白灰色		
736	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 13.0	C-7	Ib	明オリーブ灰色	明オリーブ灰色	施釉	施釉	灰白色		
737	青磁龍泉D類	碗	体部～高台	底径 6.8	B-6	Ib	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、露胎	施釉、露胎	灰黄色		草花文
738	青磁龍泉D類	碗	口縁～体部	口径 17.4	D-1	I	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色		
739	青磁龍泉D類	碗	体部～高台	底径 7.0	D-6	Ic	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色		
740	青磁龍泉D類	碗	体部～高台	底径 6.2	D-7	Ic	オリーブ灰色	オリーブ灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	白色		
741	青磁龍泉D類	碗	底部	底径 6.0	D-10	I	緑灰色	緑灰色	施釉	施釉	灰白色	細粒	草花文

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
742	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径 15.6	B-4	II	明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		
743	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径 12.2	D-9	Ic	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、貫入	施釉	灰色		
744	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径 14.4	E-4	Ic	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉	施釉	灰リ-7色		
745	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径 11.2	D-4	Ib	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉	施釉	灰白色		
746	青磁龍泉D類	盤	底部	底径 7.0	B-5	Ic	明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰色		
747	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径 11.8	D-7	Ic	リ-7色	リ-7色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰リ-7色		
748	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径 15.0	E-7	Ib	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉	施釉	灰白色		
749	青磁龍泉D類	皿	口縁～体部	口径 13.6	D-8	Ib	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	黄灰色		
750	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径 10.6	D-7	Ia	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色	細粒	
751	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径 14.4	B-4	Ib	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰黄色	細粒	
752	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径 15.2	C-3	Ib	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	黄灰色	細粒	
753	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径 12.2	D-9	Ia	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰黄色	細粒	草花文
754	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径 12.8	E-7	II	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入、垂釉	施釉、貫入	にぶい黄橙色		
755	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径 13.0	B-4	Ib	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	草花文
756	青磁	稜花皿	口縁～体部	口径 13.2	D-10	Ib	明緑灰色	明緑灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	黄灰色		
757	青磁	小壺	口縁～体部	口径 5.8	C-5	Ic	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉	施釉	白色		
758	青磁	壺	口縁～体部	口径 8.0	D-4	Ib	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉	施釉	灰白色		
759	青磁	メノコ	底部	底径 6.2	D-6	Ib	明黄褐色	にぶい黄褐色	施釉	釉剥げ	浅黄褐色		
760	青磁	メノコ	底部	底径 5.3	D-3	Ib	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、貫入	施釉、貫入	浅黄色		
761	青磁	メノコ	底部	底径 6.0	C-13	Ia	リ-7灰色	黄褐色	水洗き		にぶい褐色		
762	青磁	メノコ	底部	底径 5.3	D-4	Ia	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰色		
763	青磁	メノコ	底部	底径 3.5	D-7	Ib	リ-7灰色	にぶい褐色	施釉、露胎	露胎	灰白色		
764	青磁同安	碗	口縁～体部	口径 15.8	E-7	II	灰色	灰リ-7色	施釉、露胎	施釉	灰色		
765	青磁同安	碗	口縁部	口径 14.6	B-6	Ib	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉	施釉	灰白色	細粒	
766	青磁同安	碗	体～高台	底径 5.2	C-4	Ib	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、露胎	施釉	灰色	細粒	猫描文、草花文
767	青磁同安	皿	口縁～体部	口径 10.4	E-4	Ic	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉	施釉	灰色		
768	青磁同安	皿	口縁部	口径 11.0	C-3	Ib	灰白色	浅黄色	施釉	施釉	灰白色	細粒	
769	青磁同安	皿	口縁～体部	口径 11.6	E-8	Ib	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰白色	細粒	
770	青磁同安	皿	口縁～体部	口径 12.0	D-7	II	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、貫入	施釉、貫入	灰色		猫描文
771	青磁同安	皿	体～底部	底径 5.0	C-11	Ib	灰白色	灰リ-7色	露胎	施釉	灰白色	細粒	猫描文、草花文
772	青磁同安	皿	底部	底径 4.8	D-6	Ic	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、露胎	施釉	灰色		猫描文、草花文
773	青磁同安	皿	底部	底径 5.6	E-4	Ic	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰色		猫描文、草花文
774	青磁同安	皿	体～底部	底径 4.8	E-10	Ia	灰黄色	灰色	施釉、露胎	施釉	灰白色	細粒	猫描文、草花文
775	青磁同安	皿	体～底部	底径 5.0	D-7	Ib	灰色	リ-7灰色	施釉、露胎	施釉	灰色	細粒	猫描文、草花文
776	青磁同安	皿	底部	底径 5.0	C-11	II	灰色	灰リ-7色	施釉、露胎	施釉	灰色		猫描文、草花文
777	青磁同安	皿	底部	底径 5.6	C-7	Ic	灰リ-7色	灰リ-7色	施釉、露胎	施釉	灰色		猫描文、草花文
778	青磁同安	皿	体～底部	底径 8.0	F-4	Ib	にぶい褐色	浅黄色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色	細粒	猫描文、草花文
779	青磁同安	皿	底部	底径 4.8	D-9	Ic	浅黄色	浅黄色	施釉、露胎	施釉	浅黄色		猫描文、草花文
780	青磁同安	皿	底部	底径 5.4	C-10	II	浅黄色	浅黄色	施釉、露胎	施釉	浅黄色		草花文
781	青白磁	合子	蓋	口径 5.4	D-10	Ib	明青リ-7灰色	淡黄色	施釉、露胎	施釉、露胎	淡黄色		猫描文、偶丸円
782	青白磁	合子	蓋	口径 7.6	F-4	Ib	明青灰色	明青灰色	施釉、露胎	施釉	灰白色		猫描文、偶丸円
783	青白磁	合子	蓋	口径 8.0		Ic	灰白色	灰白色	施釉、貫入	露胎	灰白色		草花文
784	青白磁	合子	蓋	口径 8.8	B-6	II	リ-7色	黄白色	施釉、露胎	露胎	黄白色		草葉文
785	青白磁	合子	蓋	口径 6.2	C-7	Ic	灰白色	明リ-7灰色	施釉	施釉、露胎	淡黄色		猫描文、偶丸円
786	青白磁	合子	受け身	口径 6.0	D-9	II	リ-7灰色	リ-7灰色	施釉、露胎	施釉、露胎	灰色		偶丸円
787	青白磁	合子	受け身	底径 9.0	B-7	I	灰白色	灰白色	施釉、貫入、露胎	施釉、貫入	灰白色		
788	染付け	碗	口縁部	口径 14.6	C-D-4	Ib	牡丹、2本線	2本線	施釉				
789	染付け	碗	口縁部		B-3	Ib	岩、雲、2本線	2本線					

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
790	梁付け	碗	口縁～体部	口径 13.4	F-5	Ib	2本線	2本線					
791	梁付け	碗	口縁～体部	口径 10.4	D-9	Ia	蝶、2本線						
792	梁付け	碗	口縁～体部		B-5	Ia	池、岩舌						
793	梁付け	碗	口縁～体部		F-7	Ia	唐草、2本線	1本線					
794	梁付け	碗	体部～高台	底径 5.2	B-2	Ib		牡丹					
795	梁付け	碗	底部	底径 4.6	B-7	Ib							
796	梁付け	碗	体部～高台	底径 3.6	C-2	Ib	葉文	菊					
797	梁付け	碗	体部～底部	底径 4.2	B-5	Ic	池の岩						
798	梁付け	碗	底部	底径 5.0	E-7	Ia	池、草						
799	梁付け	碗	体部～高台	底径 5.0	C-4	Ib	梅花	葉文					
800	梁付け	碗	底部	底径 5.2	C-3	Ib							
801	梁付け	碗	体部～底部	底径 6.2	D-5	Ic	唐草崩文	唐草崩文					
802	梁付け	碗	底部	底径 6.2	D-4	Ib	唐草崩文	唐草崩文					
803	梁付け	碗	体部～高台	底径 3.4	F-3	Ib	暦文	1本線					
804	梁付け	碗	体部～高台	底径 4.5	D-7	Ia	2本線						
805	梁付け	碗	底部	底径 4.4	B-4	Ia	2本線						
806	梁付け	碗	底部		D-3	Ia	2本線	2本線					
807	梁付け	皿	底部		B-6	II		獅子文					
808	梁付け	皿	底部		C-5	Ic		獅子文					
809	梁付け	皿	底部	底径 7.8	D-4	Ib		獅子文、2本線					
810	梁付け	皿	底部	底径 5.4	D-10	Ib		草文					
811	梁付け	稜花皿	口縁～体部		E-9	Ia	唐草文	唐草文					
812	梁付け	稜花皿	口縁部		D-6	Ib		花文					
813	梁付け	皿	体部～高台	底径 7.0	B-3	Ic		草花文					
814	梁付け	皿	口縁～体部	口径 18.8	B-2・3	Ic		2本線					
815	梁付け	皿	体部～高台	底径 5.0	B-4	Ic	1本線	草文、2本線					
816	梁付け	皿	底部	底径 5.6	C-4	Ib	1本線	素文、1本線					
817	梁付け	皿	底部		E-5	Ib	草文	菊花文					
818	梁付け	盤	底部	底径 12.6	C-3	Ia	3本線	風景画					
819	梁付け	皿	口縁～高台	口径 9.4		Ic	草花文	菊花文、3本線					
820	梁付け	皿	口縁～体部	口径 9.4	B-5	Ic	梅花、1本線	2本線					端反り
821	梁付け	皿	口縁～底部	口径 10.1	E-9	Ia	草文、2本線	素文、3本線					基筋底
822	梁付け	皿	底部	底径 3.8	B-5	Ib		素文					基筋底
823	梁付け	皿	口縁～底部	口径 11.4	D・E-4	Ib	草花文、3本線	素文、3本線					基筋底
824	梁付け	皿	底部	底径 4.0	B-5	Ib	唐草文、1本線	素文					基筋底
825	梁付け	小碗	底部	底径 3.8	D-9	Ia							
826	梁付け	小碗	底部	底径 2.2	B-7	Ia							
827	梁付け	小碗	底部	底径 3.8	B-2	Ib							
828	梁付け	小碗	底部	底径 2.2	B-2	Ia							
829	梁付け	小碗	口縁～体部		C-7	Ic	残雪、竹、1本線	2本線					
830	梁付け	蓋			E-5	Ib	葉文						
831	梁付け	二次加工品	底部	径 2.6	F-8	Ia	福	草花文					メンコ
832	梁付け	二次加工品	体部	径 2.2	C-7	Ic	二重四角						メンコ
833	中国陶器	壺	口縁部	口径 5.9	C-7	Ic	青黒色	青黒色	緑釉	緑釉	明紫灰色	細粒	
834	中国陶器	壺	肩部		C-5	Ib	濃緑色	明黄褐色	緑釉	黄釉	にぶい橙色		沈線
835	中国陶器	壺	肩部		C-10	Ib	緑色	浅黄色	緑釉	露胎	灰白色	細粒	沈線
836	中国陶器	小鉢	口縁部	口径 10.0	F-3	Ib	青緑色	浅黄色	緑釉	露胎	浅黄色		
837	中国陶器	天目碗	口縁～体部	口径 13.2	C-4	Ia	黒色	黒色	黒釉	黒釉	浅黄色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
838	中国陶器	天目碗	口縁～体部	口径 12.4	C-10	II	褐色	暗褐色	黒釉	黒釉	灰黄褐色	細粒	
839	中国陶器	天目碗	口縁～体部	口径 12.2	E-3	Ib	黒褐色	黒褐色	黒釉	黒釉	灰白色		
840	中国陶器	天目碗	体部		E-3	Ib	黒褐色	黒褐色	黒釉・露胎		浅黄褐色		
841	中国陶器	天目碗	底部		E-3	Ia	黒色	黒色	黒釉	黒釉	灰黄色		
842	中国陶器	天目碗	体部		D-11	II	黒色	黒褐色	黒釉	黒釉	灰黄色	細粒	
843	中国陶器	天目碗	体～底部	底径 5.0	B-3	IIIa	にぶい黄褐色	黒色	黒釉・露胎		黄灰色	細粒	
844	中国陶器	鉢	口縁～胴部	口径 25.0	3T	II	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	明灰黄色	細粒	
845	中国陶器	鉢	口縁～胴部	口径 12.8	D-2	Ic	黒色	暗褐色	褐釉	褐釉	明褐色	やや荒い	
846	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 9.0	5T	IIa～IIb	黒褐色	オリーフ黒色	褐釉	褐釉	灰色	細粒	
847	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 7.8	C-8	Ic	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	灰黄褐色	細粒	
848	中国陶器	壺	口縁～肩部	口径 6.8	C-9	Ib	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	にぶい橙色	細粒	
849	中国陶器	碗	口縁～体部	口径 10.0	D-3	Ia	黒褐色	黒褐色	褐釉	褐釉	灰白色		
850	中国陶器	鉢	底部	底径 8.0	E-8	Ic	褐灰色	にぶい黄色	灰釉	灰釉	褐灰色	細粒	
851	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 8.6	D-5	Ib	灰オリーフ色	灰オリーフ色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	
852	中国陶器	壺	口縁～胴部	口径 10.4	B-3	Ic	にぶい黄色	にぶい黄色	灰釉	灰釉	灰黄色	細粒	
853	中国陶器	鉢	口縁～胴部	口径 33.6	D-4	Ib	にぶい橙色	オリーフ黄色	灰釉	灰釉	灰白色	荒粒	
854	中国陶器	鉢	口縁部	口径 23.0	C-5	Ib	浅黄色	オリーフ黄色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	
855	中国陶器	坏	底部	底径 3.9	D-7	II	浅黄色	にぶい黄褐色	灰釉	灰釉	にぶい橙色		
856	中国陶器	四耳壺	口縁部	口径 14.0	E-4	II	灰白色	灰白色	灰釉	灰釉	灰オリーフ色	細粒	
857	中国陶器	四耳壺	取っ手部		D-3	Ic	にぶい黄色	灰オリーフ色	灰釉	灰釉	灰オリーフ色	細粒	
858	中国陶器	四耳壺	取っ手部		E-3	Ia	黄灰色	浅黄色	灰釉	灰釉	赤灰色	荒粒	
859	中国陶器	四耳壺	取っ手部		D-7	Ic	灰オリーフ色	暗緑灰色	灰釉	灰釉	にぶい黄褐色		
860	中国陶器	四耳壺	取っ手部		D-4	II	にぶい黄色	明黄褐色	灰釉	灰釉	明褐色		
861	中国陶器	四耳壺	底部	底径 12.4	E-10		灰黄色	浅黄色	灰釉	灰釉	黄灰色	細粒	
862	中国陶器	壺	底部	底径 9.6	B-4	II	灰オリーフ色	灰白色	灰釉	灰釉	灰白色		
863	陶器	壺	口縁～肩部		C-10	Ib	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	灰釉	灰釉	灰黄色	細粒	常滑焼
864	陶器	壺	肩部		D-7	Ia	黒褐色	灰色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	常滑焼
865	陶器	壺	底部	底径 11.0	C-13	Ic	黄褐色	にぶい黄色	灰釉	灰釉	にぶい黄色	荒粒	常滑焼
866	陶器	壺	胴～底部	底径 16.6	B-3	Ib	灰オリーフ色	暗褐色	灰釉	灰釉	灰色	細粒	常滑焼
867	陶器	埴鉢	口縁部	口径 27.0	E-10	Ib	灰褐色	黄褐色	灰釉	灰釉	黄灰色	細粒	常滑焼
868	陶器	埴鉢	底部	底径 13.4	E-6	Ic	にぶい赤褐色	灰色	灰釉	灰釉	にぶい橙色		常滑焼・櫛歯状流線
869	須恵器	壺	口縁～肩部	口径 15.6	C-8	Ic	灰白色	灰白色	格子目タタキ	ハク目	にぶい黄褐色	細粒	樽万丈系
870	須恵器	壺	口縁部	口径 20.6	D-7	II	淡黄色	淡黄色	格子目タタキ	ハク目	灰白色	荒粒	樽万丈系
871	須恵器	壺	頸～肩部		D-9	II	灰白色	灰白色	格子目タタキ	ハク目	灰黄色	荒粒	樽万丈系
872	須恵器	壺	頸～肩部		D-7	Ic	淡黄色	淡黄色	格子目タタキ	ハク目	淡黄色	細粒	樽万丈系
873	須恵器	壺	頸～肩部		C-8	Ic	灰白色	浅黄色	格子目タタキ	ハク目	浅黄色	細粒	樽万丈系
874	須恵器	壺	胴部		D-8	II	淡黄色	淡黄色	格子目タタキ	ハク目	灰黄色	細粒	樽万丈系
875	須恵器	壺	胴部		C-7	II	淡黄色	淡黄色	格子目タタキ	ハク目	灰黄色	細粒	樽万丈系
876	須恵器	壺	胴部		E-3	II	淡黄色	灰白色	格子目タタキ	ハク目	灰黄色	細粒	樽万丈系
877	須恵器	壺	頸～肩部				灰色	灰色	格子目タタキ	ハク目	灰黄褐色	細粒	樽万丈系
878	須恵器	壺	頸～肩部	頸径 16.6	C-5	Ib	灰色	灰色	口調整・格子タタキ	ハク目	浅黄色		樽万丈系
879	須恵器	埴鉢	口縁部	口径 24.0	B-2・3	Ic	淡黄色	淡黄色	水挽き	ハク目	淡黄色	荒粒	樽万丈系
880	須恵器	埴鉢	口縁部	口径 24.2	B-10	II	灰黄色	灰黄色	ハク目	ハク目	にぶい橙色	細粒	樽万丈系
881	須恵器	埴鉢	口縁部	口径 20.0	C-9	II	淡黄色	淡黄色	ハク目	ハク目	淡黄色	細粒	樽万丈系
882	須恵器	埴鉢	口縁部	口径 26.0	D-4	Ib	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハク目	ハク目	にぶい黄色	荒粒(石英有り)	樽万丈系
883	須恵器	埴鉢	注ぎ口		C-10		灰色	灰色	ハク目・タタキ	ハク目	灰色	荒粒	樽万丈系
884	須恵器	埴鉢	注ぎ口		C-6	Ib	浅黄色	浅黄色	口調整	ハク目	黄灰色		樽万丈系・櫛歯状流線
885	須恵器	埴鉢	口縁～胴部		C-6	Ib	灰色	灰色	ハク目	ハク目	灰色		樽万丈系・櫛歯状流線

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
886	須恵器	擂鉢	口縁部	口径 20.6	B-2	I c	灰色	灰色	へらナデ	ハケ目	灰色	細粒	文様・その他
887	須恵器	擂鉢	口縁～胴部	口径 26.0	C-10	I a	灰色	灰色	ナデ	ハケ目	灰色	荒粒	棒万文系、櫛歯状沈線
888	須恵器	擂鉢	口縁～胴部	口径 25.4	D-11	I	灰白色	灰白色	ハケ目	ハケ目	浅黄色		棒万文系、櫛歯状沈線
889	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 23.0	D-5	I c	灰白色	灰白色	灰釉、水挽き	水挽き	にぶい黄色	細粒	東播磨系
890	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 22.0	F-7	II	暗青灰色	暗青灰色	灰釉、水挽き	水挽き	明黄褐色	荒粒	東播磨系
891	須恵器	捏鉢	口縁～胴部	口径 22.0	C-10	II	灰色	灰色	ハケナデ	ハケナデ	灰色		東播磨系
892	須恵器	捏鉢	口縁～胴部		D-10	III	灰色	灰褐色	灰釉、ハケ目		灰褐色		東播磨系
893	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 29.0	C-12	I b	灰色	灰色	灰釉、ハケ目	ハケ目	灰白色		東播磨系
894	須恵器	捏鉢	口縁～胴部		E-7	I b	青灰色	青灰色	灰釉、ハケ目	ハケ目	暗灰黄色		東播磨系
895	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 22.0	2T	II	灰色	灰色	灰釉、ハケ目	ハケ目	灰オリーブ色	細粒	東播磨系
896	須恵器	捏鉢	口縁～胴部		E-4	I a	灰色	灰色	灰釉、ハケ目	ハケ目	灰色		東播磨系
897	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 24.0	E-5・6	I a～I c	灰色	灰色	灰釉、ハケ目	ハケ目	黄灰色	細粒	東播磨系
898	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 22.4	C-6	I b	にぶい黄色	明黄褐色	灰釉、水挽き	水挽き	にぶい黄色	細粒	東播磨系
899	須恵器	捏鉢	注ぎ口	口径 29.4	C-9	II	灰色	灰色	灰釉、へらナデ	ナデ	黄灰色	細粒	東播磨系
900	須恵器	捏鉢	口縁部		C-11	II	暗青灰色	灰色	灰釉、水挽き	水挽き	灰色	細粒	東播磨系
901	須恵器	捏鉢	注ぎ口		E-5	I b	灰白色	灰色	灰釉、ハケ目	ハケ目	灰白色		東播磨系
902	須恵器	捏鉢	口縁部	口径 25.0	B-8	I b	灰色	灰色	灰釉、ハケ目	ハケ目	灰色	細粒	東播磨系
903	須恵器	捏鉢	底部	底径 11.0	F-7	II	黄灰色	灰褐色	灰釉、へらナデ	へらナデ	黄灰色	荒粒	東播磨系
904	須恵器	甕	口縁～肩部	頸径 26.0	C-7	I c	暗青灰色	暗青灰色	へらナデ、タタ	ハケ目	灰色	荒粒	下り山系
905	須恵器	壺	底部	底径 6.6	E-10	II	暗青灰色	暗青灰色	ハケ目	ハケ目	灰色	荒粒	下り山系
906	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 27.0	C-8	I c	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	へらナデ	ハケ目	灰色	荒粒	櫛歯状沈線
907	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部		B-7	I a	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目、擂溝	黄褐色	荒粒	櫛歯状沈線
908	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 24.2	B-5	I b	淡黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目、擂溝	灰色		櫛歯状沈線
909	瓦器質土器	擂鉢	胴～底部	底径 12.4	B-3	I b	灰色	灰色	へらナデ	ハケ目	灰色	細粒	櫛歯状沈線
910	瓦器質土器	擂鉢	口縁部	口径 31.8	B-3	II	灰白色	灰白色	へらナデ	ハケ目	灰白色	荒粒	櫛歯状沈線
911	瓦器質土器	擂鉢	胴～底部	底径 7.6	B-4	II	浅黄色	浅黄色	へらナデ	ハケ目、擂溝	浅黄色	細粒	櫛歯状沈線
912	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 26.4	E-10		黄灰色	黄灰色	へらナデ	丁寧ナデ、擂溝	灰白色		櫛歯状沈線
913	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 34.2	C-2	I b	にぶい黄褐色	黄褐色	ハケ目	ハケ目、擂溝	黄灰色		櫛歯状沈線
914	瓦器質土器	擂鉢	底部	底径 10.0	E-8	I b	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ、擂溝	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	櫛歯状沈線
915	瓦器質土器	擂鉢	胴～底部	底径 11.0	E-9	II	灰黄色	灰黄色	へらナデ	ハケ目	浅黄色	荒粒	櫛歯状沈線
916	瓦器質土器	擂鉢	底部		B-4	II	黒色	灰色	へらナデ	ハケ目	灰白色	細粒	櫛歯状沈線
917	瓦器質土器	擂鉢	口縁部	口径 22.4	B-6	I c	黄灰色	灰色	ハケ目	ハケ目	にぶい黄褐色	細粒	櫛歯状沈線
918	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 26.0	D-8	I b	黄灰色	黄灰色	口縁調整、へらナデ	へらナデ	にぶい黄色	荒粒	
919	瓦器質土器	擂鉢	口縁～胴部	口径 31.6		II	明黄褐色	褐色	ハケ目	ハケ目	明褐色	荒粒(石英有り)	
920	瓦器質土器	捏鉢	口縁～胴部	口径 30.2	C-10	II	灰色	灰黄色	ハケ目	ハケ目、へらナデ	黄灰色		
921	瓦器質土器	捏鉢	口縁～胴部	口径 22.0	D-7	II	褐灰色	灰白色	ハケ目	ハケ目、へらナデ	褐灰色	荒粒	
922	瓦器質土器	捏鉢	底部		B-5	I c	にぶい黄褐色	にぶい褐色	へらナデ	ハケ目	黒褐色	細粒	
923	瓦器質土器	捏鉢	底部	底径 11.0	D-7	I b	灰白色	灰白色	へらナデ	へらナデ	灰白色	荒粒(石英有り)	
924	瓦器質土器	捏鉢	注ぎ口		C-9	I c	明黄褐色	明黄褐色	へらナデ	へらナデ	にぶい黄褐色	細粒	
925	瓦器質土器	火舎	口縁～胴部	口径 37.6	D-3	I a	にぶい褐色	浅黄褐色	口縁調整、へらナデ	へらナデ	褐色	荒粒	
926	瓦器質土器	火舎	胴部		B-2	I b	にぶい褐色	にぶい褐色	へらナデ	へらナデ	にぶい黄褐色		
927	瓦器質土器	羽釜	口縁部	口径 21.4	C-7	I c	黒色	黒色	ハケ目	ハケ目	灰色	荒粒	
928	瓦器質土器	羽釜	口縁部	口径 22.6			浅黄色	黒色	ハケ目	ハケ目	黒色	荒粒	
929	瓦器質土器	碗	口縁部	口径 8.8	B-6	II	灰色	灰色	へらナデ	へらナデ	灰白色		
930	瓦器質土器	碗	体部		C-6	II	灰白色	灰白色	へらナデ	へらナデ	淡黄色	細粒	
931	瓦器質土器	碗	底部	底径 4.4	B-5	II	灰色	灰色	へらナデ	へらナデ	灰白色		
932	赤色土器	埴	口縁～体部	口径 18.0	D-9	II	明褐色	明褐色	一部研磨	研磨	にぶい赤褐色	細粒	
933	赤色土器	埴	口縁～体部	口径 12.4	E-9	II	明黄褐色	黄褐色	丁寧仕上げ	研磨	明黄褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
934	土師器	碗	口縁～体部	口径 12.0	B-3	II	黄褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色	細粒(石英有り)	
935	土師器	碗	口縁～体部	口径 15.0	B-3	II	明黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	細粒	
936	赤色土器	碗	口縁部	口径 18.8	C-11	I b	にぶい橙色	にぶい褐色	研磨	研磨	褐色	細粒	
937	土師器	碗	底部	底径 7.2	F-7	I c	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	黄褐色	細粒(石英有り)	
938	土師器	碗	底部	底径 6.6	F-8	III a	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き ナデ	浅黄褐色	細粒	
939	土師器	碗	底部	底径 9.0	D-12	III	褐色	褐色	水挽き	水挽き	黒褐色	細粒	
940	土師器	碗	底部	底径 7.4	B-3	II	浅黄色	浅黄色	水挽き	水挽き	にぶい黄色	荒粒	
941	土師器	碗	底部	底径 6.6	E-6	II	明赤褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	黒褐色	細粒(石英有り)	
942	土師器	碗	底部	底径 7.0	D-4	II	黄褐色	浅黄褐色	水挽き ナデ	研磨	浅黄褐色	細粒	線刻
943	土師器	碗	底部	底径 8.6	C-4	II	浅黄色	浅黄色	水挽き	水挽き	浅黄色	細粒(石英有り)	
944	土師器	碗	底部	底径 7.4	D-5	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き ナデ	水挽き ナデ	にぶい黄褐色	細粒	
945	土師器	碗	底部	底径 9.1	C-6	II	黄褐色	黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色	細粒	
946	土師器	碗	底部	底径 6.6	B-4	II	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き ナデ	水挽き ナデ	にぶい黄褐色	細粒	
947	土師器	碗	底部	底径 7.8	D-11	II	黄褐色	黄褐色	水挽き	水挽き	明黄褐色	細粒	
948	土師器	碗	底部	底径 7.2	B-3	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
949	土師器	碗	底部	底径 8.0	D-7	II	にぶい橙色	にぶい褐色	水挽き	水挽き ナデ	にぶい褐色	細粒	
950	土師器	碗	底部	底径 7.4	C-10	II	にぶい褐色 黒色	にぶい褐色	水挽き	水挽き	にぶい褐色	細粒	
951	土師器	碗	底部	底径 7.0	B-3	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
952	土師器	碗	底部	底径 7.4	D-8	II	浅黄褐色	明赤褐色	水挽き	研磨	褐色	細粒	線刻
953	黒色土器A	碗	底部	底径 9.2	F-8	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	黒褐色	細粒	線刻
954	土師器	碗	底部	底径 7.0	B-3	II	褐色	にぶい褐色	水挽き	研磨	にぶい褐色	細粒	
955	土師器	碗	底部	底径 7.0	B-3	II	にぶい黄褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色	細粒(石英有り)	
956	土師器	碗	底部	底径 5.6	F-5	II	明黄褐色	明黄褐色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
957	黒色土器A	碗	底部	底径 5.6	E-5	II	浅黄褐色	黒色	水挽き	研磨	浅黄褐色	細粒	線刻
958	土師器	碗	底部	底径 8.0	D-6	II	にぶい褐色	にぶい褐色	研磨	研磨	浅黄褐色	細粒	
959	赤色土器	碗	底部	底径 8.0	E-8	II	灰白色	浅黄褐色	水挽き	研磨	灰白色	細粒	
960	土師器	碗	底部	底径 7.4	C-7	I c	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
961	赤色土器	碗	体部～高台	底径 6.0	D-8	II	にぶい褐色	褐色	ナデ	研磨	明褐色	細粒	
962	赤色土器	碗	底部	底径 8.0	E-6	I c	黄褐色	黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい褐色	細粒	
963	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-6	II	浅黄褐色	黒褐色	研磨	研磨	暗灰褐色	細粒	
964	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 19.0			浅黄色	黒褐色	研磨、ヘア	研磨	浅黄色	細粒	
965	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.5	D-7	II	にぶい黄褐色	暗褐色	研磨	研磨	明黄褐色	細粒	
966	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.4	F-5		にぶい黄褐色	褐灰色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
967	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 20.0	C-7	II	明褐色	黒色	研磨	研磨	明褐色	細粒	
968	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 18.0	B-4	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	
969	黒色土器A	碗	口縁～高台	口径 15.9			にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	淡黄色	細粒	線刻
970	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 18.0	C-11	II	黄褐色	黒色	研磨	研磨	暗褐色	細粒	
971	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	B-6	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
972	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 15.6	D-6	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
973	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.0	E-6	II	浅黄色	灰黄色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
974	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.6	D-6	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	褐色	細粒	
975	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.6	D-6	II	黒色、褐色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
976	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 18.6	C-8	I c	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	褐灰色	細粒	
977	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.6	E-7	II	褐灰色	黒色	研磨、ヘアナデ	研磨	黄灰色	細粒	
978	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-7	II	灰黄色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
979	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 15.0	E-6	I c	明黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
980	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 15.4	D-6	II	浅黄色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
981	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 13.6	D-7	II	にぶい褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
982	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.0	D-7	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
983	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 16.0	D-6	I b	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	荒粒	
984	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 18.2	D-6	II	にぶい赤褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい橙色	細粒	
985	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 17.6	D-6	II	明黄褐色	黒色	研磨	研磨	黄褐色	細粒	
986	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 19.0	D-6	II	にぶい橙色	黒褐色	研磨	研磨	灰赤色	細粒	
987	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 20.0	F-5	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
988	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 18.8	D-6	II	明黄褐色	黒色	研磨	研磨	浅黄褐色	細粒	
989	黒色土器A	碗	口縁～体部	口径 14.0	C-11	II	にぶい黄色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	
990	黒色土器A	碗	口縁部	口径 13.2	E-6	II	にぶい黄褐色	黄灰色	水挽き、丁寧なヘラテ	水挽き、丁寧なヘラテ	浅黄褐色	細粒	線刻
991	黒色土器A	碗	底部	底径 6.6	D-6	II	浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰色	細粒	線刻
992	黒色土器A	碗	底部	底径 7.3	D-7	II	褐灰色	黒色	水挽き	研磨	褐灰色	細粒	線刻
993	黒色土器A	碗	底部	底径 6.4	D-7	II	にぶい黄色	黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒	線刻
994	黒色土器A	碗	底部	底径 7.2	D-6	II	浅黄褐色	黒色	研磨	研磨	浅黄色	細粒	
995	黒色土器A	碗	底部	底径 6.4	D-6	II	暗灰黄色	黒色	丁寧仕上げ、研磨	研磨	褐色	細粒	
996	黒色土器A	碗	底部	底径 6.2		II	灰白色	黄灰色	丁寧仕上げ	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
997	黒色土器A	碗	底部	底径 7.2	D-6	II	浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰白色	細粒	
998	黒色土器A	碗	底部	底径 8.0	D-11	II	褐色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	褐色	細粒	
999	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.4	D-7	II	浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1000	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	B-4	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1001	黒色土器A	碗	底部	底径 7.2	D-6	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1002	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.6	D-6	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1003	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.0	C-7	I c	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1004	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.6	E-7	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨、ヘラテ	研磨	浅黄褐色	細粒	
1005	黒色土器A	碗	体～底部	底径 6.0	C-8	II	灰赤色	灰褐色	研磨	研磨	にぶい橙色	細粒	
1006	黒色土器A	碗	底部	底径 7.2	D-7	II	浅黄褐色	にぶい橙色、黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒(赤色粒有り)	
1007	黒色土器A	碗	底部	底径 9.0	B-4	II	にぶい黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄色	細粒	線刻
1008	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.2	C-6	II	明黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1009	黒色土器A	碗	底部	底径 6.2	F-5	II	にぶい黄褐色	黒色	丁寧	研磨	浅黄褐色	細粒	線刻
1010	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 8.4	B-10	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黒色	細粒	線刻
1011	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.6	D-6	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	
1012	黒色土器A	碗	底部	底径 9.0	D-6	II	にぶい橙色	褐灰色	水挽き、研磨	研磨	黄灰色	細粒	
1013	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	E-5	II	灰黄色	黒色	丁寧	研磨	にぶい黄褐色	細粒	布目痕(内)
1014	黒色土器A	碗	底部	底径 7.6	C-10	II	褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒	
1015	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	C-7	III	灰黄色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	
1016	黒色土器A	碗	底部	底径 6.7	B-5	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1017	黒色土器A	碗	底部	底径 6.4	C-8	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1018	黒色土器A	碗	底部	底径 6.2	E-6	I c	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	浅黄褐色	細粒	
1019	黒色土器A	碗	底部	底径 6.4	C-11	II	黄灰色	灰黄色	水挽き	丁寧仕上げ	黄灰色	細粒	
1020	黒色土器A	碗	底部	底径 7.6	E-5	II	にぶい橙色、黒色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	浅黄褐色	細粒	
1021	黒色土器A	碗	底部	底径 6.8	D-8	I c	暗灰黄色	黒色	水挽き、ヘラテ	研磨	浅黄褐色	細粒	線刻
1022	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.0	F-7	II	黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄褐色	細粒	線刻
1023	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	C-5	I c	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい橙色	細粒	線刻
1024	黒色土器A	碗	底部	底径 6.8	D-6	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	浅黄褐色	細粒	線刻
1025	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	D-4	I b	にぶい黄色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	線刻
1026	黒色土器A	碗	底部	底径 7.2	D-7		にぶい黄褐色	カーフ黒色	水挽き、糸切り	水挽き、研磨	にぶい黄褐色	細粒(石英有り)	線刻
1027	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.0	D-3	I c	浅黄褐色	黒色	ヘラシキ	研磨	明黄褐色	細粒	
1028	黒色土器A	碗	底部	底径 6.0	D-12	I	褐色	褐色	水挽き	丁寧仕上げ	浅黄褐色	細粒	
1029	黒色土器A	碗	底部	底径 12.4	E-9	I b	にぶい黄褐色	カーフ褐色	水挽き、ヘラ切り	丁寧仕上げ	にぶい黄褐色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1030	黒色土器A	碗	底部	底径 7.2	B-2	II	淡黄色	黒色	水挽き	研磨	淡黄色	細粒	
1031	黒色土器A	碗	底部	底径 6.4	C-7	II	にぶい黄色	黒色	水挽き、丁寧仕上げ	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1032	黒色土器A	碗	底部	底径 7.6	C-8	II	灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄色	細粒	
1033	黒色土器A	碗	底部	底径 6.0	D-12	I	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	
1034	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	D-11	I b	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1035	黒色土器A	碗	底部	底径 8.6	B-5	III a	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1036	黒色土器A	碗	底部	底径 7.6	B-5	II	明黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1037	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	B-5	III a	浅黄色	黒色	研磨	研磨	浅黄色	細粒	線刻
1038	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	C-5	I c	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	明黄褐色	細粒	
1039	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	D-4	I c	灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	線刻
1040	黒色土器A	碗	底部	底径 7.8	D-6	II	浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1041	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	D-8	I	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1042	黒色土器A	碗	底部	底径 7.6	B-6	II	浅黄色	にぶい黄褐色	水挽き	研磨	灰白色	細粒	
1043	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	B-4	III a	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	褐色	細粒	
1044	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.0	E-10	II	にぶい黄褐色	黒色	丁寧仕上げ	研磨	黒色	細粒	
1045	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.4	E-5	II	浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰白色	細粒	線刻
1046	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.6	B-5	II	にぶい黄色	黄灰色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1047	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.0	B-4	II	明黄褐色	明黄褐色、黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1048	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.0	D-3		灰黄褐色	黒色	研磨	研磨	暗灰色	細粒	
1049	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.8	B-6	II	にぶい黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1050	黒色土器A	碗	底部	底径 6.2	D-6	II	橙色	褐灰色	ナデ	研磨	黒褐色	細粒	
1051	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.6	B-7	I c	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	浅黄褐色	細粒	
1052	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.2	B-4	II	浅黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黄灰色	細粒	
1053	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.0	D-2	I c	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黄褐色	細粒	
1054	黒色土器A	碗	体部～底部	底径 6.8	C-8	II	灰黄色	黒色	ナゲ切り、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1055	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 8.0	B-4	II	暗灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい橙色	細粒	
1056	黒色土器A	碗	底部	底径 8.4	C-6	I b	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	灰黄褐色	細粒	
1057	黒色土器A	碗	底部	底径 8.0	E-8	II	灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	中央研磨弱い
1058	黒色土器A	碗	底部	底径 8.0	D-7	II	灰黄色	黒色	水挽き、研磨	研磨	褐灰色	細粒	線刻
1059	黒色土器A	碗	体部～底部	底径 6.8	E-5	II	にぶい黄褐色	灰黄褐色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
1060	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 7.0	D-8	II	浅黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	灰白色	細粒	中央研磨弱い
1061	黒色土器A	碗	底部	底径 6.0	E-6	II	にぶい黄色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1062	黒色土器A	碗	体部～高台	底径 6.8	C-6	II	明黄褐色	黒色	研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1063	黒色土器A	碗	底部	底径 5.6	E-6	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	黄褐色	細粒	
1064	黒色土器A	碗	底部	底径 7.0	B-4	II	明黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	
1065	黒色土器A	碗	底部	底径 7.4	D-8	I	にぶい黄褐色	黒色	水挽き、研磨	研磨	にぶい黄褐色	細粒	線刻
1066	黒色土器A	碗	体部～底部	底径 6.6	F-6	II	灰黄色	黄灰色	研磨	研磨	灰黄色	細粒	
1067	黒色土器A	碗	底部	底径 6.0	D-7	II	にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	褐灰色	細粒	線刻
1068	黒色土器A	碗	底部	底径 6.2	E-6		にぶい黄褐色	黒色	水挽き	研磨	褐色	細粒	線刻
1069	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	C-9	II	橙色	褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1070	土師器	坏	口縁～底部	口径 12.2	B-5	I c	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1071	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.2	C-11	II	灰黄色	灰黄色	水挽き、糸切り	水挽き	灰黄色	荒粒	丁寧な調整
1072	黒色土器A	坏	口縁～底部	口径 15.8	D-7	II	褐色	暗褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒(石英有り)	
1073	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	C-12	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1074	土師器	坏	口縁～底部	口径 14.6	C-12	II	褐灰色	黄褐色	水挽き、糸切り	水挽き	浅黄褐色	荒粒(石英有り)	
1075	土師器	坏	口縁部	口径 12.2	C-5	I c	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	
1076	土師器	坏	底部	底径 10.0	C-3	I b	灰褐色	灰白色	水挽き、ナゲ切り	水挽き、ナゲ	にぶい橙色	細粒	
1077	土師器	坏	口縁部	口径 14.4	C-7	II	にぶい橙色	にぶい橙色	水挽き	水挽き	にぶい橙色	荒粒(石英有り)	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1078	土師器	環	体部～底部	底径 8.0	D-8	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ナ	にぶい褐色	荒粒	
1079	土師器	環	体部～底部	底径 7.2	E-4	Ic	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1080	土師器	環	底部	底径 11.0	E-7	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	灰褐色	荒粒	
1081	土師器	環	底部	底径 6.6	D-4	Ib	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1082	土師器	環	底部	底径 8.8	B-5	II	にぶい褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1083	土師器	環	体部～底部	底径 9.0	D-7		黄褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き・肩及びみに二重円	にぶい黄褐色	荒粒	
1084	土師器	環	底部	底径 12.0	D-7	II	にぶい褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	荒粒	
1085	土師器	環	底部	底径 6.0	F-5	III	赤褐色	赤褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ナ	赤褐色	荒粒	
1086	土師器	環	体～底部	底径 10.2	C-11	II	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	充実高台
1087	土師器	環	口縁～底部	口径 14.4	C-5	Ic	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒(石英有り)	
1088	土師器	環	口縁～底部	口径 15.6	D-6	II	にぶい黄褐色	灰黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1089	土師器	環	口縁～底部	口径 16.6	C-5	Ic	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒(石英有り)	
1090	土師器	環	体部～底部	口径 15.6	D-7	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒	
1091	土師器	環	口縁～体部	口径 16.2	C-5	Ic	にぶい褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒(石英有り)	
1092	土師器	環	口縁～胴部	口径 14.4	溝3	I	オリ-7褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1093	土師器	環	口縁部	口径 15.0	E-6	II	にぶい褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1094	土師器	環	口縁部	口径 14.4	E-6	II	褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1095	土師器	環	口縁部	口径 15.2	C-7	II	にぶい黄褐色	にぶい褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1096	土師器	環	口縁部	口径 12.4	D-2	Ic	褐灰色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1097	土師器	環	口縁部	口径 16.2	D-7	II	灰黄色	灰黄色	水挽き	水挽き	黄灰色	荒粒(石英有り)	
1098	土師器	環	口縁～体部	口径 15.0	E-7	II	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き	水挽き	褐色	細粒	
1099	土師器	環	口縁～底部	口径 11.2	C-5	Ic	褐色	浅黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色	荒粒(石英有り)	
1100	土師器	環	口縁～底部	口径 15.0	E-9	II	淡黄色	淡黄色	水挽き・糸切り	ナ	淡黄色	荒粒	
1101	土師器	環	口縁部	口径 17.6	D-6	Ic	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色	荒粒(石英有り)	
1102	土師器	環	体部～底部	底径 7.4	F-5	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	灰黄褐色	荒粒	
1103	土師器	環	底部	底径 7.4	B-6	Ic	褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒	
1104	土師器	環	底部	底径 7.8	D-6	II	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1105	土師器	環	体部～底部	底径 6.4	B-6	II	にぶい黄褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	荒粒(石英有り)	
1106	土師器	環	底部	底径 8.6	E-6		灰褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	灰褐色	荒粒(石英有り)	
1107	土師器	環	底部	底径 7.4	溝3	I	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	荒粒	
1108	土師器	環	体部～底部	底径 10.0	D-6	III	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1109	土師器	環	体部～底部	底径 10.8	C-11	II	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	黄褐色		
1110	土師器	環	底部	底径 8.4	E-7	II	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい赤褐色	荒粒	
1111	土師器	環	底部	底径 7.4	C-5	Ib	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・手ナ	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1112	土師器	環	底部	底径 11.6	E-6	Ic	黒褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	灰黄色	荒粒(石英有り)	
1113	土師器	環	底部	底径 9.0	E-5	II	浅黄褐色	淡黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	淡黄色	荒粒	
1114	土師器	皿	底部	底径 9.2	D-10	Ic	褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒(石英有り)	
1115	土師器	環	口縁～底部	口径 16.8	D-7	II	黄色	黄色	水挽き・糸切り	水挽き	淡黄色	細粒	
1116	土師器	環	口縁～底部	口径 16.6	D-6	II	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ナ	淡黄褐色	細粒	
1117	土師器	環	口縁～底部	口径 13.8	C-8	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ナ	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1118	土師器	環	口縁～底部	口径 14.4	C-12	Ib	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1119	土師器	環	口縁～胴部	口径 17.2	E-6		浅黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1120	土師器	環	口縁～底部	口径 15.6	F-7	Ib	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1121	土師器	環	口縁～底部	口径 13.2	E-4	II	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒	
1122	土師器	環	口縁～底部	口径 15.0	C-7	II	にぶい黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1123	土師器	環	体部～底部	底径 9.4	C-12	II	明黄褐色	明黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き・ナ	にぶい黄褐色	荒粒	
1124	土師器	環	底部	底径 11.2	C-7	II	灰褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒	
1125	土師器	環	体部～底部	底径 9.6	B-6	II	褐色	明褐色	水挽き・糸切り	水挽き・肩及びみに二重円	黄褐色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1126	土師器	坏	体部～底部	底径 9.6	B-6	II	にぶい褐色	灰黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	荒粒	
1127	土師器	坏	体部～底部	底径 8.6	C-11	II	褐色	明褐色	水洗き・糸切り	水洗き	明褐色	細粒	
1128	土師器	坏	底部	底径 7.6	E-8	II	褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き	褐色	荒粒	
1129	土師器	坏	口縁～底部	口径 15.0	C-11	IIIa	赤褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	荒粒・丹塗り	
1130	土師器	盤	口縁～底部	口径 23.0	C-8	Ic	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	細粒(石英有り)	
1131	土師器	坏	口縁～底部	口径 16.6	C-7	II	黄褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	ナデ	にぶい褐色	細粒	
1132	土師器	坏	口縁～底部	口径 11.4	C-5	Ic	にぶい褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き	赤褐色	荒粒(石英有り)	
1133	土師器	坏	口縁～底部	口径 11.0	D-11	Ib	にぶい褐色	にぶい褐色	水洗き・ヘラ切り	水洗き	褐色	細粒	
1134	土師器	浅鍋	胴～底部	底径 12.4	C-3	Ia	にぶい黄褐色	明黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	浅黄褐色	細粒	
1135	土師器	坏	底部	底径 13.0	B-5	Ib	にぶい褐色	にぶい褐色	水洗き・糸切り	水洗き・ナデ	にぶい褐色	荒粒	
1136	土師器	坏	底部	底径 8.0	C-5	Ic	浅黄褐色	浅黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	浅黄褐色	細粒(石英有り)	
1137	土師器	坏	底部	底径 10.6	C-8	Ic	灰黄褐色	灰黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	細粒(石英有り)	
1138	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	D-7	Ib	褐色	褐色	水洗き・底・糸切り	水洗き・底	褐色	細粒	灯明皿
1139	土師器	小皿	口縁～底部	口径 5.6	D-7	II	黄褐色	黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	褐色	細粒(石英・赤色粒有り)	灯明皿
1140	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	C-6	II	明黄褐色	明黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	明黄褐色	細粒	
1141	土師器	小皿	口縁～底部	口径 6.8	E-4	II	浅黄褐色	浅黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	黄褐色	細粒	
1142	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	D-6	II	浅黄褐色	にぶい褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1143	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.4	C-8	II	褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き・ナデ	褐色	細粒	
1144	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.7	D-6	II	にぶい褐色	にぶい褐色	水洗き	水洗き	にぶい褐色	細粒(石英有り)	
1145	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	D-7	II	褐色	にぶい褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい褐色	細粒	
1146	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.2	D-6	II	明赤褐色	明赤褐色	水洗き・糸切り	水洗き・ナデ	明赤褐色	荒粒	
1147	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	D-4	II	明黄褐色	浅黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	明黄褐色	細粒	
1148	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.8	E-5	II	黄褐色	黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き・櫛目	黄褐色	荒粒	
1149	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	D-7	II	黄褐色	黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	黄褐色	細粒	
1150	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	D-6	II	褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き	褐色	荒粒(石英有り)	指跡
1151	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	C-8	II	灰黄色	灰黄色	水洗き・糸切り	水洗き・ナデ	灰黄色		
1152	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-7	II	褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1153	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	C-7	II	褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き	褐色	細粒	
1154	土師器	小皿	口縁～底部	口径 7.0	F-5	II	浅黄褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	浅黄褐色	細粒	
1155	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-7	II	褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き・ナデ	褐色	細粒	
1156	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4	F-4	Ic	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	細粒	
1157	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	C-6	II	浅黄褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	細粒	
1158	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4		表	黄褐色	黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	黄褐色	細粒	
1159	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.5	D-6	II	灰白色	灰白色	水洗き・糸切り	水洗き	灰白色	荒粒(石英有り)	
1160	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.6	E-6	II	にぶい黄色	にぶい黄色	水洗き・糸切り	水洗き	灰黄色	細粒	
1161	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	C-8	II	淡黄色	淡黄色	水洗き・糸切り	水洗き	淡黄色	細粒	
1162	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.4	C-6	Ic	浅黄褐色	浅黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	浅黄褐色	細粒(石英有り)	
1163	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6	Ic	浅黄褐色	黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	細粒	
1164	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	E-6	Ic	浅黄色	浅黄色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色		
1165	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.2	E-3	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	浅黄褐色	細粒	
1166	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6	II	にぶい黄色	にぶい黄色	水洗き・糸切り	水洗き	灰黄褐色	細粒	
1167	土師器	小皿	口縁～底部	口径 8.0	E-8	Ic	にぶい褐色	にぶい褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい褐色	細粒	
1168	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.2	C-8	II	にぶい黄色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き・ナデ	褐色	細粒	
1169	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	D-8	II	褐色	褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい褐色	細粒	
1170	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.0	E-4	II	にぶい黄褐色	明黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	細粒	
1171	土師器	小皿	口縁～底部	口径 10.2	F-5	Ib	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	にぶい黄褐色	細粒	
1172	土師器	小皿	口縁～底部	口径 9.6	C-7	Ib	褐灰色	褐灰色	水洗き・糸切り	ナデ	褐灰色	細粒	
1173	土師器	小皿	完形	口径 10.0	D-7	II	黄褐色	黄褐色	水洗き・糸切り	水洗き	褐色	荒粒(石英有り)	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1174	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.6	D-6	II	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	暗灰黄色	細粒(石英、赤色粒有り)	
1175	土師器	小皿	完形	口徑 9.2	C-6	II	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	浅黄褐色	細粒	
1176	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.4	C-7	II	にぶい橙色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	ナデ	浅黄褐色	細粒	
1177	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.8	C-8	II	浅黄色	浅黄色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	浅黄色	細粒	
1178	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 10.0	D-4	II	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	ナデ	明褐色	細粒	
1179	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.6	B-4	IIIa	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	明褐色	細粒	
1180	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.2	C-6	Ic	にぶい黄褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	にぶい褐色	細粒	
1181	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 11.4	D-7	II	にぶい橙色	にぶい褐色	水挽き、ナデ	水挽き	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1182	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.4	C-6	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒	
1183	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 7.6	C-5	Ib	灰黄褐色	灰黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1184	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 7.6	C-8	II	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1185	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 10.2	E-4	II	にぶい黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1186	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.6	D-6	II	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1187	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.4	C-5	Ic	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	黄褐色	細粒	
1188	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.6	D-6	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り、ナデ	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1189	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.0	D-8	Ic	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒	
1190	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 10.0	C-13	III	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	黄褐色	細粒	
1191	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 12.6	C-6	II	褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1192	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 11.2	C-5	Ic	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1193	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 7.6	D-6	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	荒粒(石英有り)	
1194	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.0	F-5	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒	
1195	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.0	C-5	Ic	にぶい黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	荒粒(石英有り)	
1196	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 6.8	D-6	II	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	細粒	
1197	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 7.4	B-4	II	浅黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい黄褐色	荒粒(石英有り)	
1198	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 7.1	D-6	II	にぶい黄色	暗灰黄色	水挽き・糸切り	水挽き	灰黄色	荒粒(石英有り)	
1199	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.0	D-3	III	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1200	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.0	D-6	II	褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1201	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.0	D-2	Ic	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	細粒	
1202	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.6	D-6	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒	
1203	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.0	D-6	II	明赤褐色	明赤褐色	水挽き・糸切り	水挽き	明赤褐色	細粒	
1204	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.8	D-2	Ic	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	浅黄褐色	細粒	
1205	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.2	D-6	II	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1206	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.2	D-7	II	にぶい褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	褐色	荒粒(石英有り)	
1207	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 10.4	D-6	II	にぶい褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1208	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.6	D-6	II	灰黄色	灰黄色	水挽き・糸切り	ナデ	浅黄褐色	荒粒(赤色粒有り)	
1209	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.6	D-7	II	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	ナデ	浅黄褐色		
1210	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.2	D-6	II	にぶい黄褐色	明黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	明黄褐色		
1211	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.2	D-7	II	にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1212	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 11.0	D-6	II	浅黄褐色	浅黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	荒粒(石英、赤色粒有り)	糸切り後置跡
1213	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 8.6	B-4	II	黄褐色	黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	褐色	荒粒	
1214	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.6	B-4	II	浅黄色	浅黄色	水挽き・糸切り	ナデ	浅黄色	細粒	
1215	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 10.8	D-7	II	褐色	褐色	水挽き・糸切り	水挽き、ナデ	にぶい褐色	荒粒(石英有り)	
1216	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 10.0	B-6	II	明黄褐色	明黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	浅黄褐色	荒粒(赤色粒有り)	
1217	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 9.4	E-6	II	浅黄褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	にぶい褐色	細粒	
1218	土師器	小皿	口縁～底部	口徑 10.6	D-6・7		にぶい褐色	にぶい褐色	水挽き・糸切り	水挽き	黄褐色	荒粒(石英有り)	
1219	黒色土器B	坏	口縁～体部	口徑 17.2	D-6	II	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1220	黒色土器B	坏	口縁	口徑 19.4	E-5	II	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1221	黒色土器B	坏	口縁	口徑 16.2	D-6	II	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1222	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 10.0	D-6	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1223	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 11.0	D-6	II	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1224	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 9.0	D-6	II	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1225	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.6	D-6	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1226	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.2	D-7	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1227	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 7.6	D-6	II	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1228	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 11.9	D-6	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1229	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 9.4	D-6	II	黒色	黒色	研磨	研磨	黒色	細粒	
1230	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 11.8	D-6	II	黒色	黒色	研磨	研磨	灰黄褐色	細粒	
1231	黒色土器B	小皿	口縁～底部	口径 8.4	F-4	Ib	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1232	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.0	E-5	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1233	黒色土器B	小皿	底部	底径 3.8	C-11	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1234	黒色土器B	小皿	底部	底径 5.0	C-9	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1235	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.5	D-6	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1236	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.0	E-5	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1237	黒色土器B	小皿	底部	底径 5.0	D-6	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1238	黒色土器B	小皿	体～底部	底径 6.2	E-6	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1239	黒色土器B	小皿	底部	底径 6.0	C-12	II	黒色	黒色	研磨・糸切り	研磨	黒色	細粒	
1240	ふいご	ふいご	羽口		B-4	II			ナデ	ヘア		細粒	
1241	ふいご	羽口	羽口		C-7	Ic	にぶい黄褐色 黒色	にぶい黄褐色		ヘア切り・布当て		荒粒	鉄付着
1242	土師器	合子	受け身	口径 6.8	D-6	II	黒褐色	褐色	水挽き	水挽き	褐色	細粒	
1243	土師器	紛鍾車			C-6	II	黄褐色	にぶい黄褐色	糸切り	ナデ	にぶい黄褐色	細粒	
1244		土鍾			F-5	II	にぶい橙色		4.2×2.3×0.9				
1245		土鍾			B-8	Ib	灰白色		5.0×1.35×2.5				
1246		土鍾			B-2	Ib	黒褐色		3.9×1.3×0.7				
1247		土鍾					灰黄色		4.2×1.4×0.2				
1248		土鍾			C-9	Ib	にぶい黄色		3.2×1.4×0.4				
1249		土鍾			D-7	Ib	にぶい黄褐色		3.7×1.6×0.4				
1250	土師器	高台付皿	口縁部～高台	口径 9.6	D-7	II	褐色	褐色	水挽き	水挽き		黒粒(石英・黄色粒有り)	
1251	土師器	杯	口縁～体部	口径 18.6	D-4	Ic	浅黄褐色	にぶい黄褐色	水挽き・糸切り	水挽き	褐色	細粒(石英有り)	
1252		石鍋	口縁部	口径 40.0	C-8	II	黒褐色	灰白色			灰白色	滑石	
1253		石鍋	口縁部	口径 34.6	B-11		褐灰色	褐灰色			暗赤灰色	滑石	
1254		石鍋	底部	底径 23.0	D-9		黒色	灰色			灰色	滑石	
1255		石鍋	口縁部		C-4		灰白色	灰白色			灰白色	滑石	
1256		石鍋	底部	底径 30.0	D-7	II	黒色	黒色			褐灰色	滑石	
1257		石鍋	底部	底径 30.0	C-D-7		褐灰色	黄灰色			灰色	滑石	
1258		石鍋	底部	底径 30.0	C-7	II	オリヅ黒色	灰色			オリヅ黒色	滑石	
1259		石鍋	底部	底径 28.0	D-7		黒褐色	灰白色			灰白色	滑石	
1260	滑石製品				C-6		褐灰色	褐灰色			褐灰色		
1261	滑石製品				C-7		オリヅ黒色	灰色			オリヅ褐色		
1262	滑石製品				E-4	II	黒色	灰白色			灰色		
1263	滑石製品				D-2	II	黒色	灰白色			灰白色		
1264	滑石製品				B-3	Ic	暗灰黄色	暗灰黄色			灰オリヅ色		
1265	滑石製品				D-7	Ic	褐灰色	褐灰色			褐灰色		
1346	白磁	碗	口縁～高台	口径 13.0	C-10	Ia	灰白色	灰白色	施釉・露胎	施釉	灰白色		
1347	白磁	碗	体部～高台	底径 4.6	E-5	Ib	灰白色	灰白色	施釉・露胎	ロクロ調整・施釉	白色		
1348	白磁	皿	口縁～体部	口径 13.8	C-9	Ib	灰白色	灰白色	施釉	施釉	灰白色		
1349	白磁	皿	体部～高台	底径 5.0	C-3	Ib	灰白色	灰白色	ロクロ調整・施釉・露胎	施釉	灰白色		

番号	種類	器種	部位	法量(cm)	出土区	層	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土色調	胎土特徴	文様・その他
1350	白磁	皿	体部～高台	底径	5.0	I b	灰白色	灰白色	口調整、施釉	施釉	灰白色		
1351	白磁	皿	口縁～高台	口径	9.8	I b	灰白色	灰白色	口調整、施釉、露胎	施釉、露胎	灰色		
1352	白磁						淡黄色	淡黄色	水挽き	水挽き	淡黄色		
1353	陶器	半跏甕	口縁～体部	口径	25.4	I a	灰黄褐色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	褐色		黒薩摩、苗代川焼
1354	陶器	小甕	口縁～体部	口径	15.0	I・表	灰オリブ色	オリブ黒色	鉄釉	鉄釉	オリブ黒色		黒薩摩、苗代川焼
1355	陶器	半跏甕	口縁部	口径	27.0	I a	オリブ黒色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい赤褐色		黒薩摩、苗代川焼
1356	陶器	小甕	口縁～体部	口径	15.0	I a	黒褐色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	灰色		黒薩摩、苗代川焼
1357	陶器	擂鉢	口縁部		B-4	I a	黄褐色	にぶい赤褐色	鉄釉	鉄釉	灰赤色		黒薩摩、苗代川焼
1358	陶器	半跏甕	口縁部		B-5	I b	オリブ黒色	黒褐色	鉄釉	鉄釉	黒褐色		黒薩摩、苗代川焼
1359	陶器	甕	底部	底径	7.4	I a	黒褐色	黄灰色	鉄釉	鉄釉	灰オリブ色		黒薩摩、苗代川焼
1360	陶器	甕	口縁部	口径	21.4	I a	オリブ黒色	灰褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい黄褐色		黒薩摩、苗代川焼
1361	陶器	擂鉢	体～底部	口径	9.0	I b	オリブ黒色	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	赤褐色		黒薩摩、苗代川焼
1362	陶器	茶家	蓋	径	12.0	I c	オリブ黒色	にぶい赤褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい褐色		黒薩摩、苗代川焼
1363	陶器	茶家	蓋	径	6.8	I a	極暗赤褐色	灰褐色	鉄釉	鉄釉	黒色		黒薩摩、苗代川焼
1364	陶器	茶家	蓋	径	9.6	I b	オリブ黒色	灰褐色	鉄釉	鉄釉	灰褐色		黒薩摩、苗代川焼
1365	陶器	茶家	口縁～底部	最大径	17.4	I	黒褐色	暗オリブ褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい黄褐色	細粒	黒薩摩、苗代川焼
1366	陶器	茶家	口縁～体部	口径	11.6	I b	暗褐色	オリブ褐色	鉄釉	鉄釉	にぶい赤褐色		黒薩摩、苗代川焼
1367	陶器	茶家	口縁～体部	口径	5.6	I	暗褐色	黒色	鉄釉	鉄釉	黒褐色		黒薩摩、苗代川焼
1368	陶器	碗	体部～高台	口径	3.6	I b	にぶい黄色	にぶい黄色	そば釉、貫入	そば釉、貫入	灰黄色		白薩摩
1369	陶器	碗	底部	底径	4.6	I b	にぶい赤褐色	灰黄褐色	白釉、垂釉	白釉、露胎	にぶい赤褐色	細粒	忘野焼
1370	陶器	碗	体部～高台	底径	4.6	I a	灰白色	緑色	白釉	緑釉、釉剥ぎ	灰白色		京焼
1371	陶器	碗	口縁～体部	口径	11.4	I a	淡黄色	淡黄色	そば釉、貫入	そば釉、貫入	灰白色	細粒	白薩摩
1372	陶器	大皿	口縁～体部		B-2・3	I b	灰黄褐色	浅黄色	透明釉	透明釉	灰黄色		龍門寺焼
1373	陶器	碗	底部	底径	4.8	I b	オリブ色	オリブ色	そば釉	そば釉	灰白色		白薩摩
1374	陶器	小皿	口縁～体部	口径	12.0	I a	オリブ色	灰白色	透明釉	透明釉	浅黄褐色		
1375	陶器	擂鉢	口縁～体部	口径	34.0	I b	黒褐色	黒褐色	鉄釉、露胎	鉄釉、露胎	浅黄褐色		
1376	陶器	壺	体部		C-3	I b	黒褐色	褐灰色	鉄釉、露胎	鉄釉、露胎	黄灰色	細粒	琉球焼

第 45 表 金属器出土遺物一覧

番号	種類	器種	部位	出土区	層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
225	鉄製品	金具		掘立柱13		3.4	1.1	0.5	16.07
240	鉄製品	釘		掘立柱16		10.3	1.1	0.9	22.50
246	青銅製品	鈴		掘立柱20		2.8	2.3	2.2	16.10
346	鉄製品			方形竪穴5		4.1	2.2	1.3	35.03
347	鉄製品	鉄鏃		方形竪穴5		6.5	2.5	0.7	17.48
364	鉄製品	鉄鏃	柄部	C-6		5.5	1.2	1.1	8.72
387	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	II	2.5	2.6	0.2	2.49
388	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	II	2.3	2.3	0.2	1.65
389	古銭(青銅)	永楽通寶		D-12	II	2.5	2.5	0.15	3.29
390	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	II	2.3	2.4	0.2	1.87
391	古銭(青銅)	宣徳通寶		D-12	II	2.5	2.5	0.1	2.31
392	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	II	2.4	2.4	0.15	2.42
393	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	II	2.3	2.3	0.15	3.06
394	古銭(青銅)	洪武通寶		D-12	II	2.4	2.4	0.5	9.91
523	鉄製品	小刀	柄部	D-7		5.5	1.3	0.8	7.60
524	古銭(青銅)	開元通寶		D-6		2.5	2.5	0.15	2.65
1284	鉄製品	釘		E-3	I b	8.6	0.7	0.6	15.54
1285	鉄製品	釘		D-6	II	7.2	0.7	0.7	6.35
1286	鉄製品	釘		E-4	I b	8.2	0.8	0.7	14.76
1287	鉄製品	釘		C-5	III a	12.7	1.1	1.0	15.35
1288	鉄製品	釘		D-7	I c	5.2	0.6	0.4	9.79
1289	鉄製品	釘		溝3	I	8.2	0.8	0.6	8.44
1290	鉄製品	釘		F-7	I a	6.3	0.6	0.4	6.45
1291	鉄製品	釘		D-7	I a	4.3	1.1	0.6	2.89
1292	鉄製品	釘		D-4	I c	3.9	1.0	0.6	2.87
1293	鉄製品	釘		D-8	I b	4.4	0.7	0.7	4.05
1294	鉄製品	釘		E-7	I c	5.8	0.7	0.4	6.55
1295	鉄製品	釘		C-7	I b	3.3	0.6	0.4	3.15
1296	鉄製品	釘		D-8	I c	4.2	0.6	0.4	3.92
1297	鉄製品	釘		B-9	II	4.6	0.8	0.6	6.03
1298	鉄製品	釘		C-9	I a	3.6	0.6	0.6	3.28
1299	鉄製品	釘		D-7	I b	5.4	1.5	1.2	6.65
1300	鉄製品	傘釘		D-4	I b	2.9	3.0	0.4	10.95
1301	鉄製品	傘釘		E-3	I a	3.5	3.3	0.6	8.60
1302	鉄製品	板金製品		E-6	II	3.65	0.7	0.2	2.76
1303	鉄製品	板金製品				2.4	0.8	0.4	3.50
1304	鉄製品	板金製品		B-4	I a	5.3	0.9	0.6	5.43
1305	鉄製品	板金製品		C-11	II	3.8	0.8	0.4	8.41
1306	鉄製品	板金製品		F-4	II	2.9	1.8	0.4	2.82
1307	鉄製品	板金製品		F-4	II	2.9	1.8	0.6	13.15
1308	鉄製品	板金製品		D-9	I a	5.7	1.8	0.7	9.05
1309	鉄製品	刀子	刃部	E-5	II	6.3	1.2	0.5	7.50
1310	鉄製品	刀子	差し込み部	F-5		9.7	2.3	0.8	28.63
1311	鉄製品	刀子	刃部	D-4	I b	5.1	1.7	0.4	6.31
1312	鉄製品	板金製品		E-4	I b	4.1	1.3	0.6	5.07
1313	鉄製品	板金製品		D-6	I b	6.0	0.9	0.9	13.03
1314	鉄製品	板金製品		E-4	I b	4.5	2.0	0.5	7.00
1315	鉄製品	板金製品		D-9	I a	4.1	1.4	0.2	5.60
1316	鉄製品	板金製品		D-9	I a	4.1	2.3	0.4	7.20
1317	鉄製品	板金製品				5.1	1.3	0.6	13.28
1318	鉄製品	板金製品		D-7	I a	7.2	1.6	0.8	31.00
1319	鉄製品	鉄鏃		F-7	II	5.6	0.9	0.6	6.36
1320	鉄製品	鉄鏃		D-6	II	8.8	2.2	1.1	16.36
1321	鉄製品	鉄鏃		D-7	I a	5.8	1.5	0.7	9.08
1322	鉄製品	鉄鏃		D-8	I b	4.6	0.7	0.5	5.34
1323	鉄製品	鉄鏃		D-8	I c	18.5	1.3	1.3	31.13
1324	鉄製品	鉄鏃		D-8	II	5.8	1.1	0.6	15.27
1325	鉄製品	鉄鏃		D-5	I b	7.5	1.2	0.8	11.34
1326	鉄製品	鉄鏃		B-4	I b	5.45	1.1	0.9	9.05
1327	鉄製品			C-9	I a	2.6	2.4	0.4	11.49
1328	鉄製品			B-3	I b	8.6	5.3	1.2	111.15
1329	鉄製品			E-7	I a	2.3	2.4	0.3	2.56
1330	鉄製品			E-9	I a	3.2	2.3	0.4	4.44
1331	青銅製品	鐙止め		C-9	I a	3.65	2.4	0.1	13.86
1332	鉛製品	鉄砲玉		C-9	I a	1.4	1.4	1.3	8.22
1333	青銅製品	パイプ		C-3	I a	4.3	1.0	0.9	2.65
1334	青銅製品	飾り金具		D-7	I a	3.4	1.5	0.2	3.02
1335	鉄製品	鈴		C-6		3.6	3.0	3.0	14.29
1336	青銅製品	コウガイ		F-17	I	17.9	0.6	0.3	7.67
1337	古銭(青銅)	洪武通寶		D-7		2.4	2.4	0.15	3.11
1338	古銭(鉄)			F-3		2.5	2.5	0.4	2.82
1339	古銭(青銅)	洪武通寶		3T		2.4	2.4	0.15	1.74
1340	古銭(青銅)			C-10	I a	2.5	2.5	0.15	1.55
1341	古銭(青銅)	洪武通寶		C-3		2.4	2.4	0.15	2.39
1342	古銭(青銅)			C-3		2.4	2.4	0.15	2.89
1343	古銭(青銅)	〇永〇寶		C-3	I b	1.3	2.5	0.1	0.95
1344	古銭(鉄)			C-2	I a	2.5	2.5	0.4	5.72
1345	古銭(青銅)			D-12	II	2.5	2.5	0.5	7.66

第Ⅳ章 科学分析等の結果

第1節 川内市上野城跡出土のウマ遺体

西中川 駿・*久 林 朋 憲

(鹿児島大学名誉教授・*鹿児島大学獣医学科)

はじめに

古代の遺跡から出土するウマの遺体は、わが国のウマの起源、系統ならびに渡来の時期を知る上に貴重な資料となっている。ウマがいつ頃、わが国に渡来してきたかは明らかでないが、林田によると小型馬は縄文時代に南から、中型馬は弥生時代に北部九州に渡来したことを論じている。しかし、これまで報告された縄文時代の出土例は、近藤らの科学的な分析により悉く時代が新しくなり、現在のところ福江市の大浜遺跡出土の弥生中期が最も古いとされている。

最近、全国各地の遺跡からウマ遺体の出土報告があるが、いずれも古墳時代以降のもので、特に中世のものが多い。鹿児島県内のウマ遺体の出土例は、橋牟礼川遺跡、上能野貝塚（古墳）、麦之浦貝塚（平安）、出水貝塚（中世）、中島ノ下遺跡および平松原遺跡（江戸）などにみられ、また、広田遺跡や宇宿貝塚などからの出土例は弥生時代と報告されているが、後世のものと思われる。

今回調査を依頼された上野城遺跡は、川内市百次上野にあり、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い鹿児島県教育委員会が平成12年5月から13年3月まで発掘調査を行ったもので、ウマ遺体（臼歯）は、中世（12～13世紀）の土坑から出土したものである。検索方法は肉眼的に精査した後、ノギスを用いて計測し、林田らや筆者らの方法で、年齢や体高の推定を試みたので、その概要を報告する。

出土状況と出土量

調査時の写真や図面からみると、土坑の大きさはウマ1体分が入る大きさであり、頭部が土坑の端に位置し、吻側を下に向けて埋葬されており、上顎を上、下顎を下にして噛み合った状態の左右の上、下顎臼歯が検出されている。他の骨は全く検出されていないが、全身が埋葬されていたと思われる。

出土した臼歯は、左右、上下の第二、三、四前臼歯、第一、二、三後臼歯である。右の臼歯には歯槽の部分の下顎骨体が付着している。総重量は703.9gである。

出土歯の概要

出土した臼歯の各計測値は表1に示した。

左側の上顎臼歯の歯根は破損しているが、第二前臼歯から第二後臼歯はほぼ完全な形を残している（図版1の1）。下顎も同様で第三後臼歯のみが不完全である（図版1の2）。右側は上下ともに完全な形に残っており、下顎の臼歯は下顎体が付着しているため中心高を測定出来なかった（図版1の3、4）。臼歯の交合面にみられるエナメルヒダの形態は、現生の御崎ウマに類似しており、その大きさも近似している。

表 1. 上野城出土の臼歯の計測値

歯の種類		P2	P3	P4	M1	M2	M3
上	歯冠長	L	35.09	25.85	25.07	23.55	23.99
		R	34.94	26.11	25.3	23.42	23.62
	歯冠幅	L	22.47	24.64	25.44	23.65	23.89
		R	22.85	25.13	25.07	23.52	23.68
	顎 中心高	L	39.4	48.14	45.98	44.76	50.63
		R	36.72	46.84	44.74	44.58	50.57
下	歯冠長	L	34.43	27.11	26.37	24.36	24.23
		R	33.67	27.41	26.33	25.1	24.7
	歯冠幅	L	12.8	814.9	15.81	14.04	13.33
		R	13.98	14.19	15.61	14.93	13.12
	顎 中心高	L	32.64	47.5	54.75	48.89	51.92
		R	34.47	46.09	52.22	51.58	

L : 左側、R: 右側、P2~P4 : 第二~第四前臼歯、M1~M3 : 第一~三後臼歯

表 1 の計測値から、筆者らの方法で臼歯列長および頭蓋最大長、下顎全長を求め、林田らの方法で体高を求めると、 $125.88 \pm 2.49\text{cm}$ となる。これは現生の御崎ウマ (130cm) より少し小さい中型馬に属する。また、臼歯の中心高より筆者らの方法で年齢を推定すると、 7.91 ± 0.96 歳となる。なお、雌雄の判別は、犬歯の有無や寛骨の恥骨櫛の形状から可能であるが、犬歯や寛骨が検出されていないことから、雌雄の判別が出来なかった。

考 察

九州のウマの出土例は、熊本県の塚原古墳や上の原遺跡など数多くの遺跡(113 箇所)から報告されている。鹿児島県下では前述したように、橋牟礼川遺跡や麦之浦貝塚など平安時代の出土例が最も古い。しかし、未報告ではあるが橋牟礼川遺跡からは古墳時代のウマの下顎骨が出土している。長谷部は、轟貝塚や出水貝塚などから馬歯を発掘し、石器時代にウマありと報告し、林田も出水貝塚でウマの歯と骨を検出し、縄文後期にウマの存在を論じた。しかし最近、近藤らは出水や大崎貝塚出土のウマの骨をフッ素による年代測定を行い、13 世紀頃のものであると報告している。わが国のウマの渡来時期として、前述の福江市の大浜遺跡出土の臼歯が、炭素年代測定により $AD40 \pm 90$ 年が報告されていることから、弥生中期以降と考えてよいであろう。また、わが国へ渡来経路として、野沢らは蒙古系統のウマが、朝鮮半島を経由して北部九州に入り、北上、南下して全国に広まったと考えており、筆者らもこれに賛同するものである。

本遺跡出土のウマは、年齢 7~8 歳で、体高 125cm 前後であり、これは現生のトカラウマより大きく、御崎ウマより少し小さいウマで、中型馬であり、全国各地から出土する中世のウマの大きさの範疇にあることがわかった。このウマの用途についてはわからないが、乗馬、騎馬や運搬などに

使役されていたことが考えられる。

まとめ

川内市上野城遺跡（12～13 世紀）から出土したウマの臼歯について検索した。

1. ウマの臼歯、左右、上下の第二前臼歯から第三後臼歯が噛み合って出土しており、その出土量は、703.9g である。
2. 臼歯の形状は御崎ウマなど在来馬のものと類似しており、また、各計測値もよく似ている。各臼歯の歯冠長から体高を推定すると、125cm 位であり、また、臼歯の中心高より年齢を推定すると、7～8 歳である。
3. このウマの用途についてはわからないが、上野城を遺した人々によって、乗馬、騎馬や運搬などのために飼養されていたのであろう。

参考文献

1. 長谷部言人：石器時代の馬に関して、人類史、40（4）、31－135（1925）
2. 林田 重幸：日本在来馬の系統に関する研究、pp. 1－180、日本中央競馬会、東京（1978）
3. 指宿市教育委員会：中島ノ下遺跡、指宿市埋蔵文化財調査報告書、7. 119－123（1990）
4. 鹿児島県教育委員会：平松遺跡、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書、58. 76－80（1991）
5. 近藤 恵ら：野田市大崎貝塚縄文後期貝塚出土ウマ遺残のフッ素年代判定－縄文時代にウマはいたか－、人類学雑誌、99、93－99（1991）
6. 直良 信夫：日本馬の考古学的研究、pp. 1－201、校倉書房、東京（1984）
7. 西中川駿ら：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路 7 に関する研究、平成 2 年度文部省科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告書、pp. 1－197（1991）
8. 野澤 謙：東亜と日本在来馬の起源と系統、日本ウマ学会誌、3（1）、1－18（1992）
9. 芝田 清吾：日本古代家畜史の研究、pp. 100－189（1969）
10. 吉倉 真：塚原古墳群出土の馬歯、熊本県文化財調査報告書、16. 323－337（1975）

図版 1 の説明

ウマの臼歯

1. 左側上顎：左から第二前臼歯～第三後臼歯
2. 左側下顎：左から第二前臼歯～第三後臼歯
3. 右側上顎：右から第二前臼歯～第三後臼歯
4. 右側下顎：右から第二前臼歯～第三後臼歯



はじめに

今回の分析調査は、鹿児島県川内市に所在する上野城跡の中世（13～15世紀）の遺構と、京田遺跡の弥生時代中期の遺構について、覆土を水洗選別することによって得られた種実遺体の種類を明らかにし、当時の植物利用に関する資料を得る。

1. 上野城跡出土種実の同定

（1）試料

試料は、E3区 P206、E4区 P105の土坑覆土の水洗選別によって得られた試料17点と、C8区 P1544の柱穴の底に集中する種実遺体1点の計18点である。同一遺構で篩目径別に複数試料が存在し、1試料に複数の種類が数点～数十点含まれている。各試料の詳細は、同定結果とともに表1に記す。

（2）分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察・分類し、その形態的特徴を現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較し、種類を同定・計数した。細片を含み個体数推定が困難である種類は、表中に+（プラス）表示し、重量を求めた。C8区 P1544は細片を多量に含むため1mmの篩を通し、残渣を同定し、篩を通った試料を残渣とした。分析後の植物遺体は、乾燥剤とともに種類毎にビンおよび袋に入れ、保存する。

（3）結果

結果を表1に示す。植物遺体は全て完全に炭化した状態であった。木本種実ではアカガシ亜属イチイガシを含むコナラ属が、草本種実では栽培植物のイネ、オオムギ、コムギ、マメ類が同定された。その他に、炭化材、不明炭化物（木材組織が認められない、種類・部位ともに不明の炭化物を示す）などが検出された。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴等を、木本、草本の順に記す。

<木本>

- ・イチイガシ (*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属アカガシ亜属

炭化した子葉が同定された。炭化子葉は黒色、完形個体が多く、楕円形で頂部は尖らない。長さ10～15mm、径5mm程度。2枚の子葉が極端に不揃いである個体が多く、子葉の合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端からずれた位置にある。表面には1本の深い溝が基部から頂部に向かい2/3程度まで発達している。

岡本（1979）は、日本産ブナ科植物の子葉について、イチイガシには子葉の離れにくさ、著しい異形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれていること、そして中軸の圧痕が確認できることなどの特異性があることから、イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。試料には、このようなイチイガシの特異的特徴を典型的に示している個体が認められたため、イチイガシに同定することができた。なお、自然落下の場合、殻斗や幼果が成熟果実の落下数を上回るのが普通であるが、今回の試料からは、殻斗や幼果は確認されなかった。

- ・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

炭化した果実破片が同定された。黒色、完形ならば卵形か。表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。果実頂部の輪状紋が円柱状または円錐台状に突出する。おそらく上述のイチイガシであろうと思われるが、柱頭の遺存状態が悪いことから、アカガシ亜属にとどめた。

表 1 上野城跡出土種実遺体同定結果

試料記載事項 篩目径(mm)			部位	木本				草本					炭化材	不明炭化物	分析残渣
				コナラ属				イネ	オオムギ	コムギ	ムギ類	マメ類			
				アカガシ亜属	イチイガシ										
胚乳	果実	果実	胚乳	胚乳	胚乳	胚乳	胚乳	種子							
炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化							

E3区 P206	2	個体数	+	-	-	-	21	11	3	22	-	18	2	-
		重量(g)	11.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	0.425	個体数	-	-	-	-	6	5	-	3	-	6	10	-
E4区 P105	2	個体数	-	-	-	-	32	10	1	20	6	10	11	-
	0.425	個体数	-	-	-	-	3	-	-	-	-	6	2	-
C8区 P1544		個体数	+	+	3	12	-	-	-	-	-	9	-	+
		重量(g)	112.47	0.54	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24.93

注) 「+」は細片を含み個体数推定が困難であるため、重量を求めた。

・コナラ属 (*Quercus*)

炭化した子葉破片と果実破片が同定された。種まで同定できない破片をコナラ属にとどめた。子葉の合わせ目に沿って半分に割れている個体が多い。頂部は尖らず、上述のイチイガシの形態に類似する。イチイガシには異形性を表現しない場合もある(岡本, 1979) ことから、コナラ属とした破片の大半はイチイガシであろうと思われる。

<草本>

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、胚乳は長楕円形でやや偏平。長さ4~5mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。基部には胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、2~3本の縦溝がある。焼け膨れて表面の遺存状態が悪いものや、胴切れの個体もみられる。

・オオムギ (*Hordeum valgate* L.) イネ科オオムギ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、紡錘状長楕円体で両端はやや尖る。長さ5~7mm、径3~4mm程度。腹面は1本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、穎が付着する個体が見られた。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

炭化した胚乳が同定された。黒色、楕円体で全体的に丸みを帯びている。長さ4~5mm、径3~3.5mm程度。腹面には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。

なお、遺存状態が悪く、オオムギとの判別が難しいものはムギ類とした。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

炭化した種子が同定された。黒色、長楕円体。長さ3~5mm、幅2~3mm程度。焼け膨れて表面が崩れている等遺存状態は悪いが、腹面中央の子葉の合わせ目上に長楕円形状で隆起する臍がある、ササゲ属 (*Vigna*) と思われる個体もみられる。子葉の合わせ目に沿って半分に割れた個体がみられる。子葉の合わせ目は平滑で、中心部がやや凹む。表面はやや平滑で光沢があるが、焼け膨れのため種皮が裂けている。ササゲ属にはササゲ、アズキ、リョクトウなどが含まれるが、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しく、一括して示している。

(4) 考察

上野城跡から出土した種実の種類には、有用植物が認められる。有用植物には、大陸などから持ち込まれた栽培植物と、自生していたと考えられる種類がある。渡来した栽培植物は、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類である。これらの穀類は、全て完全に炭化した状態であったため、火熱を受けたものと思われる。これらの栽培植物が、各遺構から出土した状況を考慮すると、上野城跡の近辺で栽培もしくは持ち込まれ利用されていたものが、生活残渣として破棄されたことが推定される。

イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は、紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。また、コナラ属の中でイチイガシのみが生食可能であることから、複数の種類が混在して貯蔵されていたとは考えにくい。おそらく、周辺の森林からイチイガシの成熟果実を選択的に採取し、貯蔵したことが推定される。そして、何らかの理由により火熱を受け子葉が残存したものと思われる。このように、イチイガシは利用価値が高いことから遺跡出土例も多い(岡本, 1979など)。よって、上野城跡でも、イネ、オオムギ、コムギ、マメ類などの穀類とともに、イチイガシが重要な植物質食糧であったことが推定される。

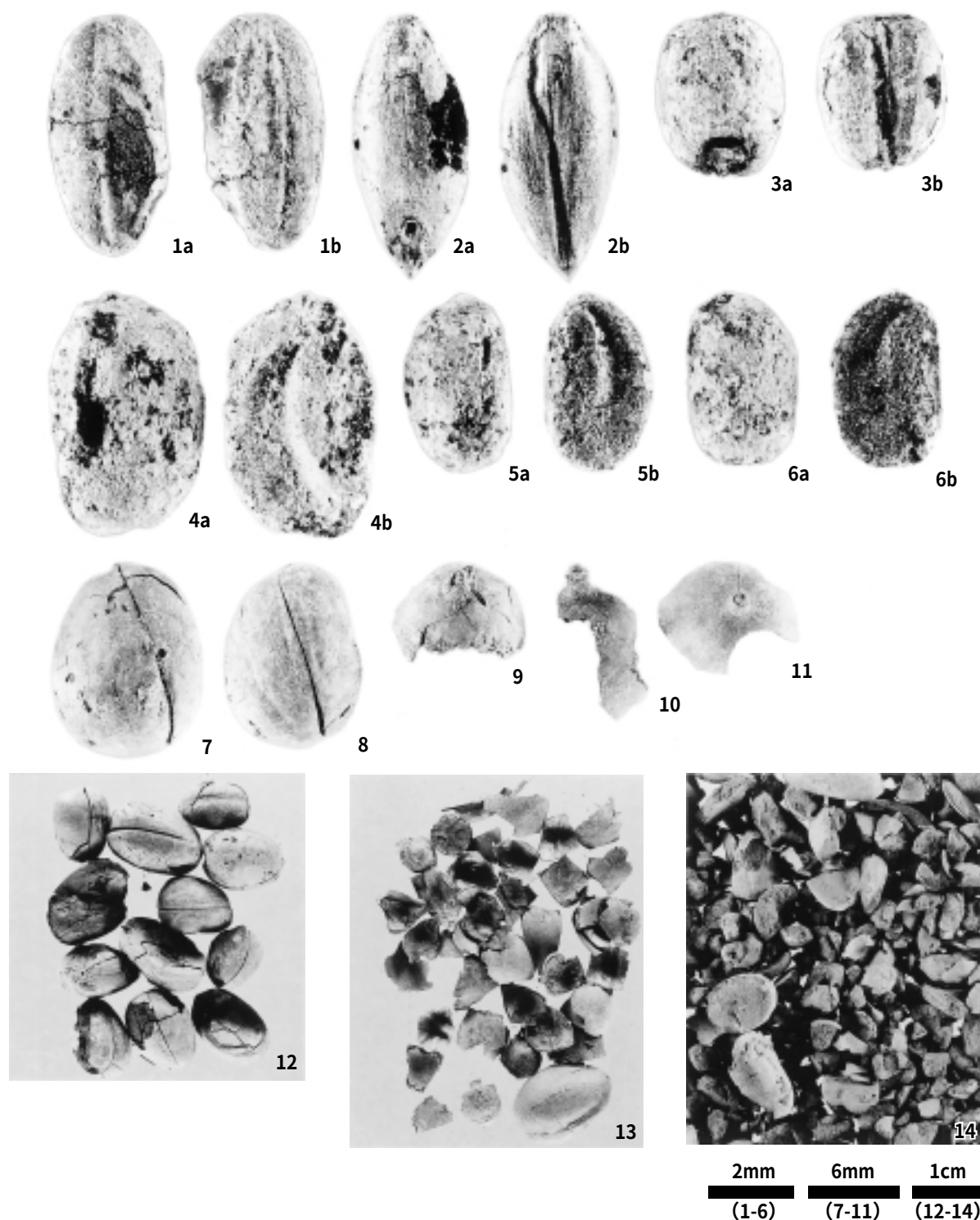
(5) 引用文献

石川茂雄(1994) 原色日本植物種子写真図鑑, 328p., 石川茂雄図鑑刊行委員会.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志(2000) 日本植物種子図鑑, 642p., 東北大学出版会.

岡本素治(1979) 遺跡から出土するイチイガシ. 大阪市立自然史博物館業績, 第230号, p. 31-39.

図版1 上野城跡出土炭化種実



- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. イネ 胚乳 (E4区 P105層) | 2. オオムギ 胚乳 (E3区 P206層) |
| 3. コムギ 胚乳 (E3区 P206層) | 4. マメ類 種子 (E4区 P105層) |
| 5. マメ類 種子 (E4区 P105層) | 6. マメ類 種子 (E4区 P105層) |
| 7. イチイガシ 子葉 (C8区 P1544層) | 8. イチイガシ 子葉 (C8区 P1544層) |
| 9. コナラ属アカガシ亜属 果実 (C8区 P1544層) | 10. コナラ属アカガシ亜属 果実 (C8区 P1544層) |
| 11. コナラ属アカガシ亜属 果実 (C8区 P1544層) | 12. イチイガシ 子葉 (C8区 P1544層) |
| 13. コナラ属 果実 (C8区 P1544層) | 14. コナラ属 子葉 (C8区 P1544層) |

第3節 上野城跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 上野城跡遺跡における放射性炭素年代測定

(1) 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	南北方向畝跡, 5	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.2	南北方向畝跡, 6	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.3	東西方向畝跡, 4	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法
No.4	東西方向畝跡, 1	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析 (AMS) 法

(2) 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定No. (Beta-)
No.1	※炭素量不足のため測定不能				153018
No.2	※炭素量不足のため測定不能				153019
No.3	750±40	-26.4	730±40	交点: cal AD 1280 1 σ : cal AD 1270~1290 2 σ : cal AD 1240~1300	153020
No.4	※炭素量不足のため測定不能				153021

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を校正することにより算出した年代。校正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベース ("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)) により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率) および2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

2. 上野城跡遺跡における植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。上野城跡遺跡の発掘調査では、13世紀頃とされる畠遺構が検出された。ここでは、同遺構におけるイネ科栽培植物の検討を主目的として分析を行った。

(2) 試料

分析試料は、基本土層断面、C・D-9区の南北方向畝跡、東西方向畝跡から採取された計14点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1 gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ヒエ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、シバ属

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属？）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

(5) 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡（水田跡・畑跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

ア) 基本土層断面

I b層（試料1）からIII b層（試料11）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、I c層（試料7）では密度が14,700個/gとかなり高い値であり、I b層（試料1～3）、II層（試料7）でも7,400～9,900個/gと高い値である。また、III a層（試料9）でも、3,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では、稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

III b層（試料11）では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

イ) 南北方向畝跡

試料1～3の3点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は5,100～7,300個/gと高い値である。したがって、同遺構では稲作が行われていた可能性が高いと

考えられる。

ウ) 東西方向畝跡

試料4～6の4点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料5'では密度が10,600個/gとかなり高い値であり、その他の試料でも2,800～4,300個/gと比較的高い値である。したがって、同遺構では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。

ヒエ属型は、基本土層断面のⅠc層（試料5）から検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である（杉山ほか, 1988）。また、密度も700個/gと低い値であることから、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

ア) 植物珪酸体の検出状況

基本土層断面のⅢb層では、クスノキ科が多量に検出され、イネ、ススキ属型、ウシクサ族A、クマザサ属型、ミヤコザサ節型、およびブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）なども検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。Ⅲa層では、イネやクスノキ科が増加しており、ススキ属型やウシクサ族Aも増加傾向を示している。Ⅱ層では、イネ、ススキ属型、ウシクサ族Aが増加しており、クスノキ科は減少している。Ⅰc層では、イネやススキ属型がさらに増加しており、マダケ属型も出現している。Ⅰb層でもおおむね同様の結果であるが、同層上部ではススキ属型やウシクサ族Aが減少している。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅲa層より上位ではイネが優勢であり、Ⅱ層より上位ではススキ属型も比較的多くなっていることが分かる。南北方向畝跡および東西方向畝跡における分析結果は、基本土層断面のⅠc層～Ⅱ層とおおむね同様である。

イ) 植生と環境の推定

Ⅲb層の堆積当時は、クスノキ科を主体としてシイ属やイスノキ属なども見られる照葉樹林が分布

していたと考えられ、その林床植生などとしてササ類が生育していたと推定される。Ⅲa層の時期には稲作が開始されていたと考えられ、遺跡周辺にはⅢb層と同様の照葉樹林が分布していたと推定される。Ⅱ層の時期には稲作が本格化したと考えられ、遺跡周辺ではススキ属やチガヤ属などが生育する草原的なところが増加し、照葉樹林は減少したと推定される。Ⅰc層からⅠb層にかけては、継続的に稲作が行われていたと考えられる。タケ亜科植物のうちマダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高いが、これらの植物が現れるのはⅠc層の堆積以降のことと考えられる。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、13世紀頃とされる畠遺構からはイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。Ⅲa層からⅠb層にかけては、継続的に稲作が行われていたと推定される。

畠遺構の周辺は、ススキ属やチガヤ属などが生育する草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科を主体としてシイ属やイスノキ属なども見られる照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

- 杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p. 70-83.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38（2），p. 109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p. 189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学，9，p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—．考古学と自然科学，17，p. 73-85.

表1 鹿児島県、上野城跡における植物珪酸体分析結果
換出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)

分類群	学名	基本土層断面					南北方向截跡					東西方向截跡				
		1	2	3	5	7	9	11	1	2	3	4	5	5'	6	
イネ科	Gramineae (Grasses)															
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	99	95	74	147	81	37	7	51	73	65	43	41	106	28	
イネ類群(類の表皮細胞)	Rice husk Phytolith				7					7						
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type				7											
キビ属型	Panicum type	7	7	7	7	7		7	59	87	58	100	81	35	7	
ススキ属型	Miscanthus type	35	125	60	162	73	30	7	147	94	86	121	81	113	120	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	28	81	82	66	95	66	22							7	
シバ属	Zoisa															
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)															
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	7	7		7	7			15	29	14	7		7		
ネササ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nesasa</i>	14		7			15		44		22	21		7		
クマササ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)				7		15	15		7				14	7	
ミヤコササ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	28	37	15	7	59	37		29	51	50	28	61	49	106	
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	7	7	15	7				7	7	7		14			
未分類等	Others	21		15	7	37	155	96	88	51	108	64	102	212	99	
その他のイネ科	Others															
表皮毛起源	Husk hair origin		51	15	29	15		7	59	36	14		41	21		
棒状珪酸体	Rod-shaped	127	161	194	280	403	354	243	323	276	273	256	366	451	268	
基部起源	Stem origin	14														
未分類等	Others	261	447	454	472	528	546	472	616	516	561	476	562	599	523	
樹木起源	Arboreal															
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	35	22	7	15	29	22	44	22	29	22	43	7	63	14	
ブナ科(アカガシ亜属?)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis?</i>			15		7	15				7			7		
クスノキ科	Lauraceae	56	37	97	44	103	244	170	139	51	93	64	102	134	191	
マンサク科(イスノキ属)	Dicoryliaceae	28	37	60	37	22	30	15	66	36	115	14	34	71	85	
その他	Others	35	29	15	22	44	111	52	64	58	65	71	34	7	71	
(海綿骨針)	Sponges															
植物珪酸体総数	Total	803	1143	1132	1334	1463	1697	1194	1731	1416	1560	1315	1523	1897	1617	

おもな分類群の推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{a}$)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	2.90	2.80	2.19	4.33	2.37	1.08	0.22	1.51	2.14	1.90	1.25	1.19	3.11	0.83
	<i>Echinochloa</i> type				0.62										
	Miscanthus type	0.44	1.54	0.74	2.01	0.91	0.37	0.09	0.73	1.08	0.71	1.23	1.01	0.44	1.14
	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.08	0.09		0.09	0.09			0.17	0.34	0.17	0.08		0.08	
	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nesasa</i>			0.04			0.07		0.21		0.10	0.10		0.03	
	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)				0.06		0.11	0.11		0.06				0.11	0.05
	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.08	0.11	0.04	0.02		0.18	0.11	0.09	0.15	0.15	0.09	0.18	0.15	0.32
タケ亜科の比率 (%)	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	35	44		52	100			36	62	40	31		22	
	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nesasa</i>	29		44			20		45		25	38		9	
	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)				34		31	50		10			100	29	14
	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	36	56	56	14		49	50	19	28	36	32	100	40	86

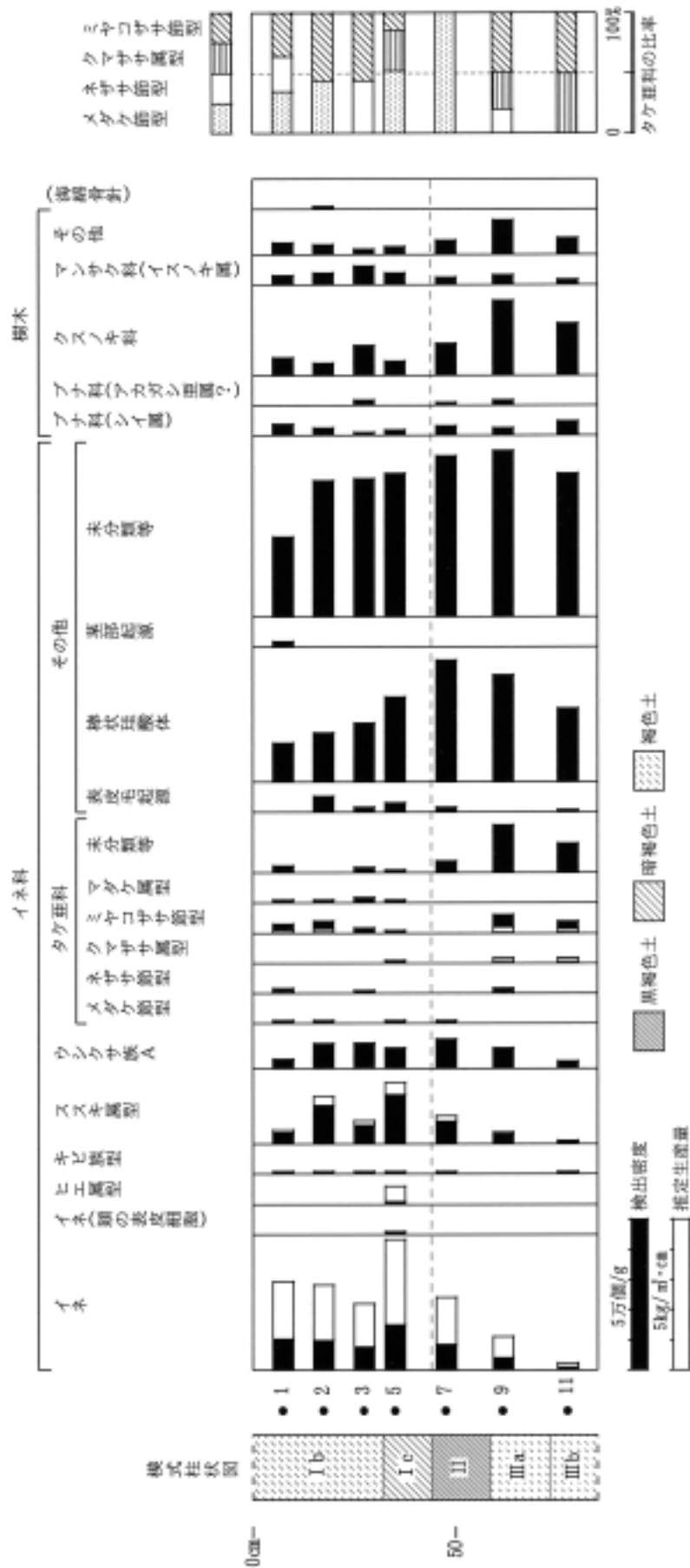


図1 上野城跡遺跡、基本土層断面における植物珪酸体分析結果

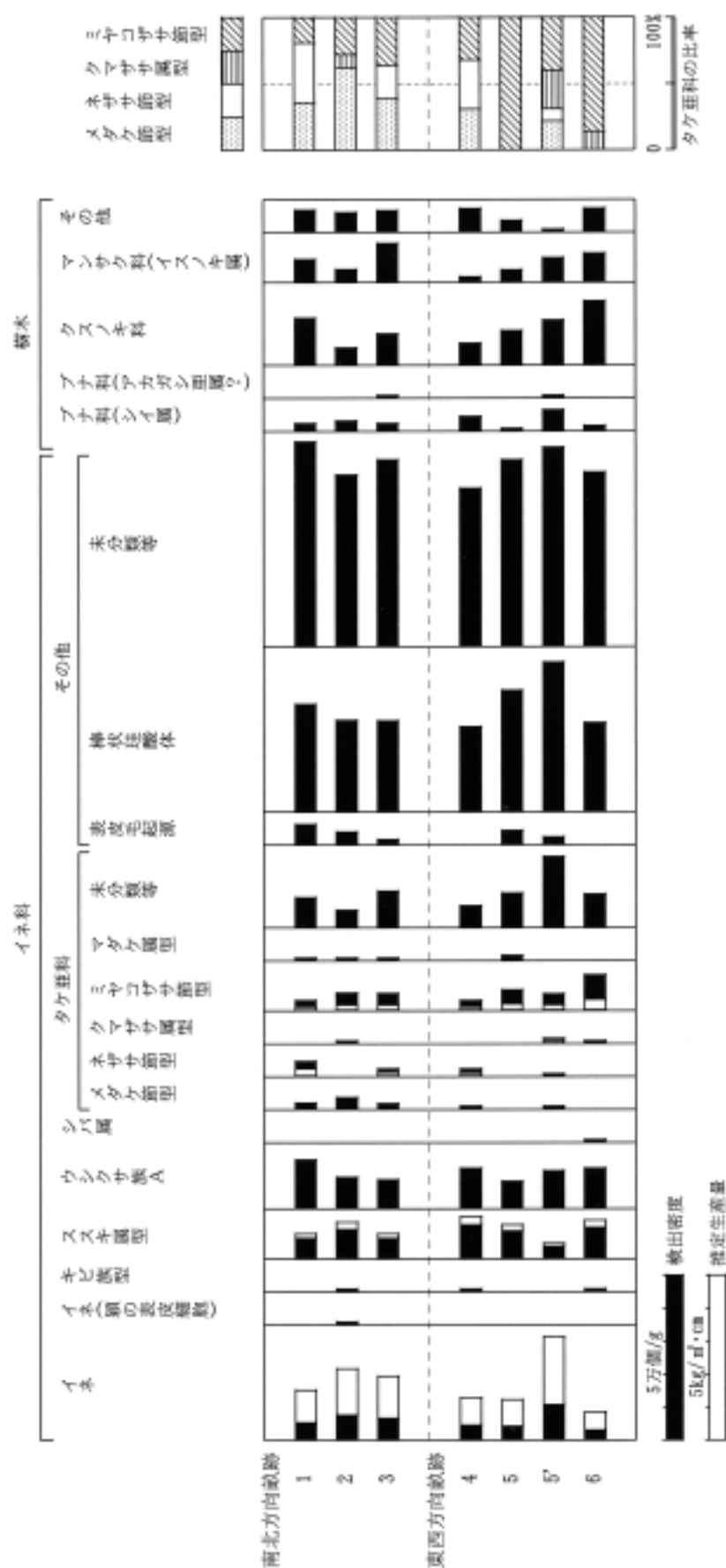
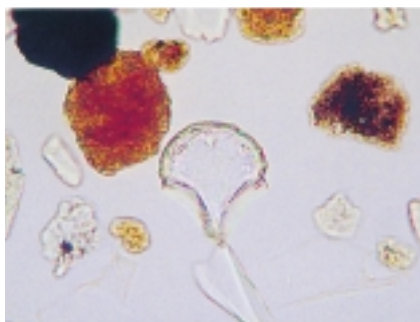
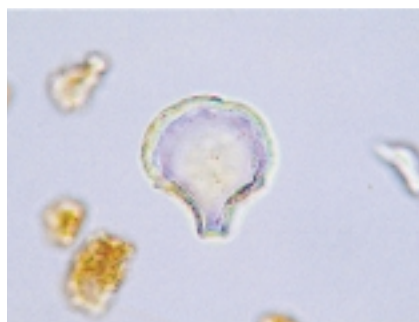


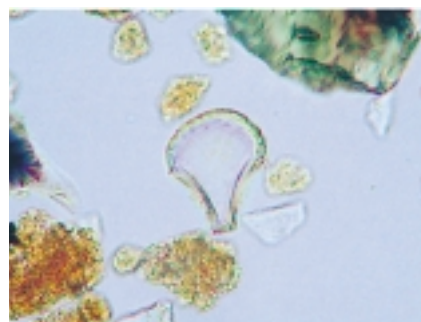
図2 上野城跡遺跡、畠畝埋土における植物珪酸体分析結果



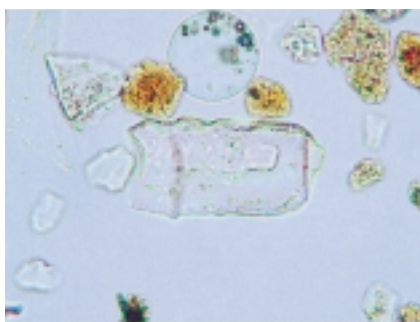
イネ
試料2



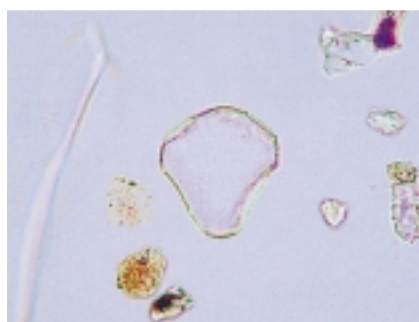
イネ
試料3



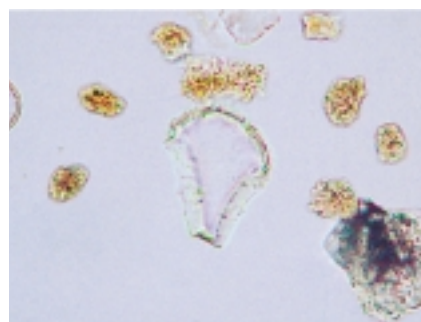
イネ
試料5



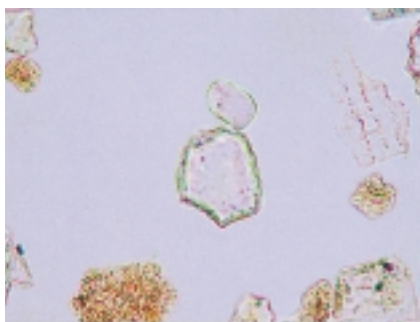
ヒエ属型
試料5



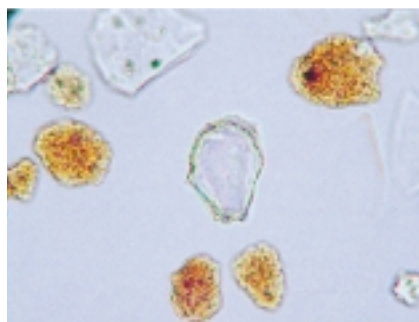
ススキ属型
試料3



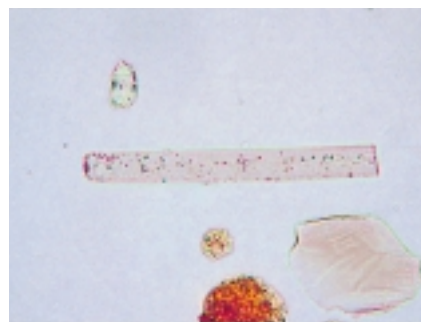
メダケ節型
試料5



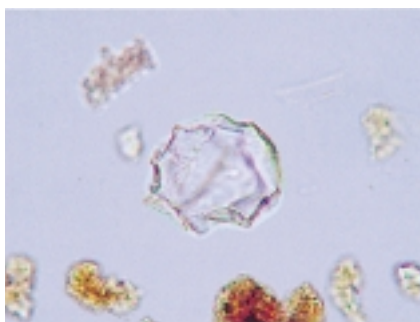
ミヤコザサ節型
試料5



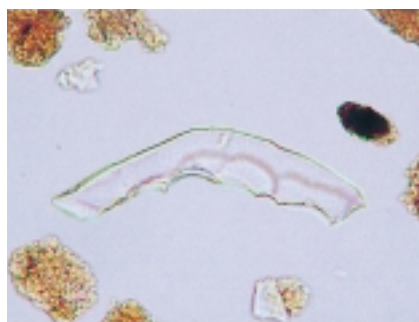
マダケ属型
試料3



棒状珪酸体
試料2



シイ属
試料9



クスノキ科
試料9



マンサク科 (イスノキ属)
試料11

植物珪酸体の顕微鏡写真 ————— 50 μ m

3. 上野城跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、基本土層断面、C・D-9区の南北方向畝跡、東西方向畝跡から採取された計8点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。

4. 結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉6、草本花粉5、シダ植物孢子2形態の計13である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料について、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、クリ、シイ属?マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、アカザ科—ヒユ科、タンポポ科、キク科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

1) 南北方向畝跡(試料1～3)

ヨモギ属、タンポポ亜科、イネ科などが検出されたが、いずれも少量である。

2) 東西方向畝跡(試料4～6)

草本花粉のヨモギ属の占める割合が高く、イネ科、タンポポ亜科、キク亜科、アカザ科―ヒユ科が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属などが検出されたが、いずれも少量である。

3) 基本土層(Ic層、試料6)

草本花粉のヨモギ属の占める割合が高く、タンポポ亜科、イネ科が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が少量検出された。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、13世紀頃とされる畠遺構の周辺は、ヨモギ属を主にイネ科やタンポポ亜科などが生育する陽当たりの良い比較的乾燥した環境であったと推定される。これらの植物は、人里植物ないし耕地雑草の性格をもっているが、明らかな栽培植物を含む分類群は検出されなかった。また、遺跡周辺にはコナラ属アカガシ亜属(カシ類)などの照葉樹林が分布していたと推定される。なお、花粉分析では植物珪酸体分析で多産したクスノキ科が認められないが、クスノキ科は花粉壁が完全には保存されないことから、花粉分析では把握されないという問題がある。

花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

中村純(1973)花粉分析. 古今書院, p. 82-110.

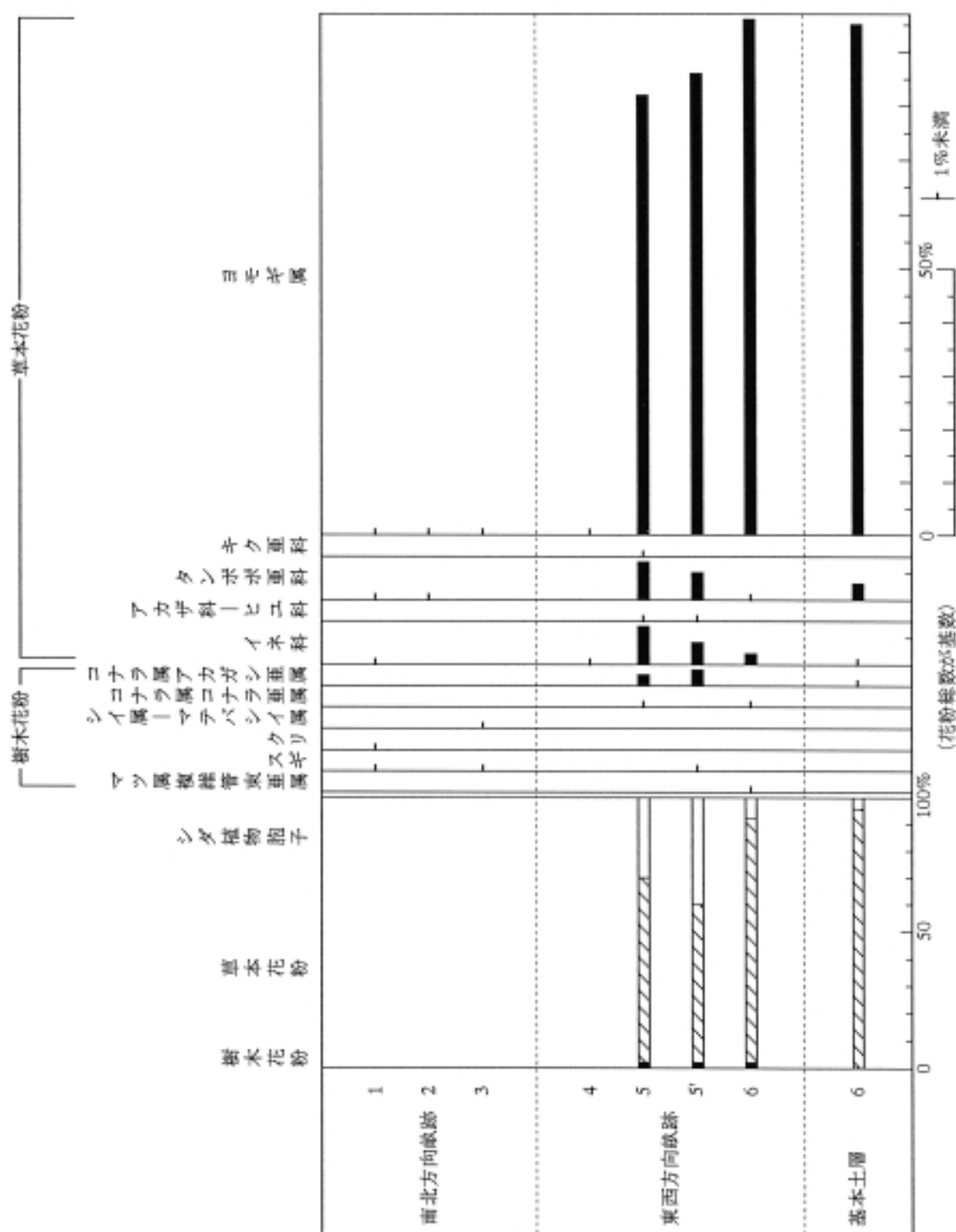
金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

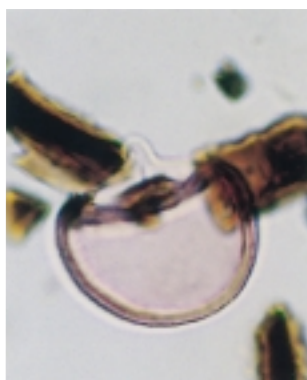
中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表1 上野城跡における花粉分析結果

分類群		C・D-9区									
		南北方向畝跡					東西方向畝跡				
学名	和名	1	2	3	4	5	5'	6	6	6	
Arboreal pollen	樹木花粉										
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属								1		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1		1			1				
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1									
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属			3							
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属					1		1			
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属					2	3			1	
Nonarboreal pollen	草本花粉										
Gramineae	イネ科	1			2	9	5	2		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科					1	1				
Lactucoideae	タンポポ科	1	1			9	6	1		4	
Asteroideae	キク亜科					1					
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	21	12	9	15	102	97	121		110	
Fern spore	シダ植物胞子										
Monolete type spore	単条溝胞子	9	2	5	13	48	72	10		4	
Trilete type spore	三条溝胞子		2		1	7	3	3		1	
Arboreal pollen	樹木花粉	2	0	4	0	3	4	2		1	
Nonarboreal pollen	草本花粉	23	13	9	17	122	109	124		115	
Total pollen	花粉総数	25	13	13	17	125	113	126		116	
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	1	5	1	3		2	
Fern spore	シダ植物胞子	9	4	5	14	55	75	13		5	
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	



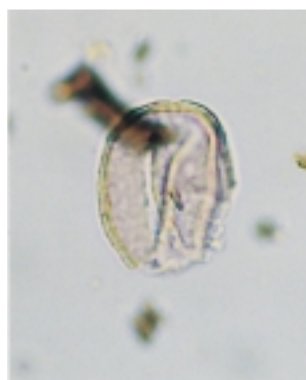
上野城跡の花粉・孢子



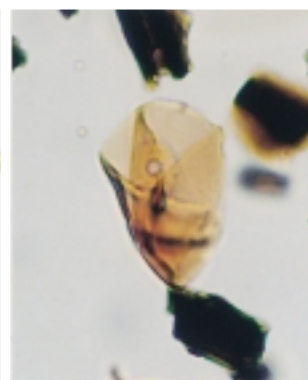
1 スギ



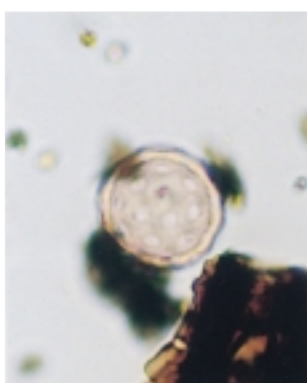
2 コナラ属コナラ亜属



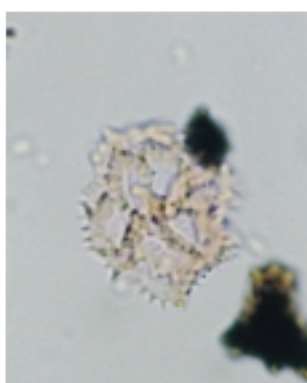
3 コナラ属アカガシ亜属



4 イネ科



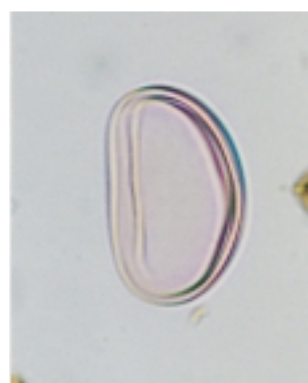
5 アカザ科—ヒユ科



6 タンポポ亜科



7 ヨモギ属



8 シダ植物単条溝孢子

— 10 μ m

4. 上野城跡における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、C・D-9区の東西方向畝跡から出土した種実とみられる炭化物（試料5）である。

3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

本試料は、長径約4mm、短径約2mm程度の炭化物である。表面は摩滅し、本来の形状と表面模様は不明である。木材細胞の構造はもたず種実の可能性はあるが、摩滅により形態的特徴が不明であることから、同定には至らなかった。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類，弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p. 131-139.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子，日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276-283.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出，月刊考古学ジャーナルNo. 355，ニューサイエンス社，p. 2-14.

5. 上野城跡におけるリン・カルシウム分析

1. はじめに

上野城跡の発掘調査では、土坑墓とみられる土坑が複数検出された。ここでは、同遺構内の土壌について分析を行い、人骨などの生物遺体の有無について検討を試みた。

2. 試料

分析試料は、土坑SK-14、SK-19、SK-37、P875の4地点から採取された7点、および比較試料としてP875の遺構外から採取された1点の計8点である。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

- 1) 試料を絶乾（105℃・24時間）
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
- 3) 試料を塩化ビニール製リング杵に入れ、圧力15t/㎡でプレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

なお、X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

4. 分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表1に示し、リン酸（ P_2O_5 ）とカルシウム（CaO）の含量を図1に示す。

5. 考察

土壌に含まれるリン酸やカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は通常0.1～0.5%程度、耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

土坑の埋土におけるリン酸含量は、SK-14で0.85%、SK-19で0.70%、SK-37で0.73～1.02%（平均0.91%）、P875で0.72～0.76%（平均0.74%）と比較的高い値であり、比較試料（遺構外の試料）の0.47%よりも明らかに高い値である。

カルシウム含量については、目的とする試料と比較試料との間にとくに明瞭な差異は認められなかった。リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して水に難溶性の化合物となるため、水的作用により流出することは考えにくい。カルシウムは一般に溶解性が大きいことから（竹迫、1993）、

土壌中でカルシウムが拡散・移動した可能性が考えられる。

以上のことから、各土坑の内部には、リン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられる。ただし、遺構埋土の上位層について分析が行われていないことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。今後は、遺構の上位層についても分析を行い、今回の結果と比較検討する必要があるだろう。

文献

竹迫紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法2，研究対象別分析法．東京大学出版会，p. 38-45.

表1 鹿児島県、上野城跡遺跡における蛍光X線分析結果

単位：wt(%)

地点・試料		S K-14	S K-19	S K-37			P 875		比較試料
原子No.	化学式			1	2	3	埋土	底	遺溝外
11	Na ₂ O	0.80	0.72	0.95	0.88	0.80	0.76	0.81	0.75
12	MgO	0.85	0.83	1.03	0.73	0.73	1.06	0.99	0.90
13	Al ₂ O ₃	28.42	27.09	29.09	31.08	29.07	28.39	29.49	33.07
14	SiO ₂	57.28	59.50	55.01	55.63	56.11	55.74	55.43	50.88
15	P ₂ O ₅	0.85	0.70	1.02	0.73	0.97	0.76	0.72	0.47
16	SO ₃	0.22	0.15	0.42	0.33	0.37	0.27	0.12	0.31
19	K ₂ O	1.32	1.54	1.50	1.66	1.56	1.42	1.58	1.34
20	CaO	0.91	0.81	1.10	1.05	1.05	1.26	1.13	1.10
22	TiO ₂	1.03	0.91	1.02	0.84	0.98	1.06	1.01	1.28
23	V ₂ O ₅	0.02	0.01	0.04	0.02	0.03	0.02	0.04	0.01
25	MnO	0.33	0.29	0.36	0.22	0.34	0.39	0.19	0.35
26	Fe ₂ O ₃	7.91	7.40	8.42	6.80	7.94	8.83	8.43	9.47
30	ZnO	0.05	0.05	0.04	0.04	0.05	0.04	0.05	0.05

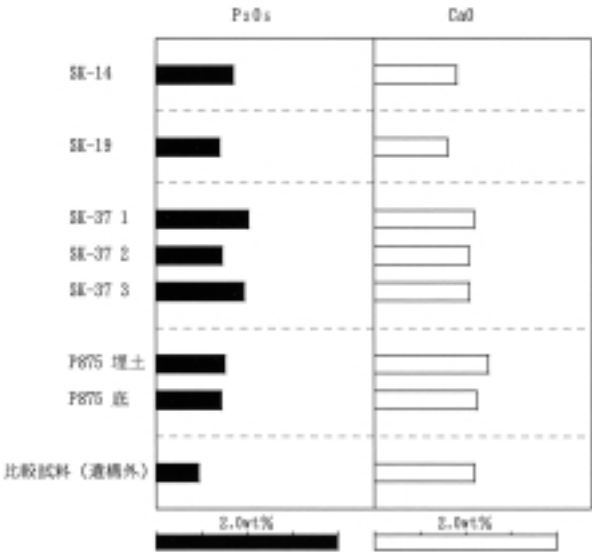


図1 上野城跡遺跡におけるリン・カルシウムの含量

第V章 まとめ

1 旧石器時代

この時代の主な出土地点と出土層は、E・F－3・4区で第Ⅷ層であった。この地点ではフレーク等が20点まとまって出土している。他の旧石器の遺物は散在状態であった。この20点は少ないがブロックの形態ととらえてよいだろう。この中には、ナイフ形石器1点、剥片尖頭器が1点出土している。これらの遺物は二次シラスの中から出土しているので後期旧石器と考えられる。このブロックの性格はフレークも出土しているので小規模の石器製作跡が考えられる。

また、土坑が第Ⅷ層に検出している。楕円形の土坑で用途は不明である。

2 縄文時代

この時代の遺構は埋土の状態から「落とし穴」と判断した。その遺構は1基が検出され、逆茂木ピットが2か所みられる。

この時代の遺物は早期と中期と晩期が出土している。

縄文早期は貝殻条痕と貝殻刺突組み合わせの特徴を持つ石坂式土器系、短い貝殻条痕を鋸歯状に施す桑の丸タイプと山形押型文土器が出土している。これらは、主に山部にみられる。山部の地層堆積は岩盤のため風化層が薄く上下が不明確であった。よって、これらは同時期か前後するか判断はできなかった。

中期は阿高式土器が中心である。出土状態は散在地程度で遺跡として取扱いにならない状況である。この阿高式土器は凹線文を顕著に表し、胎土には滑石も含んでいるものも多い。時期は阿高式土器の最盛期ととらえてよい。

晩期は、黒色研磨土器で黒川式土器の後半期と考えられる。これも散在程度が低く遺跡として取扱いにはならない状況である。

石器は、山部の表土中に磨製石斧・打製石斧が出土している。

平坦部での石器は、スクレイパーと石鏃が出土している。この中で石鏃は24本出土している。

石鏃の形状は正三角形や二等辺三角形が基本であり、抉りは深いものと浅いものがある。また、柳葉形類似のものも1点出土している。

3 古墳時代

この時代の遺構は土坑が25基検出している。これらは検出状況から古代との区別がつかない。形状は、長方形、楕円形、円形が基本になっている。これらの性格は不明である。

この時代の遺物は、成川式土器であり、甕形土器・壺形土器・埴・高坏・匙の手づくね製品が出土している。甕の口縁部開き、壺の幅広突帯などから判断して、甕は東原期に近く、壺は笹貫期に近いちょうどこの中間期と考えられる。

4 古代

遺構は古墳時代と区別がつかない。

遺物は上記の様に甕形土器・坏・埴・須恵器が出土している。

甕形土器の口縁部は「L」・「く」・「C」の形がありまとまりがない。坏は体部・口縁部が外反し、切り離しはヘラで行っている。埴は黒色土器Aである。須恵器は甕形土器である。これらは器形か

らみると 10 世紀頃と考えられる。

5 中世

(1) 遺構

ア 掘立柱建物跡 (SB)

本遺構は 32 棟の建物跡が確認された。建物跡は平原側に C 列に大型建物跡が検出し、山裾側の D・E 列に小型の建物跡が検出している。

大型建物跡は C・D-3・4 区に 3 棟、C・D-4・5 区に 2 棟、C・D-6・7 区に 5 棟、C・D-8 区に 3 棟がみられる。これらは、各棟が重なったり隣接したりして建てられた跡である。

C・D-3・4 区は SB12・13・14 が重なり、2 間×3 間の上屋に SB12・14 が北側と西側に半間の下屋を造っている。この中の SB12 は下屋の角が狭められている。SB13 は下屋が北側・東側・南側にみられる。

C・D-4・5 区の 2 棟は 2 間×3 間の上屋に北側と西側に半間の下屋を造っている。

C・D-6・7 区では SB19 が 2 間×3 間の上屋に東側と南側に半間の下屋を造っている。その他の SB21・24・28 は隣接して南北に検出されている。これらが一連の建物と考えられる。また、SB22 は東西に建てられている。これは 1 間の間隔が長く、これらの建物とは性格が異なると考えられる。

C・D-8 区は SB26・31・32 が重なっている。SB31 は 2 間×3 間の上屋に南側と西側に半間の下屋を造っている。SB32 は 2 間×3 間の上屋に東側と南側に半間の下屋を造っている。SB26 は 2 間×3 間の上屋に四方に半間の下屋を造っている。これは、角が狭められた建物跡である。

小型建物跡は D～F-3～7 区にみられる。これらは規模の大小があるものの形態は類似している。類似した建物跡は SB2・4・6、SB3・25・30、SB8・10・11、SB17・18・29 等がある。

その他、小型に入る総柱の建物は SB5・15・23 がある。この中の SB5 の周りには列をなして円形の浅い土坑が検出されている。

イ 方形竪穴遺構

方形竪穴遺構は C-4・5 区に 2 基、D-5・6 区に 3 基検出している。

この遺構は遺構内に柱穴があり屋根があった建物と考えられる。また、昇降口の段もあるものもある。なお、床面には焼土や硬化面もある。この状況から作業内容としては、温度があまり変化しない竪穴内の作業、冬場の寒冷期でもできる作業が考えられる。

遺構は 5 基検出されている。それを規模で分類すると、大規模なものは方形竪穴遺構 4 で、小規模なものは方形竪穴遺構 1・2・3・5 である。作業量を考えると、大規模に対し小規模の 2 基が対応できる。よって、他の遺構との重なり合いや隣接で判断して、小規模の 2 基は、方形竪穴遺構 1 と方形竪穴遺構 2 が同時期で、方形竪穴遺構 3 と方形竪穴遺構 5 が同時期と考えられる。すなわち、これらは三時期が考えられる。

ウ 土坑

土坑は形態で大きく土坑Ⅰと土坑Ⅱに分類される。土坑Ⅰ類は基本的に円形で浅く、土坑Ⅱ類は楕円形と長方形で深い。さらに、土坑Ⅱ類は A・B・C に分けられた。

土坑Ⅰ類

この類は円形で浅い形態をしているもので、145基がこれにあたる。

この遺構は、埋土の中に種子や木の実の炭化したものが混入して検出したものである。混入物は渡来した栽培植物のイネ、オオムギ、コムギ、マメ類が全て炭化した状態であったため、火熱を受けた状態であったことが分析で判明した。それは、生活残渣遺構としての推定をもらった。

遺構の検出状況は山手側に沿ってみられるのが特徴である。それらの土坑は4グループに分けられる。第Ⅰ区はD～F－3～5区、第Ⅱ区はD～F－6～8区、第Ⅲ区はC～F－8・9区、第Ⅳ区はC～E－10～14区である。

第Ⅰ区は64基検出している。ここは列をなしている特徴がある。その中には5基連続や3基連続に重なって検出している遺構もある。また、建物跡に沿って検出しているものもある。

第Ⅱ区は40基検出している。ここの特徴は遺構が散在して検出されている。また、溝4とも重なっている。土坑の重なりは1か所で2重である。他は単独に検出している。

第Ⅲ区は20基検出している。ここの特徴は散在して検出している。場所は溝5より南側に位置する。土坑の重なりは2重が1か所で他は単独に検出している。

第Ⅳ区は21基検出している。ここの特徴は散在して検出している。場所は溝3より南側に位置し、溝2・3の東西にある。土坑の重なりは2重が3か所で他は単独で間隔が広い。

これらの変化は、時期的なものが考えられる。

土坑Ⅱ類

これはA・B・Cの3種類に分けられた。

Aは5基検出し、特徴は焼土がみられるものである。これは、炉的な使われ方が考えられる。

Bは4基検出し、特徴は白磁や土師器や鉄器が床面にある。これは、埋葬関係が考えられる土壌墓と思われる。

Cは8基検出し、土坑の中に柱穴跡がみられる特徴がある。この中で、土坑Ⅱ17は馬の歯が出土しているので家畜の埋葬に使用された施設と考えられる。これらの遺構の中にはピットがあり、今後の検討課題として残したい。

エ 焼土

これは21基検出した。

これは検出状況から建物外での施設と考えられる。形態としては、土坑を伴うもの、柱穴を伴うもの、分散して検出されたものがある。今回の調査では性格を判断できなかった。今後の検討課題として残したい。

オ 畠跡

畠跡は、2面検出した。

畠Ⅰは、中世遺構面と同じ面のC・D－9・10区検出した。その畠跡は、畝間が南北の上に東西が重なって検出した。また、南北の畝間は溝2・3の堆積埋土の上にみられ、溝2・3より新しいことが確認できた。一つ一つの畝間の長さは4m、3m、2.8m等があり。当時の耕作状況の一部が判断できた。なお、畝間の植物珪酸体分析結果、イネが多量に検出され稲作が行われていた可能性が高いと判断された。これは、陸稲栽培が行われたことが考えられる。

また、イネ以外はオオムギ族、キビ族等が検出されており、土坑Ⅰの生活残渣遺構との関連を強く判断できる。

畠Ⅱは中世面より若干下層に検出している。層で判断すると古代の可能性が高い。

カ 溝

溝は7本検出した。溝1～5は本調査区の中心遺構と同じ面に検出した。溝6・7は一段高い面に小規模で検出した。

溝1はC・D-11～14区に山裾と同じ方向で検出した。検出状況は直線状で大きな石から始まっている。規模は、溝4・5に比べ大きくて深い。

溝2・3はB～D-9～11区に重なって検出した。検出状況は溝3の上に溝2が重なっている。規模は、溝4・5に比べ大きくて深い。

溝4はC～E-6・7区に直線で検出した。溝2・3と比べ細くて浅い。これは、方形竪穴遺構5との切り合いと掘立柱建物跡2との隣接関係がある。

溝5はC～E-7・8区に直線で検出した。溝2・3と比べ細くて浅い。途中で切れている。これは、掘立柱建物跡26との隣接関係がある。

溝6は、B-3・4区も間が途切れて検出した。規模は細く短く浅い。この遺構は古道の内側にあり、上の段の排水坑と考えられる。

溝7は、B-3区に検出した。溝6の東側で調査範囲外に延びている。性格は溝6と同じで上の段の排水溝と考えられる。

他の遺構との切り合いでみると、溝1～5は溝4と溝3が同時期で、溝5と溝2が同時期で、溝1は山裾に沿って造られた単独時期が考えられる。

(2) 遺物

ア 白磁

白磁は太宰府跡分類の白磁Ⅲ類、白磁Ⅳ類、白磁Ⅴ類、白磁Ⅵ類、白磁Ⅷ類、白磁Ⅸ類、白磁B類、白磁C類、白磁D類、白磁E類が出土している。

この中で、出土の最も多い類は白磁Ⅳ類である。また、土坑Ⅱに検出した完形品は白磁Ⅴ類に比定している。これらは12世紀前半が中心と思われる。また、13・14世紀のものや、近世のものも出土している。

イ 青磁

青磁は龍泉窯系と同安窯系が出土している。

龍泉窯系は太宰府跡分類の龍泉Ⅰ、龍泉Ⅱ、龍泉Ⅲ、龍泉B、龍泉C、龍泉Dの他、稜花皿、壺が出土している。また、同安窯系の皿等も出土している。

この中で、最も多いものは龍泉Ⅰで、ついで龍泉Ⅱである。これらは12世紀後半と思われる。

ウ 青白磁

青白磁は合子が出土している。この時期は12世紀前半と思われる。

エ 染付

染め付けは大半が貿易磁器の範疇である。時期的には14世紀後半から15世紀と思われる。

オ 中世陶器

この中には貿易陶器と国内陶器が出土している。

貿易陶器は、中世緑釉陶器、褐釉の鉢、四耳壺、黒釉の天目が出土している。時期的には13世紀から14世紀と思われる。

国内陶器は常滑の甕と近世の薩摩焼の甕、茶家が出土している。

カ 中世須恵器

中世須恵器は樺万丈窯の甕や播鉢、捏鉢が出土している。また、東播磨系窯では播鉢、捏鉢が出土している。下り山窯では、甕と壺が出土している。

キ 瓦器質土器

瓦器質土器は播鉢、捏鉢、坏、火舎が出土している。瓦器質土器の播鉢、捏鉢が多く出土するのも珍しいが、瓦器質の坏の出土は南九州では珍しい。

ク 土師器

坏

土師器の中では出土量が少ない。皿と坏との区別がつかなかったので小皿の大型のものも範疇にいれた。製造は、回転ロクロからの糸切り離しである。器面調整は簡単で、細い調整のある研磨等はない。時期的なものは判断できなかった。

碗

この中には、内側に赤色顔料を付した内赤土師器（仮に赤色土器と呼ぶことにする）も含まれる。内外器面には丁寧な研磨が施されている。この研磨は水漏れがないようにされたと考えられる。器形は黒色土器Aの碗と同じで、口縁部が外反するものと、外反しない半球状のものがある。

小皿

土師器の中では出土量が多いもので、簡単に造っている。器形では、大きなもので坏の範疇に入る。糸切り離しの底部から体部・口縁部への立ち上がりは、大方、外向している。それは浅いものが中心で、深くて直行しているものもある。また、底面には糸切り離しの中に製造中に板状の所においた跡もみられ、大量生産されたことが考えられる。これらの器形の変化は層位的や遺構での時期的判断はできなかった。

黒色土器A碗

いわゆる内黒土師器の碗である。この土器も小皿と同様出土量が多い部類にはいる。内側を黒色にし、さらに研磨をして焼かれている土師器である。黒色は外面にも施されているものもある。器面は丁寧な研磨仕上げで、見込み中央は縦位と横位、口縁部近くは横位の研磨で水挽き面を潰している。また、外面の水挽き面を研磨している。器形は口縁部が外反するタイプ、半球状になるタイプがある。また、黒色土器A碗も高台が高いもの低いものがある。この土師器の目的は、器面の目詰めが考えられるため液体を入れる容器と考えられる。

これらの層位的や遺構での時期的判断はできなかった。しかし、白磁Ⅳ類は高台が低く、口縁部は玉縁であるが内湾気味で半球状である。白磁Ⅴ・Ⅵ類は口縁部が外反し、高台が高くなる。この白磁の流れでみると、高台が低く口縁部から底部が球状のものから口縁部が外反し高台が高くなる傾向が考えられる。

これらの製作方法をみると、土師器の坏や皿は簡単に作れるが碗は丁寧な器面調整をする手間が必要である。よって、碗の使用方法から考えると、この地域では大量に手に入りにくい貿易磁器の碗の代わりに作られた可能性が高い。

黒色土器B小皿

いわゆる黒色土器と言われる土師器の皿で出土量は少ない。小皿の内外面を黒色にし、さらに丁寧な研磨を施している。用途としては出土量が少ないため、簡単に作った小皿とは違う使い方が考えられる。例えば祭祀関係などが考えられる。

これらの器形の変化は層位的や遺構での時期的判断はできなかった。

コ 石器

砥石

砥石は2種類出土している。軟質白色頁岩と硬質頁岩である。軟質白色頁岩は黄褐色や茶褐色で堆積層の筋目が見えるもので、通称天草石と言われるものである。粒子が細かく仕上げ砥石に最適である。

硬質は軟質に比べ小型である。使用方法是軟質が面研ぎであるが硬質は筋研ぎである。

滑石製品

石鍋、短冊形石製品、鏡の模造品等が出土している。この中の石鍋は円孔が底部にあり解釈が不明である。また、短冊形石製品は砥石の可能性もある。そして、鏡の模造品は紐に円孔があり、鏡面は凸面になっている。他の製品は用途や目的が不明である。

軽石製品

2点出土している。傷があるが用途不明である。

サ 金属製品

鉄製品、銅製品、鉛等が出土している。

鉄製品は釘、刀子、短刀、鏃、古銭、鈴、柄頭の固定金具等が出土している。この中の釘は横断面が四角で、頭部は少し叩き曲げている。短刀は土坑Ⅱに副葬品として出土した。また、鉄銭が出土して珍しい。鈴は飾り突起がついている。

青銅製品

刀の鐔止め、鈴、キセルの吸口部、古銭、簪が出土している。

鉛製品

火縄銃の弾と思われるものが1点出土している。

(3) 考察

以上で遺跡の性格をみると、本遺跡の旧石器時代、縄文時代、古墳・古代は長期的に住んだ形跡はなく、中心は中世であることが判明した。

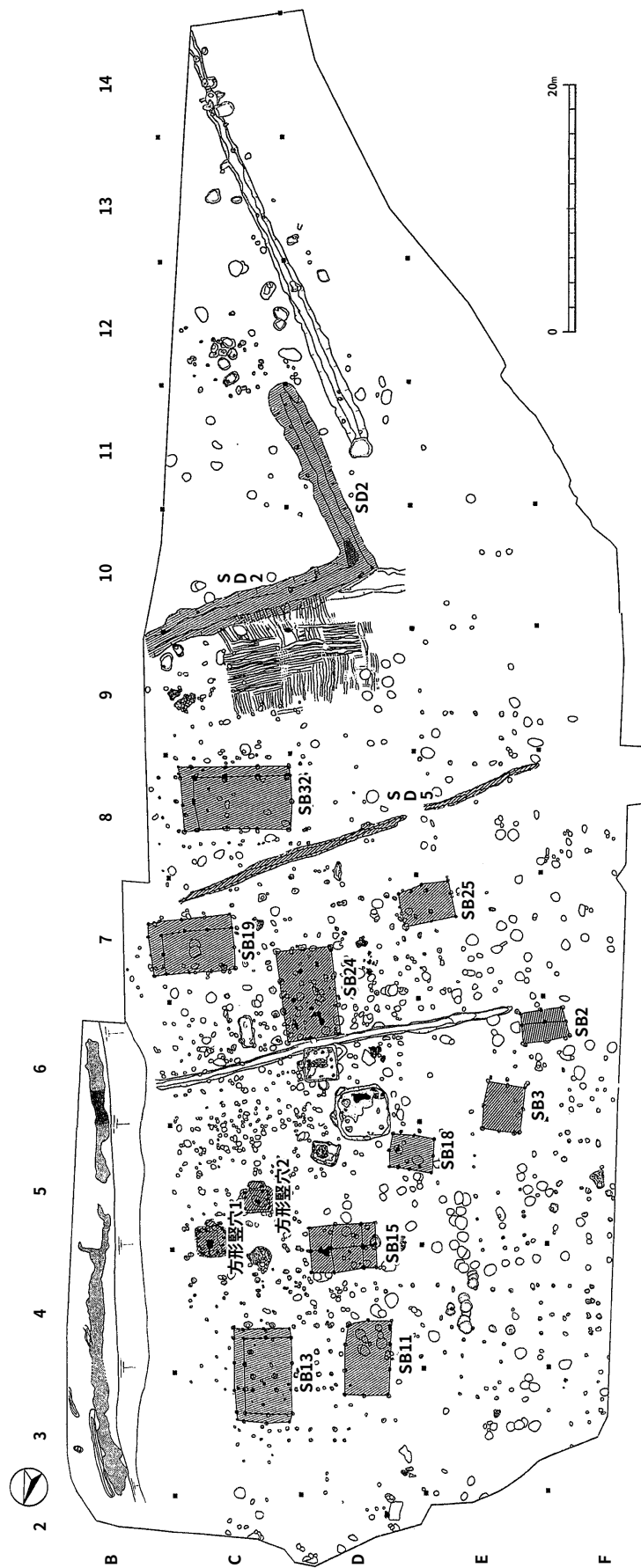
この項では、遺跡の中心である中世の考察を取り上げることにした。

(1) では遺構(2) では遺物をまとめてきた。この項ではこの2つの項を組み合わせ、上野城跡の時間的な面で考察し、性格をまとめてみた。

まず、時期的なものは(2)の遺物でみると、白磁の遺物で古いものは、白磁Ⅲ類からとⅣ類で、この2つの中では、最も多いものは玉縁口縁部をもつ白磁Ⅳ類である。その後、数は少ないが、端



第156図 中世遺構第A期想定配置



第157図 中世遺構第B期想定配置



第158図 中世遺構第C期想定配置

反りの櫛描文がみられる白磁Ⅴ・Ⅵ類が続いている。そして、見込みに釉掻きがみられる白磁Ⅷ類と口唇部に釉剥ぎがみられるいわゆる口剥げである白磁Ⅸ類が出土している。これは 13 世紀前半に当てられている。よって、白磁からみると 12 世紀前半から 13 世紀前半が考えられる。

青磁は、龍泉窯系の龍泉Ⅰ、龍泉Ⅱ、龍泉Ⅲ、龍泉Ⅳ、龍泉Ⅴ、龍泉Ⅵの他、稜花皿、壺と同安窯系の皿が出土している。この中で、最も多いものは龍泉Ⅰで、ついで龍泉Ⅱで、そして、同安窯系である。よって、青磁からみると 12 世紀後半が中心で、13 世紀前半までと考えられる。

貿易陶器でみると、13 世紀の褐釉・黒釉陶器が出土している。

染付も出土している。これらは 14 後半～15 世紀のものと考えられる。

また、16 世紀の近世白磁や近世陶器である薩摩焼も出土している。

遺構である柱穴、方形竪穴遺構、土坑、土墳墓、溝の出土遺物をみると、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類と青磁と貿易陶器が出土している。染付や近世白磁・陶器はみられない。

これらの条件で判断すると本遺跡の中心は、12 世紀から 13 世紀前半が想定される。

次に、遺構の重なり合いをみると、大型建物跡である掘立柱建物跡の 12・13・14、掘立柱建物跡の 20・16、掘立柱建物跡の 26・31・32 は、同規模の 2 棟及び 3 棟の重なり合いである。

掘立柱建物跡の 12・13・14 は、下屋の付きが、12 は北と西、13 は北と東と南である。掘立柱建物跡の 16・20 は、下屋の付きが北と西である。これと同規模の建物跡は掘立柱建物跡 19 がある。19 の下屋の付きは東と南である。掘立柱建物跡の 26・31・32 は、26 の下屋が東西南北の四方に付き、31 は西と南に付き、32 は東と南に付いている。

小型の建物跡は、規模の大小がみられるが、遺構の項で述べたように南側や東側の棟柱がはみ出した建物跡、桁行柱の 1 本が大きくはみ出したもの、総柱のもの、大型でもみられたが角柱が内側に入っているものがある。

溝も重なり合いや隣接関係が時間差の重要遺構になっている。溝は 1～5 が関わり合いになってくる。

溝 4 は方形竪穴遺構 5 と重なっている。この関係は溝の上に方形竪穴遺構を作っているため溝が古い。また、掘立柱建物跡の 21・24 は隣接しているため、溝 4 との時間差があることになる。土坑Ⅱ区の土坑と切り合いがあるので、これらのものと時間差があると考えられる。

溝 5 は掘立柱建物跡の 26・27 と隣接しているため、本遺構と時間差が認められる。

溝 2・3 は溝 3 の上から溝 2 を掘り直しているため、溝 2 と溝 3 は時間差が認められる。溝 2・3 の上に畠跡Ⅰがあり、溝 2・3 と畠跡Ⅰの時間差が認められる。

溝 1 は切り合いがないが、掘立柱建物跡の 1 との平行施設が考えられる。

方形竪穴遺構は 5 基検出されている。この中で方形竪穴遺構 1・2 が掘立柱建物跡の 16・20 と重複・隣接している。また、方形竪穴遺構 3 と 4、方形竪穴遺構 4 と 5 はこの遺構に上屋が付いた場合は、屋根の端が重なる可能性が大きいので、方形竪穴遺構 4 と方形竪穴遺構 3・5 は時間差があることになる。

土坑はⅠ区が建物に沿って作られたものが特徴で、Ⅱ区は溝 4 と重なりがみられ、Ⅲ区は溝 5 の南側に位置し、Ⅳ区は大半が畠Ⅰと溝 1 の間にみられる。これらにも時間差が想定される。

焼土は建物と隣接ないし重複との関係で時間差を分析できなかった。

畠Ⅰは溝2・3と重なっているため、畠としては最終期のものと考えて良い。

以上を総合して考察すると3期が考えられる。ここではⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期とせずに、A期、B期、C期とした。この理由は、中世の12～13世紀前半以外にも古代の畠跡と10世紀位の出土遺物、14・15世紀や近世の16世紀の遺物が出土し、判断できなかった遺構が多くあるためであった。ここでは上野城跡全体の流れにせずに、12世紀から13世紀前半に絞ったためである。よって、下記の案を設定した。

A期（第156図）

掘立柱建物跡は北から14・20・10・9・6・5・29・28・31である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構4である。

溝は溝4と溝3である。

土坑Ⅰ類は第1区及び第2区である。

これは、主館が掘立柱建物跡14・20・31で、従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡9・10・6・29・28を想定できる。なお、掘立柱建物跡5は総柱のため倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり、1基で大きい。共同の作業所にあたるとおもわれる。

土坑Ⅰ類は生活残渣捨て場と考えれば、倉庫の周辺に設けたと思われる。

溝は溝4で中間仕切をし、そして、溝3は堀の役目をした南側防衛施設と考えられる。

B期（第157図）

掘立柱建物跡は北から掘立柱建物跡13・11・15・18・3・2・25・24・19・32である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構1・2である。

溝は溝5と溝2である。

土坑Ⅰ類は第1区及び第2区である。

これは、主館が掘立柱建物跡13・19・32で、従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡11・15・18・3・2・24・25を想定できる。なお、掘立柱建物跡15は総柱のため倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり、2基で方形竪穴遺構1・2である。小規模共同作業所を2基造ったと思われる。

土坑Ⅰは生活残渣捨て場と考えれば、まばらになり第1区から第2区まで広がったと考えられる。

溝は溝5で中間仕切をし、また、溝2は山部を含めた堀の役目をした南側防衛施設と考えられる。

C期（第158図）

掘立柱建物跡は北から掘立柱建物跡12・8・16・17・4・30・21・22・23・26・7・1である。

方形竪穴遺構は方形竪穴遺構3・5である。

溝は溝1である。

土坑Ⅰ類は第1区・第2区・第3区・第4区である。

これは、主館が掘立柱建物跡12・16・26で、従者等の住居と考えられる棟が掘立柱建物跡8・17・4・30・21・22・7を想定できる。なお、掘立柱建物跡23は倉庫と考えられる。

方形竪穴遺構は掘立柱建物跡の中心部にあり、2基で方形竪穴遺構3と5である。小規模共同作業所を2基造ったとおもわれる。

土坑Ⅰは生活残査捨て場と考えれば、第1区から第4区まで広がったと思われる。

畠跡は溝2・3が埋まった後と考えられるが、A・B期もこの位置にあったと考えて良い。畠跡の南側が溝2・3の上に検出されたことはC期に拡張された可能性が高い。

溝は溝5での中間仕切がなくなり、そして、溝2・3も埋まったため、山部との境に溝1を造ったと考えられる。溝1は堀の役目をした山部側防衛施設と考えられる。

以上3期の想定を述べた。よって、結論は、これらの遺構が配置された中世館跡である。その時間的想定図はA期が156図、B期が157図、C期が158図に示した。なお、土坑に付いては第73図の土坑配置図を参照すること。

中世遺構の配置の確認は最小限であり、まだ、掘立柱建物跡27等多くの柱穴や土坑が検出している。また、それらは近世遺構の可能性もあることも考えられる。

上野城跡は中世から近世にかけて使われ、近世の百次城とも言われている。中世末期から近世に至るまでの遺物も出土していることから、隣接平坦面との関係が出てくることを考えなければならない。

遺構を形成している平坦面は中世末から近世にかけて曲輪とよばれる造成面が変わったと思われる。よって、中世館跡で使用された本調査地域は平坦面として扱い、中世山城の表現である曲輪の名称は使用しなかった。

参考文献

- 山本信夫 「太宰府条坊跡XⅤ—陶磁器分類編—」 太宰府の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会
- 大橋康二 「肥前陶磁器」 考古学ライブラリー55 1989 ニュー・サイエンス社
- 彌榮久志他 「苦辛城跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(27) 1983 鹿児島県教育委員会
- 諏訪昭千代・彌榮久志 「鹿児島城二之丸跡(遺構編)」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(55) 1983 鹿児島県教育委員会
- 彌榮久志他 「鹿児島城二之丸跡(遺物編)」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(60) 1983 鹿児島県教育委員会
- 亀井明德・山口譲治・加藤良彦 「博多遺跡」 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第396集 1995 福岡市教育委員会
- 八木澤一郎 「山ノ脇・石坂・西原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(58) 2003

圖 版



地層断面（斜から）



地層断面（正面 6 S）



地層断面（斜から）



旧石器時代の出土状況



縄文時代の落とし穴



縄文時代の落とし穴断面



山部調査状況



山部出土状況



縄文土器出土状況



縄文土器出土状況



山部のトレンチ



山部のトレンチ



山部のトレンチ



山部のトレンチ



山部のトレンチ



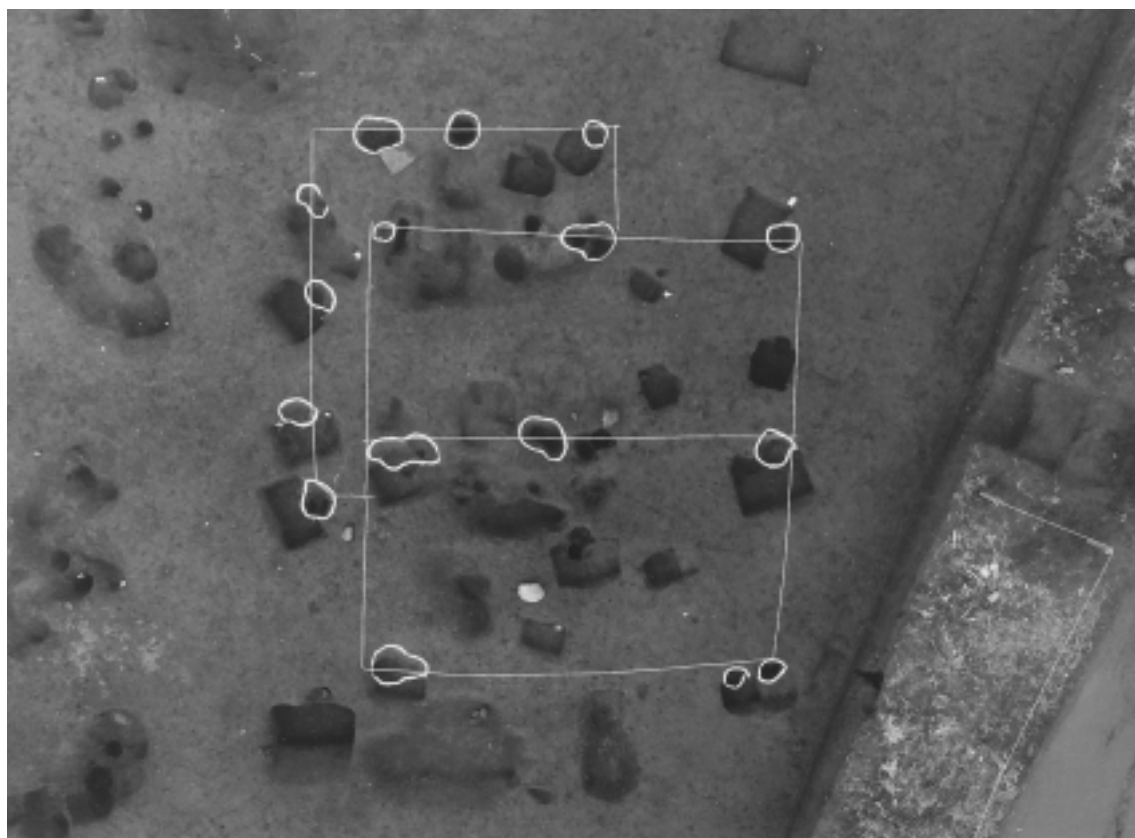
山部のトレンチ



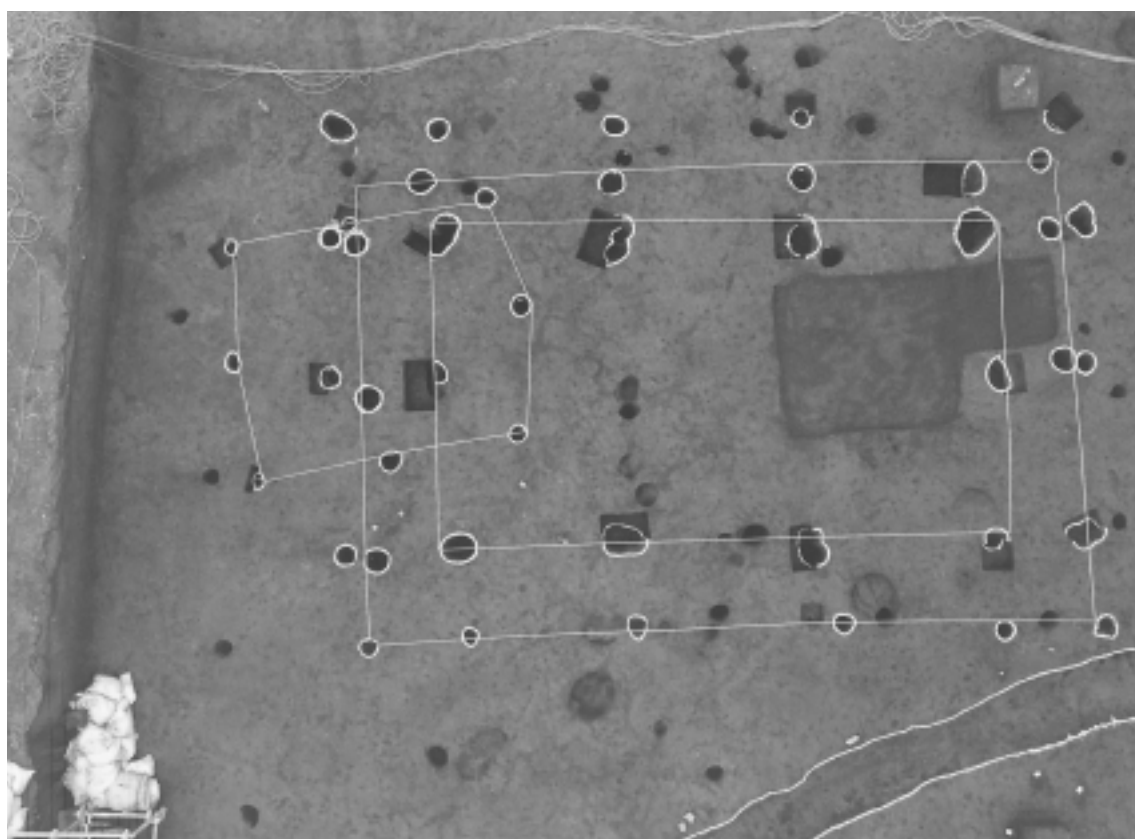
南部の遺構



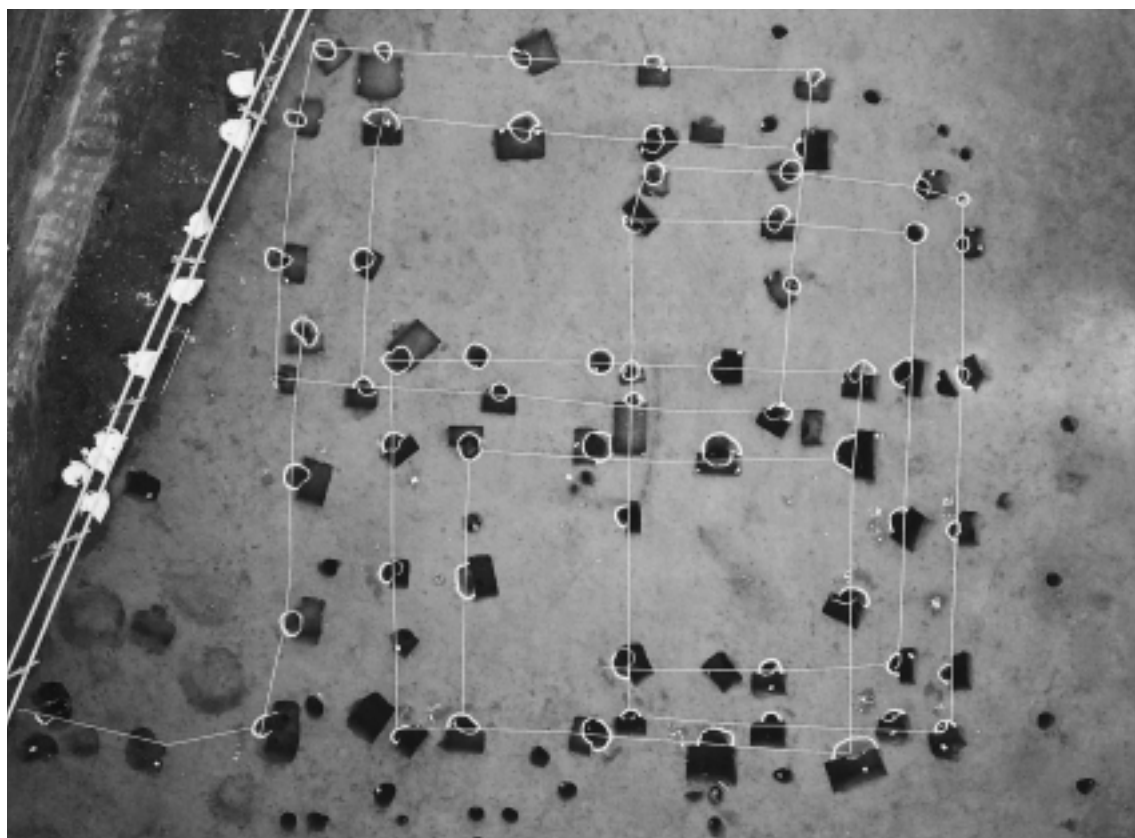
北部の遺構



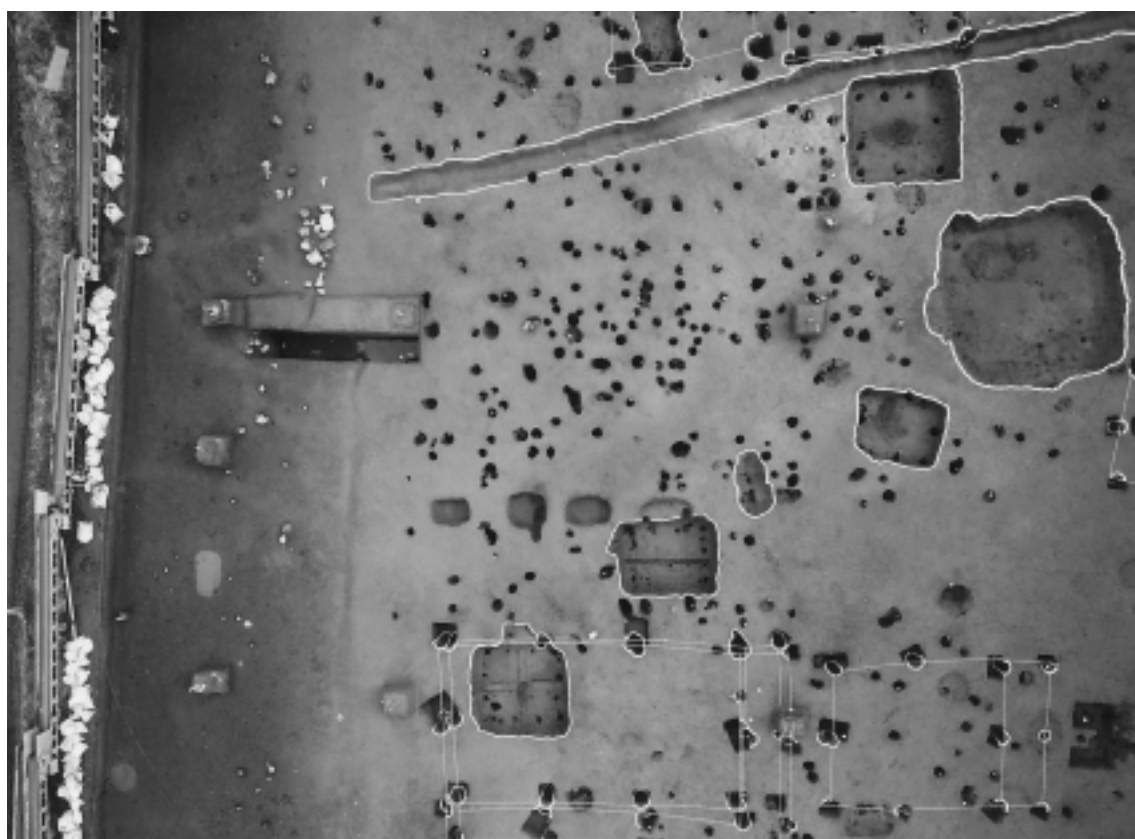
掘立柱建物跡1



掘立柱建物跡26・27



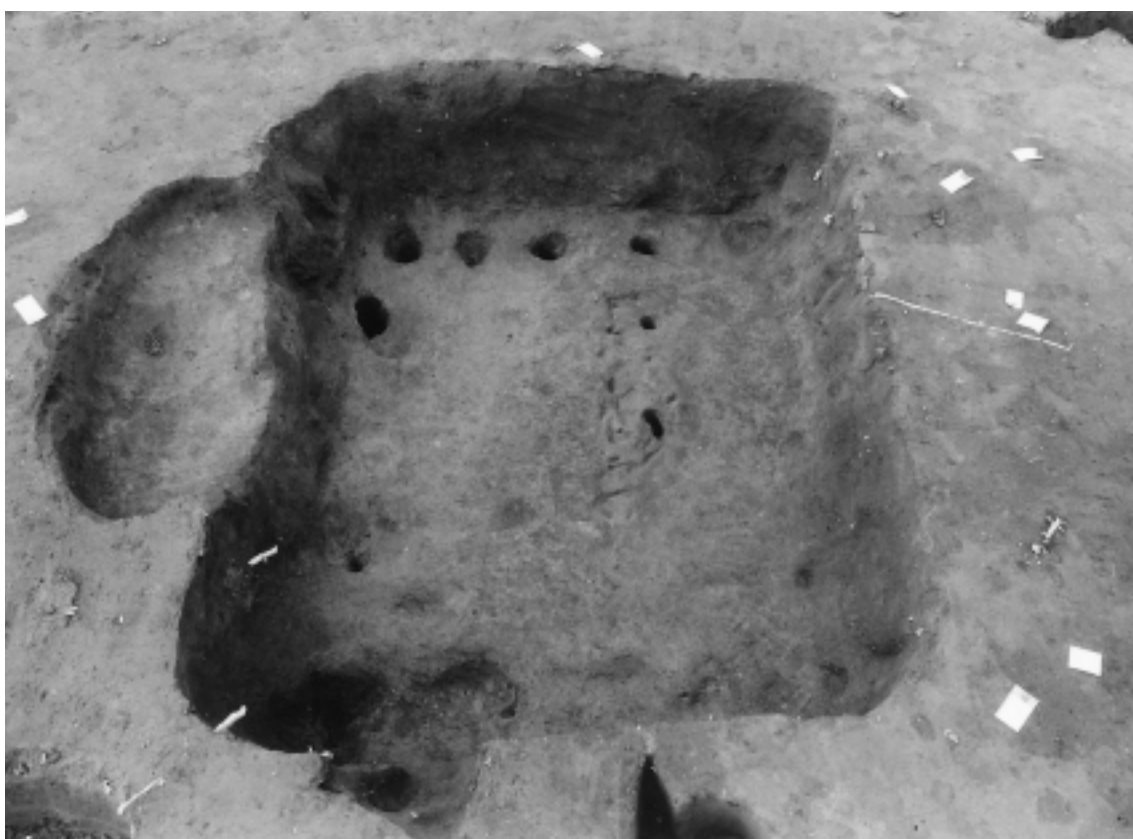
掘立柱建物跡12・13・14



方形竪穴遺構



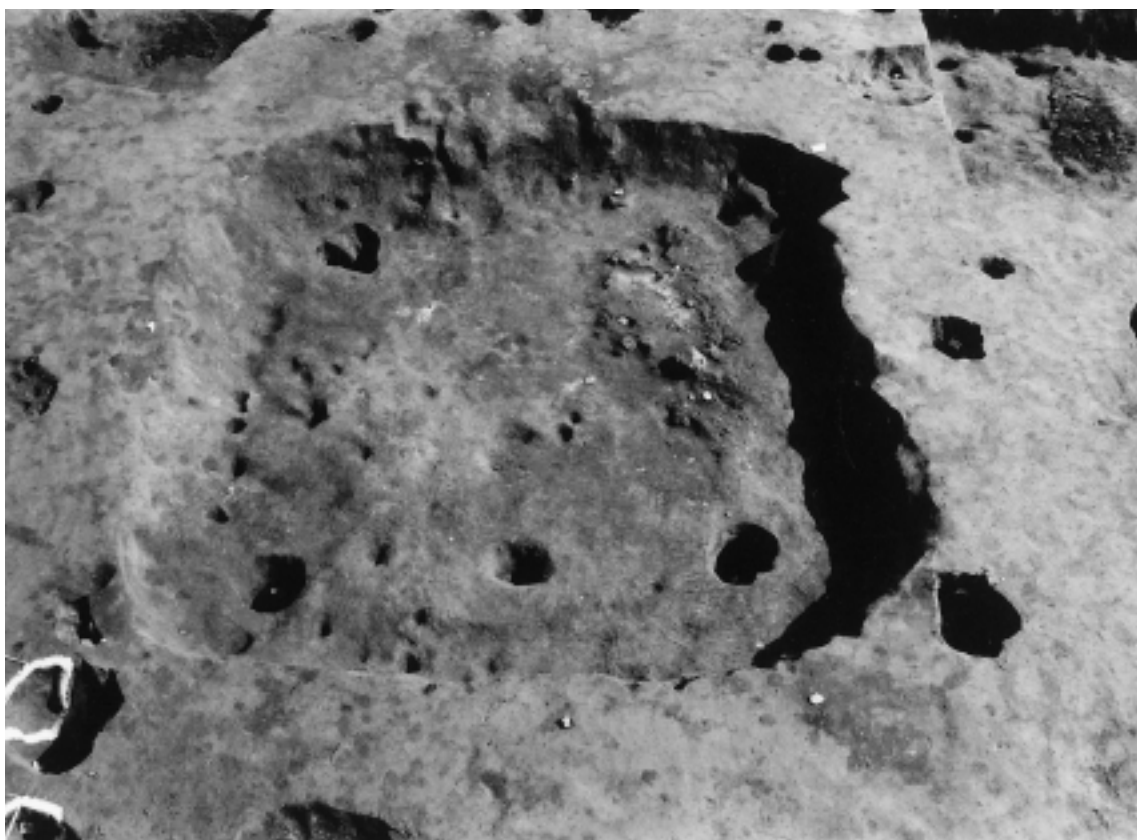
方形豎穴遺構1



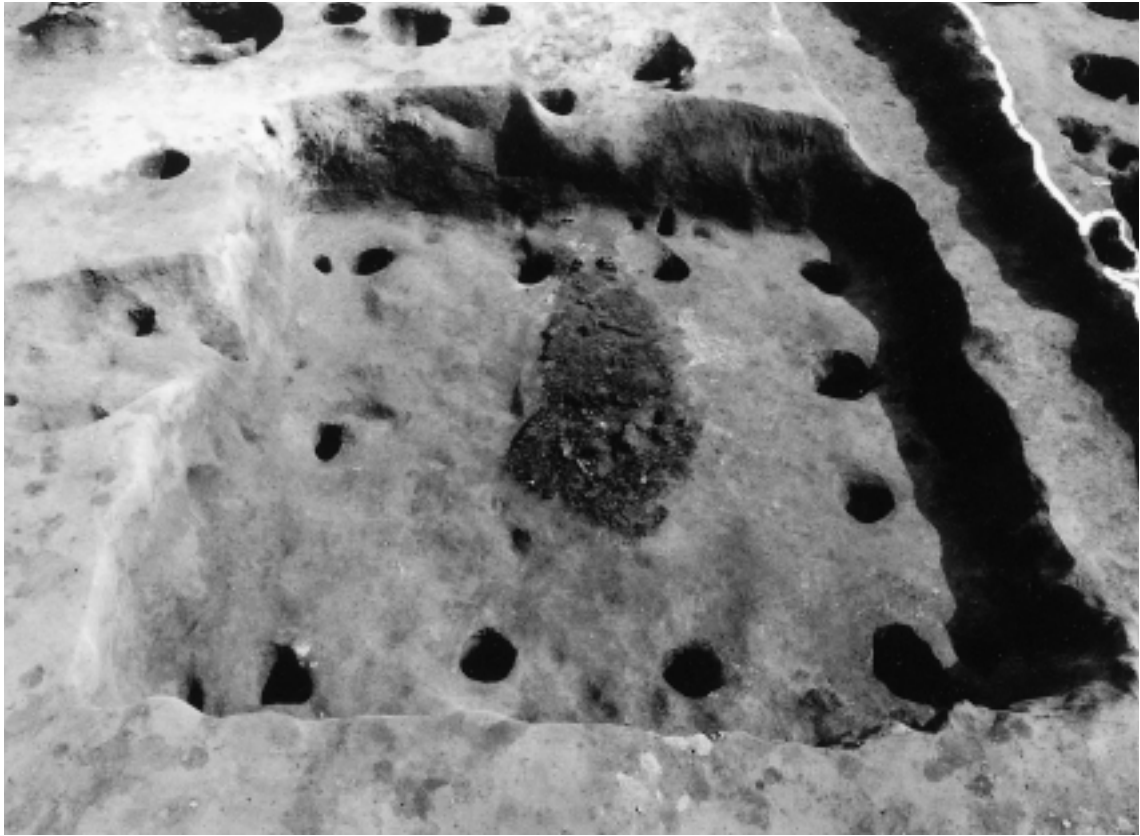
方形豎穴遺構2



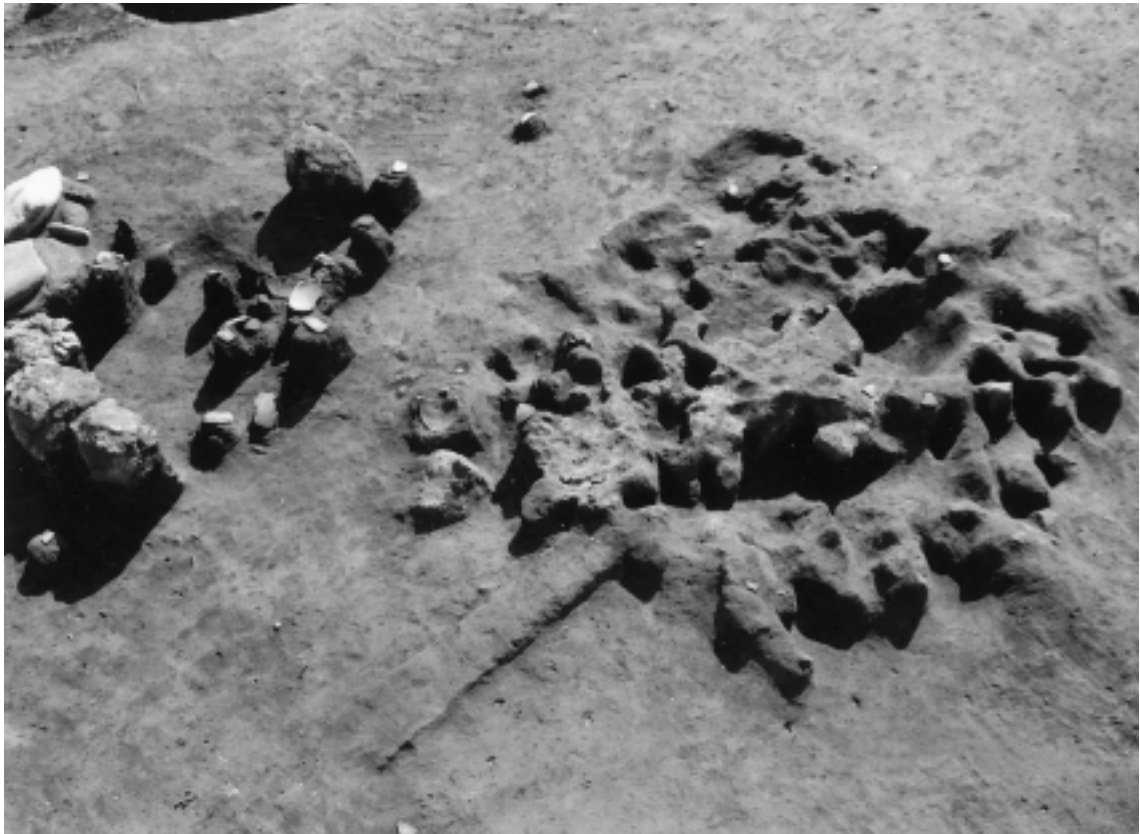
方形豎穴遺構3



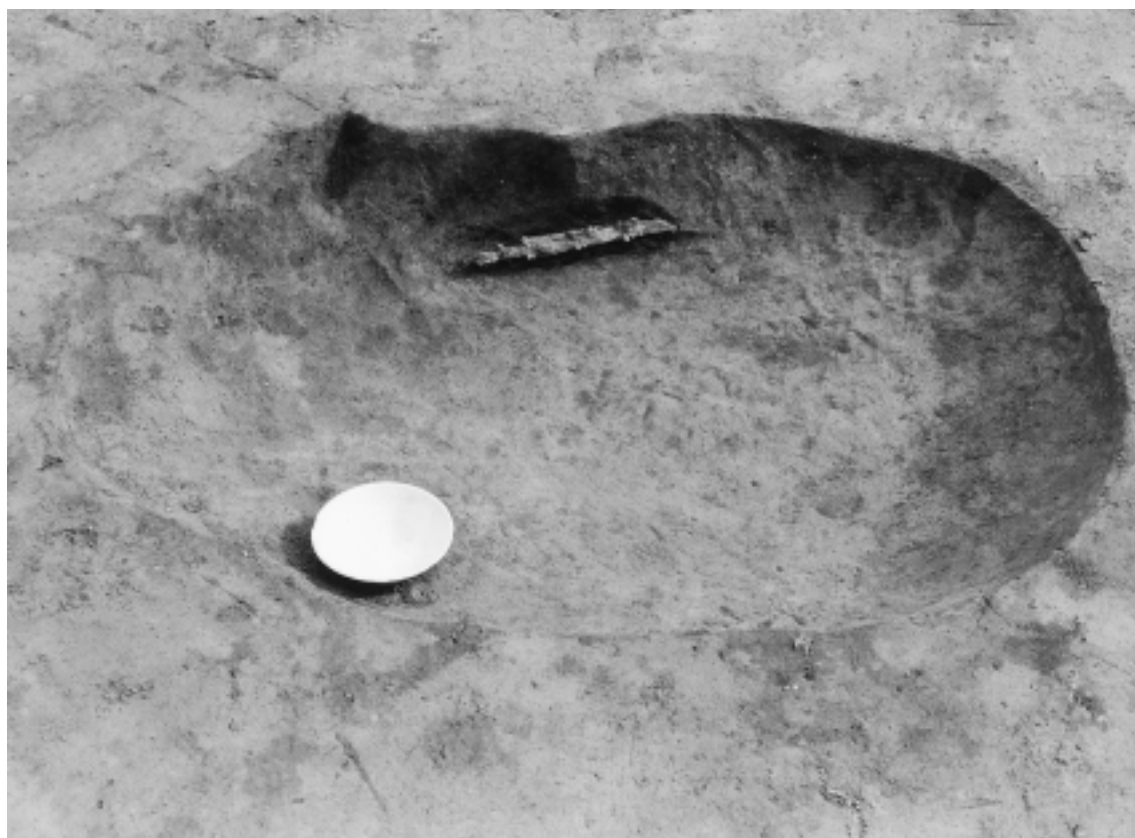
方形豎穴遺構4



方形豎穴遺構5



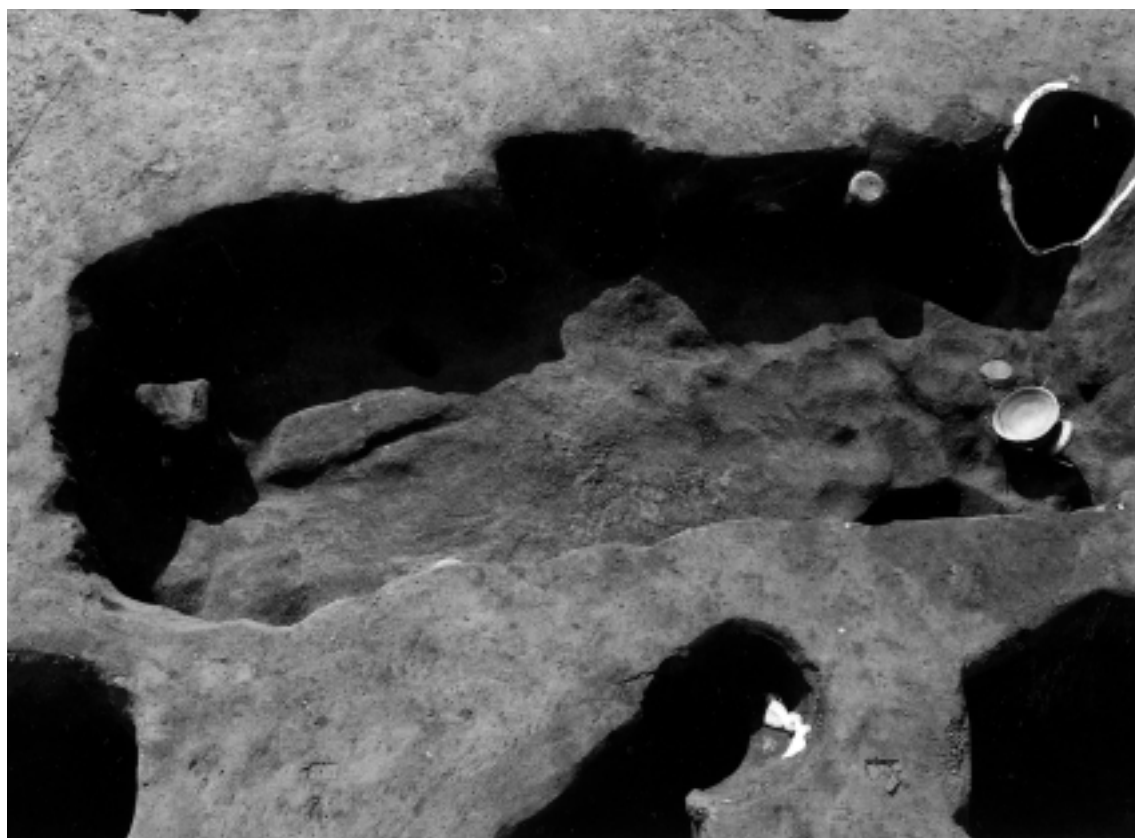
土坑Ⅱ



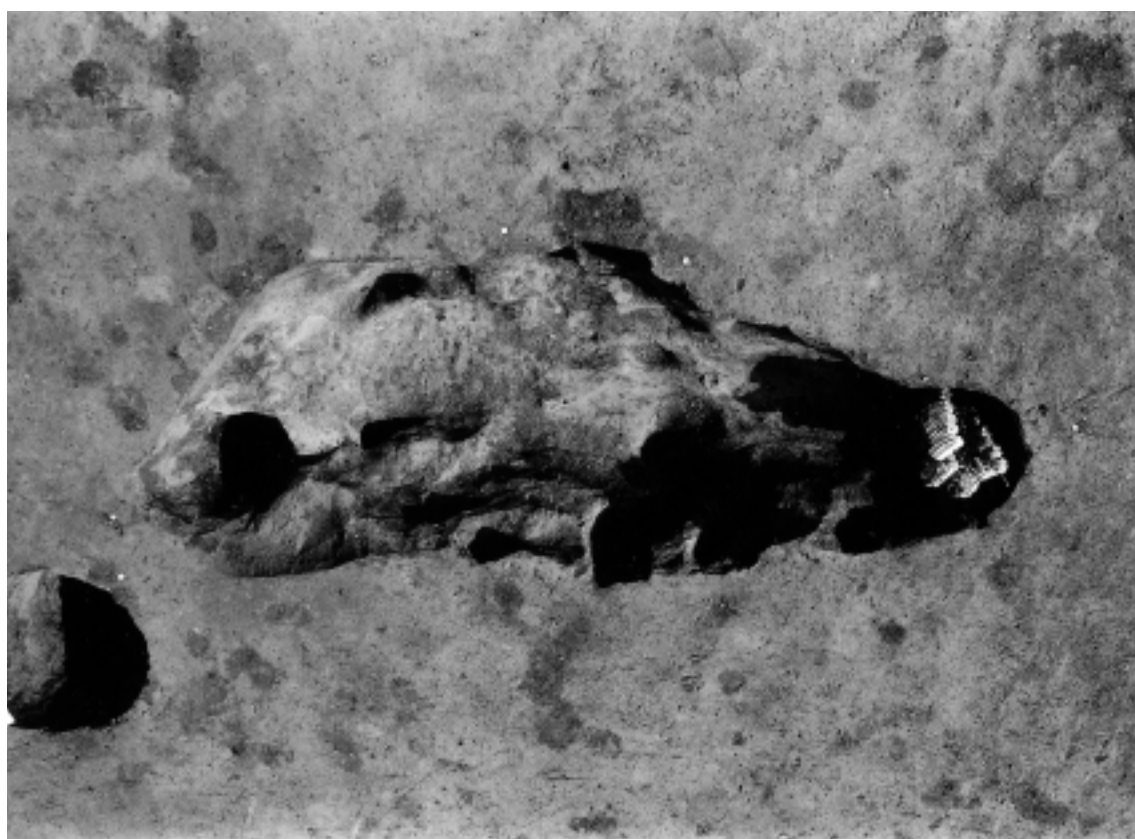
土坑Ⅱ-7



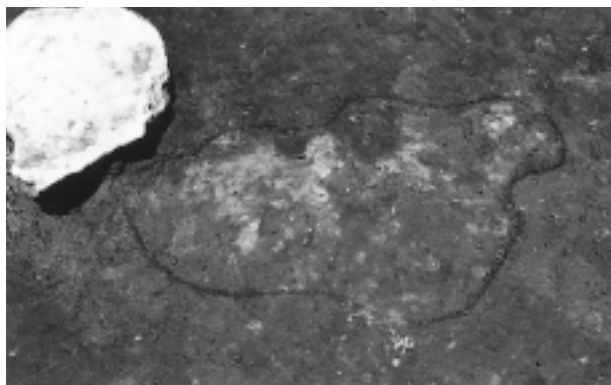
土坑Ⅱ-6



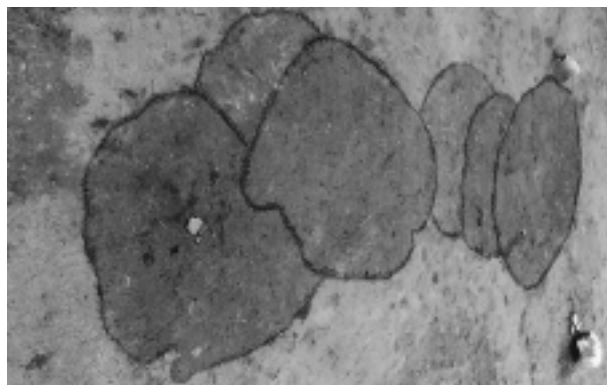
土坑Ⅱ-8



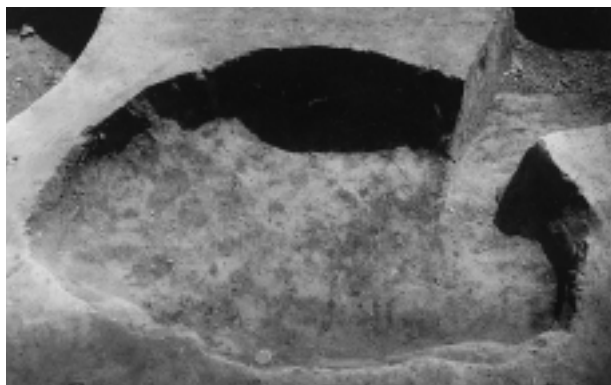
土坑Ⅱ-17



土坑検出状況



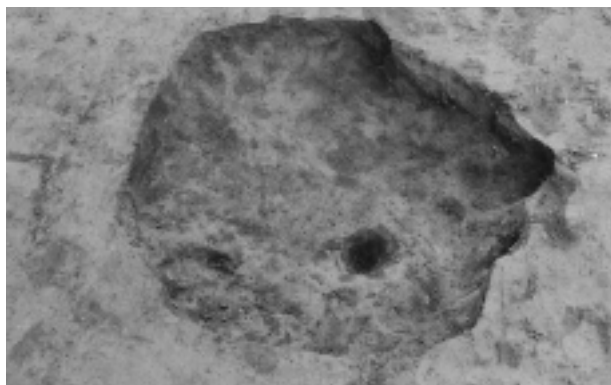
土坑検出状況



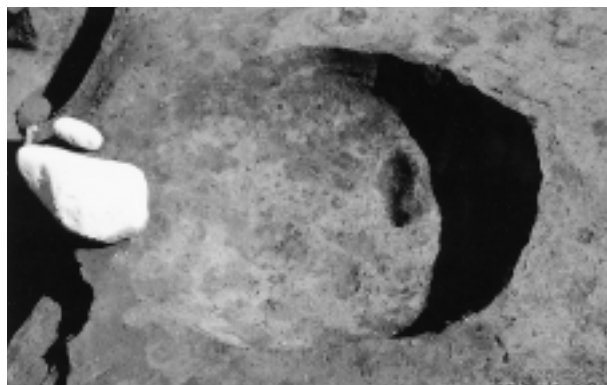
土坑Ⅰ



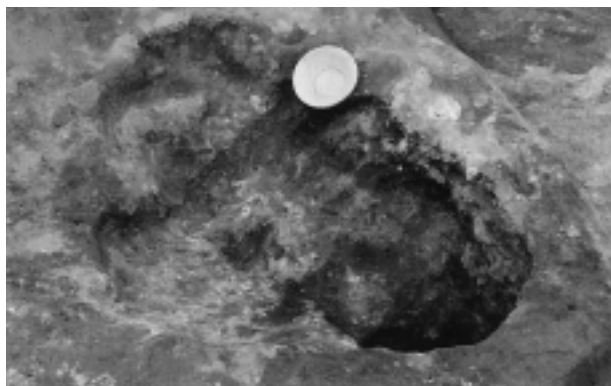
土坑Ⅰ



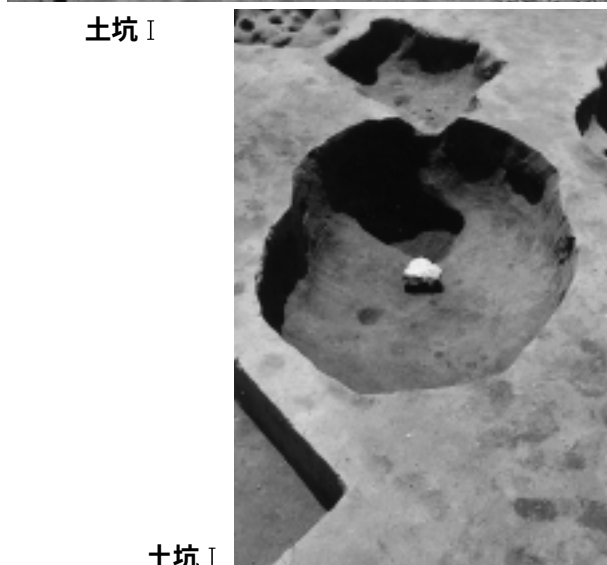
土坑Ⅰ



土坑Ⅰ



土坑Ⅱ



土坑Ⅰ



溝1



溝1



溝4



溝2



溝2



古道



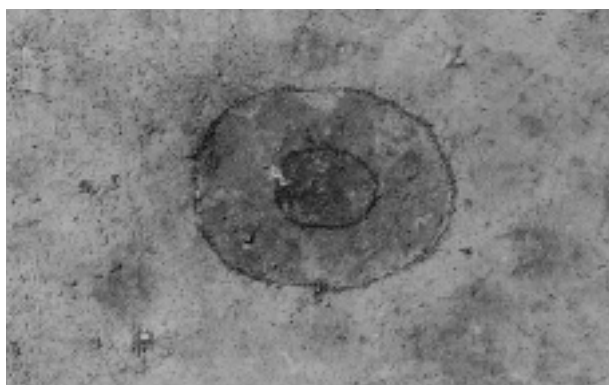
溝2断面



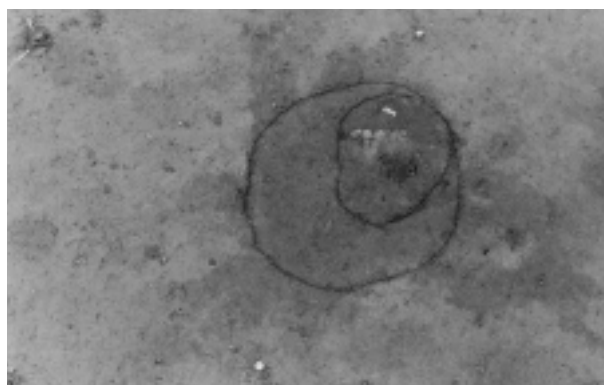
畠跡Ⅰ



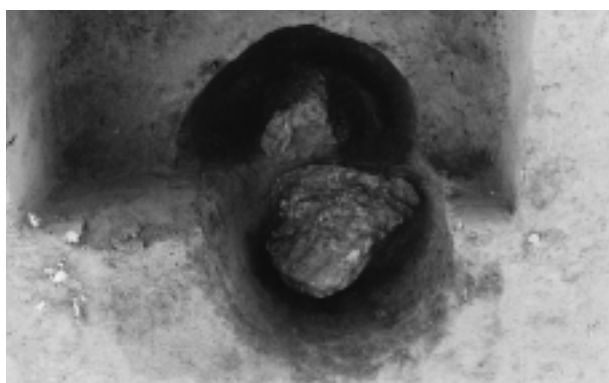
畠跡Ⅱ



柱穴検出状況



柱穴検出状況



柱穴



柱穴



柱穴



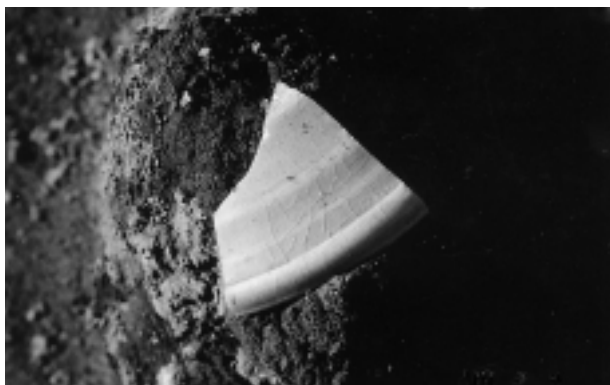
柱穴



遺跡出土状況



古墳時代の土器



白磁検出状況



白磁検出状況



土師器検出状況



土師器検出状況



土師器検出状況



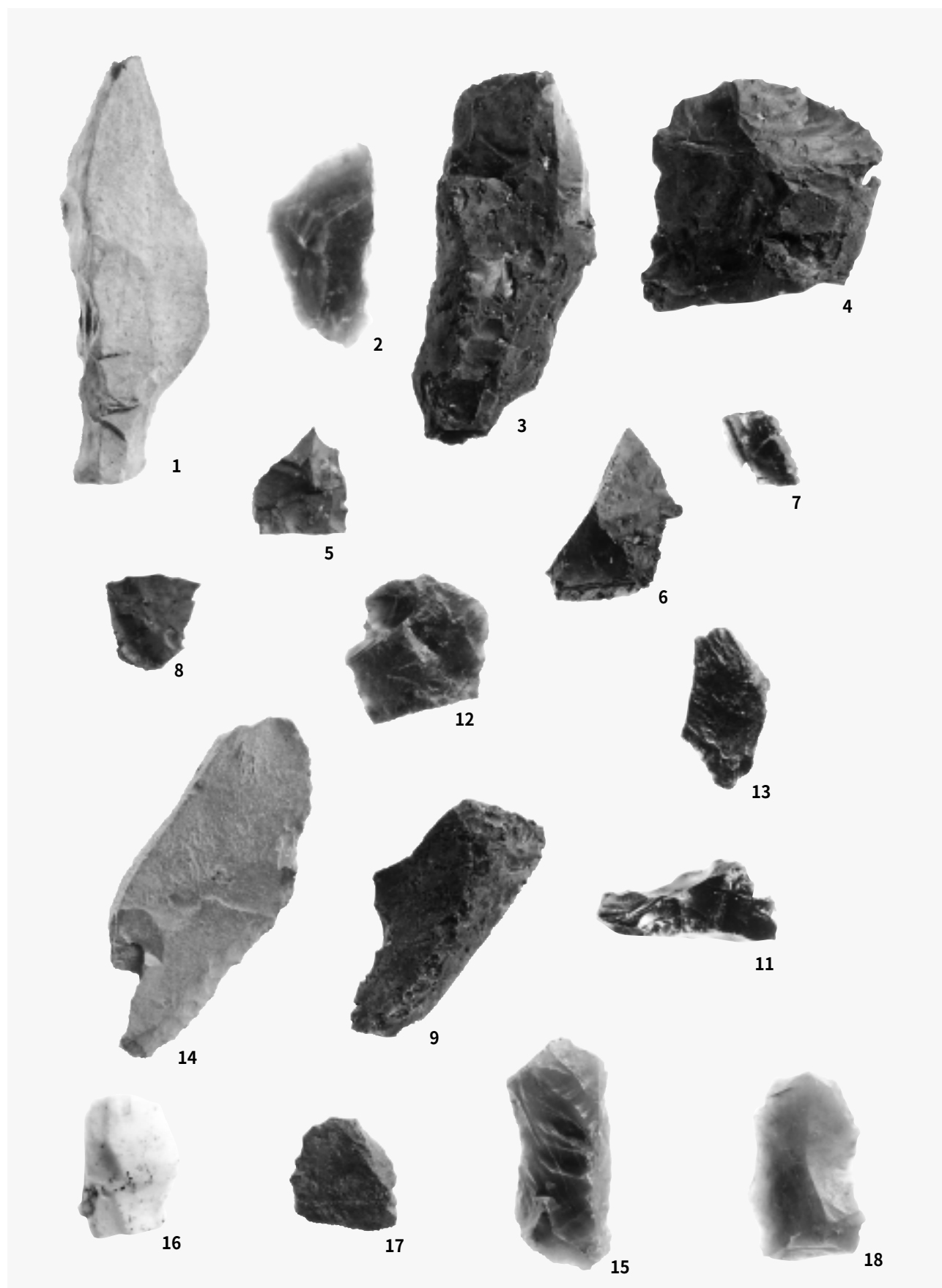
土師器検出状況



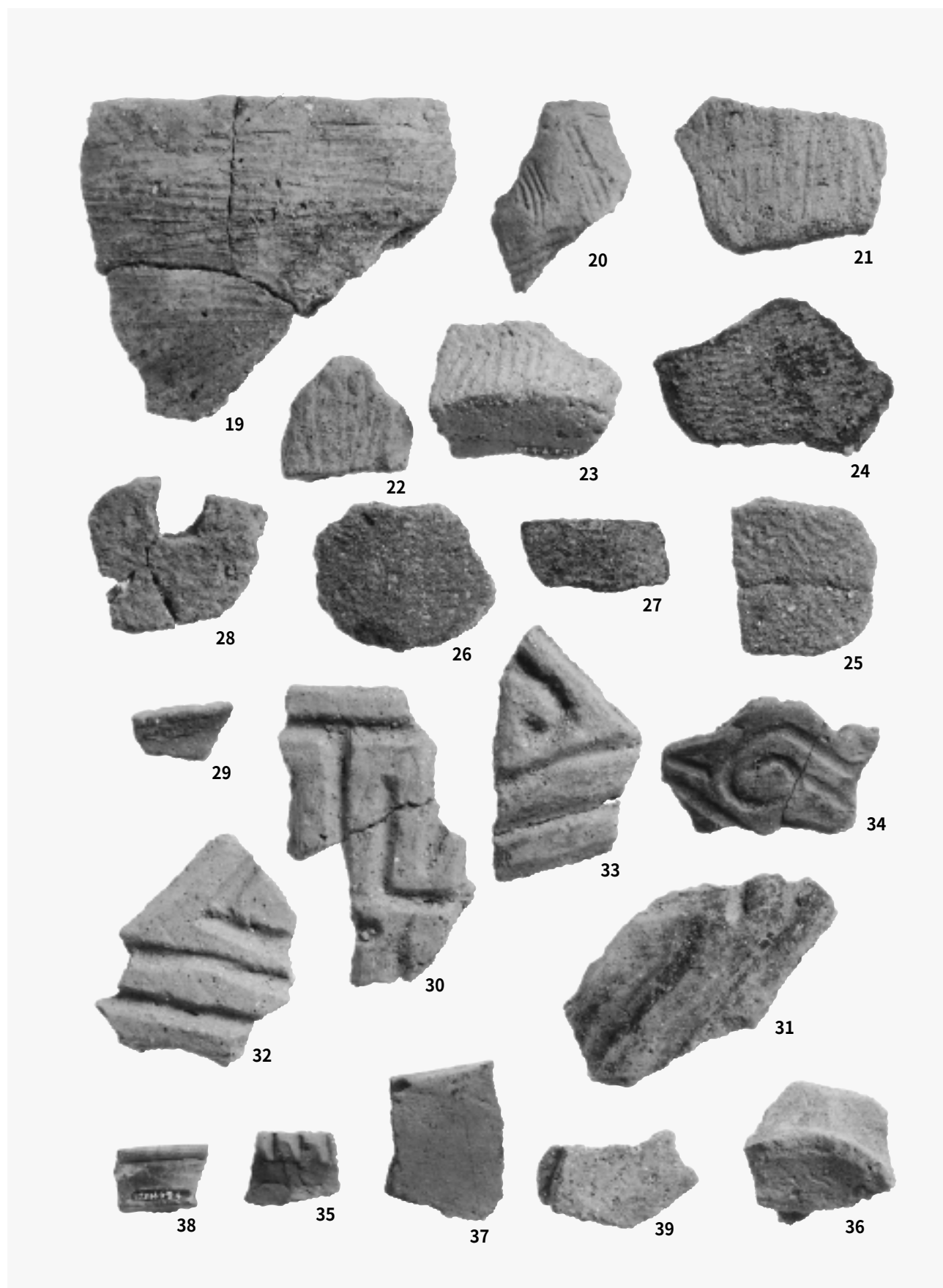
石製品検出状況



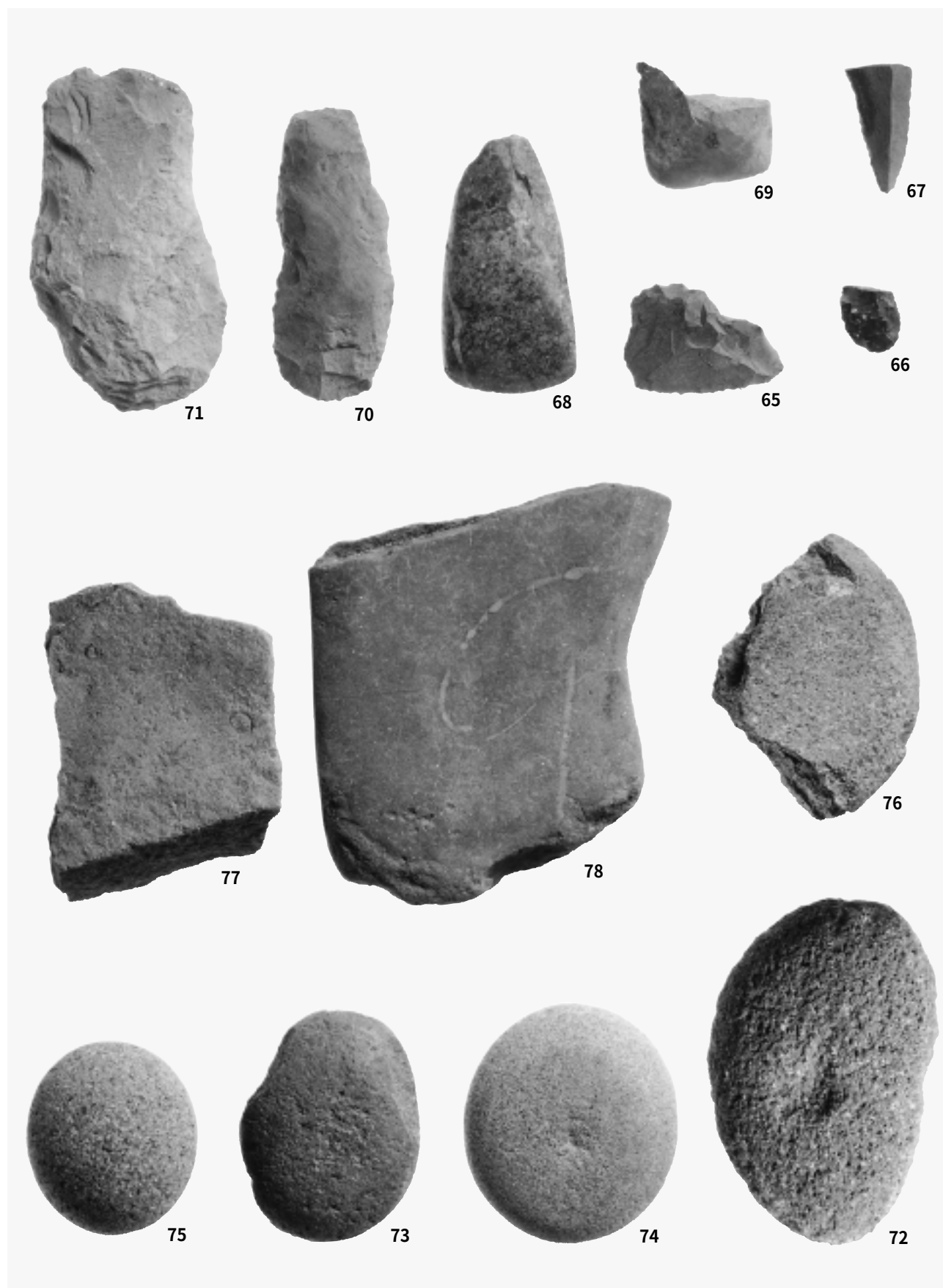
鉄製品検出状況



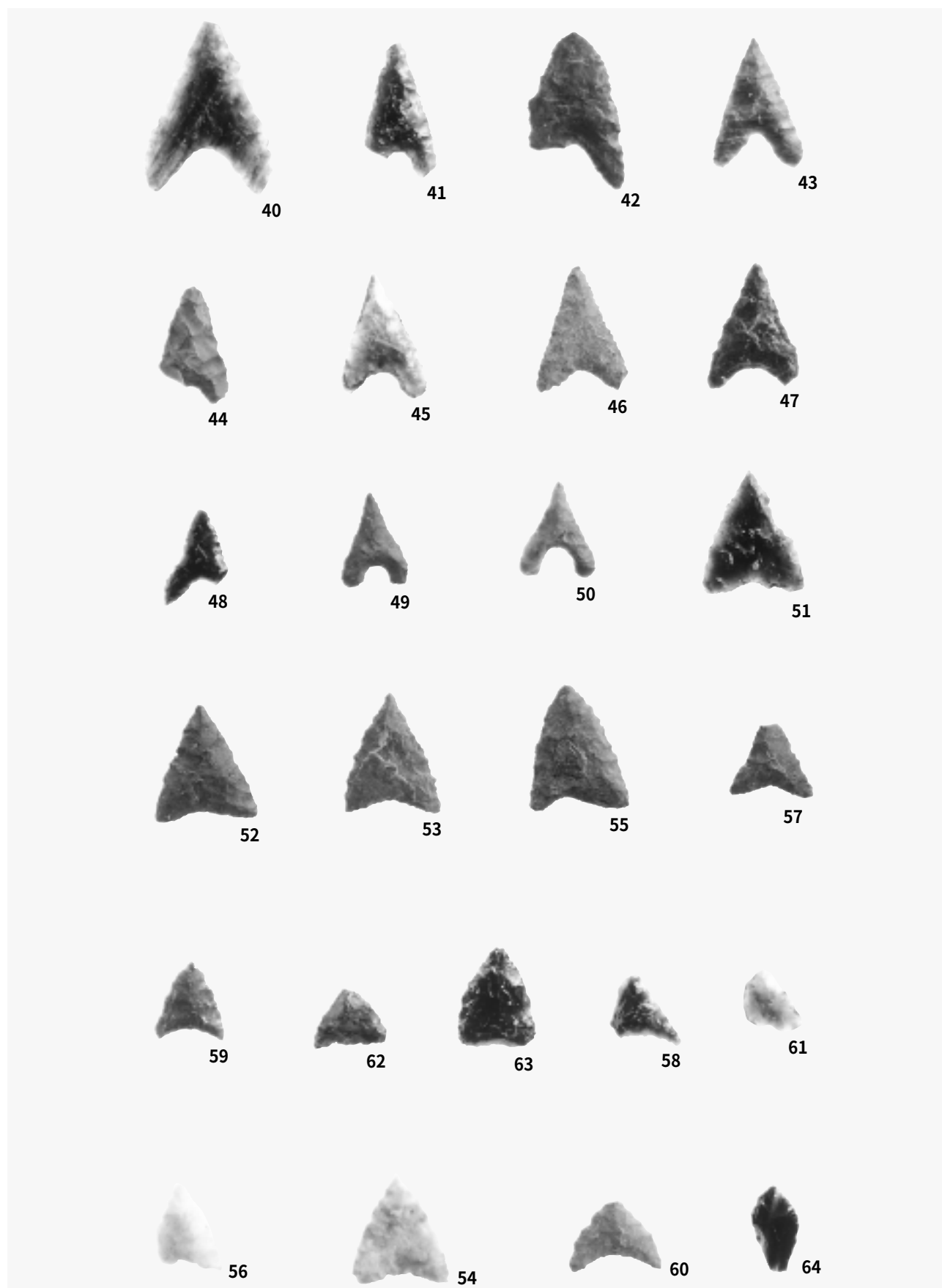
旧石器時代の出土遺物



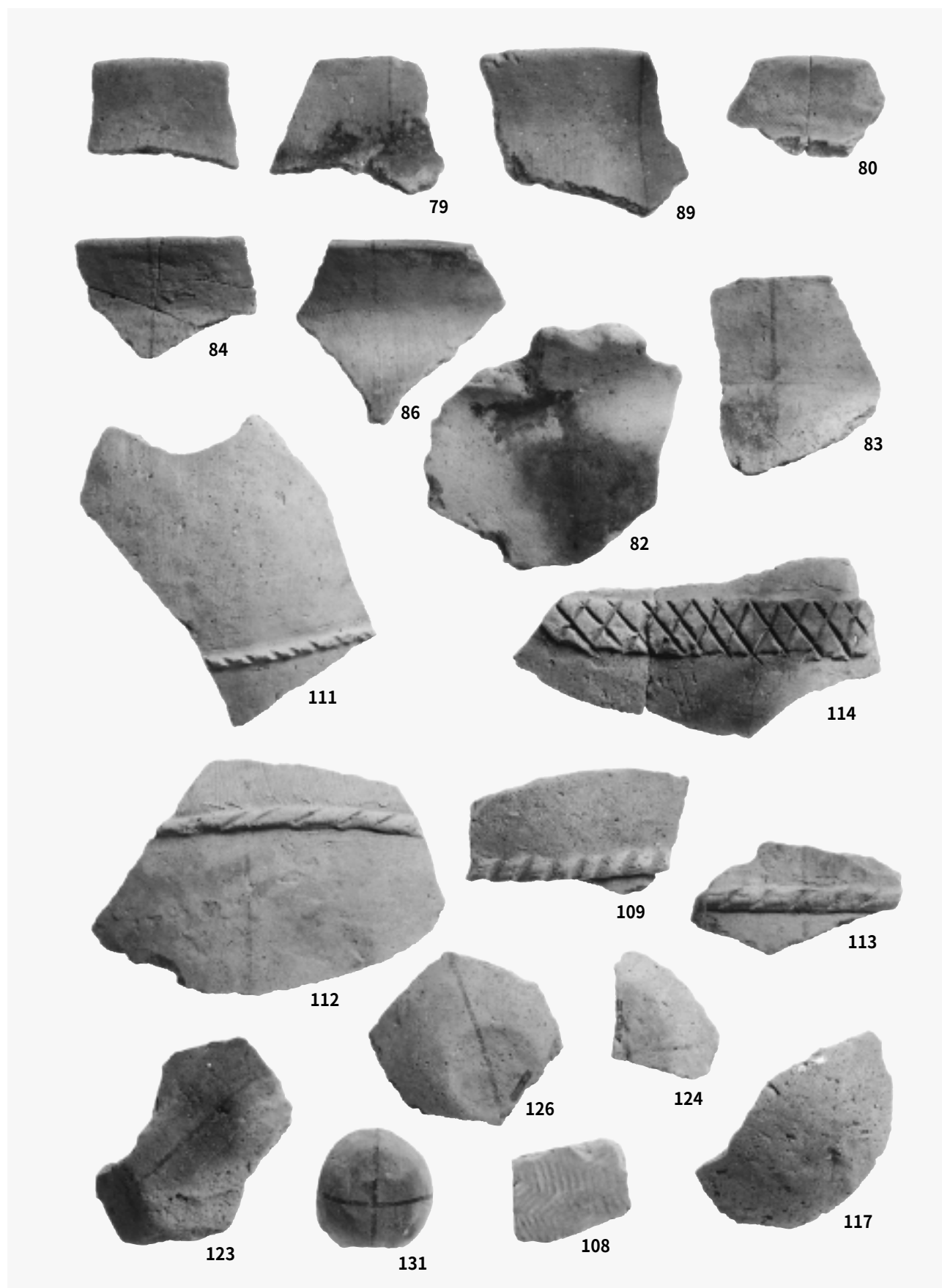
縄文時代の出土遺物（土器）



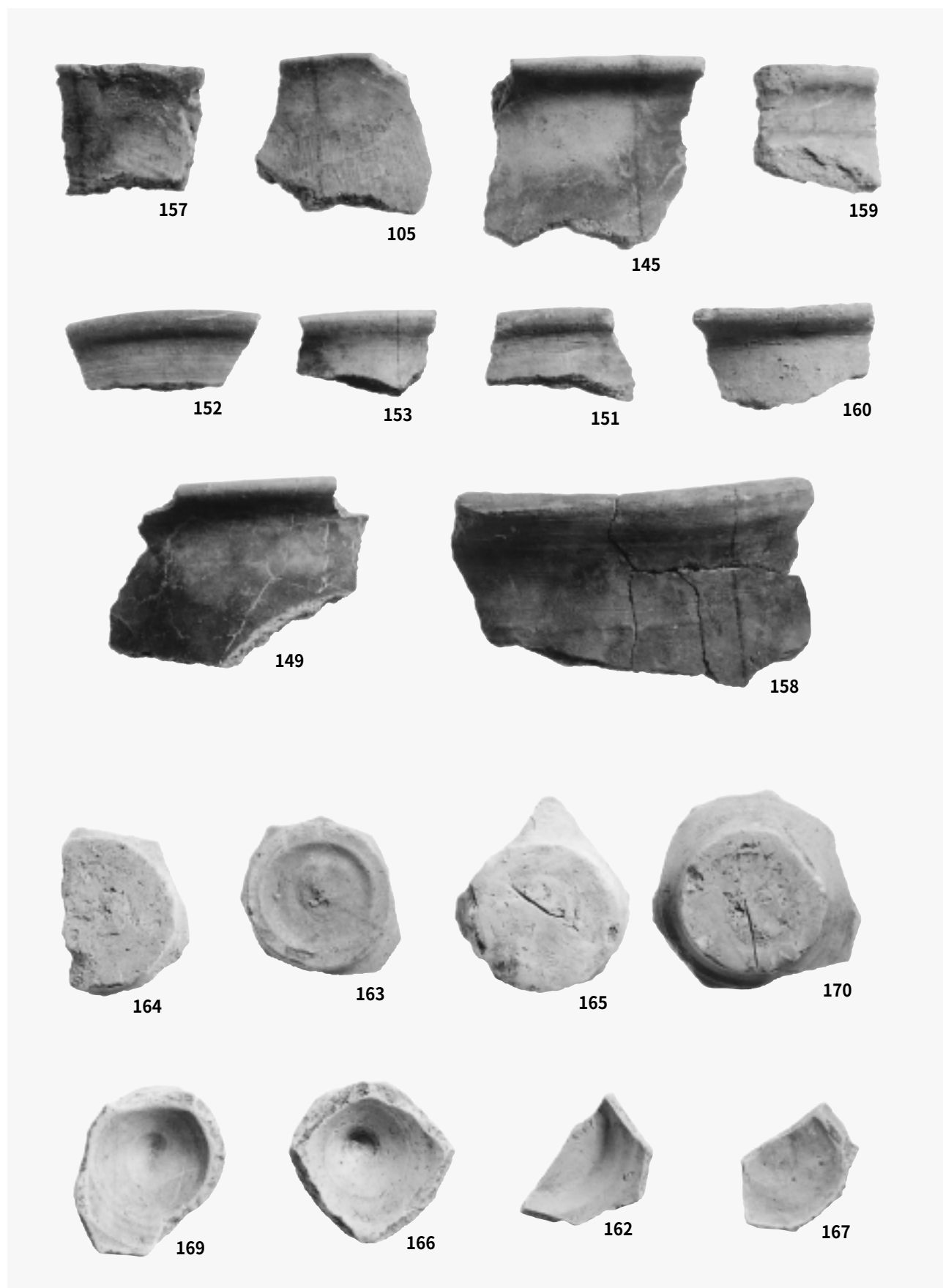
縄文時代の出土遺物（石器 1）



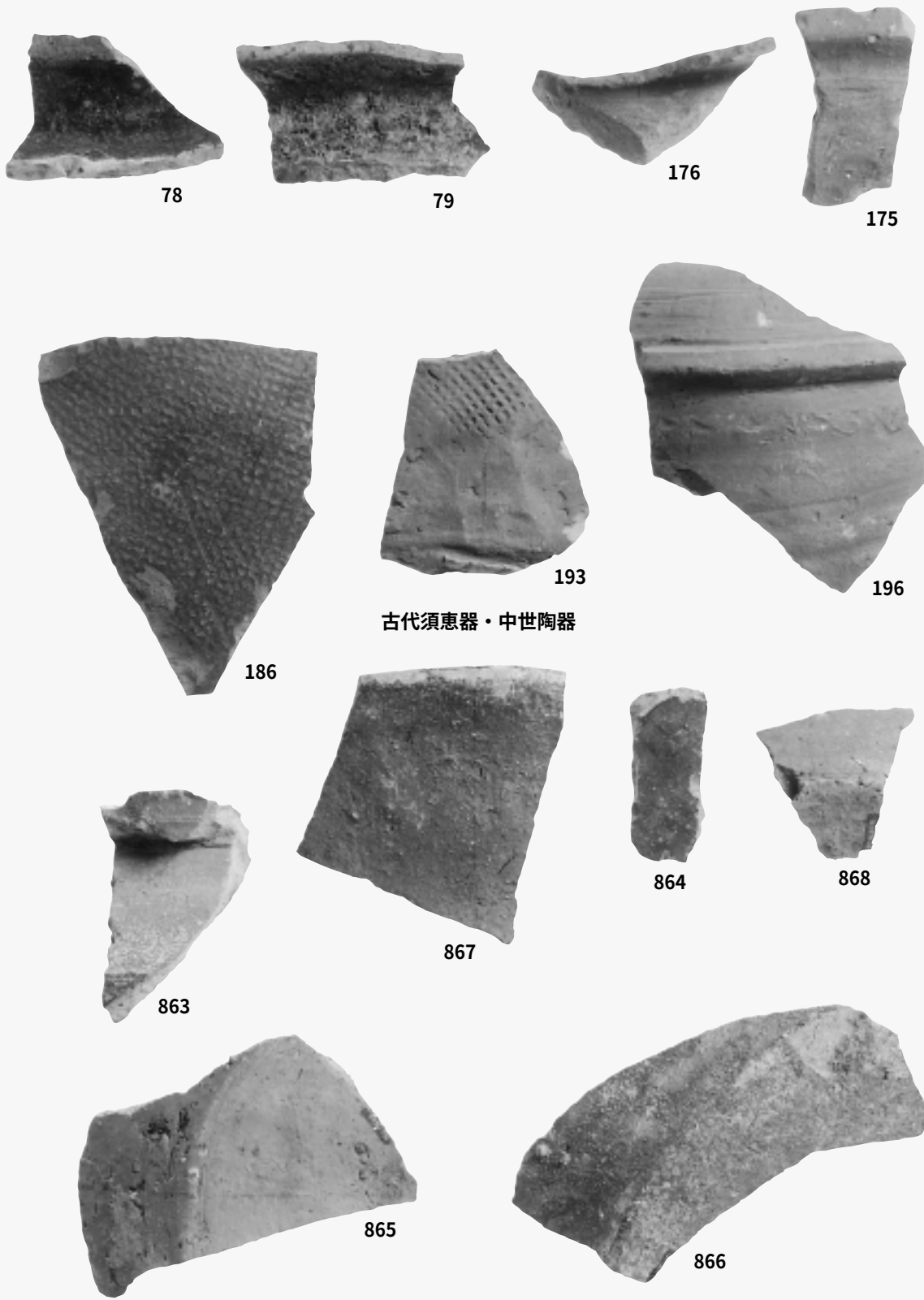
縄文時代の出土遺物（石器 2）



古墳時代の出土遺物



古代の出土遺物



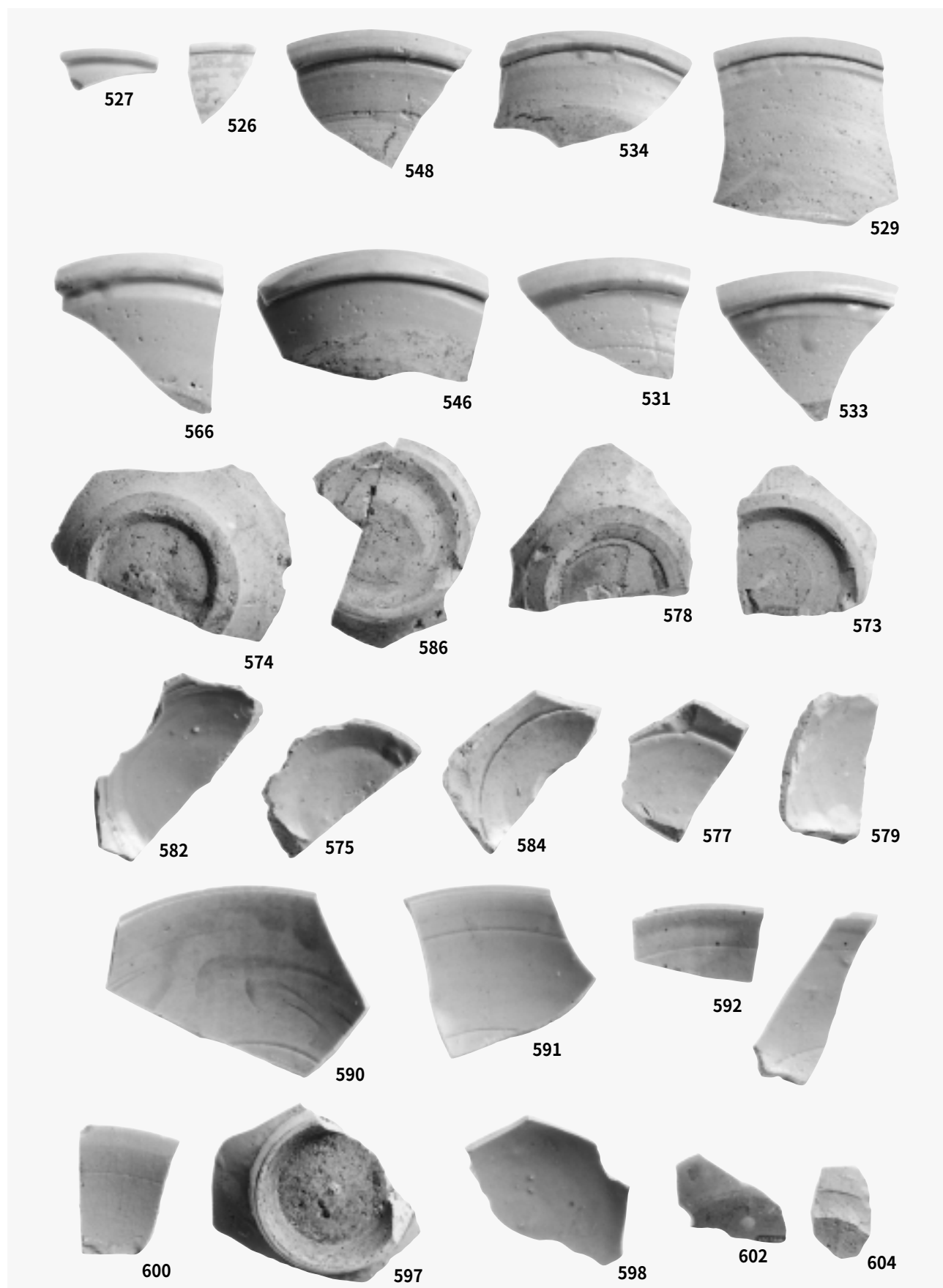
古代須恵器・中世陶器

中世陶器（常滑）

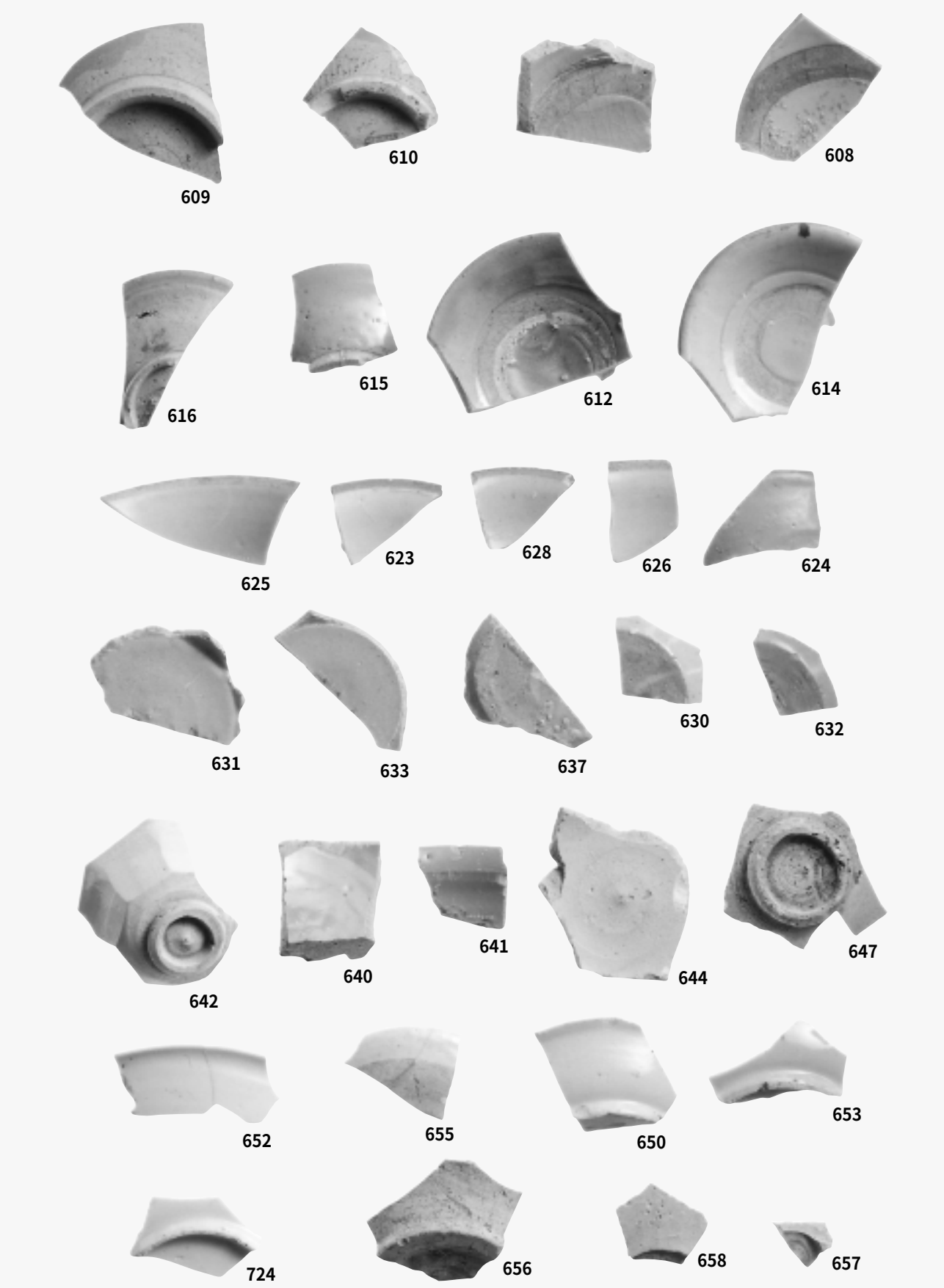
古代の須恵器・中世陶器



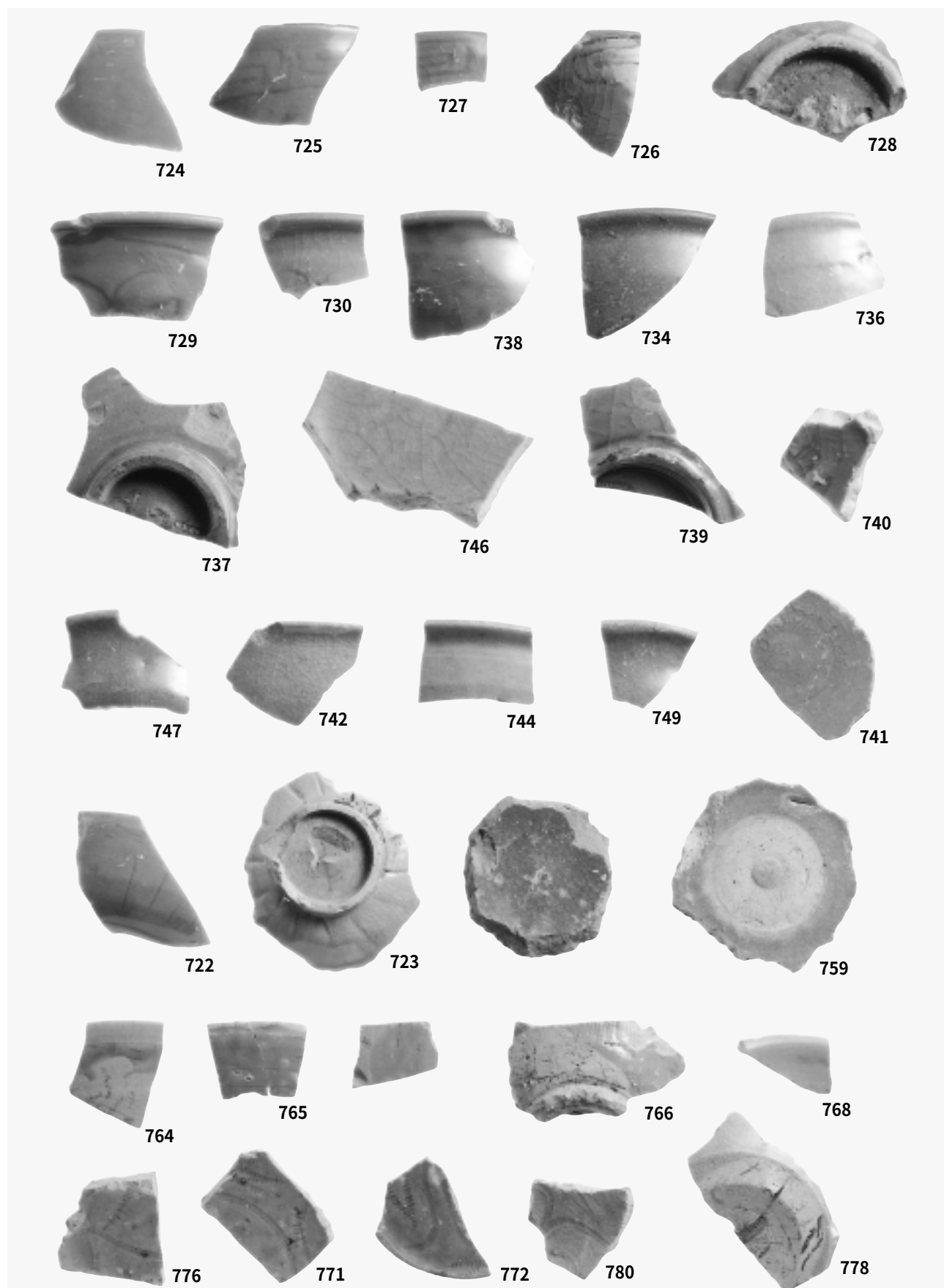
白磁・土師器（合子）



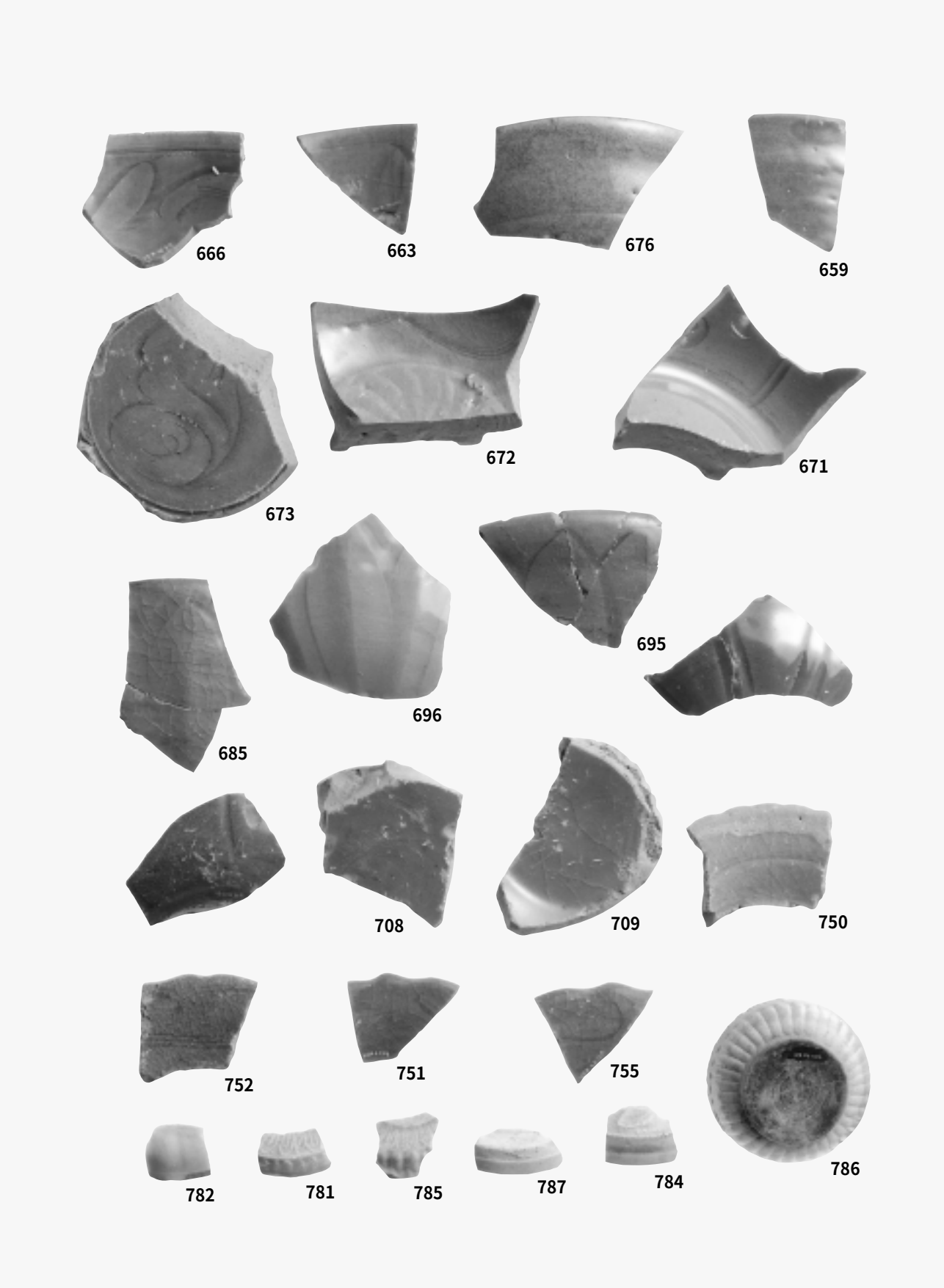
白磁 (1)



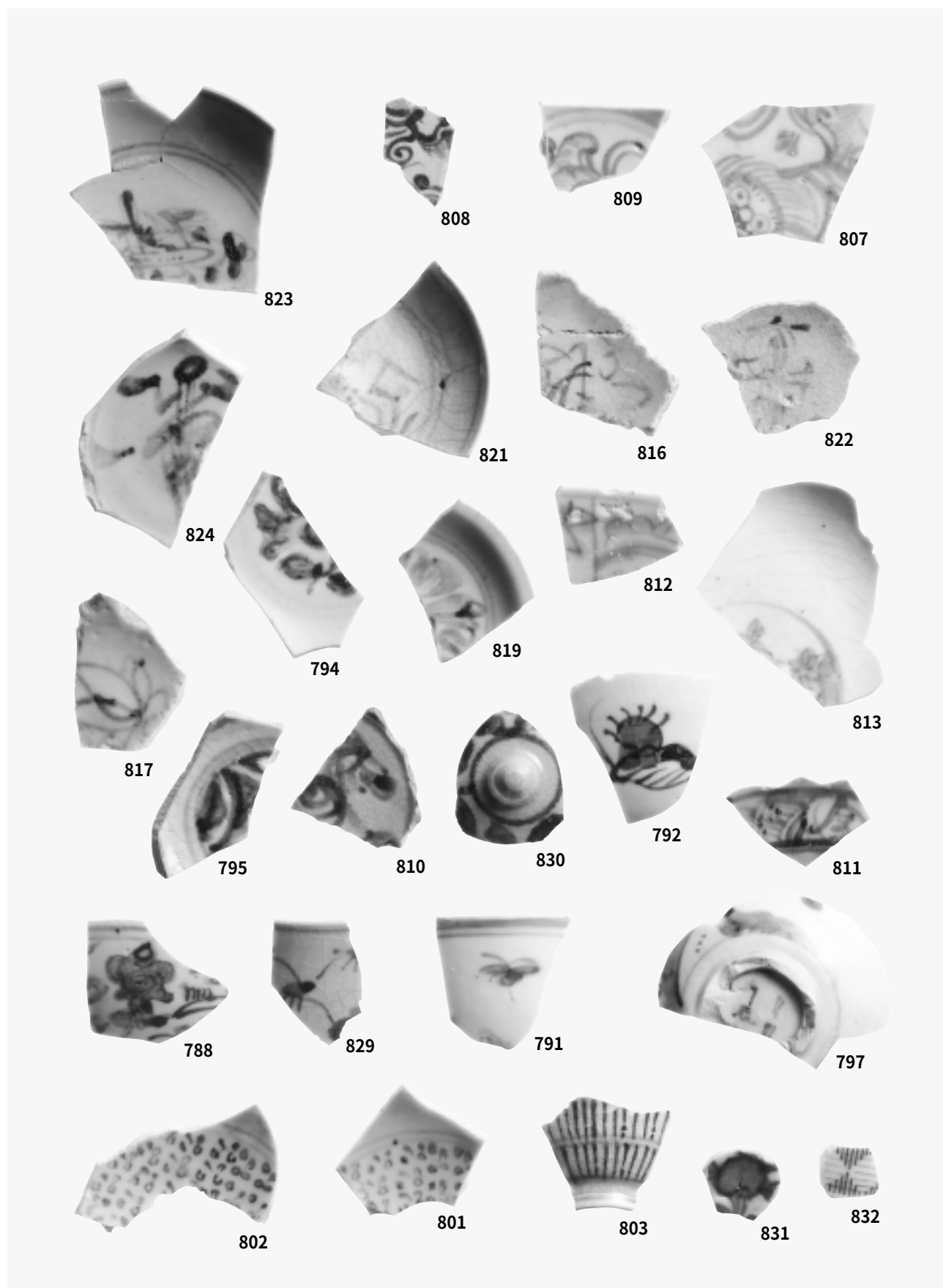
白磁 (2)



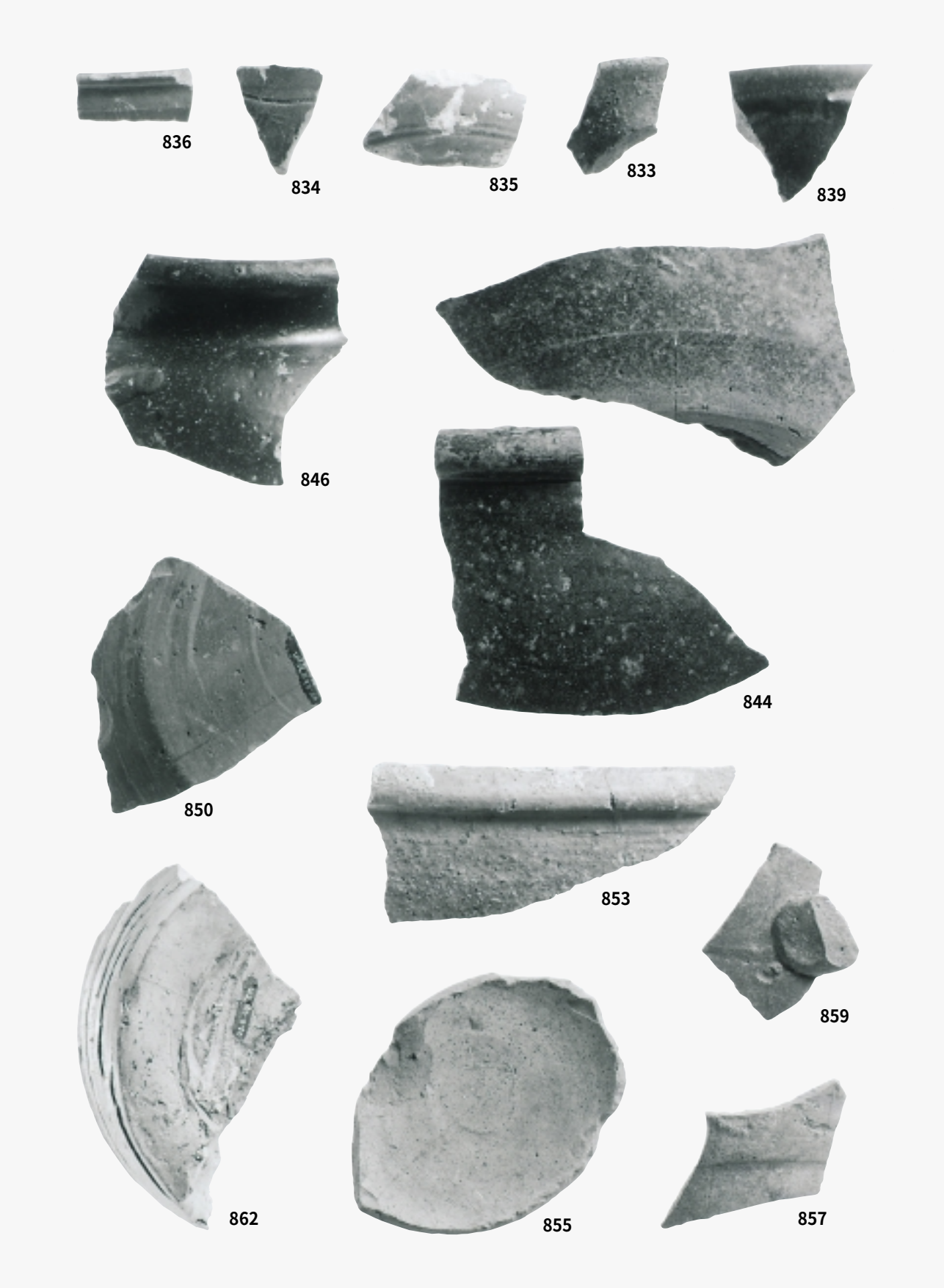
青磁 (1)



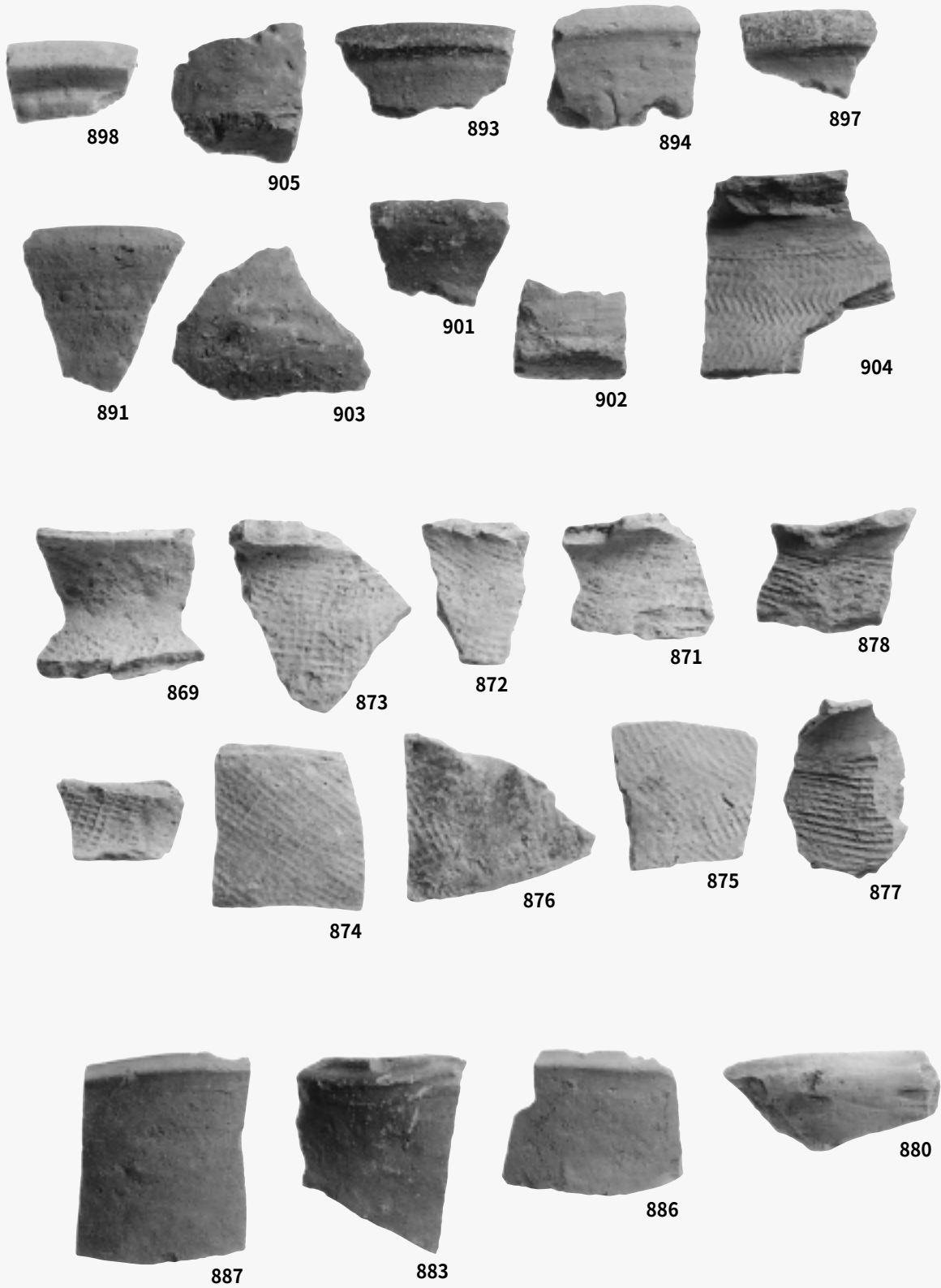
青磁 (2)



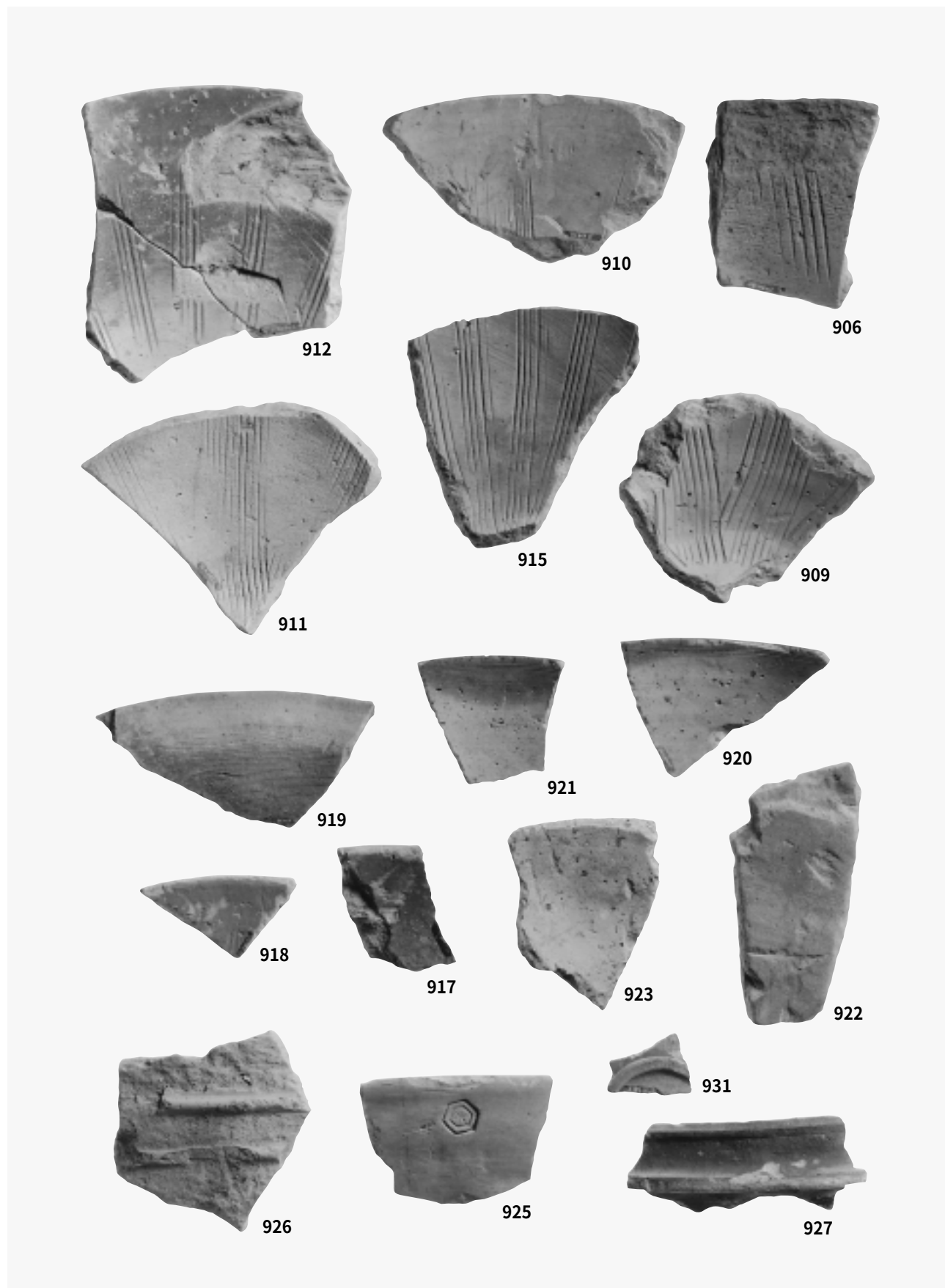
染付



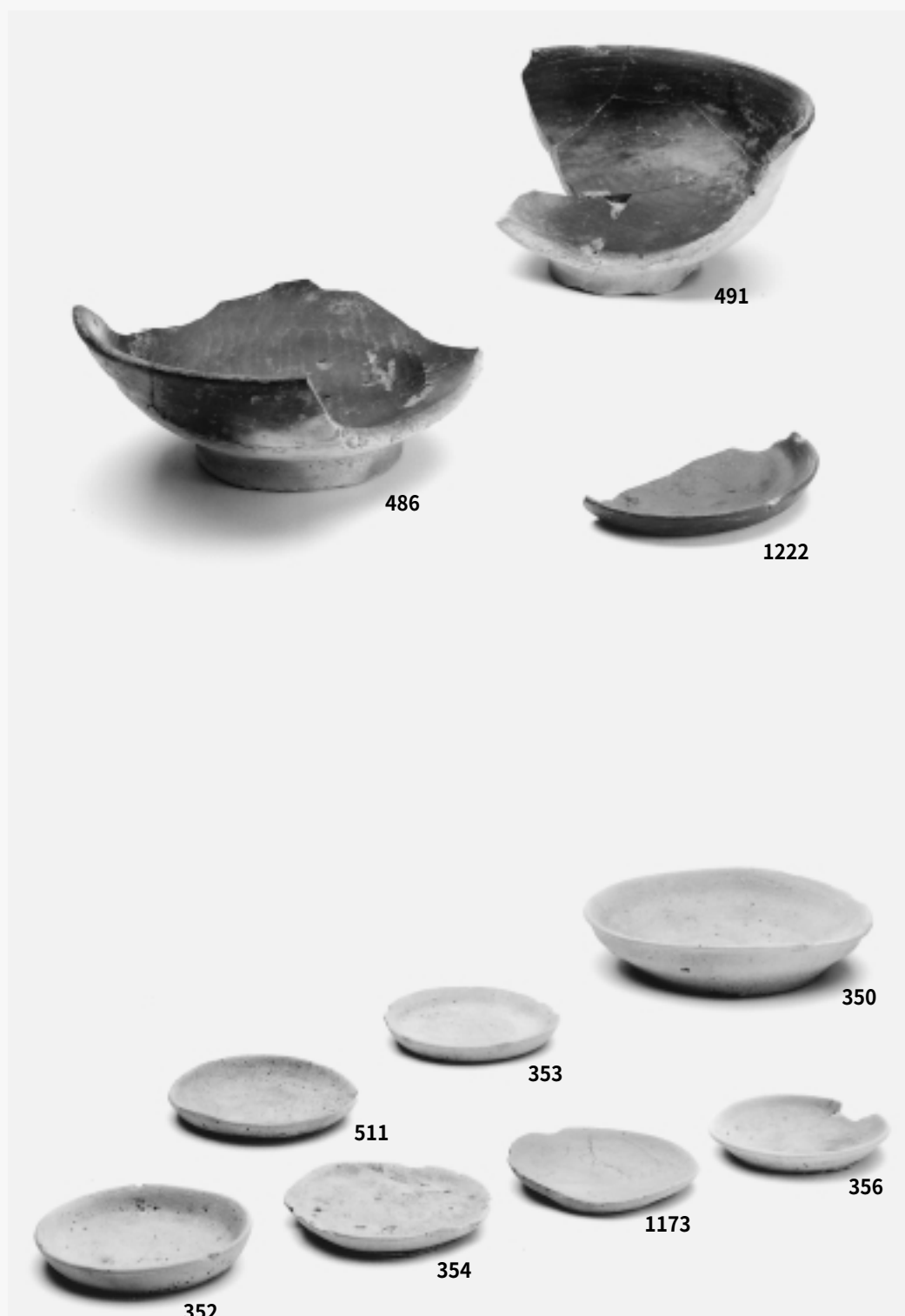
貿易陶器



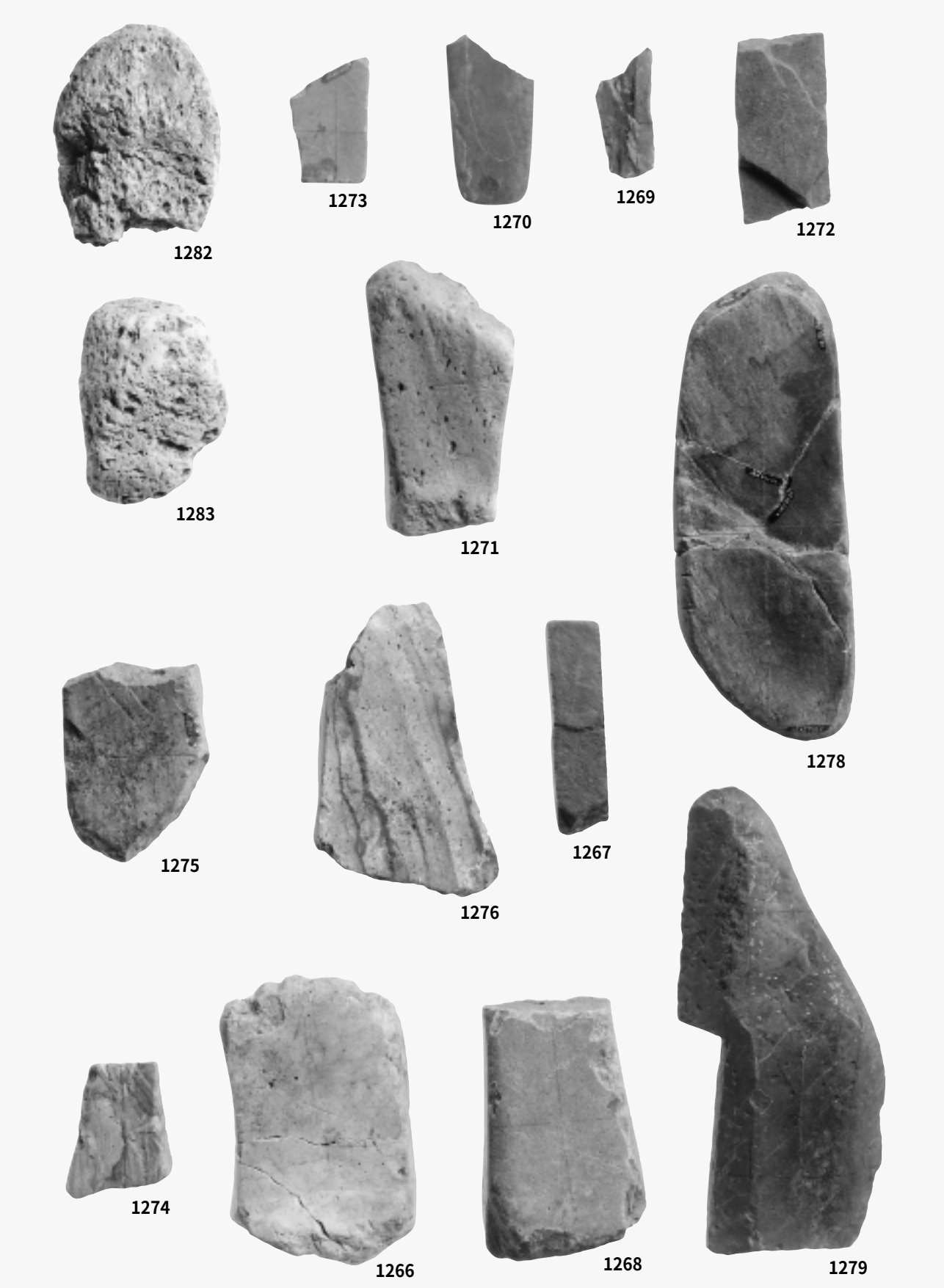
中世須恵器



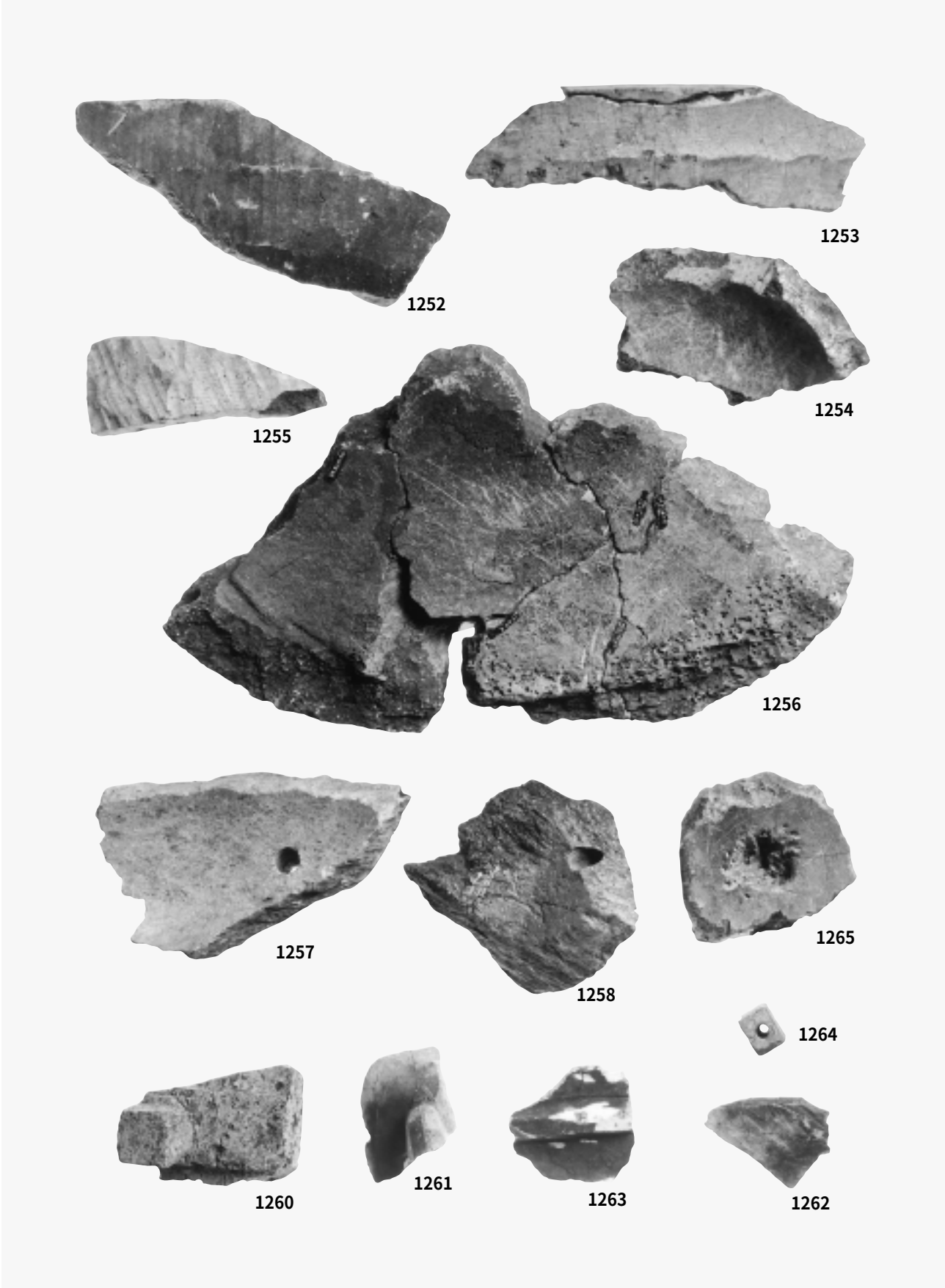
瓦器質土器



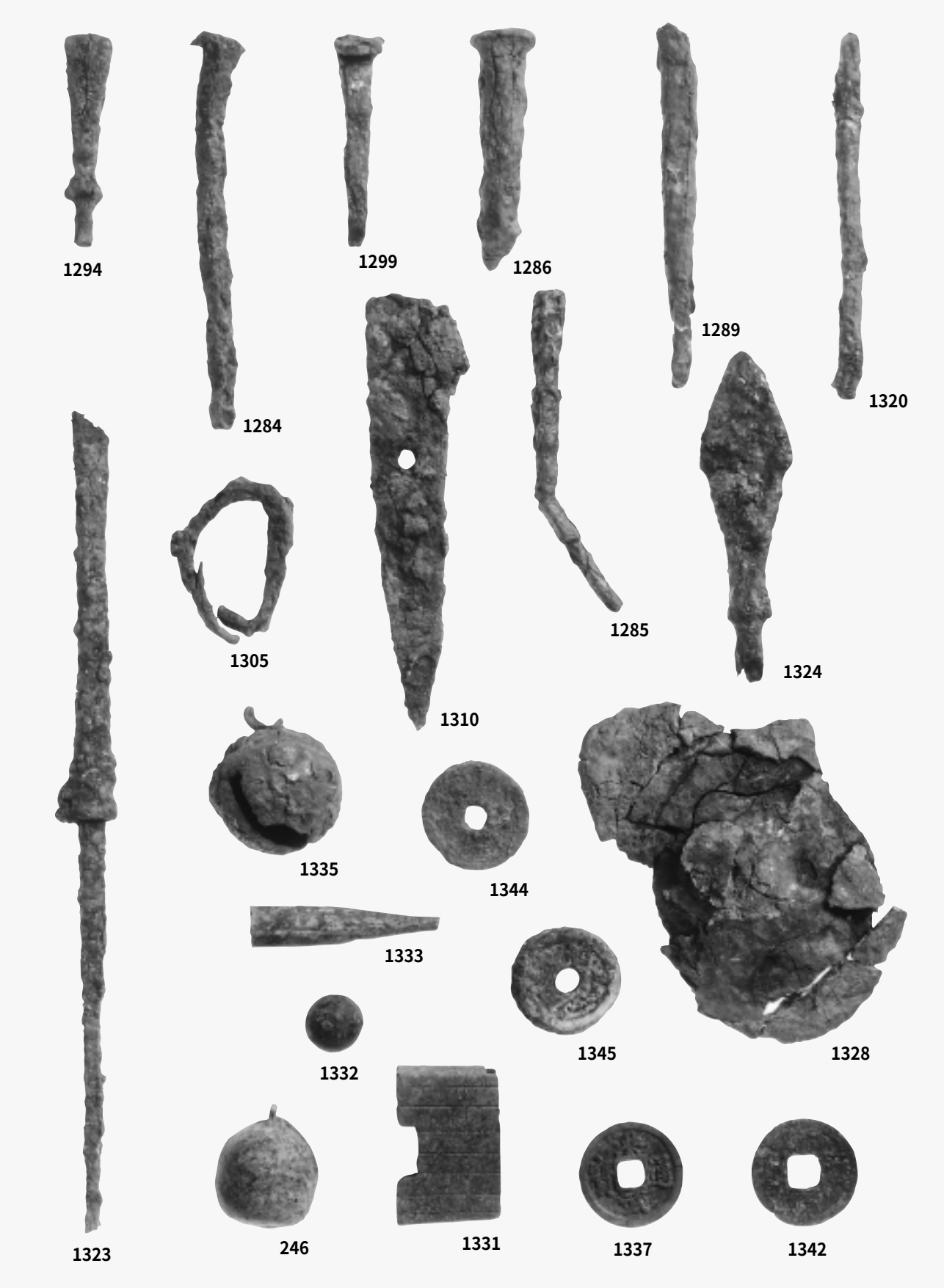
土師器 碗・皿



軽石製品・石製品



石鍋・滑石製品



金属製品

あ と が き

平成3年に九州新幹線鹿児島ルート建設が始まった。当時は県知事が「米つきバッタ」で永田町にお願いし、九州は、北陸・東北新幹線の後の三男坊ということで知事は県民に申し訳ないと言うインタビュー放送があったことを思い出す。ただ、その時に最初の工事は博多からではなく、鹿児島と八代間ということで何とか面目を保った顔を思い出す。

それが本年暫定開業という形で3月13日に開始した。それは13年という長い期間でのことである。最初は線路幅が今まで使われている狭軌道を通すスーパー特急方式であった。それは時速180kmで走る列車であった。その工事計画はトンネルや橋梁・高架橋はフル規格で造ることで国と合意していたため、県民の悲願であった時速260kmで走るフル規格新幹線誘致が可能になった。

埋蔵文化財の発掘調査は平成5年5月に西鹿児島駅整備事業の関係で最初に始まった武遺跡であった。偶然、この調査をいただいたことが平成12年度の最終年度までの発掘調査、平成15年度の報告書作成終了年度まで担当することになった。

平成5年度の武遺跡終了の後、次年度の計画を鉄道公団と調整していたが、年度末に予算が付かないと言う連絡が入り、発掘調査が数年延びることになった。それは何年延びるか分からないとのことであり、愕然とした。原因は北陸新幹線の長野までの長野オリンピックに合わせての開通であった。やはり、三男坊と言う訳かと思った。次に、東北新幹線の八戸までの延長は着々と進み、平成14年の博覧会に合わせて12月に開通と言う報道が流れた。九州新幹線の発掘調査の話はない。ようやく、平成10年に本格的な調査依頼が来た。この間、スーパー特急の狭軌道から本来の新幹線であるフル規格への運動が実を結び、上野城跡を調査する平成11年の頃にはフル規格ということで発掘調査を実施していた。

新幹線建設に関係する遺跡の発掘調査は全部で22遺跡であった。平成8・9・10年度は東下原遺跡等の小規模遺跡の調査をし、平成11・12年度は大坪遺跡や大島遺跡、京田遺跡、上ノ平遺跡そして上野城跡等大規模遺跡の調査を実施した。平成16年開通に合わすため、担当14人の職員は各遺跡を必死に調査した。その戦い方は、未買収地のある中で、少しでも調査了解地があればそこを調査し広げていった。また、各調査班は、伊集院町と鹿児島市を掛け持ちしながら調査をし、川内市内の調査班は川内川の北部から川を渡って調査した。もちろん発掘作業員も一緒に行動した。作業員の安全確保を図りながらこのように大変な移動の中で発掘作業を実施し、事故が起らなかったことは調査員のかねてからの指導によるものであった。

報告書作成は新幹線開通までの3年間の作業に限定され実施した。22遺跡の内1年目は10遺跡を発刊した。2年目は6遺跡を発刊し、3年目は6遺跡の報告書作成を実施した。2年目、3年目は大規模遺跡の報告書作成のため苦労があった。特に3年目は超大物で500～600ページのものであった。よって、印刷だけを次年度に回すことになった。これも職員の努力で何とかできそうである。

最後に、本年度で新幹線発掘調査班は解体するが、これらが達成できることはこの調査班の職員が有能でありチームワークもあったためこの大事業を終えることができたと思う。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ

上 野 城 跡

発行日 平成 16 年 3 月 3 1 日
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段 1175 番地 1
TEL（0995）48－5811
印刷所 日本高速印刷株式会社
〒892-0834 鹿児島市南林寺町 25－10
TEL（099）226－0128